
切り裂きジャックは殺しません!!!

和呼之巳夜己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

切り裂きジャックは殺しません!!!

【Nコード】

N8808D

【作者名】

和呼之巳夜己

【あらすじ】

突如部屋に振ってきた災難、栗柄八迫は、普通の中学生だと本人は思っている平田竜太を切り裂きジャックに仕立て上げた！その竜太に降りかかる、八迫のかつての友、桐原須藤との死闘、にせ切り裂きジャックとの死闘。そして侵略機械巨兵ガルガンティア、ガルガンティアの兄妹機械兵メリアーサの復讐、地獄の反逆児マリーネの陰謀、さまざまな試練が、七の切り裂きジャック、平田竜太の身に襲い掛かる！果たして竜太はさまざまな試練から生き残れるか？もちろん、学業生活も少々あり。

只今何章かのくぎれがよろしかったりもしました。

第一話 JACK THE RIPPER (前書き)

伝説の殺人鬼、切り裂きジャック。そんな殺人鬼に似合わぬ普通・
・よりはるかに低知能の男子中学生の物語、始めました。今なら、
第一シーズンセットパックでお買い得ですよ。是非、読んで感想な
どを。そんなことより、一部で爆発的人気、切り裂きジャックは
殺しません。第一シリーズが始まります。

ちなみに都合が悪くなったら書き直すと思います。

つじつま合わせのために書き直してやるよう！！

って言うか初期の文体が気に食わんと最近思う。

第一話 JACK THE RIPPER

今は昔、切り裂きジャックという連続殺人事件を起こした脅威の犯罪者がいたそうだ。

イギリス人なら誰でも知っているという、犯人不明の犯罪者。

Jack The Ripper、日本語でいう所の切り裂きジャック。

犯人はわかっておらず、未解決のまますでに過去のものとされた、犯罪者。

一人は何も出来ない、でも伝説らしい少年。

一人は何も出来ない少年に学を身につけさせ、そしてかなりサディスティックな少年。

バグエン

一人はどんな戦場にも決して負けることがない、完全無欠の紅一点。

一人はとある財閥の息子で、金持ちかつ、お兄さんな少年。

一人はまだまだ幼く、そしてちびっ子。

これは、そんな不ぞろいな少年達と、怪力馬鹿力の少女の五人が繰り広げる無駄な日々。

かつて、シャガンという名の男は、壱つの組織を組み立てた。

その名を、切り裂きジャック。

シャガンがその名を提案したとき、周囲から反対しか上がってこなかった。

それでもシャガンはその名を貫き通した。

それは、既にこの世にはいない友人に代わって汚名を晴らそうという決意と、心意気。

それが、ここが出来た理由。

いつからだろうか。決意が揺らぎ、心意気が誤ってしまったのは。

ある男がすべてを決める。

誰が何とどのようにつつかり、その結果として何を失い、何を得るのか。

その男は全てを背負い、すべてを決める。

幾千、幾億の命は男にとっては何の重みでもない。

男の目的はただ一つ。

たった一つの目的のために、男な計画を企てる。

その計画をもとに進む駒を一人ずつ慎重に配置し、バランスを取る。さながらそれはゲームだった。

男が作るゲームをプレイヤーとして選ばれた五人は、数々のダンジョンへと挑み、数々の敵とあいまみえる。

それが自分たちが選んだものとして疑うこともなく。

それこそが男が組み立てたたった一つのエンディングを迎えるためのさけることの敵わない一本道だとは、知るわけもなく。

やがて時は来る。

そして男はエンディングを前にし、おそらくこう言うのだ。

「神の国は来た」

そしてそれに抗う彼らは己の非力さを恥じ、悔やみ、さらなる高みへと挑む。

男はそれすらも隠しダンジョンとして組み込むだろう。

けれども結果は何一つ変わることがない。

男が己のために組み立て、作り上げたそのゲームの攻略法は男だけが知り、更にそのゲームのいかなるバグをつけばいいかも、男しか

知らない。

男によって世界は回される。
世界は男によって回される。

きつと、男が作る物語の始まりは、何一つ取り柄のない少年の元から始まるのだ。

その少年が男の助けになることを知ったうえで、の始まりだ。

第一話 JACK THE RIPPER (後書き)

竜太 どーもー。切り裂きジャックの竜太です。これから頑張りたいなあと思います。

以後、応援よろしくう！

っと、初回なのでハイテンションな平田竜太でした！

第二話 謎の少年？栗柄八迫る！（前書き）

前回はきページぐらいも書かずに終わった切り裂きジャックは殺しません！今回は驚きのページ数で更新！【？】謎の少年栗柄八迫が現る！どこかに著作権違法がある。と八迫は言っているがその著作権違法とはいったいどこにあるのか。本格的に連載スタートします。切り裂きジャックは殺しません！

謎の学生竜太君 第二話謎の少年？栗柄八迫る

どうぞお楽しみ下さいー。

なお、前回はやる気がないとかそう言うじゃないんです。ほんとですよ。

単に……嫌、言い訳はしませんです。もう、罵ってください。も、ご自由に。でも、それで気持ちイイとか言う感覚は持ち合わせておりませんのであしからず。

第二話 謎の少年？栗柄八迫迫る！

第二話 謎少年？栗柄八迫迫る

今日、この展部中学校に転校生が来る。

それが平田竜太であった。

この竜太には前日から秘密が出来た。

前日、竜太は天体観察図鑑を見ながら大好きな天体観察をしていた。この一昨年の夏に父親から天体観察望遠鏡ともにもらった誕生日プレゼントである。

そして、今の季節に見えるのは冬の大三角形。それがこの間見たよりも遙かに大きくなっているような気がしたのだ。

まるで、この部屋に吸い寄せられている力のようにまっすぐに大きくなって近づいてくるのだ。

竜太は怖くなってその日は天体観察をやめ、風呂にでも入ろうかと部屋から出ようとしたそのとき、突然がっしやーんと窓が割れ何かが来た。

それは彼の冬の大三角形を思わせるかのような・・・いや、竜太は確信した。これはさっきまでおそるおそる見ていた彼の冬の大三角形が降ってきたと言うことに。

「どうしたの竜太。」

「たったか、たったかとテンポよく階段を上ってくる竜太の母親がいた。」

「竜太はいきよいよくドアを閉め母親に伝えた。」

「何でもない。」

「そう。ならいいけど。」

といつて母親がまたたつたかたつたかと階段を下りていく音がして、竜太は、「ふー」といきよよく息を吐き出した。

そしてふと考える。

普通、心配で嫌でも来るんじゃないか？こういう時。くんなー！って言ってもだ。やっぱり家の母親はマイペースでのんきな母親だ、と。

そして埃だらけになった部屋にあった埃だらけのスリッパを見つけてはくと今度降ってきた謎の冬の大三角形空降ってきた巨大物体を見に行った。興味はある。

竜太がちかずくとそれはひかりだし、頭にチューブをさくりと一刺し。

痛い。

「ふむ。まあ合格ぎりぎりだな。よし、お前。俺が勉強見てやるから、ちよこつと俺に付き合え。」

そういうと、こいつは手を握りしめ、思いつきりたいた。

「この馬鹿が。」

放心状態だった竜太もこちら辺でやっと自分の身におきたことを理解した。

んで、叫ぶ。

「いつつてえー！つてか、お前、人の部屋のガラス割つといて、しかも・・・人の・・・頭・・・何か刺して、しかもいきなりなぐるつて何だよ。何様だよ。」

待つてました。といわんばかりにそいつは答えた。

「お前の力が必要なんだ。試験受けに行くぞー。」

けれどそこに竜太の求めていた答えはひとつもなかった。

こいつ、世界がずれてる。竜太は即座に受け身をとりつつ答えた。けれど竜太に武術の心得などないわけで、それは皆無に等しかった。それから質問に答える。

「イカねえ。」

「オンカリヤカリヤー」

学長の部屋に行き、紙を提出した。

ペタリ。

学長ははんこを押した。

「合格。」

そこで僕は、はれて切り裂きジャックとなった。

一体何が良かったのか？筆記テスト、スngoイギリギリだったのに・・・。

一体何が良かったのか？ぜんぜん変身うまくなかったのに・・・。
ってか変身って、正義のヒーローですか、現代科学の力ですか？

そこで受かったのは良いんですが。ってゆうか、中学校の試験より簡単なんですけど。今度からこれにしようよ。

後で聞いた。このテストは小学生用らしい。

合格後、腕にはめられたわっかを見て八迫に質問した。

「あのみ。このブレスレット・・・何。」

これまた待ってましたと言わんばかりの大きな声でやつは答えた。

「変身ブレスレット、通称ジャックだ。これを空に掲げて「へんしーん」ってさげぶだろ。するとピカーってな・・・おい。てめえ。人が説明してんのに一言も聞いてねえなんてことはないよな。」

「・・・」

今、漫画なら絶対背景にギクツて文字が入って逃げ腰とも取れる姿になってるんだらう。きつと。

正直に答えたほうがイイのかもしれない。

「他のこと考えてきいてなかった。」

手を前回よりも堅くぎゅっと握り締めて近づいてきた。

「いつぺん死んでみるか。このやろう。」

なぜか、へんてこな奴のせいでこれから大変な学業生活を送るはめになりそうです。

「あ。そういえば名前は。」

「栗柄八迫。これからはお前の教師兼……師匠だ。」

「……………」

無言で立ちすくむ竜太に八迫は近づいてきて、また容赦なく殴りまくるのであった。

〜家〜

「ねえ八迫。部屋、直してくれる。」

「ああ。これか。こんなこんなもん普通の人間が直せるわけねえ。

っていうか、これ、大工でも呼べよ。」

空から降ってきた人間離れした化け物がいう台詞か。これが……。
って言うか、どういう状況で上空から来られたんですか？

呆気にとられて竜太は言い返す気力もなかった。

コンコン。ドアをノックする人がいる。

「竜太ーはいるわよ……………」

母親はこの部屋を見てもっとも正しい判断をなぜしなかったのだから。うか。そう思わざるを得ない答えが家の母親からは返ってきた。

「あら。の模様替えしたの。竜太。斬新ね。これ、最近の流行？」

この部屋を見たら怒るか叫ぶだろ。普通は。と思いつつ竜太はうなだれた。

「これからこんな生活が続くのか。早く父さんが帰ってこないかなあ。」

でもこれは普通の秘密じゃないよな。

校長室で思いだした竜太は思わず苦笑いをした。

……でも、話が本当なら、僕、大変ジャン。

次回第三話 謎暗躍！裏教育委員会の派遣者

……ご期待してくれらとう

れしいと作者は願う。

俺は、これから大変な目に遭う。

けれどもそれは絶対に、これから、役に立つ物だと信じているから。

第二話 謎の少年？栗柄八迫迫る！（後書き）

この小説を書くにあたって後、メインキャラクターを全部だそうと思うので、待っていてください。今日中に頑張ってプロローグは終わらせます。プロローグは学校で仕事【謎の】をするところからですんで、よろしくお願いします。言っちゃうと、三話前後編あたりからですか。

第三話前編 謎の暗躍！裏教育委員会から来た長谷川律子、現る！（前書き）

前回までのあらすじ？

平和を願う少年竜太は戦争で親兄弟、友達、そしてプライドを亡くした。竜太は怒りにまかせて暴れたところを取り押さえられ、つれて行かれた病院で恋をした。彼女もまた、戦争で孤独になった一人だったからであった。二人は出会うべくして、出会った二人であったのだ。しかし過激な戦争は、やっと出来た愛のつながりをもつ彼らをも引き裂く。

2008年最初にして最後の感動物語、

切り裂

きジャックは殺しません！

戦争をするのは愚かなこと。しかしその愚かなことを乗り越えてこそ、人間は進歩するのだ。少年竜太が訴える、真実を越えた尼憩いの物語。本当の平和は、僕等の心にこそあるんだ。

これを読まずして、平和は語れない。語ってはいけない。彼らが示した、純愛の和平ストーリー、ここに最速ノベルス化。

第三話前編 謎の暗躍！裏教育委員会から来た長谷川律子、現る！

第三話前編 謎の暗躍！裏教育委員会から来た教師長谷川律子
現る！

朝の朝礼

「エー本日付けで天部中学校に派遣された長谷川律子さんです。」
「担当教科は英語です。Heiio. みんなに英語をできっちり教えちゃいます。」

さすがの不良たちもやはり青少年。パンチラギリギリの服に釘付けで、元気に「ハイ」とまで返事をする物もいた。竜太は眠そうに焦点が合わない目で長谷川を見ていた。

昨日の萌え系アニメをリアルタイムで見っていたのだ。

やっぱり、その場で見て、掲示板で意見をぶつけ合うのがオタツキ
ー【現在進行形】ってもんでしょ。

朝礼が終わり竜太がトイレで立ちながら用を足していると突然ジャツクに通信が入った。

通信できるなんて知らなくてびっくりして、ズボンにかけたなんて、誰にもいうまい。

「刺客は長谷川律子。気をつける。」

八迫はジャツクでそう告げた。その声は、震えていた。ありえない。八迫は絶対に。

「なんか、あつたのか？」

聞き返したが、帰ってきたのは、

「ガサゴソ・・・ビビリツシャクシャクシャク。」

「ああ、俺のポテチ君食べるなああああ。」

竜太は聞き取れなかった。

「アイツは、俺の・・・。」

そういつたのを。それが聞こえていれば、これからのことが変わったかもしれないのに……。
通信はきれた。

あろう事が気に入くない教師長谷川律子は竜太の英語担当だった。もう一人の物静かな後藤先生が良かったのだが……。それ以前に竜太は未だこの不良だらけの場所になじめずにいた。そこに話しかけてくる一昔前のガングロの少女がいた。西村秋鹿にしむらあいかであった。「ねえあんた。あんた、本当は切り裂きジャックなんでしょう。」

竜太がちん。と体が凍った。もうはや秘密がばれたなんて。

「放課後、屋上で待ってるから来てね。」
軽い投げキッスを食らってしまった。
軽くストライクゾーンにストライクしてたのに。

秘密が……。ばれた。

放課後まだ部活にも入部していない竜太は屋上へと急いだ。
竜太は屋上に着くやいなや叫び声をあげた。
そこにいたのは異形の怪物とかした秋鹿だったからだ。
「うふふつふふふふふふふふふふふふうつふふうつふ。ヒ
ーローさん。」

竜太は八迫に言われたことを思い出し叫んだ。
「へんしーーーーん。」

竜太は光り輝きだした。そして学生服も消えた。下着も全て。

竜太は股間がスウスウするので見てみると全裸だった。

「ちよつと・・・嫌・・・見るな・・・。」

秋鹿はじーっと一点を集中してみた。

「可愛い。」

舌なめずりをして待っている。しまいにはそーっと手を伸ばしている。そんなとき竜太はまだ全裸でヒーローになっていた。

「もうイヤー。」

年頃の竜太が全裸を見られたのだから当然の感想だろう。怪物であつても。

とりあえず竜太は切り裂きジャックに変身したのだから問題ない。

と作者は思う。この変身の仕方はどうかと思うけど。

思いつきはじかいてもらいたいし。え？恥かくの・・・俺？

そして後半へ続く

第三話前編 謎の暗躍！裏教育委員会から来た長谷川律子、現る！（後書き）

もしもこの小説に出たいという方がありましたら、どうか出してほしい名前と、性格、どのような人物かという人物像、感想をお書きの上で、お送りください。感想とか、もらったこと無いんで、お願いします。

裏話

ここに気づいたあなたは幸せです。ここでは作者による読者のための人物紹介を行いたいと思います。でも、この一回だけですんで、毎回楽しみにスルーなんてこと内容に。

第一回目の人はやはりこのかた

主人公、平田竜太さんです。

彼は僕の今の同級生で、左頬に大きな黒子を持っています。これがまた背も高くて・・・。

勉強は全くと言っていいほど出来ません。

そついう僕も社会科以外は普通の成績なんです。体育なんかは問

題外。今ニュースでもしている体力減少の一人なんです。
竜太は、とても天体観察なんてしませんよ。現実には。将来の夢は
工事の人【おじさん】が良いとか言っていました。
果たして彼の夢は叶うのでしょうか。まあ、どちらでも良いですよ
ねえーどうでも。

第三話後編 謎の暗躍！裏教育委員会から来た長谷川律子、来る！（前書き）

前回までのあらすじ

とある名画を一目見るというためだけに雪の道を歩き続ける竜太。そして後から追いかける愛犬八迫「おい。何で俺が愛犬なんだ」。たどり着いた愛犬八迫は虫の息の竜太を見つけた。それに気づいた竜太は八迫に遺言をツタえる。

「パトラッ……いや、八迫。僕もうだめだよ。ありがとう。」

……と。そして竜太は息絶える。

「クーン……ク……」

主人を呼ぶパトラ……いや、八迫だが、今年一番の北風小僧のかんたるーの寒さに体力を奪われていくパトラ……いや、八迫。

そして、ついに、パトラ……いや、八迫までもが。

フラダンスする犬【過去形でしていた。が正しいのか？おい、竜太これは宿題だ。フラダンスしていた犬が正しいか、そうじゃないか、答える。】、はついに感動の嵐の最終回を迎える。

フラダンスしていた犬 【過去形で良いんだな？】最終回

彼らが愛してフラダンス

こつこつ期待

第三話後編 謎の暗躍！裏教育委員会から来た長谷川律子、来る！

第三話後編 謎の暗躍！ 裏教育委員会から来た長谷川律子、現る！

「……………やっと終わった。」

竜太の変身がやっと終わったのであった。

「可愛かった。」

思わず頬をポツと赤らめ、みをよじらせる秋鹿に竜太は叫んだ。

「変なところ見てんじゃねえ。馬怪物ばかいぶつめ。」

思わず竜太は叫んでしまった。赤面して。竜太はひどく赤面した。

メロスの比ではない。

ここでメロスの激怒と自分の赤面を比べる竜太はそれでもう、人間として終わっている。何かが。絶対に。

そのころ体育館裏、不良本部裏にて、

一人の男子生徒が脅されていた。水谷正和すいたにまさかずである。

「や……………やめてください。」

「じゃ、金出せ。」

男子生徒ははがいじめにされた。

「金出さないならこうしてやる。」

そういつて、その不良は男子生徒のズボンのベルトをはずし始めた。そしてズボンを脱がすと今度はパンツにまで手を伸ばして、こういつた。

「金は、アルか。」

男子生徒はおそるおそる半泣きで答えた。

「ありません。」

言葉を聞いた不良は一気におろした。

「はい。みなさーん来て好きにしてください。ご自由に。ネ」
そう言ったあと、そこに来たのは不良の軍団だった。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ア」

男子生徒の叫び声がその場で木霊した。あんたら、なにしているんだ。と言う声だった。

「素直に金、出せば良かったのに。」

「何やってんだい。山崎^{やまざき}。いじめかい？」

山崎と呼ばれた不良は答えた。

「ああ。そうすよ。こいつが金だしてくれないで。」

「ふん。この学校をもっとはちやめちやにするってのかい。楽しそうだね。がんばりな。」

山崎は鼻でふんつと笑って言った。

「教師がそんなこと言っちゃって良いんですか。長谷川先生。」

「私はね。こんな学校、どうでも良いのよ。この学校にだって良い先生はいるじゃない。朝霧先生とか、大川先生とか、浅尾先生とかがね。みんな、ここではうそをついている。浅尾、大川、朝霧以外の教師はね。みんな、こっちの協力者なんだ。さつき捕まえてきたところでね。楽しかったわよ。といっても私の顔に傷を付けた朝霧は、ぼこぼこにしたけどね。ま、君も頑張つて。」
そういって長谷川は職員室へと戻った。

一方、初仕事のほうは、

竜太は苦戦を強いられていた。何せ、この切り裂きジャックと呼ばれる物の使い方が全く分からないからであった。逃げて、あまりききもしないような攻撃をひたすら続けることしかできなかったからであった。

そんなとき、八迫から通信が来た。

「オーい。生きてますかー。死んでますかー。」

「そんなくだらないことは良いから、これ、全然弱いんですけど。」

「オオ。その声は瀕死の竜太君。お前が弱いだけだ。後、お前が念じて見る。「こんな武器がほしい」とか。そうすれば、出てくるようには設計されている。お前のはな。必殺技は、左頬に黒子を作つて、パワーをためた、とばすデカ黒子ビームほくろ。そして、怪物化した生徒とかには敵には金剛柱こんごうじゅう三日月さんみつきだ。黒子を三日月の形にして。まあ、がんばれー。」

とりあえず、イメージ。といつても想像力がない竜太だから出てきたのは望遠鏡型ソード。RPGで言うところの懇望あたりの殺傷力だ。

「やった。出てきた。行くぜい。ヴァケモノ野郎」

「可愛い。いただきまーす。」

竜太はくるつと体を回転させて秋鹿に向かつていった。

「誰がお前なんかに大事なもん、食わせるかつ。」

そついうと、剣で思いつきり腕を振り払つた。

振り払われて秋鹿の手は秋鹿自身の体に巻き付き、そして秋鹿自身がくるくると回転した。

「アーレエー」

どこの時代の娘だ！おまいは！

そつ思つて竜太はその思考を亡き者にして羽を想像した。その羽で空へいきよよく舞い上がると、左手をゆつくり挙げた。そしてその左手で円を作り、その手を左頬に着けた。その状態で竜太は必殺技を出した。

「デカ黒子びーびーびーびーびーむ」

そのビームは竜太が自分で作った黒子の形を保つたまま秋鹿のもとへ飛んでいった。キレーな丸だ。

「私は・・・もっと・・・もっと美しくなりだいのおおおおおお

「おお。」

そういうと回転していて自分を空へと飛ばして、光線へと突撃した。「私は、こんなところで終わらない。終わるのはあなたよ。死になさい。そして・・・つづになりなさい。」

そういうと秋鹿はビームを突き破り、その焦げ茶色のビームをまとった秋鹿はそのまま回転して、竜太に突進した。

竜太はとっさに盾を作ったが、ビームを浴びた秋鹿は、その盾をもうち破り、竜太を天空へ行くかのように華麗に飛ばした。華麗に、高く。そりゃもう、華麗に。

そして飛んでいった竜太のもとへ行つて腹に思いつきけりを何十発と入れ、竜太を屋上へと蹴り飛ばした。

地球には重力が働いていた、しかもここは空中数十メートル。竜太はぐんぐんと落ちていった。校舎をも破壊するかの勢いで、きれいな放射線を描いて竜太は落下する。

屋上にたたきつけられて竜太はとっさに全ての力を使って盾を作った。が、間に合わなかった。思いつきりたたきつけられた竜太の意識はもうろうとした。

ここで死ぬのかと空中で何度も思った。そして、今、これまでの思い出が脳内を走る。まだ死にたくないが残っている気力で、左頬に手を着けたのだが・・・。

「クレジットが流れ出したわ。ここであなたは死ぬよ。この私に傷をつけた、その罪で。」

「もう・・・終わりだ。」

そうつぶやいた竜太は、すでに体はぼろぼろだった。そんなとき、突如手首につけているジャックがなった。

「金剛柱三日月は使わないのか・・・。」

それは八迫のたった一言だった。しかし、竜太はその一言で再び立ち上がった。

「金……剛ばし……ら……三日……月。」
死にもものぐるいで発した言葉は、奥義金剛柱三日月だった。

そのころ職員室に着いた長谷川律子は。

「皇帝。もうすぐこの学校はあなたの物です。今しばらくお待ちを。」

手に持っていた謎の機械で皇帝と呼ばれる者と連絡を取っていた。そして、後ろには先ほどとらえた浅尾、大川、そして気絶している朝霧がいたのだった。

さあ。今夜から皇帝が復活するための祭よ。といわんばかりに律子は手を大きく広げ、笑い出した。

「これからが、星の停止を迎える……いわば、幕末よ……
・愚かな星に停止でリセットを！」

機械からは、皇帝と呼ばれた者の無機質な音がかすかに聞こえた。

八迫は竜太の机を借りて、アル物を作っていた。成績がまるで上がらない竜太のために、テキストを作っていたのだった。

なぜ八迫が竜太の部屋にいるのかというと、それは数刻前に起きた出来事のためだった。

玄関前に改めた姿で立つ八迫がいた。

「すいませーん。奥さんの家の隣の奥さんの赤の他人の知り合いの嫁の、メルトモの彼女の一目惚れ相手のおじいちゃんの宝物の鉛筆を作った会社の社長の親戚の会社で働いている人とは何の関係もない家庭教師ですが。」

がちやりと開くドア。

「ど……どちら様で。」

「私は……家庭教師ですが……」

そして八迫は目を大きく見開いた。催眠術をかけていたのだった。

「これからここに住まわしてもらっても？」

母親はうつろな目でこくりと頷きつつ言った。

「どうぞ。ウチーノムースコヲナンカンコーニゴーカクサセテクー
ダサーイ。」

ということとで家庭教師として、そして師匠として正式にここに住めることになった八迫であった。

それにしてもお母さんが言ったのは、ひよつとすると、日本人が外国人相手に使うあれですか。片言英語 or 日本語。

アレは絶対異国の人を馬鹿にしているとは思えないのですが。

それよりも、研究室【竜太の机の上】では、急遽何かが作られていた。

「出来た。」

思わず心の中でガッツポーズをしまい、ぶつけたところまでリアルに想像してしまった。かなりいたいところまで想像してしまっただ。何せぶつけたのはタンスの角より恐ろしい豆腐の角だから……だ。あれは、凄く怖いものだ。痛くて、怖い。恐ろしいんだ。

ダークネス
暗黒神殿で……。

キリスト処刑のように、頑丈な岩盤に打ち付けられた鎖につながれている皇帝がいた。

「うつおうつおうつおうつお。」

皇帝は興奮して暴れている。展部中学校の邪悪な力が流れ込んで、心と肉体を満たしているのだった。それは皇帝の喜びの、昔の地を思い出させるには十分だった。

ライトニング
光輝神殿で……。

こちらには誰もいなかった。何世紀かむかし、この土地神は、連れ去られてしまっていたのだ。皇帝が食べてしまったという噂もあ

るが、何が本当なのかは誰も知らない。

それぞれの運命が交差している。

そして、離れ、消える。

運命を見守る者がパネルを見守っていた。

「これは、時間を覆すかも試練バイ。たのしそうだあー！」
最初から最後までにかけて、声が疑問を言ったかのように上がっていた。

竜太は奥義をつぶやいた。

あたりが光に包まれたのが竜太は体で感じた。

「これならいける。」

思わずつぶやいてしまった。それを聞きつけた秋鹿が

「いけるだって。ふん。この私にたてつくのか。」

空から雫が降り注いだ。

「なによこれ。いやよ。わたしはもつと・・・いやああああああ

ああああああああああああああ

やっと・・・終わった。竜太は感じた。

体がまたスウスウしていたが、竜太は気づかなかつた。

それより、早くゆっくりと休みたかったが、体が動かず、その場で倒れ、気絶してしまった。

学生服に戻っていたが、その服はぼろぼろになっていた。秋鹿はと
いうと、教室でうつぶせたまま気絶していた。

「一人消えた。」

長谷川は思わず笑ってしまった。

「こんなに長くかかるとは……。」

そして、壺から一枚の紙をとると、何かを書いた。その書いた紙をフツと息で飛ばした。

「今度こそ終わりかな。」

長谷川は電気を消して、学校を後にした。

物語は、始まった。

スピードは、高速をも上回る速度で……。

この世界が変わっても。

俺が変わってしまっても、守らなければいけない物があるから。

第三話後編 謎の暗躍！裏教育委員会から来た長谷川律子、来る！（後書き）

この物語に登場したい方は、どっちの側に、どの名前でどんな性格かなど詳しく書いておくってください。お願いします。そして、やっとプロローグが終わりました。これから展部中学校は、林間学校編に突入予定です。これでやっと学園すとーりーらしくなってきた。でも、それが裏切られると作者はまだきがついていないのだ。

第四話 休日インポッシブル（前書き）

前回までのあらすじ

やっと、初めての戦闘は終わった。また、別のところで始まるようにしている何らかの事件。これらは何かつながっているのか。平行したかのように見えて、交差している事件。

秋鹿との戦いが起こった別の場所では、皇帝が。

皇帝が負の力をすい喜んだ別の場所では土地神様が。

土地神様が、皇帝の体内で瀕死の状態の時に、山崎は。

山崎が恐喝をしているときに長谷川は。

長谷川が紙で伝言を伝えているその時に、全ては平行ではなくなりつつあった。

それぞれが微妙に、近づいていっていると、誰が予想した？

第四話 休日インポッシブル

第四話 休日インポッシブル

どうなるんだろう。俺は。

秋鹿と戦って俺は死にかけた。

もしかして俺はもう死んだのかもしれない。
なんで。

俺は何も悪いことはしていない。

やらされていただけだ。

もっとやりたいことだってあったのに。

そう思って竜太は目を開いた。

「八迫……。」

「あ。生きてたんだ。竜太。ちょっと残念。」

起きようと体を起こすと体の節々が悲鳴を上げた。

起きないで。やめてええええ。と

「ウギョ。」

思わず倒れ込んだ。体が悲鳴を上げて、すごくいたんだから。

「痛ーい痛ーいー痛ーいー痛い痛いー痛い痛ーいー痛ーい痛いー
ーーーーーーーー。」

「秋鹿相手にこんなにぼろぼろになるなんてねえ」

八迫は口を大きく曲げ、つぶやいた。馬鹿にされている。この……。

「そろそろ、他の切り裂きジャックとも会いに行かなきゃいけない
んだけどさ……。」

ねい。と顔をにっこりさせていった。この野郎と思っただが竜太はそ

のまま気絶した。

八迫は、「もう、合格じゃないかもな・・・。」と一言った。

あの後、八迫は屋上に行っているいろいろ使って直して、ついでに竜太を持ち帰った。

これがお前の仕事なんだぞ。といおうかと思っただけけど、八迫は言わずに持ち帰って、布団に放置した。そのまま今まで寝ていた。

まあ最初からこれだったらまあ良いのかなあと思いつつ八迫は日記を閉じた。今日、この日記のタイトルが決まった。

「切り裂きジャックは殺しません！」

八迫は日記を隠し、眠りについた。そして、もう一回出して、

「竜太は、合格じゃないかも。ぎりぎりサイズ。」

と足した。

「これから、お前はそれだけじゃ済まなくなるのかもしれない。」
八迫はベッドをひっくり返して、赤褐色より、わずかに薄い色の刀をなでた。

「お前の持ち主は、変わるぞ。それでもとの持ち主を救ってくれよ。奴を救うのも、お前の仕事だろ。」

刀はごとりと、向きを変えた。

「お休み。」

「

八迫は、消えかけた声で、刀の名前をつぶやいた。

暗闇の中、刀が返事をしたような声がした。

俺が俺であるために。

これからは、どんなことにも立ち向かうよ。

第四話 休日インポッシブル（後書き）

次回、もしかするとある人物が登場して、その人物が新しい小説になるかもしれません。どうぞご期待してくださいとうれしいです。すばいです。アルティメットインビンシブル暴力女です。すばいです。

第五、六話 ジャックハンター ナイト（前書き）

これまでのあらすじ

地球侵略をたくらむ侵略者長谷川律子が来た事を知った竜太は切り裂きジャックとなって侵略者に立ち向かった。だが世界一の弱小ヒーローは地球を救えなかった。竜太は長谷川を倒し、世界を救うため、今、宇宙へと最後の戦いに出る。

切り裂き戦隊ジャックレンジャー

ステージ48

明日への希望

世界は俺が命がけで助けて見せるんだ！

その前に、戦隊で一人つてのはどうよ。隣に張りぼて立てて寂しくないの。

おまいさん、それは禁句だと・・・。

じゃ、いつそのこと、特撮時代劇 お竜太とお何とかで良いんじゃない。

ねー八迫おう、それって時代劇なの、特撮物なの。

じゃかあしわ！

ソオーノコトオーバ、ワタアーシワアーカリマセエーン

地獄の釜、片道切符を平田竜太で一つ。

わぁー。御免なさいごめんんあさい！

じゃかあしいわ。

アアーラ、アアータラシイイターアーンゴデエース。

意味不明だ。

第五、六話 ジャックハンター ナイト

今日は、竜太が休み……。つまらないので今回も休もうかと思っ
ていたのですが……。

それだと話がつまらないと言うことで、第五話と第六話をなんと、
合併してしまいます。

今回は特別版でお送りします。題して春の切り裂きジャックキャン
ペーン祭！

この祭に参加してくれて読者のみなさんが感想をくれたら、もれな
くあのお方からのありがとうがたいいメッセージなどをプレゼントさせ
てもらいます。どうぞお楽しみください。

基本的にこの祭りでは、切り裂きジャックを一定期間、量を多くす
るというものです。目安は10話までだと思います。ほかにも、切
り裂きジャックは殺しません！オリジナル短編小説も企画中。そし
て、感想文にこういう短編がいいと書いてくれた方にはご希望道理
のオリジナル短編小説をぜひとも送りたいと思います。どうぞ皆さ
ん奮ってご参加ください。参加の方法は単にこの切り裂きジャック
は殺しません！を読み、感想文を送るだけでいいのです。ちなみに
この小説に出たい方は感想に書いて送ってくださいね。出してほし
い名前等もつけてください。感想をくれた方にプレゼントしたいと
思います。

春の切り裂きジャックキャンペーン第一弾、合併！切り裂きジャッ
クが二話読める！をお送りします。今回の内容は……

第五、六話 ジャックハンターナイト！と題しまして、

第五話 謎の仮面少年、桐原須藤現る！

第六話 須藤対竜太切り裂きバトル！

と成っております。

第五話 謎の仮面少年、桐原須藤現る！

カツ・・・カツ・・・カツ。

竜太がこの展部中学校へ来たように、新しい転校生が校長室への階段を上っていた。

「天才」としてピアニスト、ヴァイオリンなどの音楽の頂点に立つ者の中でも優秀だといわれるほど有名で、天才だといわれる少年が転校してきた。裏としても学校の評判があがり入学生徒数が増えればそれだけ早く皇帝が復活するのだから、悪いことはない。校長はまだかあまだかあと転校生、桐原須藤きりはらふすどうを待っていた。

校長室に彼は着いた。

彼はドアノブに手をかけ、あけようかあけまいか悩んだ。霊媒体質の彼にとってこのドアからはただならぬ靈気を感じたからであった。しかし彼は思いつきドアを乱暴に開け放った。

そこには校長が朝のコーヒーを飲んでいた。

「おお。君が桐原須藤君だね。この展部中学校校長の狭霧花さきりばなだ。よろしくね。まずこの学校についていくつか注意などをしよう。この学校は不良が多くてね。我々教師としても何とか正しい道へつれていこうとするのだが全くもって・・・だから君も気をつけた方がいい。この展部中学校ではこれを名札の横につけるんだ。」

狭霧花は突然いすから立ち上がって、須藤にピンバッチを渡した。

須藤はピンバッチを聞き手で受け取って答えた。

「ほとんどと言っていいほどの人がつけてませんでしたか。」

校長はどきりとしたが、校長といわれるだけあつてか、きちんとした言い訳を考えついた。

「ほら。さつきも言ったろ。この学校には不良が多くて・・・だから着用しない者が多いんだ。君はつけてくれよ。」

といって狭霧花は須藤の方に向き直った。すると須藤はいかにも胡

散臭いと少し目を細めていった。

「それ、本当ですか。どう見ても何か、ついているんですが。」
そう言つてピンバッチを裏返して狭霧花に見せつけた。

狭霧花はヒヤリとせずに入られなかった。なぜならこれはマークだからだ。これをつけていれば少しずつ悪に染まっていくな。これがないということはもうこちら側の手の中にあると行つても過言ではないからで、これがないある者はまだ悪に染まっていけないという風に区別できるのだ。

「本当だ。きつと誰かがイタズラしたに違いないね。じゃあ・・・今は手元がないから注文しておくよ。届いたら君に渡すから。今日は良い。担任の長谷川先生と一緒にクラスに行きなさい。」

狭霧花があわてふためくと桐原は、人差し指以外を曲げて、狭霧花を指さして言つた。

「狭霧花校長。あなた・・・。」
そこでチャイムが鳴つた。チャイムで須藤の声が聞こえなかった。がちやりと職員室側のドアが開いた。

「先生。もうよろしいでしょうか。」
長谷川が生徒をクラスまでつれていく役目を持っていたのでそれを果たしに来たのだ。

「いいです。長谷川先生。一人で行きます。クラスは何組ですか。」
校長はしどろもどろに答えた。

「あ・・・ああ。君は・・・な・・・七組だよ。須藤君」
がちやりとドアを開けて須藤は出ていった。それに続くかのように長谷川も

「じゃあ校長、行きますね。」
と言つて出ていった。長谷川と、そしておそらく校長の謎を知つたであろう桐原須藤の二人が去り、一人になった狭霧花校長は校長室でうなだれた。霊を呼び出して、桐原の肩につけておいた物が消滅させられたのも、その原因かもしれないが。

「あの少年・・・気づいたか。」

チツと舌打ちをした。今までの子供は皆、馬鹿でカスで芥で生きる価値など無かったはずだ。

鈍くて私の計画など一部も分かっていなかったはずだ。

この寛大な私の、私たちの計画など……。それなのにあいつはそれを……。やはり天才という人種は特別なのか？

たぶん私が霊をも操ることを知っている。そして須藤。お前もまた……。

そこまで脳内で考えて構想を組み立てて狭霧花は確信した。

須藤は特殊な能力を持つ。と。そしてその能力とは、自分と同じ

――

ほぼ同時刻、近辺にて

今日、やっとけがが治った竜太は階段を上っていった。教室に向かっていた。

「ふあーあ。眠い……」

と呟いた。なぜなら馬鹿竜太は昨日、電子遊戯を一晩中やっていた一睡もしていないからだ。萌え系アニメではない。

そんな一睡もしていない竜太の目の下にはクマが出来ていた。三階にあるクラスまで行かなければ行けないのに今、一階であった。チャイムが成るまであと二、三分だ。

「やば！」と思った竜太は急いで行きよいよ閉まっていたクラスの後ろのドアを竜太が開けた。そのころ、隣にあった校長室から一人の見慣れない少年が出てきた。その少年は竜太の方へと向かってくる。そして少年は竜太とは別の前のドアへ行き、開けた。

クラスの中へはいると先ほどの少年がチョークを持ち、何かを書いていた。

桐原須藤

その文字は驚くほど達筆で、整っていて、とにかく綺麗だった。

「僕の名前は桐原須藤と言います。神戸市の方から来ました。好きなことは人物調査、です。今、僕は霊について調べています。一種

の霊能力の力を。そして、このクラスにいる、一人の特殊な人間について。

自己紹介をしていた須藤と名乗る少年は、にやりと笑い、竜太の方に顔を向けた。そこに、山崎が突っかかっていった。

「んなことはどうでも良いんだ。金だせよ。な。」

竜太はどきりとした反面、僕は聞きながら僕と同じ対応だなあ。と思った。誰に対してもこれなのか。というかこれしか出来ないんじゃないのか。と。

須藤はどうするんだろ。とか思いながら、竜太は上の空だった。空が青くてきれいだなあと思いつつ耳を転校生のほうに向けた。奴に對しての禁句がでた。

「金、ですか。やだなあ、ありませんよ。あなたみたいな外道に渡すようにはしたくない金なんて。」

さつき聞いた事は本当なんだろうか。山崎に向かって言った言葉は。
.....

「んだと。」

「もう一度言っただけですか。あなたみたいな外道に渡すようなはしたない金はありません。といったんです。」

言っちゃったー！言ーちゃった、いつちゃったー言っちゃったあー
—————

この転校生はしよっぱなからなんてことを言っているんだ。

あの不良頭領生徒山崎（ふりよつとつりょうせいとやまざき）に向かって外道、はした金……。もう駄目だ。あの転校生は終わりだな。

などと勝手に竜太が思っていると、がらがらガラツとドアが開いた。すると竜太は気分が悪くなった。しかしこの気分が悪くなったことよって誰が来たのかわかなくてもわかった。担任の長谷川律子が来たのだ。なぜか長谷川を見ると気分がものすごく悪くなる竜太は長谷川が来るとすぐにわかってしまうのだった。

そしていつの間にかきていた須藤は耳元に来て呟いた。

「昼休み、僕のしもべが迎えに来るよ。待っていてね。」

その日、授業がまったたく耳に入らなかった。いつもの事なただけれども。

そこで竜太は気づかざるを得なかった。ああ。だから成績が悪いのか。と竜太は納得しつつも寒気が走り続けていた。

昼休み竜太は息を呑んだ。

「お迎えます。ご主人様が待つておられます。」

しもべとはこのことだったのか。と竜太は冷や汗をかきながら思った。あいつがこんな恐ろしいものを操るなんて……。

そして竜太はしもべの幽霊に連れて行かれた。しかも、誰も気が付いていない。

行き先は………屋上？

俺は、これからどうなるか。

そんなこと、考えもしなかったよ。

真ん中書

あとがきでも前書きでもない！しかも書いてるのは2009年3月7日！これはあとがきといったほうが正しいんじゃないのかというなぞもありますね。

それに、春の切り裂きジャックキャンペーンで、この後やりましたけ？

謎です。

というか私がやることなす事謎といわれても、何もおかしくありませんね。あひゃひゃ。

といったのがもう一年二ヶ月前ですか……。いまは2010年の5月20日。

ちなみにこのキャンペーンは終了しているはずですのであしからず。

ひよつとしたらまだ遣ってるかもしれせん。
担当のものに聞いておきますねー。

第六話 須藤対竜太切り裂きバトル！

「ああ。竜太君。来たんだ。見ての通り、僕は幽霊を操る切り裂きジャック。」

啞然とする竜太。

「・・・切り裂きジャックは何人もいるのか・・・」

須藤が驚いた顔で言った。

「知らなかったのか。じゃあまずはそこから教えてあげるよ。」

切り裂きジャックは本来七人いる。どの時代にも必ず。一人が死ぬと、また一人生まれる。七人と決まっっていてそれ以上でもそれ以下でもない。

きつちり七人なんだ。そしてその七人は本当は同じ場所にはいない。それぞれ違う場所にいてその場所を守っているんだ。本来ならば同じところにジャックは三人もいてはいけない。三人いた場合はどれかが死ぬか、力を渡すしかないんだ。三人で同じ地を守っていこうなんてくさい事は出来ないんだ。そしていま、君がいるのはここ。僕がいるのもここ。彼のいるのもここだ。つまりこの日本のここには三人の切り裂きジャックがいるんだ。

言いたい事はわかるね。二学期末テスト二百八十五人中二百八十五番さん。もう1つ言うと君の切り裂きジャックとしての能力は創造。僕の切り裂きジャックの能力は霊撃という風にみんなそれぞれ能力が違うんだ。そして君の能力は僕の能力には勝てないってことになっている。僕の完璧な辞典の中ではね。さあ。どっちが勝つかやろうよ。勝者は僕に決まっっているだろうけどな。」

桐原須藤のありがたい超長い話を聞き終わった竜太の顔は青ざめていた。こんな話聞いた事が無い。栗柄八迫からも。

「俺・・・俺はいらぬ。こんな能力。あげる。あげるから・・・」
竜太は両手を開いていった。

うんうん。と須藤はうなずいて重々しく口を開きいった。

「賢い。こういうことは賢いよ、竜太。でもね・・・。」

そして須藤は顔を下に向け、そして大空を見て、竜太を見て、続けた。

その顔はいやらしく、下衆な顔だった。

あの美景からこんな顔も出るのかというような。

「楽しみたいから嫌なんだ。僕は切り裂きジャックのなかでも特例切り裂きジャック専門のジャックハンター、ナイト。五人の切り裂きジャックをすでに倒した。殺してはいない。後は君で六人。やっとなら全部そろった。切り裂きジャックが切り裂きジャックを消すんだよ。僕は最強になる。最強になってこの世から悪を消し去り・・・人を消す。知っていたかい。悪くてもものは人そのものなんだ。根源的な悪、つまり人をこの世界から消せばこの世界は正義だけになる。わかるか。これが俺流の切り裂きジャックなんだ・・・竜太。」
竜太は突如背中をつかまれるのを感じた。

「ネエ。早く変身しなヨ。それまでは殺さないから。待つてあげる。早く変身・・・して。」

「へんしいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいん」

竜太は輝きだし、制服が消えうせた。

そして裸になった。
股間がすうすうした。

そして須藤も竜太の股間をじいと見ていた。

「この変態。見るな。ちよ・・・近づいてじっくり見たりとかしないでください。」

そしてあるうことか・・・須藤は。

「ぶむ。ぎりぎりってところかな。これ、」

「お前なんて失礼な奴なんだ。」

緊張感がないのは、勝てると思っ切っているからだろう。

思ってもいなかった。僕が負けるわけが無いんだ。

ソウゾウシタ。剣、バトルアックス、ソード、弓、すべての武器を
あいつに。あいつに・・・

竜太の元へと駆けつける一人の女子中学生がいた。そのこの名前は
理緒りおだった。

「世話かかせすぎ。」

「コンプリート。創造の切り裂きジャック。」

「ガ・・・ハア」

竜太の腹部は須藤の霊の手によって貫かれ、竜太の意識はもつろつ
としていた。

「楽しいね。」

そういうと須藤は手を動かした。抜いたり、入れたりして竜太で遊
んでいるのだった。

「グハア・・・ガ・・・ア」

「切り裂きジャックはこれで一人になった。今度はこの世界にいる
人間どもを殺さなくては。」

クリシヤ・ミニアリ・アガンヲ・ラシワ」

呪文らしきものを唱えたとたんに、晴天だった空に暗雲だけが一気
に広がった。

「世界よ・・・滅びろ・・・おろかな奴らを消し去って・・・。」

屋根を飛んでいた理緒は空に広がった暗雲を見た。

「これは・・・この世界が滅びる・・・遅かったんだ。切り裂きジャックはあいつになっちゃったんだわ。行かなきゃ。竜太を助けなければ行けない。そうしなきゃ、来春の福袋、買い込めないじゃない。」

いきなり現れてなんだか謎の事を言う少女、理緒は、校舎の上に向かって走っていった。

どんなことが起こっても、俺だけは見捨てない。

絶対に守ると決めた物は、守ってみせるから。どんな物でも。

第五、六話 ジャックハンター ナイト（後書き）

春の切り裂きジャックキャンペーン

皆さんどうぞ奮ってご参加ください。作者と登場人物総員で待っています。

どうぞよろしくお願いします。勉強不足で鍵かっことか漢字を間違えたりしていますが、そのところはご遠慮して呼んでください。なるべく直してます。投稿した後でも見つけたら。

第七話 降格！お前は違う（前書き）

竜太・・・死す？

地球・・・破滅す・・・。

須藤・・・正義を果たしたり。

我ら、無駄な・・・り・・・？

第七話 降格！お前は違う

第七話 降格！お前は違う

キャンペーン二弾 話が長い。

怒濤の前回までのあらずじ

切り裂きジャックは七人いると須藤から聞かされた竜太。その事実
に啞然とし、戦うこともできない。そして決戦の末に、竜太は須藤
に負け、須藤は六人目の竜太の想像の切り裂きジャックを奪ったの
であった。竜太は須藤により腹部に手を突っ込まれ、瀕死の状態と
なっているのだった……。こうして竜太は早くも切り裂きジャッ
クから一般人に戻ってしまい、世界は破滅へと近づいていくのだっ
た。切り裂きジャックはここで完結してしまうのか……。

一方、竜太の通う展部中学校へ、屋根を伝ってゆく謎の女、理緒の
姿があつたのであつた……。

そのころ別の銀河では、地球の謎の敵が迫っていることに、誰も気
がついてはいないのだった。

須藤が竜太を地面にたたきつけた。意識がほとんどなく、死にかけ
ている平田竜太には何が起こっているのか全く分からなかった。

「ねえ。もうすぐみんな死ぬよ。助けなくてもいいの。ねえ。じゃあ
はじめちゃおっかな。参、弐、壱……。

はじめ。」

そのカウントダウンはコンマのスピードだった。須藤は手を上に掲げた。そうすると暗雲から何かが落ち始めた。それはサイキックを持った切り裂きジャックの分身。その分身は人を殺すために生まれた者。

空から落ちてきた何かを見た八迫は竜太の家から出る用意を急いでした。

「この竜魂剣を渡さなきゃ。あいつ・・・死んでないと良いけど。」
そういつて家から飛び出し、竜魂剣を鞘から抜いた。あの、ベッドの裏に隠してあった、赤褐色より少し薄い剣。

「竜魂奥義長刀。」

竜魂剣が回っている。八迫はそれを持って学校へ・・・・・・・・・・
・竜太の元へと急いだ。

一方、須藤は巨大な檻を出した。いや、作った。霊を束ねた檻。切り裂きジャック専用の。

「この中に入つてな。元、切り裂きジャック、平田竜太。」
思いつきり蹴られ、檻の中に入れられた竜太は思わず叫んだ。

「ぐ・・・あが・・・ああ・・・」

「紅蓮牢炎陣」
くれんろうえんじん

炎に包まれた牢に入ったことに竜太は気づいてはいなかった。霊に炎をつけ、燃えさかる牢。

「待ちなさい。桐原須藤」

須藤は気が付いたかのように深々とお辞儀した。

「ああ。君が噂のスパイ女理緒か・・・。ようこそ。」

そして、須藤の後ろからも声がした。須藤はそちらにもお辞儀をした。

「待て須藤。俺もいるのに気がついてるのか・・・。」

「おお。級友、栗原八迫君じゃないですか・・・。懐かしい。ところ

でその剣・・・持ち主に返却するか、物騒なので閉まってはどうな
んです・・・つかあ。」

そう言つて須藤は八迫を背負い投げした。

「とりあえずは竜太を出さなきゃ話になんないカ・・・痛つ。」

理緒と八迫は同時に須藤に攻撃しに向かった。しかし須藤はそれを見切つて背中に担いだ冥府の長刀を取り出した。そして十分な間合
いを取つてそのままふつた。

そうすると長刀から不思議な液体が出てきた。その液体はやがて二
人の人の形になった。

一人は理緒の姿。もう一人は八迫の姿だった。完全に理緒にそつ
りになると偽物の理緒はしゃべつた。

「ワタシハヒトリデイイ。ホンモノトニセモノモナイ。ドチラカヒ
トリガニセモノデアリホンモノデアレバイイ。アナタハジャマ。ダ
カラシンデ。ダカラキエテ。ダカラスナニナツテ。」

八迫の方もしゃべつた。

「オレハヒトリデイイ。オマエガホンモノノニセモノダ。オレガホ
ンモノノホンモノダカラニセモノハキエテナクナルマデコロス。コ
ロシテナクス。」

「理緒。やっかいだ。とりあえずこいつらを倒してから竜太の救出
だ。行くぞ。」

「イエツサー。マスター八迫。」

竜太に向かつて八迫は竜魂剣を投げつけた。

「ふぐの毒う。」

竜太はうなり、黙つた。

八迫に向かつて偽物の八迫は冥府の長剣を出し、振り下ろした。

理緒は偽物の理緒に。偽物の理緒は理緒に、それぞれ短剣と竹刀の
ような剣を振り下ろした。

竜魂剣は竜太の体につき、竜太は少しずつ回復へと向かった。

「よけいなことを・・・八迫・・・。・・・と言いたいところだけ

れども、これで僕も楽しめるよ。一回も楽しめるなんてな・・・あれがとう・・・八迫。」
須藤は、霊で作った椅子で、のんきにティータイムを始めようとしていた。

別の所から、長谷川たちが見ていた。

「ねえ。狭霧花校長。彼の須藤とか言う奴、校長と同じ霊を操るんですね。面白いですねえ。」

「長谷川君。笑い事じゃない。切り裂きジャック、全ての力を手にした須藤君は今や本人は気がついていないだけで、人間の歴史の中で死んだ全ての者をよみがえらせ、操ることが出来るんだ。それに全ての力を手にしたおかげで、強力になっているのも確かであるからね。」

そう言う教師たちも強力な霊と戦っていた。

この世界の地下で巨大な力を持つ魔王もまた、目覚めようとしてた。

突然全てが風で見えなくなった。

再び見えるようになったところには剣を持つ少年がたっていた。

「須藤・・・よくも遊んでくれたな・・・。」

そう言ってたっている少年はぶつぶつとつぶやいた。

「怪我してるところに手を入れたりだしたり・・・痛かったし、それからさっきもけっ飛ばしたし・・・。」

そして息を大きく吸い込むと叫んだ。

「もう許さない。」

そこには竜魂剣を持った平田竜太がたち、須藤をにらんでいた。

そして竜太は生身のまま剣に怒りを入れて、須藤に立ち向かった。

「遅いぞ・・・竜太・・・」

八迫は偽物のと戦いつつそうつぶやいた。しかしその顔にはこれまでと違い、希望に輝いたきれいな顔だった。

それからエグイ顔になって、

「あとでお仕置きが必要だな。こんなに迷惑かけて・・・」

俺は、瀕死状態から回復した。

俺は彼らが助けてくれたように、この世界を助けなきゃいけないよ。それが、俺の役目。

第七話 降格！お前は違う（後書き）

次回、切り裂きジャックは殺しません！

ジャックハンター編、まだまだ終わらない。

須藤に竜太は勝てるのか。

そして復活寸前の皇帝とは別の魔王……。

いつ復活してしまうのか……。

こうご期待

第八話 世界救世主 竜魂剣爆炎（前書き）

前回までのあらすじ

―戦国時代―

突如切り裂きジャックへと変身する能力を奪われ戦国の地へ送られた竜太は何とか平成の時代へと戻るために、戦国時代を支配する將軍達を討伐するための戦いに竜魂剣とともに旅に出るのであった。そしてもう一度、切り裂きジャックの能力を取り戻すためにも……。

第八話 世界救世主 竜魂剣爆炎

第八話 世界救世主 竜魂剣爆炎

「須藤――――――」

竜魂剣の刃を須藤に向かって突進していく竜太。

「………れいしゅへき・…霊守壁」

竜太の一撃は霊の壁に吸収された。

「竜魂剣基本技長刀爆炎撃！ へりゆうごんけんきはんわざなぎなたばくえんげき」

壁に向かつてがんと竜魂剣をたたきつける。

そしてその剣は炎に包まれて壁を突き破って須藤の頬に切り傷を作った。

「このばかめが。」

竜太は一撃一撃に意味を持たせ、攻撃していた。

「お前みたいなのが悪党と呼ぶんだ。人間みんなが悪い訳じゃない。お前みたいなのからづやの馬鹿が悪者なんだ。」

須藤はこらえきれずに叫んだ。

「貴様に何が分かる。この俺のついて何を知っているつもりだ……お前こそ、人の気持ちも知らずに……お前こそが悪党なんだ。」

悪党は消えて無くなれ。クロイ・デス」

結構シリアスなので、竜太の台詞のひとつは省略させてもらいます。「え？何が黒いの？」

全ての墓という墓から霊が呼び寄せられた。そしてその霊は一つの場所へ集められた。

「貴様なんて……。死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ。そして来た霊は一つの玉になり、須藤の手の中に収まった。」

「竜魂奥義竜撃手。これで終わらせてやる。」

竜太は剣を人振りするとその剣は空を切った。そして切った空からは竜撃手が出てきた。

「アロロロロ。イガラシャ。」

竜撃手は竜太に向かっていった。

殺してもいいのか。

「アロ。エルアルアハシャカ。」

良いぞ。こんな奴。

「アヒヤロシャ」

了解。

須藤は手に収まった霊たちを竜太に向かって全て投げつけた。

「これで終わりなんだ。切り裂きジャック平田竜太。バッド・エン

ドデス・カレン」

竜太は竜魂剣をかまえた。

「アロロロロロロロロロウ。」

竜撃手、行くぞ。

竜太はそう告げると須藤の元へともう一度つつこんでいった。

理緒はにせものに向かって剣を振るった。

「あんたが本物の偽物よ。消えなさい。」

八迫が偽物に向かって拳を思いつきり振り下ろした。

「お前が偽物じゃないなら誰なんだ。お前しかいないだろいが。」

三人そろって、それぞれの元へ、つつこんで攻撃を始めた。

「消える。平田竜太。霊超長剣。」

竜太はバッド・エンドデス・カレンに向かって斬りつけた。

「うあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ。」

竜太はバッド・エンドデス・カレンを斬りつけ、剣に取り巻かせ、
須藤に向かって剣を思いつきり振るった。

そして三人そろって叫んだ。

「消える！」

と一言。

三人の顔は勝利を確信した、傷だらけながらの精一杯の笑い顔を無理していた。

また、敵側も叫んだ。

「お前がな！」

自分が負けるものかと、必死になっていた。

この結果がどんな物であろうとも、俺は出来ることをした。
だから、慢心感で、いっぱいだよ。

「須藤おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお。」

力いっぱい、竜魂剣を振り下ろし、間合いを取り、構えた。

第八話 世界救世主 竜魂剣爆炎（後書き）

竜太はこの世界を守るために復活した。三人でそれぞれの敵を敵を倒すために戦いを始めた。そして竜太と須藤、それぞれの仲間を呼びだし、決着をつけ始めた。

しかし戦いが終わるまでこの地球は耐えられるのか？
今、激闘編はクライマックスに入る……。

そしてその先にある本当の物語の序章とは……。

なんてかっこつけてすごい面白い話書きたいなあー。
はふうー！。

第九話 世界救世主式 本物対偽物（前書き）

誰が予想しただろうか。この激闘編がこんなに長引くなんて・・・
本当は学生物語のように林間学校を企画していたはずだ。いつから
だ・・・。桐原須藤にリオ、そして八迫。この三人にこの小説の林
間学校編が奪われたのだ。早く文化祭編とかやりたいのに出来ない。
どうしたらいいのか。お助けの手紙、待っています。と言うか、こ
れ、学園？アクション？何なの？

第九話 世界救世主式 本物対偽物

第九話 世界救世主式 本物対偽物

竜太のふるった竜魂剣は須藤に、理緒のふるった剣は偽物の理緒に。八迫のふるった拳は偽物の八迫に見事に命中した。

「ニセモノ・ツヨイ。ユルサナイ。スドウサマカラモラッタコレ
デニセモノコロス。オレガホンモノシラシメル。」

そう言つて理緒は何かの飲み物を胸ポケットから取り出し、ゴクリと一口で飲み干した。

そうすると理緒はグングンと巨大化した。理緒の三倍。

「私が本当のリオ。偽物はあなた。消えるのもあなた。」
口をがばつと開けて手を突っ込んだ。

「わかしがあんあなおかおふ。」

どうやら私があるを倒すと言っているようだ。

そう言つたりオは口からさらに巨大な巨大な剣を取り出した。

その剣から垂れた水らしきものは地面を溶かした。

「酸媒剣。」

理緒も負けずと懐から剣を出した。

「清結晶。」

お互いの剣がぶつかった。火花が散り、あたりが火花で包まれた。

「旋回量。」

理緒は剣のつかを軽く持ちぐるぐると回した。そしてそのまま突進した。

巨大になつたりオも、負けずと応戦した。

「旋回風。」

剣を上下に仰ぎ、そのまま剣を回転させて、つつこんだ。

キル・ドルマネットエ
「酸性殺人沼。」

理緒理緒理緒理緒理緒理緒

「私はあるがにくい！死ぬ、沼水の龍」

龍は、理緒めがけて、飛んで行く。

「ああ！」

理緒は服を見てうなだれる。

「お気に入りの限定版……許さない。栓改良！風を操る私にひれ伏しなさい！そして、謝ってよね！」

龍を飛ばして、リオに酸性の竜は当たった。

「アアア……イヤ……アアアア」

見事に解けていく。

「私の美貌を返しなさい……無礼女！」

リオは手を理緒の肩にかけた。

「不気味よ。変体女！」

思いっきり顔を殴り倒した。

ところで……少し作者は悲しいです。頑張っていたのにリオという今回だけの出演のキャラにここまで言われて……。やる気がなくなつたので今回の話はやめます……。リオなんて早くやつつけて。理緒……。

でもその前に。ちょこつと作者が登場します。

「私は、貴方を倒す。」

「こんなこと言われたら、俺だって怒るぞ。俺も物語に出て、お前を倒す！」

理緒は、こつちに向かつていった。

「……お人形さん？かわいい。」

「俺はこびとだ。」

そう言った作者はリオに向かつて行って、

「火炎炎上発火暫！」

「あああああああああああつあ」

「こびとでも、作者をなめるなよ。一撃で倒せるんだぞ。文を操って。すつきりしたからかえる。」

そういつて神出鬼没の作者は帰っていった。リオをよみがえらせて。

「ちよっと、リオよみがえらせてんじゃないわよー。」

理緒は、拳を投げてきた。

これは、俺の問題じゃないけれど、今更後戻りは出来ない。
最後までつきあうって、今。決めたんだ。

第九話 世界救世主式 本物対偽物（後書き）

.....

もう嫌だ。脇役で本当は偽物のはずのリオにここまで言われるなんて。何でリオにここまで言われなきゃならないんだ。理緒。早くあんな奴、やっつけてはくれないだろうか。頼む。って、俺がどうかすれば良いんですか.....。

ってか勝手にわいて出てきちゃって御免なさい.....。

第十話 世界救世主参 幕引きカルポーネ・エカスタン（前書き）

地下にある国。そこで暮らす竜太はある日、ホクロをみつける。それに引きよせられるかのようにロボットをみつける。そのロボットを動かす鍵は先ほど拾ったホクロ？

そしてタイミング良く降ってきた巨大なロボットに竜太は同じくロボットで立ち向かう！

猪突突進リユタボクロン

少年は宇宙へ、そして銀河へと飛び立っていく。

第十話 世界救世主参 幕引きカルポーネ・エカスタン

第十話 世界救世主 参 幕引きカルポーネ・エカスタン

ガスツとりオに蹴られた理緒。

そのころ八迫は頭から血を流しつつも立ち上がっていた。

「がはあ……。」

八迫は偽物に思い切り首を絞められるような形で中であげられていた。

「お前が偽物だと認める。さあ。」

そう言っでどんだん、首を絞めていった。

「須藤おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお」

竜太の怒りの叫び声が空に木霊した。そして竜太はそのままむやみに須藤を切り続けた。峰打ちと言われる方法で。

「がぁ……ぐう……ぐお……。シカララララ。シリ
アサア。」

殺せ殺せ。竜太を……。と呼び出した霊に向かって叫んだ。

「アロロウ。アロアアエウア……。」

いけ。八迫と理緒を助けに言ってくれ。。と竜太は竜撃語で伝えた。それが須藤には理解できた。

「よくも……。よくもお……。なめているな……。死ね死ね死ね死ねええええええー。」

竜太は須藤が強力になったのを感じた。

「うあああ……。」

八迫の首を絞める手がより強力になった……。

「が……。長・刀……。旋……。ぶ……。う。」

どこからとも無く取り出した長刀を思いっきり回した。そして回した長刀で偽物の手を切り落とした。

「うがああああああああああつっつあ。この偽物がああ。許さない。ここで……。」

最後まで言えなかった。須藤が呪いをかけたからだ。呪いと言つよりは、集まれ。と呼んだのであった。

その集まれと言う呪いは吸収であった。そして吸収されるといふことは……。

数分前、平田竜太対桐原須藤

「……。平田竜太め……。吾を苔にしおつて……。」

霊をごく数量集めた。

「ウイランナ。」

霊を集め、巨大な剣を作った。

「デュアン・セブン」

剣を思いつきり振るった。そしてその剣からは、氷のつぶてが出てきて剣を取り巻いた。

「お前が一番の悪・・・お前を殺すことでこの世を正義一色に出来るんだ・・・竜太。貴様は死ぬっ」

「竜魂剣一文字霸道」

氷の剣と炎を取り巻いた霸道はぶつかり、そして爆発した。

「ブヘブヒャー！」

竜太は爆風によって飛ばされ、がれきに頭を打ち、気絶した。

「ぐ・・・シホホホホ。シヌカラジャミニユ」

霊を操り、盾を作って爆風をふせいだ。

そして爆風が無くなった場所で竜太に向かって頭からどくどくと血を流し、目が赤く光った須藤が剣を振りかざし竜太を見据えていた。

「お前の負けだ。」

そう言うつと須藤は霊を世界中から集めて、身にまとった。

「エクストラ・ボンナジャンヴァ」

終わりが、近くなっていた。

「絶対に、終わらせないからな・・・。この世界も、何もかも。全部あくのお前を倒して終わらせるんだ・・・。」

竜太は改めて、竜魂剣を構えた。

「終わらせないぞ。」

「今度はあなたの負けよ。あなたが本物の偽物・・・だったかしら。その言葉、あなたに返してあげるわ。」

もうだめだ。と思い目をつぶった理緒。長い時間を経て、目を開けると同時に叫び声が聞こえた。

「嫌ああああああああああああ須・・・藤様ああ」

それは八迫の所でも起きてきた。

「お前は……ここで死ぬ。本物。俺が偽物じゃなく、俺が本物になるんだ。」

長刀をかまえ、偽物へ斬りかかった。

後少して当たると言うときに叫び声が響いた。

「うああああああああああああああああああああああああああああああ。」

「

そこで偽物は消えた。

それには偽物のリオや、偽物の八迫も例外ではなく、吸い込まれていったのであった。

「ショータイムの始まりに気づいているかい？ 竜太君。これで幕引きにしようよ。」

カルポーネ・エカスタン「

空に暗雲が集中して、一つの槍のようになり、須藤の手の中にぴったりフィットするようになった。

「これで、全世界の幕引きにしようぞ。貴様も、この世界も。」

これが、どんな結果をもたらすか。

止められるのは、俺しかないじゃないか。

休み時間が終わるまでの時間は、あと少し。
どうやら誰も俺たちは見えていないらしい。
好都合だ。

第十話 世界救世主参 幕引きカルポーネ・エカスタン（後書き）

次回、死闘編完結。

気になる完結編はなんと上中下の三作品でお送りする予定。

魔王と皇帝の復活を竜太はくいとめられるのか。

そしてなんと破滅編、ビューティフルワールドへと続いていく……

？じゃあ作者が書きたがっていた林間学校編は書けないのか……

林間学校編はいつ書けるのか。ジャンルが学園なのに、学園らしき

長編を何一つ書いていない作者はそろそろ焦り始めた。

ここらで学園編をやらなければ、ジャンルを換えなければいけない。

どうする……どうするよ……俺！

一昔前のことを書いてみました。すいません。でも、次回からの死

闘編三作にご期待ください。

第十一話 死闘編完結上 火炎を取り巻く竜魂剣（前書き）

これまでのあらすじ

突如地球に飛来した玉。それこそがこの地に破滅将来対を招く玉だった。それと同時になぞの光が現れた。

それはウルトラマンと呼ばれる何かだった。

今、竜太と怪獣の戦いの1つが終わろうとしている・・・。

ウルトラマンリユウタ

第十二話 死闘編完結中

乞うご期待

第十一話 死闘編完結上 火炎を取り巻く竜魂剣

第十一話 死闘編完結上 火炎を取り巻く竜魂剣

暗雲が須藤の手に、槍のごとく収まった。収まった暗雲は、中に雷を取り入れてあったようだ。ぱりぱりと雷の音をさせ、槍が光っている。その電撃は須藤を取り巻いたが須藤は気がついていないらしい。

「竜太……お前さえいなくなれば良いんだ。死ね……死ねえ。」

須藤は嬉しそうにつぶやくと、槍をかまえ、竜太めがけて振りかざした。

八迫は急に相手にいなくなったのに気がついて、あたりを見回した。すると理緒も同じ様なことをしていたので、八迫は理緒の元へと向かった。

「ねえ。八迫。スパイのあたしが言うのも変なんだけど……偵察しなくていいの。」

「行くぞ。もしかすると竜太が倒れているかもしれないから……」

そう言っただけで駆けだした二人は竜太の元へとついて啞然とした。竜太がその場で須藤に殺されかけていたからであった。

「風塵の壁！」

八迫はとっさに竜太の前に壁を作っていた。

「……じゃましないでよ……。もう殺すんだから……。そうか……。君たちから先に殺してほしいけど言うのが恥ずかしいんだね。そんな照れ屋さんから殺してあげるよ……。デスパレード・霊」ガパツ口を空けた須藤は苦しそうに咳き込んだ。理緒と八迫は目を疑った。須藤の口から白いものがモワモワと出てきたからだった。

第十一話 死闘編完結上 火炎を取り巻く竜魂剣（後書き）

次回、中。

切り裂きジャック対須藤
決着。

第十二話 死闘編完結中 切り裂きジャックは殺さない！（前書き）

これまでのあらすじ

夢に見た伝説のヒーローに……。それが竜太が書いた小学校の卒業文集だった。

それから二年

部屋の掃除をしていると例の卒業文集が。懐かしくて笑ってしまふ竜太。こんな非現実的な作文、よく書けたなと持った矢先、突然ヒーローになってしまった。しかも相手は魔界最強の魔王！突然なつたヒーローが最強と言われた魔王を倒す？

伝説ヒーローリユーターマン

第十三話 不吉が不吉を呼び尽くす。

ごっこ期待。

第十二話 死闘編完結中 切り裂きジャケットは殺さない！

第十二話 死闘編完結中 切り裂きジャケットは殺さない……。

「お呼びなので目覚めました。」

かっこよく目覚めたかのように見えたそう言う竜太の頭はたんこぶが出来ていた。

「おい。お前自分で目覚めたわけじゃないな……。」

八迫が目をぎらりと光らせ言った。

「アロツ。アロミラルアキリサリアシユラリ。」

そんなことは聞かないふりをした竜太は竜撃手にざっと素早く命令をした。それは須藤の服を……体を切りさいていった。

「んぐ……ロリラリアマンシユリバン」

須藤はそれに気づき、切り裂くように命じた。

「それに気がついた竜太の使いは、竜太を守るために動いた。

「アロロロロロロロロロオロロロロ……アロツ……」

そう言つて竜太を守つて竜撃手はきえた。

そして炎を取り巻く竜魂剣はうなった。うなり、竜太が念じていないのに須藤に斬りかかった。しかし、竜魂剣は須藤をよけさせ、須藤がたつていたところに刺さった。竜魂剣の炎は消え、地響きが始まった。

空は須藤の手によって青空だったのだが、真紅の色に染まった。それは、須藤から一筋流れた血と、同一色だった。

「ウゴウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ。」

竜魂剣が刺さつていたところから声が聞こえた。

「あれが……竜魂剣にとりつく爆炎龍……」

八迫は思い出した。この剣を拾ってきたときに、言われたのだった。

神殿にいる……。ついこの間行つた。その神父に。

「いつか必ず龍があらわれ大地を焼き尽くすぞ……。それでも持つていくのか。」

八迫はこくりとうなずきこういつたのを覚えている。

「必ず何とかして見せますよ。」

そうして竜太の家に来たのだから。

「竜太。その龍を操るんだ。元の地下へと返すんだ……。早……。最後まで言えなかった。先ほどとは別の地響きがしたからだつた。」

「うござおおおお。おおおおおおおおおおおお……。吾は魔王なるぞ。人間どもを喰い殺してやるわ……。」

須藤はさつと魔王の元へと行き、ひざまずいた。

「あれが魔王様の敵、平田竜太で……。」

そう言つと須藤は消えた。

いや。消えたように見えたのだ。魔王の強力な張り手をくらい、校舎を貫いていた。

「が……。はあ……。」

須藤の最後の言葉と同時に須藤の口の中から七つの色の気体が出てきた。その全てが竜太の方へと飛んできて、入つていった。

竜太の体はこれまでにないくらい光り輝いた。そして彼の強力な爆炎龍でさえも、竜太の前にひれ伏した。

「おお。主よ。これまでの無礼を無に返すため、ともに戦わせてくれ。」

竜太はこくりとうなずくと剣を持った。すると。竜太の身体に変化が起きた。

戦国時代の武者のような兜と、鎧等が身に付き剣には、兜にも付いている黄金で出来たトレードマークがついた。そしてその竜太が龍に乗ると龍も同じ様な装備がついた。

「ともに戦おうぞ。主よ。」

そう言つたと考えもなしにいつもと同じく、魔王の元へとつっこん

でいったのだった。

本当の死闘はこれからなのかもしれない・・・。
それはもう、始まっていたよ。

第十二話 死闘編完結中 切り裂きジャックは殺さない！（後書き）

これでやっと最後だ……。え？違う？まだ下の執筆が残っている？もう……。誰か変わりにやってよーう。

次回、作者のぐーたら後書き 死闘編の死闘する後書き最終回、デットオブモンスター

こうご期待下さい。

第十三話 死闘編完結下 魔王は地の底に！(前書き)

これまでのあらすじ・・・

カットするでよ。時間の問題でネ。

第十三話 死闘編完結下 魔王は地の底に！

第十三話 死闘編完結下 魔王は地の底へ！

「竜太。彼の魔王の名前はゴルビエー。弱点はないはずだ。」

八迫は空にいる竜太に向かって叫び、教えた。理緒は頑張つて魔王の足に剣を刺し続けている。魔王は手を空にかざした。そして吠え、竜太の方をギロリとにらみつけた。

竜太はあわてて剣を空にかざし、暁の空から龍魂剣に暁の力を移した。剣はさらに強化化した。

「主。あいつを地に戻すことしかできんぞ。その剣を上から魔王に刺せ。魔王はそれで封印できるはずだ。一時的に、だが。」

「うごおおおおおおおおつっお」

魔王は口をガパツと開け、どす黒い火炎を吐き出した。竜太と豪火龍はひらりとよけ、魔王の頭上に浮かんだ。そして、竜太は思いつきり剣を振り、魔王に刺した。

と思つたら魔王はにやりと笑い、ガパツと口を開けた。竜太はその一瞬前に落ちたから、魔王の口の中に落ちてしまった。豪火龍は急いででそれに気がついて助けに行ったが、間に合わなかった。それどころか、魔王の腕にとらわれ、竜太と同じように、口の中に入れられてしまった。

「竜太あああああつあ」

八迫は思い切り叫んだ。そして魔王は歩き出した。背中から突然巨大な羽が生え、魔王は飛ぼうとした。

「理緒、羽をこれで焼けつ。」

八迫はそう言つてゴウゴウと燃えさかるような音のする竹刀を渡した。

「竹刀しないおうぎ奥義かえんえんじょうばしら火炎上柱。」

豪火龍は竜太の龍魂剣に引きつけられ、そして、同化した。

そして竜太は剣を振るった。豪火龍が宿った龍魂剣を。

魔王の腹は割かれた。

「我が名は七の切り裂きジャック。この世を支配し、全てを無に返す。」

そう言った竜太は剣を思いっきり振り、地面を炎の山とかした。

魔王の腹から出てきた神は言った。

「ふむ……まだ早いな。八迫。こいつ、本当に切り裂きジャックか。」

「五月蠅い。俺の弟子を悪く言うな。」

竜太は暴走して、命あるもの全てを焼き払った。

そして魔王の方を赤く支配された目で見ると、封印ではなく消滅させた。剣をわずか数ミリ傾けただけで……。

「元に戻してやる。ころころるるこここここ。」

「うがっ。」

竜太はそう言って倒れた。

全てが消え、見通しが良くなった狭霧花は切れかかった息で何とか聞いた。

「長谷……川君。来週の……林間……学……校はどうな……っている……。」

「……東京、東京にあるデユズミールランドに行く予定です。」

そう言うと、長谷川は狭霧花に肩をかして狭霧花と長谷川は職員室に戻った。

「ふふ、天才と、大馬鹿者はまさに紙一重。桐原須藤君。君は紙一重を破って、裏目に出たのだよ。私のように、少しずついかなければ。そんなに急いでもよいことはないんだからさ。」

今回の損失

桐原須藤 死亡？

校舎、ほぼ全壊

利益なしの大損失

レポートにまとめた。

八迫は

これで終わった。

そう思うと、眠くなってきたよ。

第十三話 死闘編完結下 魔王は地の底に！（後書き）

次回、やっと林間学校編。こつこ期待

第十四話 林間学校のしおり（前書き）

今回は短縮版で、次回は林間学校特別版で、前編と後編のスペシヤル拡大版にしますから。待っていて下さい。

第十四話 林間学校のしおり

第十四話 林間学校のしおり

林間学校のしおり

日程 20xx年6月17・18日

目的 クラスメイト同士の、そして先生との親睦を深め、仲良くするそして様々な歴史的建造物を見る。

竜太は五、六時間目総合の時間を使って明後日に迫った林間学校のしおりを作ってそして、あるうことに長谷川に説明されていたので結構げっそりとしていた。

「みなさん。明後日に迫った林間学校、私は、竜太君と一緒に部屋です。何かあったら私と竜太のお部屋に着てちょうだい。」

「ハア。何で竜太なんかと同じ部屋だったんですか？」

突然のブーイングに竜太はたって力強く発言した。

「僕は先生と同じ部屋なんて絶対に嫌です。」

「私は竜太君と一緒に寝ると決めたんです。誰も竜太君を攻めることは許しません。」

最後にみんなに投げキッスした。

放課後、帰路に就いた頃、竜太は悩んでいた。

「なんで長谷川と同じ部屋なんだ。」

この林間学校は何なのか。
それは全く僕にも分からないよ。

第十四話 林間学校のしおり（後書き）

なんと・・・・・・・・・・・・・・・・次回、林間学
校編は始まってもないのに、クライマックス！もうハヤですか・
・と思うのですが、待っていて下さいね。

第十五話 デュズミールランドにすむ悪魔（前書き）

これは、真実の殺人。本当の終わりがこない、人間が生きているからおこる最強のスリル……。それが殺人。決して入ってはいけない人間が入るべきではないライン。越えたら最後、戻ってはこれないだろう。

第十五話 デュズミールランドにすむ悪魔

第十五話 デュズミールランドにすむ悪魔

ブォー――――

ブォー――

バスの戻っていく音がその場に響いた。後、アトラクションとかの。「着ちやった……。」

竜太はうなだれた。念のために持ってきているミニチュア版龍魂剣をストラップにつけてきていたのでそっとはずし、握りしめた。

「普通つて一番なんだなあ。」
しみじみと思った。

一方、ミュージカルステージ、デス座エンドの舞台裏でミュッキーは龍魂剣そっくりな剣をさやから抜き、ミュニーは手にはめるナツクル様な物を装備していた。

「クヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ。」

ミュッキーは口をガパツと豪快に開け、笑った。その口からは豪快によだれが垂れていた。そしてその歯と歯の間には何かが挟まっていた。赤黒く染まった何かが……。

「ミュッキーったら。私も一緒に狩るんだからね。」

二人はそう言うつと武器を置き、手を取り踊った。

「すばらしい、デイナータイム。」

アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ

ブザーの音がして、幕が開いた。そしてそのパレードから出てきた人は一人もおらず、あたりには生臭いだけがただよった。そして、ゴキユゴキユキュ！と言う怪しげな音も同時に……。

ここからのことは多くは語れない。

何せ、七不思議だし、知ってしまったては恐ろしいことになる。なので二つを書いてみた。そして、平行世界のデュズミールランドをまるまる使った恐怖の話を。

ジャックに通信が来た。

「ミュッキーとミュニーを探せ。十三時に塔内誘拐前に。」
タワーオブアブダクション

メッセージを読んだ竜太は時計に戻し、時間を見た。

12:57

急いで龍魂剣を鞘からはずして、握りしめ、塔内誘拐へ行った。
タワーオブアブダクション
正確には逆方向へと。

八迫はため息をつき、走り去っていく竜太を見た。さっきまでくつろいでいた後ろが塔内誘拐だからであった。
タワーオブアブダクション

八迫は並んでいた列からしぶしぶ出て、追いかけた。

一方、自宅待機【学校】の理緒は授業が身にはいらなかった。竜太と八迫のおみやげのことを考えると・・・であったが。

竜太は突然世界が変わったのに気がついた。後ろを見ると八迫が走ってくる。それだけ。

他に人がいないと言うことにさすがの竜太君も気がついていていた。

「竜太。前。」

八迫が行った。と同時に竜太は額が暖かくなった。そして視界の色が真っ赤に染まった。右半分だけ。

「くきききいいきききつききききいいつき。素晴らしーいーい」

「あひゃひゃん。夢えーのお」

『ディナーー』

メロディーとともに、竜太の右の額がぱっくりと割れた瞬間だった。

ジャン。音楽が止まる。

竜太は龍魂剣を落としたのに気がつき、拾おうとして探した。ミュツキは手をさしのべていった。

「これ、ほしいの。ちょうだい。」

そう言つてストラップから真剣に換えた。

「龍魂の舞」

二つの剣を降るとそこから炎と水の龍が出てきて、竜太と八迫を取り囲んだ。

「がれき崩し。」

ミニニーは近くの地面を持ち上げ、砕いて炎と水に囲まれている場所へと投げた。

「えんど」

ミュツキーは言い放った。

「早く出てきてよ。」

二人は死にかけているから声が聞こえていなかった。

こんな事で死ぬ分けない。

それどころか、普通はこんな事、おきないよ。

第十五話 デュズミールランドにすむ悪魔（後書き）

次回、前後編で完結の林間学校編だったので、完結予定。

次のテーマは切り裂きジャックは七人いるけど殺された。でも切り裂きジャックは不死身なのか……。切り裂きジャックの謎の集会の予定。

第十六話 平行世界パラレルデユズミー！（前書き）

これまでのあらすじ

竜太 なんと今回から俺達がこの場所を預かった。もとい、ジャックした。切り裂きジャックだけに。えへへへへ。

八迫 つまらないしやれを言うな。読者がヘル・シー

竜太 ……小説中の言葉を使っても良いのかな。

八迫 俺だけに与えられた特権だ。

竜太 まあいいや。それより次回は、なんと……。ってこれ、前書きだからこんなこと言えないか……。

八迫 たぶんこれ、作者はきれいにまとめた前書きだと思ってるが、実際はぐちゃぐちゃだ。それを伝えるのも忍びない。黙っておけ。

「ごしごし拭いていた。」

拭かれているミュッキの顔は真っ赤になっていた。

「ああ。ありがとう。愛しのミュニー」

そう言っただけ上がったミュッキは竜太の龍魂剣を折り曲げ、そして、灰にしてしまった。

「あっコラ。まだその剣二、三回しか使ってないんだぞ。物語では結構使ってるように見えてるけれどもっ。」

竜太は叫び、怒った。ミュッキはつぶやいた。

「うるせーよ。かすが。」

そうつぶやいた顔は皺が出来て、歪んでいた。

ミュニーは言った。

「七不思議の内の一つ、襲いかかる地獄水流スラッシュヘル ジェットコースターの高速特急、魔鉄機関車。」

目の前にいきなり線路が出来た。そして、同時に駅も。竜太と八迫は三番線。ミュッキとミュニーは一番線。二人は列車が来る前にミュッキ達の所に行かなければいけないのだった。しかし、ついたときにはもう魔鉄機関車は出発していた。そしてミュッキとミュニーがたっていたところには封筒がおいてあった。竜太は開けて、読んだ。

今回のゲーム

切り裂きジャックの平田竜太が来る。確実にしとめて、俺の所につれてこい。半殺しまで許す。七不思議の内、六までの使用を許可する。七つ目は使用禁止だ。なんとしてもつれてこい。宿泊所ホテル・ヘル地獄海中シまでつれてこい。お前らの命がかかっている。

報酬は仕事分だけやる。そして吾に忠誠をたてる。そして……

桐原 須藤

竜太は封筒の中身を読んで驚いた。桐原須藤という名前が入っていたからだ。八迫はそれを読んで感心した。

「ヘル・シーって、地獄海中って意味なのか。へええ。」

竜太は顎がはずれたかのように黙り込んだ。

「まだ・・・生きてる。」

八迫が竜太の方に手をおいて言った。

「須藤の名前を使った別の者かもしれないぞ。まあ。そんなに驚かなくても。それより先にミュッキー達だろう。」

そうだったらいいと、何度思ったことか。現実には桐原須藤は魔王の手によって殺されたはずなのに。現在生きているなんて・・・あ。ごめんなさい作者さん。物語のこと少し教えちゃったみたい。ごめんね。

封筒をデイパックにつっこんだ竜太は灰を拾って袋に入れて次の魔鉄機関車を待った。

が、こないので線路を歩いて進むしかなかった。

もうかれこれ二十分は歩いたであろう。竜太は疲れてその場にしゃがみ込んだ。そして八迫が

「あんな所に駅がある。しかもドリンクも売ってるぞ。」

その二言で竜太は自分の体に鞭を打って歩いた。竜太はお子さまのジュースを。八迫はエンブレムブラックコーヒーを飲んだ。七十年変わらぬ味を守り続けるこのコーヒーを。このエンブレムブラックコーヒーは八迫の「お気に入りだと言うことを隠してひっそりと飲む。それが男のコーヒーだ。」昔あこがれていた有名人、夏目大黒氏【去年死亡】がテレビで言ったことだった。それから自分の好きな飲み物はこれです。と胸を張って答えられるようになった。

それを見ていた竜太は自分が急に恥ずかしく思えた。こんなお子さまのジュースを飲んでいる自分と大人のブラックを飲んでいる八迫

暁の番人」

地面が揺れた。そりゃべらぼうに。そして穴があいてそこから見たこともないような血だらけの鎌を持った妖怪が出てきた。

「これが・・・暁の番人。」

八迫は感動してスケッチをしている。いつか八迫が描いたスケッチの数々が図鑑になって書店に並ぶんじゃないかと竜太は一瞬思った。まあ、近い将来、出回るんだけど。

「キカカカカコ。カコケクカコキカ。」

こいつらをコレクションして良いんだな。つまらない奴だったらお前をコレクションするぞ。番人は言った。

「目覚めよ。龍撃手！」

竜太はそう言つて手を床に着けた。すると龍撃手が出てきて暁の番人を切り刻んだ。

「アロロ、アウエルアルアラ。」

これに手、一件落着。とつぶやいてもう早帰っていった。

「キツカキカコツクケ。」

いつか貴様をコレクション。と言つて帰っていった。

八迫はミニニーにいつの間にかかって、のんびりと店内の自動販売機にあつたエンブレムブラックコーヒーをロビーで飲んでいた。

「おい。自由時間もうすぐ終わるぞ。後五分で勝つか負けるかないと。」

そうしないとみんなホテル、ミュラコスタ行っちゃうぞ。そう八迫は言おうとして、口をつぐんだ。

そこにたっていたのは竜太ではなく、ミュッキーであつて、竜太は血だらけで倒れているからであつた。そして竜太は呼吸をしていない。死んでいる。

八迫は長刀をふるつてミュッキーの額に傷を付ける寸前にミュッキィはしゃべつた。

「ちよつとまつて。俺、竜太だから。」

そう言つたミュッキーが竜太、どちらか不明が頭をはずした。そこ

にいたのは竜太だったのだ。

「想像でこんなことも出来るかなあと思って」と言おうとした竜太は最後まで言えずに、変わりに

「想像でこんなことも・・いだよ」

八迫が容赦なく長刀のさやでたたいたからだだった。

「よけいなことすんな。」

そう言っただけでヘル・シーから出ていった。

竜太はミュツキーにあつた能力を解放し、ビンの中に蓄えた。龍魂剣が直つたときに織り込むために。ミュニーのも入れておいた。二つの魂、能力も一緒に・・・。

「解除」

次の瞬間、竜太は学生服に戻っていた。

残りの二日は遊びまくってやる。と心に決めて・・・。

ジェットコースターに乗った瞬間、その気持ちはなくなった。

「嫌ああああああああああああああああああ。」

苦手を体験した竜太はげっそりとしていた。

そこに八迫がバナラソフトを買ってきて片方を竜太に差し出した。

「だからやめロツテ言っただろ。馬鹿。」

それなりに楽しい林間学校だったと後の作文で書き記した。もちろん、一日目は、午後からのことを。

そのころ、集会場では五人の切り裂きジャックが集まっていた。

「桐原須藤が闇の魔にとらわれた。これであいつはこれから抜けた。」

「一人のジャックがつぶやくと、
「新しい切り裂きジャックも出てきたって知ってるか？平田竜太っ
て言うらしい。」
別のジャックが答えた。

「集会を開始する」

終わったと思うと次が始まる。
物語の基本なのかもしれない。

第十六話 平行世界パラレルデユズミー！（後書き）

次回、恐怖の切り裂きジャック集会。

切り裂きジャック同士の戦いが勃発するのかも？

龍魂剣は元に戻るのか？

どうぞ期待！して下さい。

第十七話 集会場鈴鹿山脈（前書き）

竜太 ねえ。ほんとに切り裂きジャックってあんな人たちがばかりなの……。

八迫 五月蠅い。早くこいつらを倒せ。

竜太 他の切り裂きジャックって何でこんな試練ばかりだスノー

第十七話 集会場鈴鹿山脈

第十七話 集会場鈴鹿山脈

暗いくらい部屋にあつた七つの椅子から、一人の名前が書かれていた椅子が消えた。その椅子に書かれていた名前は「桐原須藤」とかかれた椅子だった。

そしてその部屋には、まだ六つの椅子があつた。

その中のひとつに、あの「平田竜太」の名前もあつた。

そしてそれから桐原須藤の椅子のあつた場所に別の切り裂きジャックの椅子が入り、竜太の隣があいた。そしてそこにはまた椅子が入った。

その椅子にも、もちろん名前が入っていた。「栗柄八迫」の文字だった。

「おい。あいつをどうする気だ。殺すのか。それとも……」

背中に参と書かれた長い羽織の服を着た切り裂きジャックが答えた。変わりに壱と書かれた羽織を着た切り裂きジャックは

「殺すか生かすかはここまでの道のりだろう。それに、ここまでに俺たちに使える者達を配布した。ほら。お前の使い魔が倒されたよ。うだぞ。」

須藤に殺されたはずの切り裂きジャックたちは、須藤の力の解放によつてよみがえつたようだ。

その後、林間学校を終えた竜太と八迫は、龍魂剣を直せる刀鍛冶を捜した。何とかとなり異世界で直せたが。そしてその二時間後竜太は八迫に無理矢理鈴鹿山脈に連れてこられた。「切り裂きジャックの集会だ。」と言われて、だ。

手紙が届いたのは三日前。

切り裂きジャック集会のお知らせ

来る20xx年x月x日に三重県にある山脈、鈴鹿山脈で切り裂きジャックの集会を行いたいと思います。安心できないようでしたら、パートナーなどを同行させても結構です。なお、この集会による命の保証はいたしません。また、山脈内では切り裂きジャックに変身できませんことを了解して下さい。切り裂きジャックによる武器以外でしたらお持ちください結構です。

切り裂きジャック代表 中片 亮祐

竜太は行くのを渋ったが八迫が台所にあった刺身用の凶器を持つてにっこりとしたので首を何度も刻々とうなずいたのを今も忘れない。本当に刺される身になってほしいと思う。今度から刺身が食えない。

今、頬から紙で切ったかのような切り傷がいくつもでき、そしてそこから血が出ていたのにもかまわず、竜太はあたりをいた使い魔をばっさり斬っていた。龍魂剣からは豪火龍を出し、頑張っていた。

一人、一体の使い魔を出していたのだが、まだ三合目だった。

「もうすぐだ。」

中片亮祐は赤いフード付きの服から頭を出した。そして腰から、長く鋭い龍魂剣そっくり・いや。全く同じの剣を出した。違うのは色だ。亮祐の剣は黒い色をしていたからであった。

亮祐はゆっくりと剣を電気にかざし、そして手を離れた。

カラー……ン

剣が落ちた音が響いた。四のマークが入った切り裂きジャックが近づいてきた。

「亮祐。大丈夫ですか。これ以上は体に触ります。いったん戻りましょう。それまでは僕が何とかします。本番には必ず呼びますから。」

「ねえ。僕。その機能、どうやって出したの？教えてくれるかなあ。」
すると少年は竜太の方も見ずに言った。

「僕の名前は僕じゃない。一文字悶太だ。僕を拾ってくれた人がつけてくれた誇らしい名前だ。侮辱するな。僕を助けてくれた人は僕に何でもしてくれた。僕はあの人に一生使える。」

そう言っつて悶太は歩いて消えた。一回曲がるとまた顔だけ出てきた。

「ここ、病棟だから静かにしなよ。」
結局、ゲームの出し方は教えてもらえなかった。
「ウツ。。。ゲーム。。。」

八迫も上から落ちてきて、竜太を連れていった。

「あそこが集会場だ。行くぞ。。。」

竜太は集会場の一番お偉いさんが座っている席に座っている人を見て驚いた。

「早く座れ。七番目の切り裂きジャック。」

よく見ると名前の所に代理という文字がでかかど書かれていた。

これから何が出来るか。

そんなこと、その場その場じゃないと、出来ないよ。

第十七話 集会場鈴鹿山脈（後書き）

次回、切り裂きジャック内で内戦勃発！竜太と八迫はこの内覧を止められるのか……。そして壱の切り裂きジャックに刀がのびる。もし、死んだら、次のリーダーは誰なのか……。気になる切り裂きジャック物語、第一シリーズ、完結が迫る？切り裂きジャックをまとめてみました。質問も、どうぞ。

壱 幻想 中片 亮祐

弐 破壊 早田 三崎 桐原須藤との戦闘により殉職

参 災害 諸星 驒平 同上

四 親友 一文字 悶太

五 亡者 桐原 須藤 犯人

六 消滅 茂地 宏平 能力の誤動作により消滅

七 妄想 平田 竜太

竜太 ちなみに、第一シーズンは、三十話くらいらしいから。大丈夫だよ。和呼之さん。

和呼之 わーい。まだまだ書けルー。竜太にあんなこと【試験】やこーんなこと【体育祭】で苦しめれルー。

竜太 第一シーズン、早く終われえー！

第十八話 集会場、崩落！

第十八話 集会場、崩落！

「早く座れ。七の切り裂きジャック、平田竜太。もう集会を始めた。栗柄八迫、早く何とかしろ。」

八迫は頭をぐっと下げていった。

「はい。今すぐに、座ります。」

八迫は竜太の手を引き、座った。七番目の切り裂きジャック平田竜太と書かれた椅子に竜太が。七番目の切り裂きジャックの付き人栗柄八迫と書かれた椅子に栗柄八迫が座った。

「切り裂きジャック集会を開始する。七番目の切り裂きジャック中片亮祐の体調が優れないため、代わりに参番目の切り裂きジャック、一文字悶太が変わりに集会をはじめさせていただきます。まず、はじめの議題は六番目の切り裂きジャック、桐原須藤についてだ。先月のナイフの日を持って桐原須藤は切り裂きジャックからはずれ、闇の魔へとわたりました。これから見かけた者は、速攻に切り裂きジャック本部へと連絡を入れ、そして速やかに……殺せ。とのこと。そして、二つ目の議題は、七人目の切り裂きジャック、平田竜太についてです。」

竜太は冷や汗をかいた。まさか俺が議題になるなんて……。それに気が付きもせずに、悶太は話を続けていく。

「平田竜太を切り裂きジャックからの排除を命じる。皆の者、平田竜太を殺しても良い。ジャックを取り戻した者に、ジャックハンターナイトの称号を与える。……以上、桐原須藤より。」

竜太は驚いた。悶太が言った。次の瞬間、悶太の姿が揺らいだ。

「平田竜太を殺せ。」

全ての切り裂きジャックがおそってきた。

「遅れて御免なさい。参の一文字悶太で……。」

悶太は驚き、そして自分の武器を出した。銃だった。

「銃撃法遠雷」

銃の音が響いた。その銃弾は見事にはずれて、天に向かった。そしてその銃弾は爆発した。雲行きが怪しくなつて、雷が響いた。悶太の声もした。

「早く、七の切り裂きジャック！こつちにきてっ」

そう言つて駆け抜ける中で、叫び声がした。

「あああああああ。」

雷に打たれて死んでいく音だった。

「つち。役に立たない亡者どもめ。」

そう言つて消えていく須藤の姿が目に入った。

八迫と竜太は悶太に続いて、切り裂き病棟へと走った。

付いたところは壱の病室だった。

「ここで何があつたか、説明しよう。まず、切り裂きジャックは、ここにいる僕等以外は、死んだ。．．．いや、殺されたんだ。正確に言つとね。僕は、壱の亮祐が倒れたから、ここに運んだ。それから身の回りのことを一通りしてから行つたらあのざまだ。たぶん、その間に入れ替わつたんだよ。桐原須藤が。」

ガシャン！

「ミツケタ。」

それはぼろぼろになつたゾンビもどきの姿だった。

この世に存在しない物をみた。

それはこの世に存在しないことをしているからなのかもしれない。

第十八話 集会場、崩落！（後書き）

次回、切り裂きジャック達に忍び寄る魔の手！

桐原須藤は竜太達をとことん追いつめる。

そこに助けに来たのは・・・、幽霊？その幽霊が来るとともに気分が悪くなつた竜太。その気分の悪さが表す幽霊の正体とは・・・。こ
うご期待。

第十九話 ビースト・レイク（前書き）

八迫・この戦いの末に、竜太は切り裂きジャックからはずれるなんて、そんなことはあり得ない。

第十九話 ビースト・レイク

第十九話 ビースト・レイク

「うゝあああああああああああああああ」

手を高々と挙げて、振り下ろすゾンビもどき。竜太は当たると思ったその瞬間、ドアから幽霊があらわれ、そして、もどきを捕まえた。

「うっ。気持ち悪い。」

竜太は地面に手をついた。八迫が駆け寄り、壱の切り裂きジャックをつれて逃げようとしたとき、目が開いた。

「いい。自分で歩ける。おろせ。栗柄八迫。」

悶太の目が輝いた。

「亮祐。お目覚めになったのですね。」

「ごほう。がっふあ。」

竜太は気持ちが悪く、うずくまっていた。

「悶太。剣を。」

悶太は、剣を背中後ろに隠した。

「いくらご主人様でも病み上がりでは、無理はさせられません。」

亮祐はにっこり笑って悶太の頭の所までしゃがんで

「お前の銃も渡せ。」

そう言っ奪った。

「^-^@:~:」「^@^ ;-~:~:~:。」@.@」

亮祐は何かつぶやいて、剣と銃をくつつけた。すると、二つがくつき、そして、一つになった。

「秘奥義ビースト・レイク、ここにあり。撃奥義、小勇伝しゆうでん小雨こりゅう」

剣をぐるぐる回す亮祐。その回した中央から、はじっこまで、全てからミクロ単位の小さい刀が出てきて、その一つ一つが知能を持っているかと思うほど正確に、もどきに当たった。

「はえぼげっ」

八迫は気持ちが悪そうな竜太を抱えて、悶太と一緒に逃げた。

「亮祐ー。」

そう言った悶太の手には小さい小太刀が握られていた。その小太刀はひんやりと冷気を放ち、亮祐の元へ飛ばされた。

「サンキュ。悶太。」

そう言った彼の体からは赤い、フード付きの羽織が落ちた。そしてその中にいたのはさほど竜太と変わらない姿の中学生だった。まあ、竜太よりはうん十倍、イケメンだったが……。

「小雨飛礫^{こゆめいりやく}。」

先ほどの技と同じく、剣が飛んでは来るのだが、その刀は、凍り付いており、ターゲットに当たると割れ、剣が刺さり、割れた飛礫でも攻撃できるハイテクな物だった。

竜太は気が付いた。亮祐の手にある重傷の怪我を。そしてそこから今も血が流れていることを。それに気づいた悶太はため息を付き、はなした。

「気づかれたんですね。亮祐は、あの怪我で、命の危機があると行っても過言ではない物なんです。桐原須藤がつけていった、人類最初の呪詛。解き方は……。」

そのときのことフラッシュバックして来た悶太は目に涙を浮かべた。

「この俺を倒せば、呪詛は解ける。そう言い残してあやつはきえたんだ。」

そう言いきった悶太を見た竜太は驚いた。そこに、悶太はおらず、変わりに悶太を捕まえた桐原須藤本人がいたからであった。

「僕のこと覚えてくれてるかい。竜太君。今度こそ君、死んでもらうね。アウシュハルケル・ミキアスリュ」

呪文を唱えた須藤は竜太に手のひらを向け、頭をつかんだ。八迫の背中にいる竜太を。「ア……グアアア。」

そう言った竜太は、意識を失った。

亮祐は、駆けつけてきて須藤を斬りつけた。そして八迫は、思いつきり殴りつけた。悶太は須藤の足の下にいるため、じたばたしている。

「速く逃げな。」

長谷川と狭霧花が現れて、竜太達を逃がしてくれた。

そしてその後、須藤は消えた。

「あつはは。またねえ。」

その後、何とか、八迫は帰路に就き、亮祐と悶太は屋敷にたどり着いた。

竜太は目覚めた。つぎの日の朝。そして、学生服を着て、学校へ行った。

「何これ。だっさい。いらない。」

そう言った竜太はジャックをとり、投げ捨てた。そのまま鞆をとり、学校へ行った。

ジャックは取れない。それが、切り裂きジャックとしての規則。それがはずれた竜太は切り裂きジャックじゃなくなったと言うことをしめしているのだった。

八迫は、基地の奥で、うなだれた。

「あいつはもう、切り裂きジャックじゃないのか。」

八迫は考えた。たぶん、須藤の呪文のせいだろう。そう考えた八迫は亮祐の元へと、一人、歩き出した。

「竜太は伝説の切り裂きジャックなんだ。こんなところではずれるようなメンバーじゃないんだ。絶対に助け出してやるんだ。」

八迫は、歯ぎしりした。

その日、竜太の学校は、テスト期間中だった。

竜太は、頭が頭痛をしているのに、気が付いていなかった。反対に、太陽を浴びているのが、恐ろしく、焼けるように痛むのだった。そ

れは闇の住人からは簡単に抜け出せない・・・そう意味している
のかもしれない。

これから、学業が待っている。

試験を乗り越えるのが、先決なんだと思う。

第十九話 ビースト・レイク（後書き）

次回、切り裂きジャックは殺しません！は、暴走する。竜太は、人を殺しまくる。

第二十話 敵はセンポレア！（前書き）

八迫 この前の前書きは、後書きと併せてスペシャルになる絡まってる。今回は、よく二十回連載できたね。切り裂きジャック謎のスペシャルだからな。カレンダーにジャック記念日って書いておけよ。4月9日のところにな。

第二十話 敵はセンポレア！

新章 七の切り裂きジャックの記憶奪還指令計画！

第二十話 敵はセンポレア

竜太は、手元にあつた紙を見た。そこにかかれていたこと自体、何かなんだか分からなかった。いくらきちんと授業を受けていなかったからとはいえ、見たこともないようなことがかかれていた。その前に、問題が読めない。新しくもなさそうな、中学校じゃ習わないような漢字の文で構成されていたからであつた。しかし、読めないような漢字が入っている問題は、テストには出ない。これは、小学校で習う漢字で出来た問題だつたのだ。それが読めない竜太は、顔から火が出るかと思うほど………。脱落した。

「これ最下位かも……。」

それは前回と同じ様な結果になると言っているような物だつた。そこに突然チヨークが飛んできた。

「そこ。しゃべるな。」

「ハアツ。ハア」

八迫は走っていた。……。間違えた。八迫は飛んでいた。円盤形ジャックにのつて。

着いたところは壱と参の切り裂きジャック、亮祐と悶太の家【屋敷】だつた。

八迫は二人に話した。竜太がジャックをはずしたと。切り裂きジャックであるときは絶対にはずれないと言うあのジャックを。

亮祐は困つた顔をして、質問した。

「おい。どうしたんだ。八迫。」

八迫は、顔を青くして言った。

「桐原須藤………俺の……せいだ。」

そして、それを聞いた亮祐が言った。

「・・・教えてくれ。お前と桐原須藤の間に何があった。子供時代に闇に落ちたとも言われたお前達二人の間に何があったんだ。ジャック本部協会ではいつも言われていたぞ。お前と須藤はここに来るべき存在じゃない。今すぐにでもはずすべきだ。と。何度も、殺されかけてるの、知ってたか。話せ。それから、解決策を考える。」

黙りこくる八迫に亮祐は言った。

「しゃべれ。言わないんだったら帰れ。」

八迫は深呼吸をして、ぽつりぽつりと話し出した。と、同時にあのころの記憶がフラッシュバックしてきた。

「あれは、・・・今から十年前の・・・ことだ。お前も・・・知ってる・・・だろ。俺達・・・三人が・・・学校に通っ・・・てた時のこと・・・だ。」

竜太が幼稚園にも通っていないようなとき、須藤と八迫と亮祐は、切り裂きジャックとなるべく、学校に通っていた仲間だった。須藤は頭が良く、八迫と亮祐は馬鹿で、今にも退学になってもおかしくないような成績だった。それを、須藤が何度と無く助けてくれた。それもこれも須藤が賢かったのも、みんなが寝ているような時間まで毎日のように図書館に通い詰めて、勉強していたからだだった。しかし、それもあるときまで。突然、八迫の才能が開花したのだ。ある日の授業で切り裂きジャックに変身できるジャックを着けて変身したとき、なぜか、八迫は、格段上の切り裂きジャックにまでなっていた。亮祐もが変身できて、須藤は失敗した。そのとき、須藤は何度もつぶやいた。

「僕が切り裂きジャックなんだ。僕が・・・他の奴はみんな僕が斬るんだ。世界を守るんだ。」そして試験の日になって試験を受けた。試験で切り裂きジャックになれるのは毎回、定数が決まっていた。それを知っていた須藤は頑張った。須藤は自信たっぷり望んだ。八迫と亮祐は、やっぱりだめだった。しかしたまたま、三人とも合

格できた。それから、三人は【内二人は仕方ないという顔で】ニコニコしていた。次の日には卒業式が控えている。そして、はれて卒業となった。

八迫と須藤は二人で切り裂きジャックになって初めてのペアを組んだ。そして、初めての冒険に出た。ヘルニアの赤に。そこで、予想もなかった恐ろしい魔獣、サターン・ヒュドラにおそわれたらしい。八迫と須藤は力の限り、戦った。しかし、レベルが違いすぎて命が危なくなつた。その度に須藤が助けてくれた。逆に八迫が助けた。そして、何度も変身が解けてしまった。そのとき、あまりにも使い込みすぎて、須藤のジャックはイカレテしまった。元々ジャックというのは連続で使える、今のような完全な物ではなかったからだそうだ。八迫も何度も助けたのだが、気が付くとそこに須藤の姿は無く、変わりに壊れたジャックがあつた。そのとき突然、八迫は利き手に痛みを感じた。

「貴様のジャックは吾がいただいた……。」
と言う声がしたという。そしてその声は、須藤の物ではなかった。須藤は操られているんだと、何度も何度もそう納得させた。それから八迫は、操られている物を救い出せるという名刀、龍魂剣を求めて、旅をしていて、旅の途中、何度も須藤と戦ったが、救い出せなかった。

そして名刀龍魂剣を手に入れたときには八迫は極度の無茶であまり戦えないようになったため、竜太に託した。そして、いろいろあつて今に至る。

亮祐は、紅茶を一口のみ、はなした。

「竜太を助けるには須藤を倒すしかない。行くぞ。」
そう言つて紅茶を全てのみ、あの羽織を羽織つて、フードをかぶり、出ていった。もう一度入ってきて、言つた。

「場所は、センポレア。名古屋国際空港だ。」
八迫は顔を上に上げ訪ねた。

「なんでセンポレアに……。」

「異空間反応だ。それと、これ、持っていけ。」

そう言つて渡された物は、ジャックだった。色が、少し違うが。

「切り裂きジャックになる物じゃない。それと同等の力を持つ、切り裂き通り魔にはなれるだろう。伝説の切り裂きジャックを助けるために、いざ、センポレアに。」

竜太のテストは、赤点ばかりだった。

「……………」

生徒指導室で竜太は言った。

「僕、勉強きちんとやりますから……。どうかそれだけは。」

その声は涙声だった。

キィイ

生徒指導室のドアが再び開いた。

「先生。」

「ん？今話中だから、待ってくれ。」

「先生。」

何度も声がする。そして先生は、ドアの方に行った。

「ああ。お前か。よし。目的を果たせ。」

そして出ていった。

「ねえ。君、金持つてない。早く出せよ。」

その声の方を見ると、怪物化した山崎やまざきだった。

「スツカカカカカカカ。」

一息ついてから山崎は口を開いた。

「桐原須藤様がお呼びだ。今日から、我らは桐原須藤様の方へつく

ことになったからな。」

そう言つて部屋に入れられたのは縄でぐるぐるの長谷川と狭霧花だった。

「ゆだんしたね？長谷川君。」

「不覚にも。校長。」

「三人まとめて、お土産だあ。」

そう言つた山崎は、三人を担いで、生徒指導室のロッカーを倒し、後ろにあつた謎の扉を開いた。

「桐原様。お届け物です。」

そこは、一ヶ月前に、父親を送つた空港、センポレア国際空港だった。

そして、黒い幕が動いた。

「ご苦労。山崎君。」

「転校当日は失礼いたしました。」

そう言つて頭を深々下げた。

「もう許したつていったらどう。もう良いよ。帰りな。」

「祭に参加したいです。」

「特別許可を出す。学校中のみんなでやれよ。平田竜太、こつちに来い。」

そう言つて手を動かした。初めて呼ばれて時と同じだ。幽霊を使つて僕のことを動かしている。

「まずは貴様から死ね。……。何でそんな考えているような顔をしているんだ？・・・そうか。君には記憶がないんだ。僕がこの間とつたんだね。じゃあ、そこで見てなよ。君の家来どもが来るよ。」

「何のこと？桐原。はなしてよ。」

そう言つて須藤は竜太の頭に手を置いた。

「知っているかい。切り裂きジャックという組織があつてね。その組織の検査は、学力によってきまるんだ。」

そう言いつつ須藤は竜太の頭を締め付けていった。

「切り裂きジャックって何。」

竜太は考えた。薄れてゆく意識の中で……

「須藤！」

扉が開き、入ってきたのは八迫、亮祐、悶太の三人だった。

俺達は、彼を救わなければいけない。

自分を犠牲にしても。

第二十話 敵はセンボレア！（後書き）

物語は急激に速度を上げて、進んでいく。その先にある扉の先には何が待っているのか。それとも扉を開けずに終わるのか。全ては謎に包まれている。それを知る術もない。切り裂きジャックは殺しません！、全二十七話完結予定。

竜太 ーーーーー

須藤 切り裂きジャックの適性検査はこうするんだあー

八迫 須藤。止める。今すぐ止める。

亮祐 何でお前はそんな風になっちまったんだ。戻ってこい。早く。
悶太 こんなに待っている人がいるのに何でも取ってこないんですか。

竜太 ーーーーー

八迫 話がしたい。早くその合格ぎりぎりの物から手を離してこつちを向いてくれ。

須藤 お前達とはなすことなどない。私が戻るとしたら、それは吾の肉体に宿した伝説の怪人、ディグラスの魂が離れるときだ。きさまらにはできないことだがなあ。

竜太 どのドイツか知らないけど、僕は関係ないんで、帰らせてもらいます。さようなら。

悶太 それは貴方の勝手です。でも、待っている人たちのことを少しは考えられないんですか。

亮祐 お前のせいで、こいつがドンだけ傷ついたかわかってんのか。
竜太、こつそり、部屋から出る。

須藤 これで全てを終わらせてやる。ディグラスさま、お力を！

獄王 イオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

須藤 みんなまとめて殺してやる。今度こそ完全なる消滅だああああああああああ

八迫・亮祐・悶太

へんしーん

全員 おおおおおおおおおおおおおおっ！

最終決戦。迫る。

第二十一話 空戦！幼少三人組（前書き）

これまでのあらすじ

超、科学が進んだハイテク世界、ホクロンズー。そこに飛来してきたのは謎の超合金生命体、桐原須藤だった。それをくい止めるべく、伝説の科学者、栗柄八迫はそれに対抗できる超合金生命体平田竜太、中片亮祐、一文字悶太の三体を作り上げる。地球を侵略しにきた超合金生命体、桐原須藤と、地球防衛最終ラインの三人組は地球を守りきれぬのか！新感覚ロボットテレビ、トリヤンスフォーミヤール I R A T A

地球に隠された本当の宝を、龍魂剣を守り抜けるのか……。見たいときに全国一斉ロードショー予定なし

今回の作品「とらんすふおつまあぁ」

第二十一話 空戦！幼少三人組

第二十一話 空戦！幼少三人集

何でか書こうと思ったので、いきなり登場人物

平田竜太……自覚していないが、伝説の切り裂きジャック。
栗柄八迫……竜太の師匠教師。須藤と、亮祐とは幼なじみ。
中片亮祐……壱の切り裂きジャック。伝説の剣を操る。

一文字悶太……亮祐に拾われた子供。亮祐の剣と合体できる銃
を持つ。

桐原須藤……闇の魔に落ちた切り裂きジャック。人間が悪だ
と思い、消そうとする。

デイグラサス……須藤の体に宿る魔王。別の名を皇帝という。

「須藤……。」

八迫は悲しみの声を上げて、須藤のほうにちか付いていった。須藤
は手を向けて念力を送った。

「帰れ。」

八迫はそれを受け取った。そして、手を向けて、返した。

「俺が悪いんだ。俺を好きにすればいい。その変わり、世界にては
出さな。」

須藤は霊を集めて、魔剣を作り出し、八迫の首に当てた。

「俺は俺の道に行く。お前の指図は受けない。俺は俺でお前じゃな
い。お前はお前で俺じゃない。放っておけ。」

そして、峰打ちをし、八迫の顎をあげて、こかした。

「須藤。」

八迫は渋々長刀を出し、須藤の方に向けた。

「前にお前と戦ったときは、お前を倒したら戻ってくると思って。
でもお前は戻ってこない。殺すしかないのか。殺したくはない。早

く、こつちに戻ってきてくれよ。」

「それは無駄だ。」

亮祐は、やつと口を開いた。

「なあ。須藤……。戻ろうぜ。」

悶太も言った。

「こんな待っててくれる人たちがいながら何で帰らないんですか。」

そう言った二人を須藤はにらみ、剣を持っていない方の手を向けた。「黙れ。」

そう言いながら放たれた衝撃波は、二人を巻き込み、気絶させた。

二人は、武器を持ち直し、ぶつけ合った。それは何度もぶつかりあい、火花が散っているのだった。そのうちに八迫が押されて、地面が下がった。最上階から、三階へ。そして二階へ。そして、その二階は、誰にも見えない特殊な部屋だった。二人はそこで死力を尽くして戦った。

それを悶太はみていた。二人は火花を散らし、二人が見えなくなるほど沢山の火花が。竜太はいつのまにかもどってきていて、その激闘を眊秒も目を離さずに、見ていた。

亮祐は夢を見た。それは三人で過ごした、短くも長い楽しい学生生活の一部だった。そして、リアルに再現された須藤の裏切りに亮祐はその一撃一撃を防ぐことが出来なかった。友達を倒すことなんて出来ない。攻撃するなんて。そしてそのまま、夢は、儚く終わった。そしてその後始まったのは、桐原須藤が亮祐と八迫をただただ一方的に攻撃する映像だった。

そして、いつの間にか、二人は立ちつくした。立ちつくし、剣をかまえ、振り切った。そして、先に倒れたのは、栗柄八迫だった。そして、斬りつけられた胸に目をやり、倒れた。一方で、須藤は、剣を杖代わりにしてやつとの事だっている。呼吸は乱れて、どんど

ん血液は減っていく。二人ともかろうじて気力で生きているかのようだった。ここが元は空港だったなんて誰が信じるだろうか。でも、この戦いは現に行われているのだから間違いなく、正しいのだった。須藤はため息を付いてからゆっくりと目を上に向けた。口からは、大量の血。ゼイゼイという呼吸の音は次第に弱まっていく。死にかけていた。ここまで持っていた気力も底をついてきているかのようだった。しかし、須藤は笑った。俺が勝ったと確信した笑みだった。

「俺の・・・勝ちだ。」

八迫は、重々しく、天を見たまま口を開いた。

「俺は、お前がやっていることが正しいのか分からない。今から全ての制裁をする。古くより伝わる幻想の音よ。我らの罪を等しく無にしたまえ。」

須藤は八迫がまだ生きていることに驚きつつも笑っていった。

「俺がそんなことで死ぬとでも？」

八迫はゆっくりと口を開く、返事をした。その声も死にかけていた。

「お前でもこれからは、逃げることは出来ないよ。一緒に行こう。」

キーリ。」

須藤は顔を怒らせていった。それは死にかけている人の顔ではなかった。

「その名前で呼ぶな！私は獄王に身をゆだねたのだ。おろかな人間とは、別の新種族なのだ！」

「俺は、国王に身をゆだねた。天国の王と地獄の王。決着が付くと良いけど。」

そう言った八迫は、手を地面に弱々しくおいた。亮祐は、やっと目が覚めた。須藤の最後の一撃によって気を失っていたからだ。そして、目の前の激闘を見て、啞然とした。そして、身を落とすかのようのにめり込んでみている竜太を見つけた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

竜太は、記憶が無くても、この戦いの意味を分かっているらしい。

亮祐は悶太を探し、きよろきよろした。

「亮祐。目が覚めたの？。危険です。安全なところに・・・。」
「今、この二人があれを決めたとなると、世界中どこにいても危険だぞ。あいつはあの切り裂きジャックの亡霊を身にまとった。八迫は命がけでそれを止めようとしている。・・・。そうか。獄王の正体は切り裂きジャック達の亡霊の集合体なのか・・・。そして、俺達がいるこれも、あの切り裂きジャックが直々に作った・・・。だとすれば、あいつは、須藤ををはじめからねらってジャックを壊したというのか。執念深さも一番なのか。」
竜太は、それをずっと見ていた。そしてある一言を漏らした。

「八・・・迫。」

知るはずもない記憶から消されたその言葉を言った後、竜太は自分の手を見た。何を言っているんだ・・・。と言っているような顔だった。それをつぶやいたとたんに、竜太に記憶が戻った。「自分」に戻った竜太は、そこで行われていることに気づいて変身しようとして、ジャックを掲げた。そこにジャックがあることが当たり前だと信じて。

「へんしーん」

しかし、ジャックは記憶がないうちにはずしたために、変身できない。亮祐は、自分のジャックを無理矢理はずした。はずれない物を無理矢理はずしたために、ベルトの部分からは、煙が出ていた。そしてそれを竜太の方に投げつけると、そこに光が集まった。どこから集まったその光は、六色で、きれいで、鮮やかで、一瞬にして消えた。ジャックの中に消えたのだ。竜太はそれを無意識に受け取り、掲げた。そして、一言つぶやいた。それと同時に、ジャックも、大いなる力でも受けたかのように、変わった。それにとまどい、いったんは言うことを中止した竜太だったが、もう一度ジャックを見て、再開した。

「全てを無に帰そうとするならば、吾はそれを全て押し返し、貴様の存在だけを無に帰して見せようぞ。」
それは、世界で初めての切り裂きジャックが世に残した言葉だった。

竜太はそれを知るはずもない。ということは、伝説の切り裂きジャックの魂は本物だったんだ。そして、今から始まるのは、陸と空と海の死闘。勝った物が竜太でなければ、この戦い、宇宙がなくなる。亮祐は、唇をきつくかみすぎて、血が流れたのにもかまわず噛んでいた。

悶太はその額に汗を一筋ながし、息をのんで見守った。

次の瞬間、全てが真っ白になり、そこには切り裂きジャックがいた。「全世界共通の平和を守る、最後の望み、全切り裂きジャックの力を借りて、世界を守る七番目の切り裂きジャック、平田竜太だいま参上」

そう言っただけで想像した物を龍魂剣にぶつけた。それは、戦国時代の兜のような物が付き、爆炎に包まれた。

「桐原須藤、これまで犯した罪、その身を持って償ってもらおうぞ。

豪火龍、今ここに出陣し、我が剣にその紅蓮の身をゆだねよ。」

そして、竜太の剣から、煙が出た。シュウシュウという煙だった。

それは、暖かく、竜太を包んで、出てきた。

「久しぶりです。ご主人様。今回もあいつを倒すおつもりですか。」

それは、桐原須藤と戦ったときに来た、あいつだった。そしてそれは高らかに、空に炎を吹いた。

「ラストステージ、開始です。」

亮祐と悶太は暖かい光に包まれた。竜太が二人を守ってくれているからだった。亮祐はその中で、ビースト・レイクを組み立てていた。今回は、緊張でなかなかうまく組み立てられない亮祐を見た悶太はやさしく、新しい力になると言われていた最終兵器を、そこにこっそりと付け足した。そしてつぶやいた。

「これが、最後の切り裂きジャックとしての役目。」

亮祐はやっと組み立てて、言った。

「ファイナル・レイク。」

それは悶太入れた物が何か知っている顔だった。そしてそれを投げた。

「切り裂きジャック、これを使え。」
それは、きれいな円を描き、飛んでいった。そして、綺麗に竜太の手に収まった。

それを受け取った竜太は、二人の方を向いて、ウンツとつなずき、穴の中に落ちていった。

ずっとずっと落ちていく。

ずっと・・・ずっと奥深く・・・。

粒子ごと分解されるかのように深く深く・・・。

ここが何階かも分からない。

そして気が付いた。ここに二人はいて、ずっとこんな中にひとりぼっちでいるんだ・・・と

竜太は心に決めた。二人を助け出す。と、心に。

二人は、国王と獄王を身に宿し、戦っていた。
それはまるで獣のようだった。

帰ってきた物は、自分のやることを知る。
それは、自分のしなければいけないことだから。

「八迫！」

竜太は、八迫に向かって、言葉を投げた。

投げた言葉は、八迫を通り越して、そしてそのまま、壁に当たり、
反響して、地上へと戻っていく。

八迫は、こちらを見ようともしない……。

第二十一話 空戦！幼少三人組（後書き）

竜太 これで終わりにしてやるっ。

八迫・須藤 ウウウウウウウウ

竜太 伝説抜刀、金剛柱三日月！

悶太

亮祐

地底奥深く、パンドラの箱が空き始めた。その中にいた生命体が動き出した。

次回、激突の空港編、クライマックス！桐原須藤を操る皇帝と八迫の一騎打ち？

完結まで後、六話予定！

第二十二話 獄王、国王地上へ！（前書き）

これまでのあらすじ

ひよんなことからベルトを手に入れた主人公、竜太。しかしそのベルトが全ての元凶を呼ぶ元締めだった。

一方、そのころ須藤も同じくしてベルトを手にした。しかしそのベルトが全ての元凶を呼ぶ元締めだった。

亮祐も、また、ベルトを手にした一人だった。

しかしそのベルトが全ての元凶を呼ぶ元締めだった。

三人が同じ地上、同じ場所にそろうとき、元凶が元凶を呼び、呼び尽くした。その元凶とはどこから来る、地球を脅かす存在、アンデットだったのだ。三本のベルトを手にした三人は、ベルトを使い、アンデットを倒すことになった。果たしてアンデットとは誰が何の目的でなぜ送ってきているのか！脚本はあの切り裂きジャックは殺しません！の作者。三本のベルトが起こす驚愕のラストとは！アンデットを出し尽くした元締めが、この地球に乗り込んでくる……。それと同時にあらわれる新たな敵、デュグガンこの地球始まって以来、初めての恐ろしいホラーアドベンチャーライダーストーリー、仮面飛蝗ジャック

今夏、朝八時よりスタート

それにもとつぎ昨年大ヒットを起こした

劇場版仮面飛蝗ジャック

（始まりは終わりを告げる鐘）

を来週の火曜ロードでシヨード地上波初放送。

仮面飛蝗ジャックの原点はここにある……。

また、この放送を記念して、最後まで読んでくれた方に限り、特性仮面飛蝗グツアルティメットを特別プレゼント！応募は番組の最後で。では、これまでの仮面飛蝗ジャックの放送禁止シーン、全

て公開してしまおう。まずはここから。

仮面ライダーでした

第二十二話 獄王、国王地上へ！

第二十二話 獄王、国王地上へ！

竜太は二人を見つけた。二人は争っている。このまま、二人は獄王と国王を身宿したまま戦い、身が滅びるのを待つだけなんだろうか。そう思うと竜太背中に悪寒が走った。そうして思いっきり龍魂剣を振りかざし、二人の間に大きな炎の壁を作り出した。二人が同時にこつちを向いた。そして口を大きく開け、ありったけのエネルギーを出した。それを竜太は先ほど亮祐に渡された物で斬った。そしてそのまま剣に宿し、振った。

「ファイナル・レイク！ブレイカー」

二人は見事によけた。そして空中に浮き、竜太の背中を八迫が、胸を須藤が切り裂いた。竜太は一瞬、何が起きたか分からなかった。次の瞬間、剣を持ち直し、横に一回転した。しかしそれは当たらなかった。今度は盾に回転し、桐原須藤をねらって斬りかかった。

すくと八迫が竜太に乗っかり、玉回しのようにして、遊び、地面にたたきつけた。竜太はとっさに剣を地面にさして、激突を免れた。そして、八迫の方に向き直ると想像した檻をかぶせた。しかしそれを八迫は竜太に向かって投げ返した。竜太はあまりの出来事に身動きがとれなかった。そして、檻の中に入ってしまった。竜太は想像をかき消した。すると当然檻は消え、竜太は脱獄した。

近くに寄ってきていた須藤はびっくりして足がすくんでいる。それを見逃さずに、竜太は一方的に攻撃して須藤を捕まえた。想像した絶対にほどけない縄でぐるぐる巻きにした。呼吸が出来ていないかもしれない。しかし、ほおっておいた。どうせ後数分でかたを付けるつもりだ。

次は八迫だ。

しかし、八迫を探したが見あたらない。何度もぐるぐると見渡して

いないとわかり、下を向いた。すると自分の影が奇妙に動いている。ブレイクダンスをしているようだ。竜太は影の動きと同じ動きをさせられた。

ブレイクダンスが終わると今度は竜太を殺しにかかった。一度はしまつておいた剣を鞘から抜き、竜太の首へ。そしてそのまま一気にとどめを刺した……。なんてグロテスクなことはせずに、首に当たて、竜太がびくびくしている様子を楽しんでいた。何度も首からはなし、ぎりぎりのところで止める。首には何度も冷たい物が突く。それと同時に起こる冷たい感覚。八迫はそれにあきたらしく、次は自分で自分の首を絞めさせた。竜太の口から声が漏れる。

「ガツ。」

それが何十秒も続いた。一度はなしたすきを見て竜太は鞘で思いつきりその影をたたいた。すると八迫は出てきた。そこに縄を掛けて縛り上げた。

二人を縛り上げた竜太は八迫を須藤の隣に運び、技を決めかかった。

「金剛柱三日月斬り」

そう言つて振り切つた剣に当たつた二人の体から、何かが出てきた。それは口からも和も和と出てきて、物語に登場するような魔王と天界の王の姿になった。その煙が出てくると同時に二人は倒れた。体から出てきたそれは、同時に言つた。

「もう、この体は使えん。ニヤホロメニヤホロメエー」

須藤の体から出てきた獄王もとい、皇帝は笑つた。

「この体もう駄目メジャ。最後の償いを果たしたこの二人はもう裁かれた。これにて終幕。ジャキジャキジャキジャキー。」

八迫の体から出てきた天国の王、国王も言つた。そしてそれまで転成していた主の方を見ていた二人は竜太の方を向き、同時に言つた。

「次の転成はお前だ。」

そう言つて襲いかかつてきた。竜太は疲れ切つた体に鞭を強引に振り、かまえた。しかし、力は限界を超えていて、竜太は倒れ込んでしまった。そのまま、二人の王が強引に体に入った。この場所から

出ると同時に二人もつまんで持った。剣を鞘にしまい、地上に出たきた。

地上で帰りを待っていた亮祐と悶太は出てきた竜太を見て近づいた。「俺は貴様らなど知らぬ……。消え去れ。」

そう言つて八迫と須藤を投げ飛ばした。亮祐は悶太を突き飛ばし、自分だけが飛ばされた。再びたつた亮祐は確信した。

「獄王、国王。今すぐその体から出てくるんだ。」
「そうはいかないねえ。」

ドアがぱんつと開き現れた一人の熟女と一人の老人は言った「隣の部屋で忘れられていた惨めな二人です。お土産になつていたことを思い出して下さい」。一人の熟女は作者に向かつて。一人の老人は亮祐に向かつて。

「誰が熟女よ！立派なレディーよ！三十代だもの！」

「皇帝様はあの体を選ばれた。お前に決めつける権利などはないんだ。」

狭霧花がしゃべり終えたとたんに時空間の裂け目が出来た。そこから出てきた時空管理人、デイスティイは言った。

「皇帝を復活させるなど……。なんてことを。時空を歪ませて出来たこいつだけは絶対に復活を阻止しなければいけないのに……。」

長谷川が言った。

「じゃあ、歪ませた私たちをどうするの？」

得意の必殺技で時空間管理人にアタックした。しかし、時空間管理人には通用しなかった。

「一番の犯人である長谷川律子、及びに展部中学校にいる裏教育委員会会の者、全てを裂け目に放り込み、抹消されるしかない。罪には罰を。だからな。」

そう言つてデイスティニーは長谷川達を時空間に入れ、学校の方に向かった。

遺言となった長谷川の最後の言葉は、

「皇帝様、世界を破滅に。そして私にすてきな彼氏をおおおおお
おおおおお。」

無理な願いだ。それはさておき狭霧花は、

「ジアルサカンド様、この場にあらわれ、皇帝様にお力をお貸し下
さい。」

狭霧花の家の守り神の名を呼んで、消えた。

亮祐は、切り裂きジャックになれる物を渡してしまっていたし、
武器もない。悶太は悩んだ。この場を解決させるにはどうしたらいい
のかを。思いつかない。

「今回の期末テストにぼろ負けした、愛と正義と爆笑の美少女戦士、
理緒様、参上—————。テストに負けた恨みでぼっこぼ
こにしてやるっ。」

ガラスを派手に破ってあらわれた理緒はそう言って地面に着地した。
このヒーローはテストがあるときにしか現れないなど、悶太は脳味
噌の片隅で考えてしまった。

せっかく思いつきかけていたいいアイデアも消えてしまったのもそ
のときだった。

ここにあらわれ、戦ってくれる人は、三人しかいない。ここには六
人いるのに一人は今回の首謀者で、一人は戦い、傷ついて、一人は
体に乗っ取られた。もしかしたら、もう、地球は終わりかもしれない。
い。

僕が思うご主人様は限界を超えている。

僕が、守らなければいけないんだ。

誰も、助けしてくれる人は、もういないから……。

浅尾暁、大川典子、朝霧慎介。三人はようやく助けられて、手にした時計を見つめた。それは、時計のように見えて、時計ではなかった。本当の目的は……。

展部中学校の職員室が光り出した。そして、窓から三つの光が飛び出した。その光は、センポレアではない方向に行った。途中で道を間違えたことに気が付いて、引き返してセンポレアの方に向かった。

これで、戦える人は六人になった。

第二十二話 獄王、国王地上へ！（後書き）

竜太【獄王】 私がこの世を支配する。

竜太【国王】 銀河系をも破戒し尽くす。

須藤

八迫

理緒 くの戦士、理緒様がお前を倒す。かかってこい！

亮祐 よし。みんなでこいつをくい止めるんだ。そして、世界を救うんだ。

悶太 はい。ご主人様。こいつを倒して、竜太殿を解放しましょう

浅尾 こんにちは。社会科担当の謎の教師です。

大川 右に同じ、数学か担当です。

朝霧 国語か担当だ。そこ。私語は慎め。そして、人の体から離れる。

亮祐 あなたは？

浅尾 次回のお楽しみだ。勘が良くても無くてもみなさんおわかりだろうがな。

理緒 そんなことよりこいつを倒すぞ。

悶太 みなさん、こいつを倒しましょう！

竜太【獄王、国王】

貴様ら纏めて殺してくれる。まとめてかかってこい全てを無くしてくれるわ！

最後の桐原須藤戦、開幕。

あと五話予定！

八迫 まて。そいつは俺が倒す・・・。

亮祐 八迫！まだ・・・

八迫 駄目な弟子の面倒を見るのが、師匠の役目だ。俺がけりを付けてやる。

全員 まて！栗柄

八迫 ・・・・

第二十三話 本当の切り裂きジャック（前書き）

作者から、完結直前の一言。

切り裂きジャックは殺しません！何があっても殺しません！絶対に殺しません！そして、次回、切り裂きジャックは殺しません！は最終回を迎えることになりました。でも、次の話で完結ではないんです。完結じゃない最終回、お楽しみにして待っていて下さい。

第二十三話 本当の切り裂きジャック

第二十三話 本当の切り裂きジャック

「もうすぐ、センポレアだ。」

そう言った浅尾先生は、しみじみと言った。

「あのとき、変わり身を使ったの怒ってるかなあ。八迫君。」

大川先生も、眼鏡を手で、ぐいぐいとあげていった。

「もちろんです。」

朝霧先生も真顔でうなずく。

「あんなところで使おうって言ったのはお前だから、責任もてよ。」

二人から一気に非難を浴びた浅尾先生はため息を付き、

「ラーメンで許してくれるかなあ。」

財布の中の合計を数えながら言う。

結果、全員にぎりぎりおこれるぐらいはあった。

「俺、漬け麺にトッピング卵とアイス付きで。」

「私はヘルシーなのにこってり。何なのよこのラーメンは！にスー

パーで買ったネギ、丸ごと一本付きで。」

浅尾先生は顎がはずれたかと思った。

「おい。朝霧。いくら何でも、行き過ぎだろう。それに大川。何で

ネギ丸ごとなんだよ。どんぶりから出るだろう。いくら何でも。」

「じゃ、替え玉は自分で買うから。」

「ネギを丸ごと。が自分のラーメンポリシーです。これだけは譲れ

ませんので。」

そう言った二人は浅尾先生をおいて、飛んでいく。

浅尾は財布の中をもう一度見ると、目頭が塗れているのが不思議だった。なぜだろう。

センポレアについて、缶コーヒをのんきにのみ、浅尾を待つ朝霧と大川は、いつの間にか、ポテトまで、ちゃっかりと用意していた。

そして、やっと突入する時間が来た。

同時刻、八迫は、夢を見た。桐原須藤と、死にかけている自分を助けてくれている、弟子。それは夢だろうと思い、そのまま次に行こうとした。すると、白い煙が人の大きさになって、自分と須藤の前に立ちふさがり、竜太の方を向いていつている。

「次はお前に寄生する。」

そんな感じのことを言っている。竜太はよく戦った。でも、魂はとられた。あの竜太の形をした奴の中身は竜太ではない。獄王と国王だ。そしてそのまま、自分と八迫は連れ去られ、地上に出る。そして、みんなが見ている。自分はどうなった。

分からない。

分からない。

亮祐が、何か言っている。聞こえない。もう少し大きな声で言つてよ。亮祐。

「こいつを倒して、竜太を助けるんだ。」

ああ。知っているのか。でもこいつは百戦錬磨の怪物。しかもそれが二人いるから、に百戦錬磨の怪物だ。切り裂きジャックが全員そろわなきゃ、そいつには勝てない。長谷川がとらえているあの教師達が助からないと、ここでみんな、死ぬ。

死ぬ。

死ぬ。

死ぬ。

死ぬ。

死ぬ。

死ぬ。

死ぬ。

死ぬ。

死ぬ。

死にたくない。

そう思った八迫は、懸命に夢から出ようと思った。八迫の脳内に、須藤が入ってきた。

「僕は、まだあきらめていない。夢の中で、貴様を消滅させてやる。死ぬ。栗柄八迫！」

須藤が思いつきり拳をふるう。でも自分は、動けない。殴られても、殴られても、動けない。よく見ると足は、無かった。地獄の番犬、ケルベロスの親戚、ケルベルロロススが、ゆっくりと、自分の足をかみ砕いていく。もう動けない。下半身はもう無い。上半身も、じき無くなる。最初から感覚はない。須藤は勝ち誇った笑みで意味ありげに言った。

「お前の死は、俺の至福。ケルベルロロスは俺の十八番。お前はもう、死んでいる。どっかの漫画の主人公じゃないけどな・・・。」
そして、全てが食べられていた。

次に目覚めたのは、須藤が、切り裂きジャックから抜けると言うとき止めようとした、不滅の不幸丘。

そこにたっていたのは桐原須藤。

「何のために遅れてきた。宮本武蔵気取りか。巖流島の戦いじゃないんだ。遅れてき手も何が変わるわけでもなかるうに。お前が死ぬ運命なんだ。」

そう言つて剣をかまえた。学校の、訓練生用の剣ではなく真剣だった。須藤は俺を殺そうとしている。本気で。そう思うと、動けなかった。そのときも、やっぱりケルベルロススがいたのかもしれない。峰打ちで見逃された俺。何のために。亮祐に見つけてもらったとき、自分は、三日間、気絶していた。次に目覚めたのは病棟。夜中、隣のベットからの笑い声。

「貴様はもうすぐ死ぬんだ。栗柄八迫。」

そう言い終わるか終わらないかと言つところだカーテンを開け、入ってきた須藤。今、須藤は俺の記憶を支配している。そして、永遠にこの夢は覚めることがない。分かるんだ。あいつの執念深さは、底を知らない。それに、

「貴様の意識を一生この空間からだしはしない。逃がしはしない。するとしたら貴様が死んだときだけだ。」

と最初に言われたからだ。いつそ、とつとと死にたいが、この夢からは逃れられないんだろう。

そう思つて耐えようと決意した頃、現実世界では切り裂きジャックがそろつたところだった。頑張つてくい止めようとしていたのだが、どうにもうまくゆかない。このままだと死んでしまふと言つところに駆けつけてくれたのがあの三人だった。

いきなりの出来事だった。竜太の体を締め付けて、そして、口に浄化塩を押し込む三人の姿。

しかし聞かなくて、手こずる三人に、亮祐が質問した。

「どちら様ですか。」

大川先生が答えた。

「この竜太君の学校の教師、切り裂きジャックよ。」

そしてあちらが朝霧先生、浅尾先生つてなっているの。と仕事から離れて教えてくれた。

しかし離れてしまったおかげで、竜太は暴れ出した。

「吾はこの銀河を支配するのだ。こんなところで貴様らなんぞに殺されるか。」

そして地獄から呼んだ炎を吐く黒火大蜥蜴くろびおおとかけで、自分を火炎壁ファイアーウォールで包んで、身を隠した。

そのとき、後ろから一人、立ち上がったボロボロの八迫は、剣をかまえた。ほとんどが欠けている役にたたなそうな剣を。亮祐はそれに気が付いて、止めようとしたが、それをかいくぐり竜太の元へと行った。そのまま斬りかかろうとする八迫を理緒は、悶太と二人係で押さえつけた。しかし、八迫は乱暴に振り払って、竜太の元へと行った。浅尾暁は聞いた。

「良いのか。死ぬかもしれないんだぞ。弟子が。」

八迫は鼻で笑っていった。

「それで死ぬならそれまでの奴にこいつのことを任せていたんだ。その償いをするようになって思ったただけだ。死んだら、俺が殺してやる。困難で死んだ、自分の弟子を。」

そう言つて走つていき、思いつきり、振り下ろした。それは、見事によけられ、殴られた。殴られても、殴られても、機会をうかがっていた。助け出す機会。しかし、待ちきれなくなった八迫は怒鳴つた。

「静かにしている！大馬鹿者が！」

それに吃驚した竜太は、一瞬止まった。そしてそのまま、動かなくなった。八迫は、斬りつけた。しかし、その剣はだぶって見えた。八迫はいきなり剣の斬る方向を変えた。背後にいる桐原須藤に向かつて。

「おい。貴様。もう容赦はしない。弟子を傷つけるなら、本気で叩き斬るぞ。」

「はあ。はあ。僕の呪縛から逃げた君には、ハア……ハア……

死んでもらいたいんだ。どうしても。死んでくれないんだったら、ハア・僕は、君を一番苦しませる方法を探る。栗柄八迫。君を殺さない変わりにこつちを殺すんだ。ハアア……。」

そう言つて一度は止められた剣をもう一度振りかざし、斬りつけようとした。しかし、それはうまくいかなかった。もう一度八迫が止めたからだつた。そして、他の奴はどうしたのかと思つて背後を見ると、誰もいなかった。

「ああ。他の奴？あんな奴ら、僕が異世界に送っちゃった。ドラゴンなんかがうようよいる、そんな恐ろしい世界、切り裂きジャックが作り出す未来の世界に。これで分かったかい？このまま人間がいても、ドラゴンなんて危なっかしい物を作つてこの地球の命を脅かすだけだ。だったらみんなして死ねばいい。さあ。君も、そのお友達と仲良く連れていつてあげる。魔王がひしめくワンダーランドに……何のつもりだ。」

八迫は、殺気だつた目で須藤をにらみつけ、言った。

「少しはその口、閉じれんのか。」

そう言つて八迫は、剣の峰で、須藤を押しした。

「金剛柱三日月。」

聞き慣れた声が、そう言った。そしてその聞き慣れた声によって放たれた一筋の柱は、八迫、そして須藤、二人纏めて冥界へと送ろうとしている様な威力であつた。

「龍魂剣基本技長刀。」

そう言つと剣を長刀に換えて、振り回した。仕方が無く、竜太をいったん倒すために須藤はぼそりと言つた。

「こいつを倒すだけの間、貴様とタッグをくんでやる。貴様を倒すためにじゃまなこいつをな。」

八迫は返事をした。

「、殺すなよ。半殺しまでが限度だ。」

そう言つと剣を同時にかまえて、足と足をあわせて同時に蹴り、そしてそのまま飛び上がり、竜太の方に向かった。二本の白銀のよう

な剣は見事に竜太の体をしとめた。そしてその体からは二筋の煙が出てきた。八迫は、国王だと思われる方に歩み寄っていった。

「やっぱりお前なんか頼むより、自分でやったほうが手っ取り早かった切り。」

須藤も獄王に歩み寄って出来る限りの笑みを作っていた。

「やっぱり、不要な物には手を出さない方がいいですね。抜刀斬り。」

二筋の煙は口をそろえていった。

「人間って奴だけは信用してはいけない」

そう言つて帰つていった。

残る竜太だが、すやすやち寢息を立てていたのだ問題はないと見ると、須藤の方を見た。

八迫は、須藤の腹をめがけて、斬りかかった。

須藤は八迫の脳天をめがけて、斬りかかった。

「須藤」！

「八迫」！

その二人はまるで二筋の光のように、光のようなやさで飛んでいった。

先に膝をついたのは……。

俺達は、ここから一步も動かない。

いいや、動けないんだ。終わるまでは。

第二十三話 本当の切り裂きジャック（後書き）

作者 つまらなかつたでしょう。物足りなかつたでしょう。泣く泣く、削られたのがそこだつたんです。

作者 次回、完結する切り裂きジャックは、全員登場の予定の大ボリュームでお送りする予定。

作者 なので、どうか、待っていて下さい。

作者 なんて書きながらも次回の執筆を投稿後にしちやつたりするんですけれども。

作者 切り裂きジャックは殺しません！謎の学生竜太君にはですね。作者 全シリーズを総まとめにした形でなっていますんで。

作者 だって、いちいち切り裂きジャックなんて探すの面倒ですよ。

作者 だから、シリーズの間にですね。

作者 予告と言うつので挟もうかと思つてたりするぐらい中途半端かもしれないんですから。

とりあえず、一シリーズ、次回で完結です。

第二十四話 最後の幕開け（前書き）

今回の話を持ちまして、この切り裂きジャックは殺しません！第一シリーズは完結となります。ほとんどが、桐原須藤によって奪われてしまったわけですが・・・。

しかし、次の第二シリーズでは、竜太達がゲームをしているのか！と思うほどすごく大変なことになります。お楽しみに。しばしの別れです・・・。

では気を取り直して書いてみたいと思います。この小説の執筆に当たってですね。楽しかったんですよ。最初は一人も読んでくれなかったこんな未熟な作者が書く未熟な物語を、今ではこんなに沢山の人が読んでくれてるんですから。

みなさん。しばらくの間、切り裂きジャックを執筆しません。別の物語も控えている物ですから。出来れば、今度はそちらを読んでくださると嬉しいです。一ヶ月もしないうちに帰ってきますから安心して下さい。

みなさん！こんな未熟な作者のつまらない物語を読んでくれてありがとうございます。次回の第二シリーズまで、しばしの別れです！ありがとうございました。

第二十四話 最後の幕開け

切り裂きジャックは殺しません！第一シリーズ完結！感動の嵐を呼ぶ【呼んでほしい】最終回の

第二十四話 最後の幕開け

膝をついたのは、八迫だった。八迫は、須藤に向かって死力を尽くした剣を投げつけた。その剣は深々と須藤の腹に食い込んだ。今度こそ勝った。と確信していて気を抜いていた須藤は、避けられなかった。刺さった腹を見て、そして八迫を見た。

「ガ……アキサマ……。はかつ……」

そしてその場にひざまずき、須藤は息絶えた。息絶えたはずの須藤はなぜかガパツと口を開けた、その場にひざまずき、そしてそのまま、口から何かを吐き出した。そのまま、砂になり、どこからか吹いてきた風で飛ばされた。

その砂のあった場所が黒く、どす黒くなっている。そこにはどす黒い玉があった。八迫は、須藤の剣が落ちているのに気が付いた。地獄の剣。それを守っているケルベルロロススは、八迫に向かって吠えた。八迫は、須藤が最後に消えた後に、転がっていった剣を拾い上げ、ケルベルロロススの方に向かって思いつき振り下ろした。

その剣は冷気を帯びた悲しげな一太刀だった。ケルベルロロススは、「クーン。キューン」

と言って消えていった。八迫は、須藤のいたところによたよたと近づいていき、須藤の遺品である剣を、その黒くなっている場所に突き刺した。

するとあたりがミルク色のような、練乳色のようなもやもやとした煙が広がった。その煙から必死の思い出でた八迫は、下がしめつていない砂とわかり、その砂の上に腰を下ろした。

須藤との思い出に、八迫はひたつた。初めて友達になり、遊んだあ

の日の一言一句。忘れられない。須藤のジャック抜け。呼び止められなかった自分を中傷した。あのとき止めていれば、今、ここにいる自分はおらず、ジャック本部で須藤と一緒にくだらない話をしていたんじゃないだろうか。亮祐が後からはいつてきて、三人で話す。そんなことをしみじみと考えていた。そして、いつの間にか目を開けた竜太が八迫の隣に座り、剣を見ていた。須藤の剣を。そしてそのまま、遠く遠くに投げた。放射線を描くかのように綺麗な円を描き、あがって、落ちていく。龍魂剣から出す龍は華麗に出てきて空に向かつていった。いつの間にか出来た海に目をとられていた。初めてみる大きな水のたまり場に。そして、ある物が流れてきているのに気が付いた。

あわててそれを拾うと、それは、仲間達の人形だった。速攻で竜太達の元に持っていくところだった。

「これはかすかに暖かく、そして、鼓動があります。生きています。ご主人様の魔法でどうにか・・・。」

竜太はそれを見て、悩んだ。どうやるのか。それが全く分からないのだ。八迫は、竜太の方を向くとただ、ひたすら謝った。

そして、竜太は、八迫に頼んでみた。これはどうやったら元に戻るのか。八迫は承知して、地面に円陣を書いた。それは魔法陣にも、円陣にも取れる不思議な物だった。

暗闇のこの世界、二人は、龍魂剣から出てきた豪火龍のおかげでやっと見えていたのだが、その光を、心から閉ざした。魔法陣は、光だし、あたりを光で満たした。疲れ切っている体もその光をみると、やすらいでいく。そんな優しい光だった。その光は、やがて魔法陣の周りだけになって人形が空中に浮いた。そして、人形は少しずつ、人の形に戻っていった。

中片亮祐が、人の形になって、栗柄八迫と平田竜太にまとめて言った。

「これにて一件落着。ラーメンでも食べて帰るか。」

「はい。ご主人様。」

一文字悶太はにつこり笑っていった。なぜか竜太達に言った言葉に反応してしまった物だから、あわてて口をつぐんだが。そして冷や汗混じりで付け足した。

「皆々様にもごちそうしてくる人がいるみたいだし。」
そう言っただけ先には財布の中を見て涙ぐむ浅尾暁の姿があった。そして大川典子の方を向いてぼそりとつぶやいた。

「少し安くならない？」

「ネギだけは譲れませんので。さあ。みなさん。こちらの浅尾暁先生がラーメンを好きなだけおごってください。」

朝霧徹はにつこり笑って耳元でささやいた。

「俺、アイス付き・・・な。」

財布の奥に隠しておいたクレジットカードにおそろのおそろの手を伸ばした。するとその手を止められた。

「私も、半額お支払いします。葱のお礼に。」

亮祐は悶太の方を向いていった。思いつきり空気を吸って、少ししやがんで・・・。

「これからは、亮祐で良いよ。別にご主人様ってわけじゃないし。本当はもっと前に言おうと思ったんだけどなかなか言えなくて・・・。」

「分かりましたご主人さー」

ムグツと口を押さえ、照れ笑いをする悶太に亮祐はポケットから飴を出し、渡した。

「これでも食べとけば。」

悶太は頑張ってふたを開け、ハツカの飴を取り出して、口に入れた。理緒もゆっくりと言った。

「私活躍して無いじゃないの！今度のラーメン店では大食いの力で活躍してみせるわよ。」

それを聞いた暁は思わず叫んだ。

「そんな力、使っなよ！」

竜太はゆっくりと口を開いた。

「……ハッピーエンド！これにて終劇！お腹へったあー。先生。早く食へに行きましょうよ」

八迫はゆっくりと立ち上がりつつつぶやいた。

「じゃあな。桐原須藤。俺の……」

風の音で聞き取れなかった。そしてやっとみんなの方に体を向けると八迫は真実を口にした。

「おい。お前ら。ここからどうやって出るつもりでいるんだ。出られないぞ。」

全員一斉に

『エーーーーーー』

待つてましたと出てきた奴は言った。

「ここからは決して出さない。お前らはここで死ねばいいー。人間は悪だ。貴様らなんてここで殺してやる。これで最終回だ。デス・パレード・ミランビカル」

霊体となった須藤が仁王立ちしてかまえた。そして手を天に大きく広げた。須藤の手がどんどん黒い炎で包まれていく。しかし、竜太はお腹も空いていて、いらいらしていたし、なんだかんだで最後まで待たずに技の途中で鞘に入ったままの龍魂剣をかまえて須藤の後ろにたった。

「最終回……。お前なんか何十行も出て良い話じゃないんだ。貴重なページ数を減らすな！怒濤の怒り無理矢理斬り！」

「最終回はそんな何十行も出てないのにー。」
須藤を龍魂剣で叩きつけた後、豪火龍はここぞ！とばかりに出てきて須藤を食べた。

「これで七百年は封印できますよ。ご主人様。」

「あつはは。七百年か。人じゃ生きてられないからなあもうそのころには死んでるさー。」

それが終わり、みんなが集まってきたとき、一番後ろにいた八迫が、間をくぐって竜太の前に来た。八迫は、右の手の先を光らせて、こ

う、叫んだ。

「竜太、ごめん！」

その手を竜太につけた。亮祐は、思わず叫んだ。何をするか、知っていたからだ。

「止める・・・八迫！」

「ホニヤミシヨカラミネアツタンホナラシユエデザスユガフアラ！」
竜太はきよとんとしている。

「さあ。ラーメン食べに行こう。」

八迫はそう言つて海から流れ、砂浜へと戻ってきた須藤の剣、デキサデュリユを地面に刺した。すると、地面から扉があらわれた。その扉は永遠を思わせるかのような物だった。八迫は強引に竜太の手から龍魂剣をとると、扉の鍵穴に差し込み、回した。ガチャツと音が響き、扉は動いた。八迫は扉の取っ手に手をかけて、開き、かなしそうにいった。

「フル・オープン」

そう言つた八迫を見ていられなくて、亮祐は落ちていたファイナル・レイクを回収し、元に戻し、悶太に渡した。浜辺が、亮祐の所だけ、少し色が違う。水を吸つた・・・そんな色だった。青い・・・悲しげな色。これから起こる本当の出来事を知っている色。そこにいた亮祐の瞳は遠くの空をやつとの思いで見つめていた。

翌朝、竜太はベッドで目が覚めた。ベッドから飛び起きた竜太は考える。昨日、誰かとラーメンを食べた気がする。でも、それが誰なのか、思い出せない。確か俺は中華麺大盛りを頼んだはずだ。でも、それは誰かと一緒に楽しく食べたはずだ。そんなことを思い、部屋の片隅に、目を向けた。部屋の片隅には、冷蔵庫がある。でもそれも、俺の物じゃなかったはず・・・この前までは別の所に通じていたような気がするが、そんな子供じみていて、非現実的なこと、無いだらう。竜太は天体望遠鏡をのぞいた。あの星がいつか降って来

るんじゃないか。そんな気も、してならなかった。でも、それも子供じみていて、非現実的なことだと思ひ直し、考えるのを止めた。学校に行っても、何人かの生徒がいない。担任も替わっている。あの、長谷川律子から。昨日一日に、何があつたのか、分からない。確かなことは昨日一日・・・と言うかここ一ヶ月の記憶がないこと。といつても放課後のことだけだ。生活面では、支障はない。新しい学期にあがつた竜太は、配られた手元の紙を見つめた。それは、「入部届け」とかかれた紙一枚だつた。でもその紙が、非常に大切に思えてならなかつた。竜太は筆箱から俗に言う、しゃーぺんを取り、紙の上に走らせた。そして、入部届けの入部希望枠は埋まつた。竜太は、やつと部活に入ってみる気になつたからだ。なんだか出来るような気がした剣道部に入部した。仮入部だ。鞆の中には入部とど一枚がきちんとファイルに挟まれている。これで、俺がここに入部するのが決まる。そう思うと仮入部に来て、初めて握らせてもらっている竹刀を持つ手が汗ばんだ。でも、初めて竹刀を持つのに初めてのよな気がしない。前にも真剣を握つて戦つたことがあるよな・・・。そう思つて記憶を振り返つてみるが、やはり記憶がない。そんなとき、主将に

「今入部すれば、今度の剣道杯争奪戦に出してやるから・・・。お前なら剣道杯を取れる。」

そう言われた。竜太は、鞆の中にあるファイルから紙一枚を持ってそこから離れ、職員室に向かつた。竜太が見えなくなつてから、次の主将は竜太に決まりだ。そう影で言われたよな気がする。

八迫と亮祐は本部で竜太を見守つていた。

「なあ。八迫。本当によかつたのか。あいつから、切り裂きジャツクの記憶を消して・・・。」

「消してない。封印しただけだ。」

そう言いつつ龍魂剣を見た。そこから出てきた豪火龍はいつた。

「ご主人様さえ無事ならそれで良いです。」

その声は何となく、だだをこねる子供が、本当の気持ちに気づいてほしい・そんな風に思わせる言い方だった。それを聞いていた悶太は箸をもちながら言った。この場を明るくしようと勇気を絞って「亮祐。そろそろ掃除が終わるよー。」

「やっぱりお前はそれくせだけけは抜けないのか……。」

「亮祐。これはくせじゃない。趣味だ。」

「悲しい趣味だな……。」

悶太は亮祐のことを名前で呼べるようになった。

部屋の棚の上にあるディスプレイのなかの竜太はきらきらと輝いていた。八迫は写真立てを見た。最後にみんなでとった集合写真だった。ラーメン屋から出たときにとった最後の……。

その数刻前に理緒は、窓の外に飛ぶ鳥を目で追った。あのころの私は、あんな風だったのかもしれない。今は、ストレス発散は部活・剣道部しかない。理緒は突然名前を呼ばれて驚いた。

「黒崎君……黒崎君！」

思わず大音量で返事をしてしまう。

「はい！」

同級生のくすくす笑い。それを限界まで達した頃、教師は理緒に言った。

「この問題を解いてみたまえ。基本だからな。」

理緒はゆっくりと空を見て、立ち上がった。

「話を聞いてませんでした。分かりません。」

次の瞬間、廊下にいた自分に思わず大笑いしてしまった。

そうだ。本部に行ってみれば良いんだ。放課後、本部の前にいる自分にまた、大笑いしてしまった。

「遊びに来たよー。」

ケーキを山のように持ってきた理緒は会議室のドアをどうどうとあけた。そこには竜太以外の切り裂きジャックが勢揃いしていた。みんなのために奥にある給湯室へ真っ先に入り、七人分に切り分け、

お盆で持つていく。きょうはチョコレートケーキを持つていった。今度はこれがいいとみんなを選びお金を出し合って買った物だった。亮祐が口を開いた。

「今回、抜けた切り裂きジャック、平田竜太と桐原須藤の代わりに新しい切り裂きジャックを任命する。栗柄八迫。」

八迫は椅子からたつて、一步前に出た。

「はい。」

「お前を今日から、五番・・・桐原須藤の代わりに切り裂きジャックになる者とする。」

「心より感謝します。」

亮祐は理緒の方に向けてこういった。

「お前を今日から、七番・・・平田竜太の代わりに切り裂きジャックとなる者とする。」

「・・・・・・」

八迫が耳打ちした。

「心より感謝します。つていえばいいんだ。」

「心より感謝しますが、嫌です。七番は竜太です。私ではありません。勝手にポイ捨てるなんてひどいことは八迫には出来ないはずです。必ず、竜太は戻ってくる。だから、私より、竜太の方が靚面です。だから私は辞退します。」
そう言つて椅子に深く腰掛けた。

誰がともなく、思い出した。そう。最後にみんなと一緒にだったのはラーメン屋、井亭までだ。

私は塩ラーメン【三杯】。竜太は中華麺大盛り、亮祐は激辛チャーシュー。悶太はお子さまラーメンのセット。大川先生はチャーシュー麺に葱一本、丸ごとトッピングした珍しいオリジナルラーメン。朝霧先生はつけ麺大盛りにアイスクリーム一個。浅尾先生は究極の豚ラーメン。

にぎやかだった。最後のにぎやかな切り裂きジャックの集団だった。

食べ終わったら、帰っていく。先生三人係で子供を帰していく。切り裂きジャックとしての竜太に会う、最後の瞬間だった。あの呪文のような物は記憶を封印する者で、一度寝たら最後、その記憶はよみがえらないというものだった。

深夜、竜太の部屋で遅くまでオリゼークエストというゲームをしていた八迫が、裏ゲームクリアーの文字を見ると荷物をまとめた。竜太のぐっすり寝ている姿を見て、栗柄八迫は平田家を後にした。ジャックを竜太の腕からはずして……。いとも簡単にはずれたジャックを、回収して……。

「さよなら。」

八迫は部屋を出るとき、こう告げた。竜太は寝言で無意識に返事をした。

「嫌だ。いつまでも一緒にいるんだ。勝手に……許さないぞ。」そう言っただけで寝返りを売った竜太を見て、八迫は出ていった。その後、八迫は本部で生活している。あの後本部は竜太の最後の仕事、想像でもと通り……。以上になって豪華になった。一人一部屋ずつあったし、その広さも異常な物だった。生活に必要な物も勢揃いしていた。ここで暮らしていればいい。そうすれば、竜太のことをずっと……永遠に見ていられる。どんな生活をしているのか、知ることが出来る。

その一ヶ月後、夏休みまでのカウントダウンが始まった。中体連が始まった。竜太はその中体連剣道の大会に出ていた。

大将戦、他校の学生、理緒との一騎打ち。なんだかこの人のことを知っているような気がする。そう思いぼーっとしている竜太に向かって竹刀がのびた。

「こて！」

理緒の声が体育館銃に響いた。それにあわせるかのようにその学校の応援。竜太はせっぱ詰まった。もう負ける……。そう思ったとき

竜太の手が俊敏に動いた。

「メーン。」

その十分後、竜太は勝ち、休憩していた。みんなからの声援なども一気に加まつてくる。数章杯授与式が始まり、竜太は優勝杯を手にした。しかし、優勝杯を手にしたとたん、世界が変わった。右が、左に。上が下に。あつちがこつちに。こつちがあつちに。何で俺はここにいるんだ。そう思った竜太は授与式をほっぽりだして竜太は走った。体育館から出て、廊下にあった自分の鞆を手にとって。剣道部のじゃまになる物を全て道に。行き先は一つ。竹刀を持つ手が勝手に腰に竹刀をさす。切り裂きジャック本部だ。

八迫はディスプレイを見て、苦笑いした。そんな八迫を見た亮祐は思わず口にした。

「お前、優勝杯、取り替えただろ。」

八迫はうれしげにいと笑っていった。手を後ろに組んで。

「ばれちゃった。やっぱり寂しいもんでね。家庭教師って言うのはこういうものなのよ。」

それと同時に八迫と亮祐がいた休憩室のドアが開き、荒い息が聞こえた。

「はぁーはぁー。つつつつつつた・・・ただいま。」

そう言う竜太を迎えた二人は言った。

「おかえり。」

八迫はポケットからジャックを出して投げつけた。思いつきり。

「ほらよ。これ、落としたら切り裂きジャック、止めるよ。」

竜太はなんとしてもとろうと思いい、手を伸ばした。その手は空をつかんで、竜太は前に倒れてしまった。

「竜太、お前失格か？」

そう言った八迫は笑って付け足した。

「嘘」

竜太は早速ジャックを拾ってつけ、はずそうとした。

「・・・はずれない。」

「もちろんだ。切り裂きジャックを止めない限り、これははずれない。」

竜太の目には涙が浮かんだ。そして鞆から紙を出した。

「定期テスト・・・惨敗。」

へへッと笑って鼻をすする竜太に八迫が丸めた紙を投げつけた。

「馬鹿者。こんな物も分らないのか。」

そう言いながらも楽しそうに八迫が勉強を教えているのを見て亮祐は部屋からこっそり出た。そして八迫もまた、部屋から出てきた。

「何でお前・・・勉強教えてるんじゃないのか？」

八迫は目を光らせて、亮祐の方を向いて怒鳴った。

「アン野郎、俺がせっかく教えてやってんのに、途中で寝やがった。」

休憩室の机には、うつぶせで、すやすやと寝息を立てる竜太がいた。

会議室にはこの間と同じ人と、竜太が集まっていた。

「本日をもって七番、想像の切り裂きジャックに平田竜太、お前を任命する。」

「心より感謝します。」

これでいつもの日常が戻ったとみんな、そう思った。しかし、宇宙から、何者かが飛来しようとしているのだった。会議室に取り付けられているテレビのニュースが臨時報道に変わった。

「たった今、伊勢湾に、巨大な物体が飛来しました。」

テレビに映る画面からは、物体が映し出され、そして、その物体は、

動いた。中から影が見える。

「この惑星は、本日、現時刻を持って、我が手中の惑星となった。先住民の人間どもよ。おとなしく吾に従うが良い。さもなければ、全国民に、死、アルのみと思え。繰り返す。この惑星は、本日、現時刻を持って、我が手中の惑星になった。」

会議室には沈黙が漂った。その沈黙を破ったのが、八迫だった。

「行くぞ。新米の切り裂きジャック。この国を、守るのが切り裂きジャック本来の役目、何だろう。」

竜太は、壁に立てかけてあった龍魂剣を取り、腰にあった竹刀と取り替えた。

なおもニュースは流れ続ける。

「先住民を守る切り裂きジャック。貴様らが動くと、他の人間の命はないと思え・・・。」

竜太は思わず口からもらしてしまった。

「・・・。。。。。。あいつ・・・全部知ってる・・・。」

「お前らが出来る行動はただ一つ。ここに来て、我らを倒して見せる。勝った物の人間どもだけ、助けてやる。変な行動は起こすなよ・・・。」

。。平田竜太。特にお前だ。」

そこで、画面が度アップになった。そこに映った影は、竜太そのものだった。

竜太は床にしゃがみ込んだ。しかし、八迫はそれを許さなかった。

「行くぞ。竜太。」

そう言った八迫は竜太の首に縄を巻いて引きずっていった。それにみんなが続く。その間、誰も一言もしゃべらなかつた。

誰もいなくなつた会議室のテレビはしゃべり続ける。

「私の名前は平田竜太。貴様・・・平田竜太を倒す物だ。」

そう言ったもう一人の竜太は腰から、剣を抜いた。それは龍魂剣の

何倍もある、長い剣だった。そして物体からは、まだ影が出てきていた。それ一つ一つが、切り裂きジャック全員と同じ恰好をしていた。

「私たちは――――」

ブツン

ニュースがとぎれた。

会議室にはノイズだけが五月蠅く、定期的にリズムを打って響き続けた。

現場では、竜太が報道陣をあるべき所に返した後だった。

地面は深くえぐり取られ、燃えていた。

「さあ。早く祭をしよう。竜太。踊ろう。。。」

平田竜太―ジェイソンの声が、ノイズを遮って聞こえた。

俺は、これから俺を倒しに行く。
逢ってはいけない物どうし。

切り裂きジャックは殺しません！第一シーズン完結

第二十四話 最後の幕開け（後書き）

竜太 !!!!!!! あいつらは……………。

偽者 この惑星は我ら切り裂きジャックが支配した。無駄な抵抗は止せ……。

竜太 この地球は渡さない!

作者 どのジャンルでも扱っている分野に挑戦したんだ。どれだけ面白くするか覚悟しろよ!

竜太 作者さん! 危ない!

作者 大丈夫。この紙にこうして書くと……

偽者 うがあああああああああああ!

竜太 強いですね。

作者 次回からしばらくお休みです。皆さん待っていて下さいね!

お待ちかねの第二シーズン予告編！（前書き）

切り裂きジャックが、二ヶ月ぐらいの時を経て、かえってきますよ
！。

お待ちかねの第二シーズン予告編！

切り裂きジャックは殺しません！ 第二シーズン予告

五月より連載開始予定の切り裂きジャックは殺しません！第二シリーズ。切り裂きジャックファンの皆さんに、少しと言わずにほとんど大公開しちゃいます。でもあくまで予定なので、変わるかもしれないけどね・その所をまた、違うなつと気づいて楽しんで下さいな。

第一シーズンはこんな話だった。

いつものように部屋で一人、天体観察をする平田竜太。毎日のように見るその目の先には、冬の大三角形。でもそれは少しずつつ近づいているように思えた。でもそれは思ったただけではなく、真実だった。星がいきなり竜太の部屋に飛び込んできたかと思っただけならいきなり掴まれてしまった竜太は……。こないつもと変わった夜を体験した竜太、ひよんなことに日本を守る謎の英雄、切り裂きジャックとならされてしまった。栗柄八迫と名乗るその少年のライバル、桐原須藤や、裏教育委員会からやってきた教師なども現れ、大変なことに……。そして竜太は苦労の末に、最後の決着をつけたのだが、突如飛来した謎の飛行物体から、自分たちそっくりな偽者があらわれてしまった。竜太達は、切り裂きジャックとして、その場に駆けつけるのだった。

第二シーズンはたぶんこんな話。

第一シーズンの最後に謎の飛行物体により地球にあらわれた切り裂きジャックと名乗る謎の七人組。突然の侵略宣言に驚く竜太達だが、敵の目的は切り裂きジャックの能力にあった。竜太達は伊勢湾へと急いで行くが、そこに待っていたのは謎の魔法陣。その中に入って

しまった竜太達は、別世界へと・・桐原須藤が予言した切り裂きジャックが作る未来へと飛ばされてしまった。一からパーティーを作ることになった竜太は切り裂きジャックを探し出し、この世界から出て、本当の世界にいる切り裂きジャックと名乗る偽者を退治するために旅に出た。

そこに待っていたのはどこかで見たような剣と魔法の世界だった。数々のクエストを乗り越えた先にまつものとはいいたい・・。切り裂きジャック第二シーズン、来月より連載予定

第二シーズンにはこんなところが舞台

今度竜太達切り裂きジャックが活躍する舞台はゲームでおなじみになっている誰でもお手軽に通える剣と魔法の世界。やっぱり、ファンタジーらしいから最後のボスは・・おなじみの本物対偽者の対決なども用意されていて、切り裂きジャックはいよいよ山場！今度は前回の二倍でお送りするかもしれない・・。

第二シーズンには作者が登場する

しませんってば。誰がいったんですか・・そんなほら話。【冷や汗だらだら・・出る分けないですから・・。今のところ。】

切り裂きジャックは殺しません第二シーズンは、切り裂きジャックは勇者じゃない【仮】をお楽しみ下さい。

2008年5月下旬切り裂きジャック連載再開どんな話になるのかは、貴方の一通が決めることです。もしかしたら貴方の一通で、物語ががらりと変わるかもしれませんから・・。いろんなお手紙、待っています。と言うか、たまには下さい。

「伝説は、貴方の一通が決められることなのかもしれない。」

こころ期待。

お待ちかねの第二シーズン予告編！（後書き）

お待ち下さい。

もうすぐ執筆開始ですから。

第巻話 嵐の幕開け（前書き）

一部の人の間で、大人気！切り裂きジャックは殺しません！が、いよいよ帰ってきました。今回の話は・・・謎の切り裂きジャック集団の出現によって全世界が侵略されてしまう・・・それを防ぐために、切り裂きジャックは、現場に出動するが・・・気になる第二シーズン、いよいよ開幕。第二シーズンはそれだけじゃ、終わらないんだけどね・・・。

第巻話 嵐の幕開け

海が荒れ果て、風が不安をあおった。人々は、突然、絶望を喰わされたかの様な顔をしている。日本が暗雲に包まれているとき、一筋の光があらわれた。その光は増えて、九つになった。その中心にいた光が言った。

「待て……この日本を好きにはさせないぞ。かかってこい。」

暗雲の方に九人の中心が言った。

「吾がこの星の新しき支配者だ。もと支配者はこの星の未来へと消え去るが良い。」

そう言つて、黒い、長身の剣を抜いた。それを振りかざし、迫つていった。

「切り裂きジャック平田竜太。ここで死ねば、楽にしてやろう。さあ。消え去れ。」

そう言つて、暗雲を消した。そこにあらわれた人影は、マントを羽織り、目の下には黒いくま。そして瞳は赤い色だった。それをのぞけば、完璧な竜太だった。その竜太は、本物の竜太の方に迫つていき、そして剣を持つていない手で体に入れた。

「この本物の魂。もらい受けるぞ。」

そう言いつつ、剣を持たない手で、思いつきり地面に剣を突き立てて古の言葉を吐いた。竜太は何が起こつたか分かつたのは、痛みを覚えてからだつた。眠くなるような気もした。でも、なんだか起きていたくなるような気もした。

「イシャミロカラスナンキアラホラシルデュアルマネージアキリシタンドンチヨクレキナル・天走」

空間がねじ曲げられた。何事かと思つた竜太は、隣を見た。いつの間にか、全員が同じ様な姿だ。マントを羽織つた奴等全員で、同じ

言葉を同じ瞬間に言った。

「未来。」

気が付くと、所持品は、龍魂剣と、ジャック。技は何もない……。そう。RPGのレベルのような……。そんな感じだ。周りには八迫しかない。その八迫では、目をつぶったまま、動かないでいる。かろうじて呼吸をしているのに一息つきつつ、周りを見た。目の前にあるのはすごい勢いで煙の出る町。じーっと見てから目をそらし、やっと気が付いた。あの煙は黒い。何かが燃えている。そしてあれだけの煙が出ていると言うことは……。

竜太は八迫を揺すった。

「八迫。あの町燃えてる。」

そう言っても八迫の反応はない。何度も揺するとやっと、八迫は目を開けた。

「行く……。ぞ。」

落ちていた剣を杖の変わりにし、町へ向かう八迫を支えつつ、竜太は町の方へと足をむけた。

切り裂きジャックは殺しません！ 第二シーズン第一話 嵐の幕開け

竜太は村に着くと絶句した。全てが焼け落ちていたからである。八

迫はくぐもった声を出して、膝をついた。めったに弱音を吐かない八迫がここまでひどい状態だと、竜太も少し、心配した。竜太は視線を右に移した。

イクストーバル

村の名前は、焦げ掛けた看板に、そう、記されていた。

火炎に包まれた村の名前が……。

俺がいればここは大丈夫だって、思ってた。
でも実際は、無力の無意味だって、初めて知った。

第巻話 嵐の幕開け（後書き）

どうも。久々に帰ってきました。これからは、いろんな最新作もあるので、二週間に一度は、出したいと思っています。でも、最低でも一ヶ月には、巻話、必ずだしますんで。よろしくお願いします！
御願います。

今回、私が当選した暁には、切り裂きジャックは殺しません！を毎日のように、これでもか、これでもかと更新させていただく所存でございます……。

ですからどうぞ、和呼之、和呼之已夜己に一票をおおおおおお
おおおおお。

選挙編でお送りいたしました後書きでした。

第二話 或る陰謀の炎（前書き）

今回の正式タイトルが決定しました。その名も、
切り裂きジャックは殺しません！

～13日の金曜日より～

このタイトルから来たら、ジェイソンと戦ってしまいましょう。それに、他の映画関連も出してみたいんですけど……。出してほしいものがあつたら言つて下さいよ。

ちなみに言つと、前回の正式タイトルは、
切り裂きジャックは殺しません！

～七人目の誕生～

ぐらいで良いと思います。これで決定です。

第二話 或る陰謀の炎

第二話 或る陰謀の炎

竜太と八迫が町に行ったとき、煙がでていたところは、消火されていて、プスプスと少量の煙を出すだけだった。竜太は、何があったのか、気になったため、現場に立ちつくして、噂をする人々に尋ねた。

しかし、その人達の瞳は、意志が無いかのように、空を見つめていた。心臓は動いているのに、瞳孔は開ききつていた。そして、動いているのに、体は冷たかった。

そのころ、日本では、もう一つの切り裂きジャック集団が集会をしていた。

「浅尾も、大川も、朝霧も、きちんと切り裂きジャック役をしているなあ。それで、どうするんだ。ジェイソン。」

黒いマントを羽織った男が、そのフードをはずした。

「殺すんだよ。決まっているだろう。あんな奴等にこの絶望にあふれた世界をやれるわけ、無いだろう。」

そう言っつて腰から鎌を取り出し、花瓶に向けて振り下ろした。

そこで、通信が入った。大川の文字だった。

「浅尾、朝霧、謎の敵の襲来によって死亡。きゃあああああああああ。ああ。」

そこで、通信はとぎれた。

「おい。どうするんだ。こっちも三人、死んじやったじゃない。」

ジェイソンは、鎌をようやくしまつと、古文書をマントから取り出し、朗読した。

「【善の切り裂きジャックと、悪の切り裂きジャック、それぞれ消えていく事に、世界は崩れている。】と書かれているんだ。どのみ

ちこの世界は、助からないんだろう。ほおつておけ。」
そう言うとジェイソンは、船の中の部屋へと、入っていった。
「自分が自分で在ればいい。存在しない物が存在している……俺達のように……。」
そう、言い残して。

その同時刻、理緒は、船内へと進入していた。
「これでもこの間まではスパイだったんだカラー。頑張っちゃうわよおー。」

そう言いながら、お宝を見つけつつ、お目当ての部屋を見つけた。
竜太達が吸い込まれた魔法陣がある部屋だった。

「でゆりゃああああああああああ」

思いつきり花瓶を投げつけてやると、花瓶ごと、魔法陣は割れて、
竜太達がでてきた。竜太達は変身を終わっていて、中でも亮祐は、理緒の方に通ってきて、

「ありがとう。」

とお礼まで言われた。

さて、ここからでようと言うときに、ドアが外側から開いた。亮祐と悶太の偽者だった。

腕につけたジャックを使って、連絡をし始めた。伝えられたことは、
「切り裂きジャック、脱走。直ちに全面戦争にかかる。」
と言う言葉だった。

「今ここに、新たなる力を持って、出現せよ。竜撃手。」

「吾、亮祐の名の下に、偉大なる力を持った銃を。」

「悶太と地の契約を行った友人、地獄のミュツキーコミュニーよ。改心してここに姿を現せ。」

「とつとでてこい。我が下僕ナクシャーシャ。」

「アルティメットインビンシブル暴力女の汀、いまいでてん。」

切り裂きジャックの、準備は整った。

黒装束の、黒の切り裂きジャックも、とうの昔から……と言っようにかまえ始めていた。

俺は、俺を初めて目の前にみた。

それは、俺なのかもしれないけど、何かが、足りないような気がしたよ。

第二話 或る陰謀の炎（後書き）

いよいよ、切り裂きジャック対ジェイソン軍団、全面戦争開幕。そのはてにまつものは……。

今日は、十三日の金曜日ですね。ジェイソンの日という事で、ジェイソンを出しちゃいました。

第三話 二つの世界の城（前書き）

ジェイソン 我らの目的は、切り裂きジャックの殲滅。我らが本物となるのだ。

竜太 ……寂しいよお。

ジェイソン もうすぐだ。もうすぐ完全なる破滅を呼び、我らが絶対神、切り裂きジャックとなるのだから……。

竜太 さあーみいーしいーいいーよおおおおおおつ。

ジェイソン じゃかあしわい。

第三話 二つの世界の城

第三話 二つの世界の城

一番最後に来た竜太そっくりの切り裂きジャックはジェイソンの仮面をかぶっていた。

「ほう。もう一人蠅がいたのか。なあ。おい。お前ら。まとめてこいつらを退治しておけ。じゃまな虫けらは退治しておかなければ後々面倒だからなあ。」

そう言つて右手を突き出すと、拳を作りそして開いた。

「いでよ。地獄の業火によって作られし獄門よ。今ここに。」

地面がゴゴゴという音とともに割れて、門がでてきた。その門を開くとジェイソンは入つていった。

「貴様ら。それぞれの部屋で戦つてもよいのだ。とりあえず、殺せばよい。」

そうすると他の全員が先ほどのジェイソンと同じように門を開いた。

「引き連れよ。我が下部。」

竜太をのぞく全員が何者かにそれぞれの門へと連れて行かれた。

「龍魂剣。間元凶の杖。」

龍魂剣を振るいつつ、間元凶の杖で魔法を唱え、門を壊そうとした。しかし、ひびはおるか、傷も全く付かないのだった。門を開けようとして開けてみると一つだけがあいた。

「二つの世界の城」

そこは、白い巨大な城だった。先ほどいた城のようなものとは全く違うものだった。

すると目の前にあのとときと同じ様な門があらわれた。

「ようこそ。七の切り裂きジャック。そして私の分身。これから、あの城に入って、最上階を目指してもらいます。その道中、貴方の

仲間が分身と戦っています。助けて最上階を目指しなさい。貴方の仲間が戦っているもの達が持っている鍵を持って、こなければ、最上階へのドアが開きません。心してかかりなさい。」

それだけ結うと、再び門をくぐって帰っていった。

竜太はシロに向かって駆けだした。

「アルティメットインビンシブル暴力女。私にかかってきなさい。存在の意味を賭けて。」

理緒は、汀を片手に、柱に寄っかかったもう一人の自分に向かってそう告げた。

「一文字悶太。ご主人様に仕えるのは一人だけだ。あの方をお殺しになってあげますよ。」

悶太はいつの間にか自分の切り刻まれた体を見て、息をのんだ。

「おい。そろそろ、俺らの体も無理がある。ともにしにゆこう。我が主よ。」

亮祐は自分の体の無理を飲み込んだ。

「おい。竜太なんて教育しても無理だ。それよりここで、真っ赤な紅い花を咲かせろ。」

八迫は八迫で、苦笑いをして自分のデイパックからエンブレムコーヒーを取り出して飲んだ。

最上階のジェysonは、それぞれのモニターで戦いを見て、笑った。「お前らが戦う分だけ、獄王の復活が早まる。そして吾の楽しみも増える。さあ。パーティーだ。」

暗雲がこれでもかというくらい立ちこめていた。

暗い暗い空の下でどうしたのかと思っている人達がいる。
彼等が、明日も同じ朝を迎えられるように、俺は頑張ろうと思う。

第三話 二つの世界の城（後書き）

次回、二人を助け、そして、竜太の再びの暴走は、城をも壊す勢いで・・・。

第四話 一階栗柄八迫（前書き）

竜太 ……階段、どんだけ！。

八迫 エンブレムコーヒーはおいしいって所だけが共通点だな。

黒八 ふむ。地獄雷使いの吾も納得の十点満点だ！。

八迫・黒八 はっ！

八迫 こんなところで和んでなんかいらねえ！

黒八 同意だああああ！

竜太 八迫おー。まだ付かないよおう

和呼之 想像の力使えよ。想像の切り裂きジャック。

竜太 賢——————い

第四話 一階栗柄八迫

第四話 一階栗柄八迫

黒の切り裂きジャック存在しないシロ 栗柄八迫の階 数分前

カシュー。

二本目のエンブレムコーヒの缶が、音を立ててあいた。それをと
てもおいしそうに八迫は飲み干して、缶を廊下に放り投げた。右側
の壁には悪の侵略者だというのに矛盾したポイ捨て禁止のステツカ
ーが所狭しと貼られていた。扉が開け放たれた。

「どーぞー。飼育者改め先生……。ちよっとしびれる雷のお部屋で
すよ。」

八迫は、黒いお面をかぶり、鎌を肩に掛けている自分の姿を見て、
いらついた。

「おい。俺。いつまで昔の名残でいるんだよ。とつとつその醜い仮
面、はげ。」

鞆からダガーを取り出すと、三本目のエンブレムコーヒを飲み干
して、その底にさした。

「あいにく、なれているものは落としちゃってねえ。これで十分だ
から、これで。」

鎌を持った八迫は、白い粉を周りに振り、八迫にすら分からない言
葉を唱え始めた。

それがひとしきり終わるとやっと、普通の言葉でしゃべり始めた。

「地獄の門番より開閉の許可を。真つ暗地獄の冥府の釜で鍛えられ
し魔刀呼ばれしその釜を、今この手中に。ベクルゼルツ！」

その瞬間、八迫は見た。鎌の姿がノイズ状態になり、奇怪な音を発
しているのを……。

「地獄の昆虫、マゾーデー！」

八迫は、自分の影が無くなったのに気が付いた。

「おい。俺の影をどこにやった……。」

鎌を振り下ろしつつ、黒の八迫は答えた。

「マ・ウ・シ・ロ。キヒヒ。」

バツと後ろを振り向くと底には真っ黒の八迫の姿があり、その真っ暗の手で首に手がかけられた。四本目のエンブレムコーヒーマが、鎌にびったりとかがった。

「うぐぐうぐうぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……。」

影はそう唸ると嬉しそうに笑ったように見えた。

「地獄の伶俐レイリ」

鎌からは真っ白い霧がでていた。その霧が水上化すると、その地面が溶けた。

「ターゲットキ。MISSIONクリアー。栗柄八迫、コンプリート。二階はアルティメットインビンシブル暴力女か……。怖い怖いですね。三階の泣き虫君をやりに行きますか。」

鎌が八迫の首に少しずつ少しずつ当てられそうになる。

「もう、つまらない。もっと抵抗してよ。電気はね……。電気抵抗って言うものがあってね……。それが小さいほど通りにくいんだあ。」

八迫は違うと言いたかったが、言えなかった。何とか影の手をダガ―で切ると、大きく息を吸ったり吐いたりして、

「馬鹿……。逆だよ……。逆。」

「え？そーなのお？」

悔しそうに歯ぎしりをすると鎌を振り下ろそうと身構えた。

「この……。秀才めえええええええ。地獄の雷道を守りし雷電、コノ鎌に雷の塊を……。」

電撃は、鎌の真上に出来ていて、鎌に付いた。それと同時に八迫のすぐそばに……。

エントランスホールへ一階栗柄八迫の階行き 平田竜太

「はあ……はあ……はあ……はあ……。この階段、いったい何階まであるの……？一階に行くまでもう、三十分も経ってるよ。」
「ようやく、お目当ての扉を見つけた。」

一息ついて、お茶を飲んでから。扉の奥へと向かった。

バコンッ！

「ぐぎゃうがあああああああああああああああああああああ
あ。」

一階に入って目にしたものは雷に打たれて、生死の境をさまよっている八迫だった。

「八迫……。」

「遅いわっ！馬鹿者が……。」

背後から声があったので竜太は思いっきり飛び跳ねた。

「ぎゃああああ……。」

「あいつ鎌に電撃集めやがった。持つところも鉄で出来てる、思いっきり電気通す奴に。俺コーヒー落としちゃったんだよねえ。最後の一本。はああ。」

八迫は非常にがっかりした口調と顔でうなだれてつぶやいた。

「竜太は……持つてるわけないか……。」

竜太はぽかーんとした顔で言った。

「何が。」

「エンブレムコーヒー……だよ。」

でこピンをしながら竜太に言った。

「そうだ、鍵鍵。」

竜太は思い出すと、黒八迫の服をばりばり破っていった。

「そーいえばさー。この偽者って体、全部俺達と同じらしいよー。
黒子の位置から何から。」

そう言った竜太の手はスピードを速める。

「離せ。俺が、俺が鍵取るから。ねえ……りゆた君。」

「うを抜いて言うなー。うをー。」

「あーもう駄目だあ。りゆた、エンブレムコーピー買ってこいー
ー。ー。」

「うを抜くな！」

「復活に向かって一歩前進」
ジェイソンは左頬に痒いところに玉蜀黍トウモロコシ【R】を塗り紺で楽しそう
につぶやいた。

俺は、自分にいろいろなことを教えてくれた人に再会した。
こんなに楽しいことはない、実感した。

第四話 一階栗柄八迫（後書き）

次回、アルティメットインビンシブル暴力女、名前道理暴力使います。

第五話 二階アルティメットインピンシブル暴力女（前書き）

竜太 夏休みキャンペーン計画中！どんな計画かというところ。。。

八迫 この存在しない世界編終了次第始まる物語のことだ。

理緒 終業式から始まって、始業式までの竜太の無惨さを描くスペシャルストーリー！

悶太 違います。テストで無惨な姿をあらわにするとところまでです。

亮祐 その後、超侵略兵降臨【仮】編に移行。七部構成の予定。

竜太 ……そんなところまで書きちゃうんすか。

一同 もっちらーん。

とりあえず、お楽しみに。後、あくまで計画なので変更の可能性もありです。

第五話 二階アルティメットインビンシブル暴力女

第五話 二階アルティメットインビンシブル暴力女

二階アルティメットインビンシブル暴力女の階

乙女チックな部屋に理緒はいた。ウエディングケーキよりもはるかに大きいサイズのケーキを口いっぱいにはおぼりながら……

「あんだ本当に食べ過ぎじゃない？でぶるわよ。まじで。」

黒コートに身を包んだリオははるかに小さいケーキを食べていた。

「うっさいわねえ。どれをドンだけ食べてどのようになるうとも私のかってでしょう。」

BGMで鴉のかつてでしょう。と流れた。有名な歌だ。

しかしそれでもリオは理緒に小言を言う。理緒の短気な正確があらわになった瞬間だった。

「うっさいわね。もう怒った。あんだなんか……。」

汀をかまえ、リオに突進する。

「ティータイム、もう終わりなのね。ちょっと残念。地獄の食魔人アンデイス。貴方のお力を我が手に衣として宿られん。」

リオは口をこれでもかというように開けるとその口からは、半透明の液状のものでできていた。それは、地獄の酸だった。すんでの所で避けた理緒だったが、靴のつま先は溶けてしまっていた。

「ちよつと！お気に入りの靴、どうしてくれるおつもりなのよおう。弁償よ、弁償。」

「地獄に誓って。知るか。この糞デブリん。」

理緒の頭に血が上ったのが、理緒自信にもよく分かった。

「地獄に誓って。死ぬのだから意味はない。死ぬ。」

「汀奥義 天之怒天【あまのどてん】」
酸を中性の何かでうち消した。

ードネームか。でも誰なの……。その姿だけで良い。見せてよ……。アルティメットインビンシブル暴力女。それが私に与えられてコードネーム。アルイン暴女。スパイとして、人間としての人生はここで終わるのね。こんな事になるんだっいたら進入しないで、助けなきゃよかつたかな……。こんな事なら……。

「アルティメットインビンシブル暴力女……！」

かすんだ目には、肩を上下させ、息を切らしている竜太がいた。

「通行途中にあったから……。来てやったぞ。」

竜太。でも私もう……。だめ……。

「黒崎理緒……。……。」

初めて、竜太にフルネームで呼ばれたよ……。

平田竜太……。

栗柄八迫……。

一文字悶太……。

中片亮祐……。

そして、長官。私は貴方の最後のミッション、クリアできました。これが自信を持って答えられる、仲間です……。親友です……。……。長官も、もちろんその中に入っています……。

これで一人前のスパイになりました。

理緒の意識は、永遠とも言える狭間へと、途絶えた。

空に見えるは、無限の星……を見立てた天井。
目の前に見えるは、接吻直前の竜太の顔。

「だっはああああああああああああああああああ！」

理緒は、とつさに飛び跳ねた。

竜太のほおを思いつきりたいたいて。

「おい……八迫。お前の行ったこと嘘じゃねえかよ……。」
八迫は柵によっかかり、

「どの情報だ。手の甲にキスで目覚めるか？とか、頬ずりで目覚めるか？の他に、唇と唇をあわせて接吻で目覚めるか？ってやつか？
もしかしてと冷や汗をかきつつ私は聞いた。

「全部……やったの？」

八迫は真顔で

「全部やったの。」

くるりと綺麗なターンを決め竜太の方を向くと、

「死ねええええええええええええええええい！」

汀でおそってやった。

「八迫の馬鹿阿阿阿！」

「次の階に行かなくて良いのか・・・？」
八迫は口にたこ焼きに付属していて、女子の間では嫌われている、
青海苔とソースを付けてつぶやいた。眼はしっかりと、夫婦漫才を
みていた。

「夫婦漫才いー。」

その言葉に、理緒の首はこちらに向いた。

「ちょ、待て、お前俺の心が読めるのかデブラブヒョン。」
最後のほうは、殴られている。

俺はやっと気が付いた。

この仲間がいるから、安心できるんだって。

第五話 二階アルティメットインビンシブル暴力女（後書き）

伝説のタッグが三肌脱ぐ・・・。

中片亮祐、一文字悶太

VS

中片亮祐、一文字悶太

竜太、八迫、理緒の活躍の場はあるのか・・・。

第六話 三階一文字悶太及び四階中片亮祐（前書き）

社会見学が、見て学ぶことなら、人生は人がいきることです。学ぶ。．．．
。そう言う意味も持ち合わせているのかもしれない。
テストとは人生の確認なのかもしれない。
なぜか、そんなことを書いていて思ったのは偶然か必然か。

第六話 三階一文字悶太及び四階中片亮祐

第六話 三階一文字悶太及び四階中片亮祐

三階一文字悶太

悶太はポケットに入った醤油入れのようなものを触って思い出した。そう。亮祐は、薬を忘れていたと言ったことだ。悶太は歯ざしりした。「ビーストレイクの片割れトラベラー。つまり旅行者。貴殿の持つそれでは私には勝てない。覚えておけ。」

トラベラーをかまえた悶太は、トラベラーをしまった。

「どこか、上へ行けるところはあるのか……。」

「貴殿の背後にあるクローゼット。そこを通れば四階。」

バツと身を翻し、クローゼットへと悶太は走った。しかし、背後と入っても距離はある。

黒装束の悶太に先を越されて、蹴り倒された。

「貴殿は、本当に必要とされているのか……。ただの足手まといなのではないか……。生きる価値はあるのか……。さあ。どうなんだ。答えを出せ。私……。悶太。」

「……。くは……。僕……。は……。」

次の瞬間悶太は頭を抱え込んでふるえ始めた。

「貴殿は賢い選択をした。来い。貴殿の賢い選択に値するだけのものを渡そう。さあ。こっちへおいで……。」

悶太は、亮祐に渡す薬のことは忘れてはいなかった。しかし、自分の偽者が伝える言葉に返す言葉もなかった。甘い言葉に翻弄されていると言っても過言ではなかった。

「僕は……。ぼ……。く……。は……。」

亮祐は、自分を友達として必要としてくれるのに……。それに自分は応えられないのか……。答えてはあげられないのか……。自分の本心との戦いにすら勝てないのか？

そこまで自分は弱いのか？

答えがでてこない。それを見た二人目の悶太は、

「大丈夫。貴殿はこれまでだまされていたのだ。あの中片亮祐に。さあ。貴殿も悔しかろう。その恨み、ともにはらしにゆこうぞ。上の階へ。」

甘い言葉で誘惑する。

「渡さなきゃ……。」

「貴殿は何を先ほどこら行っているのだ？さあ。早く来い。」

「亮祐に……僕は薬を渡さなきゃいけないんだ。……。」

「貴殿は間違った選択をそのまま貫くというのか？動けもしないのに。貴殿が賢い洗濯をするというなら、きちんとした教育を受けさせよう。約束する。」

自分が何の切り裂きジャックなのかすら、もう分からない。でも……でも……自分はきちんとした教育より、今の仲間がほしい。そう思うと、悶太の目から涙が流れ始めた。

「亮……祐……亮祐え。」

黒い悶太は泣き続ける悶太を優しく抱きかかえた。

「さあ。貴殿は私と来ることを望むのだ。」

十分前 四階中片亮祐

「お前もそろそろ分かっていくはずだ。自分の体は限界なんだろう。ならばその肉体、吾に渡してみる気はないか？」

「遠慮、しときます。」

ビーストレイクの片割れアドベンチャーを片手に、亮祐は答えた。

「それよりさ。悶太、何階？あいたいんだけど。」

「お前の後ろにあるトイレをスライドするといける。偽物のトイレだからな。それより吾に肉体を……。」

「二言目には肉体肉体……。気持ち悪いわっ。極める！アドベンチャーラー！」

亮祐は今度は遠慮せず、刃で突いた。

「ぐべええええええ。」

「さいなら。」

亮祐は、悶太のいる三階へと下りた。ぼつとん便所の下を。

「うげえ。匂いまで完全再現かよ……。う……。う……。う……。」

何か、こびりついていたが、それも見えなくなった。

トイレを投げつけられた変態は、がらがらと音を立てトイレを壊し、空気を吸った。

「あの小僧の肉体。やはり惜しいな。力があり、若き血潮が流れている。吾にこそもってこいだ。くははっ。あの肉体、ほしすぎる。

若い肉体。ああ……。美しい。」

亮祐の後を追ひ、変態も三階へと下りた。

上記より、十分後、三階一文字悶太

「貴殿は死にたいのか。正しい選択をここですべきなんだよ。さあ。」

手をさしのべる詐欺師に悶太の手は徐々に近づいていく。

「正しい……。選択……。。」

「そう。後少しだ。ほら。そうだ。」

パン！

詐欺師の手が、肘からした、存在しなくなっていた。

クローゼットからは亮祐がでてきた。

「亮祐……。」

亮祐の元に駆け寄ると、悶太は泣き出した。

「よくも悶太を……。許さないぞ……。このマゾ詐欺師め。」

悶太を抱きかかえると、亮祐はトラベラーを取り、アドベンチャー

―と融合させた。

「何でえ〜僕があ〜マゾなんですかあ〜あはあはああ。」

「悶太。ちゃんとつかまってるよ。」

「ひぐっ……ひぐっ……うん……」

「ビーストレイク、七の節亡者の撃炎！」

それは心臓を射抜いた……はずだった。

「う〜ん。気持ちいい。もっと……もっと撃ってくれ……。早く……。ああ……」

「六の節天空の氷海！」

「阿阿。気持ちいい。」

効いているはずなのに、ダメージが与えられない。

「十の節魂の浄化……」

「うっうああ。気持ち……よくないぞお。ガキい何をした……」

先ほどとはうって変わって苦しそうだ。亮祐は舌を鳴らした。そしてもったいぶってつぶやいた。

「死者には浄化。これ鉄則。な、悶太。」

「ひぐ……うんそうだ……ひぐ……ね……」

「悶太。寝ても良いぞ。」

「又グウウウウウウ……最後にそのちびは……もらってやるう。私の玩具となる、貴殿は……私のおおお。」

瞬間移動した黒悶太は悶太を骨が折れるほどの力で抱きしめた。

「痛い。やめ……」

悶太の体が、強い力で掴まれている。襲いかかるうというオーラを見せて。

「貴殿は私の玩具……玩具玩具玩具うっうっうっうっうっうっうっ！」

詐欺師の寿命はつきた。亮祐達よりも後ろから来た手の指という弾丸で……。

「小僧。吾に肉体を渡す覚悟は決まったか……」

「七の節二の節三の節四の節……」

「肉体……。」

じりじりと後ずさる亮祐に、じりじりと前進する変態。

「三万七十五の太刀 獅子の立神！」

変態は、首からしたは生命が無くなっていた。

「肉体い……。若き血潮の流れる、美しい肉体。」

あとすこしで亮祐の肉体が支配されると言うとき、

「久々登場、金剛柱三日月！」

「肉……体」

一筋の光に、頭は消された。

「おお。復活したぞ。今一度、吾にそのお力を。」

「うぬ。気に入らぬが、貸してやろう。しかし吾の道具一式は、魂を削るぞ……。」

「かまいませんぬ。アヤつら、五人分の魂で足りませんでしょうか……。」

「よからう。それで手を打とう。」

ジェイソンは、復活した物と、会話していた。

存在しないシロ攻略まで後一階

俺は、自分が出来ないことも意地を張っていた。
この仲間なら、意地を張らずに素直にいえるような気がするよ。

黒の切り裂きジャック最終奥義、王の道具一式拝借

第六話 三階一文字悶太及び四階中片亮祐（後書き）

存在しないシロ編完結間近！次回、龍魂剣、爆裂計画、中竜太、死去
計画実施中？

第七話 最上階平田竜太の階＋おまけ（前書き）

今夏はグロい所があるという事を先に行っておきます。すいません。
以後、このようなことはいたしませんのでお許し下さい。
作者の和呼之已夜己でした。本当にすみません。

第七話 最上階平田竜太の階＋おまけ

第七話 最上階平田竜太の階

「これも駄目……。これも……。これも駄目……。八迫……。全部の鍵で、あかないんだけど……。ってことは全部ス力……。」
竜太達は一番大きい扉の前で昼食及び休息及び扉の開閉を行っていたのだが、どの鍵でも開かないのだ。

「んじゃ、帰りますか。」

「そんな馬鹿なこといつてるんじゃないわよ」

理緒が声のテンポをあげて叫んだ。

亮祐が理緒の手に悶太をゆだねていった。

「ここからは、俺と八迫と、竜太で進む。」

竜太が少し考えて、

「何で俺だけ、点が入ってから言われてるノー。」

「ねーねー。と竜太があまりにもしつこいので、八迫は缶を全力で投げつけた。

瓦礫をこっさり入れて。

「ヘツヴァア！」

竜太が華麗に宙を舞って。そこには亮祐がたっついていて亮祐もまた、竜太を思いつきりけ飛ばした。話の腰を折られたからかもしれない。静かな怒りが全身を取り巻いていた。そして再び宙を舞う竜太は理緒の真ん前に来た。理緒も、竜太に全力でエルボーを食らわした。漢字はこれであっている。食らわしたのだから。的確に。口に……。宙を、先刻まで歯だった物が舞う。

「ナシユハーハーハー。」

ピクピクとけいれんする竜太はやがて、動かなくなつた。

「それで、何で私はこのまま帰らなければいけないのかしら。理由を教えてくれないと、殺気のエルボー食らわすわよ。」

につこり笑ってかまえる理緒に、亮祐はおそれをなして、理由をとぎれとぎれに話した。そう。亮祐は恐怖にうち勝ったのだ。

「それは・・・その・・・エーと・・・。お・・・女の子に・・・。」

「今更女の子扱いしてほしくないわね。これまで、男扱いだったじゃない。

「・・・悶太をき・・・危険な目に遭わせたくなくて・・・。」

「これまでだって危険でんこ盛りでした。」

いつの間にか、悶太が目をさまし、つぶやく。聞こえたのは理緒だけだろう、

それを聞いたり緒は顔を亮祐に戻して聞いた。

「残念。次の理由は？」

「・・・だから、悶太を守れるのは理緒しかいないかな・・・と。」

理緒は理由を聞くとつかつかと亮祐に歩み寄った。

「ひいひいひい」

その声を聞いた八迫は温かい目で見守った。

「がんばれ・・・。」

ポーズまでつけて、応援した。

理緒は亮祐に異常に接近すると、手を出した。

「じゃ、今度高級食料、おごれよな。」

にやつと笑った顔は、女ではなく、男でもない、単なる理緒そのものを十分に表していた。

「は・・・はい・・・。」

亮祐はハイと答えるしかなかった。恐怖によって。

「ンで、このドア、どーするンだよ。」

いつの間にか生き返ってきた竜太は龍魂剣をかまえると、

「封扉開場乱改竄【ふうどあかいじょうらんかいざん】」
斬った。

斬られた扉はいきなり音を立てて倒れた。

「遅いよ。君たちがのんびりしてるから、僕、鎧全部つけてから暇
だったんだカラー。」

片手に煎餅、片手に煎茶というアイテムを持ち、ジエイソンは玉座
に座っていた。

「阿阿。全員出来ちゃったのね。でも、僕が戦いたいのは貴様らじ
やなくって、竜太だけだから。消える。王の発砲隊」

前回あったときとは違って変わったしやべり方をするジエイソンは、
十本あるうちの指を全て八迫達の方に向けると、いきなり指の先か
ら発砲された。

「ぐぐぐぐぐぐ。」

「ふが。。。」

八迫と亮祐は、次の瞬間、地面に倒れた。

お茶と煎餅が、床に落ちた。

「さあ、僕。僕と一時踊っていただけませんか？シャル・ウィ・ダ
ンス？」

竜太は、膝をついた。

「あれ、やっぱり景品とかないと燃えないタイプ？やっぱり僕の偽者
だ。そんなところまで似てるんだね。じゃあ、景品は君の後ろのげ
すどもねえ。罪人の家。」

竜太の背後で地響きがあった。地面からは、よきによきと牢屋が
でてきた。そしてそれは八迫と亮祐を飲み込んだ。

「ところでさ。これも君の仲間とか言うげすな奴なのかなあ。さっ
き僕の首に刃物当てた無礼な奴。」

「でてこい。剣に宿りし一つの魂。」

剣がその声に共鳴した。振るえて、折れそうなくらいに振るえたその時、一つの魂がでてきた。

「お呼びですか……。ご主人様。」

「あれを壊す。」

指さしたその先には、チェーンソーがあった。

「うぬう。では僕も味方呼んじゃおっかな。でてきておくれ。侵撃手。宿りし魂、たすけておくれ。」

竜太と同じ様なペンタクルがジェイソンの真下に現れた。光は青。

侵撃手は、龍撃手の色違い、魂も色違いだった。強さは、同じだろう。

「そして、王の鎧を君たちにも。デスファンファーレ。」

強さは……。負けた。以前の兜もあれば……。

「古代の守護品、鎧全ての真紅の光へと……。」

なぜだか、竜太は呼び出すとき、言葉が同じだった試しがない。それに決めぜりふも本人は忘れているだろう。とにかく、竜太達にも鎧が付いたわけだ。

「世界も仲間も全部まとめてお前から帰してもらおうぞ！」

「あははー僕に勝つたらだよ。りゅーたくん。」

続く

俺は仲間が消えたことが悲しい。

取り戻すために、元凶を破壊する。

今回はあまりにもグロいところがありましたことをお詫びします。
その変わりと言っては何ですが、中編、どうぞ。お読み下さい。

短期集中スペシャル中編第壹弾【第二弾移行未定】
切り裂きジャックは赤点禁止！

六月末

本部に竜太が負のオーラを取りまとして入ってきた。全員が何事かと驚いたが手を見て判断した。紙を持つていたのだ。それもちようどプリントサイズの紙を。理緒は気を取り直してそしらぬ顔でシュークリームを食べた。悶太は、掃除のつづきを再開し始めた。亮祐は、ガッツポーズを作ってから午後ティータイムを楽しみ始めた。皆、関わりとやっかいなことを知っているからだ。その中で八迫だけは掃除用具箱を開け、箒を取り出した。そして竜太の方に近づくといきなり突っついた。

「この馬鹿、あほ、どじ脳なし。お前のせいで俺が賭に負けただろ
うが。」

亮祐はコップを机におくと八迫の方を向き、

「おれの勝ちだから、お前が今日おごれよ。」

八迫は涙目で竜太の方に向き直ると

「来い。みっちり特訓だ。今度はこんな点数取らせはしないからな
あ……。」

竜太の手を引っ張る八迫は頭から煙がでていた。なのに、一行も動こうとしない竜太を見て八迫はついに大爆発した。

「とつととこつちに来ーい！この怒阿呆」

竜太は顔を上げると涙目で公表した。

「やっと、四十点以上取った……。」

その言葉を聞いた八迫は手を離すと、亮祐の方を向き、

「俺の勝ちだ。朝昼晩飯付きでお前の家に一週間泊まってやる。」
勝ち誇った顔でそう言う八迫に亮祐は、

「ふっふっふっふっふっ。馬鹿はお前だ。八迫。竜太の持つテストをよく見る。」

ぐるっと回ってテストを見た八迫はうめき声を出した。

「な．．．なに．．．」

「分かっただろう八迫。その四十三点しかないテスト．．．一見見るとお前の勝ちだが、教科は技術家庭だ．．．それは、どういう意味を持つか分かるな．．．八迫。」

「阿阿。せつかく読者に僕のテストをばらすまいと隠していったのに、何で言っちゃうんだよ亮祐！」

三つ巴の戦いの火蓋が斬っておろされたときだった。

八迫は亮祐に賭で負けた恨みと賭に負ける原因を作った竜太に対する恨み、竜太は亮祐に点数を言われた恨みと八迫と亮祐の賭の対象にされた恨み、亮祐は八迫に勝った嫌がらせと竜太に対する嫌がらせがおもな原因となった。

「あほらしいですね。理緒さん。」

「ほーんと、あほらしいにもほどがある。子供ね。」

ひそひそ声で言ったにもかかわらず、地獄耳の三人には聞こえた。

『きこーえたぞおー。お前らもかああ！』

三つ巴が五つ巴に変わったのはこのときだった。

「分けもない争いの種を作ったのはお前カーお前カー」

「ちよ．．ちよっとー。僕まで恨まないでくださいー。ぎゃあ．．．
．ぎゃあああああああ。」

切り裂きジャックは赤点禁止！ 終わり

第七話 最上階平田竜太の階＋おまけ（後書き）

次回、存在しないシロ編クライマックス！

竜太は仲間を無事に仲間を救えるのか……。

竜太は無事に地球という星を守るのか……。

竜太はジェイソンの鎧に勝てるのだろうか……。

竜太は本当に男なのか……。

こつご期待。【一部分のみ嘘が混じっております。】

第八話 存在しないシロは存在しない（前書き）

存在しないシロジェイソン十三日は金曜日編、完結！
竜太は、かき氷が無性に食べたくなった・・・。

第八話 存在しないシロは存在しない

おまけ

短期集中連載中編小説第二弾

切り裂きジャックの全員休日

第三十八回切り裂きジャック親睦会報告書 報告者中片亮祐

七月終旬夏休み 東京都内安浦方面の大人気テーマパークデュズミ
ーランド内にて

「きゃっほーうー！パラレルデュズミー！夢の王国、デュズミーランド今夏限定パレード、真夏のパラレルカーニバル実施中！先着二十万名様に、真夏のミュツキーグッツ【非売品】をプレゼント。明日から始まるニューパレードをお見逃し無く。」

亮祐が、真剣にテレビに釘付けとなっっているその時、八迫は亮祐に声をかけた。

「おい。亮祐。お前まさか今度の親睦会……………」

亮祐は立ち上がって答えた。

「今度の月曜日から水曜日まで、全員が予定を開けておくように。親睦会、今年はデュズミーランドに行く。」

それを聞いた竜太は青ざめた顔で亮祐に効いた。

「デュ…………デュズミー…………ランド…………。本当に行くの。あんな所に。」

竜太の記憶には新しい出来事がフラッシュバックする。そう。学校で言ったデュズミーランドで竜太はパラレルワールドへと行き、メインキャラクターのミュツキーとミュニーに殺されかけたのだ。詳しくは第一シーズンの珍しく学校行事をメインにしたお話を読んだら分かる。しかし、何話かはすでに忘れてしまった。

切り裂きジャックの全員休日

終わり

本編

切り裂きジャックは殺しません！謎の学生竜太君

存在しないシロ編 or ジェyson編 or 十三日は金曜日編【どの呼び方でもどうぞ】ついにファイナーレ！いきなりあらわれた謎の切り裂きジャック、彼らは切り裂きジャックを名乗った偽者だった。竜太達は竜太そっくりの人物ジェysonをはじめとする偽者を倒し、世界を救えるのか【もしかすると日本だけしか守られないのかもしれないけどねー】。ついに始まったジェyson対竜太。王の鎧をつける彼に竜太は古代日本の鎧を身にまとう。果たして今回で完結してくれるのか……。さもなければ夏休みスペシャルが出来ないぞ。

第七話【……………だったよね。確か。違った？】存在しないシロは存在しない

ジェysonは竜太が向かってこないと知ると地面に落ちた煎餅をつかんで食べ始めた。

「ぼーり、ぼーりぼーり。」

皆無の世界で煎餅が齧られる音だけが響く。

しまいには玉座の後ろに回り、二袋目を開け食べ始めた。においは、醤油の臭いで充満した。

竜太がたって、煎餅の袋を斬りつけ、煎餅が辺りに落ちたことでジェysonは嬉しそうに言った。

「やったあ。りゅーたやつと僕と遊んでくれるんだね。はじめはダンスから。行くよ。」

チエンソーをかまえ直すとジェイソンは踊っているかのように電源が入ったチエンソーを振り回す。そのリズムには一定の法則があった。しかしそれに竜太は気が付かない。

じっと見ているだけで、竜太は気持ち悪くなってきた。ついには床に嘔吐した。

「ふふー。僕の十八番。剣の舞じゃなくてチエンソーの舞。すてきでショー。みいーんなこれを見ると気持ち悪くなって、僕に斬られちゃうんだ。」

やっと顔を上げてみたジェイソンの顔は、青いライトのせいか、残酷で、寂しげな顔をしていた。

「燃やせ。」

それをつぶやくと竜太はこっさり手を伸ばし落ちていた煎餅を一枚食べた。二枚三枚……。とてもおいしい煎餅だった。

「ねえ。竜太。君はこんな前座だけで満足しろと言うの？何でなの……。」

煎餅が手から落ちた。ジェイソンの鎧からは、もうもうと煙がでていた。

久々に想像の力を使った。

「凍れ！永遠の氷海。」

ジェイソンの足下は凍り付き、やがて全身が凍り付いた。

「龍撃手。斬れ。龍。燃やせ。」

そう言い残してもう一度下を向いた。急速冷凍させた鉄を急速に燃やせば、爆発することをなぜか竜太は知っていた。次の瞬間、どれだけ燃やしても燃えなかったジェイソンは燃えていた。どれだけ切っても切れなかったジェイソンは切れていた。断末魔の叫びとも思える叫びが空間を支配する。

「ぐぎゃああああああああああああああ」

燃える肉体で、ジェイソンは竜太に歩み寄ってきた。何で・・・何で・

・・・とジェイソンは聞く。その声はまるで赤ん坊だった。

「僕と踊ってくれるのは君しかないんだよ。僕もお友達がほしいだけなのに・・・。何で・・・何でみんな裏切るの・・・。嫌だ・・・嫌だあああああああ！」

その絶叫とともに、シロは揺れ動いた。罪人の家もとたんに崩れ去り、理緒と悶太が駆け寄ってくる。

龍撃手は消え、魂も戻った。理緒とここから逃げようとあれこれ頭をひねったが良い案が浮かばない。あたりはがれきに包まれようとしている。そして一つのがれきが落ち、床に当たって砕けたところで竜太は思いついた。自分が空想の切り裂きジャックだと言うことを。こんな事をしては物語上違反だろうと竜太は思うが、自分たちの命を優先した。

「開け。本部への道。このシロから、つなぐれ。」

何でもありなんだなあと理緒はしみじみと思う。悶太は、こんな早くにでてくるなんて、少しは出し惜しみしろよ。物語上。と思った。それはさておき空間がさけた。

「早く。行かなきゃ閉じちゃう。八迫と亮祐を。」

竜太は理緒に・・・。アルティメットインビンシブル暴力女に頼んだ。

「嫌だ・・・みんななくなっちゃう・・・。また・・・独りぼっち・・・」

本部へとつながる空間の裂け目からみた部屋は壊れきっていた。

本部へとつながる空間の裂け目からみたジェイソンは泣いていた。

本部へとつながる空間の裂け目からみたシロは、崩壊していた。

生存者は・・・いない・・・。

船は海から消え去った。この出来事も船と同時に記憶から・・・。しみじみと思つた竜太はカレンダーで目が止まる。7月13日金曜日。「今日が十三日の金曜日・・・。だったのか・・・。」
ふと電波時計をみると日付は変わり、朝の七時だった。

カレンダーをみると一人一人の予定の部分竜太と理緒は終業式と書かれていた。

「な……理緒……早く行かなきゃ……終業式が始まっちゃ……」

後ろを向くと理緒の姿はなく、変わりにメモがおかれていた。

「今日、学校アルから行くねー。遅刻しないように。バイバーい。」

竜太が

遅刻すると信じて理緒」

竜太は読み終わるか終わらないかのうちに制服に着替え、本部を飛び出していった。

「行ってきますっ」

ベッドの上では八迫と亮祐が話していた。

「絶対間に合わないよなあ。」

「絶対に。」

ベッドの上でクウクウ寝息を立てる悶太をみて、亮祐は答えた。

存在しないシロ編 or ジェyson編 or 十三日は金曜日編

終わり

やっと取り戻した彼らは、いつものように接してくれる。
こんな日が毎日続くと良い。

第八話 存在しないシロは存在しない（後書き）

磁界より夏休みスペシャル。．．．．．人間界からではないでしょうか。っていうか磁界からって．．．。

第九話 夏休みスペシャル(前書き)

今回は珍しく……と言つか初の短編集でお送りいたします。どうぞごらんあれ。

第九話 夏休みスペシャル

第八話 夏休みだよ！終業式【初の短編ばかりなんだなこれが夏休み記念スペシャル！】

夏休み一日前 校長の話はなぜ長い【終業式を含む】

「～であるからして・・・」

さつきから三十分はこの校長は話を続けている。立っている身にもなつてほしいのだが。すでに教師陣もあきれ果てた顔でげっそりとしている。・・・三十五分になった。すでにチャイムはなっている。本当だったら、もう下校時間だ。しびれを斬らした教頭がついに動いた。

「はい。校長先生。もう時間ですのでお引き取り願います。」

校長は仏頂面になつて答えた。

「えー。これからが本題なのにー。」

校長はブーイングをしつつも、教頭に押されて退場した。

二分ほどして、教頭が戻ってきた。

「これにて終業式を終わります。」

言っている途中に校長が戻ってきた。

「なので、僕はその時思つたんだ。」

教師陣は、急いで生徒を退場させた。

「ちよつと君達ー。まだ話は終わってないんですけどー。給料下げるよー。いいのー。」

すでに四十分は越えていた。

クーラーのがんがかかった本部で竜太は言った。

「ホーンと、校長つて長いよね。話。どーしたらあんだけはなし長

くなるンだーってのー。」
八迫はソファーで小説「切り裂きジャックは殺しません番外編巻壱」
を読んでいた。

夏休み一日目 花火大会【竜太のときめきも含む】

夜空に、大きく儂い花が咲いた。電気も何もないこの場所が、ポツ
ト一瞬明るくなる。隣にいる理緒の顔を見て竜太は赤くなった。そ
れも、漆黒は隠してくれた。

ドーン………

また一輪、咲き誇った。亮祐は、悶太を肩車している。悶太は大は
しゃぎしている。いつもは切り裂きジャックとして頑張っているが
悶太はまだ、小学生だから。八迫と亮祐はともかく、理緒と竜太は
中学生だけれども。本人達が言うには、切り裂きジャックとして訓
練を行う際に全ての課程を卒業したと行っているのだが……。

「竜太、俺、悶太と屋台の方に行ってるから。」

亮祐は竜太にそう告げると悶太を肩車したまま、屋台の方に向かっ
た。

「ほい。」

八迫はラムネのビー玉がはまっている原理が分からないらしく奮闘
していたがやがて、手でピンを割った。そしてでてきたビー玉を夜
空にかざした。そのビー玉は、打ち上げ花火の最後の光まで、きち
んと映し出した……。

夏休み五日目【一部四日目を含む】 竜太宅宿泊

全員で、ババ又キをしている。竜太の部屋で。結果としては、理緒
悶太、亮祐八迫竜太の順番になった。何でこんな事になっているか
というところ。

特にそちらの子、ガールフレンドかしら。」

「いいえ。腐れ縁です。」

夏休み十日目 呪いの人生ゲーム【八迫の出任せ含む】

とある小学校で、二人の少年は普通の会話をしていた。

「なあ。知ってる？あの人生ゲームで遊ぶと、変なおじさんが見えるらしいぜ！」

「うん。知ってる。あれってさ……」

二人はそう言いながらもランドセルを背負って下校した。

電柱の上で聞いていた八迫は、鼻で笑ってつぶやいた。

「都市伝説……。ふふふ……」

夏休み十八日目【一部第一シーズン桐原須藤戦、次回予告を含む】

ガルガンティア

「出来た……。侵略機械巨兵ガルガンティア……。そう。お前はガルガンティアだ。銀河の誰よりも賢く、銀河の誰よりも強く、銀河の誰よりも賢く、銀河の誰よりも優しい。それがお前なんだ。ガルガンティア。」

「ぎ……。ぎぎ……」

ガルガンティア。そうなずけられた機械兵は、嬉しいのか、誰にも分からないが、返事をした。一人の博士が侵略機械兵を完成させた。博士は、銀河で急増している事件を防ぐため、このガルガンティアを製作した。しかし、いくら賢いとはいえ、機械にウイルスは付き物だ。ガルガンティアはその日のうちに理性と優しさを失った。狂ったガルガンティアを防ぐためのバックアップシステムも作っていた。機械にウイルスは付き物だと、いつも思っていたからである。しかしそれは作った博士ですら手が出せない代物だった。機械兵は様々な星を食らいつくした。もちろん、博士は一人目の犠牲者だった。

た。やがて、兵力を付け、理性を付けた機械兵は、様々な星をさらに食らいつくした。そんなとき、地球と呼ばれる星から強靱な力・・・覇道を感じた。それは、機械兵ではまだまだかなわないそれこそ機械兵などではかなわないような覇道だった。機械兵はいったん地球付近の星から離れ去り、別の地方で腕を上げた。今なら、あの覇道に勝てるのではないか。そう思った機械兵は、自らの力を試すべく、地球へと飛来しようとしていた。地球の日本の近畿地方の三重県の鈴鹿市に住む、平田竜太ら切り裂きジャックの本部へと・・・。機械兵は行った。

夏休み二十九日目 他世界からのデスコール【再び八迫の出任せ含む】

とある小学校ではある噂がはやっていてそれは他世界からのデスコールという噂だった。

電話の着信音がいつもと違う・・・そんな着信があるという。それは死に神を名乗る犯罪者からの電話で、それを聞いた者は泥棒に入られると言ったものだった。

「なあ。あの噂ってかかってくると泥棒の犯行が全て暴かれるじゃん。それで対策をすると後で多額の請求が来るらしいんだよな。」

「へえ。そうなの？」

二人の小学生は、ランドセルを背負い、通学路を家へと向けて歩いていく。

電柱の上では八迫が苦笑いをする。

「これも都市伝説・・・。ふふふ・・・。」

夏休み後一日【正確に言うなれば睡眠時間含む九時間半】 阿呆の竜太は宿題を思い出す

本部で趣味の日記を付けていた理緒は日記の文字が歪み、椅子から

落ちた。

本部で掃除をしていた悶太はちりとりからゴミがでて、扇風機によつてばらまかれる。

本部で読書をしていた八迫は本を落とし読んでいたページを忘れた。本部でラーメンを食べていた亮祐は丼を落とし体にスープと麺が飛び散った。

あれもこれも全ては竜太のせいである。竜太が鞆に入っていた宿題の山のことを思い出したからである。夏休みテストもここからだと知って吐いたのに。今回は気合いを入れて頑張るぞと意気込んでいたのに。結局、今日までの夜更かしの疲れは、ここに来て付けとされた。従つて、宿題は終わらなかつた。

二学期一日目 校長の話はいつも長い【今回はなぜ短縮されている？】

「皆さん。おはようございます。夏休みは楽しかったですか？私は皆さんが元気でまたできてくれて嬉しいです。これで私の話、そして始業式を終わります。」
どうせ長くなるだろうと予測していた教師陣含む全員は耳を疑つた。あの校長の話がこれで終わり・・・？と。しかしその恐怖は直ぐに崩れ去つた。

「それでは校長の幕開けと題した話を・・・。」
結局、終わったのは尻が痛くなつてから・・・より二倍は長かつただろう。

二学期三日目 竜太は予想道理になつた【もちろん赤点だ】

.....

竜太はテストをみてこう思った。

しかし、何とか全力で頑張つたのだが・・・。

今日も本部では竜太が八迫に勉強を教えてもらっている。

お話の終わりに【何でこんな所に書くんだろう】

今回、ソファーで八迫が読んでいた番外編、近日公開予定です。八迫と須藤の昔話です。まあ、亮祐の出番は・・・あるんじゃないでしょうか。題して番外編第壱部RED・DLACKです。八迫と須藤の因縁が読んだその瞬間ほんの少し明らかになるはずです。

夏休みが終わり、体験したことが山のようにあった。
どれも俺の宝物。

第九話 夏休みスペシャル（後書き）

機械兵は、すでに大気圏に突入した。

激闘に次ぐ激闘・・・今度は温泉にでも入れてやるうかと計画中。

変身不可能になる。そして、竜太以外がガルガンティアに掴まり、
竜太は死者の門へ。死者の門からでてきた竜太のジャックに変化が
・・・そして、ガルガンティアは、自爆宣言をして・・・。

第十話 ガルガンティア侵略宣言！【また侵略ものかよ】（前書き）

今回はガルガンティア編にくわえて中編小説のセットでございます。次回からは中編小説はありません。これを機に、中編小説・・・一話完結の物語【多くても前後編】だけで作った切り裂きジャックは殺しません番外編を作りたいと思います。一部は、八迫と須藤の過去縄家で、全部等して分かるような所もあるようにしたいと思っております。がんばれ一話完結物語！ではこれからの本編ガルガンティア編、お楽しみ下さい。五話ぐらいで終わるようには頑張ろうと思っております。だいたいそんなもんかなあと思ったりしてるもので。

第十話 ガルガンティア侵略宣言！【また侵略ものかよ】

第十話 ガルガンティア侵略宣言！【また侵略ものかよ】

前回までのあらすじ【ジェイソン編】

切り裂きジャックへと戻った竜太は、本部へと向かった。その本部で付いていたテレビに映ったものは、突然の侵略宣言をする竜太達そっくりの黒の切り裂きジャックだった。竜太達はもちろん駆けつけるのだが、ゲームバンに吸い込まれてしまった。一足遅く来た理緒は、船に潜入し、ゲームバンのペンタクルを破壊する。こうして全員が船にそろったその時、竜太そっくりの偽者ジェイソンは存在しないシロへと竜太達五人を誘う。そこであったことは、本物と偽物の存在意義をかけた戦いだった。最上階でジェイソンを倒した瞬間シロは崩れ去った。そして、展部中学校では、終業式が控えているのだった。

前回夏休みスペシャルにでてきた機械侵略巨兵ガルガンティア。強い覇道を、感じた彼は、自分の力を極限まで高めた今、竜太達切り裂きジャックに挑戦すべく、大気圏へと突入し、地上から見えるまでも迫っていたのだった。そしてガルガンティアの背後には五つの棺がともに、飛来しようとしているのだった。

突如、日本に限って都市機能が前提視してしまった。それにくわえ全てのテレビ、ネットワーク、ラジオが侵略された。そして流れたものは全て同じものだった。

侵略機械巨兵ガルガンティアが次ぐ

この土地は機械兵ガルガンティアが支配した。

切り裂きジャックと名乗る五人組よ

貴様ら七人居ないと日本の平行は保てないなどともうしている。

後がまを捜し出す前に俺が倒して見せよう。
切り裂きジャック。おとなしく侵略される。

その音の、文字の羅列だけが永遠に流れた。竜太達切り裂きジャックは、ガルガンティアの侵略を防ぐべく、ガルガンティアのまつ、てれびとうへと向かった。

「へんしーん。」

竜太が、ジャックがついたてを空に向かってあげた。
ぷすー。

ジャックから音がでてるだけだった。いつになっても変身は始まらない。竜太は他の亮祐、八迫、悶太をみた。しかし誰一人として変身したものはいなかった。ジャックではないにしろ、理緒もあるティメットインビンシブル暴力女になれるメリケンサック【一個につき一回変身可能】をつけてみたが、結果は同じだった。しかしじーっと待っているわけにも行かないと判断した亮祐が、部屋の倉庫にあったガレージを開けた。

「ふむう……。八迫、これまだ使えると思う？」

呼ばれた八迫は工具箱を持って完璧にメカニックおじさんになりきって向かった。

「うーぬ。これは……。もうちょっと待ってくれたら使えるようになる。待っていておくれ。その間に用意もしててくれ。」

メカニック担当の八迫は、ものの五分で直してしまった。

「さあ。行こう。ジャックの専用車、ジャッカーにのって。」

あまり良いネーミングセンスではないようだった。昔の切り裂きジャックは。

「こいつは俺と悶太が作って、名前を付けた車だからな。」

昔ではなくなって、今の切り裂きジャックのネーミングセンスがないのだった。

「普通に凶器とかは使えるんだし、行きましようか。

理緒が武器とは言わずに凶器と言いなながらジャツカーにのりこんだ。竜太は龍魂剣を抱えて乗り込んだ。

悶太がビーストレイクの片割れトラベラーを腰にさし、乗り込んだ。『あー。あー。こちら栗柄八迫。ジャツカーメインコンピューターさん聞こえますかー。どうぞー。』

マイクを握り質問すると機械音が流れた。

「ビービー。ガギギギ……。コチラ、ジャツカーメインコンピューター。ナンデスカ、ドウゾ。」

『今空から飛来して空中に滞在してる機械兵についてのデータがほしい。送ってくれどうぞー。』

しばらく計算しているような音が車内に響いた。

「ガルガンティア、ディアーハカセガツクツタセカイノヘイワヲネガウヤサシク、リセイノアル、サイキヨウノロボット。シカシバグニヨツテスベテガハンテン。イマハタダノシンリヤクキカイヘイトナツテイマス。」

亮祐が鍵を見つけて戻ってきた。ジャツカーに鍵を差し込むと、エンジンが動いた。

「ガルガンティアニムカツテシュツパツシンコウシマス。」

地下道は、鼠によって侵略されていたが、ジャツカーがライトをつけるのと逃げていった。

「ココガガルガンティアノマシタデス。」

電子音が鳴って、動かなくなった。

「まだ来ぬのか。切り裂きジャツク。早く来なければ侵略活動を始めるぞ。」

ジャツカーもガルガンティアによって支配されてしまった。竜太は

理緒は龍魂剣を汀なぎさを鞘から抜くとかまえて天井を斬りつけた。

次の瞬間、辺りは埃で何も見えなくなる。ぼーっとしていた竜太は飛び跳ねた。目の前に赤い炎上の光が見えたからである。それはガルガンティアの目とも言えるものだった。いつもは淡い緑色をしている。人体を体温で感じ、距離をつかむ。しかし、目が赤く光り出すと人体発火光線もであるのであった。まさに今がその時だった。

「お前があゝの覇道の持ち主か。・・・散れ！」

とつさに飛び跳ねた竜太は地上にでた。よく見ると全員がいた。空中に浮かぶ透明な棺にとらえられていた。

「貴様らの仲間はあそこにいる。齡は堂だ。私の足元にすら及ばなかったぞ。ふふふ。見えるな。そして空の棺が一つある。あそこにお前を入れられれば、私が銀河で一番の覇道の持ち主となる。」
急に声をかけられた竜太は硬直した。

「ビーストレイク金剛飛礫こんじゅうついで。」

竜太を避けて、それは辺りに突き刺さった。地面が割れる。地面が落ちていく。竜太もまた、地面とともに落ちていく。

「覇道を使わぬまま、もう終わりか・・・。やはりこのガルガンティアが銀河一の覇道使いだっただな。」

竜太は目をつぶったままジャンプした。空に向かって。ガルガンティアの頭上めがけて。龍魂剣を思いっきり振り下ろした。
当たらなかった。

目を開けるとそこは、暗黒しかなかった。声が聞こえる。

「平田竜太よ。貴様はガルガンティアを倒したいのか？」

声の質問に答えることが出来なかった。本当に自分は倒したいのか？理緒を、亮祐を、悶太を、八迫を救いたいのか？それでも便宜上竜太は一つの答えを言うしかなかった。

「はい……。」

声は直ぐに返答した。

「今のお前には迷いしかない。これからでてくる門をくぐりかえつてこれたらこの死者の面をやるう。生きて動くものならば、お前に迷いがなく、絶体絶命の時、必ず力を貸すこの面を。」

しかし、つけはあるからな。」

竜太は門をくぐった。看板はみなかった。………。見えなかった。

しかし看板には注意書きがされていた。

“この門、生人はくぐるべからず。くぐったが最後、生きては帰れない。くぐるな死者の門を。何人たりとも……。”

竜太はくぐってしまった。

俺がくぐったのは生者はくぐってはいけない門。

くぐったら最後、帰れる保証はない門。

短期集中連載中編小説

切り裂きジャックと夏の風物詩！

暗くした本部の会議室の窓には札が貼られていた。その札は、めつたに使わない、特殊な札だった。頃合いを見計らった八迫がラジカセのスタートボタンを押す。
ヒュードドドドロー。

いかにも夏と思わせる音楽だ。

理緒は顔を青くして……と言ってもらうそく三本だけなのでわかりにくい、小刻みに振るえている。アルティメットインビンシブル暴力女でも怖いものはあるらしい。

門太は半泣きの目で亮祐の腕に必死に掴まり振るえている。

竜太はほとんど死者状態。．．．と言うかこれは気を失っている
行った方が近いような気もするのだが．．．

しかし、八迫は話を続けている。

「五右衛門はその時、柳の木が揺れているのをみた。風も何も
ない暑い日だというのに。しかもその柳の枝が、おいでおいでを繰り返
しているかのように揺れ動くんだった。決して強喰わない五右衛門だっ
たのだが、次第に怖くなってきた。しかし村人に幽霊退治は任せて
おけとか気を張ったようなことを行ってしまったもんで帰れない。
仕方なく、柳の木の枝に近づくと．．．．．」

亮祐でさえ、唇を噛んでいる。そうしなければ、振るえてしまいそ
うで怖いからだ。悶太が隣にいるから、振るえるわけにも行かない
し．．．。八迫はますますテンポをあげてはなしを続けている。

「その時、五右衛門がみたのは、真っ白い袴を見事に着こなした
顔の青い．．．」

亮祐と悶太、理緒はとうとう根を上げた。

「もうやめろー。」

「や．．．やめて．．．」

「嫌阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿」

竜太はぴくりとも動かない。．．．死んでいるような気もしなく
はない。

「．．．これから良いところなのに。やめなきゃ駄目？」

首を傾げて聞く八迫に三人はそれって首を縦に振った。高速で。

「うぬぬぬぬぬぬぬぬ。仕方ない。」

さっと立ち上がってドアを開けようとするのだが、

「開かない．．．．」

亮祐達の方を向いて真顔で答えた。

まだ、八迫の与える夏の風物詩の恐怖は終わらないようだ。

切り裂きジャケットと夏の風物詩！

終わり

第十話 ガルガンティア侵略宣言！【また侵略ものかよ】（後書き）

これから八迫と須藤の物語、書き始めますね。しばしお待ち下さい。
しばし？ひよっとする途中で挫折とかないだろうか？僕の場合・・・
。。ちよっと考えるな。

第十一話 死者の面を守るもの（前書き）

切り裂きジャックは殺しません！

な．．．．．なんと！待望の映画化！

切り裂きジャックは殺しません！

眞石版海上舞闘会

STORY

夏のバカンスとして日本海に来ていた竜太達。海では負けない悶太が深くまでもぐって拾ったのは謎の石版。それは月を引き寄せる眞石版と呼ばれるものだった．．．。それを再び沈めようとする竜太達をおそう海底の猛者！竜太達は月が落ちてくる影響がでるまでに眞石版を封印できるのか！

NEW

海底の猛者という組織名の五人組の情報が入った！

アルティメットソードマスター

究極剣使い 眞幻想 《まげんそう》

魅惑の接吻 阿蘇雨竜

あそりゅうりゅう
げんりゅうたゆう

破滅の怪力 源流駄有

げんりゅうたゆう

鎌の申し子 半微志 《はんびし》

木偶使い 親鸞霧 《しんらんぎり》

の五人だ。果たしてどのような展開になるのか！

こうご期待！新しい情報が入り次第、この小説のはじめで連絡するぞ！小説の書き終わりにもさらに重要な情報があるぞ！

第十一話 死者の面を守るもの

第十一話 死者の面を守るもの

竜太は、歩いて歩いて一つの大きな部屋に来た。声が教えてくれた。「ここはモンスターハウス。いや、モンスターじゃないな。アンデットルーム？よし。そうしよう。とりあえず君の龍魂剣なら斬れると思うよ。ゴルビエーの体内でも倒したでしょ。」

「豪火龍。助けて。」

しーん。………。

「あ、言っておくけど君の力以外使えないからね。」

「龍魂奥義従事火柱。」

「ヴァアアアアアヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァッヴァヴァヴァヴァ！」

かなり大量のアンデットが死んでいく。

「龍魂流儀聖火大乱。」

きらきらと光る波がどんどん流れ出て、アンデット達を消し去っていく。しかし、真で数は減ったように見えない。それほど多い数だからだ。

「龍魂真義那波龍砂。」

「龍魂流儀聖火大乱。」

全てのアンデットを倒したとき、大きな門があったことに気が付いた。その門はすでに開け放たれており、竜太が次の部屋に入ったとたん門は閉まってしまった。

「よくきた。生人竜太。貴様は吾のこの死者の面を奪おうというのだろう。くれてやる。ただし。つけは大きいからな……。くくく

くくく。」

巨人ほどの大きさの烏帽子をかぶった何者かが竜太に死者の面を投げつけた。その仮面で竜太は最初前が見えなかったが、次第に見えるようになってきた。

「これで貴様は、契約を破ることは出来まい。」

瞬きをした。

そこはガルガンティアの目の前だった。

「霸道使いよ・・・貴様・・・また霸道を強靱化したというのか。戦いの最中に進化したとでも言うのか・・・。ふふふ。みとめてやろう。しかし、吾の霸道が一番だと言うことを、思い知るが良い。エヴァーニエン・サージエ！」

ガルガンティアの手のひらに目に見えるほど大量の霸道が集まってきた。

「これで、吾こそが、真の霸道の王となる。貴様のことは語り継いでやる。伝説のこの吾が好敵手ライバルとしたからな・・・。」
霸道は、手から離れ、竜太の方に投げられた。

「吾が真の覇道の王者だっ！」

戻ってきた俺は、やるべき事を見つけた。
それをやったら、午後のお茶だ。

第十一話 死者の面を守るもの（後書き）

ごめんなさい。映画化だなんて嘘です。ちょこーっとハイテンションなだけだったんです。すいません。本当に申し訳ありません。でも、この話は小説にしていつかお届けしたいと思っています。

第十二話 超多目的変身道具ジャックの変化（前書き）

死者の面をもらい受けた想像の切り裂きジャック平田竜太は死者の面を装着するののか？そして機械霸道使い、侵略巨兵ガルガンティアとの決着は？

侵略巨兵ガルガンティア編、クライマックス！

ガルガンティアを狂わせた恐怖のウイルスの正体とは・・・。

第十二話 超多目的変身道具ジャックの変化

第十二話 超多目的変身道具ジャックの変化

エヴァーニエン・サージエが竜太に襲いかかるうとする得、利き腕につけたジャックにメールが届いた。

「君のジャックは切り裂きジャックの力を出し切れるようになった。変身して、死者の面を着けるが良い。ただし、その代金はつけとなつて後でお前に請求させてもらう。地獄の反逆王マリーネ」

変身が可能になったと分かった竜太は最後まで読まずに、ジャックを空に掲げて叫んだ。

「へんしーーーーーん」

八迫はかるうじて意識を保っていた。竜太が叫んだのもきちんと聞こえている。

「あの馬鹿・・・変身できないことぐらい・・・もしかして時間流から消えたあるとき死者の面を取りに行ったとでも言うのか・・・。だとしたらなおさら、死者の面を着けるのを止めさせなければ・・・」

切り裂きジャック予備校に通っていたとき、八迫は教科書を結構読んだ方だった。・・・と言いか軽い読書にさつと読んだだけだった。でもきちん内容が入っていて、切り裂きジャックになつても決してつけてはいけないものも一例として載っていた。

デス・アイテム
地獄八千道具の一つ 死者の面 アンデット・マスク

これを着けたものは相当の精神力のあるものだ。もしくは、世界破壊など、大それた行動を考えるもの。しかし、それは一度はめると、契約を結んだことになり、後に払えないような莫大なつけが来る。

そのつけは、装着者の命だと言うことである。また、この地獄八千 デス・アイテム

道具はそれぞれ異なる力を持つ。それを全て付けられるものはただ一人、冥鄭王めいしょうおうイバいラらグぐただ一人である。その力は、あのジェイソンをも上回り、地球上に勝てるものなど存在しないであろう……。確か、こう記されていたはずだ。八迫は必死に思い出したところで再び、意識を失った。

「竜……太。」

竜太のジャックは、これまでは黄色と赤が中心とした色だった。しかし、今のジャックは黒と赤を中心としたクリムゾンダークとなっていた。そして、今までは竜太が気が付かなかったことだが、開くとそこには、様々な機能が眠っていた。竜太は変身途中に、一つのコマンドを選んだ。やがて変身が終わると選んだコマンドの発動条件を満たした。

壱、切り裂きジャックになること。

弐、他の装備品を全て身につけること。

参、以上で死者の面は発動する。

「切り裂きジャックは生者のために。死者の面は死者の浄化のために。」

竜太の顔に白い仮面が付いた。それは、目から頬に向かって赤い血のようなラインがはいり、目のしたには行く本ものすじが入った仮面だった。

「霸道使いは……。吾だ。今更仮面なんてものつけたところで遅い。」

竜太は右の手のひらを上に、左の手のひらをしたに向けてつぶやいた。

「生きてもいない、死んでもいない、哀れな機械兵を侵略というような支配から解きはなたん。二界統一」

右手をあげた手には剣のつかが、左手には刃が乗せられていた。

「死者界、人間界。二つの世界をねじまげん。暫撃炎道」

つぶやいたとたん、ガルガンティアは、右手と左手が消えていた。

「貴様、それは霸道ではないだろう。反則だぞっ！」
そう言いながらも口を必死に開けた。その奥では黄色っぽい光がちかちかしていた。

「エレニカ・サンヴァレン」

口から発射されたそれは、地面を溶かし竜太に向かって進んでいく。
「これにて、裁きは下った。安心しろ。貴様の罪もまた、浄化された。抵抗はやめい。」

バチバチと火花が飛び散るからだでガルガンティアは答えた。

「世界で一番の霸道は吾が持つ。この地に埋められた、伝説の光球^{ホーリー}は吾のものなのだ。」

それは竜太にはなんだか、分からなかった。でも、それを取られるとやっかいなので速めに斬りつけて終わらせようと思った。

「博士。貴方の研究データの元に導き出した解で、この地に眠る最後の光球^{ホーリー}は私のものとなる。アジシユベフォウイヤレギヤツフデフアシゴケラセフォ。」

何がなんだか分からない言葉で、ガルガンティアは、光球^{ホーリー}を導いた。そしてそれを食べた。

竜太のジャックに再びメールが届いた。

「死者の面は五分だけ使用可能。後十秒。」
消えた。竜太から、死者の面の気配は消えた。

「ハハハハハッハッ。最強の霸道ももう終わりか。たわいのない。こうなれば、最後の光球^{ホーリー}で消し去ってやる。ありがたく思え。」

ガルガンティアの失われた右手が、左手が、復活した。より殺戮の手に近づいて。より、血のにおいを取り巻いて。

「死ぬ。霸道使い」

右手が竜太の腹をめがけて伸びる。死者の面によって体力をほとんど使ってしまった竜太は、気づいていても反応することが出来なかった。

「これで、私が一番のは道使いかな？ふふふ。」

ガルガンティアは、右手に付いた竜太の血を鉄で出来た味覚のない

舌で舐めていった。

悪役はこうするものだ和本で学んだから。

「さあ。それではあの棺も壊そうかな？」

ガルガンティアが竜太に聞こえるようにわざと耳元で言う。

竜太は「止める。」と言ったが、あまりにも小さすぎて、その言葉は聞こえなかった・・・。

「エヴァーニエン・サージエ」

覇道の塊が、棺に六発、飛んでいった。

仲間も守れないかもしれない。

けれど、頑張つて俺は動く。

第十二話 超多目的変身道具ジャックの変化（後書き）

次回、侵略巨兵ガルガンティア編完結！

瀕死状態の一步手前の切り裂きジャック竜太は棺を守り抜くことが出来るのか？そして、死者の面のつけとは……。そして、ガルガンティアを暴走させたウイルスとは……。

第十二話 とうとう期待

第十三話 光球の力自爆宣言（前書き）

ガルガンティア編、完結！ガルガンティアの中からあらわれたウイ
ルスはいつたい……。

そして、棺に放たれたエヴァー・ニエン・サージェは！切り裂きジ
ヤックは殺しません！

第十三話 光球の力自爆宣言

第十三話 光球ホーリーの力自爆パワー宣言！

棺に向かって霸道弾が飛んでいく。竜太は、何とか体を動かすと、棺の前に竜魂剣をかまえた。

「竜魂奥義、赤猫守護」レッドキャットガードディアン

竜魂剣から赤い光がでてきた。

ガルガンティアは不気味に笑うと

「最大出力」ホーリー 光球発動。」

レッドキャットガードディアン

赤猫守護は脆く崩れて、竜太は地面にたたきつけられた。

と言っても地上六メートルぐらいなので、大した怪我はしないのだが。

「霸道弾によつて散るが良い。」

竜太に向かって霸道弾が放たれた。

「ぐっ。」

竜太は目をつぶった……。

バキバキバキバキッ！

竜太は目を開けた。

「大丈夫ですか、主よ。」

豪火龍がでてきて、龍魂剣を操っていた。

「そして、早く安全なところに待避して下さい。」

ガルガンティアは会話中の隙を逃さなかった。

アルティメットチャーター
「限界超越！」

竜太の目の前で、龍魂剣は豪火龍とともに、折れた。辺りには、龍魂剣の欠片が行く片にも重なって、輝きながら、音を立てて、落ちた。

「……………」

ガルガンティアは竜太の目の前にきた。つまり、龍魂剣の欠片を踏

みつぶした。

「これは資源ゴミかな？ぎぎいぎぎぎぎいぎぎぎぎ。」

竜太は下を向いた。龍魂剣の鞘だけが、手元にある。でも、入れるものは何もない。役に立たない。竜太は怪我のことを忘れると鞘を持ってガルガンティアに向かつて、鞘をたたき込んだ。

「でりゃあああああああああああ」

ガルガンティアの頭脳回路にメシメシツと言う音が響いた。それと同時にガルガンティアは、一瞬ショートした。その隙を竜太は見逃さなかった。ガルガンティアと同じ行為をしてやろうという浅知恵からだった。しかし、そのショートは本当に一瞬だけで、ガルガンティアは動き出した。しかし、鞘がたたき込まれたところは、ちょうど理性の部分だった。

「これより、自爆します。棺とともに。」

ガルガンティアはそう言うのと地上六メートルの所にある八迫、理緒、亮祐、悶太の棺を、自分を中心として、東西南北に並べた。

「カウントダウン開始。これより、切り裂きジャック殲滅にかかる。」

竜太は何とかしようと辺りを見回したが、何もない。鞘しか……。竜太は突然、ひらめいた。今まではガルガンティアの怪電波によって切り裂きジャックになれなかったが、今ならなれる……。竜太はもう一度変身しようとした。死者の面がはずれたときに変身も解けてしまったためだった。

後五秒

「へんしーーーーん。」

竜太の私服が消える。上着が、ズボンが……。靴下が、靴が、下着が……。

「想像の切り裂きジャック、平田竜太参上！」

後一秒

「デカ黒子ビーーーーーム、金剛柱三日月！」

デカ黒子ビームをガルガンティアに、金剛柱三日月を棺に向けて発

射した。

ガルガンティアはさらに空中に。
棺は地上に。

大爆発で、辺りは見えなくなった。

竜太の頭上から一枚の異文明のディスクが落ちてきた。そのディスクから、映像がでてきた。

ガルガンティアを製造した博士だった。

「このガルガンティアは本当は銀河の平和を救うために作られたものだ。シカシと中でウイルスが入ってしまった。それに私は気が付いてはいたのだが、大丈夫だろうとふんで、放置して作ってしまった。その結果がこれだ。ガルガンティアを壊してくれてありがとう。・・・」

博士からのメッセージは途中で終わってしまった。

空中で爆発してしまったガルガンティアの体内にあったものなどが降り注いだためだった。

それと、人型の何か。これが博士の言っていたウイルスなのか・・・
。 竜太は目を疑った。ウイルスがしゃべりかけてきたからだった。

「お前が俺の寄生物を殺したのか？じゃあ、お前もまた、殺してくれる。」

ウイルスが、触手を伸ばして竜太の手足の自由を奪った。
「これで終わりだ。」

竜太の周りでは、理緒、八迫、悶太が寝ている。亮祐は。

「おい。ウイルス。お前の方が終わりだぞ？」

亮祐がウイルスの頭にアドベンチャーを突きつけていた。

「くぐつ。お前、いつのまに・・・。」

「ウィーアーアドベンチャーズ。」

ウイルスの頭をアドベンチャーが貫通していた。

「これが本当のウイルスバスター。」

ガルガンティアと、それに寄生していたウイルスは、退治されたと知って、竜太は安心した。

「ふふうふうふう・・・。」

はつと疑問に気づいたりゆうたが亮祐に質問した。

「はいっ。先生！」

びしつと指さし亮祐は答えた。

「はい、竜太君・・・って、俺先生？」

「先生は何で起きてるんですか？」

「あの中にいるとき、ずっと寝ていたからです。」
「・・・・・・・・・・。」

竜太は返す言葉もなかった。

ガルガンティア編完

助けられた喜びは大きい。

その後の、みんなでのことを考えるともっと嬉しいよ。

第十三話 光球の力自爆宣言（後書き）

次回、切り裂きジャックは殺しません！音音長邪の魔笛編突入！

第十四話 音音長邪の音色（前書き）

ガルガンティア戦が終わり、切り裂きジャックは、病院で休養中だったのだが……。

第十四話 音音長邪の音色

第十四話 音音長邪の音色

ねおんちやうじや

ねいろ

ガルガンティア侵略から二日後……。

八迫、悶太、理緒、亮祐、竜太の五人は、切り裂きジャック専門病院ホスピタルジャックに入院していた。ジャッカーは専門の車業者に頼んで直してもらったり……。でも直せなかったものもある。ガルガンティアが放った霸道弾エヴァーニエン・サージエによってえぐられた、地面だ。そればかりは、何もできなかった。

竜太は、寝ているとき、何かの音を、ここ最近毎晩聞くようになっていた。

八迫の脳内にも、それは響いていた。そして、その音色とともに、誰かがしゃべりかけてくる。

「さあ八迫。君の本当の力を出すんだ。君の力はあの力があってこそなんだから。」

竜太は、それを知らない。亮祐も、理緒も、悶太も。八迫だけが知っている。この声は、桐原須藤だと……。そして毎晩のように聞いた音色は、次第に八迫の意識と、理性をなくしていった。その度に音色はやんで須藤の言葉だけが響く。

「さあ。君はもう僕のものだ。暴れる。栗柄八迫。」

音色は止まらない。支配を止めようとする、精神力も、次第に消えていく……。

ある日、八迫は暴走した。

「グルルルルルル。ウガアアアウウウウウッ！」

いち早く気が付いた理緒と亮祐が捕まえる。亮祐は悶太に頼んだ。

「八迫が暴れている理由を突き止めて、止めさせてくれ。」

悶太は、うなずくと竜太の顔面にスリッパを投げつけ、起こした。

「ふげでっ！」

顔面にスリッパの跡を残した竜太が起きあがった。

「にやに？」

亮祐は、面倒くさいという顔で竜太の方を向くと、悶太に言った説明をもう一度言った。

「八迫が暴れている理由を突き止めて、止めさせてくれ。」
今度は棒読みだった。

悶太は竜太の手をつかむと病室から出るために、ぐいぐい引つ張つたが、小学生の力で中学生を引つ張るのは無理があった。

「いけばいいんでしょう……。」

竜太は仏頂面で退室した。

「ウガアアアアアアアアアアアアッ。ドルルルルルルルル。」

あたまのなかにながれるすどうのこえをとめようとするが……

・

竜太は、頭に笛の音が響いていた。悶太の頭にも。それは病室では強く聞こえ、今、病室から遠ざかるにつれて、笛の音は弱くなっていく。

「なあ。悶太。笛の音色、聞こえてるよな。」

悶太は立ち止まると竜太の方を向いて答えた。

「うん。」

竜太はホームズのまねをする。

「と言うことはだ。ワトソン君。」

「僕ワトソンじゃなくて、モリアーティが良いのに……。」
なかなか渋いところを突く悶太だった。

「今回の事件、遠ざかる笛の音色……、真実は見つかったよ。」

最後の方は、もうやけくそだった。

悶太が変わりに答えを言う。

「今回の事件、犯人は、病院にいる。」

八迫は、暗い、深い海の底にいた。

ここなら誰にも分からないんじゃないだろうか。

そう思った八迫のほおには一筋の涙がこぼれる。

須藤を止められなかった悔しさ、悲しさ……。

それらが今、体の外にでていくような気がした。止めようと思って
も勝手に流れ出る。

八迫は、深い、暗い海の底にいた。

「須藤……。」

八迫はやっと一言漏らした。

まだあいつが生きていた。

そんなこと、今まで知らなかった。

第十四話 音音長邪の音色（後書き）

次回、あいつが再登場！

第十五話 闇の淵から（前書き）

あいつが突然、病院にやってきてしまった。生きてはいないはずなのに。きちんと、決着をつけたのに……。いつの間にかあいつの文字が、画面上にあらわれてしまった。何であいつが？ いったい、誰があいつを出したんだ……。誰が脳を支配して出させたんだ。

第十五話 闇の淵から

第十五話 暗闇の淵から

竜太と悶太は、病室に戻ってきていた。

「ウガアアアアアアアアア。ウグルルルルルル！」

八迫が、金色の駒を身に纏わせ、暴れている。

「ウウググググウガアアアアア」

八迫の咆哮が、花瓶を割った。

竜太は、院長室に向かった。

ドンドンドン……………

ドンドンドン……………

何度もたたたく。あまりに急いで動いたりしたものだから、包帯は、

真紅に染まっていた。

ガチャ。

院長室が開く。

そこにいたのは、ガルガンティアの中にいたウイルスだった。

「ほう。お前はあの寄生された奴を助けにきたのだろう。入れ。」

ウイルスは、部屋に竜太を入れる。竜太が部屋に入った瞬間だった。

あの音色が鳴り響く。

ぐわーんぐわーんぐわーん。

ぐわーんぐわーんぐわーん。

ぐわーんぐわーんぐわーん。

「うぐ……………やめ……………ろ。」

次第に意識が遠のく。けれども竜太はそのままウイルスに近寄ると、

シンナーのびんをなげた。

「ぐわ……………貴様……………寄生してやる……………」

ウイルスがさらにヴァリユームをあげる。

けれども竜太は今度はピンセットの束を投げる。

竜太のジャックをはめている手が火傷している。竜太が気絶することとを、死者の面が許さない。

気絶しそうになると、その度に、死者の面が入っているジャックがものすごい熱を出す。竜太の手から煙がでる。急いでシンナーのビンに手を突っ込んだが、そのビンの中の液体は一瞬で蒸発した。竜太が膝を突いたその時。

院長室の扉が開いて、霊が実体化したウイルスに当たる。

「君の役割は、もう終わったんだよ。」

竜太が後ろを振り向くとそこには……………

「ウガウアアアアアアグルルルルルル。」

金色の鎧を纏った八迫は、病室の中のを壊しまくる。辺りはくずだらけになっていた。

「ぐ……………き……………ら……………ど……………ど……………」

ウイルスはしゃべりかけて、故障した。

「桐原須藤……………」

竜太はつぶやいた。そう。目の前には桐原須藤が仁王立ちで、竜太を見下ろしていたのである。

「ねえ。竜太君。君ってこんなに弱かったっけ？僕をあそこまで追いつめた君が？ああ。もしかして、君、弱くなっちゃったとか？」
言い終わった須藤の右手から血がたれる。

「桐原……………須藤……………」

ビーストレイクをかまえた亮祐が、金剛飛礫を放っていた。
ぐるりと後ろを向いて、須藤は言った。

「ああ。亮祐か……………。ふふ。僕にこんな子として……………怒っちゃうよ？本当に。」

そう言っただけで血がついたてをべろりと舐めた。

「ふふふ。でも僕もまだ完全じゃない。安全でもないけどね。だからそろそろ帰るよ。またね。八迫によろしくー。」

目の前の空間を壊すと、須藤は消えていった。

亮祐は、ビーストレイクを落とすとつぶやいた。

「桐原・・・須藤・・・」

それは先ほどと同じ台詞だが、その言葉が持っている意味としては全く違うものだった。

須藤がしたことは大きい。

俺は、許せないから、立ち向かう。

第十五話 闇の淵から（後書き）

桐原須藤の登場によって始まってしまったかこの死闘！切り裂きジヤックとしての任務もする中、竜太と理緒の学校は共同文化祭の季節がやってきて・・・なんと今度は五人一組で屋台バトル？
怒濤の文化祭編飯ころご期待！

第十六話 今年もやります！文化祭（前書き）

竜太達に、一足早い、秋の祭がやってきた。

今回ははめを全て外して遊ぶことだけを考えて作っちゃったから、あとの部分でぼろが出るだろうな。これだと。許してね。

第十六話 今年もやります！文化祭

第十六話 今年もやります！文化祭

教室は、もはや女だけとなっていた。いや、これは言葉の文というものがあろう。正確には、教室はもはや女に女装した男子生徒四人だけとなっていた。だろう。その中で、一人だけ、裾をつかんで下を向いていた男がいた。ご存じ平田竜太だ。

隣には、男らしい女に見えるように塗り固められた、栗柄八迫がいた。

「何で俺がお前の学校の学園祭なんかに……。。」

「でも八迫。前林間学校に付いてきたじゃん。それと同じだよ。」

「でも……。何で俺まで？」

その隣には兎のぬいぐるみを抱えさせられた男がいた。

「ぷ……。ううう。」

竜太は押し殺して笑っている。

「くぐうううう。」

八迫は頑張つて息を止めている。

それは中片亮祐だった。

「何で俺がこんな恰好しなきゃいけないんだ？」

「だって俺らのグループは男装したコックに、女装したウェイトレスの逆力フェなんだもん。」

竜太が自分の服をみて、付け足す。

「メイドの。」

亮祐が兎のぬいぐるみの耳をもって竜太に殴りかかろうとしているとき、亮祐のスカートを誰かが引っ張った。

「ねえ。これって何なの？どうつけるの？やって。」

悶太がゴスロリ風ドレスで近づいてねだる。

それは本当に可愛かった。

「おら。とつとと働け。準備をしろ。」

ダンディーなマスターコック理緒が鍋を片手に近づいてくる。振り回すオプシヨン付き。それは悶太をみて変わった。

「きゃーかわいいー。めちゃくちやすてきいー。悶太君！」

亮祐からリボンをひつたくと、理緒が悶太に結びつけた。

そのうちに、店は繁盛していった。竜太の級友達が遊びに来てはやし立てたり。その度に理緒が下剤入りのドリンクでもてなす。理緒から言うに他のお客様のための犠牲と、それなりになりきっていた。そのうち悶太の級友もきて、一緒に手伝うというので手伝ってもらったりもした。もちろん恰好は、理緒チヨイス。さらに客はきて、品物が足りなくなったりすると、亮祐が買い物に行かされた。もちろん恰好は、理緒チヨイスしかもいつの間にもやら、宣伝のピラも作ってあって、それも渡された亮祐は、なかなか帰ってこなかったが、理緒はそれを見越して半分以上食材が残っている状態で行かせたらしい。

ちなみにメニューは至って普通だった。

カフェ逆転〜男が女で女が男で〜

メニュー

メイドが送るネーム入りオムライスー

480円

ゴスロリプレゼンツスペシャルカプルス

280円

ダンディーマスターのダンディーコーヒー

280円

兔メイドのピヨンプヨンプヨンプ見餅【季節はずれ】

380円

八迫メイドのクッキー ハーフ

350円

ダンディーマスターおすめモーニングセット

580円

兔メイドの兔のぬいぐるみ お持ち帰りのみ 限定五セット

1250円

……メニューは普通だった。

亮祐が帰ってきたときには、亮祐はボロボロだった。

「ダ……ダライラマー」

意味不明なこともつぶやいている。確かかなり前に新聞で……

文化祭は始まったばかりだ。

一方屋上で

「みんな何やってるんだろう。」

双眼鏡でのぞいた須藤は首を傾げた。

「これが文化祭なの……？」

須藤には乙女心というか……アルイン暴女心がいまいち分からないのだった。

手には、ウメのおにぎりが握られていた。

「うん。酸っぱいね。これ。」

普通の人間のように笑う桐原須藤だった。

前半は終わった。今度は竜太達が遊びまくる番なのだ。さあ。まず

はじめに行くのは！

理緒の希望で、お化け屋敷だ。悶太は亮祐と手をつないで進んでいく。竜太は両手で顔を隠して進んでいく。時々手の間から目が見える。八迫は、エンブレムコーヒーの新商品ペットボトルDEエンブレムカフェ・オ・レを飲んでいる。

「うーん。まあこんなものか。」

八迫は予想道理の味だと言わんばかりに、ふたを閉めた。

「うらめしやあ」

血だらけの幽霊が八迫の腰に手を伸ばす。

パシッと八迫は幽霊の手をたたく。痛がる幽霊に八迫は一言。

「痛がっていると言うこと、そしてさわれると言うことから、人間である。」

冷静にまとめた一言だったが竜太はふと気がつき、八迫に問う。

「それって、逆じゃない？」

確かに竜太の言うとおりそれは逆だ。しかし、八迫は竜太に言われたことで、そこら辺にあった石を持ってきて、竜太に投げた。

「ふげぶうっ」

竜太は言葉の最後に入れる記号も忘れて、倒れた。

「りょーすけ。」

悶太が、亮祐の手に必死にしがみつく。とても怖いからだそうだ。

「裏飯やあっ！」

最後の幽霊が、食堂へと案内してくれたこともあって、お昼はそこで、竜太はカツプラーメン。なぜか食堂にあつてはならないもの。

亮祐はお好み焼き。悶太は、オムライスで理緒は、大食いチャレンジャー！石焼きビビンバ、八迫は、コーヒーによく合うコーヒーに入れるミルクを頼んだ。しかも、こんなにやく粉末入りでお腹もふくれるかくして楽しんだのだが、悶太が、最後に生きたいと行ったところがあった。それは、巨大！毎年恒例決して誰もでられなかった伝説の迷路再び・・・今年も破れるものはいないこれは、断言しておこう。と言う長ったらしい名前の迷路だった。八迫、理緒、竜太は

一人で。亮祐と悶太は、やっぱり一緒に迷路には行っていった。しかし、結局でてこれたのは、途中で亮祐とはぐれてしまった悶太だった。こうして、巨大！毎年恒例決して誰もでられなかった伝説の迷路再び……今年も破れることはないこれは断言しておこう。今年で敗れ去った。来年からは、去年一人だけしかでられなかった伝説の巨大迷路、リターンズ……今年は一人もだしはしないに変わるだろう。

毎年誰もでられなかった迷路から他の人はどうやってでたか。それは、敗者はこちらという挑発的な看板に従っていけば、でられる。と言っわけだった。

こうして、今年の文化祭は、作者の面倒くさいからと行ってカットしてしまった部分を、番外編で収録すると約束して、終わるのだった。

翌朝 本部に、一通の手紙が送られてきた。

切り裂きジャック様一同へ

今週中に南方の廃城へときていただけませんか。今度こそ決着を望みます。

ジャック代表ジエイソン

黒の切り裂きジ

物語は、なぜか悪い方へ、悪い方へと向かっていくのであった。

ついこの間の出来事が、遠く思う。

そして遠く思ったことが、ついこの間のこと。

第十六話 今年もやります！文化祭（後書き）

次回、ジエイソン・・・黒の切り裂きジャック、再び登場！

桐原須藤の生存。黒の切り裂きジャックの挑戦状。このまま行くと、ガルガンティアの遺産編まで出しちゃうんじゃないかな・・・？はっ！今後のことを少しばらしてしまった・・・？この際だから行っておきます。ねたがなくなったわけじゃないんだから！まだ、十三個もねたあるんだから！そろそろ死者の面のつけを出しても良い頃かなあ。それとも、桐原須藤との決着をつけるべきかな？やつぱり、ガルガンティアの遺産が優先的かな？ああ。でも砂の王国でのヴェルガ三神隊との話も・・・。ああ。でもそれより三王の殺しあいかなあ・・・。迷う日々です。間を取ってピヨ金とか、アルイン暴女とか、ライトンとか、環境の話とか・・・。でもやつぱり竜太が優先的になってる今日この頃。

第十七話 哀れ。ジェイソン星となる（前書き）

ねえ。今回はこんな話でも良いですか？たまにはこんな話も良いでしょう。ねね。今回だけは許してよ？次回から長編ストーリーリー龍魂剣の反乱編をやるからさ。これ、今日思いついた・・・ひらめいたばかりの新作だから。今回だけは、許してね。

これからは、桐原須藤にまつわる話をします。

一つ一つの編とかがって書くけれど、桐原須藤倒すまでが大きなクエスト！そう・・・クエスト！題して

帰ってきた桐原須藤編出すから。今回ばかりは！

第十七話 哀れ。ジェイソン星となる

第十七話 哀れ。ジェイソン星となる。【表向き】

暗い雲が、一瞬光る。そして稲妻が、城を一瞬にして、廃城と化した。城に住むのは黒の切り裂きジャック。稲妻は、切り裂きジャック。憎きこの戦いに、今、終止符を打ってやる。

ぴんぽーん

至って普通のチャイムが、城にとどろく。

「いないのかなあ。ジェイソン。」
挑戦状を受け取った竜太達切り裂きジャックは五人でこの城まできた。

ジェイソンはおそろおそろ、顔を出した。

「御免ね。竜太君。いや、竜太以外に御免なただけ……。今、僕一人しかいないんだ。」

八迫がにらんで聞く。

「つまり、カツコつけて呼びつけといて、お前以外の誰もいないと？」

ジェイソンが「話早くて良いねえ。」とばかりにうなづく。

「亮祐。悶太。ビーストレイク。」

亮祐と悶太からビーストレイクを借りた八迫はジェイソンのこめかみに当てた。

「ふざけんなあああああああああああああああああああ」

一瞬のうちに、ジェイソンは帰らぬ人となった。

竜太は、木魚をたたいている。

ぼくぼくぼく……ちーん

むなしい音が、その場に響いた。

「ねえ。これからみんなで、エクドナルド行ってさ。ご飯でも食べようよ。」

竜太の提案に、みんながうなずく。

廃城からでていった切り裂きジャック。

ボッコボッコッコッ！

地面が盛り上がって、ジェイソンがでてくる。

「くそつくそつ。切り裂きジャックめ。許さないぞ。口の中まで土を入れたお前らを。」

ジェイソンがじたばたしながら半べそで言う。

なんだか今回は、とても暇な話となってしまったのであった。表向きは。

彼は以前より何とというか、あれで。

俺は時間を割く意味もなかったきもする。

【裏向き】

「僕が、本物だ。」

棒きれを振りかざし、叫ぶジェイソン。竜魂剣の鞘でそれを押す竜太。

「僕が。本モノ。」

木がめきめき音を立てて折れ、鞘に顔面激突した。

「へんぶらだつちゃあー。」

竜太はジェイソンをみて一言。

「終わり。」

俺は何のために呼ばれたのか。
そう聞くのを忘れていた。

第十七話 哀れ。ジェイソン星となる（後書き）

だつてさ。五人分の戦い書いてると話長くなってーは完結が無理なんだもん。まとめようと思ってもそんなに書くの、無理なんだもん。だから今回ばかりは許して。新作、カロンの骨だしたから。結構シビアな作品に……なってるのかなあ。

第十八話 龍魂之反乱（前書き）

あいつのパーティーの準備は、全てそろった。

第十八話 龍魂之反乱

第十八話 龍魂之反乱

「でええええいっい」

竜太が龍魂剣を振りかざしてバルバキスを倒した。

「これでミッション完了です。主。」

豪火龍が言う。

「じゃあ、本部にきかん。」

竜太が龍魂剣を鞘に入れようとしたときだった。

ガタガタガタガチャ……………

「ぐぐう……………ぐ……………」

龍魂剣から豪火龍の声が聞こえた。

「豪火龍？」

竜太は急にだったので、龍魂剣から手を離れた。その次の瞬間、龍

魂剣は鞘から……………竜太の元から離れ、宙に浮いた。

「主……………離れて……………」

龍魂剣の中から豪火龍の声が聞こえた。

「龍魂基本技長刀払い」

龍魂剣は竜太の足下に、一撃を繰り出した。

「払い、払い、払い、払い、突きい」

最後の一撃で竜太は倒れた。

「ぐええつ。」

倒れた竜太の目線の先に黒い円状の闇があらわれた。

「やあ。竜太君。」

そう言って須藤は、竜太の胸に突きをした。

「うぐぐ……………。桐原、須藤。」

須藤は龍魂剣に近づくと、龍魂剣を握った。

「桐原須藤。」

龍魂劍は、操られた。

竜太の横に置かれていた物は、呪いのパーティー招待状だった。そこには、呪いのパーティー開催。八迫達もおいでよ。待ってるからね。そうそう。僕の剣を返してもらったよ。龍魂劍は。

パーティーは始まるうとしていた。俺は、呼ばれているのだろうか。

第十八話 龍魂之反乱（後書き）

次回より、桐原須藤決着編。呪いのパーティーへ、いざゆかん！

第十九話 呪いのパーティー（前書き）

パーティー開場へと、ようこそおいで下さいました。これより、パーティーを開催します。

第十九話 呪いのパーティー

第十九話 呪いのパーティー

「じゃ……じゃあ。龍魂剣はそのパーティーに。」

竜太は本部のベッドから急に体を起こして言った。

「そうだ。」

亮祐が冷静に言う。

竜太は棚にあった鞆を持って、立ち上がった。

「行かなきゃ。」

立ち上がった竜太は、ふらついて、こけた。

「竜太。お前はここで待ってる。龍魂剣は、俺と八迫と悶太と理緒で、必ず取り返してくる。必ず。」

竜太は泣きそうな顔で、ゆっくりとうなずいた。

「じゃあ、待っていてくれ。」

「と言った手前、これは恥ずかしいな。」

亮祐は、自分の手と足につながれた鎖をみてつぶやいた。

「お前のせいじゃないか。馬鹿。」

八迫が、自分にもつながれた鎖をみて、亮祐をにらんで、怒った。

「ふう……。林檎。」

理緒がくたびれた顔で、答えた。

「ご……ご……胡麻。」

理緒と悶太はしりとりをしていたようだった。

四人は、パーティーで早速掴まったのだった。須藤の畏だった。

数刻前。

「いか・・・なきや。」

本場で竜太が立ち上がり、パーティー開場へと、鞘を杖に、歩いていった。

一人分余っていたチケットを持ち、外へでた。

「魔幹線。」

チケットを床にたたきつけ、叫んだ。

すると、空間がさけ、魔幹線が、がたごとがたごとと音を立てて、竜太の前に着いた。

「才乗り下サイ。才乗り下サイ。」

竜太は、乗った。

「パーティー開場、パーティー開場。」

竜太はおりて、パーティー開場へと、入った。

「平田竜太。平田竜太。開場到着。」

会場に入ったとたんに、竜太の名前が呼ばれた。

「待っていたよ。竜太君。骨は、大丈夫ですか。」

振り向くと、須藤がにっこり立っていた。

「みんなは、牢屋で待っているからね。」

そして、手を引いて、竜太を奥へと入れる。そこにいたのは、いてはいけない者。死者であった。体の一部がない者。体がボロボロな者。様々だった。

「さあ。牢屋から、みんなを出してあげなさい。」

「竜・・・竜太。」

亮祐は十分に止めておいたはずの竜太がいたことによって驚いた。

「……………」

無言で鞘を振ると、鎖がたちどころに斬れた。

「さあ。これから本当のパーティーです。」

桐原須藤の力を制限していた鎖が、竜太によって斬られた。亮祐達を捕まえていた鎖が、それだった。

何をして良いのか分からない。

誰が守ってくれているのか、分からない。

第十九話 呪いのパーティー（後書き）

次回より、パーティー開場は戦乱の開場へと変わります。

第二十話 龍魂の持ち主（前書き）

これにて、桐原須藤のリベンジ編、完結。

第二十話 龍魂の持ち主

第二十話 決着！龍魂劍の持ち主

「龍魂劍。おいで。」

壁を破つて龍魂劍は、黒い・黒い鎧をまとつてあらわれた。

「主須藤。」

豪火龍が・・・黒い豪火龍ができて、須藤の隣にたった。

「竜太を消せ。」

「はい。主須藤。」

豪火龍は、竜太に容赦なく、襲いかかってきた。

「漆黒円状斬。」

竜太は、吹き飛ばされた。

竜太に駆け寄ろうとした四人の前に須藤が立ちふさがる。

「僕だけと、四人でパーティーを楽しんでみましょう。」

「く・・・。」

八迫は歯ぎしりしながら答える。

「僕は、本当の力を見せてあげる。ポルター・ガイストツ！」

辺りの物が全て動いて四人の方に投げられるかのように当たる。

「汀円回。」

理緒が汀を回して物体をはじく。

「ビーストレイクツ、円状抵抗。」

決壊をはって物体をはじく。

「それぞれーあっはははははははははは。」

須藤が体をよじらせて笑う。

「モップ叩き」

掃除用具に駆け寄ってモップを持ち出すと、駆け寄って須藤の頭を叩いた。

「へぐう・・・や・・・八迫。」

須藤は頭を抑えてうづくまる。

「これで幕引きだ。カルボーネ・エカスタン改。」
片手で頭を抑えて、必殺技を繰り出した。

四人はいきなり掴まった。透明な十字架に掴まっているような感じだ。

「空斬裂派。」

亮祐の体に何度も拳をたたき込んだ。

「裂派裂派裂派裂派あぁ。」

「がががふう……。」

「亮祐君。終わり。」

「裂派裂派裂派裂派あぁ。」

「ぐぐうう……。」

「八迫君。終わり。」

くると理緒と悶太のほうを向くとにたあと笑って、

「僕は君たちにはこれだけしかしないよ。風邪菌。」

理緒と悶太の口を開け、それを入れた。

「ごっくん……これで君たちは怖い風邪にかかったね。」

そして、竜太のほうを向くと、

「おお。頑張ってるなあ。竜太君。」

「止める、豪火龍。」

ボックスステップで漆黒円状斬を避ける竜太。容赦ない一撃をくわえていく豪火龍。

竜太は心を決めた。

ボックスステップしたまま、豪火龍から目をそらすと、左頬を向けて、

「金剛柱、三日月。」

静かに、そう言った。消えそうな声で。

そのまま終わりだろうと思った竜太はボックスステップしていた足を止めた。

「漆黒円状斬！」

聞いていないことに気が付いた竜太は、再びバックステップをしたが、龍魂剣の鞘で派手に転んだ。

「へでえ！」

それでも攻撃を止めない龍魂剣に竜太は鞘を前にかまえた。

ガンツガンツガンツガンツ！

鞘に何度も漆黒円状斬を繰り返す。

ビキビキツ

鞘にひびが入る。竜太は必死の思いで、鞘で龍魂剣を横になぎ払った。そして、鞘にしまい、縛り付けて放置すると、須藤の方に、かけた。八迫が落としたモツプを持つと、須藤に思いつきりたつきつけた。

バキィツ

モツプが折れて、須藤の首の角度が少し下がった。

「痛い……竜太君。」

モツプの折れた先を持つと、竜太の方に投げた。

「す……須藤！」

思いつきり、何度も須藤を蹴った、叩いた。

「アルティメットインビンシブル暴力脳天チョップ！」

ガン鈍い音がした。

「ぐ……なぜ……体調が……。」

須藤は、理緒のほうを向いて、うめいた。

「スパイは、体調をこじらせないように、訓練しているのよ。」

「ふふ……。僕の負け……。だ。」

そう言つて須藤は、倒れた。

「大変！悶太が……。」

悶太を助け出していた理緒が、悶太の額に手をやって叫ぶ。

「悶太が、凄い熱！」

その証拠に、悶太の額に一分ぐらい触っていた理緒の手のひらはうつすらと赤くなっていたからである。

いつの間にかふらふらながらも起きた亮祐は、悶太をおんぶしよう

として、理緒に手をはたかれた。

「あんたがこけて、悶太が怪我したら駄目でしょ。私がおぶるから黙ってなさい。」

理緒が抱いていくことになった。

八迫に肩を貸す竜太と亮祐。竜太の手には、刃もこぼれてポロポロの呪縛の解けた龍魂剣が、ひび割れて今にも二つになりそうなくらいになっている鞘に入っていた。

「すまぬ。許してほしい。主。」

「とりあえず、八迫と、悶太と亮祐と竜太、私以外全員を病院に入院させるわよ。」

「ゴホツゴホゴホ・・・はあ・・・はあ・・・」

苦しそうな悶太がぐったりと汗をかきながら、理緒の背中に倒れ込んでいた。

「これで・・・僕の勝ちだよ。」

須藤はゆらゆらと立ち上がった。

「竜太はどこだ?」

「お前は・・・誰だ。」

とてもでかい首なしのそれは、須藤の腹部に電気が流れている剣を刺し込んだ。

「我はガルガンティアに次ぐ二号機。そして貴様は御被い箱。死すべき。」

今彼がどうしているか、知らない。
今彼がどうなっているか、知らない。

第二十話 龍魂の持ち主（後書き）

悶太が、ひどい風邪を引いてしまった。病院へ、急げ。しかし、その病院にも、謎が残っていて。

トルキシアと名乗る無人飛行機の銃撃。それは、ロボットへと変形する。デイ阿博士のに号決め理アーサだった。切り裂きジャック専用病院で寝込んでいる患者、悶太を守り、メリアーサを倒せ。

第二十一話 空軍機より殺意を込めて（前書き）

悶太入院中に亮祐と、八迫のタッグ炸裂・・・してない・・・。
竜太、がんばれ。主役が奪われつつ在るぞ。

第二十一話 空軍機より殺意を込めて

第二十一話 空軍機より殺意を込めて

「貴様の情報、ありがたくちょうだいした。桐原須藤。感謝する。」
須藤が腹部を押さえてうめく。

「うかが・・・い・・・。」

「我が名は、メリアーサ。ガルガンティアに次ぐ二号機なり。切り裂きジャックを殲滅する、二号機なり。」

「メリ・・・アーサ・・・。」

その名前を知っているかのように、須藤はつぶやいて、倒れた。

「ディア博士は、息子を倒すためにも私を作ったのだ。桐原須藤。あの技は、貴様だけに食らわせるといふ目的ただ一つのために作った物だからな。しかし、切り裂きジャックは強いのだな。我の兄、そして貴様を倒すことを目的としたこの技を開発するのに七年間もかかったのに、使わずに、勝てたのだからな。成仏してくれたまえ。アーメン。それではさらばだ。」

「とうさ・・・ぐ・・・ほっ。」

「桐原須藤の死を確認。次期目標の平田竜太含む切り裂きジャック殲滅に切り替える。」

そう言ったメリアーサの形は飛行機に変わった。最新式の飛行機。追尾型の銃弾を搭載した、飛行機。それは、静かに宙に浮くと、空のかなたへ消えていった。桐原須藤の、冷め切った亡骸を、残して・・・。風が、意味もなく、ただ野次馬のように、吹いて、遠ざかっていった。

「またあなた達ですか・・・。いったいどれだけ無茶をしているんですか。」

病院の看護婦長がため息混じりの顔で、叫んだ。

「桐原須藤と決着をつけてきました。」

亮祐の疲れ切った声で聞いたその単語を聴いて看護婦長の顔が青ざめる。

「良いです……。行きますよ。悶太君以外は適当な治療を。悶太君は大変な風邪なようなので、集中治療室オホホに入れます。」

「その名前、何とかならないんですか……。」

理緒が冷たい顔で問う。

「オホホデス。」

竜太八迫、亮祐は再び前回と同じ部屋に、悶他は集中治療室オホホへと入院した。

「悶太……。」

悶太の安否をみようとして亮祐が行くと、理緒が椅子を渡した。

「座れば。けが人さん。」

「うん。」

亮祐は、三十分弱、悶太をみていた。悶太は、脂汗を流しながら唸って苦しそうにしている。

時々、単語をつぶやく。

「亮祐。」

と言つ信頼できる人物を呼ぶ声がほとんどだった。

悶太は不安だった。一人だけ、この部屋にいるから。いつもいてくれるはずの兄弟分の亮祐がいないから。

「ごほ……ごほ……。」

悶太が咳をする。

「ぐう……。」

亮祐が右胸を押さえてうずくまる。

ポケットを探つて薬を出し、飲んだ。

「はあ……はあ……はあ……。」

理緒がいつの間にかでていったのか、ジュースを持って帰ってきた。

「はい。」

亮祐は受け取る。

「あり・・・がとう。もう、帰るわ。」

亮祐は、何事もなかったかのように病室へと帰っていった。

病室に帰ると、まだ竜太と八迫は寝ていた。

あの看護婦長が入ってきた。

「亮祐君。治療するわよ。その持病の。」

看護婦長が、にっこり笑って亮祐の首に百乱刀を当てる。

「げえ？あなたもしかして・・・。」

名前を言う前に、百乱刀が首筋に当てられて亮祐が黙った。

「さあ。行きましようか。」

刻々とうなずいた亮祐にわざとらしく急所をはずし、峰打ちさせた。

「ぐう・・・。」

亮祐は、倒れた。

「亮祐君、そろそろ起きなさい。」

眼をあけると百乱刀ではなく、聖竜刀があった。

「先生、いくつ剣持つてるんですか。」

亮祐を学校で教えていた先生は、答える。

「君が生徒だったときは、三百。今は、千しえん。」

変なポーズを取って亮祐達三人の学生時代の教師先生は、病室を立ち去ろうとした。

「そうそう。もう君は退院ね。」

そう言い残して今度こそ、退室した。

亮祐は悶太の病室に行った。

「亮・・・祐。」

悶太は弱々しく亮祐のほうを向いた。

「悶太。大丈夫だ。もう、俺はここにいるから。お前が治るまで。」

と亮祐は言おうとしたのだが、途中までしかいえなかった。

「うわぁっ。」

病室が揺れた。

「でてこい、切り裂きジャック、ガルガンティアの恨みにより、私が貴様らを排除する。」

亮祐は、悶太の病室の窓から外を見た。

「くっ。」

亮祐はそう言うと、病室から出た。そしてジャックを取りに元自分の病室へと戻ると、竜太は寝ていて、八迫がジャックをつけていた。あれから八迫のジャックは、ジャックになれるほどに進化した。

「いくぞ。」

そう言っつて八迫は、変身して、窓の外へとおりた。

「貴様らが、切り裂きジャックか・・・。」

飛行機はまるで眼が在るかのようになり、八迫を、亮祐をみた。

「ふふ。では私の本当の姿を見せてやるう。変形。カラボラインネ。」

ガシヤンガシヤンツとロボットアニメの変形の音を効果音として自分で出して変形した。

「私は、ガルガンティアの後を引き継ぐ二号機、メリアーサ。私はおそらく勝てないだろう。君たちには。だから、僕は君たちのデータを全て取る。そして、テルターガンへと、受け継ぐっ！デラシア光球。」

カツと辺りが光り、地面がえぐれた。

「貴様らの回避能力、抜群。デラシア光球。」
よけようとした八迫と亮祐は、こける。

「ぐふ。」

「あふあ。」

「これで避けられないだろう。デラシア光球。」

「ぐぬう……。」

八迫が唸る。

「防御能力、……最強。八迫。情報、収穫。栗柄八迫データ、送信。中片亮祐、データ収集開始。」

「デラシア・ペリング！」

「遅い。メリアーサ。これで終わりだ。アドベンチャー叩き！叩き叩き叩き叩き叩き叩き叩き！ここは病院だ。場所と空気を読め。データ収集者！」

亮祐がそう言うのとメリアーサは亮祐の方にデラシア光球を吐いた。

しかし、メリアーサは頭から、オイルを流し、かろうじてデータを送信した。

「中片亮祐、俊敏力、攻撃力、激怒につき、七十パーセントアップ。以上、メリアーサより、テルターガンへ。データ収集。一文字悶太、及びアルティメットインビンシブル暴力女、及び平田竜太出現せず。桐原須藤との激戦の証拠なり。」

一瞬、メリアーサの頭に影が重なる。

「汀一太刀！」

理緒があらわれたが、全く傷が付かない。

しかし、メリアーサに再び影が重なった。

「全剣よ。あれを貫き、病院に静寂を。」

あの先生だった。メリアーサが二つに切れた。

「これにて、引き下がる。」

空中に浮かんだメリアーサは、爆発した。砲台と頭脳チップだけが残っていた。誰も気が付かなかったが、一体の機械が、それを回収しに。そして、体内に吸収した。

「これでガルガンティアの頭脳が在れば、理論上は、復活が出来る。どこに在るんだ。ガルガンティアの頭脳チップは……。」

と、機械音で、そう言って、消えた。

「悶太。」

亮祐は、アイスクリームを持って悶太の病室を訪れた。

そして、悶太のからだを支えて起こし、アイスクリームを食べさせた。

「おい・・・しい。」

悶太はそう言うと、せき込んだ。すかさず亮祐は、背中をさする。

「ありがと・・・りよ・・・すけ。」

四分の三を食べた悶太はそう言って再び寝てしまった。壁により掛かっていた理緒は亮祐に聞いた。

「亮祐。何であんたと悶太は、一緒にいるの。」

亮祐は、ため息を付いてから理緒のほうを向かずにはなしはじめた。

「悶太は、捨てられたんだ。俺が山で葡萄を採っているときに、幼稚園ぐらいの子供が泣いていた。話を聞くと、親は悶太が転んだうちに、走って逃げてしまったんだそうだ。捨てていったんだよ。それから、俺は葡萄を悶太にあげて、何とかおんぶして、屋敷まで帰った。じいやに頼んで、悶太の部屋も作らせた。でも、悶太は俺と口も・・・と言うか、誰とも口をきかなかった。食べ物も食べなかった。俺が窓から葡萄をおいてあげると、それだけは食べた。それから、布団に行ってくるまって泣いていたんだ。それからしばらくして、俺が部屋の前でドアをノックすると、俺だけ入れてくれた。そして、泣いた。そして、部屋から出ようとすると、手を握って離さないんだ。だから、俺の部屋と悶太の部屋を一番大きい部屋に変えた。それから・・・悶太は、ぽつぽつと話してくれた。そして、今の悶太がある。」

「・・・そう。」

同情したかのように理緒が複雑な顔で答える。

「まあ、今が幸せだから良いけど。」

無理に笑顔を作って答える亮祐だった。

悶太は俺達にいろいろ教えてくれる。
そんな悶太のことが分かって嬉しいよ。

第二十一話 空軍機より殺意を込めて（後書き）

悶太と亮祐の話は、切り裂きジャックは殺しません！番外編にて公開決定。第二部に決まりました。幼稚園の年中の一文字悶太と、しようがっこうのなかかたりようすけおぼっちゃmのおはならしいよう

第二十二話 魔法の杖を君に・・・（前書き）

中片亮祐は、道を歩いていた。

一文字悶太とともに。

二人はコンビニでアイスを買った。

帰路に着き、家が見えるまでそれは残っていたのに、家が見えると、アイスはどこかに消えてしまった。どこに行ったんだろう。悶太は亮祐に聞いた。

それはね、体の中に消えたんだよ。

亮祐は答えてくれた。

第二十二話 魔法の杖を君に・・・

第二十二話 魔法の杖を君に・・・

「ねえー亮祐え。暇。」

悶太がだだをこねている。

「悶太。まだ風邪が治ってないんだから、寝てなさい。」

悶太は頬を膨らましてふて寝した。そしてそのすぐ後に亮祐は悶太の病室から退室し、入れ替わりかのように竜太が顔を出した。

「やつほう。」

ふて寝していた悶太はがばっと起きあがり転げ落ちそうになる。

「うわわあつ。」

竜太が急いでキャッチしてベッドに戻す。

「悶太。下の売店でこれ売ってたからって、さっき亮祐がすれ違いで渡しておいてっさ。」

竜太はポケットの中から長い茶色の筒状の物を出した。

「魔法の・・・杖。」

悶太は興奮していった。そして振り回してベッドの上ではしゃぎだした。そこに、亮祐が戻ってきてしまった。それに気づいた悶太は、魔法の杖を持っていた手をゆるめてしまった。魔法の杖が飛んでいき、何も知らずに病室に入室した亮祐にゴグツという音を立てて激突した。

「悶太。寝てろって言っただろ。」

怒っていないかのように聞こえるこの台詞は、悶太にとってはとても怖かった。

「ごめん・・・なさ・・・。」

最後まで言う前に、亮祐は病室から退室した。

涙を流しながら魔法の杖を竜太に捨ててもらい悶太はつぶやいた。

「亮祐なんかいなくなっちゃえ。」

その言葉が本当になってしまったとは悶太は知らない。

悶太の一言でこの世から、
はいなくなってしまった。
存在すらも。言葉すらも。写真からも。記憶からも……。この
世の全ての人が、彼を忘れた。彼を消した本人、悶太も。

「ねえ悶太。何で泣いてるの。」

竜太が聞いた。悶太は、服の袖を目に当てた。服の生地が水を吸っていた。

「……何でだろう。わかんない。」

ごしごしと子供らしく涙を拭いた悶太は、にっこり笑って竜太に言った。

「この杖、竜太がくれたんだよね。ありがとう。」

竜太は笑い返して答えた。

「違うよ。それは僕じゃ泣くって……。僕じゃ泣くって……。僕・
・・なのかなあ？」

首を傾げて竜太は考えた。

しばらくして八迫がアルバムを持ってきて病室に入室した。

「在ったぞ。悶太。」

アルバムを開いて八迫は悶太に見せた。しかしそこには景色がある
だけだった。そこには今まで人がいたのに。

「これが俺で、こつちが須藤だ。あれ？須藤、何で二人しかいない
のにもう一人いるかのようにいないはずの所の首に手をかけてるん
だろ。」

そこに彼がいたことは、分からない。

「ねえ。これみて。汀に新機能塩振りキャンデーつけてもらったの。
このボタン押すと、塩振りキャンデーが出てくるの。凄いでしょ。
これね……。あれ、誰につけてもらったのかなあ。」

誰の記憶にも、彼は残っていない。
誰の心にも、彼は記されていない。
誰の運命にも、彼は交差していない。
誰のどこをみても、彼の存在はない。
誰の・・・
誰の・・・
誰の・・・
誰の・・・

そんな人間は、いない。
存在すら、消えてしまったよ。

第二十二話 魔法の杖を君に・・・（後書き）

アイスと同じように、
は消えた。

一文字悶太のそばから。

二人で歩いていたはずなのに。

魔法の杖を人振りすると、今までいたのにいなくなってしまった。

悶太は に聞いた。

けれど、答えてくれていた人はもう、いない。

それはね・・・と、この間まで答えてくれた人は、記憶から、
心から、存在が消えていた。

悶太は、誰にも聞こうと思っても、聞けない。

第二十三話

と悶太(前書き)

彼は、味噌胡瓜と名を変えた。

たぶん、それが自分の名前だろうと、思いこみ。

第二十三話

と悶太

第二十三話

と悶太

社長が謝罪している。今回の事件は、大人気玩具、魔法の杖バージヨンWWEXという物に魔法の粉を入れてしまったという手違いからおきてしまった事件だった。

「すみません。今回、私どもの手違いで、魔法の杖に、一度だけ願いを叶える薬を入れてしまいました。しかもそれは、リセットが効きません。皆さん、どうか、全ての魔法の杖を、本社に返品して下さい。代金は後日、返金しますので。」

どの杖にも、魔法はかかっていなかった。

名前が書かれていた杖に、社長、真北 利一は目を惹かれた。しかし、そんなこともすぐに忘れてしまった。

その杖に書かれていた名前は、一文字悶太。

「竜太。」

竜太は明日学校で漢字テストがある。その漢字を必死につるつるすぎて光り輝く脳味噌にたたき込んでいた。その竜太のじゃまをするのが風邪の治りきったと思われる少年、一文字悶太だった。八迫が部屋に入ってきて悶太を抱きかかえた。

「あつちで一緒にゲームしよーねー。」

棒読みのそれに竜太はついにノックアウトされた。

八迫は部屋の前に座って竜太を出さないようにした。

「こんなときにあいつは何やってるんだよ……。」
声に出して、ふと気づいた。

「あいつって誰だ？」

また声に出していつてしまった。すると頭の中に、誰か懐かしい少年の顔が浮かぼうとしていた。しかし、そこで記憶はとぎれざるを得なかった。竜太がドアにタックルして、ドアがはずれて八迫は下敷きになったためだった。

は暗い混沌の淵をさまよっていた。暗くて何も見えない。何も聞こえない。動けない。

「僕は誰なんだ。」

太股がかゆくなって書こうと動かしてみると、今度は動いた。しかしそれで新たな事実が発覚した。全裸だと言うことに。これをもし、悶太にみられたら……。いや、理緒だ。理緒にみられたら……。と思った。

「どうする……。どうするよ。」

自分の名前を言おうとして気が付いた。名前がない。

自分の親が付けてくれた名前が。いや、そもそも名前なんて付いていたのか。と、考えてみたけれどしょうがない、どう考えたって、今の自分には名前がないのだから。しかし自分のことを呼ぶのに私や、僕、俺じゃ変だ。名前を付けようと、は考えた。そして、自分が男か女か分からなくなった。

「男だ。」

事実を言った。そして名前が決まった。

「味噌胡瓜。」

味噌胡瓜は良い名前だと思った。

「……味噌胡瓜？」

味噌胡瓜は首を傾げ、意識を失った。再び、混沌の闇に意識を飲まれたから。

味噌胡瓜のことを俺も知らない。

何一つ、知らないんだよ。

第二十三話

と悶太（後書き）

悶太は山をみて何かを思いつきそうだった。その何かは、月が雲に隠されると同時に、再び隠された。

第二十四話

は味噌胡瓜になった（前書き）

貴方は、忘れていた大切な人はいませんか？思い出して下さい。大切な人を。

第二十四話 は味噌胡瓜になった

第二十四話 は味噌胡瓜になった

俺は味噌胡瓜。仮名だ。

「俺は何で……。」

生前の記憶が全くない。消えている。不可思議だ。

「味噌胡瓜……。君に真実を教えよう。」

淵が、光だし、淵ではなくなった。

「私は鷹斗。ここの守護者兼番人兼献立係だ。君がなぜここにきたのか、教えよう。君は、君が心を許した相手を覚えているかな。一文字悶太だ。彼に送った魔法の杖は、実はあれは不良品で、本当に一度だけ願いが叶う薬を入れてしまったんだよ。そして喧嘩した君に対して悶太はその願いを使ってしまったんだよ。」
そして味噌胡瓜に鷹斗は、真実を告げた。

「その力は、リセットボタンも何もない。君は、味噌胡瓜としての一生を送るんだよ。」

その真実は、味噌胡瓜に、あまりにもこくだった。

「それか、君が悶太に呼びかけるか。どちらかだ。」

味噌胡瓜は、覚悟を決めた。

「キュルルルルルウウウウウツウ。」

竜太が死者の面をかぶっているかのように本部の勉強部屋、竜太専用になりつつあるに入った。八迫が般若の面を着けて竹刀で首に当

ている。

「あはあ……。」

般若の面がかすかに笑ったような気もするのだが……。竜太は目をそらした。

悶太は頭を抱えていた。夢に出てくる、誰か。あれは誰なのか。

彼と自分は、いつも一緒にいる夢だ。誰なんだろう。そんなことを思うが、誰かも分からない。けれども、その彼は、必死に呼びかけてくる。

「なんだよおう、忘れちゃったのかよおう。ひどいなあ。悶太はあ。じゃあ、ヒントねえ。記憶が忘れてしまっても、心が忘れてしまっても、悶太のどこかに俺はいる。俺は、悶太のどこかにいる。それを悶太がどこなのか分からないだけ。だから、早く気が付いて俺達、パートナージャン！？」

「りよ……祐……。」

つぶやいた次の瞬間、悶太の頭が割れた……。かのようにがんがん……。がんがん……。ステレオを耳にくっつけて最大音量にして聴いたときのような……。ないけど。そんな音が頭の中に聞こえて、悶太は、その場で倒れた。偶然、ジャックがかつつ……。んと言っ音を出したため、八迫がすぐに出てきて、悶太の部屋……。の家の悶太と　の部屋のベッドへと寝かせた。

「りよ……祐……。」

それはうわごとのようにも聞こえたが、きちんと、その場に集まった全員の記憶の棚をこじ開けた。から……ん

記憶の棚の鍵がはずれ、四人の記憶に　が帰ってきた。

「悶……太……。」

嬉しくなって、　は、亮祐は、悶太に抱きつこうとした。だが、理緒が許さなかった。

第二十四話

は味噌胡瓜になった（後書き）

思い出せなくても、いないことはないはず。必ず、いるはずで
す。その人を決して忘れないように・・・。
須藤のような道を歩もうとしていたら止めて下さい。

第二十五話 封印されていた平行(前書き)

もう、この星は終わりだ……。

第二十五話 封印されていた平行

第二十五話 封印されていた平行

切り裂きジャックが、各地にいることによって、怪物の平行は、守られていた。

けれども、もう、期限は切れかけている。

ダークガーディアン 暗黒守護者は、七百年の眠りから、ゆつくりと眼を開けた。

「コノ世界ノ封印ハ解ケヨウトシテル。私ガ、コノ世界ヲ真ノ平行ヘ導ク時ガキタノカ。」

ダークガーディアン 暗黒守護者は、眼に力を入れ、腕を動かした。

「マダ動力ナイカ。フフ。モウジキダ。」

再び、目をつぶった。

ダークガーディアン 暗黒守護者は、手の鎖を心眼でみつっ、再び眠りについた。

「モウスグ、私ガコノ世ヲ劫火ノ世界ニ帰ラレル。フフフ・・ファツファファファ。」

その日、本部には暗い空気が漂っていた。

「ねえ亮祐。そのだあくがあでいあんって、なんなの。」

悶太が口に手を当てて幼い口調で聞く。

亮祐は、八迫がのぞき込んでいた本を持って答えた。

「暗黒守護者・・・ダークガーディアンは、本来俺等が日本各地にいることによって封印されていた化け物だ。初代ジャックが封印した代物だ。そして、この地に闇の炎で焼き尽くすものだ。うっかりしていた。そろそろ、封印が解ける頃だ。」

亮祐は、壁を思いつき叩いた。

「くう・・・。」

八迫は苦虫をつぶしたかのような顔で歴史の授業をまともに聞いて

いなかったことに後悔していた。

「歴史の授業を……聞いていればよかった。」

理緒と竜太と悶太はいまいちじっくり来ない。

「それってさ……」

ゴゴゴゴーン

本部がひどい地震で揺れた。

「し……震度は。」

理緒は、机の下から亮祐に聞いた。

亮祐は地震測定器をみて、答えた。

「これは、震度四で、……くそおおおう……」

亮祐は、その霸道を感じ取って叫んだ。

そしてしばらく立って、亮祐は顔を上げてつぶやいた。

「暗黒守護者が復活した。この……真上だ。」

ダークガーディアン

奴がやってきた。これからの平和はどうなるか分からない。

けれど、俺達だけしか、この平和は守れないんじゃないのか。

でも、それはもう限界まできているんじゃないだろうか。

俺は、まともなことを考えられなかった。

それは今でも、変わらないよ。

ジャック本部、深夜

「はい、今回は、特別にジャック本部の中の各自の部屋を案内します。」

リポーターの竜太が張り切っていた。

亮祐の部屋

「うひゃああああ。ここ、本がいっぱいある。……。あっちの方にはちよこつと、戦隊物のロボットと……。え？ピポちゃん？ええつと……。縫いぐるみが在ります。近づいてみます。……。も……。悶太がお昼寝しています。しかもその横には亮祐が、お昼寝して怠ますねー。いつでも仲がいい二人です。うらやましいです。僕もこんな風に仲良くできる彼女がほしいです。うう……。」

理緒の部屋

「ぎゃああああああ……。ここ、武器だらけですう。ひい、理緒の拳に掴まれたあ痛い痛い痛い痛い痛い……。ギブウ……。」

「五月蠅いわねえ……。人が寝ているのにねえ。」

「理緒がおきちゃいました。あは……。あはあああ。」

「死ねえええええ！」

X 竜太は死んだX

O 竜太の代わりに理緒がレポーターになったO

「ハイ、ここは私の超美しい部屋です。武器だらけで、いつでも侵入者を殺せます。」

竜太の部屋

「うわ何ここ、かび臭くて……。汚いいい。」

竜太の部屋では、なんときちんとした文章で、表しましょう。

理緒は一步部屋に足を入れた。滑った。

「うひゃあ。」

理緒がふんだのは、竜太のよれよれの汚い、……そう、一週間履き古したパンツだった。しかも、くしゃい。

「いやああああああああああああん。」

理緒は号泣して、部屋から出た。

八迫の部屋

「失礼します。あ……………」

「おお。理緒、何してる。夜中だぞ。もう寝ろ。」

「はい……………」

「結局、部屋みれませんでした。」

悶太の部屋

「まあ。絵本と、おもちゃがいっぱいあるわ。かわいらしい・熊ちゃんて統一されています。まあ。下着も何もかも熊ちゃんて統一。可愛い。そう言えば、悶太っていつも熊ちゃんの服しか着ていないようなきもするわね。」

極小コンマ短編その一 悶太の夜明け

「う……………うにゆ……………ん。」

悶太は亮祐の部屋に持ってきた布団で寝返りを打った。

「にゆふ……………」

悶太は眠い目をこすった。

「あれ……………」

部屋には誰もいない。

「……………ふえ……………ん……………」

悶太は誰もいない部屋でないた。

そんなとき、四人が入ってきた。

「悶太、お誕生日、おめでとう。」

悶太は泣いていた顔を上げて、にっこりとほほえんだ。

「ありがとう！」

今日は、悶太にとって初めての、四人で祝ってもらった誕生日だった。

第二十五話 封印されていた平行（後書き）

この危機を抜けることは出来ない。

吃驚しました。もう、おまけのぞいて、五十話、こえてるんですね
？ やっほうい。
楽しいな阿阿阿阿。

第二十六話 暗黒守護者先手必勝（前書き）

これにて、暗黒守護者の話し終わり。

第二十六話 暗黒守護者先手必勝

前回は、なんと五十回だったので、今回は五十回突破記念スペシャルで、暗黒守護者の話を一話で終わらせませう。短いんじゃないかと、長編をいつもは何話にも分けていたんですが、今回は、それを、一話に全部入れました。どうぞ、ご覧下さい。それでは、本編、どうぞ。

第二十六話 暗黒守護者先手必勝

「え……。」

竜太は聞き返さずにいられなかった。

「もう一度言うぞ。この本部の真上にい。」

そこまでで亮祐の言葉は終わった。

暗黒守護者が、攻撃を始めたからだだった。

「でてこい。切り裂きジャック。吾を封印した忌まわしき偽善者め。」

そう言った暗黒守護者は、本部の屋根に穴を開けた。

「行くしか……無いなあ。」

八迫は缶をつぶした。

「俺等はここで、理緒は個室で変身だ。」

「へんしーん。」

亮祐は、上品に悶太と自分の下半身にタオルを巻き付けた。

「さあ行くぞあう。」

竜太は張り切って叫んだ。

「変身。」

竜太の服は透けて……風が吹き付けて……以下略。

竜太と悶太は暗黒守護者をみて驚いた。身長が二百センチ以上逢ったからだ。

「ほほう。やっときたか。七分三十秒のロスだなあ。切り裂きジャックよ。」

暗黒守護者はそう言うと、手から暗黒力で空気を小さく圧縮した。

「この空気が元の大きさに戻ろうとすると、ふふ。はじける。空気^{エア}爆弾^{ボン}。」

「竜撃手、久々の登場だ。想像の力、キラキラ輝く太陽！そして久々、デカ黒子ビーム！」

久々登場のビームは跳ね返され、竜太は別の場所に穴を開けることになった。

「ムウ……。」

竜太は気絶した。

「八迫、行くぞ。」

亮祐は、手にアドベンチャーを持ち、八迫と突撃した。

「ダブル、串刺しKUSIZASHI！」

「雷撃砲飛礫援護。」

悶太は、トラベラーで援護した。

「怪力長剣汀本土風。」

理緒も、つつこんでいった。

暗黒守護者はにやりと笑った。

「フハハハハハハハハハハ。弱い。初代の半分力もないのではないか。これなら、第一形態でもありまるわ。暗黒地獄^{ダークネス・ヘル・ファイア}火炎。」

本部の上が火の海になった。

「亮祐、避ける！」

炎の中から八迫が叫んだ。

「何？」

聞こえなかった亮祐は聞き返した。

「上だ、上に奴が……。」

「ダークネス・デス
暗黒砲。」

その方眼のような物が放たれると、亮祐の腹部に直撃した。
クリティカルヒット

「うがあっ。」

亮祐が屋根で倒れると、暗黒守護者がその前に立った。

「ふはははは。二人目。」

そう言うと亮祐を鷲掴みにした暗黒守護者は、たたきつけようとした。しかし、そこに、飛礫が当たる。

「亮祐を離せえ……。」

悶太がトラベラーで攻撃していたからだった。

「こやつは、おまえの大切な奴なのか。」

尋ねられた悶太は、うなずく。

「そうか。ならば……殺してやるう。」

そう言い終わる前に、亮祐を投げつけた。

「ぐふう……。」

亮祐は、動かなくなった。

「汀抜刀一文字！」

理緒が背後から斬りかかろうと、かまえたその時、暗黒守護者の尻辺りから尻尾ができてきて理緒をつかんだ。

「貴様も同類。」

そして、本部の中に思いつきりたたきつけた。

「悶太、逃げる、早く。」

そう言った八迫は、本気で長刀を振り下ろした。

「無駄な。」

にらんだ暗黒守護者は、霸道で八迫を吹き飛ばし、悶太をみた。

「お前で最後だなあ。一文字悶太。」

暗黒守護者は、そう言うと、竜太が作った太陽に手を伸ばし、握りつぶした。

「暗黒太陽槍《ダークネスサンングングニル》。」

そう言った暗黒守護者は、悶太の首に槍を当てた。

「さあ、死ぬか、吾の仲間になるか。決めろ。」

「僕は、暗黒守護者の……」

暗黒守護者は不気味な顔で笑う。

「お前は吾の……」

悶太はうつむいていた顔を暗黒守護者に向けた。

「仲間じゃない、切り裂きジャックなんだ！」

トラベラーをかまえると、飛礫をもう一度撃った。

「仲間ではない!! 死だ。良いのだな。」

背後に瞬間移動した暗黒守護者に悶太は言った。

「僕は切り裂きジャックなんだ。」

「残念だ。お前なら、家臣になれそうだったのにな。」

ぎよろりと眼を悶太に向け、腰を曲げて視線を逢わせると、つぶやいた。

「お前もたたきつけてやる。」

右手で捕まえると悶太をたたきつけた。

「ウギユウ……」

「アロロロウイ。【主を良くも】」

暗黒守護者の足下で竜撃手がかまえていた。

「アロウワロイサン。【斬る……斬る!!】」

「ふん、そう噛みつくな。弱気者よ。槍一閃。^{クンクニル}」

「ア……ロロウ……。【いつ……のまに……】」

「これで、切り裂きジャックは全員ですねえ。弱い……それにしても、その小僧が吾の配下でないところに納得がいかない。」

瓦礫が崩れる音がした。暗黒守護者はその音を立てた方を向く。

「ほう、まだ立てたか。骨を折ったつもりだったが、手加減しすぎだったようだ。」

「当たり前だ。まだ終わってないから。お前に勝つからな。」

瓦礫から立っている人間に向けて、暗黒守護者は羽を広げた。

「では、敬意を表して、吾は第二形態にならせてもらう。平田竜太、

栗柄八迫、中片亮祐、アルティメットインビンシブル暴力女。」

「ちよつと、何で私だけコードネームなのよ。」

暗黒守護者は口調を変えずに言った。

「本名を知らないからだ。」

「じゃあ、体にたたき込んでやるわよ。」

暗黒守護者は、理緒の背後に立ち、耳元に口を付け、つぶやいた。

「遠慮、する。」

そう言うと、空高くにまい、腹部にある口を開けた。

「暗黒太陽槍《ダークネスサン||グングニル》乱射刺^{ゲボンデュー}。」

竜太は、それを見ると、ジャックを空にかざした。

「^{デス・アイテム}地獄道具死者の面、装着っ！」

竜太はそのまま、暗黒守護者の背後に立った。

「我が家ともいえる場所を破壊し、そして、我が家族同然の物を傷つけるその行為、万死に値する。その罪を、死で償ってもらおう。

反竜魂剣無惨斬り。」

竜太は暗黒守護者を何度も斬りつけた。何度も何度も。

「ぐふああ……。」

暗黒守護者の手から槍が放れた。

「許さぬ……切り裂きジャック。」

暗黒守護者の体に変化していく。

「第三形態をお披露目だ。ありがたく思え。暗黒太陽槍《ダークネスサン||グングニル》は、我が矛となった。暗黒太陽悪魔剣《ダークネスサン||デビルソード》……。」

「まだ、生きようとするか。貴様の罪、償う気はないとみて良いのだな。ならば、死してなお、殺してくれよう。豪火龍、反竜魂剣にとりつき、奴を殺し、殺すのだ。」

竜太を、八迫、理緒がみている。

「これで終わると思うか。」

八迫が理緒に聞く。

「そろそろ時間よ。無理だわ。」

「おい、そろそろ良いか。」

亮祐が八迫に言った。

「ああ。悶太はおいてきた。」

竜太を八迫、理緒、亮祐がみている。

「世の罪を、償ってやろう、反竜魂剣無惨不死無斬り。」

「悪魔守壁。」

暗黒守護者は名前の通り、防御した。

「防ぐというのか。ならば、最大出力で……へへろん……」

時間がきて、竜太は床に倒れた。

「賭の通りだ。」

八迫は笑った。

「本当ね。」

理緒が汀をかまえて言った。

「ビーストレイク、出来た。」

亮祐が、言った……？

「な、悶太何でここに？」

亮祐が言った。

「僕だつて頑張らなきゃいけないんだ。」

悶太がなきべそをかいた。

「駄目？」

亮祐は負けた。

「では、死の覚悟は出来たか。」

暗黒守護者が、後ろで立っていた。

「皆そろつて我が城の召使いとしてやる。ありがたく思うが良い。

さあ。暗黒の地獄へ堕ちろ、デビルソード・デビル悪魔剣悪魔流切り！」

まず、悶太がねらわれた。暗黒守護者の見開かれた黄色い眼にねらわれ、悶太は動けなくなつた。そして、少し失禁した。おもろしこれは、決して誰にも言わないだらうと思うが。

「さあ。我が城の家臣一号は一文文字悶太、お前だあ。覚悟しろ！」
暗黒守護者が剣を振り下ろした。

「させるかああああ！」

すかさず悶太と暗黒守護者の間に亮祐が入り、ビーストレイクのアドベンチャーで止めようと、デビルソード悪魔剣の刃にアドベンチャーの刃を当てた。

「理緒、今だ！」

亮祐の必死の叫びで、理緒が、暗黒守護者の角に斬りかかる。

「怪力剣汀全開転最大出力斬！」
フルパワーソードケルゲル

暗黒守護者の角から、汀から、火花が散る。

「じゃまをしおつてえええ。小賢しいわあああ！」

暗黒守護者が大口を開け、顔を動かした。理緒は急激な動きではじかれたため、屋根に落ちる。しかし、その背後から八迫が長刀を持つて迫っていることに暗黒守護者は気が付いていなかった。

「こつちを向け、アソコウガクディアアン鯨鯨守護者！」

暗黒守護者は、八迫の方を向いた。

「世の名前を侮辱したなああああああああ。」

八迫がにやりと笑つて、暗黒守護者の口に、鋼鉄長刀をぐりぐりを入れる。

「ほざががぎぎがああああああああああ！」

亮祐のビーストレイクに当たっていたデビルソード悪魔剣を八迫の顔面に、つかを使い、たたき込んだ。八迫の額に当たり、吹き飛ばされる。

そして八迫の周りにはいつの間にか噛み砕かれ、ボロボロの鋼鉄長刀が散乱している。

「ぐ……だ……あ……」

亮祐の方に、暗黒守護者は振り向いた。

「貴様の順番だ。ダイクネスパンチ暗黒突破。」

暗黒守護者の拳が亮祐にたたきつけられた。

「へ・・びゃ・・・。」

亮祐が飛ばされ、ビーストレイクもまた、暗黒守護者によってはじき飛ばされる。

「さあ。僕の手に掛かって、僕の城に落ちる。暗黒夜闇斬。」
ダークネスナイトダーク

また、悶太に剣は振り落とされた。

カキキキキキキキキキ

銃声が、暗黒守護者の手から、悪魔剣を落としていた。
イビルソード

「手を・・出すな。」

その声は、七の妄想の切り裂きジャック平田竜太だった。

「ビーストレイク竜魂の太刀。」

竜太が手にしているのはビーストレイクに竜魂剣を取り付けたものだった。

「ビーストレイク竜魂の太刀 火龍抜刀 火陰炎陣竜吐息。」
バラダイス・ファイアー

ドラゴンレイクとなった元ビーストレイクと、竜魂剣が、暗黒守護者に向けられた。

「いい加減終われ！」

竜太は引き金を引いた。

火陰炎陣竜吐息が、暗黒守護者の脳天に発射された。

「それに当たってしまえば吾は終わりだな。だが、吾はまだ終わらない。暗黒の玉がある限り。ここにきて正解だった。暗黒の玉が放置されていたからな。これを使えば、伝説の宝装備鎧暗黒が装着できる。この吾のための鎧が。さあ暗黒の玉よ。吾に力を。吾に鎧を

おおおおおお！」

火陰炎陣竜吐息は暗黒のオーラに消された。代わりに、巨大なオーラが、屋根を壊していく。

それが、三分二十七秒続いた。

それが、永遠にも思えたような気もする。

けれど、竜太には、何かしなければいけないとしか思わなかった。

「さあ。ファイナルタイムだよ。切り裂きジャック。君たちにもこの力を分けてあげよう。全てが回復していた君たちの方が、面白いからね。さあ。全ての傷が癒え、リセットされた戦いへと……。。吾にうち勝つ力を見せてくれ。切り裂きジャックよ。ゴヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ！」

暗黒守護者がさらに巨大化した。

「さあ、私と遊ぼうよ。永遠の闇の中で……。。」

ふと気が付くと、竜太の右には、八迫、理緒が。左には、亮祐と悶太がいた。

竜太はドラゴンレイクを解体して戻した。

八迫には、素手で戦ってもらおう。

暗黒守護者の腹部が開いた。

「永久の闇への誘いだあああああ！」

強風で、切り裂きジャックは、暗黒守護者の体内へと吸収されてしまった。

暗闇の中、竜太は立っていた。

何も見えない。

みようともしない。

だって、自分はただの中学生だもん。

切り裂きジャックなんかじゃないんだもん。

自分でやりたくてやってる訳じゃな……。。

そこで竜太は自分の頬を叩いた。

「何……言ってるんだ。」

自分が何を言っていたのか、信じられなかった。

自分は楽しかったはずだ。仲間がいて。

だったら、ここからでて、のんきにお茶でもすればいいじゃないか。そうだ。ここからでれば。

竜太は覚悟を決め、想像した。

全てを見通す太陽の眼……。

その目で、四人見えた。

八迫が幼児対抗してしまっている場所。

亮祐が、老人になってしまった場所。

理緒が、泣き虫になってしまっている場所。

悶太が、体育座りでべそをかいている……これはいつもとかわらない。

「シャイン太陽の地図。マップ」

竜太は腹部にいた。

そして、理緒は右腕、八迫は左腕、亮祐は右足、悶太が、暗黒守護者の手中。手の上で気絶させられているようだ。

「まずは……亮祐からかな。」

竜太は竜魂険を片手に、右足に向かって地図をもつ片手に進んだ。

ここからでて、のんきにお茶するんだ。

右足に行くと、竜太は腰痛に悩まされた。

なんだか、さっきまで剣を持っていた手が重くて、剣を杖代わりにしている。

「亮祐え……亮祐え。」

呼んでみた。

「何じゃああ。人の名前を長々とお。」

亮祐も、アドベンチャーを片手に立っていた。

その後、右腕で泣きながら理緒を。左腕では、子供同士、真剣を使って勝負をした。

ようやく、腹部に戻ると、話し合った。
計画ではこうだった。

「悶太を助け出してから、頭を叩く。竜太に全ての力を集中して。」
早速、実行した。「悶太ああ。悶太あ。」

亮祐が叫ぶ。

「お前は……つぶしてやる。」

暗黒守護者が巨大化した手がつぶそうとしている。

理緒が怪力で悶太の吸収されつつある体を抱きかかえて引っ張った。

「良いわよ。」

頭の上に理緒が叫んだ。

「分かった。」

竜太が、手で丸を作る。

「集中して、入れろおお。」

亮祐が逃げながら叫ぶ。

「ぐぐぐううううううううう。」

八迫がジャックの力を入れる。

「行け。竜太。」

八迫が倒れ込んでいった。

竜太が、竜魂剣と、ビーストレイクと、汀を一つにさせた巨大な剣
で、死者の面を着けて、暗黒守護者の頭を切った。

「世の二つ目の家を壊した罪だ。」

暗黒守護者の首が落ちた。

シューウウウウウウウ……。

暗黒守護者の体が溶けていく。

「吾が・・・強・・・ジャック・・・殺・・・。」

暗黒守護者にようやく勝った。

「やった・・・。」

亮祐が、地面で倒れ込んでいった。

「やっとね・・・紅茶でも入れようかしら。」

理緒がため息混じりと言う。

「ふん、先に本部直すこと考えるよ。それからじゃないとお茶出来ないよ。」

八迫が馬鹿にした顔で言った。

「ま、あいつにむち打ってやってもらうか。」

八迫が再び口を開いていった言葉は恐ろしかった。

「ま、今日は良いんじゃないの。」

悶太の寝顔を見ながら、亮祐はほほえんだ。

「やっと終わった。」

風が良く当たる生き残りの屋上で竜太は青空を見た。

「これにて終幕。」

これでようやくお茶が出来るよ。

俺は、早く昼寝もしたいな。

第二十六話 暗黒守護者先手必勝（後書き）

ちゃんちゃん。

第五十一話 竜魂の持ち主（前書き）

竜魂剣には、三人の持ち主がいた。

一人が桐原須藤

一人が平田竜太

第五十一話 竜魂の持ち主

第五十一話 竜魂剣の持ち主

暗黒守護者 ダークガーディアン との死闘が終わった本部ではのんきに本部復興作業が開始されていた。

もっぱら仕事をするのは竜太だ。他の四人は、四人がかりでちまちました作業をしている。

三分おきに二分休んで。

そんな平和な日が続く中で、一人のちびっ子放浪者がやってきた。ちびっ子放浪者は、剣を鞘から抜くと、屋根の復興に取り掛かる、竜太に切りかかった。

竜太は待つたく気が付かず、ちびっ子放浪者に背中を向けている。

「怪力人間投げ！」

理緒は、亮祐を放浪者に向かって投げた。

「アドベンチャー叩き！三連劇場版編スペシャルEX。」

ちびっ子放浪者は地面に叩き落された。

「邪魔をするな……。切り裂きジャック。僕が戦いたいのは俺の剣を盗んだあいつだ。」

ちびっ子放浪者はくるりと竜太のほうを向くと、叫んだ。

「僕の名は、影月！お前が持つ竜魂剣の持ち主だ。」

悶太がお茶を運びつつ、八迫に聞いた。

「竜魂剣の持ち主って須藤じゃないの？」

影月と名乗った悶太と年月が変わらない少年は悶太のほうを向いて叫んだ。

「奴も僕から剣を奪っていったんだ！」

その目は涙目だった。何かしら同情してしまった悶太はとことこ歩いていって肩をポンと叩いていった。

「わかるよ。その気持ち。僕も物がなくなったとき、竜太が取った

んじゃないかって疑いたくなるもん。」

影月はそういった悶太の手を振り払った。本部に増設させた縁側で理緒、八迫、亮介の三人は声を潜めて、更に息を飲んだ。

「軽々しく僕に触るな。剣使い族の長の息子で里一番の剣の使い手の僕に。お前、まだ小学生だろう。」

厭々しく笑った影月に悶太はライバル心むき出しで、言った。

「ふん、君だつてどうせ小学生じゃないか。」

そつぽを向いてつぶやく悶太に影月はやりと笑ったままで答えた。

「残念。剣使い族は寿命が長くて、見た目も若いんだ。僕はこう見えて、三十二だぞ。」

八迫は後ろを向いたまま、つぶやいた。

「精神年齢は小学生じゃねえかよ。いい大人が小学生相手に向きになんなよ。」

そついに終わると同時に影月は付け足した。

「ちなみに剣使い族は地獄耳なんだ。其処のへんてこ髪のお兄さん何か言いました?」

竜太がやつとこさ降りてきたのはそのときだ。

「剣使い族の長の息子で、里一番の剣の使い手の僕をを馬鹿にしたなあ……。」

切りかかっていった。

「長の息子が短気じゃ里がつぶれるわつ。」

缶コーヒーの空き缶を投げつけた。

ちょうど竜太が来た。

「あ、お客さんですか。どーぞごゆっくり……ヴえヒィーモオース!」

影月の峰打ちが右の頭に、缶コーヒーの空き缶が竜太の左頭に。

「りゅーたーおっきろー。」

理緒が氷水をぶっ掛けた。

「ヴェツヒーモオース！」

目覚めた。

「僕の剣、竜魂剣、返してもらぞ。」

竜太は悶太から竜魂剣を渡された。

「じゃ、勝たないと、あの剣は返せよ竜太。」

八迫から言われしぶしぶ戦闘をする事になった竜太君。

「行くぞ。」

影月が走り、切りかかる。

竜太が竜魂剣を適当に振り下ろした。峰打ちだ。

カツコーン。といういい音が本部跡地に響いた。

「へギウンダー……。」

影月は……三十二歳のいい年こいたおじさんは倒れた。

「竜……竜銅剣をもってしても勝てぬとは。不覚也……。」

背中では何かを語って、影月は、去っていった。

去り際に言い残して。

「最近始まった、全冥王を束ねるデルガゾーネの切り裂きジャック狩りに気をつける。」

そっぴい残して。

影月が去り。

「そっぴいえばサー豪火龍。」

竜魂剣から半身を出した。

「何でございますか。」

「あいつ知ってる？」

「ぜんぜん知りません。」

竜太は立ちすくんだ。

「じゃ、何で竜魂剣のことを……。」

亮祐が会話に加わる。

「それにあれで里一番の使い手だって……。」

理緒が笑いながら加わる。

「里が襲われたら大変だって……。」

悶太が胸を張っていう。

「あいつが先にやられる。」

まだ根に持っているらしく、悶太はそうつぶやいた。

八迫が止めを刺した。

「竜銅剣もありや、偽者だったしな。」

豪火龍も加わった。

「我に兄弟など……一本……。龍銀剣が。」

そういったが、誰も聞かれていなかった。

「我の力を吸い取り強くなる、龍銀剣が、まだ作り主のもとに……。」

「

豪火龍は実体のない体で齒軋りをした。

第五十一話 竜魂の持ち主（後書き）

一人が、影之影月

第二十八話 真昼の破壊（前書き）

さあ……仮面の付けを払え。切り裂きジャック、平田竜太。
ごふえ……ごは……。

マリーネ様。これ以上はお体に触りません。どうか、付けは別の機会
ニツ。

それはならぬ。ここで、やつは終わるのだ。

第二十八話 真昼の破壊

第二十二話 真昼の破壊

「今日の任務は簡単だった！」

竜太が精神的にも、肉体的にもぼっこぼこになった体で言った。

「そのわりにそのざまか。お前の難しいは俺らには出来ないな。今度の難しいのは頼むぜ。」

八迫が顔に影を作っつていやらしく笑って竜太を叩いて先に鍵を開けた。

「にゅふー……にゅふー……にゅふー……」

遠出で疲れた悶太は亮介のせなかで、亮介の服に水溜りを作りながら寝ていた。

「理緒ー。」

亮祐が彼女の名前を呼ぶ。と、いつでも恋愛関係にあるわけでもない。単なる代名詞である。

「あいなあ。」

さっと降り立って、悶太を抱えると、悶太の部屋へと運び、布団へと寝かした。

「さて、こんにちは、これにてしばし、休憩に入ります。」

亮祐が腰を低くしていって、寝ている弟分を除いた四人が、家に入っつていった。

そして、仮眠をとっていたときだった。

体が熱くなる。

目を開けると体から蒸気が出ている。

主にジャックから大量の蒸気。文字盤にはエラー、危険、データにバグ発生。の文字。

竜太は、そこで気を失った。
貧弱な竜太は。

「おい、八迫、理緒、大変だ。早く、森に來い。」
ジャックに連絡が入った。

まずはじめに、亮祐は見た。
刈り取られた森を。

次に、八迫は見た。

燃え滾る、木の残骸を。

最期に理緒は、見た。

その中心に立つ、七の妄想の切り裂きジャック、平田竜太の姿を。

「こお……ほおおおおお……」

仮面をかぶった竜太は、いつもなら動かぬ仮面の口から、蒸気を出していた。

まるで、竜太の顔が、はじめから仮面であつたかのように。

仮面をかぶった竜太は……仮面の男は、八迫を見つけるとにいと笑つて飛び掛つてきた。

「こお……こお……」

にたあと意地汚く笑うと、仮面は、噛み付いてきた。しかも、その噛み付いた仮面は、どんどん力を吸い取つていく。

「八迫を放せ……怪力いっぱい叩き。」

メッコという音がして、仮面は離れた。そして理緒を見ると、ジャックの力で、地獄の鎖を理緒を絡み付けた。

「こお……こお……」

亮祐には、粘着性のある糸で、地面に貼り付けた。

「くっ……竜太……」

理緒が歯軋りをして言う。

「!!……………これが、仮面の付け……………」
三人ははつとなる。

「ジャックで、悶太を起こせ。何をしてもいい。」
八迫が、力なき声でうめく。その間も、仮面は食いついてくる。

「早く。悶太を起こして地獄の反逆児、マリーネの元へ……………。
この付けを別の方法で払わせるその方法を聞きだせるように。はや
く。」

八迫は、かじられていない手で、ボムレギュラー爆弾を投げ、亮介の糸を燃やした。
「はやか……………」

第二十八話 真昼の破壊（後書き）

物語を、終わらせる。わが命を持って、切り裂きジャックの！

第二十九話 地獄の反逆児マリーネ仮面の付け

第二十九話 地獄の反逆児マリーネ仮面の付け

「ほおおおおおおおおうううう……。」
にたあと涎滴る顔で、竜太は、八迫の腹部を叩いた。
八迫の口から、赤い、鉄臭い鮮血が、仮面を汚した。
竜太は、その仮面の血で興奮した。

「うごおおおおおおいばるるううううう！」
そしてその血をなめた。

理緒はなぎさで、竜太を殺すつもりでぶったぎった。
しかし、それは、地面に穴を掘っただけだった。
そして、いつの間にか理緒の真後ろに竜太はいた。

「あはあ……。」
切り裂きジャックの力が、仮面の付けかわ解らないが、竜太の手は、
赤い……血のような色の鉤爪が付いていた。
それで、理緒をとばした。

「あきや！」
気に激突した理緒は、その場で一瞬気を失った。

その一瞬の出来事だった。
亮祐の背後に回った竜太は、悶太を呼び出していた亮介の横に顔を
出した。

「ううううううううううううううううううう。」
亮祐は、そのとき気が付いた。
横にいる仲間に。

「がわっ！」
亮祐もまた、飛ばされた。
上に……。

上に・・・・・・・・。
上に・・・・・・・・。

亮祐の意識ははつきりしていた。

そして、飛び上がった竜太が自分の横にいた。

「はあああああつあああああああああ・・・・・・・・。」

亮祐を下に叩きつけるために、胸を殴った。

そして落下していく中で、何度も、何度も・・・・・・・・必要以上に、何
度も・・・・・・・・。

耳を裂くような音で、亮祐は下に叩きつけられた。

「亮祐！」

理緒の一瞬の気絶が終わり、最後を見た。

その音は、ジャックの通信にも、はつきり聞こえていた。

その音は、悶太のジャックの通信にも。

悶太はおきた。

そのときだった。

隣の窓には、亮介のアドベンチャーが宙を待っていた。

悶太は理解した。

「亮祐！」

悶太は急いで玄関から顔を出した。

そこには竜太がいた。死者の面をつけた、平田竜太が・・・・・・・・。

八迫は叫んだ。

「ジャックで地獄へいけ！地獄の反逆児、マリーネと、仮面の付け
を別の方法で払わせる方法を聞いてこい！力づくでも！」

八迫は、地獄の門を開いた。

第二十九話 地獄の反逆児マリーネ仮面の付け（後書き）

次回、悶太は地獄の反逆児と対決？

第三十話 地上と地獄で（前書き）

地獄 マリーネ対悶太！

地上 竜太対亮祐、八迫、理緒！

竜太は仮面の付けから逃れられるのか？

地獄で戦う悶太の運命は？

地上での死闘は？

第三十話 地上と地獄で

第三十話 地上と地獄で

「マリーネさま！なにやらガキが迷い込んでまいりました。」

マリーネの側近サグアンデュルがマリーネに語りかけた。

「つれてまいれ……。」

マリーネの言葉で、悶太は入れられた。

「……貴様、使者の面の付けに対して何か言いたい事があるのだろう。言ったらどうだ。」

悶太は、恐怖で何もいえなかった。

マリーネのその肉体の巨大さに。

マリーネのその精神の恐怖さに。

マリーネのその食い殺そうとする眼差しに。

けれどそんな悶太の頭に仲間がフラッシュバックして来た。

勇気付けられた。

「僕は、あなたに言いたい事があってきた。地獄の面の付けの別の払い方を教えてほしい！」

マリーネは悶太の目線に顔を持っていき、言った。

「あの小童には、言っているぞ。あの仮面の付けは、必ず払わせるよ。」

悶太は引き下がらなかった。

「方法までは、言っていないはずだ！」

「そうだ。しかし方法を聞かなかったのはあの小童だ。違うか？」

悶太は齒軋りをした。生まれてはじめて。

「なら、僕と戦ってください。僕が勝ったら、仮面の付けは、無しですよ。」

「はははははは！これが、地上の人間だ！すべてにおいて、力

づくだ！しかし、それもまた、私がお前らを好きな理由の一つだ。
良いだろう。では、サグアンデュル地獄貴婦人暗殺剣を持ってこい。
宴の幕開けだ。小僧、後悔は、とうに済ませ終わっただろうなあ・
・。

「アサンブレード そういつてマリーネは暗殺剣を悶太の首筋に当てた。

「簡単には、死ぬなよ。小僧！」

マリーネは剣を振りかざした。

悶太は、汀を柄から抜き、構えた。

「うごおおおおおうおうおうおうおうおお！」

竜太が、亮祐の左腕をつぶした。

「あがつ！」

亮祐の体が痙攣する。

竜太はそれを楽しむかのように、血をなめた。

理緒が得意の怪力で竜太の顔面を叩き飛ばした。

後ろで構えていた八迫が竜太の竜魂剣を構えた。

「龍魂特技八又双頭牢者解放之太刀！」

竜太はそれに気が付きながら、物理法則に逆らう事は出来なかった。

そのまま、竜魂剣に引つかかった。

「うおおおおおおおおおおお！」

八迫は野球のホームランを打つかのように竜太を投げ飛ばした。

「らあああああああつあ！」

竜太は飛んだ。

竜魂剣から出た八又の龍が双頭の龍を作り、牢の中へ、竜太を閉じ込めた。牢の中から、強烈な電撃が炸裂して、竜太はしばらく動かなくなった。

その間に八迫は、理緒に頼み、亮祐を木陰に運んだ。

竜太はそれを見逃さなかった。

一人になったと変わらない理緒を。

「うごおおあああつ！」

空中で方向転換して、理緒に襲い掛かった。

「理緒、危ない！」

しかしその言葉は、遅かった。

「うごううううう・・・。」

次の瞬間、理緒は、亮祐の隣に倒れていた。

八迫は唇をかんだ。

たった一人でこんなのと戦うのか？

竜魂剣を握る手が自然と強くなった。

「竜魂扇神風」

八迫は竜太に向かって最大出力で。

竜太は八迫に向かって最大速度で。

「うがつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつ！」

八迫に向かって咆哮で縛り付けた。

そうすると、竜太はゆっくりと竜魂剣を奪い取った。

大きく構え、そして、八迫の首元へと剣をやって・・・。

悶太は、疲れきっていた。

マリーネの剣は、黒刀だった。

悶太は、左手にアドベンチャーを持ち、マリーネの胸に向かって発砲した。

その瞬間、マリーネは膝を付いた。

悶太は、汀を頭につけた。

「言う事は、聞いてもらおうっ！」

「聞くだけだ！」

マリーネは利き手ではない手で悶太を殴り飛ばした。

汀はマリーネに踏みつけられた。

第三十話 地上と地獄で（後書き）

次回、真昼の破壊編急展開？予定中！

切り裂きジャックは殺しません！

七妄想の切り裂きジャック平田竜太は再び切り裂きジャックとなるのか？

味方の死を防げるのか！

第三十一話 反逆児マリーネ崩御！（前書き）

切り裂きジャックは殺しません！
何話目かぶりに主役役登場？

第三十一話 叛逆児マリーネ崩御！

第三十一話 叛逆児マリーネ崩御！

動きが止まった………。

八迫は、まずそう思った。そしてすばやく動き、自分の首下に突きつけられた竜魂剣を奪い取った。

「これで下がってやがれ！」

顔面に二十八発の蹴りをプレゼントした。

竜太は、その時、八迫のほうを向いた。

「早く、仮面を……。」

竜太は言った。

仮面をかぶった平田竜太は。

八迫は息を呑んだ。

竜太の死者の面の支配から逃れて始めていった言葉だったからだ。

「竜太！」

八迫は駆け寄った。

「うがあああああつああつああつああつああ！うおおおおおおお
おおおおおお！」

竜太の目は、血にぬれていた。

それは、仲間の血だった。

悶太は、目の前にある巨大な刃を目にして目がかすんで何も見えなかった。

「小僧、裁きるときは、来た。それは……」
「……今だ！」
アサシンソード
暗殺剣を振り下ろした。

「ふぎゅつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつ！」

悶太は、目をつぶった。

床に、金属の落ちる音が、よく響いた。

悶太の耳にも、それははっきり聞こえた。

「ぐあつく……あはあ……ぼ……が……
は……は……」

悶太は、目を開けた。

マリーネが口から血を出し、動かなかった。

そんな時、どうすればいいのかを、悶太は知っている。

「……！」

マリーネの瞳孔は開ききっていた。

マリーネは死んでいた。

サグアンデュルは頬をぬらし、一人つぶやいた。

「ああ。マリーネ様。あなた様のお命もここで尽きてしまうとは。いいのですか？このままあちらの世界に行くという事は……冥界に逝くという事は、あなた様の切り裂きジャックへの復讐は終わってしまうのですよ！ああ、この側近、サグアンデュル、あなた様のあとを継ぎ、この少年を必ずや貴方様と同じ冥界に送りますゆえ、しばし、お待ちください。」

悶太は、動く事ができなかった。

サグアンデュルが、すでに悶太を縛り付けていたからだ。

「さあ、少年、このマリーネ様と同じところへ逝き、マリーネ様の

【僕が！】

少年は自分の肉体を操ろうと、力をこめた。けれどいつからか付いているジャックから、高温の蒸気と、灰色の煙が出る。

そして、発火している。

【だけど、僕が止めなくちゃいけないんだ！】

【僕が止めなくちゃいけないんだ！】

【僕が！】

【僕が！】

「僕が止めなくちゃいけないんだ！」

仮面をつけた竜太は、そういつてさげんだ。

竜太は八迫の首を絞めていた手を緩め、八迫を下ろした。

「河馬竜太め。」

八迫が、足でつけた。クリティカルヒット直撃した。

「く………！」

言葉に出来なくて、目からしよっぱい水が流れ出す。

それをこらえて竜太は八迫に言った。

「もう………悶太は！」

八迫が思い出したかのようにあせっていった。

「大変だ！」

八迫は門を指差していった。

「悶太はあの門の中だ！」

竜太はその門を見た。

忌々しくて、ドロドロした物が流れてきそつな見覚えのある門だった。

「じゃあ、こっちは任せたよ。八迫。」

そういつて駆け出して、竜太は門の中へと入っていった。

第三十一話 反逆児マリーネ崩御！（後書き）

切り裂きジャック、いざ、門の中へと行かん！

第三十二話 地獄の新王（前書き）

真昼の破壊編、遂に完結！

話は少なかったのに長かったのは、どこかの誰かがサボっていたから？

そんな事ありませんよね。

第三十二話 地獄の新王

第三十二話 地獄の新王

「薪を火にいれ、どっさどっさ！

人間のがきで焼つ肉焼つ肉

新王への貢ぎ！貢ぎ！まずは香辛料の湯に入れーろー！」

誰かが歌っていた。そして、その歌っている誰かに、悶太は運ばれていった。

そこは、香辛料の湯。

地獄の反逆児のあとを継いだサグアンデュルは、悶太を食べる気でした。

ステーキにするつもりでした。

獣の顔をした奴は、悶太の着ている邪魔な布切れを破り捨てた。

「この布まで、サグアンデュル様はお食べにならない。」

そう言っていた。

そして、気を失っている悶太を運び、香辛料の中へ、体育座りをさせて入れた。

「薪をモット・・・外からカリカリのこげこげじゃああああ！」

奴はお下劣に涎をたらして部下に命令した。

竜太は、それを見ていた。

「龍撃手、奴らを切り刻んでこい！」

「シヤラキキカ、ホホセロバハニ！」

しゅじんの、おおせのままに。と、言った龍撃手は帰ってきた。何もいなかった。

竜太は悶太をゆっくり抱きかかえると、久しぶりに想像した。

「一文字悶太に暖かい衣を。」

悶太の体にはいつの間にか立派な服が被せられていた。

「さあ、龍撃手、悶太をたのんだぞ。」

龍撃手は無言でうなずくと、今、来た道に戻っていった。

竜太は竜魂剣と、先に進んでいった。

サグアन्दユルの待つ、元マリーネの部屋へと。

「サグアन्दユル！」

竜太は扉を切り開いて叫んだ。

つもりだった。

けれど、その先にも扉があった。

「サグアन्दユル！」

竜太は扉を切り開いて叫んだ。

つもりだった。

けれどもまだその先にも扉があった。

そして、三百七十三枚目の扉を切り開いたとき、サグアन्दユルはいた。

叫ぶ事は、出来なかった。

「ほう、死者の面から解き放たれたのですか。まあ、先代の王、マリーネ様が冥界に召されましたからね。当然だ。それで、用は何か、お聞きしたく存じますが？」

竜太は無言で切りかかった。

「無粋な人間です事。オツホホホホ。マロは愉快である。たいそ

う、ご立腹である！」

ネオクラッシュアサシンブレイド
暗殺剣界戒を竜太のつま先まで振り下ろした。

「竜魂奥義聖者の戯れ！」

「マリーネ・・・様、冥界に逝くのは、私でも、宜しいでしょうか。このサグアンデュル、貴方様のような寛大なお力を、お持ちになれませんかし・・・があああああ！」

サグアンデュルの口から、心臓が出てきた。

「まじーねざばの、じんぞう・・・。わだじのものにじで、わだじが、まじーねざばのぶんぼ・・・。王を、つどめさせていだだきたく・・・ぞんじばず・・・。」

口から、血を垂れ流しながら、サグアンデュルはマリーナの心臓を追い求めた。しかし、その前に、サグアンデュルは、動きを止めた。

そして、マリーネの心臓は、不規則に動き始めていた。

「やばいです！主、ここはお逃げに・・・。」
竜魂剣から豪火龍は出てきていった。しかし、主は、顔を抑えていた。

「うああ・・・あがあ・・・ぐ・・・はあ・・・はあ・・・。」

そして大きく息を吸うと、倒れた。

動かなくなった竜太の代わりにでもなるというのか、マリーネの心臓は、早く忙しく動き始め、初めて一本の血管が、サグアンデュルの肉体にたどり着いた。そして、心臓は動いていき、遂には、サグアンデュルの口の中へと再び入っていった。

サグアンデュルの肉体は、しゅうしゅうと煙を上げ、身長が高くやせ細っていく。

マリーネの肉体に近づいていった。

そして、次の瞬間、サグアンデュルのものだった肉体は、遂にマリーネとなっていた。

「ふふふ。サグアンデュル。我が良き部下よ。この肉体、少々もろいが、使わせていただく。まずは、こやつの死者の面を使って……」

「それはさせません！」

竜魂剣から、業火龍が出てきて、マリィネの前に降り立った。

「ほう、我が血肉を分け、創られた存在の業火龍。我が肉体に、再び舞い戻るがいい！」

マリィネは、業火龍を両手で捕らえた。

「ならば、主には、手を出すなよ……」

最後の最後に消え行く瞬間、業火龍はそういった。

マリィネは律儀に答えた。

「ああ、今はまだ、な。地上殲滅部隊の数が足りんのだよ、業火龍。お前にも、我が分身としてきっちり働いてもらうぞ……」

マリィネは竜太と業火龍の消えて竜魂剣を地上へ投げ返した。

そして、竜魂剣は、粉々になり、地上に付いた竜太の上に覆いかぶさった。

「サグアンデュルの肉体では、これまでのようには行かん。まず、死者の面を操れない。不便な肉体だが、感謝するぞ。」

マリィネは、地獄の奥底へと、消えていった。

業火龍を吸収して。

「ある……じ。」

業火龍は、マリナーの意志気体の中で戦ったが、黒いものに包まれた。最後の言葉は、主には届いていない。

竜太は、目覚めた上で、現実を理解した。

理緒も、八迫も、亮祐も、悶太も。

今誰一人として、動けない。

そして七の切り裂きジャック平田竜太の最愛の武器は、もう存在しない。

存在するのは混沌だけ。

第三十二話 地獄の新王（後書き）

次回予告 新章休養、本部一週間編始動！

竜魂剣も粉々になり、業火龍すらも消えた。

すべてはマリーネを倒すため、竜太たち切り裂きジャックも一週間という短い休暇にはることにした。

そして、その裏で動く五人の人影。果たして、その五人とは！

第三十三話 これより、短期休暇（前書き）

彼らの少しのお休み

第三十三話 これより、短期休暇

新章？ 短期休暇編

第三十三話 これより、短期休暇

「龍……魂……剣……が？」

竜太はうつろな表情で真実を聞かされた。

「嘘……嘘だよ。だって……だって竜魂剣は！」

竜太は耳を押さえて首を振った。

八迫は、柄を竜太に投げた。

「これ……は……」

竜魂剣の柄だった。

業火龍のいなくなつた、竜魂剣の折れ残つた柄。

その柄は、竜太の血が付着していて、これまでの闘いの傷がはつきりに残っている。

「竜太。早く、回復しやがれ。マリーネのやるうをぶつた斬るんだろ。」

八迫が腕組みして、竜太に笑いかけた。

「とつとと治さないと、私が全部、破壊しちゃうわよう。」

理緒が異常な力瘤を作つて天井に咆哮した。

「理緒が言つと、本当になりそうで怖い。でもそんなこというとマリーネじゃなくて俺が……」

「おお、もう起きたか。じゃあ、そろそろ、行ってもらえますか？」

亮祐が後ろの紙袋を手渡して言った。

「学校行け。」

後ろから悶太が学校の制服でやって来てそれから学校へ行った。

竜太も学校へといった。

体中痛いのに。

「おーお。竜太。学校来たのかあー。」
友達の一人が言った。

「来ましたよ。」
ふてぶてしく言った。

一時間目 国語

「はい、今日は、走れメロスの矛盾点を挙げてみましょう。」
一人の手が拳がった。

「はい、メロスはシラクスの町で結婚式の準備の買い物にきています。死ぬとわかって、町に帰って結婚式を早めるときなんでご飯まで買ってるんですか。メロスって御馬鹿ちんですか？」

「はい、よく出来ました。次。」

「メロスがシラクスの町に駆けていくとき、橋が洪水で壊れています。それなのに、橋渡しも誰もいない。それっておかしいじゃないですか。暴君ディオニスが、メロスがくるのを恐れてるんじゃないんですか？ってことは、メロスは来ると信じているんですよね？という事は、メロスの事を信じているということになって、人を信じないという王の考えに反するんじゃないや。まだありますよ。山賊配置して命とろうとしてるじゃないですか。ってことはメロスの命とって、更にセリヌンティウスの命までとろうとする。ただの殺し好きの不審者じゃないですか。」

走れメロスにはさまざま矛盾が残っている。

「小説家を目指す場合はこの作品を王の視点から描く人が多いと思います。ということ、皆さんも走れメロスを王の視点から描いてみましょう。」

「はいでは時間です。平田竜太君、発表してください。」
結果は悲惨なものでした。そもそも竜太に文を書く事は向いていないのに……。

二時間目、三時間目、四時間目、五時間目、六時間目
数学 理科 社会 英語 技術

どれも悲惨なものだった。

その夜、竜太は久しぶりに心置きなく天体観察をした。
星星は光り輝いていた。

しかし、その次の日から、切り裂きジャックとしての生活は再開してしまった。

第三十三話 これより、短期休暇（後書き）

次回、やっとこさ待望の……編開始！

第三十四話 幻無（前書き）

申し訳ございませんでした。

第三十四話 幻無

第三十四話 幻夢

それは深い深い海に沈んでいた。

それは、明るく明るい丸を引き寄せる力を持つものだった。

それは、強い強い者しか持つてはいけなかった。

誰にも、持つことは許されぬはずだった。

それは、人知を越えていて、人は、触れぬように、彼が封じ込めた物のはずだった。

彼が。

「おお……。吾輩はこれにたどり着いた。そしてお前達もまた……。共にここにたどり着いた。これより、私達は人を越えた新しい血を持つ血族となるのである。そう、お前たちとともに、新しき血族となるのだ」

男は、大きく手を広げた。

「吾輩はこれより、組織名、破壊を脱し、これより新しい血族と名乗る。これより、吾輩たちの新しい血族への転換による新しき名前を名乗ることとする。」

大きく手を広げた男は一人一人を指さし、叫び続けた。

「お前の名前は、阿蘇雨竜」

「お前の名前は、幻柳馱由」

「お前の名前は、蟠薇茨。そして……」

最後に、自分を指さし、一段と大きい声で叫んだ。

「そして吾輩の名前はこれより真幻想！！！！」

眞幻想と叫んだ男は深い深い海の底に永遠に置かれていたはずの一枚の欠けた板を手荷物と、深い深い海の底からこの世の断りを無視して飛び出した。

「おお、大いなる石版よ。今より、この石版に秘められし封印を解き放ち、偉大な月を喚び賜え！」

空には五人の影が映り、月がひととき大きく揺れたように見えた。解放に応じたように。

「林合体ハヤシロボ」

悶太がテレビに釘付けになっている。

「あんまり近づくなよ」

亮祐が荷物を運びながら悶太につたえる。

「はい」

答えるだけ答えて、動いていない。

良い子は部屋を明るくしてテレビから離れてみなければいけないのに……だ。

ダークガーディアンに壊された本部を直してる亮祐。

今日は平日なので三人はいない。

亮祐は、明日から学校に行けることになったので、少しわくわくしている。

しかも、悶太と二人暮らしもできる予定なのだ。

そうなったところから離れて、二人で住宅街に行き、料理も何から何まで一人で出来るのだ。

しかも、悶太と二人暮らしというのが一案良い。

それまでに、荷造りはしなければいけない。

あと、一日。

「平田、分かるか！」

八迫が教師役として学校に入り込んでいるので竜太はいじめられっぱなしだ。

八迫は楽しいし、竜太はげんなり。

「吾輩の名前は、眞幻想。全ての剣を束ね、全ての剣を操るもの……。」

眞幻想は大きく手を開き、石版をゆつくりとなでる。

「そして、阿蘇雨竜。お前はその魅惑を、武器とするのだ。」

ひざまずき、眞幻想に頭をたれる阿蘇雨竜。

「そして、幻柳駄由、お前はその怪力を駆使し、戦え。蟠薇茨、お前はその血染めの鎌を武器とするのだ。」

大きく開いた黄色い目が月を見つめる。

「やがて、力持つ者が吾輩達の目的を止めに来る。わが輩達はそれを止めることがこの石版からのお告げなのだ。」

「さあ、力持つ者を消しに行くのだ。」

第三十四話 幻無（後書き）

本年もどうぞよろしく御願いたします。

第三十五話 石版（前書き）

どうもお久しぶりです。そして御免なさい。どうにもアッチこっちと手を出すととまらなくなるようです。その癖にアッチもこっちも創りたいと。とんでもない馬鹿です。やっとアルインをフザケタ形で終わらせたのに。というか、ああやってしか終わらせられなかったわけですけどもっ。

とにかく、これからは、金曜日と土曜日のいずれか、もしくは両方にいずれかの話を更新させていただきます。

そして早いところ、ピヨ菌とかアナザーワールドとかを終わらせて最近菌にはまったせいで誤植なわけですけども。

とにかく、メインはこちらの話と、先日より始まったニートの小説ですから。

こんな何度も何度も不定期更新になっている私ですが、今後ともお付き合いさせていただけると幸いです。どうぞ、よろしく願います。

実は、この切り裂きジャックの話をそろそろ何分割化しようと思ってるんですが、どうしましようか。だって、そろそろ話の数が半端じゃないですもんねえ……。

第三十五話 石版

「はげんにやあああ」
今日も本部では竜太がいつものごとくちょこつと遊ばれていた。
八迫に。

それはいつものことだからいいとして。
その裏では、そのとき、彼らは動き出していた。

その日は、暗いくらい夜だった。
何もなかったその場所で遙か上に輝くのは、丸いひとつの月。満月。
彼らがアレを動かしたから、そのつきはゆっくりと動いていた。こ
つちに向かつて。アレはそれを招いた。彼らの目的はそれだった。
破壊から新しいものを創るのが。そして新しく創り直すのだ。
この壊れ、助けを求めている惑星を助けることが使命だと考えてい
る。それを止めるものは異性人であろうと正義のヒーローであろう
と。

私たちはそれを徹底的に潰す。この惑星が助けを求めている限り、
決して負けることは許されない。
なぜなら弱者には死を。が我らのモットーでもあるし、我らの支配
者、眞幻想様の口癖だった。
ワタシはしくじらない。
彼を失望させてはいけない。
ワタシはワタシという物が無くなっても彼の夢を壊すわけにはいか
ない。

だから、だからこそ奴らを確実に消さなくてはならない。切り裂きジャックと名乗るふざけた殺戮集団を。やつらは、桐原須藤を。ガルガンティアや、メリアーサ、ジェイソンたちを消し去った。私から言わせるとそれは準備不足で、先に彼らの頼るところを一つ一つ確実に潰していけばいい。

そして、ワタシという名の媚薬で彼らを逝かせればいい。

永遠に覚めぬ、冷めぬことのない、気持ちのイイあの世界へと。

ワタシは下準備のひとつとして、これからここにいる奴らを消す。

我らの支配は、始まった。

第三十五話 石版（後書き）

これから続編を写しますんで舞っててください。

ここ三話ぐらいは、携帯のメモ帳に書いてあるんですよ。

それを入力しなおして、話を追加して、何とか纏め上げるような感じでございます。

第三十六話 破壊

基地が壊れていた。おそらくそれは先日の先頭によるものであると私の脳は、そしてわれわれのデータベースは処理をする。

これは好都合だ。

目の前には作業服を着たその道のエキスパートのような少年が立って建築している。

しかし、エキスパートな少年など存在するはずがないと思うので、私は彼をわれわれが処理すべき対象として捕らえる。

こちらに背を向けてのんきに飲んでいるそれは最近の新商品のかふえー日本道のかふえーラテである。

予断ではあるが、ワタシはアレを気に入っている。すでにワタシの私室の冷蔵庫から押入れにいたる全ての収納スペースはアレのためにあるといっても過言ではないほどだ。

「おい、お前」

突然の声に反応した彼に。

振り向いた彼の口を私の口で塞ぐ。

ふぐぐとくぐもった声がする。

私はこれで彼の記憶を知る。

これが私の役目だ。相手の口からすべてを吸い尽くし、私の中に蓄積する。そして蓄積されたデータは私の一部より、われわれのデータベースへと送信される。

すべてを吸い尽くすまで十秒。

口を離れたとたん彼はワタシのほうに倒れる。軽く酸欠状態に陥っているようだ。

しかし、それもつかの間だ。私は情報を得る代わりに夢を与える。私が存在する限り続く覚めぬ夢を。

こうして夢を持った彼は私の不要な手駒となる。
やがて、それは世界へとおよび遣されるのは彼らの中のごく一部に
なりその残った彼らは世界すべてを敵に回す。
彼らを消滅^{ロスト}させる彼らの敵、私たちの捨て駒。
「さあ、私についてらっしゃい。永遠に覚めぬ夢を与えてあげるわ
うつろな目をした彼はワタシに逆らうことなく、黙って従う。世界
を支配する女王たるワタシに相応しい手駒たち。
これでワタシへの彼からのお願いは完了した。
後は、残っているアレとかに遣らせればいい。
ワタシは彼からのお願いを全うしたのだから。
支配だけがワタシへのお願い。後始末は彼がしてくれる。ワタシの
大好きな彼が。」

そのとき、悶太は足りなくなった木材とコンクリートを補うために
かろうじて無事であった裏倉庫へコンクリートと木材を取りに行き、
もって帰って来るところだった。
しかし、いざ帰ってきてみるとどこにも家族とも言える彼はおらず
只、そこには彼の身に纏っていたであろう安全こそ第一のヘルメッ
トや、作業服だけが落ちていた。
すぐさま異変を感じ取った悶太は、腕につけた便利時計形のジャッ
クで連絡を取ろうとしたのだが、それはつながることなく、突然、
彼の目の前には一振りの剣が空から落ちていた。
その剣の上に普通に立っている男もまた、突然と現れたのだった。
「貴様もまた我らの邪魔をする正義のものか。」
悶太には何一つとして今の状況がわからなかった。
しかし、ひとつ確認できたのは、亮祐が彼らにさらわれてしまった
ということだった。

そのほかには何もわからない。

誰が何の目的で彼をさらって行ったのか。

第三十七話 対峙

その日、竜太は学校にいた。

「どうした平田、ローマ字で書くことすらできないのか」

英語の筋肉教師に怒られる。このセンス、体育のセンスより体が体育会系だから世も何があるかわからない。

そんな他愛もない問題はおいといて、本当のこの問題がわからない。解けない。

一体全体どうやってコンピューターをローマ字で書くんだろうか。そもそも、コンピューターじゃないのかもしれない。その前に、ローマ字って何なんだろうか……。

誰も知らなかった。コンピューターが実はコンピューターということ、読むことを、書くことを。

そして、ローマ字とは小学校の中学年ぐらいのないようだということを。

まだまだ竜太の休日特別出向日は終わりそうもないのだった。

英語のセンスからしてみれば、今日中にこの英語のレッスンだけでも終わらせたいのだが。あと十分で。始まりのページで戸惑っている竜太に無理やりにも。というか、始まりのページですすでにまぶくってこの子はいったい何なのかしらと疑いたくなる。

そんなに私の教え方って、悪いのかしら……。英語の教師【女性】は考えてしまった。

ちなみに、体育のセンスは女性ではなく、男性だ。

「ねえ、このフリルの付いたワンピース、可愛くない？」

うん。と頷いてみるものの、いかんせん理緒はオサレと言うものかわからない。しかし、理緒は自分で自分を弁護する。

だって、興味なかったし、スパイ仕事のほうが大切だったし。

ファッションなんて、雑誌を見てわからないだろうと自分でも思う。レディがこんなことではいけないだろうとは思うのだが。お嫁に行くにしても、生活するにしても。

さらにここで理緒は自分を再度弁護する。

友人といるのは楽しいことだし、無理に深く考えても無駄だろうなあー。

自分を正当化してしまった。

オサレしなくても死なないし、旦那さんになんか言われたら腕で返して差し上げればいいのだし。今はオサレよりも戦力が必要なときだし。

とにかく、今を楽しめばいいだろう・・・。

八迫は一人刻一刻と近づいてくるアレに気がついていった。

しかし、これを知らせたところで自分たちには出来ることはないので不安や恐怖を呼ぶだけだろうと思いい、黙ることにする。あいつに行ったらぎゃあぎゃあうるさくて面白そうだが。まあどうせ、誰も気がつかないだろうし、と。

ここの所ずつと研究しっぱなしだったので、気分転換にと、外へ出た。

たまには体を動かすのもいいのかもしれないーと思いつつ。

只それだけだったのに、ふと目をやったそこは、悶太が外で見知らぬ怪しい、銃刀法違反してそうな所有物を持つたいかにも怪しいおっさんと対峙してるのを見てしまった。

男は大きな剣をぶんぶん振り回している。

気がつく前に、八迫は外へとガラスを割った飛び出していた。

どうせ、立て直すのは俺じゃないしと思いいながら。

第三十八話 静寂

「少年、お前は何をそんなに必死になっているのだ。無駄だ。少年もまた、彼のように我等の駒となるのだから。さあ、少年。おとなしく彼女に口を奪われてしまえ。」

眞幻想の背後からまるで瞬間移動のように現れた。

「影之口吸シェイドキッス」

あっという間に悶太の口も女に奪われその目は光を失う。

その目はまるで、遙か遠くを見ているようで近くを見ているような・・・。そんな虚ろな目になっていた。

そのうちに悶太の四肢はだらしなく伸ばされ、口付けが終わるとその場に倒れる。

ちようどそのとき、八迫は悶太の前に辿り着いた。

八迫が来たことに気がついた眞幻想は、首をぐるりと回転させて、八迫の方へと向きをかえる。

「お次は少年、君も夢を味わうがいい」

今度は、八迫の影から女が出てきて八迫の口を奪った。

荒い息遣いの八迫を伸して二人の男女は歩き出す。

その後ろに三人の駒を引き連れて・・・。

そしてどこかへと去っていった。

その場に残されているのは直そうとした家の残骸と・・・。

無

第三十八話 静寂（後書き）

最近切り裂きジャック、ネタだけ合って話はまったく進まないの、世界が敵になる話と、石版の話二本をまとめてしまおうと思います。何とかして話をまとめて早く終わらせようかと。

と書いてまだまだネタはあるから、ぜんぜん終わらないからねえ！。安心してくださいねえ！。

って、安心って・・・

第三十九話 世界（前書き）

なんだか、話がなかなか進まないのでもさらにマリーネの話の完結予定篇を組み込むことにしました。

石版の話の前編後編と、世界が敵になる話とマリーネ完結篇の四本の話で急遽一本創ることになりました。

これでも話はなかなか進みそうにないだろうと思いますが、お付き合いいただけると幸いです。

それと、最近タイトルが変だなと思ひまして、いいの考えてるんですが、なかなか気に入るのが見つけれないなあ……。とっております。

それと、この章【？】から、一本の話で一つの決まりを設けました。副題は、一本の話で決まりをつけるということ。

今回で言うなら、全部漢字二文字で決めています。

たまに例外があるかもしれませんが、この決まりは続けていこうと思います。

以上です。

前がきおわりっ

第三十九話 世界

第三十九話 世界

誰もいなくなつた切り裂きジャックの本部では、地獄から動き出した彼がいた。

動き出すのは、この存在。

「こっけい……。これは真に滑稽。彼らの新しき場所はそれを越える新しきものによつてすべて奪われる。」

彼は大きく手を開き、天を仰ぎ見る。

「この青き晴れ渡る大空も時期に彼らの手により見れなくなつてしまふ。今のうちに仰いでおかねばならぬ。さあ、この宴にはもちろんワタシの席はあるのである。宴に入れてもらうためには手土産が必要かな。どう思う？ 豪火龍。ワタシは手土産はあいつらの首がいいと思うかなあ。」

彼……。地獄の反逆児マリーネがそこにはいた。

そしてその腹部に収まっている豪火龍は口を開く。

「私は主であるあなた様に従うのみです。どうぞワタシを戦力の一部とお考えください。マリーネ様」

豪火龍は豪火龍らしくからぬ答えを發した。

「マリーネ様、早くしなければつきが落ちてきてしまいます。急いで首を持ち寄り、宴の会で其れを止めてもらわねば大変なことになつてしまいます」

天を見ていたマリーネはぐるりと首を百八十度回転させ、其れを見る。

「グングニル。そうか、お前はそう考えるのか。ならば、地獄道具のストックはいいのか……」

グングニルはマリーネに邪龍魂剣を渡し、うなずく。

「宴はもう始まります。残る切り裂きジャックの少年少女を、狩りに行きましょう」

マリィネ、豪火龍そしてグングニルは都市部へと向かって歩き出した。

「宴なんて久しぶりだねえ……。ワタシはうれしいよ。グングニル」
マリィネは、空へと消えた。

「あうう……」

コンビニの前で竜太は大きなため息とも奇声とも取れる声を上げて歩いていた。

制服姿で。

何せ今日は竜太の学校では期末テスト成績表返しだったのだ。

学生にとってもっとも恐ろしい恐怖の日とも言っても過言ではないだろう。

そんな日だから、竜太はいつにも増して暗い。

今日も本部へ行ったらみっちりとしごかれるのであろう事は容易に予想がついた。

だから、今日は行きたくないけれど、本部の復興作業もはかどらないみたいなので手伝わないわけにも行かなくて……。

「あうう……」

スーパールの前で竜太は大きなため息とも奇声とも取れる声を上げて歩いていた。

「きひやひや……。ナノキリサキジャック、みいつけたあ……。どこか高いところで声がした。」

そして其れは、大きな刃物を竜太に投げつけた。

「あうう……」と大きなため息とも奇声とも取れる声を歩いていた竜太の一步前に刺さった。

竜太は鈍感だったがお命頂戴仕る！な事に気がつかないほどお馬鹿で鈍感でどうしよもなく駄目人間ではなかった。

らしい。

とっさの判断で走り出した竜太を高いところから見つめるマリィネと小さい小人。

「これが地獄道具、暗殺の妖精」

マリィネが腹を抱えて笑っている。

そして右手の人差し指を竜太に刺して、叫んだ。

「死ね」

「今日は、バーゲンがないわね。たまにはまっすぐ家に帰ろうかしら」

理緒が自分の体の三分の一もあるつかというアイスクリームをバツクバツクと食している時だった。

突然、理緒の持つアイスの半分が地面に落ちた。

トッピングを全部かけて、四桁出して買ったアイスクリームの半分

が地面に落ちた。
まだ、ぜんぜん食べてないのに。
それが、落ちた。

理緒の立っている反対側のビルの上で、グングニルが、叫んだ。

「お前も死ぬべきだあー！切り裂きジャック！行け、切り裂け、斬魔士！」

決して見えることのない、視角に立っていたはずのグングニルが、寒気を感じた。

その寒気の先は、決して見えるはずのない少女から発せられたものだった。

「ま、まさか！」

目の前には、斬魔士の亡骸が横たわっている。

「あたしのアイス……」

寒気の正体が今、グングニルの背後にいた。

「あたしの……アイス……」

手には斬魔士の持っていた一般に言う、日本刀。

「あたしのアイス……」

少女の目はグングニルを見ていなかった。

というか、どこも見ていなかった。

「あたしのアイス。ねえ、あたしのアイスはどこに消えちゃったのかしら」

いつの間にか、グングニルの首筋からは血が流れている。

「あたしの、アイスが落ちちゃったんだけど。あなた、知らない？

まさか、あなたが落としたりした分けないわよね、まさかな……」

グングニルは蛇ににらまれたかえるのように動けなかった。

まさかここでワタシの作戦ですなどはどうしてもいえない。

言った瞬間にどうなるかがわかつているから。

「デモね、ワタシこいつら一度前に見たのよね……」

斬魔士をにらみながらつぶやく少女。

「だからね、あなたがあたしのアイス、落としたってことでしょ・
」

にこりと笑い、目の焦点がやっと合い、グングニルと目が合う。

「落とし前つけるや」

よくあることだ。

にこりと笑っているが、まったく持つて目が笑っていない。

このとき、グングニルは最後に考えてしまった。

『食い意地が張っている少女は、どんな女よりも、魔人よりも何よりも恐ろしい。決して敵に回してはいけなかったんだ……。』

次の瞬間、グングニルは地上から消された。

アイスの恨みは、少女から買ってはいけない。

「死ね」

マリーネの叫びで、小さい小人は竜太に切りかかるために走り出した。

第三十九話 世界（後書き）

これから、石版の話と、マリーネの話と、世界の話を一気に進めて終わらせるのも大変そうですね。

なんて他人行儀ではいけないでしょうね。

では、これから週一、最低でも二週間に一本の更新速度でよろしく
お願いします!!!!!!

第四十話 地獄（前書き）

さあ、眞石版を狙う族どもの動きも活発になり始め、そしてマリ―ネも同時に動き出しました。

ちなみに竜太がこれからどうなるのかは、全くの謎です。

全く決まってるないので【笑】。

駄目人間と化しています亀更新作者の和呼之巴夜己でございますよ。ちなみに、今回出てきた親鸞霧の一種の不幸は急遽決まったことです。

意外に創ったのはいいけど難しいってことで、あんな形に収まりました。

ここ読んでも方には親鸞霧って何者なんだと思いますでしょうが、なあーに、なんてことはないただの登場人物ですよ。

ってこんなまとめかたしてるから駄目人間なんだろうと思いますですが。

まえがきはこれでおしまいでうs。

でうs。。。タイピングの順番が追いつかないとよくこんなことがありますです。

うまくいった。。。。

第四十話 地獄

「しね」

マリーネのその言葉で、斬魔士が飛び掛る。

月を呼ぶ石版眞石版。それは字のごとく月を呼ぶ石版だった。

そして、眞石版はひとつでは終わることを知らなかった。

ひとつは、太陽を呼ぶ眞石版。

それは太陽を呼び寄せる石版。

そして、それらを束ね、天変地異を起こす眞石版。

それは三つ目の石版。

決して触れてはならぬこの世のものではない、別界の道具。

ここに攻めてくるとき、マリーネとグングニルは他愛ない会話をしていた。

会話の内容自体は、至極恐ろしいものだが。

「マリーネ様。昔私はあなた様の道具から三つの道具を拝借し、そして地上の三ヶ所に安置いたしました。その三つとは、月、太陽天変地異を招く三つの石版でございます」

マリーネは口をだらしなくあけて、齒に挟まった何かの肉を取るのに必死になっていた。

「そうか。私のお気に入りの道具がなくなっていると思ったら貴様の仕業であったのか。まあよい。一万年と千年と千年も昔のことだからな。して、それは悪意あるものに見つけられる仕様となっているのかな。もちろん」

グングニルはいやらしく口をゆがめ、笑い出した。

「げはげはげは……。もちろん。そしてこの私の占いにはもう少しでそれを……。しかも同時に三つすべてを使うものが現れると申しております。祭りはこれから始まるのですよ、マリーネ様」

マリーネはグングニルのその言葉に満足したかのようにうなずきつつ、しゃべる。

「さて、いきましようか」

「眞幻想さま、二つ目の石版が判明いたしました。二つ目の眞石版の場所は、切り裂きジャック本部だと思われます」

眞幻想と呼ばれた男は退屈しのぎに一人チャンバラをしていた剣を砕く。

「幻柳駄由、あの廃墟か……。それで、石版はどこにあるんだ。あの廃墟のどこに？」

眞幻想は砕いた剣を再構築しては砕きそれを永遠に繰り返していた。幻柳駄由が答えるまで。

「二つ目の眞石版、それは八迫という切り裂きジャックの一人が隠していると見て間違いはないと思われます。なので、これから拷問にかけて眞石版の場所を」

幻柳駄由が言った言葉を遮って眞幻想は先の言葉を続けた。

「吐かせる……。か。それも一驚だが、ここは木偶使いのアイツに任せてみてはどうだろうか。あいつがいれば、すべてをだましとらすことが出来るぞ。切り裂きジャックの残党も、地獄という小世界の支配者であるあの、反逆児も……。」

幻柳駄由は眞幻想の言葉を聞いて感服せざるを得なかった。

「アイツを、開放すればいいのですね、地下牢に閉じ込めてあるアしを……。」

眞幻想は剣を投擲し、幻柳駄由の足元に投げた。

「万が一のときはこれを使え。もしも制御が出来ない場合は、どこかで調達してくればよい……。阿蘇雨竜に頼めばいいだろうか？」

「お・お・お・。またお前たちか・。今度はわしに何をやらせるつもりじゃ・。またあのような変なものを作れというのではあるまいな・。」

幻柳駄由は地下牢に来ていた。

そして目の前に居るこの老人こそが、真幻想の言っていた木偶使い、アイツなのだ。

「親鸞霧、お前の出番だよ。お前の木偶で、錯乱して来いとこの御用達だ」

地下牢の鍵穴に鍵を差し込み、親鸞霧を開放する幻柳駄由。

「お前は爺じゃねえはずだ。そろそろ、おきろよ？」
そういつて出て行こうとした幻柳駄由の方をすさまじい力が押さえ込む。

「まあ、待てよ、俺とお前の仲だろう。『ホイ朝だ』と言って置いて行く、そりゃあ、幻柳駄由、親友のすることじゃなえ」もどつてきたのか！親鸞霧！「俺とお前は親友だっただろ」

親鸞霧の最近の悩みは、自分がしゃべると相手とかぶって伝えたいことが伝えられないことだそうだ。

「おい、幻柳駄由さんよ、人のしゃべってるときは「あいたかったぜえ」、親鸞霧イ」う。何度行ったらわかる「ホントに会いたかったぜえ」」

親鸞霧の最近の悩みは、自分がしゃべると相手とかぶって伝えたいことが伝えられないことだそうだ。

なので最近、親鸞霧は諦めている。

自分はしゃべっても相手にされないのかと・。・。・。

けれど、けれどだ。確か、幻柳駄由にはそれを伝えてあるはずで、そしてそれを本人も了承したはずだ。

「・。・。」

しゃべらないと、言葉がかぶらないという手・。・いや、口の込ん

だ嫌がらせだと、思う。

なので、周りとの会話は、筆談が主なコミュニケーションとなるのは悲しきことかな。

『俺が爺の代わりに起こされたって事は、仕事だな。何したらいいんだ？』

幻柳駄由は首をかしげる。

「お前、何でしゃべらないで筆談にするんだよ？」

かなり口の込んだ嫌がらせだと、思っている。今も。

『仕事は、栗柄八迫の木偶を作って情報を取ればいいんだな？』

「そうだ。眞幻想さまがお前の力を待ち望んでおられる。一度挨拶したほうがよいかも知れんな」

『仕事第一、だろ。それこそ眞幻想さまへの最高の挨拶になる。』
二人は同時に笑った。

幻柳駄由は声をだして。

親鸞霧は紙の上で。

「なあ、親鸞霧、お前紙の上で笑って楽しいのか？」

楽しくはないが、こつでもしなきゃ、笑えねえだろ、と親鸞霧は思う。

そうこうしている内に問題の場所まで来ていた。

「木偶化の準備はいいか？これからお前の人体木偶分離化たましいがっしが見られるんだから祭りも悪くねえよなあ・・・」

第四十話 地獄（後書き）

次回、四十一話 殺意

第四十一話 殺意（前書き）

竜太の運命がやっと決まりました。

そしてこれからの展開の大筋の一部も確定しました。

なんていうアバウトな決定だろうか。

これは決定といえないだろうという突っ込み、お待ちしてませんよー。

第四十一話 殺意

それは明らかかな殺意により行われた行為である事は明確だった。竜太の足元に飛び込んできた刃物を持った何か。

これは決して人間であることはなく、人間の文明ではありえないものだった。

ありえるとしたら、新しい敵か、マリーネぐらいだ。

そして、ソイツに戦おうと思うと、変身しなくてはならなくて、しかしこんな街中で変身なんかしたら変人扱いされるのが明確で。結局のところ竜太は逃げるしかなかった。

「何でこんなことになっちまったんだよあ〜」

「うち、ここでの活動に慣れていないのか」

竜太の居た場所に降り立つてくると、マリーネは刃物ごとそれをネジ砕いた。

周りの通行人の中はいきなりやってきたそれに目を丸くするものも居た。

叫ぶものも、さまざまだ。

「だまれ、弱者よ。貴様らの死生はあとでじっくり決めることなのだから・・・」

マリーネはそういうと竜太のあとを空中移動で追いかけた。

「八迫？亮祐？悶太？理緒・・・」

竜太は必死に連絡を取ろうとしていた。

連絡しているが、全くこちらからはつながらない。

狙われているのが俺ではなく俺たちであることにぞっとする。

「竜太、聞こえる？」

突如なったジャックにびっくりしてお漏らししてしまったのは少し

だけ内緒だ。

理緒からの連絡だった。

「理緒・・・今、どこに居るの？」

「今私は大通りのベルコのクレープ屋の行列にやらんでいるわ。ちなみに、戦闘後の糖分補給中よ。あんたもおそらく狙われてると思うけど・・・」

ベルコ・・・。そういえばここは確かベルコとかいうシヨッピングモールのはずだ。ここのクレープやは一階ファーストフードコートにあるはずだから、すぐとなりだ。

「理緒」

理緒を見つけた竜太は思わず走って近づいてしまった。

「ああ、竜太・・・。あんたも襲われたのよね。もちろん」

それからしばらく、理緒と竜太は一階ファーストフードコートにて間食兼ねて作戦会議をしていた。

「まあ、返信がないのを見ると、全員捕まったか・・・」

その先の言葉は言わない、いえない。

「とにかく、一度本部に戻って情報収集してみましょう。それから行動を起こしても遅くはないはずだよ」

理緒のこういふときの行動力はすごい。

竜太なんか何の取り柄も泣いたただのおばかさんなのに・・・。

「そん・・・な・・・」

本部で待っていたのは半壊していた本部がさらに半壊、全壊している姿だった。

ここまできれいに壊されていともうここに二度と同じものを創ることはできないと考えていいだろう。

「とに・・・かく、本部の中に何かあるかもしれないわ。各自変身

して搜索開始ね」

そういつて二人別れた竜太と理緒だったが、それが間違いだつた。二人が行つたどちらにも罾が張り巡らされているのだから。

「理緒さまが、こんなところに来るなんてあとで金持ちのボンボンからおいしいー物奢つて貰わなきゃいけないわねえー。うふふ」すでに頭の中は食事で一杯、理緒の通つたあとの道には転々と謎の液体がたれている……。

決してこれは女性だと思つてはいけない。

これは女ならぬ生き物がたらすことの出来る液体。涎だ。

ドンだけこいつは飢えてんだと思うなかれ。只単に胃袋が四次元になつているチヨコツト怪力の少女なだけなのだから。

理緒はいつの間にか、いつもみんなで談話していた場所に来ていた。そこで座っているのはお金持ちのぼんぼん。

「亮祐、無事だつたのね！ところでなんでこんなところに一人で居るの？」

廃墟と化した中にかろうじて形を残しているソファーに座っている亮祐に歩み寄る。

そして肩に手を置いて話を続ける。

「私と竜太、なんか変なのに襲われちゃつて、だから、みんな集めて一気にたたいてあげましょう！」

亮祐はゆつくりと顔をこちらに向けて、やさしく微笑む。

「それでか……。誰もいないし、壊れてるし連絡もつかないし、どこに居るかもわかんなかったから、ここで待つことにしてたんだよ。よかつたよ、誰か来てくれて。これで一回帰れるよ」

亮祐は口をあけてその口の中に手を突っ込んだ。

「おえ、おあえをこおすんば。おいて、えくかするあえにうええう」理緒はとっさにその場から一歩引いた。

「私を殺して、それで、木偶化するために連れて行くですって！」
「……なぜ言葉が通じているのかは、謎だ。」
全く持って謎だ。

「ふう……。こんなところに居て誰かに襲われないかな……。」
先ほどから通路を猫背で恐る恐る歩く少年は、物音がするたびにそちらを振り向いておびえていた。

この通路が元は何なのか、それすらも全くわからない。
すべては、ダークガーディアンのおかげだ。

そんなこんなであたりに注意していなかった竜太はいきなり何かに躓いてこけた。

それはもう、すごい音を出して。

すてーん、でもずでーんでもなかった。

ぐわっしゃーん、どがどがどがばっこんどがばこびだがっがんぐし
や！

こんな音で表すのがしっくりする位すごい音だった。

例えるのなら、恐竜が建造物をえぐり倒れる音、それに黒板を爪で引っかいた音と、卵がつぶれる音を混ぜた感じの音だった。

当然、まわりの瓦礫はゆれて、倒れた。

第四十一話 殺意(後書き)

次回、四十二話 基地

第四十二話 基地（前書き）

ででんがでんでこんにちわ！

おいらがうわさの【？】駄目人です。

そんなこんなで第四十二話どうぞ。

第四十二話 基地

竜太がこけたおかげで亮祐は、偽者はよろけた。理緒がそれを見逃すわけがなく。

「死んでしまえ！」

思いつき横つ面に拳を叩き込んだ。

「はっぶうー」

亮祐の姿をした木偶使い親鸞霧は本来の姿に戻った。

「お嬢さん、あなたはとてもお強いです。やっぱり」

親鸞霧は大きく口をあけて笑った。

「あはふ．．あはふ．．．。やっぱり、あなたがほしい。僕のコレクションに．．．。新しいコレクション．．．」

親鸞霧の目がヤバイ目になっている。

「そういえばですね、眞幻想様。アイツは昔から困ったことに二つの性癖を持っているんです」

眞幻想が地面に落ちている石の欠片を復元しているところだった。

「ほう、そうなのか．．。して、どのような性癖かな．．．。よし、ここにはまるな」

幻柳駄由は答えた。

「一つは、お察しの通り、二重人格。そしてもう一つは．．．」

幻柳駄由は遥か離れた友の居るであろうはずの方向を見て続けた。

「オタクです」

眞幻想が少し驚いたように呟いた。

「オタ．．オタク？」

そして一瞬幻柳駄由の方を向いて、繰り返した。

「アイツ、オタクキーだったのか．．」

「ええ、ですからすべてを木偶化しないときがすまないようなイカレテル奴なんですよ。すべてを木偶化するためなら、なんでもありです」

「……。あはふ、あはふ……。木偶……。解放」

日の光の差さなくなっているくらい本部のメインリビングが鋭い閃光で包まれる。

「僕の木偶、サテンとブルー」

親鸞霧の手によって操られる式体の木偶。

「僕のかわいい木偶。あの子も美しい永遠の木偶にしてきてね」

親鸞霧がサテンとブルーを理緒に向けて動かす。

「いけえ！サテン、切りまくれえー」

サテンと呼ばれた悶太よりも少し大きいぐらいのその木偶は剣を持つていた。

「首を一刀両おこう断！」

サテンの剣を女の命らしい髪の毛数本と引き換えによける。

「あんたら、三対一なんてとんでもなく卑怯じゃないですかあ？」

そういつつも理緒は一体の木偶を完全破壊に成功していた。

「でもこれで二対一よね、この調子で行けば、すぐに全員終わらせることが出来るわ！」

サテンの四肢を若干破壊しつつ、親鸞霧の腹部に貫通させる勢いで叩き込む。

「でえいりやあああ」

「あはふ、あはふ……。僕の木偶……。僕の木偶……」

親鸞霧の口から出た血が木偶を汚していく。

「うは……。ぜんぜんどこだかわかんないよ……」

完全なる方向音痴も兼ね備えている竜太は自分がいつも居た場所で

も完全に方向音痴を発動させていた。

『あはふ、あはふ・・・』

突然荒々しい息遣いが竜太の耳に入ってきた。

これは聴いてもいい息遣いだろうか。

それともいけない息遣いだろうか。

『あはふ、あはふ』

それ聴いてイイかも分からないような声を頼りにひたすら進む。

「でえいりゃああ」

その声は、竜太がよく知る人の声だった。

「理緒！」

そこに居たのは、木偶であるがゆえに許される姿で放置されて居るサテンとブルー、そして人間では許されない姿で倒れて木偶を汚している人間、親鸞霧が、たおれていた。

理緒が親鸞霧の襟首をつかんで揺さぶっている。

「みんなはどこに居るのか教えなさい、とっとと教えなさい！」

第四十二話 基地（後書き）

次回 第四十三話 偽者

第四十三話 偽者（前書き）

ででんがでーん

ねむい。

書いてる時間が時間だから眠い。

こんな時間に書くなって言われたらおしまいですが眠い。

もう同士よもなく眠いんでこれを登校してイツコクエスとやったあたりでもう寝させていただきます。

もう、誤字脱字を直す気力すらありませんです。

第四十三話 偽者

第四十三話 偽者

揺さぶられていた親鸞霧の右手が利緒の右手をひねる。

「いたっ！」

思わず手を離してしまった。

その瞬間、親鸞霧は理緒の元を離れ砕け散った木偶を拾い集め、消化した。

「私は死ぬことはない。私は親鸞霧。月を、太陽をそして天変地異を呼ぶあの方の配下。地球をリ・イマジネーションするために。全てを」

そっぴい残して親鸞霧は倒れた。

「私は決し「いいからみんなの場所を言え！」に居るお前の仲間たちは今頃痛い目を見ているだろうな」

理緒が親鸞霧を見てはあゝ？という顔をしている。

竜太が肝心なことを言ったのではないかと耳を傾けていたが、仲間の場所は聞き取ることが出来なかった。

「さあ、石版はどこにある、お前が吐かないとあそこに居るかわいい男の子が痛い目見ちゃうよ」

眞幻想の居る基地の地下の地下の拷問室では三人一気の取調べが行われていた。

もっとも三人のうち一人の亮祐の拷問はすでに親鸞霧によって執行されている。

よって残るのは二人。

「石版・・・は・・・」

八迫が地面とにらめっこしつつ言葉を搾り出していく。

「これじゃあ埒が明かないなあ……。！そうだ、阿蘇雨竜、一発やって情報吸いでしてクレよ。な」

拷問室の外に居た阿蘇雨竜に幻柳駄由軽く頼んだ。

「仕方がない……。これも眞幻想様のため。少年、こつちを向いて全てを私にゆだねなさい。強制吸引」

そして、残された体に残っているものは何でもない。

残された意識あるものは悶太一人だけ。

「じゃあ、ちよつくら頼んだよ。おれ親鸞霧見てくつからさあー」

「グングニル、そろそろ自然治癒力も上がりきったことだ。本格的にお祭りに介入させてもらおうじゃないか……」

マリィネはグングニルの亡骸のとなりでつぶやいた。

「参加するのは私一人となってしまうが仕方がない。もともと空席が一つしかなかったんだろうな。運亡き者は大変な思いをするのだな。さようなら、グングニル」

マリィネはグングニルの骸を踏みつけて、先へと進んだ。

「行き先は分かっているのだから。先回りして石版を一個もらうのも悪くない。ジャックどもの基地にあるかな？あいつらのことだし、一個や二個隠し持っていて不思議ではないだろう」

「これで振り出しに戻ったわね」

理緒がソファアの上で爪をかみながら竜太につぶやく。

「でも、せつかくのヒントを無駄にしたのは理……」

爪をあまがみしたまま睨まれては竜太はその先の言葉をつむぎ出せない。

「とにかく、先には進めなくなったの。もう手がかりはないの。いったん町に戻って痕跡探すしかないでしょうね、行くわよ、この駄目竜太」

「よお、親鸞霧、木偶支配はうまくいったあか？」

正座で座りつぶやいている親鸞霧に幻柳駄由は近づいた。

第四十三話 偽者（後書き）

次回 第四十四話 交差

何でこんな時間に回転だといわれたらこの時間しかフリーダムじゃないからに決まってるじゃないですか。
「おやすみなさいです・・・。」

第四十四話 交差

声をかけた親鸞霧は幻柳駄由の方へと倒れてきた。

「だいじょぶかよ、まさかあんな弱っちいのにやられたんじゃないよな・・・」

親鸞霧は呼吸を整えてから幻柳駄由の質問に答えた。

「木偶は万全だった。恐ろしいのはあの女の異常なまでの食欲と女性ではありえない数値の戦闘力だ。気をつけてくださいと眞幻想様にお伝えしろ。たのんだ。しばらく休んだら俺は世界木偶化に入る・・・から・・・」

親鸞霧はやつとのことと言い終えて、昏睡状態に入った。

「マジかよ。お前ほどの木偶使いが今時のへなちよこ少年少女に負けるのか」

幻柳駄由も事の重大さに気がついたので今回だけは会話をあえて邪魔しようとは考えなかった。

今回だけは。

「眞幻想様、どうやら少女と少年の木偶化は失敗に終わった模様です。次は、いかがなさいますか」

幻柳駄由は眞幻想に報告に来ていた。

眞幻想は面白そうに報告を聞いていたが

「ここに向かってくる野蠻人を始末してきてくれるかな。石版、持つてるからそれは壊しちや駄目だけど。名前は、マリーネ、だよ」眞幻想は扉の奥を指差していった。

「行ってらっしゃい。きちんと帰ってきてね？」

幻柳駄由は次の瞬間には外に出ていた。

「さてと、もうここに手がかりがない以上どうするかを考えなくちゃいけないわ。考えられそうな有能な人材はもちろん私一人な訳だ

し。とりあえず歩き回るしかないわね。おいこら、竜太商店街に聞き込みに行きやがるぞ」

理緒は竜太の襟を引きずって商店街の方へと歩いていった。

「誰も、ここには居ないのか・・・」

竜太は事の重大さにやっと、ようやく気がつき始めていた。

それと、なぞの敵にも。

「さてと、これで幻柳駄由が負けようがマリーネの進行方向はこちらなわけだし、どちらにしても石版はてに入ることには間違いない。それで最後はここに瓦礫となって残っている最後の石版の復元だけとなった。これは難しい・・・」

眞幻想は一人いすに座り、机の上におかれている瓦礫の山を見ていた。

「僕は剣を使うのが得意なだけで、復元は本業じゃないんだけどな・・・。まあ、何でもできる僕たちこそがこの美しい地球の声を聞き取ることが出来たのも何かの縁であろう」

その言葉が終わると同時に眞幻想の手の中には一枚の石の板、石版が存在していた。

「これで、三枚そろってこの美しい地球をリ・イメージーションできるんだな。がんばろうか。最終局面はもう間近なのだから」

眞幻想の目的は一つ、地球の再構築。および人類の完全なる駆逐。

第四十五話 始動（前書き）

なあ、そろそろ前置きはおいといてとつとつと終わらせませうしゅー！

第四十五話 始動

マリーネはたった一人だった。

しかしマリーネは歩いていった。

腰のポケットには彼らが求めている石版の一枚。

これが彼らの手土産として祭りに参加しようと思っている。

「反逆児様、これより先はわれわれの領土。これより先には立ち入らないでもらいたい」

マリーネの後ろに回りこんだ幻柳駄由はマリーネの首に腕を回して力をこめて、

「それは遠慮する。私は眞幻想に用事があるのでな。三下なぞに用はないのだ」

瞬時に幻柳駄由から離れたマリーネは幻柳駄由の後ろに手をかける。

一瞬の間が空いて、立っていたのは幻柳駄由だった。

「これで、私は……。さあ、すべてをはじめましょう」

地には、マリーネが倒れている。

動かぬ体が、その場には置き去りにされていた。

「おお、そうだそうだ、石版忘れちゃいけないよなあー。どこに隠してんすかあー、反逆児？」

やがて幻柳駄由はお目当ての石を持つと、そのまま奥へと歩いていった。

なれないような動作なのは、……。

親鸞霧は、一人だった。

一人部屋の奥で瞑想していた親鸞霧は突如暗闇で目を開いた。

「始まりだ……。世界完全木偶化！！！！」

竜太と理緒は二人だった。

ある場所に来ていた。

竜太の家だ。

しかし、理緒が入ると竜太のお母さんが『彼女だわあー』と煩いの
で家の屋根で待機している。

やがて竜太はお目当てのものを持って帰ってきた。

八迫が竜太の家で使っているノートパソコン型パソコン、略してノ
ーパソコンだ。

只の民間用ノートパソコンを無駄にかっこよくしたこのパソコンに
ついて突っ込んだら一度三途の川を泳ぐ事になるので言えないが。
理緒がパソコンを起動させてフォルダ内を閲覧していく。

途中途中にかかっているパスワードは、八迫に関連すること、好き
な調教ドS道具などで通過することが出来た。

そして行き着いたのは三つの石版の話。

一つの隠し場所は切り裂きジャック本部に八迫が移したこと、そし
て一つは所在が全く分からず、最後の一つは海の真ん中にある離島
にあるという旨が書かれていた。

「ここに行けばいいわけね」

理緒は爪を噛みながら悩む。

悩む理由は簡単なこと。

行く方法がない。

普通の中学生でも、どんな中学生でも男女二人では貸してくれる所
があるわけでも、借りられる当てがあるわけでもなく。

そんな時のんきな竜太を殴ろうと見たときに竜太はこっちを向いて

にやついている。

なんだかいろいとむかついてくる。

ハンパなく殴りたくなってくる。

殴ってやるうと襟をつかんで持ち上げた瞬間に竜太は叫んだ。

「行く方法、あるんだって……」

死にたくないからと嘘で延命措置を図ろうという魂胆か。

行き詰ったときはそういう馬鹿の柔軟な発想でひらめくこともあるので聞いてやることにした理緒は竜太を地面に降ろす。

答えを聞いたとき、理緒は思わず竜太の顔を思いつき叩いていた。なんてことはない。謎が解明されたときの手を打つと同じ意味のようなことだった。

眞幻想は一人ではなかった。

そこに居たのは親鸞霧を除いた三人と、亮祐、八迫に悶太。

眞幻想は立ち上がり、扉を指差した。

「われわれの目的を邪魔するものがやがて現れる。そのときに備え、

駆逐の準備を……」

そこに来るものが、眞幻想には分かっている。

先ほど捕らえた少年たちの仲間か、幻柳駄由が来る筈だ。

眞幻想の手の中で三枚目が姿を現した。

激しい音とともに扉が壊れた。
そこに立っているのは・・・。

第四十五話 始動（後書き）

次回予告

眞幻想の元についてそろそろ三枚の石版！

其処にたまたま間に合ってしまった二人の男女、竜太と理緒。

七対二のめちゃくちや不利な戦いの中、親鸞霧が現れ、さらに援軍が現れる？

切り裂きジャック、第四十六話 開戦

って所まで書く気力があるかしら。

第四十六話 開戦（前書き）

今週は休みでした。なぜなら学校でパソコンないとこに左遷されてたからでしょうねー。

ちなみに今週もおそらく今日以外は出来ません。

ども、すいません。

第四十六話 開戦

「仲間を返せえー!!!」

ドアの破壊とともに現れたのは理緒と竜太だった。

そして同時に天井から光とともに現れたのは幻柳駄由だった。

「会場はここでもよろしかったでしょうか？真幻想様」

最後に部屋に現れたのは親鸞霧、だった。

「真幻想様、世界完全木偶化完了しました」

それからチラリと招いたかもしれない客を見て息を呑む。

「その少女が、あの、少女です!」

その目には明らかな恐怖が浮かんでいた。

まあ、当然か……。

「お前らまとめて、かかってこいやあ!!!!!!」

理緒が真幻想達を指差して叫んだ。

真幻想が動いた。

手には三つの石版。

「さあ、リ・イマジネーションが今我等の手によって行われる。世界の再構築の前の前菜に我等の血を注ごう」

真幻想が言った。

親鸞霧はひそかに狙っていた。

二人の背後がから空きになる瞬間を。

「いけ、木偶亮祐、木偶悶太。そして木偶八迫」

思ったとおり反応が遅れた。

そして元々の仲間ならいくらなんでも攻撃が出来ない。
そこを全員でハメればいい。
と、思ったのに。

「お前らいい加減にしろおお」

ここに来て竜太が一撃で木偶を倒した。

本体を木偶化しているのでダメージは蓄積されるというのに。

一瞬の出来事で竜太が木偶三人を倒し、理緒が親鸞霧の頭を床に高速で叩きつけた。

「お前ら、覚悟しろ。血い吐くのはためえーらだあああ！」

理緒が吠えた。

そのすぐあとに竜太が木偶化した三人を倒したあとにまっすぐ眞幻想に突っ込んだ。

「再構築すんのはお前らの頭ん中だけでいいんだよ！」

久々に使う『想像』で太刀を出し眞幻想の前で振り下ろす。

「眞幻想様に手を出すな」

阿蘇雨竜が竜太の前に立ちふさがる。

眞幻想が剣で阿蘇雨竜を斬り倒した。

「男の真剣勝負に邪魔はいけない。そういうのは物語できちんと読んでおかなくちゃいけないよ」

一瞬のことで阿蘇雨竜は絶命させられた。

第四十六話 開戦（後書き）

自らの手で仲間の命を捨てた真幻想。

地球の再構築を止めることは出来るか！

そして木偶化した仲間、世界人類は一体……。

ちなみに私もすでに木偶化しております。

後ろで親鸞霧に操られております。

お恥ずかしながら。

次回第四十七話 仲間

第四十七話 仲間

「真幻^{まげ}……」

助けを求めた阿蘇雨竜の顔を踏みつける。

「邪魔」

そのまま首を斬った。

その場に居た誰もが真幻想を見た。

仲間を簡単に捨てる真幻想の本当の姿を。

「さあ、かかつておいで」

真幻想の体を無数の剣が取り巻いた。

「獄凜一閃」

その取り巻く多数の剣で竜太をついていく。

「我のこの剣の鎧、鎧鉄^{がいてっけん}剣貴様には敗れることがない。さあ、恐れ

おののけ、そして恐怖に敗北しろ。構築の生贄になればいい」

その言葉で辺りは戦場となった。

「……。全員、そうやって切り捨てていくのか？」

竜太の質問に真幻想は当然とばかりにうなずいた。

「お前のことを信じてついてきた、大切な人でもか」

この質問にもうなずいた。

竜太は躊躇なく切りかかった。

「其処に開きなおれえ！」

竜太が真幻想を相手にし、理緒が残りをまとめて遊戯している。

「地球は、人間が戻していく！お前らみたいな一方的なごり押しじや解決なんかしない！」

竜太が力で押して真幻想に言う。

「ちがう、違う違う違う！人間はこれまで一方的な権力で地球の財産、資源を奪い取り枯渇させてこの美しい星を廃墟にしようとしている！許されない！この星は生まれ変わるべきなんだ。そのために

俺達人間はすべて駆逐し、美しい惑星へと戻すんだああああ！邪魔、するな！」

眞幻想はすべての力で竜太の剣を斬り砕く。

竜太はそのたびに新しく創造して壊されて創造して壊されてを繰り返していた。

五本目の剣が砕かれたとき、竜太は叫んだ。

「地球の未来を勝手に破滅に確定するんじゃないねえ！」

そう叫んで、眞幻想の足を切りつけた。

理緒は囲まれていた。

親鸞霧に。

幻柳駄由に。

そして蝶微茨の三人に。

すでに三人の体力は削ったはずだった。

しかし、倒れない。

こうなったときの対処法として一つ教えてもらっていたことがある。首を折れ。

一人ずつ、確実に首を折れ。

それは、怪力がなければ出来ないことであって、普通の少女ではない理緒は出来てしまうこと。

まずは、親鸞霧から。

あのうつつとしい木偶使いから。

「こつちに向かっ、このお人形遊びのイイ大人、待ちやがれ！」あいてしてやる」

親鸞霧の弱点、話の最中にかぶることが理緒には見抜けていたらしい。

そして、鬼ごっこが始まる。

彼らの根城の屋上で。

隠れる場所も少ない、そんな場所での鬼ごっこ。隠れる場所は、屋
上と最上階のみ。

目的に気がついた二人は追いかけている・・・が。

第四十七話 仲間（後書き）

次回、破壊による破壊。

木偶使いを追う理緒の一騎打ちにそれを追いかける二人。

そして地球をリ・イマジネーションしようとする真幻想と戦う竜太。

木偶化が解けぬまま倒れている八迫、亮祐、悶太の三人の運命は。

第四十八話 木偶

第四十八話 木偶

いくつ者剣が竜太を襲っていた。

眞幻想は新しい血族の首領であり、多数剣使이었다。

一本の剣を弾いているとほかの剣に切り刻まれる。

竜太は思い切つて一つも弾かずに眞幻想に突っ込んでみた。

結果が、蹴飛ばされて剣の嵐に逆戻りだった。

すでに切り裂きジャックとしての創造は使っていた。

しかしそれも立体化する前に消失させられてしまう。今の竜太に出来ることは何もなかった。

かといってこの状況、救援が望める見込みもない。

理緒はすでに三人を引き受けてくれているし、残りは戦力外というか、敵の戦力となつていている分けだし、この状況を一人で切り抜けるのにはかなり以上の無理がある。

さて、どうしたものか。

竜太はふと思つた。

「待ちなさいよ、この陰湿根暗の人形友達の寂しい大人あ！」

理緒は叫びながら止まってくれぬ相手ではないだろうと思つた。実際に、止まってくれない。

まあ、こんなもんだ。悪の敵なんて。だから私は実力でねじ伏せる方法へ移す。

まずは小道具、コインチャン小石を指で弾く。
でこピンの要領で。

ただし、力加減なく思いつきり。

「おちろおおおおお」

コイシチャン
小石は親鸞霧の肩を貫いた。

痛みに耐えかねた親鸞霧は下りた。

「こ……小娘……。ひいいい！」

すでに親鸞霧は理緒との戦意を喪失していた。

つい先ほどアイスの恨みを晴らされたばかりだから。

あの馬鹿力を見せ付けられてしまったら戦意喪失もうなずけるとい
うものだ。

「戦わないならおとなしくだまってなさい！」

思いつきり鳩尾にこぶしを叩きこんだ。

やっとその場に到着した彼、幻柳駄由が見たのは口から泡を吹いて
气ぜつしている親友の姿だった。

「し……親鸞霧！」

幻柳駄由はその場でひざを着いた。

誰が友をこんな目に合わせたのか。

あの女か。

あの女が俺の大切な友達をこんな姿にしたのか。

許さない。許さない。ユルサナイ

幻柳駄由は憎悪の力で少女をひねりつぶすことを決めた。

「許さない」

トンツと隣に誰か降り立つ音がした。

「蝶微茨。俺があの女始末するからお前は親鸞霧の様子みててくれ
るか？」

蝶微茨はうなずいた。

もともとしゃべるような人物ではないからだ。

仲間の許可を得て、
幻柳駄由は敵討ちという目的で少女を探しに行
った。

第四十八話 木偶（後書き）

次回、親友、親鸞霧しんらんぎりを倒された幻柳駄由げんりゅうだゆうは蝶微茨ていしの許可を得て理緒を倒しに出陣する。

一方竜太は防戦もままならぬ中で真幻想との決着をつけようとしていた。

第四十九話 最強

第四十九話 最強（前書き）

なかなか更新できない中での更新で御免なさい。

何とか時間を創って更新していきたいと思えます。

今の心境から言って、執筆なんておこがましい事は存じ上げません。そんな大それた言葉は小生には到底使えぬ言葉だと只今の時点では自負、しておりますので。

第四十九話 最強

幻柳駄由は手当たり次第に力を解放した。

幻柳駄由の力は、理緒と同じだった。

怪力によって全てを壊す。

友を打ったその少女を。

目的を消失させてしまうその少女を。

幻柳駄由は城の西等の閲覧室でつぺんを、壊した。

「女あー！俺の友達をよくも、よくも気絶させてくれたなあ！」

理緒には聞こえていた。

そして理緒は思った。

『気絶させたぐらいでなんで殺されるぐらい怒られなきゃいけないか
つたんだろうか』

「ここに居るのかおんなあ！」

理緒が隠れていた所を幻柳駄由は殴りつけてきた。

「俺な、実はお前と同じ位馬鹿力なの。俺と女はどっちが強いのか、俺はとつても気になるわけ。だからさ、比べっこ。しよう？」

幻柳駄由はそういうと全力で理緒に殴りかかった。

「レディーにそうやすやすと手を出すもんじゃないわよ。女性は、髪と顔が命なんだから」

理緒もそれに答えて拳で返事を出す。

「ただし、私の怪力を馬鹿力って呼ぶのはやめてくれるかしら？」
にっこり笑って。殴る。

「敵はきちんとおらせてもらうからな。真友しんゆうの」

竜太は、ふと思った。

こいつに勝つための方法を。

精一杯考えた末に思いついた最良の策は無かった。

思いつかなかった。だから、

これからは自分のわずかな本能に身をゆだねていくしかないということだ。

そして、その本能は今こう告げている。

真幻想をぶっ飛ばせ。ただし、其処までの経路は自らの手で無理やり切り開くこと。

条件、生きてぶっ飛ばせ。

竜太は剣の嵐の中で真幻想をにらみつけた。

今出来るぶっ飛ばす方法は、剣の嵐に突っ込んで突っ込んで……

強行突破すること。

竜太は迷わずにもう一度外に出るために一歩踏み出した。

「おいで、地球をリ・イマジネーションするためには時間が惜しいんだ。早くしないと手遅れになってしまうから」

優雅にティータイムを楽しみながら、一人優越感を味わう真幻想に向かつての一步を。

第四十九話 最強（後書き）

次回、真幻想に一方的になぶられる竜太が編み出したのは本能的に突破する強行突破。果たして竜太の本能は真幻想に一泡吹かせる作を編み出せるのか。”最強”の多数剣使いと、”最弱”の切り裂きジャックの勝敗は！！！！

一方、殴り合いに殴りあう戦いを始めた理緒と幻柳駄由。果たして馬鹿力VS怪力、一体どちらが”最強”なのか……！！！！

次回 第五十話（総合的七十四話）男女

第五十話 男女（前書き）

ど・・・どうも。

一ヶ月ぶりでございます。

最初に申すべきことは謝罪でしょうけれども、毎度毎度のことですので、聞き飽きたかと思ひまして真に勝手ながらこちらの方で省略させていただきますと思います。

さて、本編の方でございますが、そろそろ終了させていただこうかと思っておりますゆえ、もうしばらくお付き合いいただけたらうれしいです。

ちなみに終わると言うのは一端の区切りをつけると言うことでございまして、今回の眞石版編を持っていったん完結とさせてもらい、これまでの話の方を加筆修正的なことを行ないまして分散させてからの続編と言う形をとろうかと考えております。

なお、これは現段階での考えですのでこの話が終わってもまだまだお付き合いさせてしまうなんて事になるかもしれないませんがどうぞよろしくお願いいたします。

ちなみにやめるとは一言も言ってませんか？ A

第五十話 男女

剣の嵐は止まることなく、竜太をひたすらに切り続けている。

すでに感覚は無く、それゆえに命の危機もあるだろうが、これが終わってからの心配すればよいだけの話だ。

目の前にあいつはいるのに。手を伸ばせばつかめるほど近くに居るのに。

こんなときに豪火竜が居たらどうしてくれるかと他愛のないことを考える。

きっと奴なら俺に力を貸してくれるはずだ。

いや、奴ならどこでも助けてくれるはずだ。力を貸してくれているはずだ。

だから、俺はこいつを倒して奴を迎えに行くんだ。

「真幻想おおお!!!!!!」

竜太は思いつき真幻想の腹部に拳をたたき入れた。

空から地面に瓦礫が降り注いだ。

「やっぱり男女の力の差はあるんだね」

幻柳駄由は理緒の全力のこぶしを捕まえて理尾自身を持ち上げた。

「わあ、やっぱり女の子って軽いんだね」

すでに気を失っている理緒を上げ下げしながら、幻柳駄由はつぶやいた。

それから思い切り力を入れて理緒を叩き落した。

「でも女の子だからって言って手加減は出来ないんだ。なんていったって僕の大切な友達を気絶させちゃったんだから」

物言わぬ理緒に一人ではなし続ける幻柳駄由。すでに其処には私闘が混じっていた。友の敵ではなく娯楽へと変貌していた。それから数分の一方的な会話の後に幻柳駄由は理緒の頭を踏みつけた。

「たぶんそろそろ眞幻想が待ってると思うんだ。だからきちんと動けなくしてから行くね」

理緒の意識を奪った技をもう一度構えてはなつた。

「さてと、じゃね」

幻柳駄由は確実にしばらく意識を取り戻さぬようにしてから眞幻想の元へと走っていった。

第五十話 男女（後書き）

n e x t
s t o r y
n o . 5 1
f a c t

第五十一話 真実（前書き）

はい。と言うようなわけで眞石版編は完結に向かって加速中です。これで終わらせるぞと言うような心意気でがんばろうと思います。前回申しましたとおり、終わるかわかりませんがね。

それでは。

第五十一話 真実

マリーネは機会をうかがっていた。
自分が全てを支配できる瞬間を。

そしてその瞬間は今だと今の自分の本能が告げている。

マリーネは動き出した。

理緒は完全に意識を失っているわけではなかった。

かすかにそれを見ていた。

それは今まで見ていたものとは姿すらも全て異なっていた。

ようやく竜太が剣の嵐が抜け出し真幻想の腹部に拳を叩き込んだときだった。

拳を叩き込んだ数秒あと、上から何かが降って来た。

竜太はその音の方を向いて息を呑んだ。

「お前、何で……」

太陽の光で黒い影しか見えないが、その姿は何度も見てきたので間違えようが無かった。

「お前……、お前……!!!」

真幻想はその瞬間にくるりと体を反転させ竜太との立ち位置を入れ替えた。

「おい、幻柳駄由はやく助けなさいか!!!」

眞幻想はその影の服を見て思わずそう叫んだ。

その影は、低く声を殺し笑ってから返答した。

「すいません、眞幻想君、私はマリーネと言ってこの地球をあなた
の代わりに作り変えてあげる心優しきものです」

マリーネは眞幻想の首をつかんで持ち上げ宙に浮かせた。

「石版をよこせ。ガキ」

急に首をもたれたたされたため、眞幻想は息が続かなかった。

「は・・・はあ・・・つふ・・・はああ」

マリーネは待ちきれず、眞幻想の腹部に地獄道具 ヘルジャベリン 地獄鋭槍 を刺
し込んだ。

全ては自らの思惑をかなえるために。

そのための犠牲は何も考えなくていい。

ただ自らが成し遂げたいことを思い浮かぶ方法で強引に。

「そのこの切り裂きジャック、貴様は知っているのか？」

マリーネは残忍に笑い竜太の方を向いた。

「此処からが本当の終わりですよお？」

マリーネは一人、これからの世界を考えていた。

自分の新しく作り出すこれからの

第五十一話 真実（後書き）

次回、第五十一話 五人【仮】

ちなみに前回の英語版はなぜか文字が平仮名になりませんでしたのでそのまま知ってる単語で無理やり文を作りました。

伝わりましたよね。

f a c t って真実って意味だと思っていたのですけれど・・・。

通じましたでございましょうか？

第五十二話 現実（前書き）

なんだかんだと変更しているうちにやっぱりマリーネメインの話になつてしまうことかと思いましたがこれでマリーネさんのお話も終わりなんではないでしょうか？

よく分かりませんがwww

何はともあれ、終わりには近づいているはずでございませうが・・・。

先が見えないのは何ででしょうね。

ちなみに言い分けさせてもらいますと、テスト期間中でしたのでまじめにおべんきょーしてました・・・。

第五十二話 現実

マリーネがにやりと竜太の方を向いて笑うのを見た瞬間に、全ての記憶が完全な映像になって脳内に流れ込んできた。

突如として現れたマリーネが自分を殺そうとして近づいてくる姿。それを防ぐために自ら犠牲となっていた豪火竜の後姿。自分に手を出すなという最後の言葉を残して取り込まれていた豪火竜の姿。

全ての姿が一瞬にして脳内で再生されていく。残っているのは只一人。

そして在るべき者の存在が消え、大破してしまった愛剣。それを見ていることしか出来なかった自分の姿。

その映像についてくるのは今目の前にいる男の笑い声。脳内にしがみつき、放れようとしなない男の癪に障る声。

マリーネが気づくころとしている世界は真っ黒だった。

右も左も、上下すらない只ひたすらな深淵の闇。

この世の負の感情をまとった色の世界。

全ての準備はすでに出来た。

あとは、彼らを招くだけ。

そして、新たに知った真実。

過去の紛失物とされていた三枚の石版の存在。

これは、マリーネの手駒のみが完全にそろった状況と言っても過言ではないほどだった。

そして、マリーネの目は現実に戻ってきた。

現実に戻ろうとしても戻ってこれぬようにトリピート機能がつき流れ続ける映像。

現実は見えていた。

けれど動けない。

マリィネが一步一步と竜太に近づいてくる。

自分の内部からの危険のサインが送られてくる。

でも映像が邪魔して動くことが出来ない。

現実の映像と過去の記憶の映像が重なって再生されている。

あの時も自分はこうやって何も出来なかった。

助けてくれる人などいないのに。

誰も、いないのに。

第五十二話 現実（後書き）

次回、彼らがついに動き出す。
そして三銃士精神で突き進むは・・・。

第五十三話 仲間（前書き）

さて、なんだかんだ言いましてマリィネメインの話になったことは申しましたが、さらに今章での中断【予定】を申し上げましたが、さらに申し上げることがございます！！！

それは・・・。

私夜中にしか打ち込みが出来ません！！！！

・・・。

そうですか。どうーでもよろしいでございますか。

第五十三話 仲間

黒崎理緒は自らを奮い立たせた。すでに満身創痍の自らの体を持ち前の努力でだ。

マリーネは竜太の方に行った。正確には竜太の方じゃなくて石版の方に行ったのだろうけど。

とにかく、あのヘタレで非力な弱小の味方は二対一なんて即死も同然だ。

「たすけにいかなくちゃ・・・」

すでに体の節々が痛む中、理緒は汀を杖代わりに立ち上がった。目指すはマリーネが歩いていったこの場所の頂点にして中心部。全ては仲間のために。

一文字紋太はふと疑問で頭を悩ませた。

自分は先ほど変な女性に・・・を。初めての・・・奪われ、倒れてしまったはずだった。

「あ・・・あううう・・・」

その瞬間を思い出すだけでも激しく赤面して、思考が途切れてしま

う。
気を取り直して考えてみると自分は知らない場所にいるという観点からここは、自分のはじめてを奪ったあの女の人と物騒な剣を持っていた男の場所に違いない。

おそらくこの場所のどこかに亮祐も拉致・監禁状態にされているはずなのだ。

ふと周りを見渡しても誰も居ない。

代わりに一枚のメモが残されている。

「りよおすけ・・・」

思わずつぶやいてしまう。

そのメモに書かれていたのは・・・

思わず走り出していった。
全ては仲間のために。

栗柄八迫は迷走していた。

自分でも思うがそれほど地理に疎いわけでもない。と言うか地理は得意中の得意だったはずだ。

先ほど意識を取り戻した部屋から見えた硝子の落ちていた部屋への方角は合っているはずだった。

と言うか今も見えているアレに違いないのだが。

思わずつぶやいてしまう。

「つかしいなあ……」

どこぞのRPGではないのだから大掛かりな仕掛けは無いはずだ。で、つかない。

八迫は最終手段に移ろうとしていた。もともと野蠻ではない正確だったはずだが、壁を壊しつきぬけて一直線で狙おうと思うのだ。

「したら、たどりつける」

迷わず隣の鎧のつけていた硬そうなハンマーで壁を斬り壊しまくる。全ては【一応】仲間のために。

中片亮祐はアドベンチャーを構えていた。

目の前に居る奴が突然歩いてきた亮祐に鎌を振りかざしてきたからだ。

蝶微茨は激しく鎌を振るい亮祐を襲っていた。

「お前は切り裂きジャックだろう！ならば親方様の目標に確実に邪魔となる存在である！拙者が親方様の目的を助太刀いたすのである！！」

亮祐から見た蝶微茨はいつかテレビで見た歌舞伎役者そのものだった。

確か歌舞伎役者だった。

目には隈取が入り、化粧をしている。テレビで見た歌舞伎役者は確

かこんなものだったはずだ。

「邪魔。早く行かなきゃならないので、そこをどいていただけます
でしょうか？」

蝶微茨は答えず鎌を振り下ろした。

どいてはいたただけぬと分かると亮祐はアドベンチャーを撃った。

「全段放射！！リロード！」

第五十三話 仲間（後書き）

次回、突然の敵に襲われた亮祐の前にあいつが現れた。そしてついに切り裂きジャック全員集合になるか！？
まあ、なりません。話は進みますよ。

よくよく考えると今までの話を考えると中篇ぐらいにしかならないような尺だったナ……。
これこそが真の長編！！！！って感じがしますよね。
今までの話はどうしましょう……。

第五十四話 再開（前書き）

今日はあと一本書けるか書かぬかってところですよ。
そんなんですがよろしくです。

第五十四話 再開

八迫が通った後ろには瓦礫の山と獣道にも勝らぬ見栄えのとてもよい道が創作されていた。

すでに壊した壁は最後まで見えぬほどの道を創作して来た。

だが、やはり目的の場所には辿り着けそうになかった。

「こんにやるー！どんな大層なRPG城だっ！ここは！」

叫んでも只、むなしさが増すばかりだった。

「とつとと辿りつけえええ！！！」

けれど叫ばずにはいられなかった八迫はまた叫び、壁を壊した。

亮祐は歌舞伎男、蝶微茨を打ち続けていた。

しかしそのたびに蝶微茨は《よよい！》だのと叫び華麗によけていた。

さらにそこからの反撃も実に見事としか言いようが無いほどの身のこなしで、確実に追い詰められているのは自分だと分かった。

おそらく、ここに紋太が居て、トラベラーがあれば話は少し軽めになっただろうが、現実問題、敵地に裸一貫同然でおいでくるわけにも行かない。

ため息をつきつつ、攻撃をかわしつつの攻撃を繰り返していた。

そのときだった。

ちようどいい具合に壁がへこみ、瓦礫の怪獣が蝶微茨の体から何から全てを押し流してくれた。

その壁の向こうに立っているのは八迫だった。

ちようど同じく八迫も亮祐を見つけたようで元気そうに手を振っていた。

蝶微茨に一瞥をくれてやると八迫の方に駆け出し、再会を喜んだ。

「目指してるのはあの場所なんだけど、最短距離で行っても辿りつ

け無いんだよ・・・」

お手上げーな状態で八迫は亮祐に相談した。

亮祐は思いついた作戦を八迫に耳打ちしてみた。

八迫が驚嘆したようで亮祐の顔を見つめていた。

第五十四話 再開（後書き）

次回、最前線に全員集合！！！！【予定】

そしてマリーネとの最終決戦が！！！！【予定】

ラストバトル

真幻想の生死は！？【未定】

と言うか石版の設定は！？【不明】

全ての謎が紐解けるときが楽でうれしいと喜べる第五十五話 未定

【仮】

第五十五話 創造（前書き）

ええっと、一ヶ月ぶりでございます。

書くたびに前回とか読み直してるのですけれどもですね。

長いです。これまでで一番の長さになっております。夜で頭がぼけてなきゃ二十一話もこれで書き続けることになっております。

さすが、一気に詰め込んだ作品だ……。とかいつも書くのが短いのであることは自負しておりますがねえ……。

そんなわけで本編どうぞ！！

第五十五話 創造

竜太は今、自分が置かれている状況を理解した。

誰も助けにくれる人がいない中での反逆児との戦い。腹をくくり、今の自分でぶつかることしかないのだと、悟る。

今の自分だけで。

マリーネが竜太のすぐ前で立ち止まり、宣言した。

「石版の力でこの世をリメイクするとか行ってるその死に底無い君の石版もここにこうして全てそろったわけだ。これからお前らを倒し、あいつらの変わりにリメイクさせてもらおうとしよう。私好みの世界に。これから始まる、死と恐怖と憎悪と悲しみの連鎖で紡がれる世界を！！！！これから！！！！この私が！！！！」

それを聞いた真幻想は荒い息遣いで立ち上がった。

「リメイクじゃない。リ・イマジネーションだ。俺の夢は俺が終わらせる。お前に勝手に語られるものじゃないからな。そのバカ男、協力しろ我が野望の前菜との前での、共闘だ」

ヒューヒューと言う息の音を出しながら真幻想は立ち上がり、剣たちを構えた。

竜太はいつの間にか自分の頬がにやけているのに気がついた。

それは、自分を助けられるものがここにもいるという喜びか何か・
・竜太にも分からなかった。だが、うれしいとしても、はじめはつけておきたい。

「これが終わったら、次はお前を倒すからな。俺だけじゃ勝てないから、こいつを倒すまでの間だからな」

言い終わると同時に竜太は目をつぶり、創造の剣を構えた。

「死に底無いと死にたがり。そんな生気の無い二人では、私には勝つことが出来ないでしょうね」

マリーネがみすばらしい格好の二人を見てにやける。

亮祐と八迫は“八迫の行きたかった場所”によろやく辿り着いていた。

そして中から聞こえる金属音にも気がついていていた。二人は顔を見合わせる。扉を堂々と開けた。

理緒はマリーネが地下へと消えていく影を見た。

そして倒れている自分の仲間と自分の敵を見つけた。

紋太がそこに入っていたのは偶然だった。

道も分からぬ大きな場所で中をうろろろしていたらきれいな場所に出してしまった。

そこには大きくて綺麗な台座が三つ存在していた。

「創造・・・？」

思わず口に出して読み上げてみても何のことだかさっぱり分からなかった。

そして、三つの台座の中に、まだ何も入っていないことを発見して試行錯誤していると何者かの足音が聞こえてきた。

思わず、台座の奥の柱に隠れて様子を伺う。

次の瞬間、紋太が目にしたのはマリーネの姿だった。三つの石版を持ち、台座の前に行こうとしているであろうマリーネの姿だった。

思わず飛び出していた。

「ここに石版ははめさせないぞ！」

トラベラーをマリーネに構えて叫んだ。

その叫び声を耳にしてよろやくマリーネは紋太に気がついたようだった。

「ほう、いつぞやの子供か・・・。上に行かなくていいのか？もうすでにお仲間の一人がかなりの重傷なはずだぞ」

仲間思いである紋太はこの言葉と恐怖心とで上に逃げるはずだと読んだ。そしてその背中を思いっきり痛めつけようと考えていた。

しかし、紋太がとつた行動はまったく別のものだった。

「僕はここを退かない」

明らかになっている奥歯の音で若干聞き取りづらいながらも紋太はそう告げた。

マリーネは子供の成長は早いものだと思えてから、笑った。

「お前に私を止めることなど出来るわけがない。現に、平田竜太と眞幻想は私をとめることが出来なかった。そこで、お前に何が出来る？」

紋太は、いまだなる奥歯を必死にこらえながら答えた。

「でも・・・でも、今のお前は明らかに弱ってる。竜太と、眞幻想の二人との戦いで消耗しているはずだ」

マリーネは紋太の正論に微弱ながらもうなずいた。

「読みが深いな、だがしかし、消耗と入ってもたかが知れている。

今のお前を倒すほどの力も残ってないほどに見えるのか」

紋太はトラベラーの引き金にかかっている指に力を込めて呟いた。

「削ることは出来る。それに多少なりとも、派手好きなお前は、台座を損傷させずに戦えるはずがない！！！」

引き金を、引いた。

「いい度胸だ、しかし、それが命取りでもある。いいだろう、見せてやる。最小限に破壊をとどめた私を・・・。」

トラベラーから出た煙で、紋太はなにも見えなかった。

聞こえるのは恐怖だけ。

第五十五話 創造（後書き）

ええっと……。書いてる間に出来上がったシーンを公開して見ましよう。

まず、竜太と真幻想の共闘のシーンなんて存在しておりませんでした。初期では。まあ、作品は絶えず変化するというのだということですね……。

そして、紋太君、彼はマリーネと一騎打ちするなんてとんでもございませんでした。だって、弱いし……。まあ、紋太があのお敗北してる場所においてどうすんのかって事になってたったらどっかふらついててもらおうと思ってたら、そこに偶然台座があつてマリーネも来ちゃつて……。という風に手が勝手に打つてました。

これからの話が全く考えておりません。いや、あることはあるのですがマリーネさんと紋太君であつちやつたし、それから勝手に共闘始めるし……。

考えていた真幻想の裏かけなくなりそうですがかんばろうかと……。と言うか、何で真幻想すんなりと共闘始めちゃってるんやろか……？

第五十六話 団結

紋太がはなったトラベラーからの煙で何も見えなくなっている地下。そこで、紋太はどこからマリーネが襲い掛かってくるのかということに全神経を集中させていた。

しかし、マリーネの気配を読み取ることは出来ず、紋太は突然煙の存在を否定して目の前に現れたマリーネを見て腰を抜かした。

「どうしましたか？まだまだ、消耗してないのですけれども??？」
煙がまだはれぬ中、マリーネは不適に笑っていた。

「くそっつっ!!!何でアイツに勝てない!!!俺は絶対石版を取り返してみせる!そして地球を救い出すんだ!!!!!!」

双剣を出し、杖代わりに立ち上がった真幻想は一人、地下に降りていった。

「俺は!!!アイツを超える!!!超えて、リ・イマジネーションをはたすっっ」

一人、そっぴい残して降りていった。

「ほら、バカ竜太。あんたが一人ここで這い蹲って何も変わらないでしょうが。あんたが・・・私達がとつと地下に行つてマリーネ突き飛ばして、豪火竜を助けなきゃいけないでしょう!!!私達の六人目を助けなきゃ、何も終わらない、終われないでしょうが!行くわよ、バカ竜太」

理緒がそう叫んで一人、立ち上がった。

「おい、バカ竜太。いつまでもそこどころねっころがってないでとつとと、終わらせて本部直さなきゃ何も出来ないだろお?本部は今だってボロボロのままなんだ!急いで直すんだ。行くぞ」

八迫が立ち上がり、理緒の隣に並んだ。

亮祐が「よっこらせっ」といって立ち上がり、無言のまま理緒と八

迫の隣に並んで振り返った。

「ほら、とつとと助けに行くんだろ！？お前待ちだ。来いよ、竜太」
亮祐は手を差し伸べた。

竜太は一人地面を見つめ手を伸ばした。

理緒が、八迫が、亮祐が、その手をつかんで起こしてくれた。

「行こう。全部終わらせに。そして、助け出しに」

切り裂きジャックは地下へと降りていった。

紋太は一人、未だマリーネに立ち向かっていた。

レディーダンス
「貴婦人舞踊」

アサシンフレード
暗殺剣で紋太を突き、それを避けた紋太の後ろに龍魂剣を構えた。

「炎神飛来火」

それをかわす技能を紋太はもっておらず、それを喰らってしまった。

そして、地面に倒れた紋太にマリーネは囁いた。

「私、体力を消耗なんてしていませんけど！？少年よ、君は何がしたかったのか、教えて欲しいものだなあ」

そして台座に歩み寄り、一枚目の石版を手にしたとき、石版を持っていてマリーネの左腕が落ちた。

「その石版は俺のものだ。それをお前に使わせることはしない。かえせ」

入り口付近には眞幻想が立っていた。

「それは俺の物だ」

眞幻想は静かにそう伝えた。それを見たマリーネは眞幻想に語りかけた。

「これが本当に自分の理想を叶えてくれる物だとも思っているのか・・・？これは理想を叶えるための物ではない。よみがえらせる物だ」

眞幻想は新しく知る真実に驚愕した。

「これは、瞑浄王の石版。何知らない者が使うような物ではないの

だよ
「

第五十六話 団結（後書き）

三枚の石版の所有者マリ―ネによって語られる石版の真実。
瞑浄王とは！？

次回、第五十七話 石版【仮】

第五十七話 事実

「お前は何も知らなかったのか……。これは、瞑浄王イバラグを甦らせるための三枚の石版。一つ目の石版は、瞑浄王の体を封じ、二枚目の石版で体を。これこそが地獄の宝物。そして、全てを完結へと一方的に導く最後の鍵。これをあの台座にはめさえすれば、全てが終わるために全てが始まる……。二世界融合すらも始まる。国王、獄王すらもひれ伏す、イバラグが降臨する。そして、これこそが私が求めていた全ての始まりにして到達点。三枚目の石版でその二つを縛り付けている鎖、怨呪の鎖を解き放ち、イバラグと肉体を同化する地獄の奥義。貴様は、そこで終わりの始まりをよく見ておくがいいさ」

眞幻想は自分が知らされていた事実との異なる点について驚愕していた。アレは自分達の望みを叶えてくれる道具で、そのために自分は動いて、全てを創めようとしていたはずなのに。

しかし……。眞幻想には決して譲る事の出来ないことがあった。「それが、例え俺の願望、地球の創造みにつくを手伝ってくれないにしてもそれは俺が、集めてきた物だ。お前に献上するために集めた物じゃない。貴様に渡すぐらいなら、壊すか、最悪あいつらに渡すさ。だから、俺はそれを全力で取り返す。覚悟しろ、地獄の反逆児!!!」

眞幻想は双剣を異空間に転送して長剣を二本呼び出して構えた。

「究極剣士の称号を甘く見るなよ……」

眞幻想は、マリーネに一人立ち向かっていった。

金属音がかすかに届いていた。そして目をゆっくりと開けた紋太の目に映っていたのは眞幻想とマリーネが戦っている姿だった。

紋太から見てみたらどちらも敵方で、どちらを狙ったらいいのか、トラベラーを構えつつ悩んだ。

そして結果、マリーネを撃った。

先ほどから、真幻想の叫び声とそれに続く金属がぶつかる音と銃声が切り裂きジャックには聞こえていた。

「紋太だ!!! 紋太がいる!!!」

過保護な亮祐が竜太の背をどついて耳元で叫んだ。

暗い螺旋階段を下りていた竜太はいきなりの衝撃に耐え切れず一人螺旋階段をひたすら転げ落ちていった。

「。。。バカ。お前押すなよ。。。」

転げ落ちる竜太の姿と泣き声を耳にして八迫は思わず手で顔を覆いながら苦笑いしてしまった。

「そ。。。そんなことより、早く追いかけてきなさいけないでしょうが!!!」

理緒が若干あわてたよう一人で全速力で走りながら竜太を追いかけていった。

「ほら、行くぜ!? 亮祐」

そついうやいなや八迫は亮祐の手を持ち、螺旋階段の柵を乗り越えた。

「ばっ!!!。。。ばかああああ!!!」

紋太のことで忘れていたが、今自分がある場所が途轍もない高所だということに気がついた亮祐は涙を拭う事すら忘れて絶叫した。

「騒がしい奴らが来るようだな。。。数は一人でも死んでいる方が、物事は俊敏に行なえる。真幻想。貴殿はよく勤めを果たしてくれた。消えて存在を虚無へ導いてやる!!! 竹刀奥義炎炎上柱あ!!!」
マリーネが持っていた龍魂剣から、激しい火柱がほとばしり、真幻

想を囲い、その輪を徐々に縮めていく。

紋太が一応眞幻想に手助けしようとしてトラベラーを撃つが貴婦人に弾かれる。

「龍魂奥義火炎竜!!!」

そして、竜魂剣から豪火竜が飛び出て、眞幻想に向かう。

眞幻想は火柱で身動きが取れない状況にいた。

「うっえいうおっぷはっ!!!」

螺旋階段からちょうど竜太がその場所に転がり落ちてきた。

それに若干驚いたマリィネは竜魂剣を振り降ろすことをためらった。数秒の空白を置いてから竜太はようやく自分がどういった状況下にあるかを悟り、切り裂きジャック残りの三人はその場に到着し、台座付近に全てがそろった。

竜太はマリィネが持っている剣に目を奪われていた。

「竜魂……」

竜魂剣がマリィネの手にきっちりとはまっていた。

「ふふふ。これはもともと私の持ち物だ。お前に一時的に付与していたに過ぎないんだよ。死者の面にしてもそうだ。お前の持ち物にお前の物なんて一つもないだろう？何があるんだ。お前には何が残っている？」

竜太は下を向きながら立ち上がった。

「まだ、仲間が残ってる。友達が残ってる!!!」

創造の剣でマリィネに切りかかった。

それに引き続き、八迫が、理緒が、紋太も亮祐もマリィネに立ち向かった。

「その石版は、お前には決して渡さない!!!」

眞幻想も千本近くの剣を呼び出し、立ち向かった。

第五十七話 事実（後書き）

次回、全ての駒がそろった台座版で全てを抱えた最後が始まる。
龍魂剣を構え襲いくるマリーネに、竜太は一人、立ち向かうことが
出来ない。

しかし、マリーネを倒し、石版を奪わないと瞑浄王イバラーグが復
活してしまう。果たして、竜太はどうするのか。

第五十八話 龍魂【仮】

第五十八話 派生

竜太は、啞然としていた。一人、弾かれた剣を握り締めて。

「おい、竜太！！！お前もとつとと戦えよ！！！！」

八迫がマリーネの剣閃を弾きかわしつつ反撃の瞬間をうかがいながら叫んだ。

「旋回量！！！！」

理緒が汀を振り回しマリーネの貴婦人と立ち向かう。

「アドベンチャー全段射撃！！！！」

「トラベラー援護射撃！！！！」

亮祐が援護射撃を紋太が攻撃、防御などをあげる射撃を打ち続けていた。

「サークルソード輪円回転剣！！！！！！」

眞幻想が数十本の剣を円状に回転させてマリーネに差し向ける。

「これでは私から石版を奪うことなんて到底無理ですね」

全てを交わし弾き優雅に舞うマリーネは一瞬の隙も無かった。

竜太はそれを傍観しているしかなかった。今の自分には龍魂剣も何もない、ただの無力な学生だと実感していた。

「豪火竜！！！！豪火竜！！！！」

いつの間にか叫びながら、竜太は創造の剣をマリーネに思いつきり振り降ろしていた。

鈍い音とマリーネの口から発せられたうめき声で膝をついた。

膝を突く拍子に石版が一枚、運悪く台座にはまってしまった。禍々しい光をあたり一面に撒き散らしながら、一枚目の石版は台座ごと姿を消す。残る台座がまだかまだかと、自らにはめられる物が来るのを待つかのように振動し始めた。

「何、これ、生きて・・・」

理緒が思わず息を呑んで台座に目を奪われる。

「こんな物がまだ存在していたのか・・・!?」

八迫が一人、齒軋りして台座をにらんだ。

紋太はただ台座から目を背けることが出来ず凝視していた。

亮祐は、台座にはまっつてしまった石版の行方を考えていたが、決して答えには辿り着けなかった。

竜太と眞幻想の二人は台座に眼を奪われていなかった。

マリーネが意識を失っている一瞬を狙って竜太は竜魂剣を奪い取り、眞幻想は石版を二枚、奪い取っていた。

剣は返してもらおうぞ!!!」

「俺の

石版は返してもらおう!!!」

竜太はマリーネの竜魂剣を創造の力で、眞幻想は、石版の二枚を輪サ円回転剣で粉碎した。

ようやく気がついたマリーネは自分の体が軽くなったことに気がついた。そして竜太と眞幻想の方を向いて笑い出した。

「お前達に剣と石版が奪われたとしても結果は何も換わりはしない。これからが始まるんだよお!!!」

そう叫ぶと両手を交差させて再び叫んだ。

「ダイクウエーバー 暗黒闇波!!!」

とたん、あたりは闇に包まれ何も見えなくなる。

そんな中、マリーネの声だけが響き渡る。

《お前達、誰からつらく苦しい“死”を体験したい??》

誰も何も答えられず、しばしの闇が生まれる。そして、その闇を振り払ったのが・・・

《主よ!!! 負けないでください!!! 私は、いつでもあなたとともになりたいと思っていますから、どうか、どうかマリーネを!!!》

暗闇の中、竜太の中に、はつきりと豪火竜の音が響き渡っていた。

いつの間にか声に出して返事をしていた。

「理解^{わか}った。豪火竜。お前の伝えたいことが」

大きく深呼吸をした。暗闇を吸って、吐き出す。心なしか、冷たい、悲しい味の暗闇を吸って吐く。

仲間達のうめき声が鳴り響く中、竜太は精神統一を始めた。

そしてある程度の時間がたった頃、竜太は今まで閉じていた目を開き、竜魂剣の柄で空間を斬った。

とたん、暗闇は消えて、今までいた場所が見える。

「竜太・・・」

理緒は竜太の方を指差してつぶやいた。

「それ・・・何？」

そういわれて竜太は始めて自分の手の中にあるものを見た。

「炎斬刀^{えんざんとう}覇凱一閃^{はいがいいつせん}・・・！」

竜太はつぶやいた。

「豪火竜が貸してくれた竜魂剣の派生武器、炎斬刀覇凱一閃だ・・・」

炎斬刀覇凱一閃は所々に竜の文様があしらわれ、赤い宝玉がはめ込まれた剣だった。

「行くぞ、マリーネ。豪火竜は返してもらおうからな」

竜太は覇凱一閃を構え、マリーネの前に立ちはだかった。

続いて、理緒がその右。紋太が左に。さらに八迫がその更に右、亮祐が更に左に一列に並んだ。

最後に眞幻想が一人文あいている理緒の隣に並んだ。

「瞑浄王は復活させないし、豪火竜もお前には渡さない。お前から全部奪ってやる。覚悟しろ」

竜太はやっこの思いでこれまで言われてきたことを全て言い返した。

第五十八話 派生（後書き）

―次回予告―

ついに豪火竜奪還かと思いきやいきなりの登場の炎斬刀霸凱一閃。豪火竜の思いで作られているとかいろいろあるが、結果的に霸凱一閃は強いのか！？霸凱一閃のこれからの活躍、そしてマリーネとの最終決戦ファイナルマッチがようやく始まる！！！！
次回、切り裂きジャックは殺しません！！！！

第五十九話 炎上【仮】

第五十九話 道具

竜太は一人、駆け出した。マリーネに向かって覇凱一閃を振り下ろした。

「覇凱一閃炎火空閃」

剣先から出た炎が直線にマリーネに向かって向かっていく。マリーネはそれをよけようとせず、貴婦人で弾こうと振り下ろす。

弾かれた炎火空閃が天井に当たると同時に紋太と亮祐がそれぞれ撃ち続け、理緒と真幻想が切り込む。

そして竜太が頭上を通過途中に切りかかる。

さすがにそれをマリーネがよけることができなく、あたり、マリーネの体から真っ赤な血が吹き出た。

「邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔だああああ！！地獄道具其の八激痛の衣、其の九十二死者の面リアライズ！！地獄王具其の三！^{エア}気体乃剣」

台座付近までの数メートルを自らの血で赤く染めたマリーネは自分の道具を具現化させ、黒い服の上に触れるたびに激痛が与える服に竜太から奪い取った死者の面に体を包み、気体の肉眼では見る事の出来ない混乱薬を合成させた気体の剣を構えた。

「早々に台座の前で散れ！！ごみくずがっ」

マリーネが手を振るたびに自分達が切り刻まれていくと言う不可解な状況を理解することは、混乱薬の効果で出来なかった。

切り刻まれ、切り刻まれ、全員が床に倒れるのにそう、時間はかからなかった。

「ここで私の最後の切り札を特別に見せてあげますよ。そして、それを着に逝け。地獄二部品第一死者の面、第二聖者の面、^{クリエイト}創造！！
！錬金完成、不滅の面」

マリーネは床に倒れ動かなくなった竜太の体を踏みながら叫んだ。

「強制完結時空転移！！旧友戦火練成」

フレンド・ウォー

叫んだ瞬間に、マリーネの右手に激しい炎の塊が現れ、左手には巨大な氷の塊が形成されていく。

「一瞬にして滅びろ、旧友戦火発動！！！」

フレンド・ウォー

紋太は目を硬くつぶった。理緒は唇から血が出ているのも気にせず、かみ続けた。八迫は間でマリーネをにらみつけ、真幻想は一人立ち上がり、マリーネへともう一度立ち向かっていた。

そして竜太は、霸凱一閃をマリーネの腹部に正面から突きたてた。マリーネの左右の手に発生した炎と氷は大気中に吸い込まれるかのようにして消え去り、マリーネの口の端からは、赤い液体が滴り落ちた。

「まだまだ、終わらせない。まだ、終わってはいけない。貴様らは知らないようだが、石版など、もう、必要が無いのだ。レプリカを、いくら貴様らが集めようと……。今、ここで感じさせてやるっ……」

竜太にはその時確かな悪寒を感じた。やがて来るであろうそのことに。そして竜太は、先ほどからカタカタとなっている小さな音が自分の歯が鳴っている音だと認識した。

其の竜太の顔を見てマリーネは大きく息を吸い込んでその場所の空気が体で感じられるほど振るえるほどの大声で叫び、呼び出した。

「来い！！！！！！瞑浄王イバラーグ……」

マリーネの声ではない別の咆哮で、空気が揺れ動いたのを五感で感じ取った。

次の瞬間、

第五十九話 道具（後書き）

次回、名前だけ登場であとは何もない予定でございました瞑浄王さんが次回、満を持って登場のようですね。

ホントにどうなってるんだ……。自分でも始末がつかないぐらいに話が肥大化しちゃって広げた風呂敷が自分でたためなくなっておるような気がします。どうしたらよろしいでしょうね そんなこんなでこれからもどうぞよろしくお願いしますう

第六十話 降臨(前書き)

あれれ、話がどんどん違う方向に向かっていきましたよ

第六十話 降臨

次の瞬間、

台座が次々と塵芥となり、砕けていった。そして、地面が消滅して、白い三日月のような物が出現した。

それは瞑浄王の目玉と気がつくのに数秒の時間を要した。その目玉は上を見ていたと思うと突然竜太の方を向いた。次々と地面が消滅し、現れていく瞑浄王の姿に、その場にいたマリーネ全員が息を呑み、その先を目で追った。

目から始まった出現は口、顔、腕、足、体と止まることなく姿を現した。

そして、瞑浄王の姿が地面から消え去った次の瞬間に、竜太と同じほどの身長怪物が竜太の頭をわしづかみにして、投げ飛ばした。

覇凱一閃ごと吹き飛ばされた竜太を目にもせず、瞑浄王はマリーネの腹部に手を入れた。痛み歯を食いしばり耐えるマリーネを瞑浄王は玩具としてしか見ていなかった。

低くうなる声はその場所を支配する中でマリーネは残った余力で瞑浄王の頭をつかむと砕いた。

赤い肉片がそこらに散らばり、マリーネの腹部の穴を広げていた手の動きは次第に弱まり、止まった。

一瞬間の間は。

眞幻想が息を吸ったそのとき、瞑浄王の頭が再び生えた。

「ふ．．．ふふふふふふふふふ．．．やはり、脅威の再生力はいま．．．だに衰えてはいない．．．いのだな。それでこそわが本当の器。これより、私がお前の中に戻るときが来たのだ。さあ、私と一つになるう、瞑浄王。快樂を貪り貪欲なまでな死と恐怖を求めることに特化したわが肉体」

マリーネはそう言いながら、瞑浄王の口の中に潜り込んだ。

マリーネが瞑浄王の中に消えていく中、瞑浄王の体がビクンツビク

ンツと跳ねる。

やがて、マリーネの体は消えてなくなり瞑浄王が、マリーネの物となつた瞑浄王が理緒の頭を持ち上げた。

「これこそが終わりの始まり……。さあ、悦べ。始まりは終わった。これより、私による私のための世界の創作、^{クリエイト}終わりの始まりが始まるのだよっ!!!」

そう言いながら、瞑浄王マリーネは理緒を柱に向けて放り投げた。次々と横たわる亮祐を、紋太を、八迫を、眞幻想を投げ飛ばし、吠えた。

「形在る物は原形を留めるなあ!!!地獄の叛逆王、マリーネの命令だ!!!今こそここに、扉を開こう!!!この世界と地獄をつなぐ唯一の扉、地獄門を……。第壹問、獣大門開門!!!!」
マリーネが手を地面につくと、その地面はマリーネの手を軸にして円を描き始め、黒に染まる。

そしてそこに白い線で扉が創造されていく。
ゆっくり、ゆっくりとその絵は実体化して、扉を解き放っていく。
突然、絵の扉に毛深い手が現れ、その手は強引に扉を引き裂こうと暴れだす。

「あけるおい、マリーネエ、てめそこにいるんだろお?とつと開けるよお、そしたらさあ俺がすうくぐに作り変えてやるからさ、こつちと同じよおーな世界を……。さあ」

マリーネは無表情でそれを眺めている。
「待っている。獣王。やがて門は開き二界統合のための五王はそろっ」

門に挟まれていた手は少しの間暴れるのをやめたが、それも数秒のことです。

「やあだあ!俺はすうくぐに暴れてえの!!!俺一人の力で成し遂げてえの!!!ほら、俺も男だしさあ、男として生まれたからには大きな夢の一つも持ちてえって言うかさあ……。わかんたるお!?マリーネエ」

マリーネはなおも表情を変えずに次々に扉を削っていく。

すでに意識を失っている竜太たちがそれに気づくよしも無く、次々と削られていく五つの門はほぼ同時に開けられた。

「やあ、ようこそ来てくれた。獣王、竜王、魚王、鳥王、魔王。これからこの世界を滅ぼすつもりなのだが」

マリーネが説明していると竜王が口を挟んだ。

「あ・あのっ！ご説明中失礼ではあるかと思っただのですが、その・
・あのえつと・・・気に・・・なったもので・・・。よろ・・・よろしいですか？」

おどおどしている竜王にマリーネは質問を許した。

「そこで倒れてる散っちゃい子供さんたちは何なのでしょう？あの・・・そのですわね・・・」

魚王が竜王を背びれではたいた。

「五月蠅いですわ。あなた、仮にも竜王なら龍らしくはつきりと堂々としていたらどうなんです。そんなおどおどして・・・女々しくっていらいますの」

それを聞いていた獣王が竜王に加担して魚王にどなった。

「おめえ。竜王のこととやかく言うんじゃねえよ。俺の竜王にこれ以上なんか言ったらお前の世界から滅ぼすかなあー!!」

聞き捨てならぬ魚王は獣王の方に水を吐く。

「あなた、どうしてそんなものの言い方しか出来ないんですの!？もつときちゃんとした言葉でないとおたくし、分かりませんわ」

それを聞いた竜王は反論しようとするが、鳥王に羽で咎められる。

「静かにせぬか。反逆王の御前であられる」

それに賛成していた魔王もうなずきながら喋った。

「皆やめヨ そんな意味の無い反論したって無駄だヨ ここは皆の意見を取って僕が全部の世界を統一しちゃうヨ」

マリーネが咳払いして、五王の会話を遮る。

「そろそろ先に進めたいのだが。よいな。ともかくだ、私と着いて来て、私の命令どおりに破壊行為を繰り返してほしいのだ」

そういつてマリーネは指をさした。

「最初の目的地はアレだ」

指差した先には切り裂きジャックの聖地があった。

「あの町を、壊そうと思うんだ」

第六十話 降臨（後書き）

五王なんて出てくるなんてぜんぜんシナリオに無かったのに・・・。瞑浄王が出てくるぐらいでさくつと倒して終了予定だったので、何で！？しかも当初の敵キャラクターがほぼ全滅して、敵キャラクターが敵でなくなってるというのはどういった変化でありますか・・・。

さらにさらに、何であんなに五王は口調が変なのかなあ・・・。謎ですね。

切り裂きジャックの聖地っていうのも全くのひらめきですが・・・。なんだこれえ・・・。本当に自分じゃ後始末がつけられない状況に陥ってないですか・・・。

普通新しい武器が出てきたらそれでさくつと終わるのが一般的ですよね・・・。

まあ、続いちゃうみたいなので、どうかお付き合いください。それに書いてるのも楽しいので、そんなに間はあかないと思いますよ。

来週ぐらいにはまた続きが書かれていますよ。

ちなみに五王の最後の一人、魔王はもう、ネタ切れで出た苦肉の策です。

次回

なぜか出てきてしまった五つの地獄世界の王。彼らとマリーネは切り裂きジャック総本山を狙っていた。そこに何があるのか！！！！

第六十話 聖地〔仮〕

第六十一話 聖地（前書き）

ど・・・どうも・・・です。あの、今回は俺・・・が前書きのスペースを埋めろって言われたのでう・・・埋めさせてもらいます・・・。
えと・・・、俺、の手元にある紙・・・を読んで進めたいです・・・。
えっと、作者の、・・・和呼之巳夜己さんは・・・近々切り裂きジャックたちの設定集を作りたい・・・と考えています。実現は・・・、未定・・・です。ご・・・御免なさい。

第六十一話 聖地

「あの町を、壊そうと思うんだ」

マリーネは時空を壊してすぐそこに島を出現させた。そしてマリーネが指差した先を竜王は見た。

「あ．．．あの町は、切り裂きジャックの総本山．．．の町。シャ．．．シャガンの力によって守られているのではないのですか!? あの．．．私達だけでよろしいのでしょうか．．．。あの、町を攻めるの．．．魚王が竜王の体をはたいて叫んだ。

「ああ、もう、うっさい!!! あんた仮にも龍族の王なら龍族の王らしく堂々としてほしいのですの!!! ほんと、あんたの声聞いとらいらいますわっ!!! いい? イライラすると女性は肌が荒れんですの! あんたみたいなうじうじした奴見るとあたくし、肌荒れちゃうんですの。気持ち悪いですわ、ホント。女々しいですの。それにねえ．．．。」

獣王があわてて魚王の口を塞いだ。魚王はいきなり、毛むくじやらの腕を突っ込まれて獣王を睨むが、獣王が別の所を見ているのを見て、そちらを見た。竜王が、目を潤ませて泣き出しそうになっている。さしずめ、それは動物の赤ちゃんのかわいさと同じ．．．といつても過言ではなかった。

「竜．．．竜王お、お．．．俺はお前のことそんな風に思ってたねえからなあ、くだいじよぶだかなあ。なあ? さあ、竜王。行こうぜ、アイツほつといてさあ」

獣王が竜王の頭をなでなでしながら竜王に慰めの言葉をかけ続ける。竜王は目を潤ませた顔でうんうんとうなずいて涙をこらえている。

「ごめつ．．．．なさ．．．。俺．．．しっかりしますっ、がんばります．．．。」

そんな潤んだ目でふと魚王の方を．．．獣王の手を突っ込まれている魚王の顔を見ると、魚王は頬を赤らめ目をそらした。

「な・・・何よ、かわいいじゃないのよ。あたくし・・・あんなのもいけちゃうんですの??」

少少だけ竜王にほれ始めていた魚王だった。

「っふえいうは、ほっほほへえういああいっえおお!!!!!」

魚王は出る限り最大の声で叫びながら獣王を平手打ちした。

「んん!? ああ、腕え抜けてのねえ!? あいあい」

三人でそんなやり取りが行われているころ、マリーネを筆頭とした鳥王、魔王は切り裂きジャック総本山入り口砦に立ち、門番に問題を投げつけていた。

「私は地獄の反逆王瞑浄マリーネだ。これほどの者で勝てるなどとおめおめ思わぬことだ。これより恐怖し、騒ぎ、狂い叫べ。ここより地獄の解獄だ。シャガンが遺した扉をシャガンに開けてもらおうと思っているのだが、門番よ、扉はどこかな?」

門番は答えなかった。

そして、その場に残されたのは一つ、もともとは生きていた動物の骸だけだった。

少しのときをまたいで、その場に三人の王が姿を現した。

「あつららあゝ マリーネったらひどいなあ。そう思うだろお、竜王?」

獣王が肩を組んでいる竜王に尋ねていた。

「あ、はい・・・すごい!!・・・とおもいます・・・」

「あははあーすごい、じゃなくてひどいだろお竜王」

竜王はなにも変わっていないかった。だから、竜王はしゃべるたびに魚王のほづをちらちらと見ては機嫌を伺っていた。

「な・・・なによっ!! だからあたくしもう何も言わないって言うてるわ!? だからあんだ好きなようにしゃべりなさいですのぉー!

「!!」
魚王は空に向かって叫んで水柱を立てた。その水柱で分からなかったが、魚王の頬はとて赤らんでいた。

マリーネたちは総本山偏狭の田舎町へと足を踏み入れていた。

「待て、反逆児!!!ここから先は通さん!!!地獄に帰れ!!!」
総本山在住の切り裂きジャックたちがマリーネに襲い掛かる。

「黙れよ下っ端。俺はもはや反逆児ではない。反逆王だ。完全なる肉体を手に入れた、反逆王だ。」

一人ひとりの攻撃をかわしつつ、マリーネは懇願する。

「魔王、鳥王、お前達も手伝ってくれ。これだけの量を相手にすると・・・面倒だ」

「わかったよー 俺の力を目に焼き付けるといいよー 二分割 あつははははあー」

自らの手で、切り裂いていく魔王。

「反逆王がそう申すならば、活躍させていたどころ。鷹爪!!!」
マリーネたちは確実に本殿へと進んでいた。

第六十一話 聖地（後書き）

ようやく、起き上がる切り裂きジャックと真幻想。六人は切り裂きジャックの総本山を目指し、駆けていく。果たしてその総本部では一体何が起きているのか。

次回、六十二話 創設

第六十二話 再起

傷ついた体の痛みをこらえ、目を開いた竜太が見たのは砂煙が次々と上がる島だった。

そこからかすかに悲鳴が聞こえてくる気がする。

「あれは・・・？」

竜太はあれをどこかで見たような気がする。

それははじめて見た時は、絶対に見たくないと誰かに言ったはずなのに、話を聞かない誰かのせいでそこに連れて行かれたはずだった。

「あれは、切り裂きジャック総本山・・・！！！」

隣で亮祐の悲鳴に近い声が聞こえる。続いて、八迫の声も聞こえた。

「あいつらは、あそこに何があるのか知ってやがるのか。あそこは獄門が封印されている場所だぞ！？」

亮祐がその言葉に続ける。

「あいつらは総本山を壊して開門するきなんだ。マリーネが言った二世界の統合ってのは、本当の意味での統合なんだよ・・・」

理緒が地面をへこませる。

「私達は何であんなふざけたやつらなんか何度も！！！何度も地面に抱きつかなきゃなんないのよ！！！！ふざけてる！！！！ふざけてるふざけてる！！！！！」

竜太は一人、沈下し始めている地面の淵でうなだれて島を見ている。

「ふざけるなよ、切り裂きジャック。貴様らは俺がしようとしていることをとめるためにわざわざ出向いてきたんだろっ！？」

眞幻想が立ち上がり、叫んだ。

「違うよ。本当は僕達を勝手にさらいにきたんじゃないかあ」と、

紋太霸思ったが何も言わずに心に秘めておいた。

「おまえらは諦めるのか？桐原須藤や、ガルガンティアにもそうやってへこんだ気持ちで戦ってたのか？あほらしいな。俺は行くぞ。

アイツを斬りきざねえときがすまねえんでなあ。剣橋！！！！」

眞幻想は剣で橋を作ると一人島へ向かおうとする。

「眞幻想!!!」

竜太は淵から立ち上がって呼びかけた。

「俺も・・・俺も行く。眞幻想。俺は、あのマリーネから大切な友達を返してもらわないといけないんだ。だから、俺は行く。俺は、行くんだ。」

竜太は自分に言い聞かせた。

「ならばそこでじっとしてないで自分で動いたらどうだ!？」

眞幻想は竜太の目を見て語りかける。竜太はその目を見て頷いて、一步を踏み出す。

「敵は、総本山にあり!!!」

竜太と眞幻想が言った後、八迫と紋太が同時に立ち上がる。

「俺は、へなちょこ竜太の無様な姿、見たいからさ。ちょっとばかり、行ってこようと思う」

「僕は、今行かないといけないような気がするから、行ってくるね」その二人の声を聞いて亮祐も立ち上がる。

「やっぱ、俺だけ行かないとアイツにバカにされっかもしんないしな。それだけはなあ・・・。竜太に馬鹿にされるってほど嫌なことはないからな」

三人は残されている剣の橋を見つめる。

まだ、先に行く二人の駆けていく姿が少しずつ小さくなっていく。

「今なら、まだ・・・間に合うんだ。俺達が追いかければ間に合うんだ」

亮祐が呟き、駆けていく。

それに続いて紋太と、八迫が駆けていく。

そして、一人残されたのは理緒だった。

ただひたすらに地面を濡らしている。

「バカじゃないの・・・？何度挑んだって勝てないじゃない。毎回最後は私達が逃げて・・・。一回でもあいつに勝ったこと、無いじゃない。それで？また私達は痛い思いをするためにあんなところに行くっていうの！？そんなの、あんたたちなんか・・・。あんた達なんかで勝てるわけじゃない。バカ。馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿！！！！そんなの黙って一人で見ていられるわけがないじゃないのよ！！！！」

そう叫ぶと、すでに前には見えない四人の姿を、すでに崩れかかっている橋を出来る限りの全速力で走っていく。その走った先から壊れていく橋を一生懸命は知り終えるとそこには、少し前まで町として機能していた廃墟が存在していた。

「あつあの！！！！どこに行くか・・・わかってるの！？」

竜王はいまだ肩を組んで歩いている獣王に尋ねる。その竜王の問いに鼻歌を歌っていた獣王は答える。

「あそこで派手な爆発があがってるだろお！？まあ、お前は小さいから見えないかも知れないけどなあ？とにかくそこで爆発が起こってるわけ。そこに行こうとしてんだけど、マリーネエん奴ら破壊工作が早くてえ・・・。とても追いつけていない状況なわけだよお」

魚王はその二人の後ろを黙って歩いている。

「はあ・・・。かわいい。かわいいですのお・・・。竜王・・・。

あたくし、本当に竜王に惚れてしまったのかもしれないですわあ・・・

□

「そういえば、何ゆえ反逆王はこのような場所に？」

鳥王は先頭に行くマリーネに尋ねる。

「そうだよ。何でこんなエキサイティンググウ〜なとこにくんのさ。まあ、俺エキサイティングで好きだけどね。こーゆーとこお。魔王もそれに便乗して、踊る。」

そして……。マリーネは口を開く。

「ここは、切り裂きジャック創設者のシャガンが地獄とこの世界を繋ぐ門をこのちで、あの本殿の地下奥深くに嚴重に封印したからだ。我らは、その封印をときに、あれを壊す」

第六十二話 再起（後書き）

次回、第六十三話 本殿〔仮〕

第六十三話 忠誠

「切り裂きジャック創設者のシャガンが封じ込めた地獄の門、獄門が存在するんだよ。その封印を解いて門を開放したら、二つの世界が？がるんだよ。そしたら二界統合も実現なんか簡単だよ！？それに、私を止められるものなど、何処にも居ないわけだからなあ・・・。なぜなら、私は反逆王！！地獄の世界の反逆王だからだ！！」

そう叫びつつ、マリーネは偏狭の地に住む村人を蹴散らしていく。

「アツハハ〜楽しいねえ 魔槍百突きイイ」

魔王も足でリズムを刻みながら道を進む。そして鳥王もまた、歩き進んでいく。

「反逆王様が行くところ、私もついていかせていただきますが・・・。こんなところに獄門が存在するのですか??？」

反逆王は鳥王のほうに顔を向け怒鳴り始める。

「私は地獄の王だぞ！？私が行くところについて来ると言うのならば、黙ってついて来ればよいだろう??それとも、お前の言うことは口だけなのか！！ならば、どこかに行ってしまう方がいいわ反逆王を信じられぬ者は、反逆王の歴史的姿を見ることなく地獄で吉報を待っているがいいわ！！！」

鳥王は膝を突き、マリーネに頭を下げる。

「失礼いたしました。この鳥王、何処までも反逆王についていかせていただきます」

マリーネはその鳥王の姿を見て笑う。

「その忠誠に偽りや嘘はないといえるのだな!？」

鳥王は頭を上げ、マリーネを見る。

「はい」

マリーネは自分達の進んできた道に生えている木を指差した。と、同時に魔王も鳥王もそちらに目を向ける。そしてマリーネは口を開

いた。

「ならば、その忠誠をここであらわせ。そこに隠れている毛虱けじらみを倒し、私達の後を追いかけて来い。行くぞ、魔王」

そういうと、マリーネは先に進んでいった。魔王もそれに続いて去っていく。

「じゃ、鳥王様頼んだよ　おさき」

残された鳥王はマリーネが指差した方向をじつと見ている。

そして、マリーネに見つかったその人もじつと鳥王のほうを見ている。

「出てきてはどうだ???そこのお嬢さん。私が反逆王様からじきじきに承ったこの指令。必ずお嬢さん、あなたを倒して忠誠を見せやる」

林の後ろから、お嬢さん、と呼ばれているその人が出てきた。

「ちょっと……。いきなりあんたみたいな鳥男に出会うなんて、私も結構あたりくじ引いちゃってるのかしら?まあ、あんたみたいな鳥男なんて、これから本部治したあとのパーティーでフライドチキンにはや代わりさせてやるわ」

理緒は拳を握り締めるとつぶやいた。

「あいつらは私達より早く出て行って、何処で道草食ってるのよ……。ばっかみたい。やっぱ馬鹿じゃないのよ」

鳥王は鶏冠を二本抜いた。

「私は必ず忠誠を見せるのだ。この忒本の鶏冠で早々にくたばれ、手負いのお嬢さん」

第六十三話 忠誠（後書き）

次回予告

一人あとを追った理緒の前に現れたのは、竜太達仲間ではなく敵対する反逆王の仲間、鳥王だった。

果たして理緒は一人で鳥王に勝ち、本殿へと行くことができるのか！？

次回、第六十四話 鳥男（仮）

第六十四話 鳥男（前書き）

これまでのお話

海に沈んでいた石版を拾い集めた眞幻想率いる新しい血族。その石版が引き起こす切り裂きジャックたち最大の決戦。果たして切り裂きジャックたちは切り裂きジャック総本山で決着をつけることが出来るのだろうか。

第六十四話 鳥男

「ふざけんじやないわよ!? あいつら、私が黙っているとも思ってたわけ??? そんなわけ無いじゃないのよ。あいつら、こんなか弱い美女放つて置いてそれでもなお黙っているようなら、あとでとちめてやるわよお!!!!」

鶏冠の剣先を避けて理緒はひたすら特攻していた。

「お嬢さんが手負いでなければ、私などは、早々に敗北していたのであろうな……。しかし、これもまた叛逆王様の試練。そしてお嬢さんの不運でもあるのであります」

鳥王は理緒に語りながら殲滅のための戦いを続けていた。

「叛逆王様がお創りなる世界こそが、私達の幸福。これで地獄の規模も拡大し、地獄の荒廃も止めることが出来るはずだ。お嬢さん?喜んでください。貴方方の尊い命が私達の地獄を救うのです!!!」
発狂したかのようになりながら叫ぶ鳥王の右頬を理緒は全力で殴りつけた。

「ふざけんじやない!!! 私達の世界は私達のもんで、あんた達の世界なんかじゃない」

空に向かって拳を上げ、そこから落ちてくる鳥王をひたすら殴り続ける。ひたすら殴り続ける。自分の手が痛くなるうとも、その手を緩めることは無かった。むしろ、その痛みを打ち消すかのようにその拳の速度は増していく。

「私達の命が尊いと思ってるならそんなイカレ狂った桃源郷創造を叫ぶんじやないわよ!!! 私達の世界は、鳥男!!! あんた達みたいな偉業の化け物のためにある場所なんかじゃないのよ!!!」
そして、とどめといわんばかりに頭を持ち、大木に叩きつけた。

「私達が住む世界は、私達のもんなのよ。その鶏のような脳みそで理解しなさいっ!!!!」

そついい残して、理緒はマリーネたちが進んでいったであろう中央

に聳え立つ建物へと足を進めていった。しかし、その足を鳥王はつかみあげた。

「お・お嬢さん……。私、鳥族の王様ですからね！？こんなに早く死ぬと思ってもらっては困ります。私は必ず叛逆王様への忠誠の証としてお嬢さんの骸を持って行きたい……。鷹爪！！！」

鳥王は自らの爪を伸ばすと理緒の足に爪をつきたてた。

「……。っ！！！」

地面に理緒の血が流れる。

「さあ、ここからは私の恩返しです。決して逃げないでくださいね！？」

そして、鳥王の恩返しが始まる。

「さあ、答えを聞こうか！？一体、地獄の門はどこにあり、そしてそれを開放するための創設者、シャガンはどこにいるんだ？答えてもらおう。貴様は重役なはずだ！！お前は知っているはず！！」
マリーネは自ら捕まえた男を痛めつけてから首を持ち上げ、そういつた。そしてその男は、答えた。

「お前なんかに答える言葉なんかございませんよお！？」
そういつて唾をマリーネの顔に飛ばした。そのつばがマリーネの顔に飛んだ瞬間、その男は思わずつぶやいた。え！？と。そしてそれがその男の最後の言葉となり、体が地面に沈んでいった。

「なぜだ！！なぜ誰も知らぬ！？貴様ら人間は自分達の創成者のことなど知らんというわけか。愚かだ。探せ、魔王！！どんな奴でもいいから、門の開放方法を知っていそうな人間を片っ端からねじ伏せて聞け」

命令するマリーネの顔にはあせりの色が出ていた。必ず、この総本山に切り裂きジャックの創設者であるシャガンがいるはずなのだ。かつて自らが手を出し、その生命を終わらせたシャガンがこの島のどこかにいるはずであると、マリーネは確信していた。

しかし、そう確信できていたマリィネは次第に自分の信ずる物が崩れている気がしていた。

そんなマリィネの焦りの色をじっくり堪能してから魔王は敬礼のような構えでマリィネの前から消えた。

そして魔王が消えたあとマリィネは一人試行錯誤していた。

「そんなはずは無いのだ……。この島のどこかで奴は……。シャガンはこの事態を見ている……。」

それから息を大きく吸い込むと空を睨みつけ叫んだ。

「シャガン!!! 貴様一体どこにいるう!!!」

その叫び声は近辺の地面を、空気を震わせ、周辺の生き物の鼓動を静止させた。しかし、マリィネが進んできた道には命ある者などまったく存在していなかったが。

「あ……。あの!!! 加勢……。しなくてよろしいのですか?」

竜王は指を唇に当て、獣王のほうに首を傾げて尋ねた。そしてそんな格好で尋ねられた獣王の思考は完全にほかの方へと飛んでいた。

更にそれを見ていた魚王もすでに竜王に骨抜きにされていた。もっとも、竜王本人にはそんな気はまったく無いのだが……。

《か……。かわいい!!! 竜王、マジでかわいいぜえ〜さっすがあ俺の竜王だよなあ……。》

《か……。かんわいいですわあ!!! 本当にこの仔をぎゅーってして鱗なでなでして……。あたくしメロメロですの……。》

竜王が尋ねていたのは理緒を倒している鳥王のことであった。

じつと獣王の返答を格好を変えずに見てくる竜王に獣王はやっと意識を戻し、返答した。

「加勢つてのはなあ? 負けそうな方にはいるってえいうからあかせいなんだぜえ? 今アイツは有利だからだーじょーぶうほら、そんなことよりも、マリィネエンこと追いかけてようぜえ?」

そういつて獣王は竜王の頭をぽふぽふと軽く叩いた。それを見てい

た魚王は獣王をうらやましそうな眼で見ていたのだが誰一人としてその目に気がつくことなく、先へ急いだ。

「ここで待つてれば、必ず、あいつらはここに来るんだよな？」

竜太が仁王立ちで本殿前に仁王立ちで立ちふさがっていた。そして八迫は力なく笑って答えた。

「ほら、俺お前の事をここに連れて来たことあっただろ！？そんなことすっかり忘れててな。イヤー橋渡りきる前に思い出せてよかったよ。すぐここに飛んでこれたし」

亮祐は門の柱によりかかり目をつぶり、小さくつぶやいた。

「そんなものあるならとつと出せって話なんだよなあ・・・」

そしてそんな中で紋太一人が仲間想いな問いを投げつけた。

「理緒置いて来てよかつたの？」

眞幻想が自らの剣を体に収納して力を高めている状況でその問いに答えた。

「アイツは俺達に何も言わず一人で今も地面と睨めっこして

┌

その答えを聞いた竜太が答えを遮って別の回答を叩きつけた。

「あいつは来るよ。必ず。必ずここに来て、『私置いていくんじゃないわよ』って言いながら俺たちのこと殴るんだ。それがアイツだよ。だから大丈夫。ここにはちゃんと来る。心配ないさ」

その答えを聞いた眞幻想は鼻で笑った。

「今この島にはマリーネを含む六人の敵がいるんだ。俺達の頭数と同じだ。ここに来る前に魔王と一戦交えてるか、一対六の悪戦苦闘でもしている頃だと思いがな？」

八迫がそんな二人のやり取りを聞いていると、突然立ち上がった。それを知らせた。

「おいでなさりましたよ？」

その一言でその場にいた竜太、八迫、亮祐、紋太、眞幻想の五人は

こちらに向かってくる影に向かい戦闘体制へと入った。
そしてその影は、肉眼ではつきりと見えるほどになり、話しかけてきた。

「よお・・・」

その瞬間、その場所には緊迫した空気が流れていた。

第六十四話 鳥男（後書き）

いまだ戦い続ける理緒と鳥王。門の開門方法を探すマリィネと魔王。そしてそのマリィネたちが本殿にいたいと思いきそこを目指す竜王たち。更に本殿門前にて待ち構える竜太たち。

果たしてこの前代未聞の戦争は一体いつ終止符がつくのか。

次回、切り裂きジャックは殺しません！！！！

第六十五話 城前【仮】

第六十五話 鳥目（前書き）

五王の一角が崩れ去るとき、最後に向けてのレールが少しずつ敷かれていく。

それを歩いていけば、何が待っているのか……。

第六十五話 鳥目

「よお……」

その瞬間、その場所には緊迫した空気が流れていた。

「俺のなまえはあ、獣王つてんだあ。お前ら切り裂きジャックだろお？ やつちまおうぜ竜王！！！」

獣王と名乗った毛むくじやらの生き物の後ろから“竜王”と呼ばれた者が出てきた。

「はい……！！！！がんばり……ます」

竜王の容姿は整っているのだが、身長はそれほど大きくも無い、どちらかといえば小柄な少年のような竜だった。

「あたくし、魚王の出番ですの。あたくしたつつつっくさん赤い水であたくしの体を染めますわ」

そして最後に出てきた魚王は竜王とは違う、綺麗な鱗を身につけた美しい魚人間のようだった。

「火……火炎息吹！！！」

竜王がいきなり口から火の息を吐き出して竜太たちと自分の前にライオンを引いた。

「いいぞお、竜王！！！！これだあいつら困んどまええ。ネコ目ネコ科ヒョウ属！百獣王！！！！」

獣王が叫ぶと獣王は見る見るうちにライオンのような手と口になり、炎に囲まれた竜太たちの前に着地して爪を伸ばし、咆えた。

「シェイク・グラウンド地面振動を味わって平衡感覚狂っちゃいなあ！」

自らが発生させた振動の中、獣王は手短な亮祐に狙いを定めた。しかしそう簡単に噛まれましようか、となるような亮祐ではなかった。

「アドベンチャーラー六の節天空の氷海！！！」

氷のつぶてが銃の先から噴出し、獣王の目の周辺を凍らせる。

「侮るなよお、子供う。ライオンの鼻をなめてはいけないよお！？」
そういうと亮祐のいる場所を正確に噛み付いてくる。

「亮祐から離れる！！トラベラー第十の節落雷柱」

亮祐の前に雷の柱を打ち出し、獣王に噛み付かせないように防護柵を張ったつもりだった。

「これでは駄目なあ……。幻想動物麒麟！！！」

次の瞬間獣王の体は白い体毛に覆われ、雷を唸らせた一角獣へと姿を変えて柵の雷すらも取り込んで亮祐に突撃した。そして、その角は亮祐の腹部に深々と刺さり、亮祐の口からは血が吹き出す。その血は角を伝い流れて獣王の目の氷を溶かしていった。

「うまいなあ……。やっぱり血はうめえよなあ」

そして口元に流れてきた血を一滴も下にこぼすことなく飲み込んでいった。

「亮祐！！！！」

竜太が覇凱一閃で角を切り落とし、獣王の身を引かせる。

「鯨牙！！！！」

そう聞こえた次には

眞幻想の前に炎を掻い潜って突っ込んできた魚王の鯨の牙が目の前に迫っていた。

「百剣盾！！！！」

とっさに百の剣を呼び出し盾の形を形成する。

「甘いのです！！！！そんな甘ちゃんでは駄目ですの。塩水鉄砲！！！！」

喰らいついた眞幻想の剣に塩水をかけて錆びさせてから噛み砕いて眞幻想の前に降り立った。

「おち……。土砂の息吹！！！！」

上空から、空を飛んでいる竜王が土を吐き出す。

「即席防御幕、妄想！！！！八迫、突っ込め！！！！」

竜太はとっさに土砂除けを作り、そして階段を創造させて八迫に行かせた。

八迫は自分の力で防御幕を破り、竜王の前に躍り出る。

「何でもかんでも吐くんじゃないよおー。お掃除が大変でしょうが

あ！！！！！」

そういつと橋から奪った煉瓦で竜王の頭を下に向かって叩きつける。その衝撃に耐えられない竜王は羽ばたくことさえも忘れて地面に向かって加速していく。それに気がついたのは獣王だった。

「哺乳綱ネコ目ネコ科チータ属疾風獣！！！！」

自らの体を変化させると竜王のコートの襟を間で地面に優雅に着地する。

「ご……ごごご御免なさい！！！！迷惑かけて御免なさい！！！！」

先ほど八迫に殴られてか、迷惑をかけてかのどちらかの理由で竜王は目を潤ませて必死に頭を下げる。その頭を獣王はぽふぽふしてつぶやいた。

「大丈夫だあ。俺が必ず助けるからたくさん迷惑かけていいんだぞお？ほら、立ってこいつら倒しちまうぞお！！！！」

その瞬間を亮祐は見逃さなかった。駿足で紋太からトラベラーを拝借してビーストレイクを構えて竜王と獣王を狙う。

「ビーストレイク百花繚乱！！！！」

それを認識したとき、竜王は目をつぶった。しかし、獣王はそれに目を塞ぎ逃げることなど、竜王の前で出来るわけがなかった。カメ目ゾウガメに変化させると殻に閉じこもり、飛んでくる花びらの手裏剣を甲羅に刺して竜王を守る。

そこに竜太が覇凱一閃を振りかざす。

「霸王特技炎斬一閃」

獣王に対して縦に炎の波が襲う。しかし、それを魚王が必死に防いだ。

「鯨放水！！！！」

高温の炎と低音の水がぶつかり、あたりは水蒸気で何も見えなくなる。

やがて竜王の吐いた炎の壁も水蒸気で消え去り、辺りは霧に包まれている。

「鳥王めいおうの恩返し、百啄ひゃくしやくみ」

つつつつつつつつん、とあたりに鳥王が理緒を突く音が響く。歯を食いしばって耐える理緒の体力は限界が近づいていた。理緒は一大決心をして、鳥王の嘴を掴むことに挑戦する。しかし、とても早い鳥王の動きはそれを一切許すことなく突いている。

「この七面子ヨオオオオオオ!!!」

やっとの思いで掴んだ鳥王の嘴を握り潰して微笑みかけた。

「私は、必ずあの場形に一撃ずつ殴んなきゃいけないのよ。邪魔しないでくれるかしら。脳天ウルトラチョップウ!!!」

全身の体重をかけて脳天めがけて両手を重ねて下ろした。

あたりには鈍い音が響き渡る。しかし、鳥王はそれだけでは倒れずに理緒を睨み、翼で平手打ちを叩き込もうと身構えるが、すでに司会には理緒が存在していなかった。

「だからあなたは鳥男なのよ」

どこからか理緒の声が響いてくる。

「鳥目なあなたの顔を呪って地獄に帰りなさい!!!ラリアット!!!」

鳥王の死角に潜んでいた理緒がラリアットを留めに放つ。

砂煙を立てながら鳥王は地面に倒れる。そしてその体は突然空いた黒い模様に吸い込まれていく。

ずぶずぶと、どこまでも鳥王が沈んでいく気がしていた。

「とにかく、これで一匹還したわよ。後はあいつらの加勢にでも行ってやりたいけど、そんなに加勢にはならなそうな気がするわね・・

」

そう言いながら理緒はポケットから魚肉ソーセージを引っ張り出すと、袋のまま齧りだした。

第六十五話 鳥目（後書き）

ついに五王の一角、鳥王を地獄に返還することができた理緒。そして魚肉ソーセージを友に竜太たちの下へと急ぐが、竜太たちは……。一方のマリーネは……？

次回 第六十六話 分離【仮】

第六十七話 分離（前書き）

なんか乗りに任せてかいてたら結構な量になりましたが、困難じゃまだ少ないんでしょうね……。
もっと書いてたいのに時間で、たいせつですよ。

第六十七話 分離

むしゃしゃ．．．．。

むしゃむしゃ．．．。

がさがさがさ．．．びりっ！

むっしゃむしゃ．．．。

「魚肉ソーセージじゃ腹が膨れないわねえ．．．」

理緒は一人、魚肉ソーセージの袋を道に残し、本殿へと歩き進んでいた。

「あの馬鹿たち殴んなきゃ気が収まらんちゅーねん」

一人ぶつくさいいなから確実に竜太たちが戦っている橋に近づいていた。

「ry）チーター！！！！」

竜太が横に振った霸凱一閃の上に優雅に獣王は飛び乗り、竜太の顔を蹴って、飛び跳ねる。そしてその勢いで真幻想をかもうと牙をむき出して襲い掛かる。

しかしそれにいち早く気がつく真幻想は三本の剣を呼び出してそれに立ち向かう。

「三角剣閃！！！！」

三角の形をした剣が獣王に向けて飛び立つ。

「火．．．火炎息吹！！！！」と、空から戦いに参加している竜王叫んでが真幻想の剣を溶かし、獣王の道を作る。

亮祐と八迫は魚王と向き合っていた。

「坊や達、逆に若すぎて、あたくしのストライクゾーンには当てはまりませんの〜」《竜王はかわいいからあたくしの者にしたいですわあん》。鮫鱗吐」

鮫の鱗を吐き出して手裏剣のように反撃する。

亮祐と八迫はとつさに回避行動をとる。しかし、魚王はそれを許すような女ではなかった。

「逃がしませんわよ」

鱗が二人を追いかける。

「アドベンチャー即発打消し!!!」

亮祐が鮫肌吐を消し去る。

「ナイスツリよーすけえ」

八迫がその隙に魚王の腹部に拳を叩き込んだ。

「地獄に帰れよ。半魚人女王!!!」

そして魚王は地面に倒れるがまだ鰓がひくひくと痙攣を始める。

獣王がそれを助けに駆け出そうとするのを紋太が尻尾を引っ張って引き止める。

「チーターは動物園で見れば十分だよ!!!トラベラー消滅殺法」
空中に浮く獣王に影がかかる。

「まだ終わらせないぜ!?今度こそ食らえ!!!三角剣閃七連舞!!!」

二十一本の剣が獣王を襲い、獣王は魚王の隣で倒れる。

「じゅじゅじゅ・・・獣王!!!ぎよ、魚王!!!」

竜王が上空から呼ぶ。だがそれに答えられる仲間はいなかった。

「今度はお前が地面に並ぶ番だ!!!霸王奥義剣閃!!!」

地面と垂直になるように構えた剣で竜王を狙う。

「全員まとめてこの世界から帰れ!!!」

叫んだ竜太は剣を握る手によりいつそう力をこめた。

「終わるには早過ぎるよねえ・・・。暗黒瞑浄!」

空中にいた竜太が突然飛んできたその技で地面に落とされる。

八迫、亮祐、紋太そして真幻想は空を睨んでいた。

「んゝ来るのが早すぎたかなあ!?真打の瞑浄王マリーネの登場だ!!!」

「マ・・マリーネ王!!!」

竜王が自分よりも更に高い空に飛ぶマリーネを見上げ、つい叫んでしまう。

「おい、竜王!この失態は何だ・・・。お前達は地獄五世界の王ではなかったのか!?いくらここでは力が失われるといても呆れるわ。一時間だ。一時間、貴様らに力を貸し与える。自らの世界で出している力の全てを出せるだけの物を貸し与える。それで確実にしとめておけ」

竜王は耳を下に垂れ下げ、話を聞く。そしてうなづく。それを見たマリーネは竜太を睨みつける。

「邪魔するなよ、切り裂きジャック。貴様らの相手をしているほどの時間の浪費はないのでな」

そういうとマリーネは竜王の隣まで降りて、竜王の頭を掴む。

「解放!!!」

一瞬、竜王の目が開きそして目を閉じられる。そのままの状態で竜王は口を開らき仲間の元に降りる。

「終わらせます。・・・す・・・すぐに」

次の瞬間には獣王も、魚王も起き上がっていた。

「マリーネエ・・・。解放が遅すぎるってのお。もう少しで俺、還つちやうとこだったあゝ」

獣王が獣人姿でマリーネに向けて叫んでいると、隣では魚王が人魚のような姿で浮き上がった。

「あら、あたくしの美貌が元に戻ってきましたわ。これで力も全快、美しさもまた、全快ですわね。坊や達。見とれないで頂戴。あたくしの彼は・・・。」

ちらりと竜王の姿を見てから手で真つ赤になっている顔を覆いながら思わずつぶやいてしまう。

《ますます格好良くなっていますわ・・・。きゃん》

竜王の姿は黒いローブをまとった人間の少年の姿に変化していた。人間と違うのは、頭に角が生えていることだった。

「では、私はすぐに獄門を解放してくるからね、きみたちは遊んでいてくれ……。」

素晴らしい残してマリーネは橋の向こう、本殿へと向かった。竜王はフードをかぶると構える。

「僕はもう……守られてばかりじゃないよ」

そういった竜王の頭をこれまでと変わらなく獣王はなでる。

「じゃあよお竜王、一緒に蹴散らそうぜえ？」

二人の間に割り込みし魚王が入る。

「あたくしたちが地獄五世界の王、と呼ばれている理由をその若い体で覚えていきなさい。そしてここでその美しさを止めて置きなさい！」

更に空からも声がした。

「たんつものしそ・なことしてるよね 僕も混ぜてもらおうかな 決めた、僕も混ぜてもらおうよ」

そういうと魔王は竜王の隣に並ぶ。

「これでこっちは四人だよ お前達は五人。これで一瞬で終わらせられるねえ」

獣王は思わずはしゃぐが、その頭を尾びれで叩く。

「あんたまで語尾に〜 ってつけてたら分かりにくくなりますわ。やめてくださるかしら」

獣王はとっさに口を押さえてはにかむ。

「いっけね。うつつちまってたかあ〜」

地獄五世界の王たちがのんびりしている間に八迫は叫んだ。

「竜太、いけ。お前がマリーネを斬って来い。その頃には俺らも行ってやるよ。っていうかな、本当の所あんな化け物は俺はごめんだかな。お前が代わりに行ってこいよ」

紋太もつられて、

「行ってらっしゃい」と、笑顔で言う。

竜太はため息をつきながらも八迫たちに背を向ける。

「行ってくるから。必ず、かえるから」

そういつと駆け出して橋を渡っていくが、その頃にはすっかり五世
界王会議は終了していた。

竜王が地面を蹴り飛ばして竜太の前に下りる。

「いかせない・・・よ。マリーネ王からの、指令だから」
そういつて爪で切り裂こうとする。

「トラベラー吸着立体光線！！！」

紋太が竜王を絡め取り引き上げる。そして自分の方に引き寄せる。

「竜太はマリーネ王様を倒してくれるんだから、邪魔しちゃいな
いんだよ？」

「ありがとう！紋太」

更に竜太は駆け出す。

「だから・・・。いかせないってえ行ってるでしょう！！？」

獣王が竜太めがけて飛び上がるのを八迫が顔面を蹴り飛ばして止め
る。

「マリーネ王様のことは心配しなくても、竜太の奴が俺の代わりに
のしてくれるから、俺とこっちで遊んでようぜ。ライオン君」

「・・・」

何も言わずに竜太は走っていく。

「あたくしたちの邪魔はつきりしてえ！！ほんつつつとくに邪魔
ですわ！」

魚王が橋の下の川から飛び跳ねてくる。

「魚は刺身が、うまいんだよ。何枚切りがいい！？調理してやるよ
味の保障はしないけどな」

眞幻想が魚王を止め手、竜太に言葉を投げる。

「必ず俺の変わりに還しとけ。俺の借りも全部な」

竜太が眞幻想の方を見てうなずく。その前には魔王が立ちはだかっ
ていた。

「ここから先に行かせちゃったら僕達が怒られちゃうよ っていう
か、殺されちゃうかもって感じ」

竜太は魔王にぶつかり地面に倒れる。そして倒れた竜太の手を無理

やり掴んで起き上がらせたのは亮祐だった。

「早く行かないからこんなことになってるんだよ？とっとといけよ。一人で、いけるだろう」

そして立たせた竜太の背中を押す。押された力を利用して竜太は橋を渡りきった。

「行ってくる！！！！！！」

最後に、そう叫んで竜太は門の中に入っていった。

第六十七話 分離（後書き）

一対一に持ち込んだ八迫の作戦で、最終決戦がようやく始まるうと
している！！

しかし……。本気を出すことも無く終わってしまった鳥王さん
が地獄に帰ったマリーネにどうしばかりるのかがちょっと心配でも
ありますなあ……。

そして、理緒は一体いつになったら到着するのかってかちゃんと出
てこられるのか！？

なんだか終わりそうで終わってくれない！切り裂きジャックは殺し
ません初の大長編眞石版編クライマックス突入【予定】第六十八話
未定 ホントに何も決まってもません。次のタイトル。

第六十八話 竜王

その部屋で突然、叫び声があがった。その声は、高齢の男性の声だった。そして、その声は、次のように叫んだ。

「ワシは知らんと申しておろうが！！そんな門など知らん！！！貴様など、地獄に還ればよい。還れ！！！」

そしてその部屋で、次に響いた音は、金属音だった。そして、反逆王マリーネの声だった。

「貴様が知らないはずが無かるう。貴様はこの、切り裂きジャック全てを統一する長。総領なのだから。貴様が知らないはずが無いだろっ！！？」

マリーネは総領、と呼んだ男のあごを持ち上げて笑みを浮かべた。

「それで？貴様はその門がどこにあるか知っているのだから？！？教える切り裂きジャック総領」

総領は自分の顔を掴んでいるマリーネの右手をはずした。

「なぜ、地上の世界の生き物でない貴様が、地獄の世界の生き物である貴様がこの世界にくる必要があるのだ。貴様の持ち場は地獄！

！！この世界を貴様が住める世界に変えるわけにはいかんだ」

その言葉を聞いたマリーネは左腰に挿した暗殺剣アサシンブレードを鞘から抜き、総領の首に当てた。

「知らんというのなら、ここを消し去るまでだ。この島の人を！物を！そして、門そのものを……。覚悟しろ。終わりは始まるんだ。始まりの期間はすでに終わりを告げる。旧友戦火など、比ではない。最大級の業火だ。発動、地獄道具 破滅根源」

その頃紋太は竜王に対してトラベラーを構えていた。

「…………業火炎息吹」

竜王は、その火炎を紋太に吐き出した。紋太は、それを避け竜王に銃口を向ける。その銃口から射出された弾を竜王は噛み砕き、吐き捨てる。

「トラベラー連射式八十八弾!!!」

叫んだ瞬間、紋太のトラベラーから八十八弾の弾が射出され、竜王を襲う。

「うわぁ・・・いて・・・いててて」

八十八弾のほぼ全てが竜王にあたり、竜王はそれにひるんでいる。

「業火炎息吹連射」

ふらつく体を何とか支えつつ火炎を連射したがそれは紋太のことなど眼中には無く、ただ、吐き続けているだけだった。

火炎を吐き続けている中で、竜王は国のことを考え、そしていつも遊んでいる子供のことを考えた。

その昔、竜王は訪ねられた。

「なんでりゅーおうさまはおうさまなのにぼくたちとあそんでくれるの？」

そしてそのあとには、「王様はしょみんなんと遊んでくれないのに」といわれた気がする。竜王はそのときに気がついた。

王様というのは城に住んで、偉そうにふんぞり返ってるような人だと。その子供に、竜王は答えられなかった。それから幾度とその子供にあつたが、その問いにはいつまでたっても答えることが出来なかった。

答えられはしなかったけれど、竜王は自分の中ではうすぼんやりとした答えらしい物は形成されていた。

「たぶん、僕は王様になるような人じゃないからだと思う」という答えらしき物。

竜王は先代の王が戦争で亡くなったために即位した王だった。

竜王はまだまだ遊びたい盛り頃から皇帝学を学ばされ、戦闘術を

叩き込まれていた。だから遊んでいない。そして皇帝学も戦闘術も学ぶ必要がなくなったから、やっと遊べる。

そうして、今君達と遊んでるんだよ。そんな、答えだった。

そしてその子供は、つい先ほど、こちらに来る前にも尋ねてきた。

「りゅうおうさまりゅうおうさま!!!りゅうおうさまはかならずぼくたちのせかいをすくつてくれるんだよね。それでそれで。またぼくたちとまたあそんでくれるんだよね」

いつも遊んでいる子供達に尋ねられた。そして竜王は答えた。

廃墟となりかけているこの国のことを背景に子供を見て、答えた。

「も・・・もちろん。また・・・あそぼうね」

そういつて、先祖より伝わる戦闘用の衣装に身を包んで門の開門場所へと移動したのだった。

また遊ぼうと約束したが、それが果たされるのかも定かではない中で、竜王は自らの国を後にした。

約束が果たされるかは分からないけれども、また自分の国に帰ってきたいとそう思った。

少なくとも、自らの国を昔のように自然豊かな国にするために、刺し違えてでも勝とうと思った。

「ぼ、僕は絶対負けられない!滅龍奥義紅蓮雷神斬」

竜王の右手に炎が現れ、刀の形を形成していた。そして左手には右手と同じく、雷の刀が存在していた。

いわゆる手刀というものだった。

「僕は、僕の国を守る!!!」

叫んだ竜王は、地面を蹴りだし紋太に向かって走っていった。迎え撃つ紋太はトラベラーを構え、狙いを定めていた。

「目標、竜王。射出速度測定。射出弾切り替え。トラベラー吸着立体光線!!!!」

トラベラーから出された粘着性のある光線は竜王を捉え、空中へと投げ飛ばした。そして、空中で竜王を支えていた光線を消す。そし

て紋太は射出弾を切り替え、トラベラーを構えた。狙いも定め、撃とうとしたときだった。竜王の姿が見えない。先ほど空中で拘束をはずしたはずだった。羽がなければ飛べないと思っていたのだが、相手は竜であることを思い出した。

「僕は、僕の大切な国を守るんだ！！子供達を守るんだ！！！」
声が出た方をとっさに見ると、竜王は空中で浮いていた。何もない空中で。そして竜王は空中を走って紋太に迫ってきた。まさか、空中を走ってくるなどは考えていなかった紋太は竜王の手刀を避けることは出来なかった。そして、紋太は目をつぶった。

「僕が……。守りたかったのは子供達」

いつまで経っても来ない衝撃に紋太は目を恐る恐る開けてみると、竜王が啼いていた。

「僕は、子供を守りたかつたんだ。でも、そのために子供達を倒して子供達を助けることなんて、出来ないんだ」

竜王は手刀を納めた。それを見た紋太が竜王の肩に手を置く。
「何も自分の世界を守るために人の世界を壊さなくてもいいんじゃないかな。自分達が生きている場所がもし駄目になってしまったとしても、そこにはまだ自分達がいるんじゃないよ？自分達の町は、自分達でもう一度創り上げたらいいんじゃないかな」

その言葉を聞いた竜王は咆えた。その咆哮は悲しみを含んでいた。
「君はもう、自分の国を守れるよ。わざわざ人の世界を壊さなくても。だって、君は王様なんですよ」

咆哮を終え、うなずいた竜王の姿は消えていた。竜王は自らの国に帰った。

そして、戦いを終わらせた紋太は地面に腰を下ろすとため息をついた。

「ふう〜疲れたなあ……」

「さあ、発動の準備は整った。破滅根源の威力を見るがいい。付加
エンチャント
アサシンブレード
暗殺剣」

アサシンブレード
マリーネは暗殺剣を空に掲げた。

「これで完成した。これぞ不滅剣。不滅の面との最強のコンビネーションを誇るわが最高の姿の一つ。殺してやる」

そういうと総領に向けて剣を振り下ろした。

「待て！！！！」

扉が開き、竜太が飛び込んできた。するとマリーネは剣の先を竜太にかえると、叫びだした。

「また・・・また貴様が平田竜太あ！！！！今度こそは確実に殺すからな。生きておうちに帰れるなどと思うなよお！！！！」

第六十八話 竜王（後書き）

竜王を説得し、帰らせた紋太に対して八迫、亮祐、眞幻想は・・・。
次回、第六十九話 魚王【仮】

第六十九話 獣王（前書き）

新年一発目は獣王の毛むくじゃらのお話でございますか！

第六十九話 獣王

唸った。

目の前に邪魔な獲物が立ちはだかっているので唸った。

竜王は、すでに消えていた。というより消されていた。あのチビに今までより更に低く唸った。

竜王の敵をとる。そのためには今、自分の目の前にいる栗色の髪の少年に牙を向ける。

「略、サイヘルタイガー剣齒猫！！！」

何者も貫くかのように鋭くとがっている剣齒を見せ付け、八迫にゆつくりと歩み寄る。

「今度は、ライオンちゃんからちよつとお強いライオンちゃんか……。遠慮はしないからな！！！」

八迫は身近にあった橋の丸太を抉り取ると瞬時に加工して打撃力がありそうな棍棒に変化させた。

「俺はよお気があんまり長くねえんだよ。どつちかってえと短けえほうなわけよお。それに加えて親友もいなくなっちまった。これはよお……。殺すしかねえよな。やっぱり、殺すしかねえよなあ。……」

言い終わると同時に獣王は自らの足で思い切り地面を蹴り飛ばし、八迫に飛び掛った。

飛びかかられた八迫は、自作の棍棒を構え、バックステップでかわし、降り立った獣王の頭部を叩く。

ひるんだ獣王は地面を蹴り上げ後ろに下がって前足で頭を抱えて唸った。

「ううう……。ようしゃねえな……。ちつとは“手加減”してくれよなあ……」

唸っている獣王の前に影を落とした八迫は囁いた。

「手加減”って、何だろう？」

ほんの数秒考えるかのようなしぐさをした八迫が何か面白いことをひらめいたかのように顔を獣王のほうへ向ける。その顔は、何か面白い悪戯を思いついた子供の顔だった。

「分かった……。いたぶること……。だよなあ」

エグイ顔で笑った八迫は棍棒を思いつき叩き殴った。

これが俗に言ったこ殴りだった。

「おらおらおらおらあ！！！！還れ還れ還れ還れえここは俺たち人間様の住み着いたわくせいだあ！お前みたいな奴は地獄がお似合いだああ！！！」

八迫がエグイ顔のまま叫ぶ。殴る。叫び、殴る。

戦いが終わり、ほんの一、二分地面に腰を下ろしていた頃、その声は聞こえてきた。

紋太はその声の主が瞬間的に思い当たった。

「八…八迫だ…」

真っ青になった紋太が寄りかかっていた大木が突然へし折れた。度重なる戦闘による疲弊仕切っている紋太は大木ごと後ろに倒れる。そして後ろに倒れた紋太の目に入った者は鬼だった。

とつさにその鬼から離れた紋太は震える手でトラベラーを構える。

「いきなりあってそれはないんじゃない！？ねえ………」

次の瞬間、トラベラーからの銃声が聞こえた。そして銃声が途中でかき消された。

第六十九話 獣王（後書き）

次回、獣王との戦闘に終止符！！！！そして次に終止符を打つために始まる戦いは五王唯一の紅一点、生かした美魚魚王の登場！！！！【予定】

第七十話 刺身【仮】

第七十話 刺身（前書き）

諸事情にはなりますのですが、今月は本業での活動が多々ありますので本格的には来月からになると思います。

全く持って勝手な事情ですいませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

というのを昨日次話投稿したはずなのですがなぜか投稿されていなかったなので本日は二つほど更新できるかと思えますね。

以上、近況報告兼、切り裂きジャックは殺しません！！！！第七十話 確約です。

第七十話 刺身

太陽が照りつける中で、獣王は叫んだ。

「やっぱな！そうこなくちゃ楽しくねえもんな！魅せてやるよお。合成獣の力あ、たつぷりとなあ」

獣王は背中にある鷹の翼を羽ばたかせて上空へと舞い上がった。

「お前だけ飛べるのかよ……。ズルい事極まりないねえ〜！」

空を支配する獣王の姿を見つめる八迫は苦々しく呟く。そして、棍棒を橋の下に投げ捨て橋の木片をかき集め、紐で繋ぎ合わせる。それを構えて空を舞うそれを睨み付ける。

「竜ただけあんな良品そつひ獲得出来るなんてズルいだろ？」

落下する橋の上から八迫は獣王に聴こえるように叫ぶ。

「死ねえ〜！この咬ませ犬」

叫んだ八迫は手に持ったそれを大きく振り下ろし、獣王の頭をへこませる。

そんな中、獣王は自分のいる国のことを思い出していた。

「獣王となつたからには、お前はこれから国を守るために全力を尽くし、更に地獄の叛逆王の手による廃墟とされぬために従順な犬であれ。これが歴代の獣王たちが守ってきた唯一の決まりだ」

獣王が王冠を与えられたとき、その代の獣王はこういった。

そしてそれを聞いた獣王はいつから過疎の言葉に反論し始め、そして、自ら叛逆王に戦いを挑むのだが……。

そこで、回想は途切れた。

八迫が獣王の顔を掴んで耳元でつぶやいたからだった。

「今の貴様には回想する権利すら、存在しない。おとなしく朽ちろ」

しかし獣王につぶやく間でもやむことのない八迫の棍棒連激は、やがて、獣王が水の中に消え、もといた場所に還るまで続いていた。

いつの間にか背後に立っていた鬼は紋太の顔をその白い指でするりとなでると地面に拳を叩きつけ、紋太と自分との身長差を広げた。もとい、地面を抉り取った。

「いきなりあつて、それはないと思うわよ。ところで、聞きたいことが一つあるんだよねえ・・・」

紋太はその鬼の姿から顔をそらせずにいた。

そらしたいのにその気迫がそらすことをも許さない・・・まさにそんな状況下に置かれた紋太はとつさに護身術で自分が今までいたほうを指差した。

そしてそこから意思を読み取った鬼はのっしのっしと森を殴り払い紋太が指差した方向へと進んでいった。

鬼が消えてもなお残るその気迫からやっとな解放された紋太は肩で息をしながら帰ってから、を想像して青ざめた。

「あたくしにここまでやらせるとは、あなたなかなかいい男じゃございませぬの。でもまだまだあたくしの理想の彼にはまだまだかな

「いませんことねえ……。強さも、容姿も……。何もかも」

そういつた魚王はえらに残った水滴を太陽で反射させ、きらきらと輝いていた。

「勝手に勝敗決めてるんじゃないやねえよ……。俺は言っただろ！？お前のことを刺身にする……。って俺は有限実行派なんだよ。有限無実行は人間として許されざることだ。覚えとけ魚人さん」

最後の言葉を言った真幻想の足元にすさまじい勢いの水が吐き出される。

「あたくし、これでも美人としてっておりますのよ。侮辱、しないでくださいますか……」

その声は押し殺したかのような口調だったが静かな怒りがこめられていた。

「もう、許しませんですからね。水圧で原形すら留めないであげますわ。私からの贈り物ですわ」

それが、開戦前の双方の楽しい会話だった。

第七十話 刺身（後書き）

誰も食べたことのない新しい味が生まれ始める・・・。

奇跡の天才魔法料理人眞幻想が送り出す、新感覚バトルストーリー！

今回の食材は一つの魔界を治める魔界の王、魚王のお刺身。

新しい食材のハーモニーと新しいたびを・・・。

次回、切り裂きジャックは殺しません！！第七十話 刺身

第七十一話 覚醒（前書き）

そんなこんなで、やっと、奴が覚醒しました。

しかし、奴が目覚めたとしたら、これまで言ってたマリィネの発言が辻つま合わなくなってしまうのです……。
という問題が発生してしまうのです。後で修正するか。

第七十一話 覚醒

眞幻想は空間に維持していた剣を全て呼び出した。

「鱗が硬いお嬢さんに必要な包丁はこれほどでしょうか！？さあ、調理開始です」

余談だが・・・本当に余談ではあるのだが、眞幻想は意外と家事が得意な男である。家事が出来る、男である。家事が出来て強くてかっこいいの三拍子がそろったこの男、へ夕に町を歩いたら軍団を作ってしまう可能性もある。一言で、もてそつだ。

しかし、それは人間であった場合のことで、その中に魚は含まれてはいなかった。

「あたくしの鱗は硬いのではなく、少し・・・そう、ほんの少しお茶目なだけですわ！！！」

叫んだ魚王は口から冷水を拘束で出し、眞幻想の足元の土を消し去る。

「あたくし、本当にもう許して差し上げませんわ」

次の瞬間につこり笑った魚王のえらを眞幻想が切り取った。

「えらは、衣をつけて、油をつけてあげると、さくさく感が楽しめる。魚王の鰓揚げ、完成だ」

鋭い痛みにも魚王はその場で叫びだす。

「あつ、ア・・・ああああああああああああ！！！」
鰓から流れ出す深紅の血を振りまきながら、魚王はあたりを駆け回る。

「次は、その邪魔な鱗、そぎ落としてやるから覚悟しろよ」

眞幻想は鱗をそぎ落とすに飛び上がった。

同じ時刻、暗闇の中で音が響いた。はじめは小さく一回だけ、ドク

ンツ・・・とその音は暗闇に響き渡り、そしてまた、ドクンツ・・・それは徐々に音が大きくなって、音の感覚が狭まり、その暗闇には音が鳴り響いた。しばらく、その音は響いていた。

次第にその音だけが鳴り響いているわけではなくなった。人間の呼吸音がその暗闇で新たに響き始めた。

やがて、それらの音をも掻き消す新しい音がその暗闇を支配し始めた。

「ふ・・・ふふふふ・・・。奴ら、いまだに進展がないと思える・・・。何ゆえ奴ごときにそれほどの血を流し、この聖地を汚すか・・・。それとも何か!? この俺が来る前座を用意してくれているのか」
そしてその声の主の目が暗闇で光を放った。

「俺が出て行く場面なのか!? 切り裂きジャックのヒヨコども。貴様らの手におえねえからといって過去の人物にいつまでも頼ってるのはいけねえ・・・いけねえよなあ・・・」

そして、その暗闇に存在していたその声の主は、暗闇の中で体を構築し、拳を握った。

「ふざけるんじゃないやねえ・・・。全くもって・・・」

そして、その声はその暗闇をも震わせた。

「ふざけるんじゃないやねえ!!!」

暗闇の中で赤く輝いたその目を持つ男は、低く唸りながら、つぶやいた。

「この俺にいつまで頼ってるんじゃないやねえぞ・・・。ガキども。俺は、お前らみたいなふ抜けた奴らが嫌いだ・・・。今、これから叩き潰してやるよ。マリーネが貴様らを潰したあとで、貴様らふ抜けた切り裂きジャックを潰してやるよ・・・。俺の名は・・・」
暗闇が、崩れ去った。

「ほら、どうした、綺麗で優雅な女^{メス}。もうお前に残ってる部位なんて数えるほどしかないじゃないか・・・」

眞幻想は肩に乗せた魚王の鰭を指で弾いて地面に落とす。

「あっ・・・はっはっはっ・・・」

方で息をしながら眞幻想をじっと睨みつける魚王。

「私・・・は、魔界で唯一の美魚・・・」

魚王は一人、自分が一番輝いていた頃を思い出していた。

そして、その一瞬に隙が生まれたのを見逃す眞幻想ではなかった。

「三枚に、おろしてやるよ。刺身で、お前は終わりだ!!!」

眞幻想は、構えた。

第七十一話 覚醒（後書き）

本日はここまでです。

で、奴の正体はいつたい何者なのでしょうか！？とっても分かりやすいことこの上ないと思いますけどね……。

次は、次週か再来週になると思いますのでそれまで待っていてくださるとうれしいですね

次回、第七十二話 刺身

第七十二話 刺身(前書き)

結構話が終わりかけていると思うのですよ。

眞石版編が。

ちなみに考えてある終わりの方のことは二つ。

眞幻想が呟く一言と、マリーネが呟く一言。それと、豪火竜が戻ってくるかなあ・・・!??ってところです。て、これじゃ決まってることとはいえないのか・・・。まあ、いいですよね。

そんなこんなで、第七十二話 刺身

第七十二話 刺身

魚王は走っていた。いつものように…いつものように逃げた。逃げる理由を思い出すだけでも、背筋が震えて、足が止まってしまふ。

そして、声が聞こえてきた。

「あっははは…。やったわよお！！わたしアイツの鱗、えぐってやったのよ。そしたらアイツ『イヤァッ』って叫びながら走って逃げてくのよ。もおーおかしくておかしくて」

その声に乗って別の声がその声に同意して言葉を続ける。

「うっそー！！まじでえ！？マジつけるんですけどっ見に行こ見に行こーう」

そして、魚王の下へとどんどんどんどん足音は、近づいてくる。

そして、走り去った魚王は、その次の言葉を聞くことはなかった。

「アイツマジで自分がかわいいと思っててうぜーんだよな…。あんなぎらぎらな鱗、見るだけで頭痛くなるっっの…」

そして、続く言葉は…。

「死ねばいいのに…。死ねよ」

魚王は、いつからから自らに美しさと、強さを求めた。

ある日、そんな魚界に一人の男が現れた。

名前を『マリーネ』と名乗った男は、魚王の頭を掴むと不適に笑いつぶやいた。

「お前が、この世界の王となるべく者というわけか…」

そっぴい残して『マリーネ』は何処かへと去っていった。

「いや…。私は強くなきゃいけないの。強くて美しくなきゃ、また…また…」

瞬間的に口をつぐんだ魚王は、次の瞬間発狂した。

「いやあああああああつあああああああああああ
!!!」

眞幻想は右手に持った剣で魚王をおろすべく剣を振るった。しかし魚王はそれよりも更に素早い速度で、暗闇くらやみ…というよりは混沌カオスの中に吸い込まれていった。

そして、眞幻想の剣は宙を斬った。

「…。三枚卸、出来なかつたなあ…。そっぴや最近刺身、食つてないな…」

そつつぶやくと眞幻想は剣を蒸発させ、呟いた。

「次に残つてんのは、誰だよ…」

すると、頭の中には、先ほどまで魚王が呟いていた『竜王』という言葉に代わり低くしゃがれた声が響き渡った。

そして、暗闇。

暗闇にいる男は、赤く光り続けている目の色を蒼へと変化させて、手を叩いた。

「いい…いい、いい、いい!!!完璧だよ…。私が組織した物なんかよりも、君が作った組織…『新しい血族』とかいったな、いいぞ。貴様だ!!!貴様こそが私が新しく作るべき組織のトップ。これは面白い。呼んでやろう。眞幻想。貴様がこちらに来れるように、この私が招いてやる。さあ、来い。眞幻想!!!」

暗闇に光る蒼い瞳は再び赤に戻り、下種な笑いが空間を支配した。

「また…また貴様が平田竜太あ!!!今度こそは確実に殺すからな。生きておうちに帰れるなどと思うなよあ!!!」

マリーネは、拳を振り上げ叫んだ。

「よかるう、まずはお前に根源破滅の力を見せてやるう。付加暗殺エンチャントアサシン剣の一撃を…」。そして総領。これから始まる恐怖を見せてやる」

竜太はマリーネの顔を見ると、鼻で笑った。

「今にお前の呼んだ五王何て消えてるよ。俺の友達を馬鹿にするなよ。ドエスに怪力女にお金持ちと小学生。それに…剣士ブレイダー。お前の呼んだ奴らなんかじゃお話にもなりやしないよ…」

竜太が地面にこすりつけた炎斬刀霸凱一閃が発火し始めた。

「今度こそ、お前を逃がさないし、負ける気もない。勝つて必ず友達を取り戻してやる」

マリーネはその言葉を聞く前から笑いをかみ殺し、自分だけに聞こえるように呟いた。

「殺す」

第七十二話 刺身（後書き）

ざっと見たところによりますと、三十六話ぐらいでしたか……。長い
ですねえ……。と、のんきなことも申してはおられません。

とつと終わらせて修正かけてとつと、炎上する奴とか、鎧のお
話とかがしたいのですが。

まあ、そんなことよりも、俺はこのお話をとりあえず納得がいく形
に仕上げられればよろしいですかと……。

まあ、なかなか……。というか、全く納得なんて出来るはずがないんで
すけれどもねえ。

それではまた次回!!!!

次回、第七十三話 剥奪【仮】

第七十三話 略奪（前書き）

今回はかなり時間をかけて進めたつもりです。実質かなり終盤だと思っております。

そんなことを毎回のようになってきている気がしなくもないのですが……。なるべく今年度中には終わらせていただきたい！！！！マリーネ様、ふぉーえばーってことですか……。

まあ、とにかくとにかくです！！

第七十三話 略奪

お楽しみください！！！！

第七十三話 略奪

「さあ、こちらにおいで…。君こそが私の創る強さとなれるのだから。」
頭に響きわたるその声に導かれて真幻想は一步足を踏み出した。踏み出した足は地面に触れることなく、黒い靄に吸い込まれていく。頭に響き渡る声だけに支配されている真幻想には、それに気づく事はできずに黒い中へと消えていった。

そして目の前に現れる一人の血まみれの青年。その青年は口を開いた。

「ともに、暴れよう…。」
そうささやく声は、どこか優しそうで、暖かくて…。しかしその声とは裏腹にその表情は、冷たく、嫉妬に満ちていた。さらにその眼は、どこか彼方を見ているようだった。

真幻想はいまだなお響き渡る声に支配され続けていた。
そこに聞こえてくる男の声は頭に響くその音を打ち消して届いてくる。

その声だけが、この苦しみから救ってくれるような気がした。だからそんな気がした真幻想はその声にならずにしまった。うなずき、何も無い黒い場所に体を預け、意識を失ってしまった。
目の前で夕才手溜め幻想を見ると血まみれの青年は微笑み…。

「もう、貴様を許しはしないぞ…。今度こそ殺して殺して殺して殺して殺してやるつうううううううう！！！」

マリーネは右手に持った剣を竜太の眉間に構える。竜太は発火している覇凱一閃を振り、炎で空気を切り裂き、つぶやいた。

「もう、終わらせたいんだ。お前とのことなんて…」
まず、マリーネが竜太に飛び掛かった。右手の剣で竜太の首を切り落とすことを目的に飛び掛かった。

「そろそろ諦めて、参りましたって言えばよ。そしたら俺は慈悲深いから殺さないよぉー」

そついうと、魔王は手に持っていた槍を地面に深く差し込み亮祐を蹴り飛ばした。

「ほぉーらほら… 苦しいのが続くだけだよ」

亮祐はすでに立ち上がる力すらも残っていないかった。立ち上がる力どころか、意識を保つのも容易ではなくなっていた。

「このままだと逝っちゃうよ」
しばらく蹴り続けていた魔王だったが急に蹴る足を止めるとぼそりとつぶやく。

「つまんなあい もういいよ、死なせてあげる 何がいい 斬首？
切腹？」

にこにこしながら首を右へ左へ傾けしつつ、亮祐に死に方を選ばせていた魔王は右手を鋭利な刃物に変えると亮祐の髪をつかんで無理やり立たせた。

「斬首がいい？ じゃあ、そうさせてあげるよ。ほんと、君って殴られたり蹴られたりするの、スキなの？ 変なのぉー」

亮祐に話しかけている間も魔王の右手は徐々に右上へと上がっていき斬首の準備を始める。

「カウントダウン始めますー 1 2 3…」

亮祐は日の光に当てられかすかに輝く刃物を見て目を閉じた。死ぬということを実感した。

「よん〜…」

死ぬ前には走馬燈が駆け巡るといふ噂を思い出していた。そしてそ

の噂を鼻で笑って否定した。

「ほんとに死ぬときになったら、何も思わないんだな…。ただ…ただ怖いとかは、思えるんだ…」

亮祐は静かに息を吐き出した。

「さんになっちゃったよー」

もう死んでしまふ…。そう思ったのになぜか頭の中には取り溜めていたDVDを見たかったというどうでもいいことが浮かんできた。

「に だからもうすぐ首切れる」

なぜか耳には魔王の楽しそうなあどけない声とともに木がへし折れていくような音が聞こえていた。

「いち」

木がへし折れていく音はどんどん近づいてきて…。

「勝手に殺してんじゃねえ。首がどうしても斬りたいならおれが切つてやるよ」

亮祐が耳にした声は真幻想の声だった。

「鉄茨黒銃」

聞こえた真幻想の声は冷酷非情無比で、何の容赦もためらいもなく銃の引き金を引いて魔王の頭を打ちぬいた。

「鉄衣鎧化」

魔王を打ち抜いた銃を消すと自らの身に鉄の鎧をまとわせた真幻想は再び森の中へ姿を消そうとする。その背中に亮祐は声をかけた。

「が、帰ってきた返事はたった一言。」

「消える」

そういうと真幻想は消した魔王の槍を持ち去り森の中へと姿を消した。

「あんた、大丈夫！？そんな血だらけの汚物みたいな恰好で…」

反対方向から突然声をかけてきたのは理緒だった。

「私みたいなか弱い女の子を置いて一人で行くからこんな風になる

「のよ!!!反省しなさい」

突然しゃがんだ理緒は「よっこらしよ」と声を出すと亮祐を抱えると、歩き出した。

「あつちに紋太居るからそつちで休めばいいんじゃない!？」

亮祐は死を免れたという緊張からの解放によりすぐに気を失った。

「おのれっおのれおのれ!!!」

何度も何度も剣をふりかざした。しかしそのたびに竜太は覇凱一閃で剣筋を変え地面をえぐらせる。

「俺は今度は負けないよ。お前の道具にも頼らない。俺は、俺が、俺だけが持っているものでお前に勝ってみせるよ」

そついった竜太は剣の柄でマリーネの顎を素早く突く。

一時的に脳震盪を起こしたマリーネの足をめがけて素早く竜太は剣を叩き込む。マリーネの体の反対側に回ってもう一度剣を叩き込む。「あううあうあ…」

マリーネは足の痛みでしゃがみ込む。そして竜太は再び体を反転させると覇凱一閃を逆手に持ち、頭を叩く。

「まだだ…。俺の苦しみはこんなものじゃなかった。友達を奪われて、飲み込まれて…」

攻撃の手を休めて竜太がつぶやく。

「何百倍にして返してやろうか…」

マリーネはその声を聞き、顔が真っ青になる。

「まずは、百二十倍から…気が済むまでやらしてもらうぞ…」

竜太は逆手持ちだった覇凱一閃を持ち直すとマリーネの首を斬る動作をした。

「なんて言っただけ…お前はこういう時。そつだ…終わりの始まり…だ」

第七十三話 略奪（後書き）

次回、ついに本気でマリーネとの最終決戦へと望む平田竜太。

鳥王を鳥目鳥目と言ってバカにした理緒。竜王と和解した紋太、魚王を三枚に下さず勝利した真幻想に獣王と壮絶かつ簡潔な戦いをした八迫。そして最後に残念ながら自らの手では魔王を倒すことのできなかつた亮祐……。ついに五王を倒した切り裂きジャック with 真幻想。

そして残されたのは敵将冥浄王マリーネ！！対するは七の切り裂きジャック平田竜太！！！！

ついに始まる最終決戦【よてい。】！！！！

圧倒的な強さでマリーネに確実な損傷を与えていく竜太か！？

莫大な量の地獄道具を駆使して闘う冥浄王か！？

眞石版編最大決戦を制する者はどちらだ！！！！

次回 切り裂きジャックは殺しません！！！！

第七十四話 死闘

第七十四話 死闘

「ふ…ふふふ…」

突然下を向いていたマリーネが声を上げて笑い出す。

「何が、おかしいんだ！？自分の敗北した時の姿でも浮かんだのか…？」

竜太は構えを解かずにマリーネに話しかける。マリーネはそれに微笑みで答えた。

「私に残っているものなどいくらでもあるんだよ。貴様と違って、他人の私物を奪って生きていくわけではないので、このような道具も山のように存在する。例えば、地獄道具魔術の翼…！！」

次の瞬間マリーネの背中の部分に翼が現れる。暗く穴が開いた禍々しい翼で空に浮き上がるマリーネは続いて叫ぶ。

「地獄道具獄帝じごくていごくていの刃じんおよび地獄道具獄帝の鎧こてい。地獄道具獄帝じごくていごくていの御剣みつるぎ召喚完了…！！」

右手に先ほどと打って変わり漆黒の黒刀を握り、左手には赤と黒が混合した、呪いが込められていそうな斬れぬものなどなさそうな剣。そして、体には黒をベースとし、赤や黄色などといった割と明るい色が散りばめられた全身を余す所なく覆った鎧。すべてに欠点などないかのように繕ったマリーネは地面に降り立ち、式本の剣を交差させると竜太の炎斬刀覇凱一閃を払いのける。

「終わりの始まり…だと？ふざけるな。それは私だけが生み出せるもの。私だけが始めることを許されて私だけが終わらせることをも許されたもの。それが終わりの始まりだ…！！」

マリーネは刃と御剣を振り、竜太と何度もぶつかり火花が散る。

総領は二人を見ていた。そして思った。

何度もぶつかり、離れて命を懸けて戦う二人を見て、自分はこれまででなんとつまらない世界で生きていたのだろうか。自分が求めて

いたのは命がかかった出来事…。切り裂きジャックは命を抱えて、命を懸けて守り、殺す。自然にはほが緩み、笑っていた。

「行け!!!殺せ!!!」

自然と、応援してしまっていた。

八迫は、地面に寝転がると大きく息を吐き目を閉じた。

「これでようやく終わりだな」

理緒は紋太のもとへと亮祐を連れてきて転がすと魚肉ソーセージを紋太にも差し出した。寝ている亮祐はさておき。

「ありがと。これでやっと帰れるんだね!？」

袋ごと食べている理緒はうなずいて目を細めた。

「帰ったらみんなまとめてしばいてやる」

「……………。ここに、あいつがいるんだな…」

眞幻想がいつの間にか、竜太とマリーネ、そして総領がいる場所へと来ていた。

「これでいいんだな…」

そつつぶやくと、眞幻想の脳内では言葉が紡がれる。

『そつだ。お前は、これから　を　』

眞幻想にはマリーネの言葉が紡がれていた。

「さあ、生まれ、終われ。終わって生まれ。切り裂きジャックの完全解散。そして新しい組織、切り裂くべく血族を作ってくれ…眞幻想」

そして再び血まみれの青年は目の色を変えて、眞幻想を支配する。

第七十四話 死闘（後書き）

次回、本格的最終決戦始動予定！！！！

そして動き始めたあいつの正体は！！！！

一体いつ登場するのか血まみれの目の色変わる青年よ！！！！

第七十五話 未定

第七十五話 激戦（前書き）

ついに始まる激戦苦闘。数々の試練を乗り越えてついに挑むは地獄の反逆児だった冥浄王マリーネ。

眞石版編、最終章開幕！！！！

第七十五話 激戦

再び暗闇の中。

男は笑っていた。そして呟いている。

自分の身の上を。自分の野望を。更に自分が何をするべくここにいるのかという存在理由を。最後に、なぜに殺されている自分が今ここで息をしているのかということ…。

しかし、それはあまりに小さく、聞き取れることは少なかった。聞き取れたことはただ一つ。

彼の名前。

確かに血だらけのその青年はつぶやいていた。
自らの名を。

シャガンと、呟いていた。

「獄来冥波じくらいめいは!!!」

叫んだマリーネの右手の刀。それが黒い波を発し振動し始める。次第にその波は大きくなり剣の横幅の三倍ほどになった頃、マリーネはその剣先を竜太に向けて振り払う。

剣先から放たれる黒い闇は竜太の視界を奪いつつ竜太の周りを包み込む。その中で竜太は霸凱一閃を振り、闇を斬る。

「消える消える消える!!!切り裂きジャックはすべて消える!!!この世に必要なのは絶対的な破壊!!!唯一無二の存在、冥浄王マリーネ!!!」

叫び、狂いながら剣を振り、暗闇を飛ばすマリーネは左手の剣御剣に、電撃をまとわせそれをも振った。

「唯一無二の神様はお前じゃない!!!」

襲い掛かる暗闇一つ一つを確実に切り、マリーネの近くへと進み寄る。

そしてついに、マリーネの前に来た竜太はマリーネを蹴飛ばし、地面へと転がす。地面はところがしたマリーネの首の近くに覇凱一閃を突き刺す。

「お前はこれで終わりだ。おとなしく豪火竜を返せ」
刺した覇凱一閃を斜めに傾け竜太は問う。

首の近くに刺さった覇凱一閃を横目で見つっ、マリーネは答える。

「あれは渡せない。あれは私の中枢核と同一のもの。あれは外に出すことはできぬものだったのだ。外に出してどうなる！？結果がこのざまだ。お前という名の糧を手にした龍魂剣は数々のものを壊し、斬り、捨ててきた。それは私がなすべきこと。お前とこれとではしてはならぬものだ…。ゆえに…故に私は渡すことを拒み続ける！！
！地獄帝道具獄帝の閃光！！」

次の瞬間、突然あたりが白一色に包まれ、何も見えなくなる。ただ、聞こえてくるのはマリーネのささやき。

「決して渡すことなどない。あれは私と同化した。同化したものを取り除くなど無理難題！！貴様のような軟弱者では幾歳かかってもかなわぬものだ。諦めて去れ！」

そして竜太はそれにこたえる。

「それは、お前ひとりの無理難題。他人全てが出来ぬ事ではない！！！」

音を頼りに、竜太は切り裂いた。

「俺は壊し、壊し壊し、すべてを殺す。その為に…」

眞幻想は腰から双方の剣を抜き、構えをとる。
すべてを壊すために…。

第七十五話 激戦（後書き）

次回、ついに始まったマリ―ネとの戦いに終止符！！そしてシャガンと名乗った血だらけの青年は！？！まだ意識戻らぬ操り人形と
かしている眞幻想はいつたい…！？切り裂きジャックは殺しません
！！！！史上最大の長編となった眞石版編の最終章が近いと思えます
！！！！！！

第七十六話【ついに通算百話！！】 乱入

第七十六話 乱入（前書き）

なんと今回ついに100話突破しておったのです。意外!!!
よくもこんなぐだぐだな文の羅列が続けられていただけだと思います。
そんなこんなでかなりもう終わりそうですから…。

第七十六話 乱入

音を頼りに、竜太は切り裂いた。

切り裂いた先にはマリーネがいた。あの閃光の中、目がくらんでいると思ひ込んでいたマリーネは驚きを隠せずにその場に立ち尽くしていた。

「な…なぜ、お前にはそれが見えるんだ…。見えるはずがない」
その言葉に竜太は笑って答える。

「斬り飛ばした」

そして竜太はマリーネの背後に移動して蹴り倒す。

「蹴り、飛ばした」

背中に担いでいた覇凱一閃を構えなおすとマリーネに切りかかった。

「終わらせるっ！！！」

そう叫んだ竜太は、大きな衝撃でその手を止めてしまった。

「壊し始める！！！」

眞幻想は両手に持つ大きな長剣で、扉を斬り壊し中へと侵入した。

「お前ら三人、死んでしまえ」

眞幻想はその場にいる竜太、マリーネ、総領を見渡し、そう告げた。

一瞬の沈黙があった後、眞幻想は竜太へと斬り込んだ。

マリーネもその隙を見逃すことなく、斬り込む。それを見た竜太は想像の力で左手に楯を出すと眞幻想の太刀筋を防ぎマリーネの剣を弾き返した。

「二対一は、卑怯だろお！！！」

思わず叫ばずにはおれなかった。竜太ひとりに対して眞幻想とマリーネの二人が一斉に切りかかるのを防ぎつつ、叫ばずにはおられなかった。

「うるさい…お前たちを殺す。シャガンのためだ。シャガンが作る新しい組織に必要なものに貴様らはいらぬといていた」

その言葉にマリーネが反応する。そして一瞬で剣先を真幻想の首に狙いを変える。

「貴様！！！！どこでシャガンと会った！！！！どこにシャガンがいる！！！！」

二本の刀で真幻想の首を挟み、マリーネは叫んだ。その剣も物ともせずに、真幻想はマリーネを鼻で笑った。

「あのお方の思想は貴様などには理解できない域に達している！！！貴様などには言えぬ。なぜなら…。なぜならシャガンはもうすぐあらわれる。この場に現れる！！！！」

マリーネは額に血管を浮き上がらせて、歯を鳴らしていた。それはおそれからくるものではなく、楽しみを見つけた顔だった。

「来る！！！！あいつが…シャガンが来る！！！！」

「は…ははは…。」と力なく笑うマリーネの顔を真幻想が蹴り飛ばす。

「貴様には、シャガンに合う権利はない。消えてしまえ。」

竜太の顔からはずした剣をマリーネに向けて構え、走り出す。

「シャガンは、来る！！！！」

第七十六話 乱入（後書き）

次回、ついに彼が現れ、そして始まることとしている…。
第七十七話 神聖

第七十七話 神聖（前書き）

今の今まで悩んでました。何をか！？それはあとがきで。

第七十七話 神聖

暗闇の中で二つの光が発せられた。それは、目の光だった。野望に満ち溢れた、これからその野望を達成しようとする動き始めている眼だった。そして、その眼を持つ男はつぶやいた。

「気は熟した…」

今まで座っていた男は立ち上がると、右手で時空を壊した。そして壊れた時空の向こうに見えるのは二人の人間と、一人の異形の怪物だった。一人の人間は切り裂きジャック平田竜太。もう一人は男に操られている者、眞幻想だった。最後の一人、異形の怪物は死者の面を含むすべての地獄道具を取り込んだマリーネだった。三人はそれぞれを敵とし、剣をぶつかり合わせていた。

しかし、その戦いもその男の出現によって休戦となった。

その様子を首を鳴らしながら眺めた男はかるうじて聞こえる程度の声でささやいた。

「さあさあさあ…お待たせいたしました皆さん。私が、切り裂きジャック創設者にして、“伝説だった”シャガン・フェルナラールだ。みな各々言いたいことはあるだろう、あるだろう…。しかし、それは一切受け付けない。ここからは私の一方通行だ」

右手と左手を大きく広げたシャガンはい…と笑った。それを見た眞幻想は瞬間的に反射神経が働き膝をつき頭を下げる。

「よくぞいらつしやいました」

それを見たシャガンは気をよくして話を続ける。

「切り裂きジャック。お前たちに言いたいことが山ほどある…あるが、第一声はやはりこれであると判断した。心して聞け。『貴様らは存在する理由がない』よって、創設者シャガンの命により解散だ』解散…。その言葉を竜太が理解した瞬間、竜太の手から霸凱一閃が零れ落ちた。その反応を見もせずマリーネのほうへと向き直ったシャガンは指さすと叫んだ。

「よくも親友を殺したな…。そして、俺を殺したな。許さない、許されることではない。よってここにお前を殺す。しかし、死者の思念となつてゐるシャガン…俺一人では太刀打ちができないだろう。平田竜太…。解散は貴様の腕にかかつてゐる。さあ、力をよこせ」
言い終わつたシャガンは右手を前に突き出し、何かを呟く。すると瞬時に竜太の足元に転がつていた覇凱一閃は本来の姿、龍魂剣へと姿を変えシャガンの手へとちょうどよくはまる。

「懐かしい…」

目をつぶるとシャガンはつぶやく。そして、目を閉じたままマリーネの背後へと回り、剣を振る。

「龍魂奥義切口発火！！！」

斬ると同時に切り口から炎が噴き出し、マリーネの体を包む。苦しげな声を上げてマリーネはその場で膝をつくが炎を地獄道具の一つで打ち消すと立ち上がり、シャガンに反撃し始めた。

「この死にぞこない！！あの時貴様は地獄の門の向こう側、四つの箱に入れておいたはずだ…。イキャヴァラ教の者どもを手なずけたとでもいうのか…」

マリーネの驚きの質問に対しシャガンは笑つて答え、更に切りかかる。

「手なずけてない…。そうしようとしたが小心者どもの犬はすべて噛み癖がついていてな…。右手一つで壊滅させた」

総領は手を組み、目をつぶり祈つていた。

「おお…神よ。あなたは今、ここに舞い降りてくださつた。感謝いたします。ああ…神よ…」

竜太はいまだ膝をついていた。

炎斬刀覇凱一閃…もとは龍魂剣が本来はシャガンの所有物であつたという新事実。ひよつとしたら八迫から聞いていたのかもしれないが、少なくとも記憶の中にはない。そんなことよりも、一体だれが

龍魂剣の持ち主であるのか……。シャガンにマリーネ、須藤そして竜太。そのほかにも数々の持ち主がいて……。

眞幻想はいつの間にか戦線に復帰していた。

その戦場はマリーネは眞幻想とシャガンの二人をたった一本の剣で見事にさばいて反撃している。二対一で、戦力は互角だった。

シャガンは竜太の名前を呼んだ。

「お前も戦え……。解散を今、この場でされたいのか!？」

シャガンが創設時に決めた一つの法則の一つ。解散権は一方的に強制解散することができるというものだった。

「解散させないし、その剣、ちゃんと返してもらおうからな!!!」

力も出ない足を手で支えながら立ち上がると、想像で武器をだし戦場に乱入した。

その瞬間、眞幻想の口から血が、噴出した。マリーネの剣が眞幻想の胸を貫いていた。

第七十七話 神聖（後書き）

今の今まで悩んでました。何をか！？それは真幻想を生かしておくか、殺してしまうか……。結果としてこんな形になってしまいました。どちらにしる、最後の一言は前から決定しています。それは次回で……。

第七十八話 遺言【仮】

第七十八話 遺言

貫かれたマリーネの剣はほどなくして抜かれ、それと同時に眞幻想は地面に倒れた。地面には赤い液体が流れ落ちる。

「今に死ぬぞ。さあ、少々待つてやろう。看取つてやれ。彼の最後を…戦争を始めた張本人の死を」

そういつたマリーネは剣に付着した眞幻想が生きていた証をさも汚そうに払い落とす。

いつの間にか、体が動いていた。マリーネの顔を全力で殴っていた。これまでびくともしなかつたマリーネがふらついた。

「ふざけるな!!!」

竜太は初めて自分が起こっていることに気がついて、それを止めようとした。けれども自分で自分を抑えるということはできそうもなく、ただ感情の流れに身を任せ、こぶしを緩めず叫び続ける。

けれども自分が今何を叫んでいるのかもわからない。

ひよつとしたら自分は今支離滅裂なことを叫び続けているんじゃないかと、思う。

「今になって…やっと気が付いたぞ。竜太。環境破壊など私の幻想だったんだな。神の計画に狂いはなかつたのだな」
突然乾いた眞幻想の声が聞こえた。

その声は今まで聞いていた眞幻想の声ではなかつた。シャガンの支配からも、解き放たれているようだった。

「眞幻想!!!」

やっと自分を抑えられて眞幻想へと駆け寄り、しゃがみ込む。

「眞幻想!!!」

しゃがみ込んだ時に、眞幻想はゆっくり微笑んで竜太に告げた。

「マリーネもシャガンも変わらない。お前にしかできないことだから…。ガルガンティアや、桐原須藤を倒したお前にしかできないこ

とだから、俺はお前に頼むよ。終わらせてくれーから十までのすべ
てを」

こんな時だというのに竜太はその言葉を聞いてボーっとしていた。
そして徐々に湧いてくる実感。遺言が告げられるということの実感。
重く心にのしかかるということの真意。

竜太は眞幻想の刀を手に取ると、立ち上がった。

「俺は、お前たちを許さないから。俺はお前たちが何言おうとお前
たちを倒すって、仲間と約束したんだ」

その手に握られているのは炎斬刀えんざんとう覇凱一閃と眞幻想の剣、非幻想破ファンタジアブレ
壊イク。シャガンの手から取り戻した龍魂の剣と眞幻想の剣、二本の剣
の峰をすり合わせて構え、マリーネとシャガンを見る。

「約束、したんだ」

シャガンはいつの間にか構えを解いて笑っている。

「お前は…貧弱なお前は俺と、マリーネの二人を同時に相手してな
おかつ勝とうということか…。笑える…。これは笑えるぞ!!!」
シャガンは構えなおすと竜太を指さす。

「解散はなしだ。こんなに生意気なガキは手のひらで遊ばせるに限
る」

マリーネは鞘に剣を収めると仁王立ちして、話し始めた。

「三つ巴の最終戦争…というわけか。ならば、再戦と行くこうか…」

正三角形になるように並んでいた三人は同時に飛び出すと剣で切り
かかった。

そして、三人六本の剣が交わり火花を散らした。

それが最終決戦の開始の合図になった。

第七十八話 遺言（後書き）

と、こんなわけでやっと最終決戦なのですよ…。一応この後はそのほかの切り裂きジャックは出演しないようですよ。最終話まで。

とにかく、この話をうまく丸め込んで終了させられるよう最大限の努力はさせていただきますので、最後の最後までどうぞよろしく！！！！

そういえば番外編ですぐかけるとか言ってたシリーズが未完のまま止まっていることにようやく気が付いた和呼之巳夜己でした。

第七十九話 三巴

まず、竜太は後ろに引いた。剣で自分の身を守りながら後退していった。そしてそれをマリーネが逃すまいと突っ込んでくる。そこにシャガンも突っ込んできて二人が頭をぶつける。竜太は剣を地面に刺すとその剣を支えにしてマリーネとシャガンの顔を蹴り飛ばす。

「甘い!!! 例えらとするならばそう… 甘党の子供が作るホットミルクのように甘いわ!!!」

意味の分からないたとえを出してシャガンはマリーネの顔を踏み台に竜太の首を確実に狙ってくる。それをよけた竜太の後ろからマリーネが二人をまとめて殺そうと獄帝の刃を振り切る。

「シャガン!!! 俺を踏み台にしたら次はお前を確実に殺してやんよお!!! 切り裂きジャック!!! 終わりの始まりは俺だけが始められるんだ!!!」

いい加減に振る剣はシャガンと竜太の二人を確実に壁際へと追いつめた。そこは、総領がいるところだった。

そしてその総領はいつの間にか応援すらも忘れて放心したかのように立ちすくんでいた。何かを呟いている。

「伝説級の存在、マリーネと伝説の初代シャガン…。やっぱり、伝説は本当だったんだ!!!」

その時、竜太とシャガンへと振られた剣が二人が避けたことにより総領の首を横に一刀両断した。

「ああ…!?!」

一瞬何があったかも理解できぬまま下を向いた総領の首は、重力に従ってそのまま下へと、落ちる限りに下へと吸い込まれていった。切り裂きジャック十九代目総領は絶命した。

竜太は壁を蹴りマリーネの懐へと迫り、ファンタジアブレイク非幻想破壊でマリーネを斬り飛ばす。そこに竜太の命を取らんとするシャガンの斧、ビッグレジェント伝説大斧

を呼び出し振り払う。その斧を霸凱一閃で防ぐが、竜太はその重量で吹き飛ぶ。

「終われ終われ!!! 宗主に齒向かう存在などこの世界に入らん。竜太、マリーネ、ともに消えてしまえ!!!」

そう言ったシャガンの目の色は変化していた。反対の手に持ったシヤガンの本来の剣、龍魂剣。それを鋭く突きだすと、竜太の首に穴をあけようと駆けだどらす。

「楽しそうなことには僕も入れてほしんだよねえ!?!」

竜太の首に当たりそうだった剣先をけり上げシャガンの目標を自分に向けるとマリーネは翼でシャガンを飛ばす。

「炎斬刀霸凱一閃、炎上!!!」

竜太がとつさに二人の足元に攻撃を仕掛けるがシャガン、マリーネの両者が足でその炎を消し去る。

「龍魂斧!!!」
ドラゴンツル

とつさに剣と斧を無理やり同化させたシャガンが剣斧を振り回す。それが切り裂いた空気は電気を帯びて剣斧の周りに集まり、切れ味を上昇させる。

「喰らえ!!!。反乱者ども!!!。雷鳴電戈斬り!!!」

竜が咆哮するかのような騒音とともに、竜太とマリーネの元に雷が飛んでくる。

「炎上!!!!!!」

竜太は炎の壁で雷を防いだ。

「獄帝の鎧・真!!!」

マリーネは自らの鎧の真の姿を發揮し雷をかき消した。そして雷をかき消すと同時に次の行動に移った。二本の剣を地面に刺すと右手と左手に黒い塊をだし、投げつける。

「冥界の誘い!!!」
ミョウカイ

あたり一面、黒で包まれ何も聞こえなくなった。

第七十九話 三巴（後書き）

何か言えと言われたら、こういいます。

こんなことしかできません、と。

何か書けと言われたら、こういいます。

こんなものしか書けません、と。

何かしろと言われたら、こういいます。

こんなことでよければ、と。

何言ってるかもわからないですが、こんな他愛もないもので時間が潰してもらえたら、幸いです。

次回第八十話 未定

第八十話 再会（前書き）

前回までの比較的簡単なあらすじ

竜太はとても強いマリィネとの最後の戦いをしていました。

第八十話 再会

マリーネが放った冥界の誘いは、外にいた切り裂きジャックたちの元にも振動となって響いていた。

そしてそのことにいち早く気が付いた八迫は老体にムチ打って立ち上がると、竜太がいる方向へと目を向けた。それを目にした理緒は同じ方向へと目を向ける。口の中へと魚肉を押し込んだ後で。その異常な様子に気が付いた紋太は二人の目線を追う。そしてその方向にある人に気づく。亮祐も同じように目だけを向ける。

切り裂きジャック四人は同じことを思った。「勝て」と。そしてその声は…。

暗闇に包まれた中、竜太がかすかに明けた瞳で見えたものはシャガンだった。正確に言うならば、シャガンだったものだった。

口の端から血を流し、左右の目の色が変わったままのシャガンだった。腹部からは獄帝の刃、その漆黒の刃がシャガンの血で赤くなっている刃が見えていた。

やがて、煙は晴れて竜太はシャガンの後ろに立つマリーネの姿を見た。

「まずは切り裂きジャック、一人目…」

スツと刃を抜くと、その刃を支えにようやく立っていたシャガンは地面に倒れ込む。その衝撃でシャガンは咳込み、血を吐く。その血は、竜太のズボンに飛んだ。

「次にこうなるのは、お前の番だよ…。七の切り裂きジャック平田竜太」

獄帝の刃と獄帝の御剣を手にしたマリーネは確実に竜太を殺そうと身構えていた。

シャガンの血は今なおズボンに染込んで、足が濡れていくのがわか

る。

しかしそれを振り払い構えを取ろうとする竜太の足を何かがつかむ。「か…勝ちたい…か？」

シャガンの手だった。すでに冷たくなりかけているシャガンの手だった。

声にこたえずにその顔を見ているとシャガンはもう一度呟く。今度は顔を竜太のほうへと起き上がらせながら。

「勝ちたい…か!？」

再び投げられた問いに竜太は、その声に応えた。

シャガンは不気味にやけるとその姿を消した。そしてかすかに聞こえる声で呟いて消えた。

「このツケは払ってもらうぞ…」

「死ね!!! 平田竜太!!!」

叫び飛び掛かる竜太の前に見覚えのある龍が姿を現していた。

それは豪火龍だった。

突然現れた豪火龍を前に竜太はただ立ち尽くし、マリーネはその剣を止め、叫びだす。

「あ…ふう…あふ…シャガン…!!! シャガンめえ! よくも…俺の…俺のを!!!」

何も言えずにただ立ち尽くす竜太に対し、豪火龍は口を開いた。

「お久しぶりです。私の贈り物は役に立ちましたか？」

戦闘中だということも忘れ、竜太は豪火龍を抱きしめていた。豪火龍は黙ってそれに応じる。

「会いたかった…。ありがとって、言いたかった…」

豪火龍はかすかに頷くと竜太の手に在る自分が贈った剣に触れるとその中へと入り、竜太へ語りかける。

「ありがとございます、主。けれども今は、冥浄王を殲滅すること…が先決です」

豪火龍の言葉で現実を見た竜太は服の袖で涙を拭くとそれまでより

「次の一撃で、最大の一撃でお前を斬る。お前は、どうする?」

邪竜魂剣を構えたマリーネは「一撃を放つ前に消し去ってやる……」
というとその刀身を頭上へと持ち上げた。

豪火龍は自らの力をすべて剣に流す込んだ。

「終わらせるぞ、マリーネ」

竜太は豪火龍の力で刀身の色を変えた霸凱一閃を握る手により一層力を込めると目の前に迫るマリーネの剣、邪竜魂剣へとその刀身を思い切りぶつけた。

キィィィン……と、金属の音が響いた。

第八十話 再会（後書き）

最近思うことは、あれですよ。あれ。

豪火竜の“りゅう”という字は“龍”なのか“竜”だったのかということですね。

あと、自分で書きなぐっていたときに書いていたマリーネさまの持ち物披露：みたいな事を全く覚えていなくてかけないということですね。

まあ、そんなこともありましたが、ようやく決着です。

次回 第八十一話 終幕

第八十一話 終幕（前書き）

これにてようやく切り裂きジャック最長編が終了いたします。
長かったです…。

第八十一話 終幕

キィィィン…と、金属の音が響いた。

響いた金属音はマリーネのものだった。

折れた剣は邪竜魂剣だった。

倒れた者はマリーネだった。

竜太の手から眞幻想の非幻想破壊ファンタジアブレイクが零れ落ちる。

「お前の言ったことは違う…。俺は竜撃手を捨て駒だとは思ったことはないよ…」

霸凱一閃を鞘にしまうと竜太は言った。そして霸凱一閃から出てきた豪火龍はマリーネが地面に倒れている姿を見ると口を開いた。

「私はあなたと交わることはもうありません。ここで、すべてが終わるのです」

「シヤカラキホロロ…」

地上殲滅部隊を全滅させた竜撃手が竜太たちのそばで呟いた。

そんな中突然笑い声が聞こえた。マリーネの声だった。

「俺が死んでも何も変わらない。悪意持つ者は消えることもないし、それを止める貴様らも消えることもない。完全には…」

どろどろと液体のように溶け始め消えていくマリーネを竜太と豪火龍は見ていた。

「決して変わらない。石版や、私が消えたところでお前らを潰す者たちはまだまだいる。それにお前たちは立ち向かえなくなる日が来る。今日以上の挫折を何度も何度も味わうことになるぞ」

ため息一つついたマリーネは竜太のほうを見て叫んだ。

「死ね!!! 切り裂きジャック平田竜太!!!!」

そして、冥浄王マリーネは消えた。と同時に地獄道具も持ち主の死によって粒子分解され消えていった。

「終わりましたねえ…」

その場に座り込んだ竜太はため息とともにつぶやいた。その傍らにいた豪火龍はかすかに聞こえる程度の声で「お世話おかけしました」とつぶやいたのを聞き、地面に寝転がると答えた。

「別に、戻ってきてくれたならいいよ……。それに終わったんだし」のほほんとした竜太の答えに豪火龍は反論した。

「いいえ。まだ終わってません。マリーネが捜していたという門……獄門を破壊します」

そこは漆黒の闇というほどに何も見えなかった。

しかし、その中央部にそれは存在していた。

「これが……。獄門」

漆黒の闇の中にただ一つ存在するそれは門というより穴というほうが相応しいようなそんな場所だった。獄門は凡てを吸いこもうとしていた。現にその門に吸い込まれそうになっている。

「これに、刺せばいいんだな……!? 絶対に吸い込まれないんだな!？」

念を押した竜太の発言に太鼓判を押すと豪火龍は再び覇凱一閃の中にもぐりこんだ。

「覇凱一閃炎斬一閃!!!」

そしてもう片方の手に持った非幻想破壊で獄門を切り裂いた。ファンタジアブレイク

竜太が剣を振った一瞬の間、覇凱一閃から吹き出す炎でその場が光で包まれた。その場にあつたのは全て人のものであると思われる頭蓋骨で、そのどれもが風化している。

「シャガンは、悪趣味だなあおい!!!」

涙目になった竜太は思い切り獄門に向かって剣を振った。

突然の事だった。

「ただいまあゝ」と満身創痍で皆の元へと立ち寄った竜太を待つていたのは本当に突然の事だった。

「遅え！！！」と、叫んだり八迫の拳だった。

「長い！！！」と、発狂した理緒の鉄拳だった。

「遅いよお！？」と、呟く紋太の視線だった。

「…。すかぴいゝ」と、寝息を立てる亮祐だった。

突然の事で竜太は対処しきれず、そのすべてをまともに受けてしまった。ふらつく自分の足に絡まれて後ろに倒れそうになる竜太を支えたのは豪火龍だった。

『豪火龍！！！！』

亮祐を除く全員がその場で叫んでいた。

「お…お久しぶりです」

その声に一瞬驚いていた豪火龍も久々の挨拶を交わした。挨拶をするためには常識として前に出なくてはならず、結果として竜太が後ろに回ってしまった。竜太は突然の支えをなくし、その場で倒れる。一瞬にして竜太の後頭部から多量の血が流れ出す。

「さてと、終わったことだし帰ろうぜ。そこの睡眠魔王と出血馬鹿を連れてさ」

八迫が指差した先にはマリーネが壊した時空の壁が徐々に閉じていくところだった。

八迫率いる切り裂きジャックはその中へと飛び込んだ。

その場に残されたのは、ファンタジアブレイク眞幻想とその愛剣の非幻想破壊。ファンタジアブレイクその非幻想破壊もやがて風と共に消えていった。

「これが奴らの仕業ですか…。ひどいありさまだ。本当にひどい…」
黒い帽子を深くかぶり喪服をまとった少年が総本山を見て呟き、腰につけていた通信機を取り出す。

「奴らの被害は尋常ではありません。このまま放っておけば総てが

消えてしまいます。迅速な対応を」

少年が通信機に向かって話し始める。やがてその通信機からは返事が返ってくる。

<そこに切り裂きジャックの総領がいるはずだ。生きているか？>
しばらくその場をさまよった少年は現状を見て絶句する。

「生きていません。惨いです。首が、掻き切られて飛んでいます。人間ができることじゃない!!!」

いつの間にか涙を流していた少年は叫びながら伝えた。

<これで決定した。俺たちはすべての戦力を集め、奴らを全滅させる。>

通信機から聞こえてきた声は冷酷に目標の名前を告げた。

<残酷無比の殺戮集団切り裂きジャックの完全殺害を実行する計画を始動する。お前も戻ってこい、祀まつり>

祀と呼ばれた少年は帽子を取り、袖で涙を拭くと涙声のまま返答した。

「了解しました」

<それと…>

通信機の向こうにいる男は一つの指令を祀と呼ばれた金髪碧眼の少年に渡した。

「わかりました。全ての戦力を集め、駆逐のための準備…ですね」
少年は一人歩き出した。

第八十一話 終幕（後書き）

ついに約一年かかっていた眞石版編が終了いたしました！！！！最後まで読んでくださりどうもありがとうございました。

とか言ってもまだまだ終わらないんですけれども。まあ次回からはなんか考えてやっていきますよ。とりあえず長い話は疲れたので少し短いのを挟んでからになりますけれども。

次回 第八十二話 そして祀は行動を始めた。【仮】

第八十二話　そして祀は行動を始めた。（前書き）

次のお話が決まらないのでとりあえず序章っぽいのを上げてみます。

第八十二話　そして祀は行動を始めた。

太陽が傾きかけてきたところに帰ってきた祀を迎えたのは祀と同じような帽子にロンゲコートを羽織った男だった。

「お帰り。？垂翅祀。ちたばねまつりそれで、僕に報告書はまだ届いていないよ！？」

祀は喪服の裏のポケットから紙の束を出した。それはどう見てもポケットよりも大きいものだった。

「ふふふ。僕は好きだよ。君のような賢い仔はね。いいよ、もう遊んでくるといい。オトモダチが待っているよ」

祀は帽子を頭から外し頭を下げると所長室を後にした。

祀が向かった先には、少年少女が四人いた。

「お、祀帰ってきたのか！？じゃあさ、久しぶりに一杯付き合えよ」
メッシュキャップをかぶりちゃらちゃらしたズボンと大きめのシャツとパーカーを身に着けた少年は手に持った空のガラスのコップを振ると祀を誘った。

「いいよ、俺は。疲れたからちょっと休む。夜んなったら起こしてよまた行くからさ。佚榎いちが」

佚榎と呼ばれた少年は口をとがらせながら祀の背中を送った。

祀の背中をコップに注いだ炭酸とともに見送っていると視界に一人の少女が飛び出してきた。

「ねえ佚榎？今日の指令、一緒についてきてくれるんでしょ！？私一人で地獄偵察なんてそんなの怖いもの」

キャハハッと笑ったおさげのワンピースを着た少女はその場でくる回る始めた。

その回転を足で止めたスーツ姿の少女はつぶやいた。

「うぜえよ、凱史。かいじてめえの声と醜い顔見ると吐き気がするぜ？」
凱史と呼ばれた少女は回転を止められ悪口を言われ、顔を真っ赤に

し憤慨した。

「私にそんな口きいて、また死にたいわけ!? 砺礎^{レウス}」

凱史は肩に下げていた傘を手に取るとその傘を開いた。そして砺礎と呼ばれた少女はネクタイを緩め、靴の踵を直す。

「あたしがいつてめえに殺されたんだよ。戯言もいい加減にしねけとなあ凱史」

一触即発の雰囲気壊したのは佚榎だった。

「おい、お前らやめろよ。そんなことしてると鐵^{くろがね}が起きちまうから! ! ! !」

佚榎の言葉を聞き、二人は背筋を凍らせ、鐵の方へと目を向ける。

その先にはソファに座りながら寝ている制服の男がいた。

「わ…わかつたわよ。それで、私についてきてくれるよね!? 佚榎」
コップの中身を空にすると佚榎は答えた。

「俺は祀に着いてくよ。最近あいつ働きまくりだから心配でな。そういうわけだからまた今度な。凱史」

今度は凱史が口をとがらせる番だった。そしてそれを見る砺礎は笑いをこらえていた。

「というか、凱史と砺礎。お前ら姉妹なんだから少しは仲良くしろよ…」

その台詞に凱史と砺礎は声をそろえて反論する。

『姉妹は関係ない! ! !』

その突然の叫び声で鐵が起きる。

「うるさいなあ…。もう。そういう所が合うなんてやっぱり君たち姉妹だよなあ…。」

空はやがて、黒に染まる。

祀の部屋の扉がノックとともに開かれる。

「祀? 夜になったぞ、起きろ!? 祀くうくん!? おおい、祀い! ? お前ほんとに大丈夫か? おおーい」

布団からゆつくりと起き上がり、頷く祀。ちなみに先ほどの黒い帽子ではなく、ナイトキャップをかぶって寝ていた。

「おお……。夜か……。ありがとな、佚榎」

佚榎は帽子を取り替えて部屋を出ていこうとする祀の手をつかんだ。

「今日の指令、俺もついてくよ。疲れてんだろ!？」

祀は佚榎の突然の提案に少し悩んでから頷いた。

「で、で?今日はどこ行くんだよ、祀」

祀はまた喪服の裏のポケットに手を入れると目的のものを取り出す。

「今日は、切り裂きジャック総本山の再調査行く予定なんだよ。代わりに移動頼めるかな?」

ドンツと自分の胸を叩くと胸を張る佚榎に思わず祀は笑ってしまった。

「じゃあ、行くぜ、祀」

祀は頷くと移動を始めた。

気が付くとそこはすでに総本山だった。

第八十二話　そして祀は行動を始めた。（後書き）

次回、祀と佚榎の前に何者かが姿を現すのかもしれない。

ほんとのこと言うとおんまり決まってなかったりするのです。

次に何をやるのかが。

順番が決まってないのであたふたあたふた。

第八十三話　しかし祀たちの前に立ちふさがるのは…。

第八十三話　しかし祀たちの前に立ちふさがるのは…。

ぐらり…。と地面が揺れたような感覚がした。それだけで気が付けばもうすでに其処は切り裂きジャック総本山だった。

「ほら、祀ついたぜえ…って大丈夫か!？」

ついたとたんに祀は地面に座り込み、肩で息をしていた。

「だい…じよぶ」

佚榎はしばらくうなつた後手を叩いてから祀に告げた。

「ここは俺が行くからさ、お前はここら辺で休んでるよ。すぐ戻ってくるからさ。帰ったら一緒に一杯やるうな」

そう言い残し去っていく佚榎を見て祀はふと思った。これはいわゆる死亡フラグとかいうやつではないのかと。

しかしこの場から動けない今、ただ佚榎の帰りを待つばかりだった。そうこうしているうちにだんだん睡魔が襲ってくる。最近はその指令で働き続きた。休日はここ最近とっていない。働いてばかりで睡眠もとっていないかったからだなあと、祀は思いながら意識を手放した。

「最近祀の奴休んでないからなあ…。今度俺が代わりに祀の仕事受けてやるうつと」

のんきに走って探索していると突然視界を何かが横ぎった。思わず息をのんだかすかな音で、それはこちらを振り返った。

暗闇の中でその目が光る。その眼は時には赤に時には蒼に光り輝いていた。その変化し続ける目がじっとこちらを見てくる。そして、その眼は少しずつ確実に歩み寄ってくる。頭に響くのは甲高い笑い声。ケラケラと笑い続ける声。

突如落としてその声はやみ、佚榎に語りかけてきた。

「檜葉やば呀佚榎。君は知ってるう？」

男は佚榎の周りをまわり続け、ひたすら話し続ける。

「僕はねえ…。人を探してるんだよ…。君知らなあああい？」
右手の袖からゆっくりと斧を出すと男は俵の首に斧をつける。
斧の金属の冷たさと流れる汗の冷たさが今の現状を俵に伝えた。
一瞬の無音ののちにその男はキヤハキヤハと笑い言葉を紡いだ。
「切り裂きジャック…。平田竜太を知らない？」
俵はゆっくりと首にかかった斧を外すと「知りません。お引き取り願います」と誠意をもって答えたつもりだった。

祀が目をあけると空の月はもうかなり移動してしまっていた。何時間寝ていたのか祀にもわからなかった。あいにく今日は腕時計というものを身に着けてはこなかった。ポケットにもしまっていないかった。

ようやく体が動くようになった祀は立ち上がると俵が向かった方向へと小走りで急いだ。

「俵あ？どこ行ったんだよー！？俵！？」

名前を呼んでも声すら聞こえなかった。祀は呼びかけながらもう少し歩いてみることにした。

やがて、声が聞こえた。

「祀！！来るな！！！」

建物の角を曲がるうとしたときに角の向こうから声が聞こえた。俵の声だった。

「俵！？」

思わず角を曲がり俵の姿を探すとそこにはズボンのチエーンを振り回悪戦苦闘する俵の姿だった。思わずポケットから銃を出すと俵を襲う男の足を一思いに打ち抜いた。

男は祀を睨むと消え去った。

「俵大丈夫！？」

男が消えた後すぐに俵に駆け寄った祀は俵の安否を確かめるとそのまま強制帰還した。

「切り裂きジャックって言った」

祀の部屋の中で、二人は男について話し合っていた。

「切り裂き…ジャック…」

これから起こそうとしていることを知らされている祀はその名に反応してしまふ。

「なあ祀、やっぱり切り裂きジャックってバラバラ殺人事件の奴なのかな…？」

祀は唇を噛むと佚榎の疑問にそれとなく答えた。

「それよりもっと…もっとひどい奴らだ」

祀は一人切り裂きジャックたちが起こしたことを思い出し、再び唇をかんだ。

第八十三話　しかし祀たちの前に立ちふさがるのは…。(後書き)

まあ、こんな感じで子供に少し焦点を当ててこの章は終わりだと思われます!!!

次回　祀と佚榎が総本山を調べていた一方で凱史はマリーネ亡き地獄の偵察をしていた。

第八十四話　凱史は地獄で新たなものを見る。

第八十四話 凱史は地獄で新たなものを見る。(前書き)

今思うと昔は誤字脱字が多かったですね…。

しかし、これからもきつとたぶん絶対必ずやらかすと思いますがどうかよろしくお願いしますね。

第八十四話 凱史は地獄で新たなものを見る。

小さい日傘をクルリクルリとまわしながら歩いていた凱史は、ある部屋の前に立つて深呼吸した。

そして日傘をたたんで肩にかけてからゆっくりと

「失礼しまあゝす」

そういつて最近劣化が進みきしむ扉を開けた部屋にいたのは通称所長と呼ばれる男だった。

煙草を吸い続け部屋中が煙でかすんで見える中、その部屋にいる人物所長だけがはつきりと見えていた。

「凱史君か……。ところで、祀には指令を言い渡してあるからいないのは当然のこととしよう。しかし、佚榎君がいないというのはどういふことなんだろうね。凱史君。君は抑止力を持つ者だと、私は思っていたんだよ」

革靴が床を叩く音と共に所長は手から火をだし、たばこに着火し煙を吐き出す。

「まあいいや。それより君にしてほしいことはね？地獄に堕ちてほしいんだよ」

いつの間にか凱史の肩に手を置いた所長は無言を言わずに凱史の視線にかがみ、凱史の目を見つめた。

「堕ちてくれるね」

拒否権も何もない凱史はその場で頷くことしかできなかった。

所長に逆らうとどうなるかを知っているが故の反応だった。

「やっぱり君はいい仔だねえ……。僕はあうれしいよ。祀君と佚榎君は仲良しだからね。今回のことは大目に見るとするから、君は今すぐ、堕ちてきてほしい。オトモダチ連れて行ってもいいよ」

そついうと所長は凱史に退室を命じた。

出ていこうとする凱史を呼び止め、所長は一言アドバイスをした。

「気を付けてね。準備ができ次第の出発でいいから」

それを背中であいた凱史は再び劣化できしむ扉を開き、煙くさい部屋から出た。

凱史はようやく所長室から離れた自分の部屋で大きなため息をついた。

「まったく…。私は佚榎と一緒にきたかったのに…。祀なんて嫌いだわ！…！すぐに佚榎が世話焼こうとして私よりも佚榎と仲良しなんだから…」

頬を膨らませ一人部屋で起こっていると凱史のいけない方の脳みそがフル回転し始めた。それも高速回転で。今なら凱史のいけない脳みそのほうは音速を超えているかもしれない。さらに同時に凱史は頬を赤らめる。

「ま…まさか…。佚榎と祀って…デキてる!？」

とつてもいけない発見をしてしまったと一人勘違いする凱史は部屋で奇声を上げた。

それこそ砺礎が壁を蹴り飛ばし「ウルセエ」と怒鳴るまで奇声は続いた。

低く唸る音で支配されているようだった。

一見すると隙間から風が入ってくるようなそんな音だが、この場所には風が流れるようなことはない。

凱史は下で唇をなめた。

「ほんと、ゾクゾクしちゃう。こんな場所に乙女一人で行かせる魂胆が分からないわよ」

凱史がぼやくと後ろから強烈なけりが飛んできた。

「だから私を呼んだのだろう!？一人では夜怖くてトイレにも行けないか弱い妹様だからな。貴様は」

凱史は後ろから聞こえた声の主、砺礎の腰あたりまで伸びた青い髪を引っ張ると人差し指を突き付け言い返した。

「あんたが勝手についてきたんでしょうが。わ…私はついてきてな

んで全く頼んでないっていうのに、あん、あんたが勝手についてきたの！！！」

顎がかくかくとなり、何度も言いたいことを間違える妹を見た砺礎は凱史の頭をわしわしとした。凱史の紫色の髪がぐしゃぐしゃになる。

「何すんのよ！！！」

つい叫んだ凱史が顔を上げるとそこに砺礎の姿はなく、すでに砺礎は門の前に立っていた。

「どうした、行かんのか！？凱史」

すぐ砺礎の背後に着いた凱史は看板を見た。

“この門、生人はくぐるべからず。くぐったが最後、生きては帰れない。くぐるな死者の門を。何人たりとも……。”

「ばかばかしい。ここにもう支配者はいないんだ」

門を蹴り開けると砺礎は一人歩き出した。

その後ろを小動物のように凱史が傘を構えたままついていく。

長い長い回廊を進んでいく途中で凱史と砺礎は地獄が崩壊し始めているのに気が付いていた。

「ここはもう、終わりだな。抑えていた者がいなくなって勝手に始めてる。地上つえに来るのも時間の問題だな」

砺礎は冷静な分析をしつつ回廊を進むと開けた部屋に出た。遅れてやってきた凱史はその部屋にいたものを見て息をのむ。

腐り、骨が見えている死体。もう生きてはいないはずのそれらは息こそしていないがはつきりとした頭脳を持ち動いていた。

その頭脳を持つ死体は一斉に侵入者をとらえる。垂れ下がった目や、本来目があるべきはずの空洞などの様々な目が二人の侵入者を見ていた。

にやりと笑うと砺礎はスーツの上を脱ぎ捨てると戦闘態勢に入った。

「あらあら、やる気ですわね。」

こんな死体なんかでビビるあた……私ではないわよ」

凱史も傘を開くと何かを呟き服をワンピースからゴスロリに変え傘の形状を鋭い刃物に変化させる。

第八十四話 凱史は地獄で新たなものを見る。(後書き)

崩壊した地獄を見る砺礎と凱史姉妹。そこで見たものは今にも地上へと攻め込もうとする異形の化け物たち。

そして部屋で襲ってくるのは死体たち。はたして無事に地獄を見ることができるのだろうか。

次回 砺礎はネクタイを緩め、戦闘を楽しんだ。

第八十五話 彼らは全て裏切られ、絶望の淵を叩きつけられた。

(前書き)

なんだか過去の話とかいいなあと思ったので。

第八十五話 彼らは全て裏切られ、絶望の淵を叩きつけられた。

気が付くと、町は廃墟に代わっていた。

ついさつきまで遊んでいた町が、消えていた。

友達と夏休みすべてをかけて築いてきた自分たちだけの秘密基地も、友達とよく遊んだ場公園もよくいくお店も大好きなファーストフード店も何もかもが残らずに石の塊に代わっていた。

町一番の名物であった塔も瓦礫の山となっていて、その瓦礫に立つのは一人の男。

この街を消し去った元凶の男。

その男は太陽を背中に右手を突き出した。

男がその瓦礫から見下ろすのは自分が壊した町の住民たち。

やがて男はゆつくりと、しかし確実に聞こえる声で語りだした。

「お前たちみたいなた下等な生物がこれ以上俺に逆らうな！！俺は全てを超える存在。神をも殺す力を得た人間を超越した存在！！足掻くなひれ伏せ！！泣いて許しをこえ…。この無残な姿になりたくなければあ！！！」

男は廃墟のすべてを手で表し、そしてその廃墟の下にいた男から見る下等な生物たちの末路を見せた。

「諦める…。この場所は今日から俺の場所。お前たちには消えてもらう！！！」

そして男は両手から何かを放った。

気が付いたらその場所には何も残っていなかった。廃墟も何も残っておらず、目の前に男が立っていた。

「助けてやるうか！？お前たちを…」

ふと周りを見渡すと、自分と自分の家族、そして同じような境遇の家族が残されていた。

男の声に自分の母は縋り付いた。

「助けてください!!!何でもしますから、助けてください!!!」
それを見た自分を含む全員が親が男に手を摺合せたりと様々な命乞いをする。

自分たちの親が。

男の手によつて今まで見たことのない親の姿を見せつけられる。そして男は自分の足にしがみつき許しを請う生物の姿を見て笑い出した。

「そうか…助けてほしいのか…。助けてやるよ。未来永劫あんたらをな…。ただ、条件がある」

その言葉で全員が同じ回答をした。

「何でもいいです。助けてください。生かせてください」

男は一人の母親の顔を持ち上げるとその条件を呟いた。

周りは殺されてしまふと思息をのみ、条件を聞かされた一人の母親はその条件を聞き、自らの子供の顔を見てさらに涙を流す。

「俺はこいつに条件を言った。今からこいつが条件を話してくれるよおっく聞け」

男はその母親の顔を指さし高らかに笑った。

母親は泣いて、声を上げて泣いて、条件を叫んだ。

その条件は自然と子供たちにも聞こえた。

その場に生かされていた大人のすべてが自分たちの子供を見る。

再び男に顔を映すと全員が抗議した。しかしその講義を一言で黙らせる。

「黙れ」

息をのむ大人たちに男はさらに続ける。

「お前たちが条件をのめば、助かれるんだぜ!?こんな優しい条件はないだろう?周りを見てみる。お前たちが暮らしてきた町はここにはもうないんだ。あるのはありきたりな絶望と恐怖それと苦しみ悲しみ…。負の連鎖だよ!!!」

涙を流し続ける大人たちに男は叫びあげる。

「痛みしか、ここにはねえ！！！！」

なおもまだしがみつくと大人を蹴散らし、男は子供に、自分たちに近づいてくる。

自分は動けなかった。中には逃げ出そうと道だった場所を走って逃げようとする者や、泣き続ける者にその場でしゃがみこみ失禁する者や、奇声をあげて自らを痛めつける者、何が起こっているかわからずにその場で立ち尽くす者がいた。けれど自分は動けなかった。大人たちは男の背中を目で追い、子供たちを見てさらに泣き出す。自分はそれとなく、状況を理解していた。これからどうなるかもほんやりと。

男は一瞬にして消えると、再び一瞬で戻ってきていた。

男の手には先ほど逃げた子供が首を絞められていた。

「逃げるんじゃないよ……。逃げたらこうなるから」
手足をバタバタと動かし暴れる子供を地面に落とすと男は再び笑った。

そして子供に背を向けると大人たちに話し始めた。

「どうする？そろそろ決まったよね。君たちは条件を呑むのかな？」
男の声で一人の青年が立ちあがる。

「俺の…俺の弟をお前みたいなやつに渡せるか！！！」

一見勇敢そうな青年は男の前まで駆け寄ると隠し持った刃物で男をさした。

しかし男は刺されることなく、青年が持つ刃物の方向を一瞬にして変えていた。

刺したと思った青年は自らの刃で貫かれて地面に倒れた。
何も無い、茶色の地面が赤く染まっていた。

自分たち子どもは今そこで何が起きたかを見てしまった。
泣き叫ぶ。狂ったようにひたすら叫び、泣き。

「条件、呑んでくれるよね、君たちはこんな思い、したくないでしょ？」

男は青年を見もせず蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた青年は子供たちの前まで飛ばされた。

青年は自分の弟を見つけると最後につぶやいた。

「ごめんなあ…。守って、あげられなくて…。なにも、できなく
…って…」

ふうつ吐息を吐き出した青年は動かなくなった。

それをみとどけた一人の大人が立ち上がった。

「条件を呑めば、この場で息をしている全員が助かるんだな!？」

男は大人のほうへ歩み寄ると首を縦に振った。

「みんな、みんな助かるよ。誰一人として痛い思いはしないんだよ」

その言葉を聞いた大人は大きいため息をすると再び口を開いた。

「俺…は、条件…呑む」

男は今まで見せた以上の笑顔を見せると男の子供を探し当て、抱き
かかえた。

子供は自分が親に捨てられたと思い泣き叫び、親を呼ぶ。

「君たち一家はともいい子だね。僕と君たち一家はオトモダチだ
よ」

男がそういうと次々にほかの親たちも条件を呑んでいく。

自分の親も、その中で条件を呑むのを見た。

誰も自分たち子どもの事を考えてくれずに自分が助かる道を選んで
くれなかった。

捨てられた。

今まで大好きだった親に。

捨て……られた。

自分はその場で叫んだ。叫んだら何かが変わるような気がして、叫
んで叫んで叫んで叫んだ。

けれども何一つして変わるものなどなかった。

男は親たちに一言告げた。

「お別れはしといたほうがいいよ」

親たちは駆け寄ってきたが、自分たち子どもは誰一人として親を受け付けなかった。

自ら逃げ、触れられることを拒んだ。

さっきの男の人は命を懸けて助けてくれたのに、何で助けてくれないの…。
そして…。

「うあ…・うあああああ!!」

発狂しながら布団から飛び上がる。

ナイトキャップはすではずれ、汗で髪はべったりと張り付いていた。

肩で息をしながらパジャマの袖で目を抑える。

嗚咽を漏らしながらその場で泣き続ける。汗で濡れたベッドの上で体育座りで泣き続ける。

しばらく泣き続けた後、ようやく立ち上がると汗がまとわりつく衣服を全て脱ぎ捨て、自室の風呂に逃げ込む。

シャワーを最大まで流し、汗とともに今なお流れ続ける涙も全て流す。

シャワーから上がると似たような服が入ってる箆笥をあけ、服を着る。

自分の部屋から出ると集会所に備え付けられている自動販売機から飲み物を出すと、それを部屋に持ち込みまだ湿っているベッドに腰掛けキャップを外し一気に飲み干す。

やがて扉がやさしくたたかれ、自分と呼ぶ声がした。

軽く返事をするとうちを出て、彼とともに自分は今日の任務に出た。願わくば、今日はあんな夢は見ないことを望むばかりだ。

自分に親はいない。
もういない。

代わりに友達がいる。

第八十五話 彼らは全て裏切られ、絶望の淵を叩きつけられた。

(後書き)

なんだか少し構成が出来てきたような気がするので頭に浮かんだことを書いてみました。

そんな感じです。

これからもボチボチ書いていこうと思いますよー。

ちなみに人物名を書きませんでした。まあわかるとは思います。というか、わかりましたよね!?

次回 第八十六話 第八十五話 砺礎はネクタイを緩め、戦闘を楽しんだ。

第八十六話 砥礪はその場で立ちすくみ、鐵は何もなく。(前書き)

前回がいきなりの乱入文章だったので。

ちなみに今回で序章は終わるかと思えます。

次に書くときに気が変わっていないければ。

第八十六話 砺礎はその場で立ちすくみ、鐵は何もなく。

まず、とび膝蹴りで一番近くにいた動く死体の腰の骨を砕く。続いて右から襲ってくる動く死体には左で驚く動く死体の右肩を踏み台に顔を壊す。

更には自分の体重を手で支え回転し、周りの動く死体も巻き込んで絶命させる。

そこでようやく砺礎は一息ついた。

「お前はやんねえの！？凱史」

鼻で笑いながら自分に向けられたその言葉に一瞬にして頭に血が上った凱史はいつの間にか手荷物傘の骨が折れるという心配をせずに首を折っていった。

一瞬の間に二人の周りには動いていた死体の山が出来上がっていた。そしてその場に立つのは二人の少女。一人はスーツを着崩したっている砺礎。もう一人はゴスロリ服の凱史だった。

「それで、君たちは地獄で何を見てきたんだい」

所長はブランデーを飲み干してから二人に尋ねた。所長の部屋は相変わらず煙くさくて濁っている。

「報告書を見る限りではね、地獄の王マリーネは死んでいるということが確認されたという事はわかった。しかし、マリーネが築きあげたものはどうしたんだい。マリーネの城は！？兵器は！？」

所長は報告書を机に置くと引き出しから何かを取り出した。

「君たち、いいの？君たちがちゃんと働かないと君たちの大切な中身、全部壊れちゃうよ？全部ぜええええんぶ消えてなくなっちゃうよ」

その何かが思い出させるのは消えてしまった町、親…すべて。

凱史はその場でしゃがみこみ頭をかきむしる。

砺礎はその場でただ立ち尽くす。その眼は何も見っていない。

「でも…君たちががんばってるから今回はなくしてあげるよ。代わりに今度、今度こんな能無しの報告書を贈り物に帰ってきたら君たちのこれ、壊しちゃうかもしれないなあ」

所長は手に持った何かを左右に軽く振る。

砺礎は自然とつぶやいていた。

「次は、頑張ります」

いつの間にかその眼からは涙が流れていた。しかし、それに気が付けるほどこの場の空気は優しくはなかった。

恐怖による支配だった。

絶望感と虚無を抱えた二人は何も考えず、考えられずに集会所の椅子で倒れ込んだ。

ソファで寝ていた鐵が立ち上がったも、二人にはそれすらも気にならなかった。

茶色の椅子が、その重みでかすかに音を立てた。

それと同時に鐵は所長の部屋へと歩きだしていた。

鐵が開けるとなぜか所長の扉はきしんだ音も立てずにスツと開く。

そして鐵は所長室に入ると備え付けのソファに再び腰かける。

所長の部屋で唯一ソファに座れるのは鐵だけだった。

「鐵君。君たちのオトモダチの女の子は実に役に立たないねえ。代わりに祀君はとっつっても役に立ってくれるよ。もちろん、君や、佚榎君も大活躍。うちから出た落ちこぼれの剣士君とは違うよ。勝手に出て行って勝手に弱小組織を作り上げて勝手に操られて死んで…。その上切り裂きジャックに加担したんだ。死んで当然だよねえ」
表情一つ変えることなくソファで足を組んだままの鐵は所長の言葉がだれを誹謗中傷しているのかということが分かった。
この組織で全員がなついていた兄役のような人だった。
いつみてもきれいだと思うほどの剣術を持っていた人だった。

鐵は部屋に入つて初めて口を開く。

「私たちの兄…眞幻想の悪口はやめてください」

静かな怒りが含まれていることにも気が付かず所長は言葉を続ける。
「ああ…君たち孤児には眞幻想さんがとっても優しい唯一の肉親的役割だった人だもんねえ…。でもほら、そんな彼でも勝手に死んじやったじゃない。言うこと聞かず飛びだしてさ」

限界だった。鐵にはその言葉の羅列を聞いていること、自分たちの兄を侮辱しているその男の吐く息の音すら限界だった。いつの間にか勝手に手が動いていた。

ゴトツツという音を立てて所長の部屋の来客用の机が二つに分かれて地面に転がっていた。

「やめてください」

鐵はもう一度同じように怒りを込めて言い放った。

所長は自らのコートの襟を正すと自分の椅子に座り引き出しから一つの封筒を出す。

そしてその封筒を鐵へと投げつける。投げられた封筒は殺意とともに鐵の膝へと落下する。

「今日は、これですか…」

すでに腕を組んで鐵の方を見ないままに所長はぶつきらばつに言う。

「とつとと行け。俺はこの机を直さなければならんなのでな」

言葉が終わる前に立ちあがった鐵は何も言わず部屋から出ていく。

一人残された所長は扉を睨みつける。

「あのくそ餓鬼どもが…。女はまだ家族の身を案じてるから扱いやすいが…。男どもときたら薄情で暴力的で…。憎たらしいことこの上ないな…。まああいつらも所詮捨て駒だからな。いいように使つて体壊して苦しんで死んでもらうしな…」

くつくつく…。という所長の声が部屋に響いていた。

そして鐵は何もなく無事にその指令をこなし、所長に報告書の束を投げつけた。

「あのさ…祀!？」

カポポンっとな音が鳴り響く男の大浴場で佚榎は祀に今まで聞いたかったことを尋ねた。

「お前何でそんなにあいつの言いなりになって働いてんの？」

祀は桶にお湯を入れるとそれで自らの頭に着いた泡を流してから答える。

「単に、あいつの言いなりになつとけば信頼が得られる。ここから助かる方法も見つけられるかなあって」

ザバアつと音を立てて祀は風呂に入る。

続いて体を洗い終えた佚榎も隣に入る。

「じゃあ何で佚榎はそんなに祀のこと気にかけるんだい」

珍しく起きていた鐵を誘うと三人は大浴場で親睦を深めようということになった。

「別に。友達が困つてたら誰でも心配するだろ!? 単に祀が一番心配させる奴だからだよ。働いてばっかだし。それに俺は鐵の事も心配だぞ!? 毎日あんなに寝て大丈夫なのかなあ…。とか、結構心配してんだぞ!! 俺はー」

ザバアつきよいくよく立ち上がった佚榎は拳を振り上げて男二人に力説した。

「どうでもいいから早くしまえよ…」

そんな佚榎の演説をしり目にちょうど目の高さに来ていたものを見て祀はつぶやく。

鐵もそれを見てから思わず言ってしまった。

「佚榎つてさ、でりかしいがないよね」

そんな二人のやり取りを聞いた佚榎はいきよいくよく鼻のあたりまで潜るとぶくぶくと泡を出し始めた。

そのあまりにも子供っぽいくさを見て祀と鐵は笑った。

そんな中で佚榎は再び拳を振り上げ演説を再開した。

「俺たちはいつまでも一緒に笑ってられるようにしような!!!」

演説に熱くなつた佚榎は祀と鐵のほうを向くと再び立ち上がり、祀に見せつけるような格好になつてしまつた。

「どうでもいいからそれを早くしまえ!!!」

二回目からは容赦なく祀が佚榎の頭をつかんで大浴場の中で湯煙殺人事件を起こそうとしていた。

鐵はその二人のコントを見ていた。

「これってあれだよ、夫婦漫才!!!」

その一言で祀と佚榎はかたまり、同時に鐵を凝視した。

一瞬の沈黙があり、二人の標的は鐵へと移つた。

こうなつたらもうそこは風呂であろうが関係ない。戦場だつた。

一時間ほどの入浴が終わつた後、三人は大浴場の備え付けマツサージチエアでのぼせていた。

「お前たち、後でおぼえとけよ」

顔を真っ赤にした祀がつぶやく。

「お前こそ、ふざけるのもたいがいにしろ!!!」

佚榎がぐつたりとしながら言い終わると同時に冷たいものが投げられた。

「やっぱり温泉!! コーヒー牛乳だよねえ」

いつの間にかいなくなつていた鐵が手に三本のコーヒー牛乳を持って現れていた。

そこから、三人の話や格闘は止まることを知らなかつた。

「ありがとう…ね」

言つた瞬間に凱史は自分で言つたことの意味を知り赤面しながらお湯に口をつけ泡を出して遊び始める。

砥礫はその言葉を聞いて青い髪を結うと凱史の横に入り、その頭をくしゃくしゃになつても撫で続けた。

「だからやめなさいって言つてんじやないの!!! 私はそこまでお

子ぢやまじやないのおー!!!」

思わず叫んだ凱史を見て砺礎はにっこりとほほ笑んだ。

「そっやって生意気なほうがお前らしいよ、凱史」

そうして、姉妹の思い出話は始まった。

第八十六話 砥礎はその場で立ちすくみ、鐵は何もなく。(後書き)

いいわけではありませんが、男どもの部分が長いのは自分が見た感じがこんなだからなのです。逆に砥礎凱史姉妹のほうはわからないのです…。

まあ、仲良くなっているとところも書きたかったということから来た突発ネタでしたが。

まだこの集団が何を持って何を行うのかとかまだ決まっていなくて全く関係のない新しいお話に代わるとは思いますが、どうぞよろしくお願ひします!!!

次回 第八十七話 未定

第八十七話 所長は彼らを操りたくらみを進める。(前書き)

なんだか体の調子が悪いのですが、まあ大丈夫だろうと思いつくまで
とにして、毎回夜中に更新ですいません…。次回もきつと夜中です
よ！！！ということ、本編どうぞ。

第八十七話 所長は彼らを操りたくらみを進める。

所長は、笑った。

コポコポと音を立てて眠るその生物を見て笑った。

所長が見ている生物は眠りについていた。その体にまとうものは何もなく、ただ管が付いているだけ。その管も一本二本という量ではない。ざつと五十。その生物は何かの液体に閉じ込められたまま眠りについていた。

「いい。いいぞいいぞ…。私が生み出す世界の禁忌。新しい生命体」
所長はその生物をうっとり眺めてから近くにある制御装置にデータを送った。それは祀が、佚榎が、鐵が砥磴が凱史が集めてきたデータだった。

「君たちはどう動くんだい！？これを知って…」

所長はその生物の入っている器に寄り添いひとり呟く。

「君たちは、これを壊すのかい？壊されるのかい？一緒に壊れるのかい？どちらにしろ、僕の実験に狂いはないよ。誰もこの生物が一体などとそんな優しいことは言っていないのだから」

カチツと電気を消すと所長は自室へと戻った。

その部屋に残された世界の禁忌は器の中でビクリと肩を震わせた。管が一本自動的に外される。

祀は佚榎、鐵を自室に招いてのんびりと休みを満喫していた。

「なあー佚榎あ？」

ベットで寝転がり本を読みながら祀はそこらへんでテレビゲームをしているはずの佚榎に声をかける。

返事が返ってこないのだから目を外し部屋を見渡すと案外近くにいた。

じっと無言で見ているとやがてカチャカチャとボタンを連打しつつ

佚榎は上にいる祀を見た。

「なんだよ」

言おうか迷った祀だったが決心してすべてを佚榎に話そうと尋ねる。「お前、夢見る？」

なおも祀を見ながらのまままで佚榎は質問の意味が分ならず首をかしげ逆に尋ねた。

「夢！？夢ってあの…寝てる間に見るやつ？」

祀はほどなくして頷く。

「…。あの日、俺たちが死んだ日の事を見る？」

祀から目をそらし壁を見つめ続ける佚榎を見て祀は思わず謝った。

「ご…ごめん！！変なこと、聞いちゃって」

「見ねえな、俺は。祀は見るのか」

祀は口を開こうとしなかった。佚榎はそれを答えと取り、解決方法になれば、と思いコントローラーを置き、祀の元へと近づくと祀の目を見て伝えた。

「忘れる。あの日の事なんか全部忘れちゃえ。あいつが来て全部壊していったことなんか忘れる。あんなの、覚えてたって何一つ良いことはない」

佚榎が言い終わると同時に鐵が部屋に入ってきて続けるように促す。

「俺たちはあの時あの場所で死んだんだ。今、此処で生きてるのは俺たちじゃないんだ」

「でも、祀は忘れられないんだよね。忘れちゃいけない、と思ってるでしょ。目の前にで死んでいったお兄さんの事も忘れちゃうことになるから」

鐵の言ったことは的を得ていて、祀は本をベットに置くと体を起こしてから弱弱しく頷く。

「いい祀、君のお兄さんは、ちたばね？垂翅威燕は君にこんなことを望んでなんかいなかったと思うよ。あくまで客観的な視点からの意見だけど、従順な犬になってほしくてあいつからたった一人の弟を命を賭して守ろうとしたんじゃないと思うよ」

そつとベットの端に座った鐵は祀の顔を直視した。祀もその顔を直視する。

「別に…親は良かったんだ。あいつにどうされようが。だって、助けてくれなかつたんだよ？あいつが壊した町を見て、あいつに殺されるのが怖くて怖くて…自分が助かり、子供が奴隷のようになることを選んだんだよ！？兄ちゃんだけが、おれをたすけてくれようとしてっ！！！」

祀は目にかかるぼさぼさの金髪を振り払いながら心中をさらけ出した。

と、同時に恐ろしげな音楽が流れ出す。

一瞬で身構えた三人だったが佚榎が音の正体に気が付きに焼けて振り向く。

「負けちゃった…」

佚榎が指差した先にはゲームオーバーの文字が流れるテレビゲームがあつた。

鐵はポフツと祀の金髪に手を置くとゆっくりと告げた。

「威燕さんはもういなくなっちゃったけど、君はまだここにいるんだよ。ちゃんと生きていかなくちゃ。その為にはいやなことは忘れるのが一番！！！」

言い終わった鐵は柔らかい祀の髪の毛で何度もポフポフと遊び始めた。

子ども扱いされてるなあと若干思ってきた祀はその手を払いのけると鐵にボソツとつぶやいた。

「子ども扱い…すんな」

できる限り起こってみた祀だったが、上目使いで睨まれている鐵はただ笑い続けるだけだった。

「でねでね！！！！やっぱり、デキてると思つたのよ、私」

フリフリが付いた目障りな服だなあと思いつつ砥磴は妹凱史の言う

ことを聞いていた。

凱史の話は最近の祀に対する佚榎の態度は恋人のそれだと思つたといふ事や、でもでも最近の鐵もそこに交じつて三人でデキてるんじゃないか！…！といいうとつても幸せな脳内物語で、興味もないそれを細部まで詳しく聞かされているの砥礎は優しくするんじゃないやなかつたと心から思い始めていた。

「だから！！だから最近三人は一緒にお風呂に入つたり、夜祀の部屋に集まっていたりしてると思うの！！！」

その眼はとても輝き、うら若き乙女です！！と主張するほどに輝き、それに加える甘つたるい話を聞かされ続けて早三時間の砥礎は月が移動するさまを窓から眺めていた。

それからさらに二時間後、凱史の脳内ではなぜか幸せな家庭が三人に間に築かれていて毎日のように甘い生活が云々。

「もう、寝ていいか？」

心の底から叫びたかつた本音が口から零れ落ちると凱史の目は途端に覚めていった。

「そんなにお話つまらなかつた？」

…。三人の一日一日をすべて網羅するかのように人生設計まで作られた話を聞くのはいかに好きでも飽きるし、そもそも私はそんなに三人の事は好きでもない…。という本音が再び漏れるのを必死に抑えた砥礎は時計を指さし、

「あ…明日も早いからまた明日な！！！」

いうが勝ちの精神で言った途端に布団にもぐりこんだ砥礎はもの見事に数秒で眠りにつくことができた。

第八十七話 所長は彼らを操りたくらみを進める。(後書き)

なんだか最近は何垂翹祀君のことばかり書いていっているような気も
なくもないのですが。

ま・・・まあ金髪碧眼ですから！！！！【まるで俺が金髪碧眼好き
みたいだ…違うのに】

なんとなくですが本編は進んでおります。そして…まったく出てこ
ない切り裂きジャックの面々はいったい今何しているのでしょうか。
とりあえず今回で序章は終わりです！！！！

これからもちよこちよこ出てくるであろう祀君たちをよろしく願
いします。

次回八十八話 未題

第八十八話 君臨する鎧（前書き）

前回断言しましたとおり、無事に別のお話を始めることが出来ました。

一応舞台は空に移るわけですが、八迫さんの天才テクニクで飛行機でも作ってもらいましょうか？

どうやってそこにたどりつくか、ということが非常に問題です。

第八十八話 君臨する鎧

戻ってきて初めに見えたのは壊れている半壊本部だった。

「…。えつと、誰もこの場所直さなかつたわけ？」

きよとんとその場で立って本部を見た八迫が言った一言で、亮祐が目覚めた。

「…。俺の事馬鹿にすんなよ!!!」

バツと右手を天に突き出したまま亮祐は叫んだ。右手に持った機械のボタンを押しながら。

「親のスネ、なめんなよ!!!」

途端に空から地面からいたるところから工事の人…全員が服のどこかに中片の家紋をつけている。

全員、中片家の雇った人だった。

「ひいいい…」

どこからでもわらわらと出て来る変態のような人間を見てその場の意識ある者全員がそのゴキブリ並みの行動力に息をのんだ。

動くものに飛び掛かってこないだけましかもしれないが。

いまだ右腕を天に突き出している亮祐の元にゴキブリのような人たちが綺麗にまとまり跪く。

「それで、本日はどのように致しましょうか」

「ハツピーなオカマみたいな感じいい？」

「今回こそは、命がかかった仕掛けを!!!」

「今日空いてる！？亮ちゃんお店きてよお〜」

なんだかさまざまな人を雇いすぎて人選ミスをしていると思う八迫をしり目に彼らは匠の技で本部の修正を開始して、終わった。

「じゃあ、今夜はお店に来てねえ亮ちゃん？」

全員が元いた場所へと元来た道をたどって消えていった。

作業員がだれもいなくなつた本部前でいまだ右手を上げる亮祐の肩へ八迫は手を置いた。

「お前は夜どこで何してんだ!？」

怪しい人ばかりいた作業員の人を見た八迫はその疑問を笑顔とともに亮祐にぶつけた。

「えつと…。その…別にやましいことしてるわけじゃないんだよ。

あの人とかオカマなだけだから」

「そことお前のつながりの説明を求めらんだけど」

答えに困った亮祐は右手をやっとおろすと八迫の手を方から外し、本部に向かって駆け出した。

「待て!!!変態!!!!」

「亮祐つてああいうのが好きなのかな…」

紋太が上目使いで理緒に解説を求めた。

「え!?!え…ええつと…。男の子にはそういう時期があるんじゃないかしたら…たぶん…。きつと…」

どンドン小さくなる回答を聞いた紋太の目は一瞬曇る。

「僕はそんな大人にはなりたくないな…」

理緒はそれを聞いてうなづく。

「ああはなつちやだめよ。あんなのと、こんな人には」

あんなの、で本部へ消えていった亮祐を。こんなの、で地面で血を流して倒れている竜太の姿をさし理緒も紋太を連れて本部へと入っていった。

「絶対大人にならない!!!」

断言した紋太は本部の扉を開けて理緒を先に入れた。

「まあ、レディーファーストなのね。大丈夫、紋太は立派な大人になれるわよ。今だってこんなに立派ですものね」

嬉しそうに笑った紋太は扉を絞めて、鍵もしめた。一人忘れていたことを忘れて。

「それで、今度はどんな面白いこと始めるんですか!?!」

耳をぴんと立て、しつぽをパタパタとご機嫌そうに振るその生き物は王座に座る鎧に話しかける。

「今度は、完全に壊しちゃおうと思ってるんだよ。全部壊してから、宮殿ごとどこかに行こうじゃないか。例えば・・・そう。下界とかにね。楽しそうだろ、柴しば」

柴は更にパタパタと尻尾を振ると嬉しそうに笑った。

「ワンツッ!!!」

柴は、犬だった。柴だけではなく、その国に住むものすべてが犬だった。

誰も姿を見たことがないという鎧をまとった王もまた、犬であるとだれもが信じてやまなかった。

そして、誰もが犬以外の生き物であるなどと怪しむ者はいなかった。「ところで、柴。あの子はどうしてるかな、この世界にたった一人やってきた赤ん坊。確か名前は、一文字紋太だったっけ」

カチャカチャと鎧を鳴らしながら、国王は鼻を鳴らす。

「すでに滅びたといっても過言ではないよね、一文字の血は。あの子もほら、もうすぐ死んじゃうわけだしさ」

柴は国王の周りをぐるぐるとまわり嬉しそうに吠える。

「俺たち犬人はこれより国土拡大を始めよう。もう、この国だけでは飢えてしまうよ。だから・・・」

国王はいったん言葉を止め、壁に貼ってある世界地図へと歩み寄り一つの島国をさした。

「こんな猫ばつかが暮らす毛玉みたいな国はいらないよね。柴、全部壊しちゃおう。壊して壊して、新しい犬人の国を作ろう」

そのほかに誰もいない王室で、柴が賛同の意を示し大きく吠えた。

第八十八話 君臨する鎧（後書き）

柴と国王が始める猫人の国の侵略。

そこにどうして切り裂きジャックがしゃしゃり出てくるのか…。

そして紋太君のルーツも明らかになるのでしょうか！？

次回 始める戦争【仮】

第八十九話 出会う子犬

「つごめんなさい!!!」

ぶつかつた人に謝りながら、走っていた。

ここは犬人だけが暮らす国でそんな犬人しかいない街の中で、僕は追われていた。

突然国王から突き付けられた罪状は“国王暗殺容疑”。まったくもってそんな物騒なことは考えもしないし、実行に移すほどの力も何もない、悪く言えば目立たない僕が、今は国を守る警護団体の守護しゆい犬使けんし全部隊に追われていた。

そして走って逃げることに早一時間。体力も尽きかけている所でふらりとぶつかつた人に謝罪した僕はそのまま走って道をゆく。

もう、この国に僕のいられる場所はない。

身に覚えのない罪、いわゆる冤罪で街を追われる。

けれど僕に生きていける場所なんてなかった。今まで国王の宮殿につかえている身で、寮に入っていて、自分の家も、家族も何もない。

この国にいるためのものは何もなくなってしまった。

海を挟んで隣国、猫人が暮らす国に行くことも考えた。

けれど猫人は犬人を拒絶しているし。向こうの国に行った瞬間に僕は死んでしまうということも予想がつく。

要するに残っている生きるための望みは下…下界にしかない。

下界には犬人や、猫人のような生物がいると読んだことがある。うまく隠していけば、助かれるかもしれない。

なんてことを考えながら道を走っていたら、たどり着いた先は国の端、落下の崖だった。

元来た道に戻ろうとしても、そこにはすでに守護犬使の一番隊が迫っていた。

「、国王暗殺の疑いで逮捕、のちに死刑とする。こちらへ来い!!!」

一番隊長ウルフはその手に持った手配書を指さし一步一步寄り
つてくる。

「おかしいよ!!!」

やけくそだ。なるようになれ。もしもお前たち従順な犬がちらりと
でも疑うことがあれば国王に尋ねてみる、殺されるぞ…。

とにかく、その時の僕はやれるだけのことをやって死んでやろうと
腹をくくった。その場で、即決。

「この国では、階級制度が今でも生き続けている!!! 奴隷は病気に
なったら違犬種として殺される!!!」

たまたま見てしまったある犬の最後を思い出していた。涙を流し、
鼻水をすすり、折の中で悲痛を叫び続けていた。そんな犬を、彼ら
守護犬使は容赦なく殺した。

そんな世界は僕はおかしいと思うんだ。だから、どんな小さなこと
でもいい。この世界が変われるような小さなきっかけを残して死ん
でやろうと思っていた。

「それがどうした、。国王こそ絶対。国王は力を求めておられ
る。そんな小さな命を尊重し、国を荒廃させるなどという策を講じ
てはいない。そして、その小さな命には、お前も含まれているぞ。」

犬歯をむき出して笑うウルフを見て、僕は思わず噛みついていく。

「おかしいと思わないの!? 命が消されていく、捨てられていく!
!!!」

すでにウルフは僕のことなど見てはいなかった。遠い海の向こうに
ある国、猫人の国を見ていた。

「やれ」

冷たくはなったその一言は、一番隊の戦力で僕を潰せという命令だ
った。

叩かれ、殴られ、蹴られ、ぼろ雑巾のようになった僕を見たウルフ
はいったん停止を命令すると、僕を蹴飛ばした。

崖の上から、下へ。

叫ぶ余力なんてなかったけれど、叫んでやった。

「この国は、腐ってる!!!」

そして、僕は下へと落ちていく。

何も知らないまま、意識も手放して。

「ねえねえ、飼っちゃダメ？亮祐、どうしてもダメなの？」

紋太は突然空から落ちてきた犬を偶然キャッチするとその傷ついた体を治療してから亮祐の元へと来ていた。

「この子、こんなに傷ついて、落ちてきたんだよ！？助けてほしいよって僕のところに来たのに、それでもダメなの？」

うるうると目を涙で潤ませ、上目使いで見上げると、子供限定究極奥義で亮祐は一発KOで許可を出しかけてしまった。

しかし、気が付いたらなぜか紋太が子犬を抱えて嬉しそうにぴよんぴよんと飛び跳ねていた。

「…きよ…許可しちゃったのか…。」と亮祐は内心で自分のしたことと意味を深く考えていた。

「亮祐、この子の名前ね！ポチタローっていうんだよ！！ポチって呼ぶんだ」

悩んでいる亮祐をしり目に紋太は嬉しそうに子犬の名前まで付けていた。

そんな亮祐は紋太の発言をも深く考えていた。本名を略して呼ぶ場合本名ではなく略称を名前にしたらいいのでないか…。とか、そういうどうでもよさそうな問題だった。

その時突然何の許可もなく亮祐の部屋の扉が開かれる。

「あら、紋太子犬かってもらったの？」

理緒が容赦なく特大クレープ両手に颯爽と登場していた。

「違うよ、これ降ってきたの」

飼えることになり嬉しそうに言う紋太の言葉に理緒はむせる。

「降って来たの！？犬が？？空から！！！」
何が何やらわからないといった感じで理緒は部屋を後にした。

「国王様、無事に　　を始末してきました。これよりしばらくの休息をいただき、戦力回復をとろうと思います」

膝をつき国王に司令官量の報告をしたウルフは国王の顔色をうかがっていた。一歩間違えば死刑も免れない。

「わかった。いっていいよ」

さらりと返した国王の命令でウルフは王室を後にする。

ウルフが消えた王室で柴は一人国王に腹を見せてじゃれていた。

「逃げなさい！！！逃げて！！！」

茶色の髪の女の人はなぜか自分のほうを見て叫んでいる。その女人はなぜか二本足で歩く犬によって押さえつけられ、どこかへ連れて行かれてしまう。

「早く！！！お前だけでも逃げてくれ！！！」

オレンジがかかった茶色のような短髪の男もまた自分のほうを見て何か叫んでいた。

男は犬につかまるようなことはなく、自分を守ってくれている。

なおも犬は自分を襲おうと飛び掛かってくるが、そのたびに男が守ってくれていた。

「早く、逃げてくれ。お前だけはこの地で殺すわけにはいかないんだ！！！もつと見てくれ、この大地を。世界を！！！」

犬たちはいったん引くと総力をあげて飛び掛かってくる。その犬たちの波の中に男は埋もれていった。

けれども男は自分に対して何かを叫んでいる。

「聞こえない。何を言っているのか、何を告げたいのかが聞こえない。逃げて、生きてくれ！！！」と、自分の息子に伝えたかった男は

犬の牙により意識を失う。

誰も自分を守るものがいなくなつたと判断した。けれども何もできない。今までかわいいと思つていた犬たちがこうして自分たちのような人間のように知能を持ち、襲い掛かってくる。

「さあ、小僧。こちらに來い。国王がお前を呼んでいる」

いきなりしゃべり始めた犬にびくりと肩を震わすが、そんなことを気にも留めずに犬たちは近づいてくる。

突然、後ろから咆哮が聞こえる。

「見つけました!!!やはりこいつらの船にありました!!!」

後方から聞こえた咆哮の主は自分たちがそれまで乗っていた船から聞こえてきた。

そして姿を現した犬が銜えていたものは一つの鎧だった。

「これが、私たちの国王が求めていた一領の鎧か…。国王の元へとお持ちしろ」

その場にいる隊長のような犬が鎧をくわえている犬に呼び掛ける。低く吠えたその犬はどこかへ走り去っていく。

「まっつて、それは僕のお父さんたちがやっと見つけた宝物なの。返してよ!!!」

自分は思わず叫んだ。

「ならばお前はそれを取り換えすべきだ。さあ來い!!!」

強引に服をかまれ、くわえられた自分はそのまま連れて行かれた。

「お前の名前は何という?」

手足を縛られ、首には槍を突き付けられたままの姿で自分は国王のいる場所まで連れてこられた。

そしていたる現在、名前を求められていた。

あくまで沈黙を保っていると隣にいる犬の槍がチクリと首に刺される。

「一文字…紋太」

自分…僕はそのままの姿で牢屋に閉じ込められた。

その場所で待っていたのは殴る蹴るなど序の口の暴行だった。僕はあいつらのたまった鬱憤を晴らす道具でしかなかった。そのまま、数日が過ぎたころ、用無しのゴミだと崖から落とされる。そして落ちた場所はとあるお屋敷のすぐそば、その雑木林。

「んむう…」

ポチを抱いたままいつの間にか眠っていた紋太はよだれの後を袖でサツと拭うとあたりを見渡した。

「ポチ？」

やっこのことで勝手良しの許可を得たポチの姿がどこにもない。

部屋をよく探してみるとカーテンの裏側において、外を眺めていた。

「ポチ、心配したよ…。寒いからちゃんと布団に入ってなきゃ…」

よっこいしょと思わずつぶやきポチを抱きかかえた紋太は突然の出来事に、想像もしていなかったことに驚いた。

「ごめん、紋太。僕はホントは空に浮かぶ島、犬人が暮らす世界で生きてきた犬なんだ…。でも、僕の住む国は…」

いきなり話し始めたポチだったがさらに身の上話まではじめてしまった。

それをみんなに話してみると冗談扱いされて終わってしまった。

実際にポチに話してもらうとみんな口を開いてポーっとしている。

だから言ったのに、と紋太はふくれた。子供だって嘘つくばかりじゃないんだぞ、と。

話が終わった後、理緒はうそみたーいとひたすらつぶやき、亮祐はだから空から降ってくるような怪しい生き物なんて…と連呼し始め、八迫は笑って空飛んで、そいつ届けに行くか！！と、なぜか乗り気になっていた。

竜太は補習でこの場にはいなかった。

ポチは何かを悩みながら地面を見つめ続けていた。

第八十九話 出会う子犬（後書き）

最近は毎日更新しているですね。これまでの分ということでは…。
次回 空へと旅立つ切り裂きジャック一行。そこで待ち受けていたのは…。

別称紋太編の本舞台へといざ出発。

次回 みつかる一行【仮】

第九十話 見つかる一行（前書き）

なんだか書いてたら今までで一番の文字数にはなったんじゃないかと…。

そんなことは言ってますが、話はそんなに進んでないと思います。はい。

まあ、前々回の眞石版編よりは格段に短いと思いますので。何せ四十八話ほど書いたそうですから…。よくもまあここまで同じ内容で書けたもんだと自分でも思います…。

そんなこと言ったら世界の小説家の皆さんはどうなってしまうのでしょうか。

まあそんな感じで。

第九十話 見つかる一行

空に行けば、何が待っているのだろうか。

紋太はポチの後ろから同じように空を見た。そこにはこれまでと同じように何も無い、けれど大きくどこまでも広がり続ける空があるだけだった。

本当にこの上に国なんて…ましてや犬や猫が人間のように知能を身に着けた存在となって生活しているのだろうか。

そう思うと空への興味がどんどん湧いてくる紋太だった。

空に行けば、何が待ち受けているのだろうか。

ポチはあれからずっと空を見ていた。そこにはこれまで見たことのないような下から見た空という景色があった。

本当に僕はあの国…誰かから奪ったという鎧をまとった国王が支配し続けている国に帰って何をする気なんだろうか。何ができるといふのだろうか。

そう思うと何をしていいのか、何をしに行く気なのかが分からなくなるポチだった。

「今来ましたよーっと」

扉を開き制服のまま入って来た竜太は大広間に入った瞬間に尻をつき息をのんだ。

「な・・なんで犬が立ってそら見てんの!!!!」

竜太はテレビを見ないか、数年前の出来事など覚えていないのどちらかで、レッサーパンダが立ったという一大ブームを知らないらしい。

最近は何でも立ち、空を見ることがあるのだ。突如機械巨兵が襲いかかってきたり、不通に帯刀している人がいたりする人たちと闘っ

たり、地獄の王様と血で血を洗う戦いをしたり、空に島が浮かんでいるような世界だ。

何が起こってもまったたく不思議ではない。

「うるさいわね？」

背後に潜んでいた理緒が腕に持っていたトレイで容赦なくたたきつぶす。

「ポチちゃん、牛乳飲む？」

竜太を叩きつぶしたというのに、見事にトレーの中から牛乳をこぼさずにポチの元へと届けた理緒はポチの前にトレーごと牛乳を置く。

「僕、牛乳好きだよ」

空を見ることをやめたポチは嬉しそうに牛乳へ駆け寄るとなめ始めた。

「犬がしゃべったあ！！！」

叫ぶ竜太は再び理緒に、今度は踵で叩き潰された。

「うっさい！！！」

理緒が叫ぶと同時に大広間奥の灰色の扉から嬉しそうな八迫が飛び出してきた。

「でつきたぞーお！！！」

作業着にヘルメットといういかにも土木関係の職人といういでたちにタオルをかけ、薄汚れた顔の八迫が自信作が出来たぜ、どうだこの野郎！！という顔で誇らしげに胸を張った八迫が飛び出した。

「これで、空に行けるぞ！！！」

八迫の一言はその場にいた全員の注意を引いた。

「やった、ポチの国に行けるよ。全部任せておいて！！！！全部僕たちが解決してみせるよ。僕たち実は慈善事業集団なんだ！！！」

紋太の悪気のないその一言はその場にいたほかの面々を少なからずへこませた。

「そりゃ、街守ってないよ、最近は……。自分たちの身内の問題ばかり解決してるよ？でも、それがメインじゃないし……」

「ええ…ええそうですよ。どうせ私たちがやってることは人助けですよ…」

「そうか…。俺たちは君にそういう風にみられていたわけですね…。紋太君」

「うっそ!!!まじで空行けるんすか」

一人だけ頓珍漢な答えを返した竜太は状況を全く理解していなかった。

しばらくへこんでいた空気を壊したのは自称天才発明家等だった。

「とにかく、空へ出発だあ!!!」

心なしかその声は泣いているようにも聞こえた。

「柴、守護犬使全隊出撃準備は可能か？」

鎧に身を隠した国王は芝の顎を撫でながら計画の進行状況を尋ねる。嬉しそうに喉を鳴らしている柴は返事の代わりに嬉しそうに吠える。

「それだけではありません…。近づいてきていますよ。奴らが。犯罪者一人を連行しているということにも気が付かずに」

柴は怪しげな笑みを浮かべ、王を見る。

王もまた、その視線に応えるべく低く笑う。

「じゃあ、猫人殲滅を先に始めよう。そのあいつらは来るよ。さあ、始めようよ。完全殲滅侵略」

その声で、すべての守護犬使は一斉に宮殿から出撃した。

「今宵は荒れるよ。荒れて荒れて…血で空が染まるよ」

王は右手の指をすべてバラバラに動かして、不気味に笑った。

「ハウリング隊長!!!私たち三番隊は町の警備でありますな!?!警察のような服を身に着けた駐在さんスタイルの守護犬使三番隊の一員は敬礼の姿で隊長に自らの使命を問う。

「国王様曰く、もうすぐこの街にニンゲンという生物が来るそうだ。

われらに似通った、しかし下等な生物であるらしい。しかしその性格は野蛮で凶暴と聞く。心してかれ」

背筋を曲げずに整った姿勢でハウリングは部下へ命令する。

次の瞬間に、街に衝撃が走る。

退避をさせることもしなかった国の生産力、奴隷が町と共に飛んで消えていく。

「飛んでいくねえ…。しかし、国とは王。国はどうなっても王である国に王さえ生きていたらそこが国。この彼らのとうとう犠牲を忘れるな。その為に、侵入者と罪人 をとらえ、拘束もしくは殺害するぞ。王の所有物を勝手に壊すのは、過ぎた遊びだと教えてやらねばならんからな」

ハウリングの手にいつしか握られていたその爪を深くはめると、衝撃が放たれた方向へと三番隊を率いて隊列を乱さずに歩き出していた。

「おお!!! さっすが鼻が利く犬たちだけ!? さっそくお出ましたぜ?」

不時着した船から飛び出してきた八迫がこちらに迫ってきた犬を見て歓喜の叫びをあげる。

「お前はこの危機的状況を見てなんとも思わんのか…。少しは後先考えて着陸しろよ!!!」

船から転がり出るような形で犬だけが暮らす世界に足を下した亮祐が八迫ににらみを利かせるが亮祐にはそんなことはお構いなしだった。

「あなたたちのせいで帰りのチケットがなくなっているわけですから、少しは気に病んではいかがかしら??」

後ろから拳を握りゆつくりと出てきた理緒を見て八迫は明日のほうを向いて弁解し始めた。

「だって、帰りの分の燃料まで行きで使う羽目になるなんて思わなかったんだもんね!。空がこんなに遠いなんて、誰が知ってたんだ

よ!?!」

胸を張ってえっへんと威張る八迫を前に、三番隊は切り裂きジャックの面々を囲み終わっていた。

「貴様らが人間か?その鋼の塊に乗っているはずの罪犬をこちらに渡してもらおう」

爪で八迫のほうをさしたハウリングはポチの身柄を引き渡せと迫った。

「僕のポチは渡さないんだからね!!!」

トラベラーを構えて船から出てきた紋太は景気づけに一発発砲した。

「渡さないんだからね!?!」

トラベラーから放たれた銃弾はハウリングの頬をかすめてどこかへ消えた。

「それは宣戦布告ととらえるぞ!?!そしてそれが意味するものは…殺せというお願いだ」

その声とともに三番隊は一斉に襲い掛かる。

「うん、ここらで名誉挽回しとかないと俺あとで絞られるよね!?!」

絶対。だからここは俺に任せといてー」

八迫は軽く笑いながらハウリングの顔を殴り飛ばした。

「そちらの部下さんは任せるからねー」

八迫はのほほんとしながらハウリングを殴り飛ばしたほうへと消えていった。

「とか言つて、あいつ絶対にここに帰ってくる気ないでしょ…。逃げたんでしょーがあ!!!」

理緒が久しぶりに汀を取り出して腹いせに一番近くにいた犬人に対し顔面に拳をめり込ませ、鬱憤を晴らしていた。

そしていまだ出てこない仲間の一人に対し怒鳴り声で召喚させた。

「はいい!!!」

その結果、竜太は竜魂剣を構えてびくびくしながら出てきていた。否、出てこざるを得なかった。

「とにかくここにいる雑魚様を蹴散らしてから、全部考えろ!!!」

亮祐がアドベンチャーで一匹ずつ正確に狙いながら全員に言い聞かせた。

『了解 ！！』

その場にいた全員が返事をした。竜太は不本意ながらだった。

「貴様ら、この国をここまで壊しておいて何様のつもりだ！！！」
ハウリングは自らの手にはめている爪を振り回し八迫にいったん距離を取らせた。

「だがしかし、国とは王。王さえ生きていればそこが国。王に縋り付く雑草どもをいくら壊そうがいいかもしれない…。けれども王のおもちやを勝手に壊すのは、いけないということを教えてやるよ」
その爪は幾犬人も体を裂き、殺してきた血塗られた爪。その爪が八迫ただ一人に向けられた。

「根本的に俺とお前たちの国の定義が違うようだからな。そのところを教えてやるよ」

八迫はその場に落ちていた、そこに人が住んでいたことを証明するものを拾い構えた。

その八迫の顔を見てハウリングは鼻で笑った。

「そんな奴隷が使っていたものなどで私と互角に戦えるとも思っているのか。ニンゲンというものは王の言うとおり下等生物だな」
八迫は手に持ったものを回しハウリングを笑った。

「教えてやるって言っただろ！？そのためにはこれが一番、効果的かと思っただね…」

手に持った生活感あふれる竿は、八迫の手によってハウリングに教育をするための最適な武器として選ばれた。

「逃げてちょうだい！！！紋太あ！！！！」

その声が、どこかで聞いたような優しい誰かとかぶり一瞬の間動き

が止まった。

その一瞬は素早い犬には絶好のチャンスにとらえられた。

その犬の助走をつけた体当たりで紋太は船に叩きつけられる。

「子供は馬鹿だな……。命をかけてこの場にいるのであればそれ相応の気力を持って挑まねば、このように殺される。来世では気を付けるといいよ」

そう言った犬は紋太に牙を光らせ噛みつきこうとした。そしてその喉を噛み千切ろうと目を光らせて首を下す。

「霸凱一閃峰弾き!!!!」

竜太が素早く霸凱一閃で犬の首をとらえ、上に向かってはじいた。

「ありがと、竜太」

素早く立ち上がった紋太は眩暈で再びその場に倒れる。

その状況を悪く見た亮祐がポチの名前を叫ぶ。

「紋太を連れて船の中にいろ!!!!」

ポチは一生懸命に駆け出し、紋太を連れて船の中へと駆け込み、船の入り口で吠える。

「ちよつと、数が多すぎるんじゃないかしら!?!」

理緒が汀で犬の牙を防ぎながらひとりでにボヤいた。

「どうするんだろうね!?!人間たちはこの鎧を奪いに来ると思うかい!?!」

王は戦争のさなか柴と戯れながらボソツとつぶやく。

「きつと鎧の事なんて知らないと思いますよ?ただ、 に何か吹き込まれてきたんじゃないかと」

腹を見せてゴロゴロとする柴は愛嬌をふりまきながら王のつぶやきにこたえる。

「そうかな?まあどちらにしろ、もう遅いんだよ、全部が」

第九十話 見つかる一行（後書き）

実は今回、町が壊れて犬人がうひゃーな描写を書こうと思ったのですが、思いとどまって省略させていただきました。

ご了承ください。

次回 始まる戦争【仮】

第九十一話 始まる戦争（前書き）

書き溜めていて送るのを忘れておりました。
これはいかん……。どうもすいませんでした。

第九十一話 始まる戦争

うつすらと目を開けた紋太はここがどこかと試行錯誤して、やっと自分がいた場所を思いだし起き上がる。

「まだ寝てたほうがいいよ。倒れたんだから」

起き上がったことを察知したポチが駆け寄ってきて紋太のほっぺたをなめる。

「でも、みんな…」

紋太は自分だけ戦わずにここで休むなんていやだーとこねてみたが、ポチは宣戦復帰を許すことなく数分が立ったころ、理緒を筆頭に竜太と亮祐が入ってきた。

「討伐完了!!!」

理緒が操縦席にどっしりとすわり休もうとするのを見て亮祐が赤くでかいボタンを発見した。

亮祐はそのボタンがどのような結果を生むかを理解していた。しかし友達が作ったものだし、別にそんな大きな被害は出ないだろうと一方的な解釈で叩き押した。

それは見るからに怪しく大きなガラスで囲われたボタンだった。

竜太はそれをどこかで見たことあるなあ、と思い記憶の中をあさっているとき突然大きな震動で船から案内が流れる。

『この船の自爆ボタン。あんた押したんやろ!? な、自分なにしたかわかつとんねやろ? でもな、それでめえそらしたらあかん。あかんでえ。お天道様に顔向けできへん。今からでもおそおない。あきらめや』

この関西弁ナビゲーターはいったいボタンを押した者を更生させたのかそれとも嘲笑っているのか、どちらなのか、その場にいたポチは開発者の性格をその場で理解した。

竜太はそこでようやく思い出す。これが漫画映画アニメなどでよく出てくる自爆装置!!!そしてそれを押した者の運命は必ず周囲を

巻き込んだのアフロと相場が決まっている。少なくとも竜太の頭の中では決まっている!!!

「みんな、逃げ!!!」

竜太が叫ぶ前に、すべてが作動した。そして、鋭い閃光で艦内が満ち溢れる。

気が付くと八迫が作った飛空艇は快適な某自動車メーカーの七人乗りワゴンへとその姿を変えていた。

その会社曰く、作るのは、信頼と笑顔、だそうだ。

そんな人を思いやる心で満ち溢れた会社が作った車は、その場にいるだけで自分たちがいるところを忘れさせてくれるようなそんな存在だった。

「...。とりあえずここにおいても仕方ないし、国王様を目指しましよー!!!」

拳を振り上げ運転席へと移動した理緒はハンドルを握ると途端に人相が変わった。

「うっはーい!!!行くぜ行くぜ行くぜいくぜえええ!!!」

途端にタイヤはキュルキュル音を鳴らし、ぶっ飛び始めた。車が、飛んだ。アクセルの踏みすぎで。

『ひいいい...』

竜太と亮祐は互いに抱き合いハンドルを握ると変化するという人種を目の当たりにし恐怖の声を上げた。

ちなみに、理緒の運転技術は無免許だからというべきか、車体はへこみ傷が絶えなかった。

「柴あ!!!」

王は以前腹を見せられもない姿でじゃれ付いてくる柴を怒鳴り散らす。

「呼び戻せ!!!。今すぐ守護犬使一番隊、二番隊と四番隊をこの城に集める!!!そして、地下宮殿へと行き解放しろ。鎧の制限をすべ

て外せ」

国王は憤慨し、どすどすと音を立てて王室から出ていく。

部屋から一步出た国王は振り向き柴への命令を付け加える。

「お前も染める。その身を深紅の赤で」

柴は口の周りを舐めると荒い息遣いで王を見つめる。

「わかりました。すべてを開放します。そして、潰すは切り裂きジヤックと重罪人」

その言葉を聞いた王は扉を閉めるとどこかへ消えていった。

「柴にはわかつていますよ。ええ。柴にはわかつていますとも。すべて、全部。ええ、ええ。柴に判らぬことなどありませんからね」

柴はくるりと反転し犬本来の四脚で駆け出した。
目指すは玉座裏よりいける結晶で出来上がった自然の宮殿。一般的に地下宮殿クリスタルパレスと呼ばれる宮殿へと。

建物の間と間の通称裏路地と呼ばれる場所でまだ戦いは続いていた。

「力を抜いて戦っているというのにまだわからないのか？犬本来の力を見せてやろう」

ハウリングはそういうと爪を地面に突き刺し吠える。

「うう・・・うるさっ！！！」

思わず耳を塞いだ八迫の視界から突然ハウリングの姿が消える。

「犬本来の速度とは、ニンゲンが追い付いてこられるような速度ではない。よって犬こそ万能の生物。教えてやるぞ、ニンゲン。貴様が私に貴様らの国の定義を講義するというのなら、私は貴様に犬の恐怖を教えてやる。敵うはずのない神の領域を。ハウリング遠吠えと呼ばれるその理由を体に刻め。すでに死が確定した運命のものよ」

ハウリングは再び姿を消すと八迫の後ろに立った。

「聞け。わが喉より発生する協奏曲コンチェルト！！第一章」

ハウリングは口を大きく開くとその喉からいくつもの音を重なり同時に出す。

その音波は物体を振動させ、浮き上がらせ、八迫を狙ってくる。

「ばっか!!! そんなことしてたらなんも聞こえねえ!!!」

すでにその声すらハウリングには聞こえていない。だが叫ばずにはいられなかった。

竿を最大限に振り回し飛んでくる瓦礫を弾くがそれもまた浮き上がり戻ってくる。

その数が増えていき一つが対処しきれずにぶつかることを覚悟した八迫は目の前で瓦礫が一齐に落ちるのを目の当たりにした。

肝心のハウリングは肩で息をし、その毛だらけの額には玉のような汗が流れていた。すでに体毛は汗を吸い込み先ほどよりも大きく見える。

「...。お前、息してなきゃ音波出せねえのか...。そうだよな。普通の事だ」

しかし、そこで勝機を見つけた八迫は一気に駆け込む。

「教えてやるよ!!! 俺らの国の定義はなあ!!!」

竿を思いっきり振り上げ、ハウリングめがけて叩き落とす。

「国王が国じゃねえ。国民、人こそが“国”だあ!!!」

その一撃にこの国で死んでいった者たちの思いを込める。

「ほざけ!!! 国とは国王!!! 人は王の資材だ!!! 第二楽章!

!!!」

ハウリングは再び口を開け、叫ぶ。

その音は爆音だった。とっさに耳を覆う八迫の腹部に向かってハウリングは爪ではなく手の甲で鋭い突きを出す。

「...!!!」

爆音で耳をふさいでいた八迫は、何の対処もできずに真面に喰らった突きその場にしゃがみ込み嘔吐する。

耳から手を外し、地面に手をつき吐き続ける八迫の頭をハウリングが鷲掴みする。

「お前らが人の国に勝手に首を突っ込むな。これは俺たちの国の問題であり、お前たちの国の問題ではない!!! よく理解しろ。外交

問題は複雑、なんだよ」

そのまま、鷲掴みの八迫の顔をかるうじて残っている建物の壁に叩きつける。

「子供だからって線は引いとけよ。これは子供にや関係ねえ」

嫌な音が響いて八迫はその場で動かなくなる。

「子供が全部解決できるなんてそんな夢物語はそこら辺の小説家にも任せて、お前は現実を見てろよ。現実見て、賢く生きてりやよかつたんだよ」

ハウリングはとどめと頭を踏みつけて、その路地裏を去ろうとする。

「ま・・・てよ」

去ろうとする足を八迫は必至でつかむ。

今の自分と同じような状況に陥ってるような物語を見てそこまで必死にならなくてもいいだろうといつも冷笑していた自分が恥ずかしくなる。必死になってたのは馬鹿なんじゃなくてそこで自分がやらなきゃいけないことを理解してたからだ。体張って守りたいものを守ろうとしてるやつは馬鹿じゃない。めちゃくちゃカッコいいのかもしれないな。八迫は今の自分を見て思わず顔がにやけてくるのが分かった。

「俺は忠告したぞ！？子供が最強つーのは夢物語だと。そんなにカッコいい自分を演出したいなら手伝つてやる。最後は死ぬのが一番カッコいいんだよ！！第三楽章！！！」

かぱつと口を開いたハウリングは第三楽章を叫ぶために息を吸い込む。

「黙ってる。。。犬は…叫ばねえほうがかわいがられるんだよ」

八迫は残った力で口の中に思いつきり竿を突っ込む。

「んぐつ！！！」

のどに物を突っ込まれ言葉も出なくなるハウリングの顔をつかんだ八迫は先ほどの腹いせに顔を思いつきり叩きつけ、踏みつける。

「黙って鳴いてろ！！！飼いだ」

口に入った竿が建物により喉より先に押される。そしてその竿は八

ウリングを貫通し、外へと突き出る。

「あんまりいい勝ち方じゃねえけどまあ勝ちも勝ちだ。悪く思うな」
八迫は血だらけの顔をそこに落ちていた薄汚れたハンカチでぬぐう
とふらつく足で目の前にそびえたつ禍々しい場所へと向かった。

「全隊長長に告ぐ！！！ただちに宮殿へと戻るべし。王の御命頂戴
仕るべきことが起きようとしている。全力で阻止せよ」

柴は右手に持つ小型無線機で呼びかける。

そして、すべての戦力はやがて宮殿で衝突する。

第九十二話 目標人物へ

まず、その城を間近で見て息をのんだ。

首をできるだけ上に向けても全く天守閣が見えてこないのだ。それほどにでかい。さらに、その門も一般的な人間の身長の一、三倍はある。

そんな門の前にたった竜太は思わず叫び声をあげてしまった。突然門が開く。その城の主が招き入れているようだった。

そんな中、城の内部が窺えた。

明かりもつかない真黒な中で、ぺたぺたと音がだんだん近づいてくる。

「いらっしやいませ。切り裂きジャックの面々。そして、重罪人

びくつとポチの背筋が凍る。

「出てきなさい。君はこちらで処分は考えています。さあ」
またもや紋太が躊躇なく発砲する。

「渡さない。ポチは僕が守るんだ」

その声に音の主は姿を表し耳をびくつと反応させる。

「一文字…紋太。はいはいはい…。わかっていますよ。柴にはわかっていますとも。ええ。一文字紋太。私どもはあなたを必要としています。力を貸してください。あなたがほしい」

柴が左右の手を広げると城の内部から犬人が先ほどよりも大量に出てくる。

その一匹一匹がその手に殺傷能力がある何かを持っていた。

「一文字紋太と を連行してください。ええ。柴は奥で準備をしていますからね」

柴は闇に消え、犬人がそれと同時に雪崩のように攻め込んでくる。

「では、やりましょうか…」

理緒はいまだにハンドルを離さずにしゃべっているのですいつもの理

緒よりも三割増しでいろいろとすごい。

竜太達はワゴン車から出るとそれぞれ武器を取り出し、犬人と戦いを始めた。

必ず僕がポチの助けになるんだ!!!

紋太はその心意気を込めるかのようにトラベラーを握る力をより一層強めた。

一匹の犬が喜び走り回り、そして叫んでいた。

「はあいー!!!おれ登場おー!!!ねね、呼んだ呼んだ!?国王様ってば俺の力必要になったから俺呼んだんでしょ!?俺いつもんとこで来るやつぶつとばしてくるから待ってるよー」

犬耳がピコピコ動くやんちゃだとわかるほどの汚れてぼさぼさの毛並みをした犬は部屋に来た時のようにたたたーと走って一歩的に消えていった。

「二番隊長、雑種ミックス：落ち着かないのか…彼は…。」

王は頭を少し抱えた。そして雑種との出会いが自然と頭の中で再生されていた。

もともと雑種は生まれも育ちも王宮ではなかった。

国王が遠征終了後にふらりと何かの偶然でまったく通らないゴミ溜め、王宮内では価値亡き者の墓と呼んでいるいわゆる奴隷の中の奴隷の唯一生きることを許されている指定地…そこを歩いていると奴隷たちは頭を地面にこすり合わせ許しを請う。

そんな中で、一匹の犬だけは違った。

今と大層変わらぬ汚れた毛並みのその犬は王の方へと駆け寄ってまるで王を知らないかのように辛く気安く話しかけてきたのだった。

「おっちゃん、なんか食いもん持ってない!?母ちゃんに食わしてやりてえんだよ。な、オツチャンエライヒトだろ?」

周りで息をのむ音がいくつも重なって聞こえる。大方、王に軽口を聞いたから殺されるなどとそんな考えが浮かんできたのだろ。こ

れだから奴隷の思考回路は低能で、だから奴隷だというのだ…。

子犬は汚れた毛並みとは真逆にその瞳をきらきらと純粋に輝かせ王を見ている。

面白い。

王はその子供に親を連れてくるように命令し、その子犬を親共々王宮へと連れ去った。

あいにくその子犬は母親一匹しか身寄りがなかったが、国に反発することもなく健気に、というよりも無邪気に王宮を駆け回っていた。王は一つの決意をした。

この奴隷を隊長へと育て見ることを。

そして、現在に至る。

すでに雑種の母は他界し、身寄りも何もなくなった現在でも雑種は立派に生きている。

そして、今現在の守護大使全隊長の中でもトップクラスの実力を持つ隊長だ。

決して負けることはない。その核心を経た王は場内に張り巡らせている回線を使い放送を流し始めた。

『重罪人、および共犯者共よ。たった今からゲームを始めよう。君たちのうちだれか一人でもこの俺のいる場所へと来て、俺の命を止めることができるかというゲームだ。そちらが勝てば自由に国を作りかえればいいさ。ただし、参加料としてその命をもらおう。時期に猫人の全部隊がこの国を襲ってくるだろう。国が亡びる前に俺を討てるかな？』

放送はすべての国民をふるいあがらせたことを国王は気にも留めない。

どんな暴動が起ころうとも。どんなテロが起ころうとも気にしない。全ては今、この時から始まったゲームだけが娯楽。国と自らの命を懸けた史上最高の娯楽。

娯楽は、始まる。

犬人たちの叫び声の中で亮祐は叫び声とうめき声を聞いた。

前者は紋太で後者はポチだった。

必死に二人の姿を探す。

一向に数の減らない犬人の中、亮祐は目的の一人と一匹を見つけた。それは気を失い無防備な状態で連れ去られて行く紋太とポチの姿だった。

そしてそれは、娯楽の国王軍の勝利を大きく前進させるための力の一つとなる。

第九十二話 目標人物へ（後書き）

と、言うわけで彼ら大人は鎧を真の力を発揮させるべく、狙っているわけです。

第九十三話 集まる勢力（前書き）

これからもよろしくお願いします。

第九十三話 集まる勢力

一生懸命に戦っていたのに。

戦っていた最中に体格が桁外れの大きさを俊敏な犬人に担ぎあげられたと思っただら…。

紋太は今の状況を見て思わずため息をついた。

何で自分は犬人の波にさらわれていなければいけないのか…。

今の紋太とポチは、犬人の頭上を手によってどンドン後方へと流されているという状況だった。

このままではどこに連れて行かれるかわかったものではない!!! いや、本当はわかっちゃうんだろうけれども。ポチを重罪人として捕まえたいという偉い人のところに連れて行かれてしまうのだろうかけれどもっ。

なんとなく、ただ何となく何の意味もなく紋太は再びため息を漏らした。

先ほど、亮祐が助けに来てくれようとしているのを見かけたがそれもやがて犬人の波に消えていった。

その鎧は封じられていたはずだった。

その鎧はすでに屠られていなければいけないものだった。

力有る者を求めてさまよう鎧。その鎧を閉じ込めるための場所が分かっていたのに…。

その鎧は自分の意志を持つ、いわば生きた鎧だった。

そしてその鎧は自らを神のごとく周囲に災厄をふりまいてきた。

さしずめそれは破壊神。その破壊神によって一つの家族は崩壊を迎えた。

封じようと運搬途中の一家は、その鎧の破壊の力によって崩壊させられた。

至る現在、その鎧は犬人の王の身体を家城やししろとし、全てを支配していた。

その鎧が立ったひとつづつ恐れているもの。それは血だった。ただし、とある家系の血。

その血で鎧が清められるとき、その鎧は変貌する。すべてを捨てて破壊神と称される鎧を清められる血を持つ一族は一文字家。

ただし、正しい手順と方法を踏まえて行動を起こせば、その鎧は真価を発揮する。

そしてその鎧は呼び寄せた。

一文字家の末裔と、飼い犬を。

「くそっ！！！どけよ、お前たちに用があるわけじゃねえんだ！！！」

叫んだ亮祐の右手には紋太のトラベラーと対をなすアドベンチャラーが握られていた。

すでにそのエネルギー残量はゼロの数値を指示し、ただの鈍器としての使用方法しか残されていなかった。

そのアドベンチャラーを振り回し亮祐は道を開いていた。

そんな中で突然目の前に立ちふさがっていたのはぼさぼさの毛並みをした犬人だった。

「ねね？あんたが反乱軍でしょ、そうなんでしょ！？俺わかつちやつたもんねー」

嬉しそうに声をあげて笑うその犬人の目が一瞬光輝いたと思った瞬間に、亮祐は地面に足をついていた。

「ニンゲンってさ、空に来ると酸素つてのが薄いから動きが遅くなっちゃうんでしょ！？不便だよなあー。俺たち犬人みたいに空で暮らせばよかったのに……。でもダメだよな、欲望の塊の墮生物には」その言葉には明らか棘が含まれていた。

一瞬にして攻撃をした犬人は見下すように不敵に笑った。

「ふふふっ！ニンゲンって不便だろ！？俺たちが楽にしてあげるよ？猫人の国を支配して、それからニンゲンの国ももらうんだ！！！俺たちの国王って賢いでしょ」

そういつてその犬人、雑種は再び瞬間加速で亮祐を蹴り上げる。

「まだまだ楽しみは残ってるんだもんね」

雑種の一方的な楽しみは終わることはなかった。

「…で、何で私はまたあんたと一緒なのよ…。何であんたとまた二人つきりなのよ！！！」

襲い掛かってきた犬人の兵士たちは理緒と竜太の二人によってそのすべてが意識を保っていかなかった。

「…。どうしましょうか」

竜太はその場で理緒の顔色をうかがいながらおどおどと尋ねる。

その質問に対する答えは憂さ晴らしの鉄拳の後に述べられた。

「奥に行くに決まってるでしょ！！！また一人ずつ消えてんだからこのまま戻れないでしょ！！！」

竜太はしぶしぶと理緒の後を歩いてついていった。

ちなみに運転できる人がいないため、歩きでしか行けない。先ほどまで理緒が運転していたのは万が一の場合に止められるかもしれない人がいたからじゃないだろうか。

「とにかく行かなきゃいけないんです！！！」

誰にと言うわけではないが腹の底から叫んだその言葉は、かすかに聞こえていた。

「来るね…。もうすぐ来るんだ…。ホント、楽しみだわ。ねえ？」

スリムな体型で足を交差させてソファに座っているメスの犬人、白綿はその隣に立っているもう一人の犬人柴へと語りかけた。

「ええええ。柴も楽しみですとも」

二人は今にでも開け放たれそうな扉を前に来客を心から待ちわびていた。

第九十三話 集まる勢力（後書き）

いや、なんとなく言っただけですよ!?

それにしてもなんで今更挨拶してしまっちゃったのでしょうか。

…。バカってことですね？

第九十四話 空に來た彼は、真偽を確かめに來た。(前書き)

なんだか知りませんが話の乗りが上手い事行かないのとある人物を助つ人に頼みました。

すると少しは上手い事行きました。まだまだですが。

第九十四話 空に來た彼は、真偽を確かめに來た。

「いらつしやいませ。待つてましたよ」

紋太が連れてこられた部屋は悪趣味な部屋だった。

壁には所狭しと鎖や鎌…いわゆる拷問道具とかいう物騒な品が飾られていた。

「…。国王、様」

ポチが鎧を着こんだ犬人に向かつて話しかける。

「、君はもう僕に話しかける権限はないから。庶民が気安く話しかけてたら極刑だよ。まあこれから死んでもらうんだけど。君と、その一文字紋太君とね」

そういうと、王はカチャカチャと壁の鎖を外し、部屋の中央に安置されている十字架へと巻き付けそこにポチを張り付ける。

「必要なんだ。君たちの血が。この鎧を最強にするために」
鎧で顔が見えないが、おそらくその顔はともえげつない笑顔を浮かべているのだろう。

「ポチを離せ！！！」

とつさにトラベラーを構える紋太は鎧の胸に的を絞った。

「ポチを離せ…」

一切反応しようとしないうに王に紋太はためらいなくその銃口から鉄の塊を発射させた。

銃口からはじめてまつすぐ飛んで行つた銃弾は軽い金属音を立てて鎧に弾かれ地面に落ちる。

「抵抗しないでくれる？君たちの血を無駄に流すことはできないんだ」

王はそう言つと素早く紋太をポチと同じように十字架に拘束した。

「それじゃ、ちょっと苦しいけど、頑張つてね」

明るい声色と同時にボタンが押され、それに反応した十字架が紋太とポチを襲った。

悲鳴に似た二重の叫び声が響き渡る。

「おお…。これまた派手にやらかしましたねえ…。犬たち倒れてるよ…。」

いまだ顔面出血中の八迫はふらふらと貧血状態でつい先ほどまで理緒と竜太がいた場所に重なって倒れている犬人たちをしり目にそのまま先へと道を進む。

しかし八迫は気が付かなかった。

自分たち以外の存在がその道を歩いたという確かな形跡を。

とある扉の前に立っていた祀は大きく伸びをしてから、軽く準備運動をすると

「んー。ここにあいつらがいるのか…。」

思わずつぶやいた。

ジーンズに紺色の半そでシャツの上からオレンジ色のフード付きジャンパーを羽織った祀は右腰に差してある小太刀に手を滑らせた。

「俺が、此処で確かめるんだ。本当に所長が言っていることが真なのかを…。」

そして右腕の手を腰から外し、黒の腕時計を見る。

この時計は某多目的変身道具のような感じだった。

「…。電波は届くんだな。空でも」

思わずつぶやいた祀は自分のすべきことを思い出し、歩いて行った。

「ニンゲンって弱いよね。俺わかつちやっただかも」

雑種はがれきの上で座り亮祐を見下していた。

「うるせえ。そんなに人間の強さ知りたいのか…。知りてえよな」
アドベンチャーを雑種に向け弾丸を放つ。

「そんな直線状にしか飛んで行かない銃弾なんて俺の速度の前じゃ
まったく無駄なんだよ」

雑種は目を細めて言葉を紡ぐ。

「いい加減解れよ」

雑種は弾丸に挑戦するかのよう弾丸に向かって行った。

それが亮祐の残された最後の作戦だと知らぬ雑種は突然の変化に戸
惑い、反応が遅れた。

銃弾から網が出てきたのだった。と、言うよりは銃弾を仕込んであ
る捕獲用弾だった。

「な!!!」

しかもおまけにトリモチで逃げられないように対策済み。

「これが人間の作戦。強さ。よく覚えておけよ、今度はニンゲン見
下さないように…な!!!」

銃のグリップで思いつき頭を叩き、亮祐は雑種の意識を失わせた。
「で、紋太どこにいるんだよ…」

ドアが開かれた。

その場に待機していた白綿と柴は互いに微笑みあい来客を出迎えよ
うと犬歯をむき出しに低く唸る。

白綿は守護犬使内唯一の女性隊長で、いうならば守護犬使の紅一点
だった。ただし女性だからと見くびってはいけない。

白綿は華麗な舞で相手を錯乱させ、その間に仲間がとどめを刺すと
いう補佐的役割を持つ隊長だった。

しかし、それは来客者の顔を見て真っ青に変わった。

「あなたは…あなたはだれなの？」

思わず白綿は尋ねてしまう。それは王から渡された情報には載って
いなかった顔だった。

「ああ、ああ。柴には理解できてしまいました。理解できてしまいましたとも。あなたは、切り裂きジャックの六人目、ですね？」
真実にたどり着いたと誇らしげに考えを述べた柴の答えは一瞬で切り捨てられた。

「一緒にするな。俺は、切り裂きジャックじゃない。それよりも……もつと、もつと危ない組織の一員だ」

そして、祀は腰の小太刀に手を伸ばす。

威燕が使っていた私物の中の唯一の遺品、名刀金箔。それは祀の手の中で照明の光を反射し鈍く光った。

「俺は、俺たちは切り裂きジャックを倒さねばならぬ者。ジャックハンター、通称ジャクソニーだ」

祀は閃光のごとく二人の体毛を切り落とした。

「俺は、俺の目で見極める。お前たちを襲う切り裂きジャックが本当に娯楽目的の行動かどうか」

祀はそつと金箔の柄を握った。まるで今もそこに兄がいて、守ってくれているかのように。

「お前たちに干渉するのは本当は駄目だろうが、ここで会ってしまったらどうしようもないからな」

柴は執事のようなその服を丁寧に脱ぎ捨てた。

「柴は負けれないとわかってしまいましたよ。ええ、ええ」

その言葉に賛同した白綿がどこから扇子をだし、奇妙な舞を始めた。

「一緒に舞ってもらいましょう。この私と柴を相棒として」

その扇子には殺戮こそ美というわけのわからない文字が筆で書かれていた。

「まあいいだろう。俺が奴らが来るまでの準備運動を手伝ってやるよ」

祀は興味なさげに言い放ち、再び小太刀を振り始めた。

第九十四話 空に來た彼は、真偽を確かめに來た。(後書き)

祀君たちの組織名が判明いたしました。

何にも考えていないままただ名前だけ作ってみたジャクソニーですが、こんなところで名前を使えました。

それからそれから。ジャックハンターナイトを覚えていますか!?
まあそんなこんなでいろいろと片づけていこうかと思えます。

第九十五話 彼ら、決裂す（前書き）

なんだかお話が今回もこんがらがってきちゃいましたよ…。

第九十五話 彼ら、決裂す

悲鳴が轟く部屋で国王は二人の姿を見て、鎧の中で微笑んでいた。

「もつと叫べ、そして私の鎧の糧となれ」

ほとばしる電撃や炎の中に紋太とポチはいた。その口からは悲鳴がやむことなく発し続けられている。

その悲鳴を糧に、王の鎧は少しずつその姿を変えていた。

つやつやしていたその外観は鋭い棘に包まれていく。

「叫べ。そして私の鎧を成長させる」

紋太の喉からはいつの間にか長時間にわたる悲鳴により、血の塊が出ていた。

しかし、それすら本人は気が付いていない。

そして、鎧はその血を吸いさらに成長を続ける。

「……。まだ、終わらせないよ。一文字の血筋は、必ず終わらせるんだ。俺の手で」

王は紋太を蹴り飛ばすと低く笑った。

「え…!?!」

白綿は一瞬の出来事を目の前に、恐怖を感じていた。

一瞬の間に柴はその体を苦の字に曲げ苦しみがいていた。

「あつけない。他愛ない。つまらない」

祀は金箔を宙に放る。それは放物線を描いてくるくると回り再び祀の手に収まる。

「俺は、人間じゃないよ。人間じゃなくなつたんだよ」

意味ありげに祀は微笑む。そして金箔を鞘に戻し、柴を片手で持ち上げる。

「人間じゃ、無くなつたんだ」

「はあ……ぐん……」

柴は泡を吹きながら手足をばたつかせる。

「金箔は、切り裂いている相手の周囲の酸素を奪う。つらいんだよね。息、出来なくて」

ゆっくりと目の高さまで持ち上げた柴の目はおびえに染まり、祀を直視していなかった。

「人間は慈悲深いんだけど、俺はもう……ね」

目を細めてゆっくりといったその言葉が終わる前に、柴はその四肢を痙攣させ、白目をむいて、気を失った。

もう、柴の命は危険地帯に入っていた。

「おね、お願い！！助けて」

その様子を只見ているしかなかった白綿はようやくその口を開き、祀に懇願する。

その姿がかつての兄と重なって見える。

はっとした祀は自分の手の中の命を見る。それはすでに意識を失いぐったりとしている。

自分がしていたことを思い知り、その手を放し、金箔の力を開放する。

しばらくして柴の胸は再び動き出す。

自我を取り戻し、行為を知った祀はその場で膝をついた。

それは、自分たちを殺した者が行ったこと同じ行為。

「っ！！……」

息が、詰まった。

自分がした行為に。

「よくも、柴を……！！」

その刹那、祀の意識は白綿の毎によって奪われた。

地獄、とはよくできた言葉だと竜太は思ってしまった。

こんな状況をも、そんな一つの言葉で表現できてしまう。まさにそこは地獄、だった。

その部屋に入つてまず見たものをこの世の言葉で表せと言われて絞り出し、言うとするならば地獄だった。もしくはその類たぐい。あたり一面に紋太のものであるうと思われる血が飛び散つて、その紋太本人は目を開いて倒れている。

不規則で弱い呼吸音とそれによる腹部の動きにより、生存していることは見て取れる。しかし、いつ止まってもおかしくないと思われるようなひどい状況だった。

しかし、その隣にいるポチは血の一つもはずにその場で意識を失っているだけだった。

理緒が顔を悪くしながらふらふらと紋太に歩み寄り、その体を持ち上げる。

「とにかく、帰るわよ。このままじゃ、何もできない」

先ほどまでと打つて変わつてしおれたかのような姿で理緒は元来た道を帰っていく。

竜太はその肩に思わず手をかけようとした。

しかしその手はためらいから理緒の肩に届くことはなかった。

なのに、なぜか理緒の肩には手が乗せられていた。

「連れて行かれちゃ、困るんだ」

その声が天井に立っていた王の言葉だと気付くまで数秒の時を有した。

叫ぶより先に体が動いていた。

竜魂剣を鞘から抜き出し、その手を切り落とす。それからようやく叫ぶ。

「逃げる!!!」

理緒もその言葉を理解し走り出す。紋太に負荷をかけない程度の速度で。

「だから、連れて行かれちゃ困るんだって」

残っている方の手を伸ばし理緒を手にかかけようとする手を再び竜太

は防ぐ。

「連れて行ってもらわなきゃ、困るんだよ」

生身だったその腕は一瞬のうちに鎧を身にまとい龍魂剣の刃を握る。一瞬にして王は完全な姿を取り戻した鎧に包まれていた。

「馬鹿にするのもいい加減にしろよ」

これまでののほほんとした声とは打って変わった冷たいこえは竜太ただ一人に向けられた。

王はそういつて鎧の先から爪を出した。

「殺して、捕まえて殺すよ」

王は竜魂剣と爪を交え、襲い掛かってきた。

「ん!？」

ようやく血が止まった八迫はそこに倒れている一人の人を見つけた。

「……。ここって俺たち以外にも人がいるのか？」

「よっこらしよ」と、思わずつぶやいて八迫は少年を担ぐ。

それと同時に奥の扉が蹴り飛ばされる。

思わず身構えた八迫の不安はぬぐわれた。

「早く、逃げるの!!!」

紋太とポチを担いだ理緒だった。しかしその表情に余裕はなく、その表情から一応の気配を察した八迫も、来た道に戻っていく。

「で、俺たちだけで逃げるわけだな……？」

戻ってみると亮祐がエンジンをかけていた。

「竜太を、おいてくのか？」

八迫が睨みつけるようにつぶやく。しかし誰もその言葉にはあえて反応しない。

「おいていくのか!!!」
思わず叫んでいた。

今、この場で戦っているであろう仲間を一人置いて自分たちは安全な場所に帰ろうとしている。それを十分に理解している八迫は自信を考えず声を荒げ、叫ぶ。

「仕方ない……」

亮祐は下を見ながらかるうじて聞こえるほどの声で呟いた。

その亮祐へと歩み寄った八迫は胸ぐらをつかんで壁に叩きつける。

「お前はいつもそうやって……。いつまでもこいつをガキ扱いして重箱に閉じ込めておけばいいさ!!! 何にも知らない薄情な奴になれるように手塩かけて育てればいいさ!!! いつもいつも紋太紋太つて……そんなに大事ならなあ!!!」

八迫は一呼吸おいて自問自答してみた。

これから言おうとしている言葉は言ってもいい言葉なのか、言わずに止めておけばいい事なんじゃないのか。

自分を抑えようと、制御しようとする。

が、言ってしまったと気付いてのは言ってしまった後だった。

「一般家庭で普通に生活させてやれよ!!!」
言ってしまったなあと気が付いてから八迫は壁に叩きつけられていた。

「こんな時に内輪もめしてる場合じゃないでしょう!?! あたし達には今、命がかかってんのよ!!!」

今度は八迫が胸ぐらをつかまれる番だった。

そしてさらにかつとなつて、頭に血が上っていると自覚もせず、言葉は続けられてしまう。

「じゃあ、お前たちだけで帰ればいいだろう!?! かえって呑気に昼ドラ見ながら煎餅かじってるよ!!!」

捨て台詞のように叫んで八迫は船を降りた。

居場所も無くなってしまった自分が入れる場所ではないと自覚したから、船を降りて、そして帰っていく船を見ることもなく再び来た

道を戻っていった。

今は、竜太を助けようと思うだけだった。

薄情な奴じゃないやい。

思わず、呟いた八迫は、何かを隠すかのように地面を蹴り飛ばし走り出した。

それからようやく気が付く。

拾った子を船に置いてきたことに。

「甘いなあ。これで自己犠牲だけで逃がせたと思ってんだらう。甘い甘い。だからガキは甘い」

壁に貼り付けられてしまった竜太は必死に逃げようともがいた。

「ほら、どうした、やってみろよ。お前の力はこんなものじゃないだろ？ やってみろよ。龍魂、爆発させてみるよ。それともあれか、これの使い方知らない？」

竜太は変幻自在に手から炎を出したり消したりする王の話をただただ聞くしかなかった。

「龍魂はな、使い方があるんだよ。こういう風に人を殴ったりする使い方があるんだよお！！！」

炎をまとった鋭い爪の一撃は、竜太もろとも壁を飛ばすことなど造作もなかった。

第九十五話 彼ら、決裂す（後書き）

たぶんこれは二十話以内で納められると思いますよ!?!?
今のところの予定ですけども。

第九十六話 猫人進撃す（前書き）

言い訳させていただきます。

テストだったので…。ごめんなさい

これからはしばらくできそつなので、これで割愛とさせていただけると幸いです…。

第九十六話 猫人進撃す

「で、この子はだれなのよ…」

理緒は壁に寄り掛かる形で寝かされている少年を見て思わずつぶやいた。

「…。俺が知るかよ」

すっかり膨れた様子で壁と向かい合っている亮祐は船が動き出してから微動だにせず、その場で座っていた。

「じゃあ八迫がおいていつたつていうの…。どうしろっていうのかしら…」

胴体着陸のせいで出力が落ちた行船の中で、空調設備だけが低く唸り続けた。

「竜魂の使い方も知らない者がこの国に立ち入ることは許されなんだよ」

鈍い音と共に壁に叩きつ駆られた竜太の首に国王は炎に包まれた鋭い爪を滑らせ力強く締め付けていく。

「死ぬ。死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ。お前が死ぬなら俺が地上に降りてやるよ。一文字の血は一滴たりとも残しておかない。」

ギリギリと首に入れられる力が強くなっていた。

「そこらへんで鎧剥いでくれるかな？ ついでにそれも解放してくれるかな」

後頭部にハウリングを貫いた竿が付きつけられる。

「俺のひ弱な攻撃じゃ、その鎧貫通できないんだわ」

竜太は王の後ろに立っている八迫の姿を見つけた。

「そう言えばさ、お前と一緒に戦うの初めてじゃねえか？」

のんきにため息を一つ吐きながら八迫は王を弾き飛ばした。

ようやく首から手が離れた竜太は思わずそこを撫でる。

「火傷…してるし…」

これは帰って冷やさないといけないなあと思いつながら竜太は王の方へと目を向けた。

「…えひっえひひひひ…」

王はその場で明後日の方を見ながら笑い出した。

「悲しいなあ…悲しいなあ…。とっても悲しいなあ…。君たちと遊ぶのはとても楽しい。一文字の血筋を絶やすのを忘れてしまいそうになるよ…。でもね？おしまいなんだよ…。もう、彼らは襲ってきてる」

八迫は竿を突き付けて王の顔を弾く。

「何のことだよ」

「えっひっひひひひひい…。えひひひひっ！！来る。来る来る来る来る！！奴らが来る！！！」

王が言い終わると同時に城内に衝撃が走る。

何度も何度もまるで、この城が攻められているかのように何度も衝撃が襲った。

「えひひひっ！！俺たち犬人は今までずっと猫人の国を襲ってたんだよ…。今、反撃されてるんだろうなあ。この国も終わりだぜ！！犬人と猫人は互いに潰しあって、滅びる！！えひっえひひひひ！！！」

さらに追い打ちをかけるかのように大広間の扉は開かれる。

「貴様ら、犬人をまとめて駆逐する！！われらは猫人守護隊。猫国領土侵攻罪により犬人国王サハラン抹殺を遂行する。並びにその従者二名も同じく抹殺する」

大広間に入ってきた猫人は完全武装し、その武器は国王、竜太、八迫の三人に向けられた。

「かかれ。抹殺だ」

にやふーっという掛け声とともに猫人たちは飛び掛かってきた。

「んむう……」

祀はゆっくり目を開くとそこには書類でよく見知った雰囲気顔が二つあった。

所長から手渡された最終目的の一人だった。

「あんたら……」

思わず声に出していつてしまつと理緒がこちらを振り向いた。

「あら、あんた起きたの！？じゃあ、あんた何処の何だか教えてくれる？何でここに居るのか、もね」

祀は顔の前に乗り出した来た理緒に思わずのけぞるとガツンという音でああ、頭ぶつけたなということに自覚した。

「で????」

理緒は壁に頭を打ち悶絶している祀に対し再び同じ質問を繰り返した。

「……？ちたはねまつし垂翅祀13歳です」

祀は言いながらとつさに逃げられそうな方法を探し、外を見て驚愕した。

「空……!!!」

一瞬にして窓へと駆け寄りそこから外に広がる空を見つめる。

「何……？空好きなの？」

話を途中でさえぎられ、さらに突然の行動による驚きでひっくり返ったためか、若干理緒の声は低くなっていた。

しかし祀はそんなことを気にも留めずにただ空を見ている。その眼は普通の少年が何かにあこがれている時に見せるような眼だった。

しばらく空を堪能した後祀はくるりと体を反転させると理緒へ話しかけた。

「ところでさ、平田竜太って、どこ!？」

亮祐は無言でまだ若干見える犬人の国を指さした。そして理緒がそれに言葉で補足する。

「竜太ならあの島に八迫って人と一緒に残ってる」

祀は若干首をかしげると無言でうなずき出口へと向かった。

「じゃあ、俺もう行くね。ありがとうございました」

帽子を外してぺこりと頭を下げた後、祀はドアを開けて外へと踏み出そうとしてから思い出したかのように体を反転させた。

「とりあえず、平田竜太と八迫さん？ だっけ、必ず送り届けるよ」

言い終わると同時に後方にバックステップで跳ね、常人にとっての自殺行為為空中落下を行った。

理緒は何度か祀の手をつかもうとするが、そのたびに空気に押されてその手は前に伸びない。

そして、扉は抑える人間が落ちていくことによって空気により閉められた。

「……！！死んじゃうじゃない！！！！」

とっさに操縦桿に手を伸ばして祀の姿を探す理緒は、祀を見つけて思わず操縦桿を握る手が滑り落ちた。

「空を……飛んでる」

実際にはその下にスケートのようなボードをつけていたのだが、それは小さすぎて見えないようだった。

空を飛んでいるという実感を噛みしめながら祀は通信機の通話ボタンの手をかけた。

そして、通信機は音を立てて鳴り始め、それは佚榎の声が聞こえるまで続いた。

「あのさ、みんな、どうしたの！！！！」

竹やりで刺そうとしてくる猫人を剣の峰うちで払いのけながら、竜太は隣で竿を振り回す八迫に聞いた。

「決別、だ。あいつがあんまり紋太紋太いうから、そんなに心配なら一般家庭で住まわせてやれっついで……な」

思わず剣を振る手を止め竜太は八迫に声をかけた。

「そんなこと言っても、拾ったのも亮祐だから、いろいろと責任感

じてるんじゃないかな。たぶん亮祐、紋太の両親、探してるよ？いつでも返せるように探してるんだよ、きっと」

竜太が言った詭弁に鼻で笑うことで返答した。

「あいつが紋太を手放せると思うか？親は海外で働いてていいところのお坊ちゃん、金だけしか余ってない、金より大事なものを持ってないような奴だぞ？そんなやつが、無いものを紋太で埋めようとしてる奴が紋太を手放せると思うか？」

八迫は再び竿を振り始めた。

「あいつは紋太から離れられない。だから、無理やりにも何をしても紋太から離れさせるべきなんだ。亮祐が、一文字紋太、を知る前に」

竜太には言葉の意味が解らなかった。一文字紋太が何を意味するのかが。

「あいつは、厄災だ。厄災の血。呪われてるんだよ、シャガンに理由が言われても、竜太にはしばらく理解することができなかった。『シャガン…？』」

いつの間にか八迫の両肩を押さえつけていた。

「あいつと、紋太に何の関係があるんだよ！！！」

肩にかかる負荷を物ともせず八迫は短く告げた。

「一文字は罪人としてシャガンに呪われた一族なんだよ。その国王が着込んでる鎧を持ち出した泥棒扱いなんだよ。あの鎧が何かも知らなかったシャガンが付けた烙印だよ」

「じゃあ、じゃあ！！紋太は一生呪われたままなのか！？」

八迫は竿で竜太を突き飛ばす。鬱陶しいといわんばかりに。

「呪われてる奴は、災いしか運んできてくれないんだよ。呪われてる奴にそんな都合のいいことが起こるわけがない」

「じゃあ、これまでの戦いも全部、紋太に引き寄せられて起こったことっていうこと！？」

小さい子供にそんな災いばっか背負い込ませてるっていうのか？全部知ったうえで、切り裂きジャックはほったらかしにしてるってい

うのか？

竜太は龍魂剣を地面に深く差し込み立ち上がるとその剣に炎を纏わせた。

「全部壊してやる。呪いだとか厄災だとか、小さい子供にそんな思いもん背負わせてる上も全部、俺が斬ってやる！！！」

龍魂剣が纏っていた炎はやがて竜太の手から全身に行きわたり竜太自身をも包み込んだ。

「まずは、その鎧！！溶かして鉛玉に変えてやるよ！！！」

一瞬で王の背後に回った竜太は容赦なくその背中に向けて龍魂剣を振り下ろした。

鎧は一瞬にして炎に包まれ、その姿を変えていく。そして中にいた王は斬撃の衝撃により足元がふらつく。

その周りには鎧だった鉄の塊が煙をあげながら水たまりのように飛び散っていた。

「龍魂……」

竜太のその姿を見た王はその言葉を口にして、その場で倒れ込んだ。

「次は…何を壊す！？呪いか…厄災か！！！」

竜太を取り巻く炎は次第にその周囲の瓦礫もともに燃やしていた。

「壊すんだ！！紋太が背負ってる思いもんを全部！！持たなくていいものを！！！」

「待て、そのサハランの従属。お前は全てを壊すというのか…。猫人の国をもか？？」

背後から背の高い猫が一匹はい寄ってくる。しかしその猫は竜太の周りの熱気で一定の位置からは近づいてはこられないようだった。

「それが、災いなら！！！」

とっさに竜太を止めようとした八迫は自らの額をぺしんと叩いた。

「しゃべり過ぎたあ！！！」

おそらくこのままなら理性ではなく感覚で動き始めるだろう。一気に教えすぎたと八迫は自らをほんの少し罵った。

「猫人の国を滅ぼす理由はないよ、竜太。君が滅ぼさなきゃいけない

いのはジャクソニー…本当の名前は、ジャックハンター」
上から声がした。

八迫が声の主を探すとそれは瓦礫の上に座っている船においてきてしまったはずの少年だった。

「こんにちは。ひよっとしてあなたが八迫さん、ですか？理緒さんに連れて行くって約束したのでついて来てもらえますか？？」

そういつて地面に向かって飛び跳ねた祀は一瞬にして竜太の龍魂を消し去った。

「俺の名前は？垂翅祀。それと…俺の友達の佚榎と鐵です」

その場所にはいつの間にか、三人の少年によって囲まれていた。

「これから、俺の目で知りたいと思います。あなた方切り裂きジャックが何を目的としたなんなのかを」

「どうも。鐵です。よろしくー」

ぺこりとお辞儀をする鐵に続いて佚榎が両手を幼気に振っている。

「佚榎です、よろしくー」

そして、祀はその場にいた全員を拘束した。

「これより、あなた方を連行します。主に、その犬人と猫人は所長からの命令で、切り裂きジャックたちの事は伏せているので少し、私たちと来ていただきます。佚榎と鐵は、その鎧の塊もよろしく、あいよーと気楽に鎧を回収する佚榎は猫人を束ねている綱を掴むと魔方阵を描き来た時のようにいつの間にか姿を消していた。

「俺は犬人連れてくねー。ってか犬人一匹とさっきそこで倒した白い綿みたいな犬だけか…。じゃ、先行つてるからさ」

佚榎が描いた魔法陣の上に犬人を引きずり込むと消えた。

その場に残されているのは竜太と八迫、そして祀の三人だった。

「さて…始めましょうか」

祀はそういつと竜太の肩にゆっくりり手を置いた。

「俺たちを、助けてください…」

その声はこれまでの凜とした声と一変し、とても弱弱しいものだった。

「俺たちを、あいつの手から助けてください。俺たちを殺し、俺たちを支配している所長から助けてください」

祀は嗚咽をこらえて言葉をつづけた。

「あなた方は、俺たち五人を助けてくれますか？」

巻きつけられていた紐が解かれ、竜太と八迫は啞然とする。

しかしそれもすぐに戦闘に引き戻され、三人は身構える。

「？垂翅祀、平田竜太、栗柄八迫の三名を補足。会話文の記録を判断。……？垂翅の裏切りと理解。よってこれより独自判断により上記三名を同時消去プログラムを発動する」

それは黒い影を立体化させたような存在だった。真つ黒。まるで幼稚園の子供が力任せに黒を塗ったかのような強く、濃い黒。しかし、風のように動き人間では不可能な関節の動きをすることからそれは人間ではないということが八迫には理解できた。

一方の祀はそれを睨み、歯ざしりした。

「完成…していたのか？人間型生物…」

更に祀に追い打ちをかけるかのように影の後ろから一人の人間が現れる。

「やあ、祀君。所長だよ？僕は好きだったのにね？賢い仔が…ね。

でもね、もう遅いんだ。賢い君はあの時と同じように二回も死んで、さらに今から三回目の死を遂げてもらおう」

所長は先端のとがった刃物呼び出すと恐怖で動けない祀の首にぴつたりと当てた。

「威燕かいえん、その二人を殺してくださいね」

所長が何気なく言った威燕という名前は祀を一瞬にして狂わせるのに十分な一言だった。

「あつ…あ…あああう…うああああああああああ！！！！」

所長は祀の様子を見て口をゆがませる。

「あつははは！！！！僕が約束守ると思つた！？お前の父ちゃんも母ちゃんも、みんなみいいな…人間型生物になっちゃいましたあー！！！！」

「闘争は罪を重ねる。一刻も早い罪を受けろ」
一方の威燕は無機質な声で八迫と竜太を追いかけていた。

「ああ！！！！うっうああああ！！！！」

祀が発狂する中、竜太は所長の背後に回り思いつき蹴とばした。

「…………。うあ…あ？」

蹴飛ばされ飛んでいく所長を見て祀は今まで下を向いていた顔を上げる。

「助けてやる。だから、一緒に来い！！！！」

答えを聞かずに竜太は祀の手を取る。

「八迫！！！！とにかく逃げるぞー！！！！」

竜太は大広間から走り逃げ出すと八迫とともに犬人の国から地上に向けて落ちた。

「え！？ちよ…ちよつと待って！！！！これは自殺行為だから！！！！
もう空はいいから！！！！」

祀は竜太につかまれている右手をバタバタすると叫び始めた。

やけに澄み渡った綺麗な青空の中、三人はただいつまでも落ち続けている。

第九十六話 猫人進撃す（後書き）

とうとう終わった鎧王編。落下していった先はいつたどこになるのでしょうか！！普通に本部に落とすべきでしょうか！？

そんなわけで次回より一応新章に突入させていただきます！！！！
次回第九十七話 彼らは裏切りを知り、友を斬る【仮】

第九十七話 彼らは真実を求めたかった。が…

「さて、見事逃げてくれたことだし、行こうか？威燕。犬人と猫人の人間型生物の製造に取り掛からなきゃいけないからね」

そして所長は余裕を持って歩き出そうとする。が、思い出したように手を叩いて威燕に微笑みかけた。

「祀君のオトモダチに伝えなきゃね。裏切り者がいるってねえ…」
所長は威燕の肩をつかむと一瞬にして消えた。

「本当なんですか！？祀はそんなことする人じゃありません、見間違いです」

所長室の中で呼び出された鐵は所長に食って掛かった。隣にいる佚榎は所長を睨んだ。

「嘘だ。祀は裏切って切り裂きジャック側に着くわけがない。俺たちは祀を信じます」

佚榎はそれだけ言うと扉に手をかけた。

それを回すと見慣れたいつもの廊下に出るはずだった。いつもは。けれども扉の向こうはいつもの廊下ではなく黒い影に覆われた牢屋につながっていた。

「…。どういうことですか、所長」

事態を判断した鐵が所長の机を再び割る。それに続いて佚榎も腰のチエーンに手を伸ばす。

「あんたが今やっていることは、簡略化して俺たちを倒すこと…だろ？やらせないよ、簡単にはね」

二人の少年が威嚇する中所長は鼻でふふん、と笑うと二人の首をつかみあげる。

「僕は賢い仔が好きだったのに、君たちはあんまりお仕事しすぎちゃったから頭に虫がわいちゃったんだね！？いいよ、その虫が死ぬ

まで、あの部屋でゆっくり休みを与えるよ」

所長は、素早く二人を牢屋に投げ入れ、人間型生物に命令を出した。

「退屈しないように遊んであげて」

そして、扉は閉められる。

数秒の静寂の後に、金属音が響き渡った。

「で、あんたは休まなくていいわけ？」

紋太を担ぎこんでから一時も動かずに貧乏ゆすりをしながらイライラしている亮祐に対して、理緒は冷たいお茶を投げつけながら話しかけた。

「…。俺さ、八迫に言われて思ったんだけど、やっぱり紋太をここに入れるべきじゃなかった。だから、紋太が治ったら、一般家庭が普通の家で生活させてやるべきだと思った」

理緒はいつの間にか亮祐の胸倉を静かに怒鳴った。

「あんたは八迫にそういわれたのが悔しくて、いろんな感情抱えて…それで喧嘩して、おいてきたんでしょ！！だったら自分が一度持った考えをやすやすと曲げてるんじゃないやねえよ！！！」

肩で荒く息をしながら理緒は亮祐を睨んだ。しかし亮祐から帰ってきた目線は魂の抜けたような目だった。

「でも…紋太は傷つかずに済むよな。そんで、俺はこんな思いをしなくて済むようになる。いいじゃんか。誰も苦しまない、誰も傷つかない」

それを聞いた瞬間に、理緒は亮祐を殴り飛ばしていた。

「逃げたいからって、それっぽい理由でっち上げて逃げようとするなよ。あんたがどうこうじゃなくて、紋太の気持ち考えてやりなさいよ…！！あんたが怖いから逃げるんじゃないやなくて、紋太のためだとか言って逃げるんじゃないやなくてちゃんと話し合ってから決めなさいよ…！！！」

その時、ちょうどよく手術中のライトが大きな音を立てて消えた。

「……」
「……」
「……」
竜太、八迫、祀の三人はほかに誰もいない本部の和室の客間にいた。ちなみに和室なのは客間は和室だろ！！という設計者の遊び心である。

「どういうことか、全部話してくれるかな？」

先ほどからの沈黙に耐え切れなくなつた竜太は少し声を荒げて口を開いた。

「……。助けて、ください」

相変わらず、祀は下を向いている。けれども竜太の沈黙破りのおかげか、少しずつ自分の身の上、現状を話してくれた。

「じゃあ、つまり今お前たちはそいつに監禁されてて奴隷扱いというわけか……」

八迫が要点をまとめあげると祀は涙でぬれた顔をあげ刻々と頷いた。「じゃあ、こつちから一つ頼みがあるんだが……？」

竜太は二人のやり取りをのんびりと眺めていた。傍らに置いてある冷たいお茶と硬い醤油の煎餅を相棒として。

「紋太の呪いをかき消してほしいんだ。お前なら、出来るんだろ」八迫が言った言葉に、竜太は煎餅を吹き出してしまった。

結果、その煎餅は八迫の髪に素敵な飾りをつけることになった。

「てめえ、一変どころか何百回も死ぬか……！！」

八迫は瞬時に立ちあがり竜太を追いかける。

竜太はそれから必死に逃げだす。

それは、まるで祀と佚榎、鐵のようだった。

「……。条件を呑みます……！！だから、今から助けてください……！！」
祀は頭が机にぶつかり鈍い音を立てたことをも気に留めずただ頭を

下げ続けた。

今まで途切れ途切れで弱い弱い感じだったのに、突然の反応に竜太と八迫は顔を見合わせる。

そして二人は同時ににやつくと祀に歩み寄った。

「とりあえず、くすぐられとけ!!!」

八迫が叫ぶと同時に四本の手が、祀に襲い掛かる。

コンマ数秒で理解した祀は顔を上げるがすでに時は遅かった。

客間に笑い声が響き渡った。

「じゃ…じゃあ…」

真っ白な壁に真っ白な廊下。そんな中で告げられたのは、紋太の体の事だった。

手術室から出てきたのは一匹の犬、ポチだった。

「…。ごめんなさい。こんなこと、頼んだから!!!」

理緒がやさしくポチの頭をなでる。

「あなたのせいじゃないから。あなたがそんなに苦しむ必要は全くないの。安心して」

かたんっと言う音とともに亮祐が膝をついた。

第九十七話 彼らは真実を求めたかった。が…（後書き）

とりあえず、今後の事は何も決まっていますませんが、またしようもない結末だけ考えていたりします。

結果的には が××達と一緒に することになっちゃおうという 予定です

それではまた次回！！！！

第九十八話 祀は決意し、乗り込んでゆく【仮】

第九十八話 祀は決意し、乗り込んでゆく。(前書き)

今週は金曜日更新は無理だなあと思ったので。

第九十八話 祀は決意し、乗り込んでゆく。

「本当、なんですか…?」

思わず亮祐は尋ねていた。

先ほど医者と言った言葉は、何度も頭の中で響き渡った。そして、何度もその考えを振り払おうとした。

けれども、考えは、振り払うことはできなかった。

そんな亮祐の肩にやさしく手が置かれる。

一瞬、それは理緒の手かと思っただが当の理緒は目の前で医者と話している。

ゆっくりと振り返ると、そこには蒼髪の医者がいた。

「あなたがしつかりしなさいな。じゃないと今度は峰うちじゃすまないわよ?」

看護婦長の権力を使い腰にドスを下げている元先生はこれまでに見せたことのないような笑顔で亮祐に微笑みかけた。

「せん、せ…」

亮祐はかつてしたように彼女の胸を借りて嗚咽を漏らした。

「あなたはもつと周りに頼っていいのよ。あなた一人で抱える必要のあることなんて何一つない。あなたには素敵な友達がいっぱいいるでしょ!?!行つてきなさい。あなたはあなたにできることを、成し遂げるの」

ポン、と肩を押すようにして看護婦長は亮祐の気持ちを押しした。

そしてその気持ちを理緒が掴む。

「さあ、行きましょ?」

足元ではポチが元気にワンツと泣いた。

亮祐は周りを見渡してから深呼吸すると、立ち上がった。

服の袖で涙を拭い、空を睨みつけ、病院を走って出る。

その背中を看護婦長と紋太の担当医は見送る。

「言わなくて、いいのかい?」

担当医の男は走って出て行った亮祐と、それに続く理緒とポチを見ながらため息のごとく漏らした。

「いいじゃない。こんな時は思いつきり暴れてこなきやいけないの。何を言っても止まらない。止まってちゃ、駄目なの」

腰のドスを柔らかかになでると看護婦長は来た道に戻っていった。

「いつまでも依存してるような子供は、駄目になる。だから親も威厳のある厳しい人でなかなか帰ってこない人だと思わせておけば、自立するわよ」

いつものような凜とした女性に戻った妻を見て、夫は微笑む。

「やっぱり、きついねえ…。そこが、いいんだけどね。さてさて僕は紋太君の様子でも見て来ようかな」

「俺の、この金箔で紋太君を斬ればいいんですね」

カーテンが風で踊る病院の一室で祀は金箔を両手で持っていた。心なしか、その手は震えている。

「いい。斬って、その全ての呪いを断ち切ってやれ」

斬った相手の周囲の空気を自在に奪う風刀金箔ふうとうが窓から入ってくる風を受けひゅうひゅうと唸っている。

祀は目をぐつとつぶるとその刀身を振り下ろした。

その刃は紋太に当たることなく空を切った。

「…。たぶんこれでいいだろ。行くぞ、祀。今度は、お前を助けてやる」

夕日が照らす病室の中で八迫がその場に似合わない笑顔で微笑んだ。竜太は【最初からこの場にいたのだが】事の次第をカーテンを噛みながら見ていた。

「じゃあ、案内します。俺たちの牢獄、離地園りちえんへ…」

夕方も終わりを告げるような時刻、亮祐は本部の机の上に置いてあ

る走り書きを手にとるとつぶやいた。

「あいつら、帰ってきたんだな」

ふと理緒とポチを探すと、二人りはすでにそばにいた。

理緒はその身を汀とメリケンサックで固めて。

ポチは犬人仕様の武装で膝を震わせていた。

「なあ、ポチ。もし、お前の国が片付いたらさ、それでもお前がまだここにいてくれるんだったら紋太と一緒にいてやってくれ」

亮祐はそのあとの言葉を無理やり飲み込んだ。

まだ、此処では言うべきではない。言わなくてもいいことだから。言わないまま、俺は全てを決めると決めたから。

「じゃあ、行こう。今度は、全員で帰ってくるんだ」

牢屋とは名前だけの空間だなあと鐵は思った。

すでに何時間此処でこうしているのかはわからない。

先ほど終わった人間型生物たちによる退屈しのぎはただの暴力で、すでに抗う余力が残されているわけでもない鐵と佚榎はただその一撃一撃を重く受け止めるだけだった。

「なあ……生きてるか？」

こういう時は起きてるかかって聞くもんだろう？なんてそんなことを言っている余力すらもない。

文字通り満身創痍。すでに指一本動かせぬ状態だった。

「生き、てるよ……」

水を欲している喉を震わせ鐵は答えた。

「……祀、裏切って……ない」

佚榎は祀が裏切っているとでも考えているのだろうか。それこそあの男が狙っているであろうことだろうに。

ただ、それが本心ではないことぐらい鐵にもわかった。狂ってしまう。

ここでただいるだけだと壊されてしまう。だから、

だから鐵は目をつぶり呼びかけてみた。

昔から何でもできて皆の中でリーダーみたいで格好良かった…否、今でも何でもできて自分たちの中でリーダーみたいで格好がいい、ヒーローみたいな祀に。

ただ、助けて、と。

「離地園…」

ふわっと風がなびく其処は家主の趣味であろうきれいにガーデニングされている庭園。しかしそれ打ち砕くのは所狭しと置かれている魔界の生き物の置物。

それは、美しい庭園を見にくい場所へと変貌させていた。

「いい趣味だな…。これが、離地園か。持ち主の美的感覚があらわれてる…」

八迫は持ち込んだ銃剣単射八十八式を構えるとすぐ真横に偶然おいてあった首に鈴をまいた狛犬のようなガーゴイルの石像に銃を打ち込んだ。

通常の八十八式ではありえない凄まじい爆炎とともにその石像は壊れた。

そして、その中から出てきたのは、先ほど壊したはずのガーゴイルだった。

「我はガーゴイル。離地園の入り口の守護者也」

青銅の輝きを失ったガーゴイルの体は黒一色で、その眼だけが不気味に赤く光り輝いた。

「ほっほっほっほ…。私の眠りを覚ます御方は誰かしら…。美しい男性？うんん…きつと私の眠りを終わらせに来てくださった私だけの、王子様」

さらに続いて白色の狛犬のような姿に金色の翼をもった生き物だった。

「私の名前はルクアス。エデンの園の守り神。そして…美しい愛の

狩人！！！」

ルクアスの目は蒼白に光り輝く。

「あいつらが、この土地への侵入者を防ぐ土地神！！！」

祀が腰に帯刀している王牙おうがら雷流らいりゅうに手を伸ばす。

それを見た八迫と竜太は互いに武器を構え、互いに微笑む。

「必ず、お前とお前の仲間を助けてやるから安心して闘つとけ」

八迫は男前に笑って突撃した。

「我はガーゴイル。離地園の入り口の守護者也！！！」

「私の名前はルクアス。エデンの園の守り神！！！」

二対の石像と三人の人間の戦いは火ぶたを切って落とされた。

第九十八話 祀は決意し、乗り込んでゆく。(後書き)

今回、祀編の核心にやっと近づいた気が!!!

そして次回は第九十九話 未題

…。何も決まっていなかったりしたりするのです…。
とにかくガーゴイルと何とかは倒して…。

第九十九話 離地園守護者、守護する。(前書き)

なんだかまたお話が収集つかなくなってきているような気がしてならないというか、うまく終わったためしがあっただんでしょうか…。これからも精進しますので、毎度のことですが、どうぞよろしく。

第九十九話 離地圏守護者、守護する。

ディスプレイだらけの部屋の中のセンサーが侵入を告げた。

その部屋で生活している所長は声を出さずに肩を震わせ、笑う。

「この音こそ、福音……。神の国が地近づいた証拠……」

物が壊れるのも恐れることなく木製の机に激しく拳を叩きつける。

「時は満ちい、神の国は近づいたあ……!!」

その声は室内の無機質物体を振動させる。

所長は左手首をおさえた。

「これで……これで贖罪ができるんだ……。神よ、私のこれまでの罪の数々、贖罪させていただきます」

所長は左手から血の気が失せるのも気にせず握り続けた。

「そして、私もあなた方の仲間になって見せます。その為の人体実験……。その為の一都市完全破壊……!!」

パソコンがウイイイインと唸る中で、所長はディスプレイに映る福音の元が懸命に戦っていた。

「我が熱線を受けてもまだ、立ち上がるのか。見れば八迫はボロボロではないか。諦める」

傷一つつかぬ冷静な石像は八迫を見降ろし完全な上から目線で終戦を告げた。

八迫は銃剣単射八十八式を銃から剣に移行シフトさせるとガーゴイルの首の位置まで掲げると即座に銃に戻し、至近距離で連射した。

「零距离連射……!!」

八迫は自分の体を物ともせず銃弾を詰めて打ち続けた。

ちなみに零距离というのは相手の物体との距離ではなく角度の事らしい。

「お前がこの守り人って言うなら、この庭園も、守って見せるよ」

あたりの惨状を見て八迫はふふつと笑った。
そんな中、灰色の煙の中で赤い目が光り続ける。

「我はガーゴイル。侵入者を排除することこそ使命。間違えるなよ、俺が守るのはこの中、だ」

煙が晴れる間もなく、ガーゴイルは躊躇なく八迫めがけて熱線を放った。

「ガーゴイルは決して侵入を許しはしない」

その熱線は風によってそれるなどということもなく確実に八迫へと飛んで行った。

「ほっほっほっほ…。いくらあなた方が御強いとあっても、この私の前では敵わないのです。そう…この強さの秘訣は、愛！…！」

けほつとむせてから祀は先ほどの衝撃波で飛ばされた王牙雷流の刀身を探す。

「ほっほっほ…。あなたが捜している愛は、こちらですか？」

声に反応し頭をあげると王牙雷流が浮いていた。

ルクアスの目が鈍い蒼に光り輝く。

「自らの剣によって儂く散っていく。これもいい…。愛！…！」

その言葉で王牙雷流はその切っ先を祀に向けると一直線に貫こうと飛んできた。

祀はとつさに金箔に手をかけるが、金箔は本来戦闘向きではないため、唯一の形見であるその剣は折れてしまつかもしれないと思うと祀は動けずにいた。

「諦め…それも立派な愛！…！」

白色のルクアスの体の一部分が突然地面に落ちる。

「幼気な子供ばっかじゃなくて、俺にかかってこいよ！…！」

祀と王牙雷流の前に竜太が立ちふさがる。

竜太が持つ覇凱一閃は豪火竜と龍魂が取り巻き、これまでの書類上の情報では見られなかった姿だった。

「豪火竜!!! 本当に龍魂で斬れるんだなあっ!!!」

竜太は肩で息をしながら先ほどまで全く攻撃を通さなかったルクアスの体を斬れたことに勝機を見出していた。

「祀、俺達は助けるって約束したから絶対祀の友達を助けるよ。だから…そこで少し休んでくれよ」

竜太は祀の方へ振り替えると笑いかけ、霸凱一閃を水平に構えた。

「龍魂、卸!!!!」

体の一部を失い不安定な状態で浮遊を続け、更に王牙雷流を操っていたルクアスに向かって水平に保った状態のまま霸凱一閃を押し続ける。

通常の刃物と違い龍魂をまとった刀身はまるで豆腐をさいの目切りにするかのように簡単にルクアスを二枚に切り下してしまった。

「愛だけじゃ、守れないものが世の中にはあるんだよ。家族とか…」
愛によってエデンの園を守り通せなかったルクアスはただの石像となり、やがて土に還っていった。

「ん、祀君、大丈夫だった!？」

草むらに落ちた王牙雷流を拾い上げ、祀に手渡すと、祀はぺこりと頭を下げた。

「ありがとうございます」

13歳とは思えぬような礼儀正しさを見せつけられ竜太は思わず返事をするのが遅れてしまった。

「あ、ああ、うん」

祀は懐から赤い布地に黄色いストライプなどが入った夏うーといった感じがする帽子を出すと深くかぶった。

「じゃあ、俺たちは、早く中に進もう。八迫なら、大丈夫だろうか」

竜太は歩いて進もうとするが、後ろの祀の足は一步も動こうとしない。

竜太は少し考えてもう一度、祀の手をつかんだ。

「さあ、行こう!!!」

そして、何も考えさせないように走り出した。

第九十九話 離地圏守護者、守護する。(後書き)

八迫がピンチ!!!な状況で終わってしまった今回のお話。

八迫はこのままだと普通に撃たれてしまいますが、まあ亮祐とかが助けに来るなんてこともないと考えても全く問題ありません。それだとお決まりだなあってなっちゃうだろうし…。

と、言うわけでまったく決まってる【またいつもの事です…】。どうやって助けてあげましょうかね…。

まあそんな感じで第百話 未題

第百話 新勢力はその牙を振るつ。

まだ、煙も完全に消えぬ中で、無機質な機械音が響き渡った。それはルークアスの物でも、まして八迫自身の物でもない第三者の声だった。

第三者の声に反応した八迫は思わずつぶっていた目を開き、その声の正体を見るや否や目を疑った。

「ルークアス、機能停止を確認。これより地上を離れ神の社へと移動する」

目に立っている白銀の甲冑は右手に持つ金色の西洋風の剣を構え、ルークアスを一振りで跡形もなく切り裂いていた。

「そして、神の社への定員数を計算中……………計算完了。離地園庭園に確認する生命体をすべて排除する。のちにすべての生物を無に帰し社へと行くものとする」

白銀の甲冑はくるりと体を反転させると八迫に向き合った。

「生体反応を感知……………排除リストに反応確認、排除する」

白銀の甲冑はその右手に構えた金色の剣を迷うことなく八迫に突き付けた。

すでに戦意すらも失っている八迫はその場で指一本も動かそうとせず、その場で白銀の甲冑を眺めた。

なぜかこの鎧の姿はどこかで一度見たような禍々しさを放っていた。大きく振り上げられる黄金の剣を目をそらすことなく見つめ、そして振り下ろされかける時に、その鎧をどこで見たものかを思い出す。

「そうか、これは犬人の……………!!!」

「否。我が真名は業^{カルマ}。一文字の血筋が持ち出した意志ある鎧!!!」
そして、白銀の甲冑はためらうことなくその剣を振り下ろす。

八迫が赤い血をまきながら、地面に倒れる。

がばつと体を起こすとベッドのすぐそばには白衣の大人がいた。どうやらその大人の人は紋太が突然起き上がったことに少々驚いて半歩下がっていただけれども。

「お：おはよう、調子はどうかな!？」

あはは：と笑いながら白衣の大人は軽く手を振ってくる。

紋太はここがどこであるかをぼんやりと認識してから手を振りかえした。

「!？」

声を出した、つもりだった。しかし、出てくるであろう声は聞こえてこなかった。

「!？」

もう一度、今度は先ほどよりも若干大きめに声を出そうと努力するが、一向に声は出てくることはなかった。

それを見ていた白衣の大人は言いずらそうに上目づかいで紋太に語りかける。

「紋太君、あのね？君はしゃべれないんだよ…。あ、って言うてもずっとじゃなくて、ちよつとの間だけ。退院するころには声出るようになってるから安心してね」

なんだかのほほんとした柔和な顔つきのその大人は、胸元から証明書を出すと自らが医者であることを告げた。

こんなのほほんとした医者は信用できないような気もするが、紋太はぎこちなく愛想笑いでごまかしたのだった。

声が出るとわかったことは嬉しいが、本当にこの医者で大丈夫なのだろうかという不安はぬぐいきれなかった。

「いい…いたよっ!!!」

ようやく離れ地にたどりついた亮祐はポチの鼻を頼りに八迫と竜太の二人を探していた。

「…。遅かった…みたい、ね」

理緒がそこで倒れている八迫を見て、思わずつぶやいてしまう。肩から迷うことない直線で斬られている八迫が離地園の地を赤く染め上げていた。

ポチが駆け寄り血の気がなくなっているその頬を舐める。

「…何でおれたちはこんな風に血を流してまでこんな事やってなきやいけないのかなって、いつも思うんだ」

亮祐はよいしょっ、と言いながら八迫を担いで歩き出す。

「何もこんな年端もいかないまだまだ経験不足の俺たちじゃなくても、本部にはもっと適任の奴らがごまんといるんだ。何もさ、俺たちじゃなくてもいいんじゃないかなって…。いつつも苦しい思いして、怪我ばっかしくなくても正義の味方は、どこかにきつといるんだろっなぁーって」

車に寄り掛かる形で八迫をそっとう置くと、車内から医療用具を取り出し、八迫に的確な応急処置を施す。

そして、自分では言わずにいようと思ったのにいつの間にか話してしまっている自分がいた。

誰にも何も言わずにいなくなるうと思ってたのに。できるなら紋太を連れて二人だけで平凡になるうと思っていたのに。

「なぁ…、理緒はさ、俺がこのまま辞めるって言ったら、一緒について来てくれるか？」

亮祐はこれまで見せたことのないような顔で、理緒に微笑んだ。

「やっぱ、親の前だし、言えなかつたけどさ、俺は向いてないと思うんだ。だから、最後にするべきことをして、やめようと思うんだ」
理緒はゆっくりと亮祐に近づいて声をかける。

「絶対ダメ。あ、イヤ、他人の事だからこんな事言っちゃいけないのかもしれないけど、やっぱりダメ。後悔するよ？絶対にあとで何で辞めちやつたんだろっつて後悔するよ？」

ああ、切ないっていう感情はこんな時の状態を表しているのかなあ…なんて、思っていた亮祐は一度目をつぶると深呼吸してから再び立ち上がる。

「じゃあ、まだ俺は辞めるべきじゃないんだろうな？」

その眼は先ほどまでの弱弱いスズメのような眼ではなく気高く獐猛な鷹のような鋭い、戦っているときの亮祐の顔に戻っていた。

「今回の事が全部終わってから、もう一度よく考えてみる。その時考えて、そういう結論に至ったとしたら、その時は…っ。その時は…っ。その時言ったことの、返事が、欲しい。どんな答えでも、俺は何も言わないから」

亮祐は八迫の傍らに落ちていた銃剣ガン・ブレイド単射八十八式銃剣を拾い上げると一人で歩きだしていった。

途中、突然立ち止まると背中を向けたまま理緒と、ポチに叫ぶ。

「ちよつと行つてくるから、八迫の事頼んだっ！！！」

言いたいことをすべて言い終えると、誰ひとりの返事も聞かずに走り出した。

(なんだか最近、空気並みの存在だなあ…。)と心の奥底でポチが思っていることがあり得なくもなくもない。

「ねえ、ポチ…。いまのつて…あれ？えつと…その…ね…」

髪の毛をくるくると指に巻き照れる仕草は女の子の物であった。

じれったくなつて、そして自分の扱いが酷いことに対する憂さ晴らしかポチは少し大きめの声で周りに聞こえるように理緒が言えない言葉を口にしてやった。

「プロポーズだよ…」

誰も聞いているような奴はいなかったけれども、とたんに、がわふーっ！！という猛獣のような叫びとともに理緒は赤面してうずくまってしまった。

ちなみにそのすぐそばでは八迫が結構な重賞で倒れてたりするのだが。

「人間型生物は、絶対に作つてはいけない生物兵器だったんです」

摩天楼を駆け抜ける途中、祀はつぶやいた。

「ただの知能を持たない生物ならよかった。対応策はいくらでもある…。でも、人間や、犬人など知能ある生き物がベースとなって作られる生物は中途半端な知能が残っている分、対応に困るんです」
突然に始まった高等生物学に竜太はぽかーんとしている中で豪火竜はその理論についての知識を吸収し、学んでいった。

「つまり、知能があるとこちらのしようとすることが分かっってしまうというわけですね…」

まったくもってついていけない竜太はいつの間にかその歩幅は縮まり、いつの間にか一人になっていた。

「あ…あれっ!!!豪火竜!?祀君!?!」

中学二年生。中学一年生と相方の竜と逸れて迷子。中一の方がちゃんとしてました。

「ちょ…なんでえ————!!!」

そんな中、竜太の背後ではなぜかカチャカチャという音が響いていた。

「神の社計画排除リストに確認。ただちに排除する」

背後から突然剣を振り現れたのは八迫を襲ったものとは別格の騎士だった。

「かつ…かつこいい!!!!!!」

「我の名は福音ゴスペル—文字の血筋が持ち出した意志ある鎧!!!!!!」

二本の剣を自在に操る鎧を前に竜太はカッコいいと思っていることもできずにその場から走って逃げだす。

「福音の名をその肉体に刻み込み、堕ちて行け!!!!!!」

第百話 新勢力はその牙を振るう。(後書き)

次回予告っぽい眩き。

今回は某動画サイトで音楽聞きながらの作業をしております。

というわけで【!?!】

次回はお話が結構進展してくれるのを望みます!!!

あ、でもやっぱり面白い…かなと思ってもらえるようなものが書ければ進行速度は二の次です。

余談ではありますが、業って書いてカルマと呼ばせるこちらは何と倫理の教科書からきております。というか今回の話で出てくる語句はもっぱら倫理の教科書から来ております。

いやー、学生らしいなあ…。

まあそんなわけで第百一話 タイトル未定

第一百一話 彼らは最終決戦へと立ち向かう。(前書き)

テスト期間で、テスト勉強せなあきまへんやんか!!!!ということ
で少々予定を変更してお送りさせていただきます今回の切り裂きジ
ヤックは殺しません!!!!

遅らせた分のお詫びとして今回は文章が長めとなっておりますが、
一般的にはこれぐらいが普通なのでしょうか…。
普通と勉強って難しいなあと思うのでした!!!!

第一百一話 彼らは最終決戦へと立ち向かう。

「霸凱一閃霸王斬!!!」

袋の鼠状態に追い込まれた竜太は覚悟を決め、霸凱一閃を振るって見た。

振るっては見たものの、福音ゴスベルと名乗った鎧は二本の剣を見事に使い、竜太の斬撃をかき消してしまった。

そんな悪戦苦闘を超えて絶体絶命の中で竜太は雰囲気か大人の王から溶かしたあの鎧の気をかすかに感じていた。

「感じ取っているか!? 私の存在を!!!」

それを読み取ったかのような福音は一歩的な攻撃ですでに竜太には反撃の糸口さえもなかった。

けれども、

けれども毎日毎晩までとはいかなくても毎回のようにこんな修羅場は慣れていると自覚し始めていた竜太はあきらめることをすでに選択肢から除外していた。

「俺は、助けてあげるって約束したんだあー!!!」

竜太はがむしやらに飛び出し霸凱一閃を福音に突き立てた。

それでもなお竜太を打ち取るうとする福音に対し、突き立てた刀身に龍魂をまとわせ、内部破壊させる。

電気回路に水を垂らしたかのようにうまく内部は壊れて、福音はそのすべての機能を停止させる。つまるところ、動かなくなってしまう。

「は…あ、ああ…。吃驚したっ!!! 心臓に悪い!!!」

そう言い残すと竜太は福音のわきを通り元居た場所に戻ろうとした。それなのに、突然足を何者かにつかまれ、それでも足は前に進もうとして結果として床に思いつきり鼻を打ち付ける形となった。

「ふんぐっ!!!」

「リスト照合者を完全抹殺を執行する」

左手がなくなつた形でよろよろと立ちあがつた福音は二本の剣を一本は無事な右手で、もう一本は器用に口に当たる部分にはめ込み竜太を抑えつけていた。

「神の社非定員リストから平田竜太を抹殺により消去」

そうつぶやき、データ処理をしているハードディスクの音は振るわれようとした剣とともに吹き飛んだ。

「……」

ひりひりと痛む鼻を抑え顔をあげるとそこには見慣れた仲間が立っていた。

「亮祐……」

亮祐は悲しそうな顔でそこに立っていた。

「あつはははあああああああああつあはあ！！！」

所長は椅子に乗ってくるくると回っていた。

ディスプレイに移る侵入者たちは予想だになかった行動をとり、神の国が来るまでの退屈のぎには十分な働きをしてくれた。

神の国からの使者が来るまでの時間は十分とはいかないまでも、決着をつけるには余裕の時間が残されている。

現に時間を忘れてまるで子供が母親に怒鳴られるまで遊んでいるかのように、所長はその映像に見入っていた。

時計と少し相談してから、所長は決めた。それは面白い見物としてのいつまでも見ている映像としては、いささかスリルにかけていた。だから、自らの手でひねりを加える。

自らの手で混乱させる。

「ちょっとマナーすると困るし、命でもかけて遊ぼうか？ 祀のオトモダチの命」

所長はこれまでの事を思い出しにやけながら拡声器の電源にスイッチを入れ、マイクに口を近づけた。

そのマイクは高性能で、決して口を近づけることを必要としないも

のだったが。

その声が聞こえてくる直前、祀の背筋に寒気が走った。

その寒気は、現実の物へと変換されていく。

「はぁーい。祀君？聞こえてるかなー、祀君と二人で互いに愛し愛し愛し合ってる所長だよー？うふふふふー」

ねっとり生暖かく離れているのにまるで傍にいて舐められているかのように湿り気を帯びている声、所長の声が大音量で響き渡った。

そして、祀の脳内には所長が強要してきた数々の指令という名の虐待が駆け巡る。

「ねえ祀君、君はこんな反乱おこしちゃったんだからさあ。全部片付いたら楽しいこと、またしようね？今度は狂って壊れるまで神の国で、神様に見ていただこうよ。僕たちの愛をさあ」

ゾツと、した。単純に、そこに感じる感情は穢れだった。汚くて、悍ましくて、何かを考えることをもさせない。

隣で体を振るわせる祀を見てこれまでの経験から培った豪火竜は放送が聞こえぬよう叫んだ。

「竜太たち切り裂きジャックが、あなたとあなたの大切な仲間も全部まとめてここから助けてくれますー！！！」

それは竜太も叫んでくれた言葉だった。きつと同じ状況下にあったなら八迫に亮祐、理緒そして紋太の四人も同じことを言ってくれるんだろうなあと祀は小さく微笑んだ。

「帰るぞ」

なぜか目を合わせてくれない亮祐は竜太を見ないまま一言つぶやいた。

そして反応しない竜太の腕を無理やり掴みあげ強制的に立たせると元来た道に戻ろうと早足で進む。

竜太はその手をほどこうと腕を動かすが、亮祐はそれを超える力だ
竜太の手をつかんでいた。

「俺は、約束したんだ!!! 祀君に、君と君の仲間を助けてあげる
から、だから俺たちに任せてくれて約束手んだ。だから、だか
ら俺はここから帰らないよ。俺が約束を果たすまで、ここから帰る
気も帰らせられることもないんだ」

ようやく、竜太を見た亮祐の目は冷たく視線だけで食い殺すかのよ
うだった。

「もう、これ以上何もさせたくないんだ。俺が大切だと思ってる人
に何かさせて、それで傷ついてほしくないんだ!!!」

本音を叫んだ亮祐を竜太はじっと見ていた。顔をそらさずに、亮祐
をずっと見ていた。

しばらくの沈黙のうちに、亮祐はいつの間にか竜太とともに祀と豪
火竜を探していた。

単純に亮祐が根負けして、俺が助けるではなく、俺たちが助けるっ
て言ったんだろう? というようなセリフで協力することになったの
だった。

「じゃあ、俺はその子供たちを探すから、お前は早く合流して庭園
集合だかな!!!」

突如そういった亮祐はたぶん一人で地下へと潜っていった。

竜太は再び一人で迷うことになってしまったのだった。

「なあ、鐵? 祀と所長が愛し合ってるってさあ……」

弱弱しく佚榎は尋ねるが、そこに鐵の返答はなかった。帰ってくる
のはただ規則正しい寝息だけで、佚榎自らが出した問だけが宙に彷徨
っていた。

「ねえ? 聞いた? 私の予想では、祀は佚榎か鐵、もしくは二人で付

き合ってるはずだったのにね。あんな髭面のいかにも痴漢しそうな危ないおやじとデキてた…むしろ強要されてたのかしら…わっかんないわねえ…砺礎」

こちらは佚榎と鐵の牢獄の隣に位置する牢獄ではあるが、中の雰囲気は打って変わってただ閉じ込められているだけというものだった。「いいか、凱史。今起きてるのは何かしらの力を借りて祀が起こした反乱だ。となるとおそらくここに助けが来るはずだが、その時はあたしたちはここで暴れられるということだ。今休んでおけ。今度はこれまでの分だけ、恩返し、してさせあげなければならぬのだから」

座禅を組み瞑想しつつ時を待つ砺礎の姿はまさに武士ものゝふのそれだった。「良いわねえ…。反乱って好き。壊せるからね」

凱史もまた同じように座禅を組み、時を待つのだった。

「ここに、いるはずなんです」

牢獄館へとたどり着いた祀と豪火竜は牢獄の中を探し回っていた。薄暗い、明かりもままならない状態の場所で、五階建て全百二十七戸ある牢獄の中からたつた四人を見つけるのは、今の精神状態ではかなり厳しいものだった。

しかし、要所要所に豪火竜が明かりをともしてくれる分、条件は少し良くなっているようだった。

「豪火竜、祀君!？」

パンツと大きな音を立てて扉を開け、進んでいくうちに竜太は開けてはならない扉を開けてしまっていた。

「そんなにゲームを終わらせたいのかい…。それとも、もつと楽しませてくれるつもり？」

腰に二本の槍を構えた所長が竜太を見て不敵に笑うのだった。

「僕は時期に神の国へ行くんだ。僕が見つけた箱を献上するというおまけつきでね」

ふと視線を右にやるとそこには サイズの段ボール箱のようなこげ茶色の箱が置かれていた。

「主を封じ込めたといわれる箱の一つだよ。これで僕は神になれるんだ、邪魔するなよ……。業^{カルマ}！！！」

突然、目の前に白銀の鎧が降ってあらわれそして黄金の剣を突き付けていた。

「やってしまえ、業。貴様の剣の糧に変えてしまえ！！！」
業は返事の代わりに剣を操り始めた。

「リスト確認必要なし」

「君が、祀君だね」

突如としてであった祀に対し亮祐は声をかけた。

そして傍らにいる豪火竜を見てそれが保護すべき対象であることを認識する。

「僕と一緒に来てもらいたい。君たちをここから逃がすために」
そういつて亮祐は背中に背負っていた佚榎と鐵の姿を見せる。

二人の姿を見て思わず駆け寄ろうとする祀の前に砺礎と凱史が姿を見せる。

「大丈夫だつてさ、疲労とかで倒れてるだけらしいからさ。だらしないんだよ、この男どもは」

砺礎がつぶやくと横から凱史が入り込み祀の手を取り自らの手で包み込む。

「心配してました。祀君、行ってください。私たちがこの場所は全部壊しますから」

突然気品を漂わせた凱史に砺礎は脳天チヨップで正気に戻す。

「戻ってこい」

そんな二人の姉妹漫才を中断させ、祀は亮祐に頭を下げる。

「伏檀と鐵と、砺磴と凱史の事、よろしく頼みました。俺は、戻ってやらなきゃいけないことがありますので、ちよつと失礼させていただきます」

正しい礼の角度で頭をきちんと下げた祀は礼をやめると豪火竜とともに戻っていった。

「庭園で待つてるから、三人できちんと戻ってこいよ」

思わず声をかけた亮祐は教科書にも載るほどの親しい友達の図を見て微笑み、庭園へと急いでいった。

祀は後ろについてきた砺磴と凱史に声もかけず、それでも二人は祀に着いていき、所長室へと走っていった。

「これで、俺たちは人間に、なれるんだ」

第一百一話 彼らは最終決戦へと立ち向かう。(後書き)

ちなみに今回出てきた箱というのは伏線かなんかになったりしてくれると嬉しいなあと思っておりますがそんなうまくいかずに使い捨てで終わっちゃうかもしれないねえ…。

早く、早く祀君たちがふにゅーとなる最後が書きたい!!!というかそのためにテストそっちのけで書いていたい!!!けれどそうもいきませんのでっ再来週までには何とかもう一本ぐらいは行けるのではないかと思いたいです。

お詫び其の二として、シャガンさんのお話とか作ったりして…。いつ終わるかわからないからあげないですけど。書き終わったら一回でドン、とだしてみたい…。
というか短編と言いつ張って文字数ギリギリまで書いてみたい…。もはや短編ですらありませんが!!!

次回 百二話 過去の自分と永別するか。【仮】
次あたりでカルマ壊して所長崩せたらいいと思う。

第二百二話 過去の自分と永別するか…？（前書き）

テスト期間中だというのに勉強もしないのはどういふことなのでしょう。っというわけで二日連続更新となりましたので、どっぞどっぞよろしく！…！！

第二百二話 過去の自分と永別するか…？

「さあ、ラストフェーズ最終局面にふさわしい宴を見せてくれ！！！」
所長は右手で業を押し進ませる。

「了解」

業は黄金の剣を構えなおすとゆっくりとその剣で円を描き始めた。

「…エアお絵かき？」

ただ剣で宙に円を書き続ける行為は最近のはやりのエア○○なのかと思ってしまうた。

「否。わが神技十円砲。十の円から放たれる無数の斬撃は回避不能。よつて一発退場」

業は円を書き続けるがその技を知ってしまった今、竜太は円を描かせ続けるわけにはいかなかった。

「やめんか危ないわ！！！」

霸凱一閃で円を描く剣を抑える。

その剣には龍魂をまとわせ、業の黄金の剣を溶かす。

「中止不可。強制発動八円砲！！！」

何もなかった空間に突然現れた八つの円はそれぞれが意思を持ち、竜太と豪の周りを囲みだし、業の合図で斬撃を放ち始めた。

「放て、神の一撃」

「ねえ、ポチ。私はなんて答えればいいのか…」
地面にうじうじと指をつけながら理緒はポチに尋ねる。しゃべる犬に、尋ねた。

なぜだが自分中心に話が回る予定だったはずがいつの間にか軸がぶれていることを察しているポチは腹いせに理緒に八つ当たりした。
「どうせ捨てられるんだよおー！！！」

ポチは激しく後悔した。いくら自分がメインキャラクターになれる予定だったとしても、今は違うのだから、サブキャラ、もしくはモブキャラのようになおとなしくゆーとーせーを演じていればよかったのだったと後悔した。

今のポチは首から下が埋まってる、いわゆる生首とかさらし首とかいう状態になっているのだった。

「ねえぼち。私はなんて答えればいいのかなあ」

しおらしく地面に書く姿はさながら乙女のようにだった。

……もとから乙女だったということは、聞き入れない。

「やっぱり一緒に脱退するべきなのかしら……」

ポチは自分の身を守るため、口を一向に開くことなく置物と化していた。

豪火竜は主の身の危険を察知し、一足早く剣へと戻っていた。

ここで走っているのは祀、砺礎、凱史の三人だった。

「ねえ、祀……」

所長がいるであろう場所まであと少しという廊下で、突如として凱史は口を開く。

「所長は何をたくらんでるのか、知ってる？」

祀は一瞬身を固くして質問にドキドキした。けれどもそれは想像していたことではなくて安堵のため息を吐き、凱史の方へと顔を向け、すべてを話そうとした。

けれど話す時間を与えてくれるほど、所長は優しくもなかった。

「祀君、砺礎ちゃんに凱史ちゃん私たちをおお覚えているる？」

突然曲がり角から現れたのは黒い影だった。

「あた、あたあたしよ。駄菓子屋さんの佐貴子よおおおお」

影はくねくねしながら滑り寄ってくる。声は聞こえるが、口らしき部位は見当たらず、声がどこから出されているのかも定かではなかった。

「おお、悪がきどもめ、今度はどんな悪戯するんだ？うちのガラス割ったら縛り首だぞ！！！」

続いて二つ目三つ目の影が現れる。

その全てが祀を、砺礎を、凱史を知っていて、また彼らも影になる前の人を知っていた。

「おばあちゃん、壘窀おじいちゃんも…」

凱史は自分たちが生きていたところに触れあった知人の変わり果てた姿を見て口元を抑える。

「動揺するな、凱史。彼らはすでに記憶だけの存在だ。死んでいるんだ！！！」

砺礎がスーツを投げ捨てる場所を探す。が、どこも影だらけで捨てられそうな場所はなく、仕方なく自分の腰に巻きつけると足首を軽く回した。

「祀、ここはあたしと凱史が何とかするから。助けてくれてる人たちの手伝いに行ってきた。助けられるだけじゃあ、これまでの私たちの意味がないかと思うんでね」

砺礎は言うや否や身近な影に上段の蹴りを放つ。

「祀、行ってきてくださいませ。私たちはあなたを守りますわ。主に、あなたたちの幸せを」

すでに頭の中で幸せ未来図【男の子編】が出来上がり、出版を待つばかりとなっている凱史は凱史ゴスロリ必須アイテム二十二の一つ傘をどこからともなく取り出すとそのフリルのついた傘を開きくるくると回る。

「貴方たちの愛情は私が守りますのよ…うふ…うへへへ」

涎をたらし、妄想の世界へと行ってしまっている凱史は使い物にならないかもしれないと思いつつ、祀は金箔を取り出した。

「道は自分で開くから。掃除は頼んだよ」

腰を低く下した祀は金箔を構えたまま叫ぶ。

「盟神探湯！！！！」

祀の叫びに呼応して大量の熱湯が降り注ぎ、影たちをひるませる。

「じゃあ、頼んだ！！！」

祀は駆け出して行った。

「じゃあ、凱史全部消すよ」

「えへっえはははは…」

凱史はすでに末期状態だった。

「しっかりしろ！！！！」

言葉よりも先に、思わず砺礎は手が出てしまっていた。凱史の頭に軽めの蹴りが届く。どうやら砺礎は言葉よりも先に、足が出てしまう性質らしい。

「砺礎？凱史？ああ、やっぱり貴方達だったのね。私の愛する娘たち」

影の奥から幼少時聞きなれていた声が耳に届き、砺礎は思わず影の方に目を奪われてしまった。

「母…上？」

奥から影をかき分け出てきたのは、他となんら区別のつかないただの影だった。

「さあ、いらっしやい。お話ししましょう」

決心はすでに揺らいでいて、自然と足は影に向かって行ってしまふ。理性はそれを止めようとするが、体はそれを無視し影の方へと歩みを進ませる。

とっさに手をつかみ生かせまいとする凱史だが、姉の怪力には勝てるはずもなく、ただ影に吸い寄せられていくだけだった。

「ふ、あつはあ…む…」

祀は全速力で走り終えていた。すでにここは所長室のそばで、体力回復も兼ねて祀の足取りは自然と遅くなってしまう。

扉のすぐ近くに立つと中では人が争っている気配がする。

休んでいられぬと思い、祀は王牙雷流を地面と垂直に構える。

「雷龍！！！！」

剣からはじけ飛ぶ雷は扉を破壊し、中の様子をよく見せてくれた。すでに動かぬ業に倒れる形で空気の刃に傷つけられている意識を失っている竜太の姿だった。

そして、その部屋の主は無粋な来訪者を快く招いた。

「やあやあやあ祀君。何かね？もう怖くなってきたとお礼の代わりに愛されに来ちゃったりしてるのかな、君は」

いやらしい下衆な笑顔で祀を見る所長は身分相応に下品な笑い声を立てた。

「俺、は…」

祀の体はすでに恐怖を感じ、動かなくなる。

そこに所長は歩み寄ってきて優しく抱きしめる。

「でも僕は許さないよ。反乱は。だから、君には痛い目を見てもらってから、それから僕の愛を贈るよ」

所長は指を鳴らし、一体の人間型生物を呼ぶ。それは黒い影の中でも異質の存在を放っていた。

「やっぱ死人をこれにとどめるにはうまくいかなくてね。更に進化した。しゃいました。人間型高等生物。その名も、？垂翅威燕ですー。ほら、威燕ご挨拶だよ」

あらわれた威燕は弟の手本として生前身に着けていた礼儀を見せる。「久しぶり、祀」

所長に抱きしめられ、その奥で頭を下げる兄という二つを脳内が理解した時、祀の精神は再び崩壊の一途をたどろうとしていた。

そんな祀の手を第三者が握りしめる。

「諦めんな。諦める前にやれることはいくらでもある」

竜太の手だった。その手は傷だらけで、血が乾ききっていないまだ湿っている手だった。

「必ず五人一緒に守ってあげると約束しただろ？大丈夫。俺はあきらめないから」

竜太は立ち上がり痛々しく微笑み、覇凱一閃を構える。

「お前はどっちがいい？その変態男か、それとも身内かどっちを受

け持つ？」

祀はかるうじて動く手で所長を突き飛ばし、鼻をすすり、叫んだ。

「俺は、変態にする……!!!」

涙をふくこともせず右手で王牙雷流を、左手で金箔を構え所長を睨む。

突然押された所長は尻餅をついていたが、二へ二へ笑いながら立ち上がり、吠えた。

「こんな最終局面もわるかあねーなあ……でもなあ、祀い。俺はお前が勿論大好きだからなあはなさねえぞ。お前は俺の言いなりで苦しんでればいいんだよ……!!!」

所長は、ようやくその牙をむいた。

第二百二話 過去の自分と永別するか…？（後書き）

もう少しで終わりそうですね。

そういえば英語でタイトルとかカッコいいなあと思ってたんですけどもですね。翻訳サイト使ってたのですが、英語を和訳すると全く違う分になったりして、今となってはわからないのです。どうしたらよいのか…。

というわけで次回第二百三話 所長の曲がった愛はただ一人に向けられる。

第百三話 二本の剣は交差して、 (前書き)

一応、もうそろそろ終わりが近いのですけれども……。とりあえずは
後二、三話で終わるのではないかと思われるのですが……。

第百三話 二本の剣は交差して、

すでに体半分意識半分が、母だった影に飲み込まれている。

外見は黒い影で、感じるのは痛覚だけなのに視覚が、そして体が母だとわかると中が温かく感じてしまう。

「母上……」

もう数年も母にあつておらず、恋しく思う砺礎は、影の中へと沈んでいった。砺礎の手を必死につかみ、影の中へと行かせまいとする凱史の体にも、貪欲な影は飲み込もうとしていた。

「戻つて、きなさいよう……!!!」

力いっぱい影に片足をつけ踏ん張るものの、姉は影に沈んで行ってしまう。

あの時は何もせず叫ぶだけだった。ただ立ったまま、叫ぶだけ。なんか、いろいろと、吹っ切れた。

「あんたまで、あたしを置いていくのかバカヤロー……!!!」

あの時とは違う。あの時はただ立っているだけだった。でも、今は守るための力も手に入れた。

気が付いたら涙がこぼれていた。

凱史はふと気が付いてしまう。どんな口を聞こうとも、実は自分が姉妹である姉を慕っていたことに。

「残つてる人の気持ち考えろよてめえ……!!!」

力づくで引つ張った。もう腕が外れようが関係がない。この場になぎ留めておきたかった。たった一人の姉を。居なくなるぐらいなら、腕を壊してでもいてほしかった。

姉を守るうとする凱史の周りにも容赦なく影は覆いかぶさってくる。

「私は守るんだあ……!!!」

牙をむいた所長は懐から針のようなものをだし、指先に突き刺す。

「いてえなあ……いてえ。でもこの俺の血が滴る針をお前に突き刺せば、俺とお前の血は一つになるんだぜ？めっちゃくちや嬉しいじゃんかあ！！俺とお前が一つになれるんだ！！！」

十本の指全てに針を刺し終えた所長は一息つく暇もなく祀に指を突き刺そうとする。

「弟を助けてやりたい。早く倒れてくれ。俺は弟を早く楽にしてやりたいんだ」

表情すら持たない影がこれまでになかった程声を悲壮に満ちたものに変える。

竜太と豪火竜はそんな影を睨む。

「ちなみに俺、もうくたくただから」

意味の分からない宣言をした竜太はすでに頭の方もつかれているかもしれない。

「では、速攻で終わらせて、弟を楽にする」

影は、言い終わる前に体当たりを食らわせ、竜太をひるませる。

「俺が弟を守らなければいけないんだ」

影は手らしきものを伸ばすとそこには隠し持っていたであろう刃物が握られていた。

「殺す」

ちよつと鳩尾に来た一撃の後遺症はしばらくの悶絶だった。

「豪火、竜ちよつと時間稼いで……」

霸凱一閃からにゆるにゆる出てきた豪火竜は半実体を持つと威燕の前に立ちほだかる。

「……ちよつと、俺助けに行くから頼んだ……」

よろよろと頼りなく立ち上がった竜太は霸凱一閃を重そうに引きずると所長の背後に忍び寄る。

「変態両断！！火龍撃！！！」

しかし、それは当たることなく、空を発火させただけだった。

「甘い！！俺と祀の愛は龍魂などという甘い炎では断ち切れん！

「!!」

クルリ、と回転し竜太の顔に右の蹴りを、左チヨップを右肩に打ち込んだ所長はニヤつきながら吠える。

「俺と祀の愛の武器。貴様にはつかわねえぜ!?俺と祀の愛には立ち入らせない!」

所長は祀に視線を送りつつも四肢は竜太にぶつけ続ける。

「議長!お待ちしておりました。こちらのお部屋で行われる予定です」

受付嬢が営業用の笑顔で客に微笑みかける。

「ああ、ありがとう」

議長と呼ばれた男はそんな受付嬢には目もくれずに教えられた部屋へと早足で進む。

カツカツ、という男が発する足音とともに眩かれる呪詛の言葉はその廊下に響き渡る。

やがて男は目的の扉の前で立ち止まる。

何の変哲もない、ただの木製の扉だった。中からは話し声が聞こえてくる。

男はこれから起こることを想像すると心臓が高鳴った。

じゅるり、と舌なめずりをし唇の渴きを潤す。

「さあ、さあさあさあさあ!!!これから始まる!!!史上最大最悪の全滅戦争!!!乗ってもらうぜえ?切り裂きジャック!!!俺の意のまま思うまま、動け喚け死に絶えろ!!!」

議長は、大きく扉をあけ放った
。會議は、始まる。

大きく交差する形で所長の胸に二本の剣が突き刺さっていた。右から刺しているのは竜太の覇凱一閃。

左から刺しているのは祀の王牙雷流。

その二本が綺麗に所長の胸を刺していた。

「ああ・・・ああああああああ。祀……僕を愛してくれないのかい!？」

びくんびくんと痙攣しながら口から血を吐く所長は優しく微笑む。

「僕はあるなに愛していたよ？毎日毎晩、君を忘れたことなんて一度もなか……」

大きく息を吐いた所長はそれっきり動かなくなり、次第に暖かさを失っていく。

「今までありがとうごさいました、所長。俺たちはあなたがいない新しい平和で生きていきます」

祀は王牙雷流を引き抜くと深々と礼をした。

それを見た竜太も霸凱一閃を引き抜き威燕の方へと走り寄った。

第百三話 二本の剣は交差して、 (後書き)

次回決着予定也

第百四話 全ての終わりを告げる鐘となる。(前書き)

今までで一番長い文字数になりました。

その分わかりづらくなってしまうかと思いますが、これでよろしくこれからしばらくのめどが立ちました。
とにかく、これにて祀編【仮】終了です。

第一百四話 全ての終わりを告げる鐘となる。

沈黙を保っていたその部屋に突如としてパンツという大きな音が室内に響き渡る。

音を出した本人はそんなことを気にも留めずにその音が完全に消えたのを感じ取って書類の束を見て話を続ける。

「こんなことが許されていいのか!!!」

見事に真つ白な髭を蓄えた初老の男は胸に評議員の印をつけていた。しかしこの場ではそれは何も珍しい事ではなかった。

この室内に招かれている全員の胸には当たり前のように評議員の証がつけられていた。

その室内にいる人は皆、どの人も年を重ねており、それゆえの権力を持つ者たちだった。

「つまるところ、君はこれまでの数々の事件を立証し、告発すると…そういうことなんだね!？」

頭に毛が薄く、痩せこけた男は書類に目通し机に爪をぶつけ、遊びながら男が言わんとしていることを要約した。

「告発するということは、日本支部を解散させると…そう判断していいんだね?」

要約に対する反応が返ってこないことをよく思わなかった男は再び同じ質問を問いかける。

すると、この件を持ち込み先ほど荒々しく机をたたいた男はその場に似合わない顔で笑みを浮かべ、元から低い声を一層低くし、賛同の意を表した。

すでにディスプレイには日本支部が起こした事についての対応、費用などが事細やかに記されていた。

そしてその中の一角には日本支部の面々の写真が掲載されていた。

「では、次に何か騒ぎを起こしてからというのでどうでしょうか?」
外見に似合わぬ真つ赤なスーツを着込み紫の髪を団子状にしている

老婆はふと提案してみた。

しかし、机をたたいた男はそれを否定する。その顔は、その老婆を見ることなくただ、この場で最高権力を振るうものの目を見続けている。

「すでに彼らは総領の命までもを危機にさらしておられるっ!!!
これ以上の危機は総領の命に関わる

「安心しろ」

その時ちよつど会議に混ざってきた男は頭に巻いていた包帯を取るとその素顔を周囲にさらした。

その場にいた誰もが息をのみ、ある者は椅子から落ち、ある者は胸の前で十字を切り続けていた。

「俺は、まだ生きている」

それは、切り裂きジャックとマリーネとの間に起つた戦いのさなか命を落としたはずの総領の顔だった。

「俺は、死なない。つい先ほども五、六歳の男の子に協力してもらったところだ」

くつくつくと笑う総領の発言に場が湧き上がる。

「また：またあなたは子供の命を奪つたのですか！？これで何度目だと思つているんですか!!! 事件そのものをもみ消す私たちの身にもなつてください」

「すまねえなあ…。だが、こうでもしなきゃ、俺は死んでしまう、からな」

くつくつくと再び笑う総領にも取締役の秘書の手により会議の書類が渡される。

総領は軽くお礼を言うと書類に簡単に手を付けた。

「ああ、あいつらを狩り取るつてのか。いいんじゃないの？すでにあの国には守るべき存在も、何一つとして存在しないんだからな。すでに我らの物となる手筈は済んでいるんだろう？その為の器だ。その為の伝説、だ…」

総領はその場にいた全員の顔を見渡すと懐から布を取り出し、机に

放り投げた。もつともそれに近い席に座っていた女はそれに手を伸ばし、布を外していく。

「世界の希望、世界の欲望だ。大切に扱えよ」

そして、言うだけ言った総領は音もなく消えていく。

総領が消えると同時に女は布を取り払うことに成功した。

布にくるまれていたのは鍵、だった。たかだか二十数センチの黒色の鍵。さほど重みがあるわけでもない、見た感じ特徴もないような鍵。しかしその鍵は何かと鳴動していた。

再び室内はざわつき始める。

オオオオオオオオオオオオオオオオ

更にそれだけにとどまらずに、鍵からは微量の風が送られてくる。

一番鍵の近くにいた議員の一人が椅子から倒れ落ちる。

ある議員が恐れおののき、

「あれは命を奪う鍵……！」

そして議長はその鍵を見たたとんに叫んだ。

「これにて会議を終了する……！そして、その鍵はこちらで保管させていただく」

かくして、日本支部解散の計画と鍵の謎を残したまま、会議は終了となった。

誰もいなくなつた会議室に、議長はただ一人留まり続け、天井を見続けていた。

汚れ一つない真っ白な壁から垂れ下がる中世西洋の宮殿にでもありそうな豪華なシャンデリア。それに突然電気が灯る。それは会議室に來訪してきたものがあるという証明だった。

「貴方はこの鍵を、どうするおつもりですか？霊体をばらまいてまで……」

來訪者の方も見ずに議長は天井を見続け、問う。けれどもその質問に答えは帰ってくることはなかった。

「貴方は本当に実行するのですか。日本支部の器は、それほど成長しているようには思えないのですが」

議長はいつの間にか手元に置かれていたりモコンでディスプレイを操作する。

これまでの数々の記録の中で、一枚の写真が移った時、議長はその写真を虚ろに見る。

「平田竜太は決してまだ伝説の七の切り裂きジャックになれる器の段階ではないと、私は判断するのですが」

ディスプレイに移り込んでいる一枚の写真を消去し、電源を切ると議長は立ち上がる。

「貴方は成し遂げるつもりなんでしょう！？私が何を言おうと。総領、あなたの私欲の計画を……シャガン総領」

そう言い残して議長は会議室を去っていった。ポケットに黒鍵を忍ばせて。

誰もいなくなつた会議室でシャガンは一人笑う。

「俺のために動き出そうぜ、議長。すべては俺のため。神の国計画は実現可能な物となっているんだからよ。俺が生きてた時とは違う。動き出せるんだよ、前へ」

やがてシャガンも姿を消す。

その時、切り裂きジャック本部ではごく数名しか知らされていないかった。

切り裂きジャックの存在意義と、その活用方法を。更には、なぜ平田竜太が必要か、ということ。

更には、シャガンが過去に遺していった数々の呪いを。

それが日本支部に対してぶつけられるのはそう遠くない未来である。

何も問題は解決してなどいないのだから。

「弟よ…」

狂ったように呼び続ける威燕は弟しか見ていなかった。つまり、その間に立っている竜太のことなど眼中になかった。

豪火竜の元へと駆け出した竜太は突然現れた壁によってさえぎられた。

否、それは壁ではなく人間型生物として命をもてあそばれた？垂翅威燕のそのなれの果てだった。

黒は一層と激しさを増し、混沌とともにこちらに体を向けている。

「うっう…」

ぶつかった衝撃に耐え切れずに竜太は倒れ込む。

そこには仁王立ちの威燕がいた。

「龍は倒れた。次は貴様の番だ」

威燕が黒を振りかざす。

ふと目線で豪火竜を探すと、それは息荒く横たわり、消えていくところだった。どうやら時間切れを表しているようだった。

視線に気が付いた豪火竜は小さく吠える。

「むう…どうやら、時間切れ、ですな…」

苦々しく笑う豪火竜はやがて霸凱一閃に吸収されていく。

何もできない。

自分を助けられると言ってくれている人たちが戦ってくれているというのに、ただ、見ていることしかできない。

目標が肉親だというだけで、手も足も出ない。

その肉親は、今自分を殺そうと歩み寄ってきているのに。

「さあ、一緒に行こう、祀…」

手には光すらも吸収してしまいそうな黒が握られている。

それを見た瞬間、祀は地面を蹴り上げる。

せめて、最後は自分の手で解放してあげたいと、地面を蹴りあげ王牙雷流をしまい、金箔を構える。

いつも手に伝わる手ごたえは、感じなかった。

「ねえ、あなたまであたしからこの子を奪うの!?!」
影に囲まれ押しつぶされていた凱史はふと目を開ける。

そこには砺礎が消えていく姿と、影が睨んでくる。

「ねえ、あなたはそうまでして私から大切なものを奪うの!?!」

母であった影はもう一人の娘を忘れたかのように睨んでくる。それは娘に向けられるような視線ではなかった。

「貴方なんか娘は渡さないわ!?!」

影は、砺礎をつかむ凱史の手を掴み強引にはがし、姉妹の中を裂く。汚いものでも触るかのようにつかまれた凱史の手を、影が手を離す瞬間、影に変化が起こった。

突然、周りの影が一斉に悲鳴を上げ、一つに固まっていく。一瞬は影に飲み込まれていった砺礎も不純物として認識され、影外へと吐き出される。

もう、母だった人のことは考えない。私を忘れてしまったようなそんな人の事は私は覚えていなくてもいい。私の分まで、砺礎が感傷に浸ってくれるはずだと、私はそう、信じた。

だから私は今戦ってくれる人を思う。

「何が起こったの? 祀、勝ったのかしら……」

砺礎の手を握りながら、凱史はつぶやいた。

私の家族は、姉一人だから。

そんな中、なおも悲鳴を上げ続ける影は完全な黒い球体へと変化し、祀が向かって行った方向へと吸い寄せられるかのように消えていく。

「……………所長……………」

凱史の脳裏に、ふと残忍な笑みを浮かべる所長の姿が浮かぶ。

私たちに指令と偽って私用を頼んでいる、いつもの所長のどす黒い笑みだ。

「気を付けてね、祀」

砺礎の手をぎゅっと握った凱史は祀の無事を祈った。

冷たくなっていた体が体温を取り戻し、右手の指が時折かすかに動く。静かに、だが確かに動くその指は生きていることの証明だった。次第に、静かだった呼吸の音が聞こえだし、それに気づいた竜太は振り返る。

しかし、振り返る前に竜太の頭はものすごい握力で持ち上げられる。そしてその死者だった男は蘇り、ゆっくりと口を開いた。

「痛かった…だからそろそろ本当に愛しちゃうよ…」。愛して愛シテあいつで、殺しちゃうよお！！！祀いい！！！」

生き返った所長は体に青い炎を宿し、竜太の頭を鷲掴みしながら祀に歩み寄り、その途中にいた威燕を左手で吸い込む。

「久々に会えた弟は、愛せたか？ニヒヤヒヤヒヤ！！！」

その口から滴り落ちる涎を気にも留めることなく、所長は竜太をつかむ手にさらに力を加える。

むぎゅ…と変な音と共に竜太は意識を失う。

「愛！！！素晴らしきそれは、この世を救えるたった一つの宝具！！！！！」

息を荒く叫ぶ所長の愛は祀ただ一人に注がれていた。

「……さあ、祀、こつちにおいでえ」

それに祀は答えなかった。答えられなかった。

一度ならず二度までも目の前で何もすることなく命を失っていった威燕の姿は祀を落胆させるには十分すぎる薬なはずだった。

全てが所長の計算されているシナリオ通りに事は運んでいるのだった。

「ふふふ。僕に来てほしいのかい…行くよ、今すぐ君を殺しに行つてあげるよ」

所長は今まで作ってきた人間型生物を吸収し、先程と比べ三倍ほどに膨れ上がっている体で祀に歩み寄っていった。

もう手を伸ばせばその金色に輝く髪に手が触れるほどの距離に至っ

て、所長は不気味にほほ笑む。

それに対し、祀は俯いていた顔を所長に向ける。と右手でつかんだ金箔で竜太を捕まえている所長の手を斬りつけた。

斬りつけてから、祀は斬った感触ではなかったことを不自然に思い、自らの右手を見る。そこに祀はやつと気が付いた。持っていた剣が王牙雷流でないことに。結果として金箔は刃こぼれした事に。

「んふふふ…痛くないっ！！！これも愛だねえ…、僕達を守ってくれるア、イ」

所長の手は再び祀へと延びる。

しかし今からでは抜刀速度が間に合わない。なすべがなくなった祀はとつさに叫ぶ。

「く、盟神探湯！！！！」

叫んでから、祀は失敗したと悟る。今の今まで何の反応もないから忘れていたが、所長の手には意識を失った竜太がいまだつかまっている。

盟神探湯は熱湯を浴びせて罪の判決を促すもので、その湯は火傷させるものでもあり…。

一瞬目を覆いたくなるような光景になるだろうと予想し、目をつぶる。

案の定、奇声が聞こえて祀は申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

そして、恐る恐る目を開けると、竜太が湯気に包まれ、立っていた。「熱い、痛い熱い、痛い、熱い、痛い！！！！」

叫びながら痛さをぶつける竜太の覇凱一閃は龍魂と熱を取り巻き、所長の体を解体していく。

解体されていく所長の大きさはほとんど従来の人間の大きさへと強制的に戻されていく。

しかしその速度に負けることなく人間型生物の吸収は行われている。削られては治り、削られては治る。まったくの無駄であることを祀は悟った。

打つ手も、それを考える時間も残されていない祀は頭脳より本能を

信じ、今度こそ間違えることなく王牙雷流を手に取り、所長へと斬りかかる。

膨大な数を作られている人間型生物の吸収に対し、限られた力しかない人間とでは、話にもならない状況に置かれていた。

そんな中、竜太が突然叫ぶ。

「俺は！！！お前なんかで立ち止まれない！！お前を超えて、切り裂きジャックに訴えるんだ！！壊れてるあいつらを叩きなおすんだ！！！」

突然の竜太の叫びに反応した霸凱一閃の刃が一瞬変色する。鋼色から濃い紅色へと。

霸凱一閃の律動はより一層激しさを増し、刃の色も、それに続く形で濃くなっていく。

更には、いつの間にか祀の王牙雷流もそれに呼応するかのようにならぬ刀身に激しい雷をまとわせる。

紅い霸凱一閃は所長の体を滅して、迸る王牙雷流は所長の体を分解していった。

それは剣が叫んでいるかのように二人を通じて外へと放出される。

まるで、剣自体が意思を持っているかのように。

そして、竜太と祀は流れ込んでくる言葉をそのまま口にする。

「王牙紅雷一閃！！！」

これまでにない霸凱一閃の発火と、これまで見たことのない王牙雷流の落雷は互いが絡み合い、より大きなものとなり所長を含めすべてを壊していく。

祀は柄を握り直しそれを深く差し込む。

「ありがとうございます。所長！！！あなたのおかげで俺たちは人間としていくことができます！！！」

今度こそ、終わりにしようとする祀は決心を込め深く深く差し込む。

「イヤだ！！イヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだ！！！」

！俺は死にたくない、祀と一緒にいるんだあ！！！！おいで、僕と君とは結ばれている！！！！出会うべくして出会った二人なんだよ！！！」

聞いていて腹が立つ。なんというか、むさくるしいというかなんというか…。

竜太は思わず右手を剣から離し、顔面に拳を叩き込んでいた。

「ぐずぐずうるっさいんじゃ!!! 嫌われてんだからいい加減にして!!!」

竜太とともにさらに燃え上がる覇凱一閃は所長を貫通させていた。先程と同じように痙攣をおこし、血をしたたらせながら所長はゆっくりと祀の頭に手を置く。

「でも、それでも僕は愛している。愛して愛して愛しているんだ…」不気味にほほ笑む所長の顔は凍りつき、そして生存不可能と思われるほどの血を吐き出す。

所長は人間型生物の吸収速度を速めるが、力の前にすべてが崩れ去る。

更にけいれんは続き、血は零れる。

そして、床一面が血で染められる頃、祀はゆっくりと王牙雷流を所長から抜き取り、剣の油をふき取る。

ゆっくりと竜太の方を向き頭を下げる。

「ありがとうございます。俺たちを助けてくれて」

言い終わると同時に祀は地面に倒れる。とっさに手を伸ばし、かろうじて血の床に倒れることを防いだ竜太は祀を背負うとゆっくりと歩きだした。

「これから君たちは、自由に生きていけるんだ」

「祀!!!」

離地園の発着場にした場所に竜太の姿が見えると、凱史が駆け寄ってくる。しかし、背中で背負われ意識を失っている祀を見るとほとと安堵のため息を漏らす。

「寝てるだけですか…」

クルリと回って船に消えていく凱史の頬は赤く染まっていた。そん

なことに気が付かない竜太は呑気に船に乗船した。

「じゃあ、本部までー！！！」

空元気で叫ぶ竜太の頭に理緒は拳を叩き落とす。

「っさいわ！！！」

一撃で竜太は静かになった。涙目で理緒を睨むが、その視線は理緒には全くの無駄だった。

「じゃあ、帰るぞー」

亮祐がエンジンをかけ、船が浮く。

やがて、一行は離地園を離れようと離陸する。けれども彼らは忘れていた。

離地園所有者の企みの全てを。

全ては、神の国計画。

だがそれは所長すらも知らぬ事だったが、計画は所長がどれほどやるうとも達成することはありえなかった。

計画には欠けているものがあつたのだ。

それは黒鍵。すべてを解き放つ黒い鍵。そして、それを操る者。

そしてそれは、切り裂きジャックの議長の手元にあるのだった。

切り裂きジャックたちの本部で休ませてもらってから数日後、町がまだ眠りについていているころ、一人の少年は歓喜の声をあげた。

「…っほんとに、いいんですか!？」

朝日を浴びてキラキラと輝く祀の金髪は町内の目を引いた。パジャマ姿で外に出ているのは二の次だ。

しかし誰もが寝ているような時間だったため、一人の少年の目に留まるだけだった。さらに、そんなことは気にも留めない当の本人は、普通の子供の格好をしていた。年相応の格好なのだが、本人の身長の問題もあり、どう見てもランドセルを背負うような年齢にしか見えないのだった。少し背伸びをして、もうすぐ中学生、というよう

な容姿だった。

そんな祀は亮祐と二人、これから自分たちが住む家の前で立っていた。

「もともと、君は竜太に助けってくれと頼んできたんだろうが、こいつにはできないだろうから、こっちでちょっとだけ余計なことしたんだけど、迷惑じゃないかな？」

亮祐があはは…と笑いながら言うのを聞いた祀は再び頭を下げる。祀の金髪に反射した太陽光が目まぶしい。亮祐は思わず目を細める。

「新しい家に、学校に家具とか…俺達に普通をくれて、ほんとーにありがとうございます！！！」

頭を下げている祀に対し亮祐は慎重に話を進める。

「それで、頼んでいたこと、なんだけど任せても大丈夫かな？」
質問の意味を理解している祀は黙ってうなづく。

「任せてください。こんなに沢山の物を貰ったんです。何かあったらすぐに言ってください！！俺にできることがあったら手伝わせていただきます」

につこり笑う祀の頭にぽふっと手を置くとわしわしと撫でてから呟いた。

祀は一瞬きよんとするが、思い直して亮祐を見る。

「頼んだよ。？垂翅祀君、俺は、いつでも力を貸すから」

亮祐はそれだけ言うとその場所から姿を消した。

その場から文字通り消えた。

祀は亮祐が言った言葉は紋太を頼むという意味でしか解釈できなかった。だから、その時何も考えずに任せてくださいと返事をした。それは所長から解放してもらった後で頼まれていた。けれども、その言葉にはもう一つの意味があったのを、祀は知ることがなかった。大きく伸びをした何も知らない祀は亮祐がくれた家の中へと入っていった。

「さてと、洗濯するかなあー。選択の後は買い物行ってご飯作って

やって、そんぐらいかな？」

すっかり主夫と化した祀は鼻歌ともに建物の中へと消えていった。それから祀は声をあげて叫んだ。

「お前らとつと起きて働けえー！！！」

少年たちの人生はふりだしから、始まる。

「目標補足。監視を続けます」

電子音が空疎に響き渡った。

それに男の声が続く。

「監視続行。違法行為を発見次第、突入します」

背中に執行官と縫われた羽織を羽織っている男は耳に着けているマイクに報告した。

第四百話 全ての終わりを告げる鐘となる。(後書き)

最近思い始めたのですが……変なタイトルだね。

しかもなんか殺さないって言ってるくせに……ねえ…。

それでは次回からはしばらく休憩としてなんかちみちみしていきま
す。まあ、いわゆる短編ってところですか……。そんなことしたら、
裏面の意味がなくなりますねえ…。

ということでもまあまだ祀編は終わりませんよ、終わらせませんよ。
季節外れの新学期ってとこですかね…

次回第百五話 入学式だよ、早く起きろよ!!!

第一百五話 小さい僕は独りぼっち。つて、ええ！？

僕の名前は？垂翅祀、この建物を貰って住んでる、今ではただの中学生なんだ！………ほんとは、今日からちゃんとした中学生なんだけど。今までは四月からは中学生だ！！なんて思ってたけど、ほんとに今まで春休みだったから今度こそ胸を張って言います、中学生です！！！！

時間は朝六時十二分と三十三秒を過ぎたところ。

もうそろそろみんなを起こさないと遅刻しちゃうかもしれないので早く起こそうと思います。

「おらーおきろー。朝だよー？」

………

知ってるんだ。ホントはこんなんじゃないや起きるなんてありえないって。もしこんなので起きたら絶対に空から危ないものが降ってくる。と、言うよりも降り注ぐに違いない。そうになったら怖いので、玄関から一歩も出ない。何があっても出ない。絶対に出ない。出ないっただけ出ない。

まあ、こんなところで考えていても仕方がないので壁に立てかけてある王牙雷流を鞘から出す。

心なしか、重いような気もする。

はしゃぎすぎちゃったのかもしれない。中学生だー中学生だーつて。さすがに三時まで騒いでるのはやり過ぎだったかもしれない。

それはさておき、十分に殺気を込めて枕の上に乗っかる頭めがけてこの刃物を振り下ろそうと思うけど、きつと避けるだろうから、また枕は新しいのを買わなくちゃいけない。それでいつも文句言われるけど、それならそうなる前に早く起きてほしい。

でも、よくよく考えたら、この剣は雷を出せるわけだから、軽く焦げてもらえばいいと僕は思いついた。雷だから焦げることはないのは知っている。焦げるまで高音の雷で起こしてもらおうって意味だ。

「豪雷竜、頼んだ」

そう、僕の剣はどうやら竜太の炎斬刀霸凱一閃と同じ刀鍛冶が兄弟分のように打ったみたいで、どうやら王牙雷流にもちゃんと龍がいたらしい。

これは切り裂きジャックの栗柄八迫が、興味本位で調べた結果判明したことだ。僕はあんまり気が乗らなかつたけどなんかアイスを渡されて、食べようとしたら八迫と剣は消えてた何てこともあり。本人【龍？】今の今まで出てこなかったのは……寝てたらしい。なんだか豪火竜の方がかつこいいなあと思っていいたら、軽く痺れさせられた。どうやら僕は考え事が口に出してしまっていたらしい。

「ほい、起きましたよ。じゃあ、まだ寝てるから」

ニユーツと再び剣に戻るけど、一体どれだけ寝ればいいのだろうか……。

そんな僕の前に佚榎と鐵が起き上がる。

「おはよー、祀」

佚榎がぼふうと僕の頭に手を載せてわしわししてくる。

気のせいか、なんか佚榎が大きく見える。何でだろ。

ちなみに佚榎っていうのは僕の友達で、檜葉ひば呀佚榎。

言っちゃあなんだが、子ども扱いをされるのは嫌いだ。佚榎と鐵は僕より誕生日が早いわけだから僕より年上ってなるんだろうけど、でもやっぱりそんなに年齢が変わるわけじゃないんだから、そんなあからさまな子ども扱いというのはやっぱり嫌いだ。僕はそんなに子供じゃない。

それに続いて、鐵もおはよーと言って頭をわしわしする。

だから！僕は子ども扱いされるのが嫌いなんだあー！

鐵っていうのは、僕のもう一人の友達で、……名字……なんていうんだろっか……。

僕の頭は二人にわしわしされていて、すでにぼさぼさだ。元から割と跳ねてる髪の毛はわしわしによって無造作ワールドヘアーに早変わりしていた。むう……。くしが通りにくいから直すの大変なのに……。

それはさておき、そもそも僕を子ども扱いするんなら、あいつらが朝ごはんぐらい準備してくれてもいいんじゃないかと僕は思う。子供にご飯作ってもらって情けなくないのか。現に、砥礫と凱史は手伝ってくれてる。

なんだかそこでも僕は子ども扱いされているような気がしてならない。包丁は持たせてもらえなかったり、にんじんは皮むき器を使わされたり……。

刀ちゃんと使えるんだぞーって言ったら、刀と包丁は違います！！
！って二人に怒られた。こんな時だけ仲良し姉妹。

何でだろう……。僕はみんなを助けたはずで、リーダーって、呼んでなかった……？

なんだか少し泣けてきた。

よし、今日は朝ごはんの時に聞いてみよう！！なんで僕を子ども扱いするんだーって。

幸い今日はみんな起きてくれたし、時間はある。よし、聞いてみよう。

な、なんですとぉー！！！！
し、知らなかった……。ぜん
っぜん知らなかった……。

どうやら今の僕は小学校二、三年生ぐらいの外見になっているみたいなのです。

通りで、霸凱一閃は重く感じて、佚榎や鐵や砥礫に凱史が大きく見えるわけだ……。

通りで、僕が子ども扱いされてるわけだ……。

しかも、これはしばらく治らないらしい。

何でじゃ

！！！！いつの間にかこんな危ないもん飲ませた

んだ！！！！何で僕に飲ませるんだ！！！！

あ、今気が付いた。そういえば僕の一人称が、いつもは俺だったのに今は僕しか使ってない！！なんてこった…。

っていうか、今日これから入学式なんだけど。入学式から欠席って第一印象最悪かー！しばらく治らないって言ったら、しばらく休みじゃんかー！第一印象どころかもうヒキコモリのレッテル張られてるわ。もう僕中学校行けないじゃんかあ！

それでさあ、僕はどうしたらいいのかな…。

とりあえず、切り裂きジャックのマッドサイエンティストさんの栗柄八迫さんに助けを求めに生きたい。けど、外に出られない。

靴は大きさが違って歩けないし、その前に今から歩いて行ったらそれだけで時間が無くなってしまう。

僕は中学校にいかずに小学校に行くのか！

何で義務教育なのに戻ってるんだよー！

おかしいだろー！

皆まとめてばかー！もうまとめてバカ！！！！

僕はこのまま一人でお留守番かよー！！怖いじゃん、寂しいじゃんかー！！！

決して僕が弱虫とかそういうんじゃないんだ。小っちゃくなっちゃったからほんの少し心細いだけなんだ！

そんな葛藤をしているうちにすでに佚榎は学ラン、ていう僕も今日着る予定だった制服を着てるし、鐵はとっくに準備できてソファァーでテレビ見てるし。

凱史と砥礎は女の準備は長いのよーって部屋にこもってるし。

「もうやだー。やだったらやあーだあー！」

……………。そもそもなんで僕がこんな目にあってるんだらうか…。何で？僕なんかした？いや、なんかはしただろっけど、こんな対価が来るほどの大それたことはやってないぞー？

部屋にこもって布団にもくるまってるってと突然扉が開いて佚榎が入ってくる。

ほつといてほしい。僕はもういいんだ。泣いてるんだあー！

「よ、大丈夫？ 祀いー」

ニコニコ笑ってるし。にやにやしてるし。絶対心配なんかしてくれ
てなし。絶対面白がってるし…。

「じゃあ俺ら学校行ってくるから、お留守番頼んだわ」

え！？マジですか、僕お留守番確定ですか。助けてくれてもいいん
じゃないかな…。

それと、また頭ポフポフするのはいい加減にしてほしい…。さっき
ようやく、くしとうしたのにあつという間に無造作ワイルドヘアー
祀君に逆戻りだ…。

もういい加減にしてほしい。

「ガッコー行きたいー！！！！」

なんだか泣けてきた。すごい泣けてきた。僕だつて中学校楽しみ
にしてたのに…。

「僕は中学生だー！！！！」

もういい、泣く。泣いて泣いて泣いて、困らせてやる。誰も学校な
んて行かせないんだからな。僕の体がちっちゃいうちは誰一人学校
になんか…。

「いつてきまーす」

あつ！あいつら四人がそろいもそろつてこんな幼気な子供の僕を置
いて学校なんて行きやがった…。

……………つまるどころ僕はこの家に今ひとりなわけで……………誰もい
ないわけで…。

「うわわー……………」

目にもとまらぬ早業だ。僕は一瞬のうちに布団にくるまり枕を抱き
しめ震えてる。

お化けは怖くない。怖くないんだけど、ちょっと恐ろしい。ちょっ
と恐ろしいから…やっぱり怖いつ…！！…！！

僕はそのまましばらく震えていた。

がたがたぶるぶる、がたがたぶるぶる。

ふと気が付くともう朝のニュース番組は終わっていて、微妙な時間帯になつていた。

どうやら僕は泣き疲れて眠っていたみたいだ。いや、泣いてない。泣いてなんかないし、ぜんっぜん目元も赤くない。だって僕は泣いてないんだから。

そういえば午前中は入学式と学校紹介で、午後お昼食べてから帰ってくるって言つてたなあ…。

まだまだ帰ってくる気配はない。

僕は独りぼっちになつてしまったのだ。

恨めしい。僕が僕のためにちよつと誇らしい気分で中学校の制服を壁に立てかけていたことが恨めしい。壁におとなしくつるされて、あざ笑うようにこつちを見ているような制服が、恨めしい。

そんな時、僕の耳に扉がゆっくり開く音がした。何でこんな時にはっかり五感は敏感になつているんだろうか。ちよつとは自重してほしいと思う。

そんなことより、侵入者はゆつくりと階段を上ってくる。

あいつらならあんなに静かなわけがないから絶対不審者だ。

ひよつとしたら所長の残党の回し者かもしれない。

そんなのが来たら今の僕に戦う力なんてないも同然で、あつという間に捕まつてしまふに違いない。

僕はとつさに、けれどやつとの思いで王牙雷流を体いっぱい抱えるとベッドの下にもぐりこんだ。

小さいのも意外と便利だ……イヤイヤイヤ小さくなければ今頃学校で、もし欠席だったとしても戦える！ やっぱり小さいなんていやだあー。

携帯で助けを呼ぼうか！ 誰に？ 誰もいない。連絡しても学校では使用禁止だからきつと使えないだろうし。じゃ、じゃあ切り裂きジャ

ツクの皆さんの誰かに連絡できない。誰とも電話番号交換してなかった。

あれ、もしかして本格的のピンチ。いろんな意味でやばいみたいです。

しかも、侵入者の足音は複数で、感がいいのかピンポイントで僕の部屋に近づいてくる。

なんだ、侵入者の分際でせんさーでもつけてるのかこのやるー。ふざけんなこのやるー。

そんな悪態をついても何も変わることなく、ドアノブはゆっくりと回され、扉は軽々と開く。僕の場合体と足しか見えないが、あれは誰だろうか。傍らには珍しい真っ赤な蛇がいる。

「あれ、祀君いないのか……」

む、この声には聞き覚えがあるぞ。じゃあ、あれは真っ赤な蛇じゃなくて龍だ。だとしたら僕はもう一人じゃないんだ……！！

僕はベッドの下からはい出ると右手を挙げて元気に返事した。

「はい、はい、僕はここ、ここにいます……！！！！」

僕の方に背中を向けていた男の人と龍はゆっくりとこっちを振り向く。

そして、僕の方を見た顔は、やっぱり僕がよく知った顔だった。

「な……何で小さいの……？」

僕が知りたいです。僕に答えを教えてください。

竜太は僕を見てあわあわしている。豪火竜は僕を見て背中に乗せてくれる。こうしてみる意外と大きい。後、あつたかくて乗り心地もいいや。

やっとの思いでのほほんとした僕をひよいつと抱きかかえると竜太は走り出した。

「よし、今から八迫んとこ行って見てもらおう……！！」

僕はその時竜太が神様か仏様かそんな風に見えた。

これで、僕は助かるんだ……！！！！

ちりりん、と自転車のベルが鳴る。僕もうれしくなっただけ一緒にチリ

リン、と言っ。

ちよつと子供っぽいかなあーなんて思うけど、こうなった以上、もう何も恥ずかしくない気もする。

自転車の風は思いのほか気持ちよくて、考えてみたら自転車なんて乗るの初めてだなあと感慨にふけてしまう。

自転車の風は気持ちいいんだけど、無造作ワイルドヘアー祀君がワイルドライブ無造作ヘアーになってしまう。

ところでワイルドライブ無造作ヘアーってなんだろう。名前からしてすごそうだけ。

再びチリリン、と竜太がベルを鳴らす。

「楽しいか？」

突然竜太が僕に話しかけてくる。

きよとん、としながら僕は竜太の方を見る。

けれど竜太は僕の方を見る余裕なんてなくて、ただ、前を見ている。僕も続いて前を見る。

「とっても楽しいよ。生きてるって感じがする。あいつらといれて楽しいんだ」

これは嘘じゃない。僕はホントにそう思っているし、たぶんそれはこれからも変わらない。

それから、僕と竜太は世間話とか、僕の身の上話とかをしているうちに何度か止まったことのある屋敷が見えてきた。

あれが、切り裂きジャックの本部だ。

竜太は僕を自転車から降ろすと背中へ背負う。腰に覇凱一閃を下けているので僕も真似をしてみるが、一人で立つと引きずってしまうと思い、僕はやめる。

「八迫 連れてきたー」

これで僕はやっと普通の中学生に、今度こそ中学生になれるんだ。期待で胸をいっぱいにし八迫の部屋に入って話を聞いているうちに、僕は薬をかがされた。

睡眠薬っぽい。

僕は寝てしまった。こんなに寝たら夜眠れないじゃないか。僕の背が伸びなくなってしまう。ッ小さいことに困っている僕の悩みなど、誰も知らないんだろう。寝ている僕はなぜかあの後、を思い出していた。

「ヤダ!!! やだったら、イヤだ!!!」

亮祐と紋太が言い争っている。

亮祐は紋太が僕たちの住む方へ行けというし、紋太は亮祐と一緒にいいという。

互いに一步も譲らない同レベルの口げんかは切り裂きジャック唯一の女の人の手でかたづけられた。

なんというか、うまい。客観的に聞いていなければ思わず首を縦に振ってしまいそうになる…。それぐらい良かった。

結果として、亮祐が定期的に会いに行くという形で紋太は小学校が始まるころに僕たちの家にお引越するという形に収まった。

そこで僕は思い出す。

そういえば……。

「むにゃ」

ゆっくり目を開いた俺はまず最初に上半身を起こす。

どうやら無事に戻っているようで念願の学生服を着て寝かされていた。

ふと周りを見るが、周りには誰一人として人はおらず、代わりにポチが寝ていた。

時計はすでに十二時を超えている。お昼の十二時ではない。よい子はお休み、の十二時だ。

幸いまだ眠い。この格好のまま明日は学校に行けばいいだろう。僕は再びソファに転がると目にかかる前髪を手で払いのけて眠りにつ

いた。

たまには童心に帰るのも悪くないって、よく言っけど、俺はもう御免だなあなんて、そんなことを考えながら再び落ちていく。

ああ、後でまとめて問いたださなきゃなあ……。

第一百五話 小さい僕は独りぼっち。って、ええ！？（後書き）

絶対俺はおかしくなってる。何考えてんだる俺。俺何考えてんだる。書いた直後にこんなに悩んでしまうような作品が出来上がったちゃいました。

ホントに何してんだ…。

まあ要約するですね、祀君小っちゃくなっちゃった！！！！ってだけです。

ちなみにこれ書いてる目的は亮祐と紋太の話、あれを入れるのを忘れてしまったからです。

この手法は自分が苦しむだけですが、割と使える！！！！

なんか書き忘れたことがあったらこの方法で誰かをまた小っちゃく…しませんよ。

同じようなのはさすがにもういいだろと学んだのです。

まあまだかけることはありますが、そんなに書きちゃうと本編っぽいものより長い後付けになっちゃうんでこちら辺で。

でも、本編より長いあとがき、いいかもしれないなあ…。

次回第百六話 入学式行けなかったんだよばかやろー！！！！【仮、というか絶対に違うと思いますよ】

次は黒鍵とかいてくるかぎとまんまによみますが、黒鍵編、ですかねえ…。

いいや、ちまちま短編書いていこう！！！！

第百六話 一緒にいたら、駄目ですか…？（前書き）

なんか、何してるんだかわからなくなってきた。最近いろいろ忙しいからかなあー？

第六六話 一緒にいたら、駄目ですか…？

呪われた血筋だと、八迫が言った。

その血筋は、祀が断ち切ったのを、確かに竜太は見た。

じゃあ、その前は？

一文字紋太の両親は、どこにいる？

八迫はディスプレイとにらめっこしつつも、一つの計算式と闘っていた。

「ああ、死んでるだろうな。もう時期が時期だし、それにあの城の中で、人間が生活できるような環境にはなって無かっただろ」

思わず零れる独り言は、国内情勢は最悪、社会関係は異常なほどの奴隷によつて構築されていた空飛ぶ国で命を落としたと思われる一文字家の棟梁の生存の計算だった。

すでに時をまたぎすぎている。亮祐から聞いた話では山に落ちていた子供を拾ったのが、数年前。

その直後に親共々捕まったとみて間違いがない。生きているという確信も、証拠も何もない。

「たぶん、死んでるよなあ……」

八迫は一人、カタカタとキーボードに指を押し付ける作業に没頭した。

「あれ、そっいえばあのバカ……」

やけに静かだ。静かすぎる。

いつもはあのバカがいると騒がしくて、うるさくて目障りなのだが…。

そう考えて頭にちらつくのはあの言葉だった。

「全部壊してやる。呪いだとか厄災だとか、小さい子供にそんな思いもん背負わせてる上も全部、俺が斬ってやる……！」

あの時言ったことが、その場の雰囲気やのりでないとしたら…。その時点ですでに八迫は機械室から逃げ出すかのように飛び出た。

やっぱりだ…。

いつにもまして騒がしい玄関に来てみると、案の定竜太が霸凱一閃を構えて外に出ていこうとしていた。

けれど外に出られないのは鬼じよがその腕をつかんで離さないからだっ

た。「馬鹿、あんたじゃいけないって言ってるの！」

竜太はその言葉を聞こうともせずバタバタと足だけが進むとする。

一瞬の出来事で、その場には悪魔が下りてきたと思うほどに、空気が凍りついた。

「いけねえつつつてんだろお…？」

それは、華の女子中学生が出す言葉と、声ではなかった。

鬼りおの説得もあり「主に暴力と暴力と暴力それに暴力、更には暴力が占める」竜太はかろうじてその場にとどまるものの起こそうとしていることをやめるつもりはないようだった。

「何するき？」

会議室の椅子を四つ使い女王気取りの理緒は竜太を追い詰めようと言葉を紡ぐ。

「何するかわかってるの？壊そうとしてるのよ、この場所も、全部。貴方がやるうとしてることは、紋太を助けるんじゃない、紋太の場所をなくそうとしてるだけ。こらえてゲームでもしてなさい」

優しく聞こえる言葉の数々だが、実際は言葉とともに理緒は椅子で竜太を強打、八迫はひたすら箒の柄でつつきまわすというはイラスト付きだった。

すでにちよつとカツコいいかも竜太は消えていたただのうたれ弱いへたれ竜太に戻っていた。

「ごめんなさい、イヤマジでほんとにもうしないからほんとにごめんなさい!!!」
壁に立てかけられる形で置かれている覇凱一閃からすべてを見ていた豪火竜はいつになったらかっこよくなってくれるのかと、白々しく竜太を見ていた。

それから数時間後、三人は再び会議室にこっそりと足を運んでいた。ただ一人、紋太にばれぬように。
「どっ、どうということなんだよ」

理緒の部屋に置かれていた一枚の封筒と、本部一帯の土地の所有権の書類。

数日間姿を見ていない亮祐の物だった。

「わかんないわよ!!!とにかく、手紙読んでみなさい!!!」

手紙に書かれていたのは一言、ありがとうの文字だけ。そしてそこに付け足されているのは、守りたいから。という文字の羅列。

「何しにどこに行ったか、誰も知らないの!?!」

思わず大声を出してしまう。けれどそれを聞かせないために理緒が口の中に封筒を詰め込む。

「つまるところ脱退宣言なわけよね…。あんの馬鹿、話し合えって言って、結局一人で勝手に決めてんじゃないのよ…。あのバカめ。ばかったら馬鹿」

「違うよ、亮祐はちゃんと教えてから行ってきますってしたよ?」

「だってさ、じゃあいいんだよね、八迫?」

「俺は構わんが、誰が話しているのかな、これは」

竜太はふと会話人数を数えてみる。この場にいるのは自分と八迫と理緒だけなはずで、先程の会話ではどう見ても四人いるわけ…。

「まさか誰か一人二役して…。」

竜太が最後まで言う前に、八迫がその頭を叩き割らんばかりの勢いで殴りつけた。

「ちやんとって、何?行ってきますって何?」

いつもの冷静っぽい理緒は冷静さをかなぐり捨て、紋太の肩をゆすっていた。

「いつもと変わらぬ強靱な力で。」

「ちよつと待って理緒さん！！！！気絶、気絶してるから、紋太君気絶してるからあー！！！！」

八迫の懸命の努力もむなしく、理緒の手は止まることを知らない。

「ちよつ…泡、口から泡吹いてる、やめたげて理緒さん！！！！」

竜太の必死の努力もむなしく、壁に半分埋められる。

ちなみに、肩を持ってゆすり続けるのはいけないそうだ。なんかのテレビの虐待特集で言った気がすると、薄れゆく意識の中、竜太は思ったりした。

「ちゃんと戻ってくるから。そしたら、一緒にここから出ような」
ひよいつと抱きかかえられた紋太は、初めて見る亮祐の表情にただ、黙っていた。

「ちゃんと、戻ってくる。俺たちを狙ってる悪いおじさんがいるらしいから、ちよこつと懲らしめてくる！！！！」

シヤドウボクシングのように拳を繰り出しながら話す亮祐の足に、紋太は抱き着く。

「一緒に行く」

シヤドウボクシングをやめた亮祐はゆっくりと紋太から離れていく。「危ないから。あいつらが欲しがっているのは俺で、俺が行けば、守れるんだ」

それでも一緒に行きたいと、言おうとしたのに声が出ない。

「大丈夫。お前がもう戦う必要はないから」

それも違つと、叫びたかった。

守られてばかりでいるのは嫌で、一緒に力になりたいと思っっているのに、わかってもらえない。

消えていく亮祐がぼそりといった言葉は紋太には聞こえない。

「ほんとほ、戻ってこられないかもしれなけど…ありがとな」
一緒に戦いたいと、ようやく声が出そうだったのに。
亮祐は待たずに、一人戦いに行ってしまった。

第百六話 一緒にいたら、駄目ですか…？（後書き）

ちなみに、次回は百七話完成しております。

先に百七話作ったんです。そしたらなんか、これじゃ話別の奴だよなあとか思ったらもうなんか…。

というわけで一回保存して新しく作らせていただきました。

次回はそういうわけで、順序逆完成の百七話です！。

第七話 I want to forget .

白い、大きい屋敷だった。

見渡す限りの広い屋敷。この屋敷意外にこの地域には何もないといつても過言ではない。

そんな今更特筆する点もない、見慣れた屋敷。

その外観のどこにも穢れなどない。あえて言うならば、主の心が、穢れている。

息子を息子と思わず、ただ不潔な小動物だと考え妻を妻と思わず、ただの下僕以下と考える、そんな浄身分の人間が主人の屋敷だった。あのころから変わらぬモニターを通して顔を見せえてから数秒、大きな門が開かれる。

数年ぶりに戻ってきた家の通路には使用人が並び、ただ頭を下げ続ける。かけられる言葉はありきたりな言葉だけ。

オカエリナサイ、ボツチャマ。ヨクゾオモドリニナラレマシタボツチャマ。

故にここは醜い。汚くて穢れていてすべてを巻き込む。けれど、自分はその醜いものの息子でもあるのだ。逃げられないとわかつている。だけれども、巻き込みたくはない。

「父上は、どこだ」

そうだ、俺は汚くても醜くても親とは違う生き方をしてやる。せめてだれかの役立つように生きてやる。

亮祐はそう、決心してこの場に足をとどめていた。

「ただ今御父上は会議に出席中でございます。もうすぐお帰りになるかと、亮祐坊ちゃん」

執事の一人がなれなれしく話しかけてくる。彼、ではない、全く別の執事。

「その前にその御身を清潔にしてくださいませんと、ぼっちゃん」
小太りの乳母が柔和な笑顔で話しかけてくる。

それすらも、醜い。

この場所にいる者は俺を含めてすべて醜い。

だから俺は逃げた。醜くありたくなかったから。

けれど、どこまで逃げても逃げられることはなかった。血からは逃れられなかった。だからせめて、慕ってくれていた者たちを守っていたと思う。

親のやろうとしていることには、気付いているから。

仲間が傷付けられることは、わかっているから。

切り裂きジャック中片亮祐の父親は、切り裂きジャックの重鎮、議長に身を置き、糸つの会社の社長としても身を構えるその人だった。過去に病院で出会った人物と亮祐に血の繋がりは無い。ただそこに残されているのは、育ての親であるという事実で、今、これから会おうとする父親との絆は、金、そして呪いのように強引に押し付けられている血筋だけだった。

一度も遊んでもらった覚えはない。

一度も褒めてもらった覚えがない。

一度も祝ってもらったことがない。

一度たりとも怒られたこともない。

そんな環境で、亮祐は育つていった。

そして今、その環境から逃れた亮祐は再びその環境に身を投げようとしていた。

できることなら、こんな記憶は消し去りたいと、何度も何度も願った。

「いったただつきまーす!!!」

目の前に並ぶのはベーコンエッグとトースト。今日は洋風の朝ごはんらしい。

無事進級することができた平田竜太は喜びをかみしめながら暖かいトーストにかじりついた。

「でさ、いつ帰ってくるの!？」

竜太の母親はいつも以上に微笑んで答える。

「今週末ぐらいだって……」

すでに母親の意識は花畑だ。近くに川がないことを祈る。もし近くにあつたら…。

竜太はふと壁にかかるカレンダーに目を向ける。

週末の一日だけが赤ペンで囲まれていた。ただの丸ではなく、ハートマークで、数字が囲まれていた。

世界各国を旅するような形で働く竜太の父が家に戻ることはめつたにない。母親と毎日のように電子メールのやり取りをしているようだが、竜太はそこまで話すこともあるわけでもなく、家に帰ってきたときに会話を交わす程度だ。

三十回の咀嚼を終えた竜太はトーストを飲み込み椅子に掛けてある制服をつかみ、駆け出す。

すでに時計の針は七時五十二分をさしていて、走らなければ遅刻する時間をさしていた。

行ってきますと玄関から飛び出し、走りながら学ランを着る。走りながらボタンを留め、靴を何とか履きなおす。

やばい。この時点ですでに通常登校時刻から逆算するに十分は遅れている。

走っても間に合うかどうかというギリギリな時間だと、右腕のジャックが冷静に液晶の数字を変えて教えてくれる。

新学期草々遅刻というのはなるべく避けたいものだ。

そんないやな記憶は消し去ってしまいたい…。

教室で友達と談話する理緒は日常の平和をかみしめていた。

いつもなら拳を握る手は、軽く友達を叩き、いつもなら噛みしめる唇は柔らかく微笑んでいる。

これが、平和だなあとしみじみと思う。

それと同時に恐怖も感じる。次はいつたいいつこの平和は壊されるのだろうか。次はいつたいいつこの平和に身を置けるのだろうか。考えれば考えるほどに理緒の頭に話は入ってこないのだった。そんな思い考えはこの財布の中身を減らしてしまった原因とともに忘れ去ってしまう。それに限る。

ランドセルがガチャガチャと音を立てている。

それと同時にアスファルトの地面を靴が走っていく音。さらには荒い息。

そして、それを追いかけるように続く一定のテンポで音を刻む何か。その何かは右手に鍵を持っていた。

鍵からは絶えずに音が響き渡る。低く、重いまとわりつくようなメロデー。

その鍵を持つ何かは長い丈のパーカーを着て、フードで顔を隠していた。

追われているのは二人の小学生。

二人は必死に逃げていた。

突然現れ、僕は死にたくないんだと話しかけ、懐から出した鍵で一瞬にして舗装された道路を変形させた何かに、追われていた。

細い路地裏を右に左にまた右へ。

どれほど逃げようが何かは確実についてくる。どれだけ早く逃げたとしても、何かは変わらぬ一定のテンポのまま、確実に近づいてくる。

すでに視界は涙でかすみ、足は限界を伝えている。

日頃の体力不足を解消しておけばよかったなど、こんな状況で痛感する。

走って走って走り抜けて場所は、何の変哲もないただの行き止まりだった。

足音は近づいてくる。

やがて、その足音は消え代わりに少年少女の悲鳴が響き渡る。何かを持つ鍵は子供の命を吸い尽くし、老化させる。しわしわになつていく手は弱弱しくも鍵を離そうともがき、絶命していく。残されているもう一人はその現状を見て、腰を抜かす。自分もあなる。回避できぬ運命。

乾いた音で地面に倒された友達はずでに息をしておらず、鍵は残された一人へと向けられる。

声にならぬ響きとともに、二人の子供は未来を奪われた。

何かは音もなく去っていく。手にした鍵を満足そうに眺め、なでながら。

それはまごうことなく、誰もが記憶から消し去りたいと考える黒鍵だった。

腰に下げた鍵を取り外し、誰も見てないことを確認してから昨日見たロボットアニメの主人公のように鍵をドアに差し込む。

この鍵があれば、この扉がそれならば俺はあいつとあなれるのになあ……。

心の中で主人公のように決め台詞を叫びながら鍵を差し込み、回す。何とも言えぬ心地よさとともに扉は開く。それから素知らぬ顔をして家に帰るのだ。

「ただいまー」

珍しく遅く帰ってきた祀を迎えたのはにっこりとほほ笑む鐵。

ヤバイ、見られてたのかもしれない！！祀は表面に出さないものの内心は冷や汗がナイアガラの滝のようにたらたらと……。

だが鐵はお帰りーと返し、階段を上っていく。

……あつぶなかつたー。祀はほつと安堵のため息をつく。それから鐵と同じく階段をのぼり自室へと入る。

ベッドにぼすつと倒れ込むと枕を相手にしばらく格闘を続ける。

頭の中は昨日見た漫画原作のアニメでいっぱいだ。

演出とかいいらしいけど、やっぱりあれはあれがああだからあれなわけで…。

祀の頭の中には戦いという文字はなかった。普通の中学生を満喫していた。

にやけながら空想に浸っていると、突然扉が開かれる。

紋太だった。何も知らない、紋太だった。

「祀兄ちゃん、夜ごは……」

素早い動作では空気を読んだ紋太はゆっくりと何も見ていない顔で扉を閉める。

ガチャンツ……、と音は空疎に響いた。

違う違う違う違う……！！

祀は大慌てでベッドから飛び起きると紋太の後を追った。

なんだかんだで、今日も平和だった。

「ねえ、侏樓、祀ってそんなキャラだったっけ……」

鉄は先ほど見てしまった祀のヒーロー風の一連の動作を見て思わず微笑んでしまった。

「つつかそれ、本人には言わない方がいいじゃねえの？」

元祖空気の読めちゃったりする男、檜葉呀侏樓はさりげなく祀をかばっていた。

さすが、空気の読めちゃったりする男は行動一つとっても違う。

「いや、でもなんか…こういうのもなんだけど、かわいかったよ？」

途端にどたと走り音が聞こえ、扉は乱暴にこじ開けられる。

「何！？どんな祀が可愛かったの！！！！どんなことしてたの！？」

自称灰色のイケない脳をもつ魔性の女こと凱史レディは口から汁をしたたらせながら息荒く、少年二人に迫っていた。

ちなみに、強引に開かれた扉に鍵はかかっていた。仲間かいじという侵入者を拒むための立派な鍵が。

「うん、何もしてなかったよね、祀兄ちゃんは」

半ば丸め込まれむような形で紋太を説得した祀は一人今後の生活方法について悩んでいた。
嫌な記憶なら、作らない方がましだと、作られる物ではないと、痛感せざるを得なかった。

暗い地下牢の中で、一人の男はつぶやいた。

「俺は、決してやらないからな…」

日の照らぬ永遠の闇の中、男の前にはパーカーを着た何かが見れていた。

「君がやってくれなきゃ死んじゃうよ…。僕を殺したい？良いよ？でもね、その前に君の…」

何かは闇の中でくつくつと笑う。

「でもね、その前に君の家族が殺されちゃうかもね？」

何かは黒鍵を手でもてあそび男を監禁していた。

すでに男には元の見る影などなかった。彼の家族が彼を見たとして、それが彼であると気が付くはずもなかった。

その男が平田家の家長であることに、気が付くことなどありえなかった。

傍らに投げおかれているのは彼の大切なものだった。

平田竜太とその母親、つまるところ彼の嫁はその傍らで死を待つばかりの存在になっていた。

「イイよ、やらないなら、僕が殺しちゃう？」

視界が、大切な人の血で埋め尽くされた。

ただ、発狂することしか、出来なかった。

「ほら、死んじゃった？ね、もっかい聞くよ？やる？やらない？」

何かの問いかけに、意思を失った彼は頷くしかなかった。

「よく、出来ました？ご褒美は、君を生かしてあげるよ？」

必死に目で助けを請う息子の姿も、目に入らぬ彼の前で、息子すらも殺された。

「あはっ……あはははあ〜？」

何かは嬉しそうに踊りだす。

その手に持つ黒鍵の一部を深紅に染め変えて。

忘れない…こんな悲劇は、忘れてしまいたいと、彼は意識を手放した。

なぜ、忘れさせてくれぬ？

「うまくいきましたよーアニキー？」

パーカーのフードを外した何かは血で染めたかのように真っ赤な髪をした女だった。

さらに、彼が家族だと思っていた者たちも動きだし、皮をはぐ。

「うまくいった…。これですべたがうまくいくだろう。すべては、切り裂きジャックのために」

男がそういつた瞬間、その場にいた彼を除く全員が目を閉じ黙想を始めた。

そんな中、突如一人のパーカーを着た何かが現れる。

「よくやったな…。さあ、俺とともに始めようぜ、戦争を。シャガン率いる大軍団と、たかが数人の切り裂きジャックの戦争を」

シャガンは黒鍵を手に戻すと静かに笑った。

「許せないんだ。俺が助けたかった友達を殺した奴にとどめを刺したやつらを。あいつを助けるためにも、俺は仲間を殺したあいつを殺した切り裂きジャックの息の根止めて、助けてやるんだ。今度こそ、誰にも止めさせはしない。切り裂きジャックを、平田竜太を殺したやるんだ。あいつには死にたくなるような思い、してもらわねえとなあ…。だから俺は全てを壊す。腐った世界を、腐らせた生物ケタモノを！！！」

シャガンの瞳は、灯りのない牢獄を不気味に照らしていた。

「忘れてえな…。あいつの死に際の顔を…」

第一百七話 I want to forget. (後書き)

なんだかね、どこで区切って新しく黒鍵篇にしたらいいのか、わからないような感じになってしまった…。どうしましょ

ちなみに百八はまだ未定ということだ。

第一百八話 Accommodator of key(前書き)

第一百八話 鍵の継承者

第八八話 Accommodator of key

「口答えするといふんだな…」
苦しい、としか感じなかった。

仲間を巻き込まんと父親を説得に来てみた亮祐は執務室の壁に叩きつけられていた。

「お前みたいなの、出来そこないの愚息が、意見しに来たあ！？ふざけんのも大概にしるよお、ああ！？」

首を絞められ、何度も何度も壁に叩きつけられる。

意識もはつきりしない中、亮祐を助けるがごとく電話が鳴り響く。

ようやく亮祐を開放すると、亮祐の父は冷静な仮面を着込んだ議長へと変貌を遂げる。

へこへここと頭を下げながら電話の相手の機嫌をうかがう。

容姿に変化はない。己の心に冷静さをまとわせたただけだ。

亮祐は心の中で幼少のころの出来事を思い出していた。

一度も怒られたことはないと思っていたが、実際に考えてみるとそれはいくらでも出てきた。

どうやら小さいころの亮祐は嫌な記憶を消し去ろうとしていたようだった。

何てことはない。自分の失敗をすべて亮祐にぶつけてくるような人間だったのだ。

ドメスティックバイオレンスというそんな生ぬるい言葉ではこの男は表現しがたかった。

いつだって、なんだって暴力で制止させられていた。

お前が廊下を五月蠅く走るから、私は書類を間違えた。

一度たりとも自分の意志で近づいたことなどないというのに。

お前が悪戯するから始末で仕事が遅れた。

たかが子供部屋のガラスにゴルフボールが飛んできてわれただけなのに。そのゴルフボールを飛ばしたのは『父親』のくせに。

酒が入らずとも素面で暴力を振るわれていた。

そんな時、決まって黒坂の部屋に逃げ込む。そうすると黒坂は亮祐と遊んでくれたし、あやしてくれたりする。黒坂が父親だったらいいのにと何度も思ったのに。

一時期は一般家庭に預けられた。

父親からしてみれば亮祐は邪魔な存在で早く消えてほしかったのだと思う。

父親は、父親らしいことなど何もしてくれはしなかった。

「金さえあれば、生きていけるんだろう？」小さいころに言われた言葉が今頃になって恐ろしいと感じた。

「はい、わかりました。では、黒鍵は…はい。それもシャガン総領の御意思とあらば」

わずか数十秒の電話を終えると父親は再び亮祐の首に手をかけ持ち上げる。

すでに亮祐に反抗の意志などなく、電話すらも聞こえていたかった。

「おい、亮祐、よかったな、シャガン総領がお呼びだ。灯火が消えるまで、こき使ってもらおうといい…」

父親である議長は脂で輝く顔で亮祐を小馬鹿にすると使用人に亮祐を連れて行かせる。

シャガンの元へと。

「なあ、学校楽しいか？」

む、と唸ってしまう。突然父親にそんなことを聞かれれば内心焦ってしまうものだ。

そして焦りながら考え込む。何かしたかなあと、考えてしまう。

「普通に楽しい、けど」

いつもはめったに学校のことなど尋ねない父親が、今は理緒に学校を聞いている。

あたしはなんかしたのか？

いや、何もしていない。学校では、何もしていない。

「いやあ、なんか理緒が楽しそうだからなんかあったのかなあって……」

理緒はその言葉を聞かずに原因説明を続けていた。

「まあ今のうちに楽しんでおけ。大人になったらそんなに遊びまわる何てこと、出来なくなるから」

そういった理緒の父親の目は、どこか遠くを見ているようだった。

十字架を模して造られた歪ゆがな板に無残にも人間が張り付けられていた。年齢は若いもので十七、八。ご高齢の年齢はおおよそ六十八から七十という所だった。年もばらばらな無関係の人間がそこには何人も置かれていた。

どの人間も手足を固定され身動きすら取れない状況で壁に立てかけられている。

ある人間は泣きわめき、ある人間の目はうつろに虚無を見続ける。

そんな中、一人自由の身であるシャガンはパーカーのフードをかぶったり外したり、を繰り返していた。

「ふむ、俺が生きてた時代の服よりか、やっぱこっちのがかっこいいよなあ……」

オレンジのパーカーに七分丈のズボン。そして腰にはだらしなく垂れるベルト。それらを手に取り遊んでは、シャガンは時間を潰していた。

そんな時間もやがて終わり、シャガンは向かってきている来訪者を待ちわびていた。これから自分が起こすことをイメージしながら。

「なあ、切り裂きジャック……。お前たちはどう戦う？ どう喚く、どう嘆く……？俺が手にするこの黒鍵。これを今から手にする者をお前たちはどうするのかな……。まあ、ゆっくりさせる暇はないけどな。手ごまはそろっている。これからは一方的なこれまでのご褒美だよ。

切り裂きジャックの御三方：」

シャガンはゆつくりと指を折り人数を数えると到着した来訪者を迎える。

「やあやあ、よく来てくれた。中片亮祐君。これから君には、苦痛を味わってもらおう」

手足を縛られ、猿轡を噛まされている亮祐は自らの意思で動くことなくシャガンを睨みつける。

シャガンはにっこり微笑み容赦なく顔を踏みつける。

どれほどの音が鳴ろうとも、知ったことではない。その心にあるのはただ一つの復讐心。

シャガンが生きていくうえでの糧となっているといっても過言ではない復讐心。

「君は今、此処にいる僕達に生かされてるんだよ、感謝しなよ」

亮祐の頭から足を外したシャガンは亮祐の手に黒鍵を強引に握らせ、その場から一人は慣れる。

シャガンが離れると同時に、風も入らぬ密室に風が吹き荒れた。

荒れ狂う風は亮祐を縛っていた縄を粒子へと分解し、猿轡も風によって切り刻まれその意味を失う。

予想通りの状況を目の当たりにしたシャガンは亮祐を見てほくそ笑む。

「君が、適応者だ」

自我を取り戻した亮祐が見た光景は、血の海、だった。

十字架があつたという証拠すらも残さず、そこはただ赤の海と化していた。

自分はやっていないと叫びたいが、手に握られている黒鍵がすべてを証明してくれる。

赤で染まる黒い鍵の存在が、この惨劇を起こした人物を示していた。その元凶、黒鍵は亮祐の手の中で異様な存在感を放ち決して亮祐の手から離れようとしなかった。

手を振ってみてもその鍵はすべることもなく握られる。

壁にぶつけ、コブシから血が流れようと黒鍵はその血を吸い喜びの風を起こす。

いつの間にか背後に立っていたシャガンは亮祐を後ろから抱きつく。「黒鍵は君を選んだ。意志ある鍵が、君を選んだんだ。君こそが適応者、君こそが切り裂きジャックを潰す大きな武器となる」

大切なものを守ろうと思つて一人で止めようとした結果が生み出したのはこの状況だった。

守るどころか、自分の手で壊さなければならない。

亮祐は乾く喉を震わせ低く笑う。

動かなければよかつたかと。

紋太との約束を果たせないことなど分かつていたことだったが、それでもやはり果たせないという現実を突き付けられてはもう何も信じることもすらできなかつた。

八迫は一人パソコンと闘っていた。

本部にはいくつもの監視カメラが仕掛けられている。誰も知ることのないカメラだ。

全てのカメラの位置はこのパソコンにデータとして記録されている。もちろん、配置にわずかの死角などないよう緻密な計算が施されている。

そのカメラの一台たりとも亮祐の姿は映っていない。

「ああ…結局馬鹿と仲直りとかしてねえじゃん……」

その呟きに返事などなくただ椅子がキィキィ軋むだけだった。

通信機に連絡が入る。

待ちに待っていた吉報だった。

男は背中に背負うライフルに弾を装填する。

ゆっくりとスコープに目を移し其処に移る目標の姿に別れを告げる。

乾いた唇を唾液で濡らし、暴れる心臓を押さえつけ男はゆっくりと引き金を引いた。

あとは待てばいい。ガラスの割れる音。

それに続く低くくぐもった死の音を。

男はゆっくりと目をつぶり快感に襲われる瞬間を待ちわびる。

しかし、いくら待てどもその音は聞こえることはなく、男はあわててスコープ越しに目標の姿をつかがう。

そして、男は思わずにやける。

ライフルを倒し、負けを認め、両手を上げる。

なぜならスコープの先には雷が迸る剣を握った少年がこちらを向いて微笑んでいたからだだった。

失敗したと報告しに通信機に手をかけるが、手は通信機に触れることはなかった。

通信機があるであろう左腕はひじから先が欠如していたからだだった。代わりに挙げた目線の先には一人の少年が泣いていた。

右手に暗い鍵のようなものを握りしめ、左手には男の手を握りしめ。

男は笑うでも泣くでもなくただ平然と地面に倒れていった。

第百八話 Accommodator of key (後書き)

呪われた鍵を手にしたシャガンは次々と戦争の準備を進めていく。
しかしそれを知る由もない呑気な竜太たちは平凡な毎日を送ってい
て…

次回第百九話 未定

第一百九話

I t i s p o s s i b l e t o s w i m o r i w a n

第一百九話 泳げないし行きたくないし。

今日も今日とて変わらぬ一日が過ぎようとしていた。

時計が無慈悲に午後五時を告げる鐘を鳴らし、それを竜太が止める。夏休みだよ！？夏休みなんだっていうのに……。

竜太は一人窓の外で里帰りする家族を見ていた。

楽しそうに笑っている女の子の肩には大きな荷物とぬいぐるみがある。つて、その隣にいる親はトランクケースやら持って笑っている。

夏休みだというのに、平田竜太は切り裂きジャックとしての責任を押し付けられ遠出からほど遠い場所にいた。

好きでやってるわけじゃねえー、と叫びたい気持ちを押しさえつけ、壁にかかるカレンダーに目を向ける。

明日の枠に書かれた文字が、竜太の気持ちが沈んでいる原因だった。プール解放！！とかなんとか書かれているその文字は先日八迫に強引に記された文字だった。

八迫曰く、最近学校編を書いてないからそろそろやらなきゃいけないじゃあないかと思う。だからとりあえず行きましようね。

理緒曰く、海行けなくてへこんでたんだー水、水、水の波イ！！！！紋太曰く、どうせ僕は行けないし。いいなあ、チューガッコってプールあるのかあ……。

祀曰く、プールってなんですか？で、佚榎曰く、プール！？あの半裸で暴れまくる凶暴な水中大決戦か！！！！

鐵曰く、確かプールっているんだよねえ……わさわさと。何がって？アレダヨ、アレ。

砺礎と凱史に至ってはすでに鞆に夢と水着を詰め込んで目を輝かせる始末だ。

行きたくないという気持ちを振り払い、竜太はのろのろと天体観測の準備を始める。

こうでもしなくちゃ、やってられないというか、発狂しかねない。

散らかった部屋の中で竜太はそのそと動き出した。

これをいわゆる危機、というのだろうか、祀は一人立ち尽くして
いた。

目の前に広がるのは無数の世界。そこに行き交う人々。
果てしなく続く空には蛍光灯が連なり、世界を照らす。

逃げるように空想に浸る祀の背中は突然肩を叩かれた衝撃で旅路を
終える。

空想という旅行は出発と同時に親に連れ戻されたような感じで帰宅
を迎えた。

振り向くとそこにいるのは佚榎と鐵の二人だった。

「とつとと選びに行こうぜ」

「祀早くしないと置いてくよ」

そろいもそろつて子ども扱いされている気がする。初回登場はあんなに大人っぽいかったいい感じだったのに……。

祀と佚榎に鐵は町一番のデパートに来ていた。何てこともない。明日のプールという謎の場所に行くには水着という戦闘服が必要らしい。何を選べばいいのかわからない。

昨日聞いてみたけどついてくればわかると言われただけだ。

水着ってあれか、水にぬれても大丈夫なズボンなのかと祀は納得する。

つまるところプールっていうのは人為的に作られた小さい湖の事かと理解し、少々楽しみになって駆け足で水着売り場へと歩いて行った。

ちなみにお金は持っていないのですけれども。

階段を上っていた。他に人気はない。

手に握られているのは黒い鍵。

彼が通った後ろには人が幾人も倒れている。

そのどれもに目立った外傷はなくおそらく気絶しているのだろう。

「あははっ…ふふふ」

人が倒れている中、一人立っているのは亮祐だった。

亮祐が手に持つ黒鍵は陰る太陽のかすかな光を吸収し風を吐き出す。学校の屋上へと来た亮祐は手の中で異様な存在感を放つ黒鍵を太陽に重ねる。

鍵は光を吸い校庭につむじ風を起こす。

そしてつむじ風は砂を巻き上げ校庭を荒らす。

亮祐は笑いながらそれを続けていた。

いつの間にか後ろの壁に寄り掛かっていたシャガンは亮祐を見てにやける。

「浸食は始まった。あとは時間だ。さあ暴れる、壊せ、無に帰せ」

亮祐は背中を向けたままうなずく。

「壊すさ。おれが守りたいと願ったすべてを、俺の手で」

沈みゆく太陽は亮祐を照らしていた。

「がばがべるべぶながっぶん!!!」

溺れていた。

ものの見事に溺れていた。

貸切状態だったからいいものの、その様子は知り合いの目から見ても明らかに引くようなものだった。

プールサイドの上から見かねた八迫はおぼれている物体をつかみあげる。

「お前どんだけ泳げねえんだよ。泳げないっていうか、あれだ、一人でお風呂入れているのか？」

ようやくまともな息ができる状態へと戻った竜太は宙ぶらりんの状態のままうなずく。

それを聞いた八迫は迷わず手を離す。

ゆらゆらと揺れる水面は、再び竜太限定に荒々しく牙をむいた。

「ねばろがべばばぬがはらぬごー！！！」

再び、溺れた。

「さつきから竜太たち何やってんの？」

ビーチボールを抱え祀は不思議そうな顔で竜太と八迫を見る。

水泳が初めてな祀は何の苦勞もなくすいすいと泳げてしまったので竜太の苦しみが何もわからない。何で泳がずに暴れているのだろうか…。

ちなみに紋太は浮き輪でぶかぶかと竜太が作る小さな波で漂っている。

ぶかぶかゆらゆら……

理緒と砥礎と凱史の三人はプールでビーチボールを始めている。

さりげなく佚檀が入った四人組で。

鐵はどこから持ち出したか気楽な椅子とパラソルの下で粹なサングラスをかけて寝転がっている。

今日この日。

竜太は八メートル十八センチ泳げるようになった。

そして、祀の初めての中学校体験は終了した。

「ふへー」

海により体力を根こそぎ奪われた竜太は八迫の肩に頭を置きとぼとぼと歩いていった。

すでに太陽は傾き、カラスも家に帰ろうと鳴いている。

帰路の途中眠りについた紋太を背負った祀たちとは先ほど分かれ、

竜太たちは本部へと足を運んでいた。

竜太の右腰についている覇凱一閃ははまだ水で濡れている。

プールで遊びまわる最中に突然あらわれた化け物を討伐したことのあかしだった。

最近学校などはそっちのけだったことを思い出せば、いきなり三十

体や六十体など現れたのは別にどうということはないだろう。

七十三体目あたりから数えていないことを除いても、だ。

おかげで途中から水泳からかけ離れた水中怪獣大決戦へと変貌した。結果として竜太は八迫の肩の上であーだのうーだの喚いている。

「そのうちまた全員で海でも行くか……。亮祐も連れて行って」
八迫がぼそりと一人呟く。

理緒が手に持つ棒キャンデーを棒ごと噛み砕き微笑む。

「あいつのおごりでハワイあたりに連れて行ってもらいましょ」
彼らの夏はまだ続く。

第九十話

I t i s p o s s i b l e t o s w i m o r i w a s

そういえばついさっき入学式やりましたね……。どうしましょう。

まあ、それぐらい季節が立った……。いや、実は入学式は祀君の回想で……。いや、でも……。うん、もうこの学校は一年中プール入れるという謎の学校ということで勘弁してください。

そんな強引なつじつま合わせで次回第九十話は……。未定です。

第一百話

I t i s h a d a m i n d n o n e i t h e r s t o

第一百話 止められないし、止める気もない。

第一百十話

It is had a mind no neither st

風が強い日だった。

空には雲もない、快晴。もしも洗濯がたまっている主婦がいたら迷わずに洗濯物を干したくなる…そう思わせるような天気だった。

けれども本来の天気は風が強くない日だった。しかし、そこにいる一人の少年が元凶だった。

正確には、右手に持つ鍵が元凶だった。そこから発せられる風が雲を吹き飛ばし、この天気を作りだしていた。

真上に輝く太陽は何も知らずに亮祐とシャガンを照らしていた。

紫外線などは眼中にないシャガンは右手に持つ缶を消滅させつつ、のんきにたたずむ亮祐に尋ねる。

「どうだ？ 鍵は…」

空の缶からは何も飛び散らず缶が鍵によって二つに割れる。

「極めて順調。そちらの軍備はいかがなものか」

「明日にでも仕掛けられるよ、亮祐。じゃあそろそろ、切り裂きジャックを壊そうか」

缶の次に取り出したあやとりが失敗しているシャガンは一瞬むっつとして話を続ける。

「よし、仕掛けよう。始めようか、切り裂きジャック殲滅作戦を」

その言葉を待っていましたと、亮祐は大気を切り裂き笑い出した。その鍵にはまだ乾ききっていない赤い血がべったりとついていていた。

太陽はそんな彼らを照らしている。

「……神の国計画…か…」

蝉の五月蠅い鳴き声が聞こえる本部の図書室で、一人の少年はそれに負けじと吠えていた。

「おーわない！！！！」

春休みには宿題もあり、出さずに過ごしておこうと思ったのだが、放課後わざわざ電話もかけられると出さずにいられるわけがなく、現状として竜太は机とにらめっこしている状態だった。

隣では八迫が教師役として鬼の棍棒を持って微笑んでいるし、そのまた隣では理緒がメリケンサックのお手入れをし、微笑んでいる。年頃の娘の微笑なのだが、向ける対象が明らかに間違っている。

反対側の誰もいないところには、追加分の宿題ともとの宿題が置いてある。

どちらに逃げて、逃げ場はない地獄に落とされているのと同じ状態だった。

時折聞こえる笑い声が、近くに誰かいることを教えてくれる。

王牙雷流の点検日とかで隣の部屋に祀と紋太が遊びに来ていて何か楽しいことしてるんだろーな、いいなー何してるのかな ゲームしてるのかなー、などと鉛筆を片手に遊べていたのも数秒のことで、すぐに血の雨が降りかかる惨状へと変化していった。

丁寧に宿題には血飛沫が飛ばない配慮つきの惨状だ。

隣の部屋にも竜太の声は響き渡っていたが、初めて目にする戦隊ものの合体ロボを見て目を輝かしていた祀にはその悲鳴も聞こえることはなかった。

「んつとね、これとこれが合体するんだ!!!」

がちやがちやと車を変形させて胸部へ運ぶ紋太を見て祀が目を輝かせたのは別の話だ。

どうやら祀は所長の支配下で暮らしていたとき、この手の物に触れることすらなかったようだ。もしかしたらそういう商品展開するメディアがあるということも知らないのかもしれない。

いつしか日は傾き、祀と紋太は帰宅の時を迎える。

「祀ー、紋太君ーご飯だよー」

鐵が本部へと駆け足で入ってくると同時に言われた言葉を聞いて祀

と紋太は片づけを始める。

おかげで鐵が来た時には部屋は片付き二人は部屋から出ようとして
いる所だった。

さりげなく先頭を取ろうとする祀はいつの間にか紋太と同じ扱いを
受けていることに気付かず鐵とともに本部から引きあげていく。

「お邪魔しましたー」

三人は挨拶をすると近くにある家へと帰っていった。

亮祐がくれた物件は本部から歩いて二三分、一人一部屋の個室も
ついて家具をはじめとした生活用品が完備されている家だった。

一人一部屋与えられた部屋はなんだか落ち着きがなく、業者に頼ん
で男部屋と女部屋の二部屋に変えてもらってからはこれまでにはな
かった新しい日常として生きていくことができた。

何一つ困ることはなく、家計を管理するということ以外は普通の学
生としての生活を送っていた。

普通ではないであろう、一度だけ命を狙われかけたかもしれないこ
とは、誰にも言っていない。

なるべく平和に安全に、一般人として生きていこうと決めたとえで
の五人での意見の合致だった。それを守ろうと、祀は誰にも言う気
はなかった。

何も言おうとも思わずに隣にいる紋太の手を握り、玄関をくぐる。

鼻孔に微かに届いた匂いはなぜか焦げた匂いだった。

最近分かったことが一つ、どうやら砺礎と凱史は主婦業が苦手らし
い。

けれども家事の分担は当番制になっている以上さけては通れない道
だった。

意外なことに鐵の創る料理はどれもこっついていて、初めて目にするも
のばかりではずれがないのも、わかったことだった。

手洗いうがいが先だからね、と釘を刺されて紋太と祀が洗面所に向
かう途中に目に入ったものは黒い肉の塊、どうやらハンバーグを作
りたかったらしいことが、見て取れた。

残すと根に持たれるので食べ残さないことが前提で、しばらく動けなくなるのが最近の悩みだった。

先が思いやられる状況でうがいを終わると、重い足を引きずって食卓へと着く。

全員そろっていただきますと、感謝の言葉を述べ終わると、

「今日は中にチーズ入れてみたんだけど、どう!?」

会心の出来なんだと、顔で語る凱史の笑顔を守りたくて、恐る恐るハンバーグをわるとそこにはチーズなんてカラフルなものが入っていなかった。

入っていたのは黒い消し炭だけだった。

外はカリカリ、中ですらもカリカリの焦げの塊を何とか食べ終えた祀、鐵、佚榎に紋太はそれぞれ自分のベッドで仮死状態へと陥っていた。

なんだかんだで、やっぱり幸せだなあと思いつつ、その日は終了を迎えた。

これからはこんな日々が続くんだなあと、疑うこともせず。

「さあ諸君!!! 始めるよ、止められないよ!!! これから戦争並みの大乱闘を巻き起こす!!! お前たちはコマとして、死んで来い!!!」

あおるような叫びにコマとして用意された人々は開戦前の勝利を確信し、拳を空に突き出す。

シャガンはその光景を嘲笑い、そして率いた。

「これが、今作戦の指揮官にして元切り裂きジャックの資金源、中片財閥の一人息子の中片亮祐だ。彼が用意した作戦は完ぺきにして死角なし。思う存分に暴れてこい!!! 殺しですらも、合法だあ!!!」

シャガンが指差す壁は一瞬にして亮祐に破壊され、コマ達は血眼で我先にと走りだす。

誰一人としてシャガンと亮祐を疑っているものなどいなかった。彼らが滅ぼすのは平田竜太含む四人の切り裂きジャックだと、思っていた。

誰もいなくなつた時を見計らいシャガンは亮祐の鍵に触れる。

黒く気高いその鍵はシャガンが触ることによって微かに反応した。

「鍵が、欲しいのか…」

亮祐はシャガンに尋ねるが、シャガンはただ笑うだけだった。

シャガンは一通り笑い終わると亮祐に顔を近づける。

「始められるんだ。おれが晴らしたかった恨みを。ぶつけられるんだ。おれの積もつた苦しみを」

かすかに香るミントのにおいが亮祐の鼻孔をかすめる。

「歯磨き粉、まだ使えただろう」

それが新しい歯磨き粉だと判断した亮祐は思わずそこにかみつく。

シャガンはにやにやと笑い亮祐から一歩下がりながら頭を下げる。

「良いんだよ、記念だ。おれが生きることのできる記念の一本だ」
ケタケタと笑うシャガンの姿は、時折まるで映像が乱れるかのよう
に歪んでは治つた。

「時間なんだよ、俺が俺であるための。おれが俺でいられるための…」

祀たちが寝静まつた夜、王牙雷流は微小ながらに揺れていた。

時計が時を刻む音と共に音を出している。

初めておこる現象に驚いた豪雷竜は思わず剣から出てしまう。

そして、自らの体も震えていることに恐怖する。

いったん落ち着いてから、空气中を漂う静電気が豪雷竜に送る情報を整理して叫ぶのと、衝撃とともに侵入者が流れ込んでくるのは、ほぼ同時だった。

一瞬遅れて、祀たちが目を覚ましたこともわからないほどに、衝撃は続き、何かがなだれ込んでくるのを感じた。

「おきろお!!!」

叫ぶ豪火竜に五月蠅いと殴ろうとする理緒の拳は同様に起きた震動により竜太の後頭部に直撃する。

唸るような音の連続の中、まぶしい光とともに流れ込んできたのは見慣れない、何かの制服を着込み、武装している人の姿だった。

「動くなっ!!!こちらら切り裂きジャック総本山特殊警備部隊であるっ!!!」

混乱に乗じた作戦で、あっという間に八迫と理緒は捕えられる。まだ寝ぼけている頭では、これが何の悪ふざけかもわからない。

切り裂きジャック総本山特殊警備部隊と名乗った一人の男が壁に立てかけていた覇凱一閃に鎖を巻く。

「これが、平田竜太の剣、覇凱一閃で間違いないかと思われます」男が奥に構える上官の元へと剣を運ぶ。

「情報と一致している。処置を施して、転がしておけ」上官は命令とともに八迫の前に立つ。

「お前たちにはわからないだろうなあ…。何でこんなことになっているのか」

乱暴に八迫の髪を掴みあげると、男は拳を振るう。「終わりだよ、お前たちは。切り裂きジャックは」

叩きつけられた八迫は男を睨む。しかしそれを見つけた戦闘兵が八迫を蹴る。

一方の理緒にはまだ手出しはされていないもののいつ暴行が加えられるかなど分らない。

状況の不明確な恐怖が二人を支配する。

「連れて行け。総本山で、決着をつける」

おそらくその中で唯一の執行権を持つその男は鼻で笑いながら八迫の顔を踏む。

「今頃、普通の民家はどうなっていることだろうな」

明らかに見下した態度をとる男の元に連絡が入る。
平田竜太を、捕まえた、と。

第一百十話

It is had a mind no neither st

ちよつと間が空いちゃいましたがご愛嬌。

なんて言つてられる様な状況でもないのですけれども……。

少しの間ほのぼのとさせようかと思つたのですが、ほのぼのと出来
ませんでした。

その結果がこちらになりました。

今度はいろいろと面倒そうですが、どうぞよろしくねー。

次回百十一話 燃える、燃える、燃え上がる。 It burns ,

it burns , and it blazes up .

【仮】

これにてシャガンさんはご退場願つつもりです。

起きるはずもないこんな時間に目が覚めた原因は二つ。

一つは、異様なにおいを感じたこと。

もう一つは、熱風だった。窓をたたき割り流れ込んでくるとけるような熱。

飛び起きた竜太が見たものは赤だった。

窓の外で暴れ狂う焰の竜。

理解するのに時間はかからずに、竜太は部屋の外へ飛び出そうと後ろを向く。

どすっという鈍い音と共に竜太は壁にぶつかる。

「平田、竜太だな。我々と来てもらおう。切り裂きジャック総本山へ」と

それは壁ではなかった。全身を余すことなく包み肌を一切露出しな衣服を着た男は表情を見せずに竜太を掴む。

「平田竜太、拘束完了」

一瞬にして口をふさがれ手足の自由を奪われ、気絶させられた竜太は、その後どうなったのかなど知ることはできないのだった。

もちろん、母親の事も含めてだ。

「こちらは切り裂きジャック総本山特殊部隊！！貴殿らが切り裂きジャックが隠ぺいした事件の隠し子か！！！」

なだれ込んできた男は、男女だった。

言葉のあやでも、いい間違いでもなく、確かに男女だった。

右半身が男で左半身は女の、化け物だった。人間とは認められないほどの男女だった。

「あらやだ、すっごい好みの子がいっぱいいるわぁ…食べちゃおうかしら（ペロリ）」

その場にいた祀たちの背中に寒いものが駆け巡る。どうやらこの男女は一人二役のようだ。

あつという間に祀たちは拘束され、身動きが取れない状況へと陥る。隣から同じように砺礎と凱史の悲鳴も聞こえる。

一方的な攻撃にはなすすべもなく、彼らは連行されていった。

シャガンが壊した総本山の町。そこからさほどは慣れていない場所に異質な存在感を放つ建物があった。

それこそが今竜太たちが連行されている場所、切り裂きジャックにとって重要な場所だった。

道中すれ違う兵士たちは口々に呟いていく。

死に方は法廷で決めてもらえ、苦しんで死ね、などと好き勝手に叫び散らしていく。

ようやく長い廊下を抜けると、そこは裁判所らしい建物だった。

行け、と拘束を外されてから背中を押された竜太たちは強引に檻の中に入れられる。

しばらくしたのちに、裁判は開廷して、ただ一度裁判長が口を開くだけで裁判は終了する。

「罪人、竜太、八迫、理緒、紋太並びに彼らがかくまっていたであろう祀、佚榎、鐵、砺礎、凱史の九名の身柄をこちらで確保させていただきます。ただし、身の保証は一切しない」

裁判長が右手を鳴らすと裁判所の一室にはシャガンが用意していたコマが現れる。

「切り裂きジャックとそれによって生きながらえてる僕たち、みんなみんな苦しんじゃうといいよ」

裁判長の姿が歪みシャガンへと変化する。

それと同時にすべての扉から特殊部隊が乱入してくる。

「ここにはもう切り裂きジャックなんてものは存在しない。あるのは元切り裂きジャック用特殊部隊」

その後、シャガンの指示により特殊部隊全ての銃口が竜太たちに向けられる。

逃げるぞ、と八迫の叫びが聞こえる。それに続いて走り去っていく仲間たちの足音。

けれども竜太はそこから頑として動こうとせずにシャガンを睨みつける。

「変わらないな、七の切り裂きジャック、平田竜太。あの時の貸を返してもらいに来た」

えげつない笑みを向けるシャガンに竜太は指をさす。

「絶対に、ぶん殴る!!!」

捨て台詞をと共に去ろうと思っていた竜太は方向を変えようと体の向きを変える。

しかし周りは特殊部隊に囲まれていた。

「逃がすと思うか、俺の手ごまであるお前を」

再び頑丈に拘束された竜太は思わずつぶやく。

あれ、こんなはずじゃ…？

シャガンが竜太の前に降り立ち顎を持ち上げる。

「どれほど待ったと思う？この時を。始めるんだよ、俺が出来なかったことをお前を超えることで成し遂げるんだ」

嬉しそうにシャガンは竜太を投げ飛ばす。

避けることもままならず、周りにいた特殊部隊を巻き込み竜太は壁に叩きつけられる。

「竜太、お前のジャックを括目しろ、お前から、お前たちから切り裂きジャックの権限をはく奪する」

言葉は、目的を果たそうと竜太を取り巻く。

シャガンはただ笑ってこちらを見ている。ただ何をするでもなく、笑っている。

「壊せ」

続く言葉はさらに竜太に取り巻き、目的の物を見つけ出すと迷わずにそれを壊す。

「これで、切り裂きジャックはいなくなつた」
不快な笑い声と共に竜太の腹部に向かつてシャガンは拳を喰らせる。

質問の答えにたどりついたときにはため息が出た。

昔からそうだった。

養成学校の時も集団行動で隊長を任された時の事。

あの時もこんな風に一人行方不明にしてしまったんだつた、と八迫は自己嫌悪に陥る。

鐵が辺りを見渡した時、すでに竜太の姿はなかった。

だから八迫に伝えたのだ。竜太がいないと。

八迫は一時的な自己嫌悪の後、すぐに思考を切り替えいったん逃げることを最優先した。

理緒と、紋太も、祀に砺礎、凱史や佚榎それから鐵はその意見に賛同しとにかく逃げた。

隠れ家として選んだ場所はジャックスクールだった。

出入り口は全部で二か所に作られている。

総本山周辺に厳重に配備された特殊部隊の目を掻い潜りながらようやく見つけた隠れ家だった。

手元には何の武装もなく、残されているのは八迫と理緒の二人のジャックのみ。

けれどもその頼みの綱に、突然ひびが入る。

「んぎやあー!？」

思わず叫けぶ理緒の口をあわてて防ぎとりあえず殴りつける。もちろなん後で数倍返しなのは目に見えているが。

口をふさいでもなおおも、モガモガと何かを伝えようとする理緒は自信の手首を掲げる。

そこについているはずのジャックはみしりと嫌な音を立てて手首から外れる。

それに続いて八迫の手首から何か金属が音を立てて地面に落ちる。

「うあああああ！？」

今度は八迫が叫ぶ番で、それを砺礎と凱史が殴ることでは止める。武器も何も無い中での頼りはこれまで培ってきた経験と武力だけとなってしまうた。

「一回、戻りませんか？」

一瞬にして落ち込んだ空気をどうにかしようと祀は提案する。

「帰ったら、その一応武器とかあるわけだし抵抗ぐらいは…いや必ず勝てると思うんです！！！」

ぐつと握り拳を作り胸の位置に構える祀の姿に少しだけ雰囲気はよくなる。

「かえろおー」

紋太も賛同して立ち上がり拳を突き出す。

痛む頭を押さえながら、八迫は指揮を出す。

「いったん帰ろう。出直してボコる。ここまで時間の浪費されて黙ってらんねえ。泣いて謝るまでボコってやる」

ウヒヒツと笑う八迫に鐵と佚榎が懸命になだめる。

「暴力はあんまり度が過ぎると駄目、駄目だから！！健全な子供が二人いるからーっ！！！」

鐵が紋太を、佚榎が祀を指さして叫ぶ。

「なあなあ、誰がいるんじゃねー見てみよーぜ」

やんちゃそうな少年が好奇心丸出しでこちらに近づいてくる声が聞こえる。

「やめようよ、見つかったら怒られちゃうよ、入っちゃダメって言われてるんだから…」

どうやらそれを止めようとしている子供もいるらしい。

「見つかなきゃいいんだよー、ほら早く、行くぞおー！」

どうやら大声で叫んだりしているうちには外には声が漏れていたらしい。

反対側に入入り口があることを幸いにこそそと逃げ出していく。後ろからは、何もいねーな…。やっぱり気のせいだったんだよー、

こらー！！！お前たち何してる　！！！！、うひゃ！ごめつなさい！
！！などというやり取りが聞こえてきた。

シヤガンはその光景を見て思わず舌なめずりして喜んだ。

目の前には鎖につながられ頭を垂れている竜太がいた。

竜太の足元に記されているのは何らかの術式で、その中心に竜太は倒されていた。

「こつちで見てたらどうだ、お前の友達がただの人間となり下がるその瞬間を。お前の息子がただの愚息になり下がるその瞬間を」
激しい閃光が部屋に満ち溢れ、

第百十一話

It burns , it burns , and it bl

変なところで打ち切っちゃいました。

別に先が面倒になったからとかじゃなくってそういう仕様にしてみ
ました其の二です。たしか前もやりましたね。

眞石版編の時台座が云々。

ちなみに、全然その場で書き上げていきますのでつじつまが合わなく
なった場合は修正したりするかもしれないのです。ごめんなさい。

次は一週間後ぐらいにかけると嬉しいなあ…。

次回百十二話 タイトル未定

今考えている時点ではなんだけ面倒なことになり更に面倒な奴らが
大集合になる予定です。

第一百十一話 People not forgotten. (前書き)

忘れられぬ者たちよ

止めたかった。

けれども意識はあるのに抗えない、地獄攻めを味わわせられていた。目の前にいる家族はぐったりと力なく、意識を失っている息子を助けたいのには体は全く動かない。

恨んだ。

力有るシャガンを。そして力なき不甲斐ない己自身を。

何一つとして守ることはできない…。

力有る者に抗えずに使われていくのみ。

止めたかった。

けれども意識はあるのに何一つ現状を変えられない、そんな地獄を見せられていた。

目の前にいる仲間は今も何時間も意識を失い続けている。

目を、逸らしたかった。

守ると意気込んで、自分の力を過信して、そして今に至る己の馬鹿さ加減を恨みたかった。

何一つ成し遂げることもできない…。

ただ、力なく抗うこともできず、体の中から滅んでいく道しかない。

ただ、助けたかった。

シャガンは竜太の頭に自らの頭をつける。

激しい閃光と共に竜太の体は痙攣していく。

シャガンは時折、ふむ、だの、ほう、など一人で納得しながら閃光は一層激しさを増す。

「情報は集められたな」

人目を気にせずにはヤガンは下劣な笑い声で吠え続けた。

やっこの思いでたどり着いた帰る場所はそこにあつた思い出を何一つ知らない輩によつて荒らされていた。

足の踏み場などほばないほどに荒らされた中から役立つものを探するのは至難の業だった。

けれどもやっこの思いでかき集めた武具の数々の中竜太と祀の二本の剣は不思議な鎖で鞘から抜けない状態へと加工されていた。

「王牙雷流…豪雷竜…!？」

祀の声に微かに反応する王牙雷竜はしかながら剣から出ることはかなわなかった。

刃が鞘から抜けぬ剣を腰のホルダーに差し込むと、祀は竜太の覇凱一閃を手に取る。

こちらもやはり鞘から出られぬようでただ震えるばかりであった。三十分の自由探索のうちに集まった全てで歯向かうことのできる物は多くなく、そして何よりどれほど持とうとも心もとない。

八迫はこれまで道具に頼ってきた自分の愚かさを一笑し、心機一転武具開発に取り組む。

さらに続くじ活動の中、紋太は光る何かを見つけ、思わず駆け寄る。紋太が近づくとつれ輝きは薄れ、紋太が触るころには依然と変わらぬ姿の武器が眠っていた。

亮祐がいつも使っていた、アドベンチャー。

あんなにおどけていった亮祐は裸一貫で強大な敵に挑んでいったのだと思ひ知らされる。だとしたら、今同じような状況下におかれていた自分たちはどうなってしまうのだろうか、不安ばかりが頭を回る。

刻印の元に立ち尽くしたのはいくつもの闇だった。

竜太を虚ろに取り囲むそれらはどれもが気がなく、到底生きてい
るとは思えないような状態だった。

目は鈍い赤色を放ち、動脈は時折不自然に増大する。

もしも竜太がこれを見たとしたら逃げ腰になること間違いなしだっ
た。

一つは竜太とほぼ同じ背丈をし、髪を短く刈り込んだ冷酷な顔立ち
をした少年。

一つは二つの首を一つの体に生やし滴る涎を物ともせずにとだ立ち
尽くす獣。

一つは蒸気を上げ物騒な単語を連呼し、体からいろいろ生えている
巨大な機械。

一つは異常なまでに細い腰にこれまた異常なほどスリムな体型をし
不可思議な面などを弄び竜太を凝視する王。

一つは微動だに動かずにそこにただあるだけの存在。

一つは息荒くたった一人の名前を狂いながら叫ぶ猫背の男。

それを見ているのは竜太の父親と亮祐、そしてシャガンの九名がた
だ一人、元七の切り裂きジャックの姿を穴が開くほどに見詰めてい
た。

シャガンは吠える。

「桐原須藤、国獄王にガルガンティア。マリーネと福音業更ゴスヘル・カルマに所長

さん。あなた方がなし得なかったその果ての願望…今なら叶えられ
る。私の配下となり、共に切り裂きジャックを滅ぼそうではないか

…」

その場に呼び出された六つの魂は同時にシャガンの方へ体を向ける
と一斉に襲い掛かった。

第一百十三話 I d o n - t k n o w (前書き)

私は知らない。

第一百十三話 I don't know

外に出た瞬間にこれかと、祀は歯ぎしりする。

本当は歯ぎしりは歯が削れるらしいからやってはいけないとテレビで見たが、そんなことなど忘れてしまうほどの状況だった。

八迫が決めたとおり、祀は進むべき道がある。

祀は大きく息を吸いキツと行く末を睨む。

その場にいる全員が突如として現れた彼らを見て闘志をむき出しにする。

特に八迫、理緒、紋太の三人はそれがだれだか知っているようで祀たちよりもずっと警戒している。

「何で、お前たちがここに……」

「あんたたちはもう、」

「え！？何で、何でここに……!?」

彼らの前には今、六つの影が立ちはだかっていた。

そのどれもがかつて会いまみえた者どもの姿、だった。

そのうちの一人が口を開く。

「八迫、久しぶり……」

時遡り数十分前。

その動きは全て想像の範囲内だった。

己が主となると各人がまず自分を潰しに来るであろうことは、真っ先に考え付くことで、すでに対策は講じてある。

右手を挙げ、竜太の父親と亮祐を狩り出し意のままに操る。

亮祐は鍵で、父親は脚力で全てを弾き返す。

「貴様ら雑種が歯向かうことなど許されてはいない。おとなしく服従しろ、奴隷共めが」

シャガンが目を見開き、その場の空気を凍てつかせる。

誰もがその場で動こうとしない中、発言者のシャガンは顔をそむけ、出口を指さす。

「やる事はわかっていているだろう？ いけ、報酬は考えておこう」

シャガンの声は凜と響き、その場に呼び出された者たちがそろって出口を指す。

死者がいなくなったその部屋でんっ、と短い声とともに、竜太はその眼を開く。

亮祐は軽く背筋を伸ばし、竜太の父は喉を鳴らす。

そして…

竜太は寝ぼけた目で彼らを凝視して、固まる。

すでに彼らは血の雨に濡れていた。

手から滴り落ちる血は、草木を染め、たどっていけばどこから来たかが分かるであろう程血に染まっている。

「ここに来るまでに我らは駒を糧とした。結果がこれだ」
ユスベル・カルマ
福音業は両の手に持つ血染めの剣と槍を掲げる。

「どれも、私達が満足するには及ばなかったんだけどね」

もはや元の色もわからぬほど染まっているマリーネが腰に手を当て微笑む。

「始めようぞ。貴様らと話すことなど何もないのだから。博士の望む答えは一つ、殺しだ!!!」

ガルガンティアが突如として牙をむく。

「んで…こんなところにいるんだよ…」

とっさに出てくる言葉はどれも使い古されているような何も伝わらない文字の羅列で。

とっさに絞り出した声で出た言葉もやっぱり使い古されたような言葉だった。

亮祐は目をそらし、父親は哀愁漂う目でただこちらを見ている。

けれども、シャガンはそんなしんみりとした茶番に付き合うことなどなく、一人高みの見物を決め込んでいる。

亮祐が持つ鍵はひたすら竜太を襲い、父親は休むことなく強烈な蹴りを叩き込んでくる。

切り裂きジャックとしての力も、更には頼りの覇凱一閃もない状況で竜太ができることといったらただ避けることだった。

しかし、無限の力を蓄える黒鍵とそれを持つ亮祐、更にはシャガンに操られ意のままとなっている父親の体力はほぼ無限と言ってもいいもので、到底いつまでも避けていられるなどと思えるようなそんな生易しいものではなかった。

極めつけは、シャガンの補助。二人の速度を倍速化し、同時に攻撃を仕掛けてくる。

亮祐は必死に抵抗しようとするし、父親も止めようと歯を食いしばる。が、そのどれもが効果を発揮することなく竜太は再び意識を失わされる。

「我が輪転にて切り裂きジャックは完成となる」

倒れた竜太の頭を掴み、持ち上げるとシャガンは一人呟く。

そして、部屋中に書き込まれた陣が解け、機械を出す。

白を中心とし、黒やオレンジなどで彩られたシャガン二人分の大きさの機械。

それが、輪転機だった。

「エバーニエン・サージエ!!!!!!」

「カルヴォーネ・エカスタンンンンン!!!!!!」

「ヴォオオオオオオオオオオ!!!!!!」

ガルガンティアが、桐原須藤がそして国獄王が同時に咆哮し、技を放ち、祀たちと八迫たちを二つに分ける。

地には深く大きい溝ができ、反対側に渡ることができないように細

工される。

「始めようよ、八迫。僕達の決着を！！！」

頭皮から血が出るのも構わずに須藤は掻きつづける。次第に須藤の顔も血で染まり、八迫はとっさに目をそむける。

「俺はさあ、まずはお前が一人目だ。博士の祈願の道具と成り果てるお！！！」

ガルガンティアは紋太に目標を定めると体内から鉄の腕を取り出し装着する。

「兄弟機の、そして名もなく捨てられていった試作品たちの恨み、辛さ、すべてが私を勝てと促す！！！」

その場にいる切り裂きジャックは誰も知らぬ事だった。

ガルガンティアを作ったディア博士。

彼が見逃したウイルス汚染の進行によりガルガンティアのCPUはプログラムを変更し、製造目的とは全く逆の運命をたどろうとしていることは、竜太と亮祐の二人しか知らぬ事だった。

八迫が、理緒が紋太が見るガルガンティアは、突如として飛来し、侵略しようとしていたただの悪鬼に過ぎなかった。

紋太は重みの増した腰に手を伸ばす。

そこには大好きな人の、大切なものが増えている。

迷わずにそれを手に取り連結させる。

ビーストレイク。

紋太の頭を忠告がふとよぎるが、そんなことを言っただけでいられるような状況ではない。

ためらいがなかったと言えはうそになるが、紋太は引き金を引こうとする手を止められる。

ふと顔を上げると凱史が笑っている。

「無茶したらダメなんでしょ？任せといて任せといて。援護射撃は頼むからね」

凱史は手に持つ強化鋼の傘を担ぎガルガンティアに飛び蹴りを食らわす。

理緒は目の前でにこやかに手を振る国獄王に微笑み返す。

国獄王はただ理緒を見つめ、咆哮とともに飛び上がる。

次の一手は互いの頬に向かって拳を伸ばす、クロスカウンターだった。

不愉快なものが視界に入る。

「はあ、はあ…祀、祀祀祀祀イ！！僕はもう一度君に会いに来たよお…」

相変わらずだ。

死んでもなお所長は祀を苦しめ、いまだなおその毒牙から離すことを知らない。

俺達は仲良く普通にしたいだけなのに。

人間として生きていたいただけなのに。

佚榎はズボンのチェーンに手を伸ばす。

目を細め、視界に入るのは息荒く猫背の変態ただ一人。迷うことなくチェーンを飛ばし、所長の首に重く冷たい鉄を巻きつける。

「もう、俺たちにかまわないでください」

言ってみて気が付いたが、冷たい声が出せるものだ、思った。

それと、祀はすでに所長など振り切っていて、もう気にも留めていないということ、過去にとどまっているのは自分だったということ、とを、悟る。

「我ら騎士に楯突く者には王立法により処罰を決める。第二十八項特例、死刑執行、だ」

槍と盾を構える福音業はその冷徹な鎧ゴスヘル・カルマの中で、何も無い空洞の鎧は

確かに笑った。

確かに声が聞こえたのだ。

鐵はそれを聞いて思わず頬が緩む。

何も持たない鐵の手が空気を掴みまるで棒状の何かを持ったような形になる。

「今からお前は俺が斬る、ただ的と成り果てる。喰らえ、空刀壱の型」

鐵はなぜか空気を見えない圧縮することができた。

祀は空気を奪うことができて、俵が空気に乗れる。

これが鐵たちが人間ではなくなった上で出来るようになった一つの事で、使える物のただ一つでもある。

小さく圧縮された空気は鉄以上の強度を保ち、「スヘル・カルマ福音業の体に傷をつける。

「お嬢さん、私と踊ってくださいますか。私が作曲した貴方の悲鳴という名の楽器の音色で」

マリーネは砥礪の右手を取るとゆっくりと足を踏み出す。

右左、右、右、左。一回転させてから空へ投げて、爪で刺す。

祀は戦場を駆け抜けていく。

腰に巻かれたデイパックの中から紙の札を出すと地面に叩きつけ、使用方法にそって式を読み上げていく。

大丈夫。来てくれると約束してくれた。

信じるから信じると、そう言われ、祀は信じると決めた。

だから祀は竜太を引きずり出してくるといふ役目を引き受けた。

祀は、紙によって出てきた門を潜り抜け、男の前に出た。

「ああ、祀か」

二重の声が重なりその男は振り返る。

一つはよく知った声で、もう一つの声はひどく重たい声だった。

「どうしたの、祀」

振り返った男、平田竜太の目は赤に染まり、怖いほどにっこりと微笑んでくる。

動けずに固まる祀を物ともせず、竜太は歩いて近づいてくる。

やがて、顔が付きそうなほどの距離になり、

「大丈夫だった？」

その微笑はいつもの竜太となら変わらないものなのに。

竜太の腰にある竜魂剣はその刀身をゆっくりと見せつつある。

そして、竜太の顔をしたそれはにいと顔をゆがませる。

「ふざけんなよっ!!!」

八迫は叫んだ。叫んで何が変わるといふことなどないが、それでも叫ばずにはいられなかった。

互角の状態で戦っていたときに突如現れた少年と中年のおやじ。

彼らが来たことにより戦況は敵に傾き、彼らは一ヶ所に集められ、そして囲まれている。

すでに仲間の大半の体力は底をついている。

誰もが肩で息をしようやく意識を保っているような状況だ。

そんな中、ようやく顔を見せた少年は最もよく知る親友だった。

叫ばずにいられようか、これが。

苦痛を顔に出す八迫に対し亮祐があざ笑う。

「俺は、お前たちの敵だ。同情もいらぬ。おれはお前たちなど知らん。さあ、一方的な楽しみを始めようじゃないか」

第一百十三話 I d o n ' t k n o w (後書き)

更新忘れてたわけじゃないんですよ、書いてたし。書き溜めてただけだし。

溜めちゃいかんとわかってはいるが…宿題とかためちゃわないですか？

時間がないので略しちゃいますが、次回の予定はまた未定!!!
神の国計画は発動すると思いますが、内容も白紙、何にも決まっていない!!!

そんなですが、どうぞよろしく願います。

話数シリーズで一番長くなればいいなあと思いつながら。

そんなに書いてたら疲れそうですね

第一百十四話 It can fight with me. (前書き)

俺と闘え。

その黒鍵は全てを薙ぎ払った。

一撃で全てを倒し、その場に立っているものはたった二人となる。

亮祐と竜太の父親の二人だ。

うう…などと呻く敵や、裏切る気かなどと睨む雑魚はいらない。

一番下の駒を倒した程度で上機嫌になっている雑魚など、神の国には必要はない。

強者が強者を喰らい更なる強者へとなるべく作られる理想郷、神の国。

それこそが最終目的。

たどり着くべき国への計画。

黒鍵との意見が同調していく亮祐は黒鍵の意識をくみ取り、鍵の鼓動に気が付く。

「お前も、感じているな…」

その笑みはひどく下衆な笑いだった。

本来ならば亮祐から現れることのない笑み。

それと同時に亮祐は黒鍵を再び振るう。

しかしそれは八迫たちに対してではない。

黒く輝く黒鍵の狙いは、須藤を筆頭とする死者たちだった。

けれどもその鍵は、殺すために振るわれた一振りでは、なかった。

盟神探湯は蒸発させられ、王牙雷流は鞘から出ずに部屋の隅に転がされている。

祀はといえば竜太が持つ幻想の龍魂剣により地面にあおむけに転がされていた。

その原因である竜太は、歪んだ顔をニヤつかせ、それを本来持つべき人からは想像もできぬほどの顔で祀を押さえつける。

「…………ふはっ」

竜太はその手に持つ龍魂剣をゆっくりと祀の首にあてる。命をいつでも奪えるという優越感が竜太の口から自然と笑いを漏らしていた。「呼応するのはその魂。わが器となるべくして造られたこの体は、俺が再び生きるということの身を考え数多の犠牲をとわずに練られた一つの計画。これこそが神の国計画の第一段階」

竜太は竜太の声でない別の誰かによって動き続ける。

「そしてそこから始まる黒鍵による支配。そこに係わるのが黒鍵に操られる操り人形。これらで統一し終わった時に、神の国計画はようやくその姿を現し、このシャガンによってすべてが始まるという寸法だ。つまり、平田竜太はおれの器として作られただけの存在。

それ以上でも、それ以下の価値でもないというわけだ」

祀の耳元でささやかれるシャガンの計画は、どれもが所長の元で働かされていた出来事と関連していて、どこからか漏れた情報をもとに所長が成し遂げようとしていた計画であることを祀は悟る。

「見せてやる、お前たちが持つ刀の真の姿を。それらはすべて一つの刀で出来ている。炎斬刀覇凱一閃と王牙雷流。更には龍魂剣の元となる龍銀剣、龍銅剣。四つの剣を一つにすることで始まる新世界の力。竜太がひれ伏したこの力」

シャガンが掲げる右手の周りに四つの剣が集まる。

覇凱一閃と王牙雷流がぶつかり溶け合い、龍銀剣と龍銅剣がはじけて新しい形に生みかえられ、それらが再びぶつかり、はじけ、生み出される一振りの両刃剣。

「さあ、運命に抗え。己に嘆け。？垂翅祀、貴様らに助けられる命も、変えることのできる運命もありはしない。この炎雷刀王者龍閃えんらいとうおうじやりゅうせんの切れ味を体で試していけ」

炎雷刀王者一閃は刃の左右にそれぞれ豪火竜と豪雷竜をかたどったものか本体かわからない竜がはめ込まれていた。刃には二頭の龍が互いに絡み合い描かれている。

絶体絶命の危機を迎えている祀の前に武器はなく、ただその王者龍

閃を見ることしかできなかった。

そもそもこうなったのにはそれ相応の経緯があった。

亮祐と竜太の父親がその場に立ち尽くす中、シャガンはその右手を竜太へ向けかざす。

輪転機に拘束され、動かない竜太に対し、シャガンはゆっくりとその両手を入れていく。

意識もはつきりとしないうち、竜太は苦しそうに苦悶の表情を浮かべる。

シャガンはゆっくりと竜太の心との対話を試みる。

《聞こえているだろう、平田竜太。つまり、お前は御被箱なんだよ》
シャガンの体はどんどん竜太の中へと入っていく。と、同時に竜太も苦しそうに体をよじらせるが鎖で拘束されている体は全く動く気配もしない。

《ッるさい!!!》

シャガンが見た竜太の意識は、何もなただ白一色の場所に十字架にくくられて立っていた。

《ふはははっ。お前はつくづく縛られるのが好きなようだな、あれか、縛られないと満足できない口か》

《ンなわけあるか!!!とにかく、お前はここから出ていけ!!!ここは俺の体で、ここは俺の場所だ!!!》

意識の中でも動けに竜太に対し、力を自由に使えるシャガンは余裕の笑みを浮かべ、竜太を抱え、何も無い淵へと立たせる。

《教えてやるよ、お前がなぜ選ばれたかを。なぜおまえだけがこんな目に合うかを。おれだよ、お前たち切り裂きジャックは俺の考えた計画という名のゲームをひたすら攻略していたにすぎないっ!!!》

竜太の目に驚きの色が現れたのを見てシャガンはさらに上機嫌で続ける。

《全部だよ。全部俺が作ったシナリオをお前たちというプレイヤーが必死になってエンディングを迎えるために足掻いてたんだよ。滑稽すぎて心配してたんだよ。順調すぎたしな》
ふと、竜太が下を向き方を震わせる。

《じゃあ…》

一度間をおいて考え込むが、すぐに言いたいことはまとまる。

《八迫が須藤と闘わなくちゃいけなかったことか！！！真幻想殺したのも、祀たちが悲しい思いまでして堪えてたのも！！！紋太が背負ってるもんだとか全部、全部お前が決めてたことなのか！！！！》

突然の竜太の反応にシャガンは一瞬戸惑うがすぐにいつもの顔を取り戻すと一言で返事を返す。

《ふざけんな！！！誰もがみんなお前の操作キャラクターじゃねえんだよ！！！人間なんだ！！！生きてるんだよ！！！！》

自身を縛る鎖を暴れさせながら竜太はシャガンに叫ぶ。

《お前なんかには操られてたまるかっ！！！！》

べえ〜つと舌を出す竜太はシャガンの幻想の力により顔のすぐ横に斧が突き刺さる。

《黙れよガキが。俺を誰だと思ってるんだ。俺はお前を作ってやったんだ。創造の親の言うことを黙って聞いとけばいいんだよ》

鼻で笑うシャガンを見る竜太は思わず“声”が出ていた。

「俺と闘え」

真剣な目でシャガンを睨む竜太の目にシャガンは竜太の拘束を想像で壊す。

《お前が負けたら体を明け渡せよ》

一本の剣を渡された竜太はその剣を柄から抜き、シャガンに構える。
《逆らえぬ絶対的力を前に服従し、そして絶望に心を食われてしまえ！！！！》

シャガンは更に興奮した様子で竜太の中へと消えていった。

しかし次の瞬間に竜太は飛び上がるように上半身を起こす。自身を拘束するその鎖を軽々と引き裂いて。

「これが、俺、シャガンの姿か……」

軽く体を動かし、竜太の中にいるシャガンは輪転機を壊す。

「なあ、どう見えるんだ、お前たちに目に、俺は何に見えてるんだ？」

意地悪いシャガンの質問に、亮祐と竜太の父親はただ、悲痛な叫びを訴えた。

「行ってこい。その代わりに、生きることを許すな」

シャガンのその声は、逆らうことを許されなかった。

そして、亮祐と竜太の父親は黙って八迫の元へと出向いていった。

こうして、竜太の中にシャガンがいるという奇妙な状態は出来上がり、祀に襲い掛かっているのだ。

「行くぞ、我が魂に呼応しろ！龍をも一振りで払う剣、王者龍閃よ

！！！！」

シャガンはためらうことなく、その剣を振るう。

じたばたしたところでシャガンはびくともしないし、それによって何かが変わるわけでもない。

祀はおとなしくため息をつくと、腰に隠し持つ金箔に手を伸ばす。

亮祐が振るった黒鍵は誰一人斬ることなく、ただその鍵からは邪気を発するだけだった。

禍々しい邪気が須藤たちを包み、その邪気はどんどん小さくなっていき、最終的な形としては一人の人間のような形で落ち着き、邪気は消え去る。

『おお、力が余るほどだ。いいのか、黒鍵を使うものよ。瀕死のこやつ等の後は貴様ら、そしてシャガンだぞ』

長身の姿となつたそれはもはや原形をとどめていなかった。

元が誰であつたかなどもはやだれにもわからぬような異形の存在。それは黒鍵は命を一つにする力をも併せ持っていたということを証明するものだった。

「何、問題はない。すべてはこの黒鍵が解決することだからな。」すでに八迫たちには立ち上がる気力はなく、それでも彼らは全力で叩くことを止めはしなかつた。

「さあ踊り狂え、饗宴の宴だ。破滅よ!!!」破滅と呼ばれた命を弄ばれ創られた生命体は右手に付加した十円砲を抱えそして霊を集合させ作り上げた巨大な剣ウィランナを振りかざす。

その光景を見た彼は、一人、上へと行くことを決意した。

一緒に遊んでいた子供たちが、声援をくれる。頑張ってきてね、と。

だから、彼は壁にかけてあるそれに手を伸ばす。

そして、自分を助けてくれた友達を助けるためにそれを羽織る。

手に持つのは籠の杖と。

無理やりこじ開ける地獄の門は、重いけれども、地獄の王を舐めてはいけない。

『破片に変われ!!! 巨石両断、十円ウィランナ!!!』

破滅が振り下ろしたその剣は、助けに来た彼によって一時的に防がれる。

黒いローブを羽織り、見た目はただの少年だけれども、違うのは頭に角が生えていること。

紋太が見たその敵は、自分が初めて和解した相手、竜王だった。

杖でウィランナの刃を止めつつも、竜王は紋太たちを一時的に離れ

た場所へと送る。

「僕は！！！！大丈夫……だから！！！！」

叫ぶ竜王の背中を見て、紋太はうなずく。

紋太は確信する。

きつと、竜王が送る場所は竜太がいる場所だろうな、と。

亮祐はそれを見て竜太の父親とともに急いで鍵を使い時空の扉をこじ開ける。

「破滅、その生意気な竜は必ず始末してくるんだぞ！！！！」

破滅は返事もせずにあいている左手に覇道をためる。

アルティメットチャーター
『限界超越！！！！エヴァーニエン・サージエ！！！！』

白い塊が完全な球を作り、破滅の左手に集まる。

竜王はとつさに龍の杖をベルトに刺すと、両の腕を前に突き出す。

「滅龍奥義紅蓮雷神斬！！！！」

破滅と竜王のぶつかり合う技の数々は、鋭い閃光とともにその場に沈黙をもたらすのにそれほど時間はかからなかった。

第百十四話 It can fight with me. (後書き)

なんだかいろんな方面から人(?)が集まってきましたね。

さてさて、その結果はどうなるのでしょうかね!?

テスト近いので、早々続きは書けないでしょうが、来月には終わるので、それぐらいが目安かと思えます

続きは次回の講釈にて!!!

第百十五話

第百五話

The looming walls are significant

立ちほだかる壁は、大きく立ちほだかる。

書いてる途中でいったん終わりに持ち込めそうだったのに長くする
方法を選んでしまいました。

もうしばらくおつきあいしてくださいね

シャガンは、それを見ていた。

戦況を知るために、各地へと手を伸ばしているし、そのための準備期間でもあった。だから、危機を助けに竜王が来たのも必然的に目にする。

しかし、それを見たシャガンが第一に思ったことは、面白くねえという端的な感想だった。

なぜ、自分の時は手を貸してくれなかったというのに、あいつらには手が差し伸べられる!?

なぜ、自分ではなくて、あいつらにだけ、手が差し伸べられる!?!面白くない。面白くない面白くない面白くない!?!

だから、シャガンは異空間の壁を叩き壊した。

その奥がどうなっているかなど、十分承知の上だ。そこはかつて彼が閉じ込められた場所だったから。

中からは魑魅魍魎が手を伸ばしてシャガンにまとわりつくこうとするが、そのどれもが触れる寸前ではじけ飛ぶ。

「俺に触れるなよ、下衆が」

シャガンの両目が鈍く赤に染まった時、異空間の扉はその中に居た物と、その入り口を変え、シャガンの手に収まった。

「さあ、共に暴れよう……」

竜太の柔和な顔つきで、シャガンは嘲笑った。

足元に倒れる祀を蹴っ飛ばして奥へと続く通路を進んでいく。

「たどり着くことはできないよ。おれが目指す力こそが正義の世界には。暴れ始めよう」

シャガンは傍らに立つ魑魅魍魎達を撫でる。

「さあ、新しい世界を作ろう……」

シャガンは奥へと一歩足を踏み出したとき、ふいに後ろから声がかかる。

「止まれっ！！！」
しかし、シャガンは振り返ることなく、炎雷刀王者龍閃えんらいとうおうじやりゆつせんを一瞬で鞘から抜刀し、地面に突き立て、炎の壁を作り、こちらに迫ってこようと駈け出してくる八迫と紋太、鐵に佚榎が炎と雷を前に立ち尽くす。

理緒と砺礎に凱史は祀を壁際に運んでいる。

「お前たちはここに来るには早いだろ。まだお前たちがここに来るには早いんだ。後ろで相手してほしそうに二人待ってるだろ。その生身で争ってこいよ、お前たちはこっちにはこれない。おれは、創り出すんだ。神の国を」
ふふつと鼻で笑ったシャガンは炎と雷が交差する奥へとゆっくりと消えていく。

それと同時に黒い炎と強烈な蹴りが襲いかかってくる。

「シャガンの元には、行かせないよ、八迫」
俯きながら歯ぎしりをしつつ、八迫がゆっくりと振り返ると、黒い鍵が目前へと迫っていた。

「チエーン・スラツシュ！！！！」

佚榎がとつさに腰に巻いてあるチエーンを滑らせ、黒鍵を弾く。
続いて鐵がブレスレットを金属製の槍へと形状変化させて黒鍵を抑える。

「八迫さん、紋太君、あつちは頼みました！！！！」
佚榎が手首にチエーンを巻き付けながら笑う。

八迫は苦笑いしながら助かった、とつぶやくと竜太の父親の顔面に靴の踵をめり込ませた。

紋太も右手にアドベンチャー、左手にトラベラーを構えてひたすらと連射した。

あたりが紋太によって爆炎に包まれたころ、竜太は回廊を渡り、最奥部へと達していた。

奥には水晶に大きな力が閉じ込められていた。

「これさえ、これさえ手に入れば、俺は神の国に近づける。そして…俺は全てを支配し、力による正義を創る。その為の、そのためだけの黒鍵だ。そして担い手だ。捨て駒だ」

シャガンは水晶にゆっくりと頬をつけ微笑むと小さくつぶやく。

「もうすぐ、逢えるよ、アラルトベーラ……」

右手の指で、ゆっくりとその水晶を撫でていった。

よく見るとその水晶は上から少しずつ時間をかけてとけていた。

溶けた酢水は、シャガンのほうへと流れ、ゆっくりとシャガンの髪を濡らしていく。

「ああ、力だ。これが力だよ、アラルトベーラ。これで今度は、君を守ってあげられる。君と一緒にいてあげられる」

ああ、アラルトベーラ…と、シャガンはつぶやき続けた。

第百五話

The looming walls are significant

テスト前とか言っで一か月ほど更新せずにすみませんでした。

ここで言ったらまたかよとか言われそうですが、来月末にはまたテストが待ってくださいっています…。

それまでは更新できるといいのですが、というか、しますよ。

次回、百六話 溶けぬ封印は、彼の力でも解けることはない。【仮】

第百六話 N e v e r s e a l e d c a n s o l v e e v e n t h e

封印は彼の力でも解けることはない。

「君たちが竜太の友達なんだね、いつもお世話になってます。ごめんね。俺も彼を止められなかった。むしろ捕まっちゃったね…」

のほほんとしやべる竜太の父親は言葉とは裏腹に強烈な蹴りや突きを繰り返していた。

「なら、お父さん、もうすこし優しくはしてもらえないものですか!!!」

重いその一撃一撃をかわしながら、八迫は竜太の父親に攻撃を繰り返すが、それは竜太の父親に阻まれて同じことを繰り返す。

「八迫、危ないよ〜!」

紋太がひたすら二重の引き金を何度も押ししては離し、押ししては離しを繰り返す。

幸い弾薬は無制限だから手が付かれるまでひたすらに連射していればいい。

「ダダダダダダダッ!!!」

ひたすらに放たれ続ける弾丸は、竜太の父親を隠し、その姿を煙の中へと消してしまふ。

「ん、俺は君たちを倒すけど、あんまりひどいことはしたくないんだよねえ…。まあ。仕方ないか」

ふつと鼻で笑った竜太の父親は逆立ちすると体を半分回転させると勢いよくまわりだし煙を払い飛ばし、八迫を確認するとそのまま足でけり飛ばした。

「早く、今のうちにっ!!!」

伏檀がチェーンで亮祐の手首を縛って拘束している間に鐵が槍で鍵を叩き落とそうと挑むが、すべて黒鍵の意思により阻まれてしまふ。亮祐の意思ではなく、そのどれもが黒鍵の独自の判断によるものだ

った。

「だあ〜っ!!!早くしろっっていうの!!!鉄」

「だったらもっど拘束してろ!!!!」

内輪もめをしている数秒の間に、黒鍵は鎖を断ち切り、二人へと襲い掛かった。

「貴様ら、呑気に反していられるような状況だと思っているのか？

黒鍵を侮るなよ。黒鍵は俺で、俺は黒鍵だっ!!!!」

黒い炎をまとう黒鍵は形を変え、大きな薙刀へと変化する。

「俺は、まだまだ強くなれる」

真っ暗だった。

動きたいと思っただのに、体どころか指一本も動かない。

先程から見えているのは何も無い。

暗いせいで自分の手すらも見えない。

いや、本当は体すらないのかもしれない。ただ、自分がそういう感覚に陥っているだけで、何者にもなる事すら叶わずに、朽ち果てていくのかもしれない。

《お前が負けたら体を明け渡せよ》

一本の剣を渡された竜太はその剣を柄から抜き、シャガンに構える。

《逆らえぬ絶対的力を前に服従し、そして絶望に心を食われてしまえ!!!!》

そういつて剣を突き飛ばしてくるシャガンの一太刀は確実に避けたはずだった。

しかし避けたはずのその刀身は、気が付けば竜太の体に半分以上が埋まっていた。

《教えてやるうか、平田竜太》

目の前に突然現れたシャガンは輝いていて、あたり一面をにわか

照らしながら歩み寄ってくる。

くいつ、と顎を持ち上げられることで自分にも体はあるんだということを感じられることができる。

《俺が創設者だということをお前が忘れてるな、お前が避けた剣も、想像することで直接お前の体に飛ばせばいいだけだ。何、言うならばお前と闘う意味などないんだよ。無力な一中学生が》

選ばれただけの捨て駒が、どれほど抗おうと無駄なんだよ、とシャガンは竜太の顎を持ち上げる。

竜太は弱弱しく鼻で笑い、シャガンの顔に唾を吐きかける。

《ばあーか》

かすかに口に残る水分を吐き出した竜太は、頬を緩めると気を失う。《そうか、お前は抗えぬ大きな流れに逆らうというのか…。よからう、アラルトベエラの前でその精神、砕け散るといいさ》

頭を垂れた竜太を後に、シャガンは竜太の精神世界からゆっくりと立ち去っていった。

アラルトベエラと、名を呟きながら。

意識が戻ったシャガンは目の前の水晶を見てより一層頬が緩む。

「ああ、アラルトベエラ！！君も待ち望んでいるんだね…。そうだが、僕達はもうすぐまた会えるんだ」

ますます溶けていく水晶は少しずつ、少しずつシャガンの髪を濡らし、染めていく。

既に前髪は朱色に染まりまだ濡れいていない後ろ髪は黒髪のままだった。

「ありがとう、アラルトベエラ。君の力で僕は君と一緒に暮らせる神の国を創ってみせるよ。君と僕の、神の国だ」

うっとり酔いしれるように水晶に寄り掛かるシャガンはゆっくりとその瞼を閉じ、静かにアラルトベエラに語りかける。

自らが育ててきた切り裂きジャック総本部そのものを手ごまとして使ってからすべて捨ててきた事などを楽しそうに話すシャガンはそ

れからしばらく後に、ゆつくりと寝息を立て始めた。

「お父さん、すみませんっ！！！」

八迫の渾身の踵落としは、一瞬の間を見せた竜太の父親のいいところに入り、竜太の父親は倒れる。

「いやぁー参った。君たちは強いね、いくらシャガンに操られてい
るからと言ってもかなわないやぁ…。シャガンが離れてるから支配
が弱まってるんだらうね、きつと」

ぐったりと話す竜太の父親はやがてかこん、という音と共に地面に
倒れる。

同時に、鐵と佚榎が壁に叩きつけられる。

「足りない…。力が、苦しみが、殺意が、憎悪が足りないっ！！！」
暴れ狂う亮祐と黒鍵は部屋という枠をも壊し暴れだす。

すでに亮祐の目は焦点があっておらず、鍵に支配されている散つて
も過言ではない。

「ありやりや、これは手の付けようがないねえ…」

おどけて笑う佚榎も腹部を抑えて苦しそうに笑う。

「さぁ！！！そろそろあたしたちの出番だわねえ！！！」

傷つき、ふらふらな男たちを前に理緒を筆頭とした女性陣が仁王立
ちでそれぞれ構える。

「行きなさい、駄目男ども。この人にはまだ聞くことが残ってるの
よっ！！！」

こめかみに血管を浮かび上がらせた理緒は震える拳を振りかざし、
亮祐を殴りつける。

「答えてやるわよっ！あの時あんたが遺した質問に、拳で答えてや
るわよ！！！」

本能のままに暴れる理緒を見て、砺礎と凱史も構えなおし、亮祐に
群がりひたすらに攻撃を仕掛ける。

「さぁ行け、無能な男どもっ！！！あんたが化け物止めてきなさい

っ！！」

八迫は白い歯を見せて笑いながら理緒に背中を向ける。

「後は頼んだわ」

よっこいしょ、という声とともに祀を担ぐと炎と雷の壁に強引に侵入していく。

炎は八迫の身を焼き、雷が打ち付けてくるが、それでも八迫を止めることはできなかった。

それに続いて、紋太と佚榎に鐵が飛び込んでくる。

それを追おうとする亮祐に足をかけて転ばせると、砺磔が飛び蹴りを後頭部に、凱史がゴスロリの傘を鳩尾に叩きいれ、理緒が顔面に張り手でその足を止める。

「こんな可憐な美少女達を前にしてよそ見してるなんて、貴方の目は節穴かしら」

三人は息を吸い、きめポーズとともに言葉を吐き出す。

「可憐少女トリオ・ザ・ビューティーを甘く見ないで頂戴！！！」

一瞬、ほんの一瞬だけ、亮祐と黒鍵は対応に困って足元の意瓦礫を蹴飛ばした。

静かに眠っていたのに。

一番憎んでいたあいつらがその眠りを覚ましにやってきた。

その一撃は容赦なく頬に飛んできて、

シャガンはアラルトベーラの前で恥をかかされた。

許さない…許さない許さない許せないっ！！！！

シャガンはゆっくりと足元に落ちている炎雷刀王者龍閃えんらいとうりゅうじやいっせんを拾い上げると無粋な侵入者たちを睨みつけ、鋭く鞘からその刀身を抜き去った。

第六話 Never sealed can solve even the

入れるタイミングが分からなく手入れ逃したのですが、シャガンさん退治直前に祀君は目を覚ましましたので。

ではまた次回の講釈で!!!

第一百七話 燃える痺れる俺の力の前で朽ち果てろっ!【仮】

第一百七話 You will help me out? . . . (前書き)

貴方は私を助けてくれますか…？

その刀は一振りでも有を無に還す力を備えていた。故にその刀は一つとして存在することを許されはしなかった。

シャガンは本来一つの刀であったそれを、七の切り裂きジャックの力を使い、分断し、刀に収めていた。

それは、力が暴れることを防ぐためだった。

その刀は炎雷刀えんらいとう王者龍閃おうじやうせん。

それが再び一つにされるといふことは、シャガンは切り裂きジャックのみならず、すべてを消すつもりだった。

中に眠る龍は溶け合い、そして一つの龍へと強制融合させられていた。

アラルトベラとの時間を邪魔する無粋な者どもには鉄槌を持って答えるのみ。

「焰波雷帝突つ!!!」

シャガンは手に持つ破壊の元を鋭く突き出し、その刀身を傾ける。

派手な爆音とともに砂埃が宙に舞う。

今、喉から手が出るほど欲しい者、それは助けしてくれる仲間だった。けれどもその仲間の手はまだ差し伸べられることなく、竜太は闇をもがいていた。

いや、竜太はもがいているつもりでも、もがいていないのかもしれない。

どれだけ必死にもがこうとも、その手は空を掴むことさえなく深く深く沈んでいく。

ああ、沈んでいるんだなあ、それだけが今感じられるただ一つの事だった。

その手を握る者さえいなく、底もない奥へと竜太は引きずられてい

く。

何度も必死に名前を呼ぶが、それに応えは一切なく、ひたすらに下へと落ちていく。

そんな中で、竜太の頭に突然語りかける何かが流れ込んでくる。

《あなたは…助けてくれるの？》

その声は、今までに聞いたことのない声だった。

その声色は、弱弱しく、助けを求めているような、そんな声色だった。

ゆっくりと竜太の手がつかまれてその声色からは考えられないような力で一気にそこから救い出してくれる。

真っ黒な深淵の中で唯一光を放つその人は、少女だった。

綺麗な白いシャツと青いスカートをはき、頭に羽のついたアクセサリーをつけたその少女は、やや青白い顔で竜太にゆっくりと語りかけた。

《お願いが、あるの…》

ふらり、と立ち上がった竜王は杖の先についている薄い緑色の玉から紋太たちを透視する。

圧倒的なまでの破壊力を誇るシャガンの一撃は透視している竜王の翡翠の玉にまで影響を及ぼし、それを木っ端みじんに打ち砕く。

「どうやら僕はここまでみたいだよ…」

ぼんやりと眺めた空は鈍い光を反射し、嘲笑うかのように広がっている。

少しずつ薄くなっていく感覚を苦痛に感じ、竜王はゆっくりと思いを腰を上げる。

「時間切れ、みたいだからね」

弱弱しく握る杖を紋太たちが進んだ方向へと投げる。

そして、竜王はその姿を地上から消して、後には真っ黒なローブだけが風になびいて主を待っていた。

「どうしたあっ！！！！こんな程度の弱力で、今まで強いと慢心していたのか！？下らん、下らん下らん下らん！！！！みる、あの水晶を！！！！力無い者はただ時代に殺されて消えていくのだ！！！！消えろう、力無い者はこの刃の前に倒れ果てるあっ！！！！」
炎雷刀王者龍閃えんらいとうおうじやりゅうせんと共に暴れるシャガンは狂乱の笑みを浮かべただひたすらにその圧倒的な力で暴れまわる。

「お前たちが憎いっ！！！！俺がなし得なかったマリーネをお前たちが殺したことが、憎いっ！！！！返せ！！！！俺が費やした時間を。俺が失ったすべてを、お前たちが命を持って返せっ！！！！」

シャガンは目から零れ落ちる涙とともにただひたすらに叫び続けた。

「こんの、ばあかやるーっ！！！！」

容赦なく理緒は拳で亮祐を宙に向けて殴る。

宙に浮いた亮祐を凱史が乙女チックパラソルの先端で下に押し戻す。みしみしと嫌な音を立てながら下へ落ちていく亮祐を下で待つ砺礎が自慢の美脚で回し飛ばす。

止めとして、理緒が再びその顔に両の拳を突き出す。

ぐじゃ、という音と共に亮祐は地面に落ちる。

しかし次の瞬間には亮祐が再び理緒と背中合わせで立っていた。

「足りぬわ…！足りぬ足りぬ足りぬ足りぬっ！！！！これほどの力で何を表すっ！？？」

亮祐はゆっくりと黒鍵を理緒の首にあてがう。

既に幾重にもわたり折れている亮祐の骨は一瞬にして黒鍵により修復される。

「外れないんだ。こいつの命と俺が。おれの支配下にならねえんだよ。この男の意思が、若干邪魔をしている」

亮祐は黒鍵をより一層黒い炎を上げ再びその形状を変化させる。

第一百七話 You will help me out? . . . (後書き)

遅くなってしまい申し訳ございませんでした。

と、言うのも近辺でいろいろおきまして…。

短いけれども出さぬよりはましだろう、と考えたうえでの何とか更新させていただきます。

来週も更新できると確約はできませんが、やり遂げます、やってみせるのですっ！！！！

ちなみにこの話は長くなりそうなのでいろいろ矛盾点が出そうです
ね…。

終わったら修正を加えていこうっ！！

ということと続きは次回の講釈で！！！！

第一百十八話

The girl laughs ; is pretty , a

少女は笑う、可憐に、美しく。

少女は、笑った。

《貴方つて、ほんとにおもしろいのね》

おしとやかに声を立てて笑う彼女はまるでそこに天使が降りてきたかのように一面を照らしていた。

女性という種類の人間から、楽しいや面白いなどという言葉をかけられたことのない竜太はまともに顔を見ることすらできずに下を向いてもじもじとその場をごまかす。

そんな折、少女は突然に竜太の手を握ると、潤んだ瞳で竜太の瞳を見つめる。

《ねえ、彼を、助けてあげてちょうだい…》

そういうと少女は涙をこぼしつつも、“彼”と“自分”の事をすべて話し出す。

自然と竜太は少女の手を強く、強く握りしめていた。

そして、彼女の口から紡がれた言葉の一つ一つに竜太は息をのみ、そしてどんな物語よりも引き込まれていくのだった。

助けて、と口にしたのは何度目だろうか、亮祐は自らを嘲笑う。

どうせ、この声は誰にも届くことはないし、届いたところで誰かが助けてくれるというものではない。

所詮これはただの叫びと同じことなのだ、自らを嘲笑う。

ただ、守ってやりたかった。

守られることもなく、ただ生きてきた今までの中で、初めて守りたいと思える人たちに出会えて、守りたいと思ったのに。

自分でやってみたい、やり遂げて見せたいと思った唯一の事なのに。結局は父親の掌の上で転がされているようで。

お前には何もできないんだといわれているようなそんな事実が付き

つけられているような気がして。

亮祐はゆっくりと目を閉じた。

じゃあ、どうせこのまま抗っても、結局たどり着く場所が同じなら楽な道を選んだ方がいいのではないのか。

わざわざ苦しんで、そしてたどり着く程の場所でもない。

いいじゃないか。

堕ちてしまえば。

そもそも、中片亮祐という人間はそうした人間だったはずだ。

そうした、駄目な人間の一人だった、はず、だ……。

亮祐は、自分を納得させると、自らに押し入ってくる黒くドロドロとまとわりつく冷たいそれを受け入れた。

亮祐は黒鍵をより一層黒い炎を上げ再びその形状を変化させる。

ちょうど、亮祐自身が黒鍵を受け入れたところにその変化は身に現れた。

炎が亮祐を包みその炎は消えることなく亮祐の体にまとわりつく。

「うけ：受け入れたあっ！！！中片亮祐がついに黒鍵に落ちたぞ。

俺の中に居た邪魔な存在は今、この時消え去ったあ！！！」

亮祐は大きくはしゃぐと声高らかに叫びだす。

「俺が、中片亮祐だあっ！！！」

喜ぶ黒鍵の前に、理緒は地面につきそうになる足を無理やり立たせる。

大きく息を吸い、吐くと同時に構えた拳で亮祐の顎を狙い、渾身の力でそれを開放する。

「ほざけっ！！！たわけ者が」

流れ落ちる涙とともに理緒は思いっきり右足でその体を蹴りあげる。

「わかった。必ずとは言えない。けど、出来る限りのことはやって

みる」

竜太は少女の手を軽く握り、応える。

そして、そこでようやく手をつないでいることに気が付いた竜太は、一瞬にして顔を赤くし、手を離してしまふ。

《ありがとう。けれど忘れないで。あなたが立ち向かうのは切り裂きジャック。そしてあなたは生身の人だということを。さあ、私の手を、掴んで。連れて行ってあげる。》

少女はニコリと微笑むと空へと手を伸ばし、黒を打ち砕いた。

第一百十八話

The girl laughs; is pretty, a

最初に謝っておきますと、期末テストでパソコンを触れませんでした。

ということとで突貫工事で仕上げたつもりなのですけれども。

短いのは謝ります。

次回は長いを書けると嬉しいな…。

ということで次回の講釈でまたお会いしましょう

第百十九話 Tears fall from the crystal (前書)

水晶から落ちる涙

「理緒はさ、俺がそのまま辞めるって言ったら、一緒について来てくれるか？」と、尋ねられた。

求めていた答えは返せなかったけれど、素直には頷くことはできなかった。

私は皆といるあの場所が好きで、だから、そこにいて指揮をとりながら輝いていた彼が好きだったのに。

そこから、その現実から逃げようとする彼の事を追いかけようなどと思えなかった。

あの場所にいる彼の事が好きだったのに。

「うああああああああつ！！！」

殴る、蹴る殴る殴る蹴る。

涙を流し、ただひたすら一方的な暴力で伝える理緒を砺礫が、凱史が見ている。

二人ともその眼は潤み、一風変わった愛の形を眺めている。

その時、その二人の姉妹の思いは一つになる。

恋よ、実れと。

黒に続く色は灰色だった。

天へと続くその果てしない螺旋状に作られた道は決して下を見ることだけはしたくない高さへと達している。

足はすでに悲鳴を上げているが、今までその痛覚すらもなかった身としてはこの上なく嬉しい。

踊る心を押さえつけ、必死で上るその先に待っていたのは、豪火竜だった。

「お待ちしてりました」

微動だにせずにたたずむ豪火竜は切なげに竜太の目を見つめる。

「貴方がここから出るためには、私を従わせなければなりません。しかし、私は今や宗主シヤガンの物。失礼ですが、本気で行かせていただきます」

ふわり、と浮き上がる豪火竜の喉の奥で焰が垣間見える。

「ちよ……、俺何も持つてないっ!!!」

しかし、思わず叫ぶ竜太の足元を焦がす焰の勢いが変わることはなかった。

「よく考えてください、貴方はなんなのですか」

冷たく突き放すような豪火竜の言葉に竜太は我に帰る。

慎重に言葉を選びながらも竜太は質問に答える。

「俺は、平田竜太は!!!」

ごくりと喉が鳴り、自然に握りしめる手に力がかかって、額から流れてくる汗が唇を濡らし、竜太は答えを出す。

「アラルトベーラ……。なぜ今も君は美しいんだい……。早く会いたいよ。見てごらん。歯向かって来た奴らは皆地面でねんねしているよ。やっぱり、君と僕の前に敵う者はいないんだね。ああ、早くもう一度抱きしめたいよ、アラルトベーラ……」
「えんらいとうあつじやりゆうせん」
シヤガンは地面に深々と炎雷刀えんらいとう王者龍閃を刺し、柄から手を離すといまにも水晶という支えを失って倒れそうなアラルトベーラを支える。

ひんやりと冷たいその手を握り、シヤガンはかつてのようにゆっくりと語りかける。

既に二人を濡らしているその水晶は彼女の足を固定するのみになっていた。

更にはシヤガンの髪の毛は朱色に染まり、瞳の色も朱色へとその色を変えより力を増していた。

「さあ、始めよう。二人っきりの世界を創ろう。神の国、僕と君だけしかない世界へ」

自分の一言一言に酔いしれるようにシャガンは唇をゆっくりと舐める。

一瞬、シャガンの体が脈動し、激しい痛みが体中を駆け巡る。

それは一瞬の事だったのに、シャガンの体内ではそれが何重にも重なり襲い掛かっていた。

思わずアラルトベーラの体を強く抱きしめてしまう。

物言わぬ蠟人形のような彼女の体から、一度だけ声が漏れる。しかしその声は己が激痛と闘っているシャガンの声にかき消されてしまう。

どれほどの時間かわからないが激痛から解放されたシャガンは己の手を見て悲鳴を上げる。

異様に硬化し、伸びた怪物のような爪。

おそらく、この場に鏡がないことが救いだらう。決してこのような姿ではいられない。

神の国計画を成功させることや、まして何より、このままではアラルトベーラを抱きしめるといふ願いすら叶うことがない。

中で、何かが起こっている。

中で殺していた精神が息づいている。

何らかの力で内部からの圧迫を受けている。

考えられるのはたった一つしかなかった。

「平田……竜太あっ！！！」

シャガンは精神を再び内部へと潜り込ませた。

黒鍵の動きが止まる。

それも決まった時間ごとに、一瞬確かに動きが止まるのだ。

1 2 3……ピタリ。

1 2 3……ピタリ。

すでに何度も確かめている。これは何かしらの好機へと変わるのではないだろうか。

幼稚な脳を高速回転させ、凱史は一つの結論を導く。

中に居る人に、言葉が届いている……。

「理緒さん、私が言うタイミングで告白してっ……!!」
ポン、という爆発音で今度は理緒の動きが止まる。

凱史は思わず苦笑いしてつぶやく。これはこれで逆効果だったか…。

「この馬鹿凱史……!!」

砺礎が足で黒鍵のひと振りを止める。

「薔薇の舞!!」

地面に手をついた砺礎はそのまま手をまわし、その回転を足へと運ぶ。

目にもとまらぬ速さとなった回転は次第に薔薇の花びらを魅せつけ、亮祐の腹部にぶつけ、回転を止める。

亮祐の腹部へと移った回転の力はとどまらずにそのまま亮祐を吹き飛ばす。

その隙に、砺礎は理緒を抱えて非難する。

凱史はまたもや苦笑いでその場をやり過ごす。ひよっとして自分で今、窮地を作っちゃったりした…?

これは笑い事では済まないなあと、凱史の背中を冷や汗が流れ落ちる。

第百十九話 Tears fall from the crystal (後書)

テストもひと段落したので、通常営業【?】いや、通常運行【?】に戻り、毎週週末に次回をお届けできるように頑張ります。

いや、成し遂げて見せるともさっ!!!!

なんとかなるさ!!!!

と、言うわけで続きは次回の講釈でよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8808d/>

切り裂きジャックは殺しません!!!

2011年12月11日02時56分発行